

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

一括ダウンロード

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5062

国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2012

目次

あいさつ	3	[2-6 データの利用]	315
1 組織		標本資料および映像音響資料に関するデータ	315
組織構成図	4	文献図書資料の収集・整理・利用状況	316
運営組織	5	民族学資料共同利用窓口	318
館内運営組織	5	民族学研究アーカイブズの構築	319
現員	6	データベースの作成・利用状況	319
歴代館長・名誉教授	6	[2-7 みんなく施設の利用]	323
研究部教員の紹介	7	博物館施設の利用状況	323
・館長	8	施設の整備状況	324
・副館長	10	3 展示	
・民族社会研究部	14	入館者数	326
・民族文化研究部	43	本館展示	326
・先端人類科学研究部	70	特別展示・企画展示など	329
・研究戦略センター	88	展示関連出版物およびプログラム	331
・文化資源研究センター	108	4 国際連携と国際協力	
・国際学術交流室	134	海外研究機関との研究協力協定	334
・機関研究員	135	MINPAKU Anthropology Newsletter	338
・拠点研究員（人間文化研究機構地域研究推進センター・		みんなくフェローズ	339
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点）	146	博物館学コース	340
・客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	148	5 広報・社会連携	
・客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	149	概観	342
・客員教員（文化資源研究センター）	151	国立民族学博物館要覧	343
・特別客員教員（先端人類科学研究部・社会環境研究部門）	155	ホームページ	343
・特別客員教員（先端人類科学研究部・文化動態研究部門）	158	報道	343
・特別客員教員（先端人類科学研究部・応用民族学研究部門）	161	月刊みんなく	344
・外国人研究員客員（研究戦略センター・超領域研究部門）	171	みんなくゼミナール	345
2 研究および共同利用		みんなくウィークエンド・サロン	347
概観	184	研究公演	354
[2-1 みんなくの研究]	185	みんなく映画会	356
機関研究	185	博学連携	359
共同研究	195	その他の事業	360
人間文化研究機構連携研究	236	ボランティア活動	360
人間文化研究総合推進事業	238	財団法人千里文化財団の事業	360
人間文化研究機構地域研究推進事業		6 研究戦略センター	
「現代インド地域研究」	242	研究戦略センターの設立の趣旨と経緯	366
日本関連在外資料調査研究	245	2012年度の活動概要	366
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、		7 文化資源研究センター	
研究フォーラム、国際研究集会への派遣	246	文化資源研究センターの設置目的	368
総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業	256	文化資源研究センターの研究事業	368
リーダーシップ支援経費による事業・調査	258	文化資源関連事業	368
みんなく研究懇談会	262	8 国際学術交流室	
[2-2 外部資金による研究]	262	設置目的	374
科学研究費補助金による研究プロジェクト	262	機能	374
受託研究	295	2012年度活動内容	374
民間などの研究助成金による研究活動	301	9 人間文化研究機構	
間接経費による研究環境整備事業	301	組織構成図	376
[2-3 研究成果の公開]	303	運営組織	377
刊行物	303	10 総合研究大学院大学	378
国立民族学博物館学術情報リポジトリ	306	彙報	382
学術講演会	306	研究部の人事異動	382
[2-4 学会開催]	307	来館者抄	382
学会開催	307	索引	386
[2-5 研究員制度]	308	利用案内	388
外来研究員	308		
特別共同利用研究員	314		

あいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は創設39年をむかえ、調査研究、博物館事業、大学院教育、そして広報・社会連携など、さまざまな活動を展開しております。2004年4月からは大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員となり、機構内の他の5機関と連携して人間と文化についての総合的研究を推進しています。

みんぱくは、世界の民族、社会や文化などを研究対象とし、フィールドワークにもとづいて、文化人類学と民族学およびその関連研究分野の基礎的かつ理論的研究をおこなってきました。グローバル化によって、人類は生活や社会のしくみだけでなく価値観にいたるあらゆる面で未曾有の変化に直面しています。この動きの実際とプロセス、そして将来の方向性を現地での参与観察にもとづいて明らかにすることが文化人類学の今日的課題といえましょう。

文化人類学と民族学の研究所であるみんぱくは、調査研究の成果を現地の人びとや社会と共有し、ともに議論し、考える「フォーラム型」研究をめざしています。また、異文化をより深く理解するために、物質文化、生活様式、芸能・音楽などの資料や種々の情報収集も積極的に進めてきました。現在、33万点の標本資料、7万点の映像・音響資料、そして65万点の文献図書資料を所蔵し、学界や一般の人びとにも公開しています。また、2008年度からは本館展示の新構築に着手し、これまでにオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽、言語、日本の文化そしてインフォメーションゾーンの展示コーナーが新しい姿を見せています。

『研究年報』は、みんぱくの研究者の多方面にわたる研究調査から、国際研究集会、国際学術交流、大学院教育、社会貢献にいたる多方面にわたる活動について知っていただくために編集されました。本誌は大学共同利用機関としての活動の集大成といえます。一方、みんぱくのウェブサイトには、本誌の情報にくわえ、教員の研究活動、研究集会や展示を含め、種々の行事予定についての最新の情報を掲載し、『研究年報』の内容を補足しています。

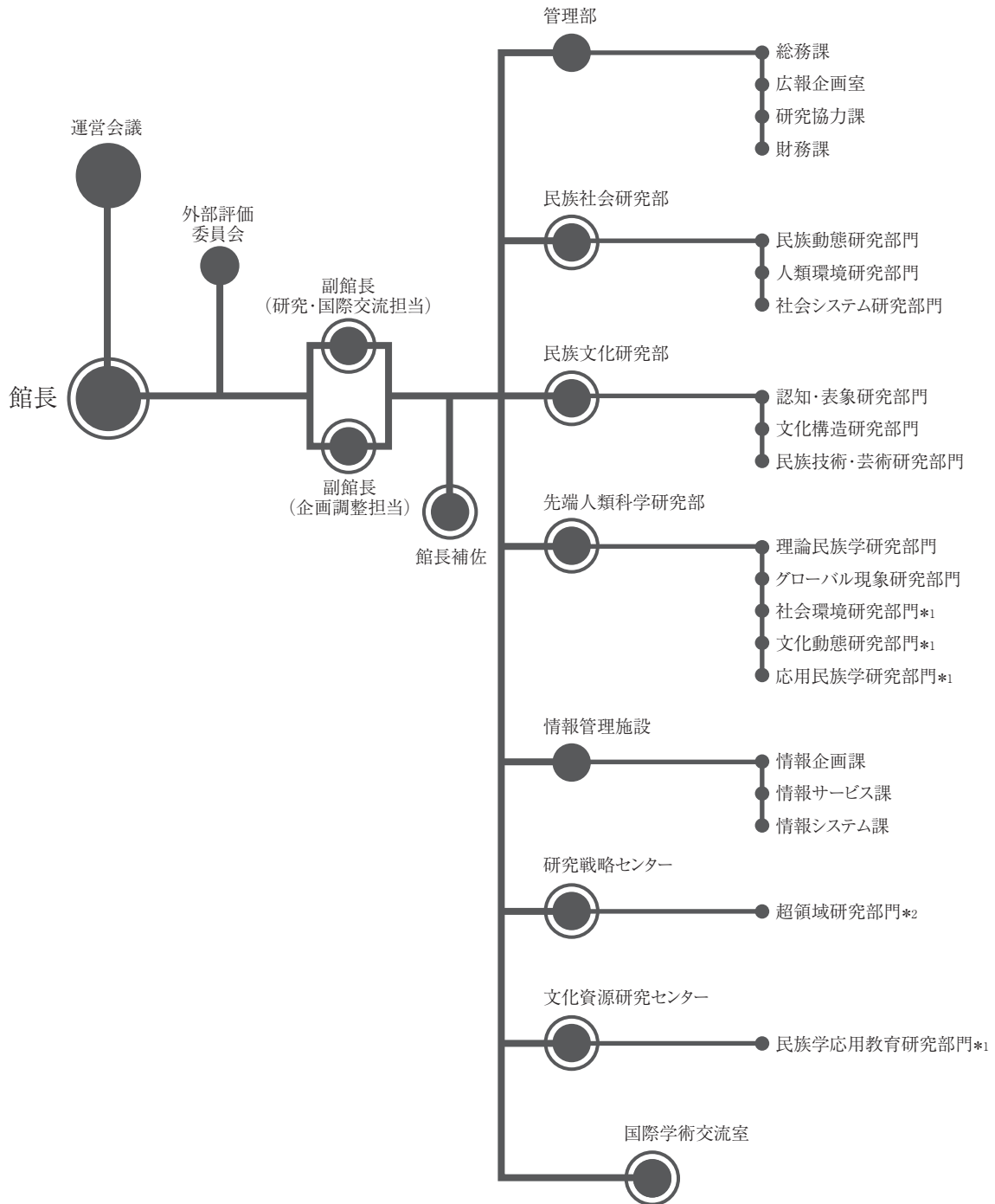
本誌によって、博物館機能をもった文化人類学と民族学の研究所および大学共同利用機関としての研究センターとしてのみんぱくの役割をご理解いただき、今後も本館にたいしてみなさまからのご助言とご支援をお願いする次第です。

2014年2月
国立民族学博物館長
須藤健一



1 組織

組織構成図 (2013年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織 (2013年3月31日現在)

●運営会議

植野弘子	東洋大学社会学部教授*1
栗田博之	東京外国語大学副学長*2
栗本英世	大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
建畠 哲	京都市立芸術大学学長
富沢寿勇	静岡県立大学副学長*3
松田 凡	京都文教大学総合社会学部長*3
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
吉岡政徳	神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
渡邊欣雄	國學院大學文学部教授
(館内)	
朝倉敏夫	文化資源研究センター長*1*2*3
韓 敏	民族社会研究部長*1*2*3
岸上伸啓	研究戦略センター長*1*2*3
久保正敏	文化資源研究センター教授
	総合研究大学院大学文化科学研究科
	地域文化学専攻長*1
杉本良男	副館長 (企画調整担当)
	情報管理施設長*1*2
寺田吉孝	先端人類科学研究部長*1*2*3
西尾哲夫	副館長 (研究・国際交流担当)
	国際学術交流室長*1*2
八杉佳穂	民族文化研究部長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
黒柳俊之	独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二	大阪大学大学院人間科学研究科教授
野村正朗	公益財団法人りそなアジア・オセアニア 財団理事長
八村廣三郎	立命館大学情報理工学部長
堀井良殷	公益財団法人大阪21世紀協会理事長
宮田亮平	東京藝術大学学長
三輪嘉六	国立文化財機構九州国立博物館長
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2013年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
福利厚生委員会	図書委員会
安全衛生委員会	学術情報リポジトリ委員会
ハラスメント防止委員会	情報システム委員会 (休止)
広報企画会議	情報システム整備委員会
機関研究運営会議	文化資源運営会議
刊行物審査委員会	集団研修博物館学集中コース運営委員会
研究出版委員会	施設マネジメント委員会
知的財産委員会	危機管理委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会	東日本大震災被災地支援対策会議
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営 委員会	

現員 (2013年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	事務職員・技術職員	計
館長	1						1
管理部						25	25
情報管理施設						19	19
研究部		16	16	4	1		37
研究戦略センター		6	2	2			10
文化資源研究センター		5	5	2			12
小計	1	27	23	8		44	104
客員 (国内)		14	7				21
客員 (国外)*		9	3				12
計	1	50	33	8	1	44	137

注) 客員 (国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2013年3月31日現在)

●歴代館長

初 代／梅棹忠夫 (故人)	1974年 6月～1993年 3月
第 2代／佐々木高明	1993年 4月～1997年 3月
第 3代／石毛直道	1997年 4月～2003年 3月
第 4代／松園萬亀雄	2003年 4月～2009年 3月
第 5代／須藤健一	2009年 4月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年 4月 1日	端 信行	2001年 4月 1日
岩田慶治 (故人)	1985年 4月 1日	小山修三	2002年 4月 1日
加藤九祚	1986年 4月 1日	森田恒之	2002年 4月 1日
伊藤幹治	1988年 4月 1日	石毛直道	2003年 4月 1日
中村俊亀智(故人)	1988年 4月 1日	栗田靖之	2003年 4月 1日
君島久子	1989年 4月 1日	杉田繁治	2003年 4月 1日
和田祐一 (故人)	1990年 4月 1日	熊倉功夫	2004年 4月 1日
垂水 稔 (故人)	1991年 4月 1日	立川武藏	2004年 4月 1日
杉本尚次	1992年 4月 1日	田邊繁治	2004年 4月 1日
梅棹忠夫 (故人)	1993年 4月 1日	藤井龍彦	2004年 4月 1日
大給近達	1993年 4月 1日	山田陸男 (故人)	2004年 4月 1日
片倉素子 (故人)	1993年 4月 1日	江口一久 (故人)	2005年 4月 1日
竹村卓二 (故人)	1994年 4月 1日	大塚和義	2005年 4月 1日
周 達生	1995年 4月 1日	松原正毅	2005年 4月 1日
松澤員子	1995年 4月 1日	石森秀三	2006年 4月 1日
大丸 弘	1996年 4月 1日	野村雅一	2006年 4月 1日
友枝啓泰 (故人)	1996年 4月 1日	大森康宏	2007年 4月 1日
藤井知昭	1996年 4月 1日	山本紀夫	2007年 4月 1日
佐々木高明	1997年 4月 1日	松園萬亀雄	2009年 4月 1日
杉村 棟	1997年 4月 1日	松山利夫	2010年 4月 1日
和田正平	1998年 4月 1日	長野泰彦	2011年 4月 1日
清水昭俊	2000年 4月 1日	秋道智彌	2012年 4月 1日
黒田悦子	2001年 4月 1日	中牧弘允	2012年 4月 1日
崎山 理	2001年 4月 1日		

研究部教員の紹介 (2013年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		須藤健一		
副館長 (企画調整担当)		杉本良男		
副館長 (研究・国際交流担当)		西尾哲夫		
館長補佐		園田直子		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
民族社会研究部	研究部長	韓 敏		
	民族動態	小長谷有紀	三島禎子	菅瀬晶子
		庄司博史	横山廣子	
	人類環境	池谷和信	飯田 卓	
印東道子		MATTHEWS, Peter J.		
社会システム	田村克己	宇田川妙子	太田心平	
		佐藤浩司		
民族文化研究部	研究部長	八杉佳穂		
	認知・表象	塚田誠之	信田敏宏	齋藤玲子
		森 明子	山中由里子	
	文化構造	杉本良男	新免光比呂	藤本透子
		廣瀬浩二郎		
民族技術・芸術	近藤雅樹	菊澤律子		
	吉本 忍	白川千尋	丹羽典生	
先端人類科学研究部	研究部長	寺田吉孝		
	理論民族学	佐々木史郎	齋藤 晃	
		鈴木七美 竹沢尚一郎	陳 天璽	
グローバル現象	関本照夫*	鈴木 紀		
研究戦略センター	岸上伸啓 (センター長)	檜永真佐夫	伊藤敦規	
	笹原亮二	三尾 稔	小川さやか	
	關 雄二			
	西尾哲夫			
	野林厚志			
	平井京之介			
文化資源研究センター	朝倉敏夫 (センター長)	林 勲男	上羽陽子	
	久保正敏	日高真吾	川瀬 慈	
	小林繁樹	福岡正太		
	園田直子	南 真木人		
	吉田憲司	山本泰則		
国際学術交流室	西尾哲夫 (室長)	菊澤律子 (兼)		
	印東道子 (兼)	陳 天璽 (兼)		
		信田敏宏 (兼)		
		MATTHEWS, Peter J. (兼)		
		山中由里子 (兼)		

*特任研究員 (特任教授) を示す。

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オセアニアの移民と母社会の生活戦略に関する人類学的研究

・研究の目的

オセアニア島嶼国、とりわけミクロネシアとポリネシア地域からの海外移住の歴史は半世紀を経るが、母社会の居住者は移民への送金依存体質からの脱皮を目指した生活戦略を試みている。本年度は、その動きを母社会におけるインフォーマルセクターとトランスナショナル・ビジネスの展開をとおしてオセアニアにおける海外移住の社会・経済的な特徴を明らかにする。

・成果

トンガ社会は、現在でも海外からの仕送りが国内総生産の30パーセントを占めており、国民経済は海外移住者の送金に依存する体質を継続してきている。しかし、政治的には、海外移住者の政治経済的支援もあり、君主制から民主制へと徐々に変化しつつある。特に、選挙制度改革がすすみ、2010年の総選挙では平民議員が貴族議員を凌ぎ過半数を占めた。このような民主化の動きとともに、海外移住者から贈られる商品（中古品）をインフォーマルセクター（フリーマーケット）で販売し経済的利益を求める動きが2000年頃から顕著になってきている。そのような国民の政治的・経済的な自律志向の動きについて論文で発表した（須藤 2012）。

◎出版物による業績

[共編]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

須藤健一・清水久夫編

2012 『土方久功日記Ⅳ』土方久功著（国立民族学博物館調査報告108）大阪：国立民族学博物館。

柄木田康之・須藤健一編

2012 『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』京都：昭和堂。

[論文]

須藤健一

- 2012 「序」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 1-12, 東京：風響社。
- 2012 「トンガ王国の政治改革と君主制への固執」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 155-181, 東京：風響社。
- 2012 「母系社会のしくみ——土方久功が住んだ50年後のサタワル」土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方久功日記Ⅳ』（国立民族学博物館調査報告108）pp. 593-629, 大阪：国立民族学博物館。
- 2012 「はじめに——オセアニア島嶼国の動き」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp. i-xiv, 京都：昭和堂。

[その他]

須藤健一

- 2012 「こころの玉手箱」5回連載『日本経済新聞』4月16日, 17日, 18日, 19日, 20日夕刊。
- 2012 「はじめに」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. i-ii, 東京：丸善出版。
- 2012 「あとがき」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 327-330, 東京：風響社。
- 2012 「記念講演 島世界をつなぐ知と技——今に生きる航海術」『第39回技術士全国大会（大阪）』pp. 106-111, 公益社団法人日本技術士会。
- 2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物① 三つの義務」『毎日新聞』1月10日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年9月22日 「島世界をつなぐ知と技——今に生きる航海術」第39回技術士全国大会、大阪国際交流センター
- 2013年1月13日 「心のなかに島を描く——マイクロネシアの島認識法」岡山大学人文学フロンティア2012シンポジウム『「島」に生きる、「島」を想う』、岡山大学50周年記念館
- 2013年3月2日 「カヌーと伝統的航海術——オセアニア資料の収集と展示公開」鹿児島大学シンポジウム『島フィールド学の蓄積・展示・展開』、鹿児島大学稲盛会館

・研究講演

- 2012年4月16日 『「居場所」を求めて越境する人びと——オセアニアの海外移住』第17期垂水文化講座、井植記念館ホール
- 2012年7月10日 「星と波と風と——オセアニアの航海術」関西不動産三田会7月度例会、ホテルモントレ大阪
- 2012年9月25日 「21世紀のみんぱく」2012年秋季神戸シルバーカレッジ
- 2012年10月10日 「星と波と風と——今に生きる航海術」関西RPの会、大阪凌霜クラブ
- 2012年10月27日 「海を制覇した人々——今に生きる航海術」佐渡高校関西地区同窓会、大阪弥生会館
- 2012年12月14日 「先住民の文化運動——オセアニアを中心に」大阪府立春日丘高等学校67期生総合学習「探究」民博見学会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

- 2012年4月1日 「織りと樹皮布づくり」第247回みんぱくウィークエンド・サロン
- 2012年9月16日 子守康範（MBS ラジオパーソナリティ）× 須藤健一（みんぱく館長）スペシャル対談「ラジオパーソナリティと館長が歩いた南の島々——イースター島からサタワル島まで」国立民族学博物館
- 2013年1月20日 「すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見」吹田にぎわい観光協会主催、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2012年5月24日～6月7日—アメリカ合衆国（アメリカ合衆国南西部の先住民博物館等の視察）
- 2012年6月14日～17日—大韓民国（韓国国立民俗博物館との交流協定更新）
- 2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴル科学技術大学にて日本学術振興会研究拠点形成事業公開セミナー参加およびウランバートル市内の博物館視察）
- 2012年8月27日～8月30日—中華人民共和国（中国故宫博物院との交流協定更新および中国社会科学院との交流協定締結）
- 2013年1月27日～2月6日—フランス、オランダ（パリ・デカルト大学との学術交流協定締結およびオランダ・

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、芦屋市文化振興審議会委員、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、財団法人日本博物館協会理事、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長、財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、財団法人大阪ユニセフ協会理事、大阪府第24回山片蟠桃賞審査委員、汎太平洋フォーラム理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、独立行政法人国際協力機構エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト国内支援委員

西尾哲夫 [にしお てつお]———副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究 2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。
- 2006 『アラブ・イスラム社会の異人論』京都：世界思想社。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリエント学会奨励賞、新村出記念財団研究助成賞、流沙海西奨学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オリエンタリズムの文学空間創出メカニズムの研究

・研究の目的

アラビアンナイトは、オリエンタリズムという時代的文化的枠組に規定されることによって、現代における一般の中東イメージ構築への地下水脈としての役割を果たしてきた。本研究では、ガラン訳アラビアンナイト出現以降（18世紀以降）のアラビアンナイト受容による文明間イメージ形成と文学テキスト生成の相互作用を明らかにする。具体的には、三菱財団人文科学研究助成による「アラビアンナイト仏語訳者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」の一環として、マルドリユス遺贈コレクションの調査をおこなうとともに、当該資料の目録化とデジタル化を実施した。

・成果

- 1) 論文として、“The Takarazuka Revue and the Fantasy of “Arabia” in Japan”. In *Scheherazade’s Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, edited by Marina Warner and Philip F. Kennedy. New York University Press (2013年11月刊行). を発表した。

- 2) 三菱財団人文科学研究助成による「アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」の一環として、マルドリユス遺贈コレクションの調査をおこなった。資料の整理をとおして目録化されたデジタルデータは、『アラビアンナイトのフランス語翻訳者、ジョセフ・シャルル・マルドリユスの遺贈コレクション目録』としてフランスの出版社から刊行されることになっている。今後、多くの謎を残したマルドリユス訳の解明がすすめば、アラビアンナイト研究にとどまらずフランス文学研究全般にも大きく貢献する第一級の資料として、中東との関係も含めた当時のフランス社会に関する様々な研究が可能になる。
- 3) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（研究代表者：西尾哲夫）による海外調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[その他]

西尾哲夫

連続エッセイ「アラビアンナイトへの誘い」

第1回「『パリのアラブ人』——〈アラジン〉を伝えた人」『EURASIA』239: 14-15。

第2回「美女のショッピング——迷宮都市フェズのバザール」『EURASIA』240: 14-15。

第3回「カイロの舞姫——現代ベリーダンス事情」『EURASIA』241: 14-15。

第4回「中世のカイロ——『カイロを見ずば、世界を見ず』」『EURASIA』242: 14-15。

第5回「ウイグルのアリババ——シルクロードのアラビアンナイト」『EURASIA』243: 16-17。

第6回「シンドバッドの海へ——インド洋のイスラム商人」『EURASIA』244: 14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年5月20日 「言語と文化の境界——言語人類学の再構築のために」『非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ』

・研究講演

2012年5月13日 「魅惑のアラビアンナイト」展（2012年5月9日～6月6日）ギャラリートーク『イスラーム世界とアラビアンナイト』教文館ナルニア国（東京）

2012年6月9日 「児童文学としてのアラビアンナイト——その源流と形成過程」2012年度神戸YWCA マザーズカレッジ連続講座『物語の源流を訪ねて』第1回

2012年7月3日 「児童文学としてのアラビアンナイト」東京子ども図書館

2012年7月8日 「アラビアンナイトの香り」香研究会第11回セミナー、ふくい南青山291ホール（東京）

2013年1月23日、30日 「アラブの春とアラビアンナイト」川西市清和台公民館民族学講座、兵庫県川西市清和台公民館

・広報・社会連携活動

2012年4月15日 「新生アラビア語が生んだ“フェイスブック革命”」第249回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年5月26日～6月5日—フランス・オーストリア（アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）センター員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：水野信男）研究分担者

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

三菱財団人文科学研究助成「アラビアンナイト伝説者マルドリユスの遺贈コレクションに関する書誌学的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本オリエント学会編集委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

杉本良男 [すぎもと よしお]——副館長（企画調整担当）、民族文化研究部教授

1950年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）【職歴】国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）【専攻・専門】社会人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[単著]

杉本良男

2002 『インド映画への招待状』東京：青弓社。

[編著]

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』東京：明石書店。

立川武蔵・海津正倫・杉本良男編

2012 『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語4 南アジア』東京：朝倉書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明とナショナリズム

・研究の目的

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。本主題に関連して、各種外部資金により、ロシア、中国、インド文明の相互比較、津波災害復興過程における宗教間対立と融和、南インド村落社会の構造変動などについての研究を継続的に進めている。

・成果

本年度は、共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」（2007～2011年度）の成果刊行を予定して、研究出版委員会において承認され、2013年度に刊行予定となった。

科学研究費新学術領域研究・計画研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」（研究代表者：望月哲男、2008～2012年度）により、南インドにおける宗教ナショナリズムに関する文献研究を継続し、同研究関連のシンポジウムにおいてマダム・ブラヴァツキーのインド・ナショナリズムに対する貢献について発表するとともに、成果刊行のための同趣旨の原稿を完成した。

科学研究費補助金（基盤研究（B））「独立後インドの消費変動：農村社会経済構造の長期変動との関連に注目して」（研究代表者：柳澤 悠、2010～2012年度）により、南インド農村の20年を経た再調査を実施し、この間の社会の根本的な構造変化について実証的に明らかにする試みを継続的に実施した。

科学研究費補助金（基盤研究（A））「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」（研究代表者：林 勲男、2008～2012年度）により、南インド、タミルナドゥ州における津波被災地の復興状況につ

いて現地調査を実施し、その成果刊行にむけて整理作業を実施した。

◎出版物による業績

[共編]

立川武藏・杉本良男・海津正倫編

2012 『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 東京：朝倉書店。

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』 東京：明石書店。

[論文]

杉本良男

2012 「自然・社会・文化の多様性」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 pp. 17-31, 東京：朝倉書店。

2012 「スリランカの宗教」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 pp. 332-340, 東京：朝倉書店。

2012 「ゾロアスター教」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』 p. 379, 東京：朝倉書店。

[その他]

杉本良男

2012 「カーストと部族」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 59-60, 東京：明石書店。

2012 「カーストと映画」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 128-129, 東京：明石書店。

2012 「ブラーマン——サンスクリットからIT産業へ」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』 pp. 132-139, 東京：明石書店。

2013 「スリランカという国」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 19-22, 東京：明石書店。

2013 「南アジアの中のスリランカ」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 32-35, 東京：明石書店。

2013 「王権と宗教」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 81-84, 東京：明石書店。

2013 「カーストの現在」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 122-124, 東京：明石書店。

2013 「神々と仏」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 164-167, 東京：明石書店。

2013 「得と益」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 168-173, 東京：明石書店。

2013 「アブラハムの宗教」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 174-178, 東京：明石書店。

2013 「悪魔祓いとピリット」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 184-188, 東京：明石書店。

2013 「サリーを着こなす」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 194-197, 東京：明石書店。

2013 「クリケット・マッチのある日」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 213-216, 東京：明石書店。

2013 「津波復興支援の諸問題」杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編『スリランカを知るための58章』 pp. 258-260, 東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月16日～17日 「国際シンポジウム——大規模災害とコミュニティの再生 (International Symposium: Catastrophes and Constructing Communities)」 実行委員長、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月8日 「趣旨説明」新学術第6班後援研究会『ユーラシア地域大国における聖地の研究』第1回研究

会、新潟国際情報大学

2013年1月26日 「周縁からの統合イデオロギー——マダム・ブラヴァツキーとインド・ナショナリズム」新学術領域研究総括シンポジウム『ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像』早稲田大学

2013年3月21日 「南インドの大津波災害からの復興」平成24年度総研大学術交流会、総合研究大学院大学

・広報・社会連携活動

2012年5月25日 「インドカレー」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年7月15日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——放浪者」

2012年7月16日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——踊り子」

2012年7月22日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——音楽ホール」

2012年8月4日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——シャンカラバラナム」

2012年8月5日 みんなく映画会「インド・クラシック映画特集——第一の敬意」

◎調査活動

・国内調査

2012年11月23日～25日—隠岐島巡検調査

・海外調査

2012年8月7日～17日—中華人民共和国（中国東北地方における文化統合のイデオロギーに関する調査研究）

2012年8月27日～9月10日—インド（津波災害復興過程における宗教の役割についての調査研究）

2012年12月15日～23日—インド、シンガポール（南インドのポピュラー・カルチャーとナショナリズムの関係についての調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導 1名

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（新学術領域研究）「地域大国の文化的求心力と遠心力」（研究代表者：望月哲男）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」（研究代表者：林 勲男）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「独立後インドの消費変動：農村社会経済構造の長期変動との関連に注目して」（研究代表者：柳澤 悠）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員

民族社会研究部

韓 敏 [ハン ミン]————— 部長(併) 教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）【学位】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科1986）【専攻・専門】文化人類学専攻、現代中国の漢族研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Han, M.

- 2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology (『回応革命与改革——皖北李村の社会変遷与延続』南京: 江蘇人民出版社, 2007).

[編著]

韓 敏編

- 2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京: 風響社。

[共編著]

Han, M. and N. Graburn

- 2010 *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

革命、改革とグローバル化の中国に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究の目的は近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性を究明することにある。具体的に文献調査・聞き取り調査・ものの収集を通して、社会主義革命理念の制度化、近代的シンボルの形成と人びとの生活実践を考察する。

・成果

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C））（一般）（2001～2013）「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ」（研究代表者：韓 敏）のプロジェクトと連動して実施された。その成果は以下のようにまとめることができる。

- 1) 近代的シンボルと国民国家の聖地作りについて、次の論文を書いた。

韓 敏

- 2012 「毛沢東の生誕地 韶山——社会主義近代国家の新聖地」星野英紀・山中 弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』pp.206-211, 東京: 弘文堂。

- 2) 近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性について、機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（代表者：韓 敏 2012.4～2015.3）」で実施し、国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」を開催し、その成果を次のように刊行した。

韓 敏

- 2012a 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

- 2012b 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

◎出版物による業績

[論文]

韓 敏

- 2012 「毛沢東の生誕地 韶山——社会主義近代国家の新聖地」星野英紀・山中 弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』pp.206-211, 東京: 弘文堂。

[その他]

韓 敏

- 2012 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

- 2012 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

- 2013 「世界最長の家系図」『月刊みんぱく』37(1): 20。

Han, M.

- 2012 Cultural Transmission in Glocalization. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

中国地域の常設展示模様替えなど

・広報・社会連携活動

2012年8月7日 「中国の夏の遊び」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年7月27日～8月2日—アメリカ合衆国（アメリカにおけるチャイナタウンの文化表象に関する資料調査）

2012年8月27日～30日—中華人民共和国（中国故宫博物院との交流協定更新及び中国社会科学院との交流協定締結）

2012年12月6日～12日—中華人民共和国（中国福建における映像取材と標本資料収集）

2013年3月24日～29日—中華人民共和国（中国におけるライフヒストリーの調査、標本資料の収集）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎社会活動・館外活動

・学会の開催

2012年11月24日～25日 国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」(Chinese Society and Ethnicity: Anthropological Frameworks and Case Studies) 国立民族学博物館

池谷和信 [いけや かずのぶ]—————教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・文化地理学 1) 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究 2) 植民地時代における民族社会の変容に関する研究 3) 地球環境問題に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、American Anthropological Association、日本生態学会、日本養豚学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

[編著]

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

湿潤熱帯における家畜飼育に関する研究

・研究の目的

これまで、アジア・アフリカの農民を対象にした生態人類学・環境人類学的研究では、農耕活動に関する詳細な記述・分析が進められたが、農耕以外の生業については、その重要度が十分に論議されていないために、その報告は多くはない。本研究では、湿潤熱帯地域に暮らす農民（主としてバングラデシュやベトナム）を対象にして、家畜からみでの自然資源利用の様態とその変化を把握することを目的とする。

・成果

バングラデシュやベトナムにおいて、上述の研究テーマに関する現地調査を進めることができた。その成果の一部は、タイのバンコクで開催された家畜に関する国際会議で報告した。また、家畜と人とのかかわりについて概説した2冊の一般書（中学生以上を対象）『わたしたちの暮らしと家畜 ①家畜ってなんだろう、②家畜にいま何がおきているのか』（いずれも童心社）を刊行した。なお、バングラデシュの豚遊牧に関する研究論文は、2013年度にSpringer社から刊行の予定である。

◎出版物による業績

[単著]

池谷和信

2013 『わたしたちの暮らしと家畜 ①家畜ってなんだろう』東京：童心社。

2013 『わたしたちの暮らしと家畜 ②家畜にいま何がおきているのか』東京：童心社。

[編著]

池谷和信編

2012 『ボツワナを知るための52章（エリア・スタディーズ99）』東京：明石書店。

[共著]

池谷和信ほか

2012 『高等学校 新地理A』東京：帝国書院。

[論文]

池谷和信

2012 「山地農民の採集活動の多様性——日本列島からの展望」クライナー・ヨーゼフ編『日本民族の源流を探る——柳田國男「後狩詞記」再考』pp.43-60, 東京：三弥井書店。

2012 「民博のアフリカビーズコレクション——フィールドでの資料収集と情報収集の実践」朝木由香・鈴木智香子編『ビーズ イン アフリカ』pp.106-111, 神奈川：神奈川県立近代美術館。

Ikeya, K.

2012 The Minpaku African Beads Collection: Practical Experience with Material and Information Collection. In Asaki, Y. and Suzuki, C. (eds.) *Beads in Africa*. pp.112-115. Hayama: The Museum of Modern Art.

2013 Peccary Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The Proceedings of the International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* pp.59-67, Division of Environmental Ecology, Asian and African Area Studies, Kyoto University.

[その他]

池谷和信

2012 「新刊紹介 ボツワナを知るための55章 池谷和信編、明石書店」『アフリカ研究』81: 7。

2012 「『狩猟採集民』からみた新たな地球環境史」『民博通信』39: 18-19。

2012 「メンバーによる研究紹介 池谷和信」『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究』2: 55-63。

2012 「野生でもない家畜でもないアマゾンの動物との関係性——熱帯の生き物文化に学ぶ」『生き物文化誌学会ニュースレター』28/29: 11-13。

2012 「アマゾンの動物と人——肉・皮・ペット」生き物文化誌学会・鶴岡例会プログラム・要旨集, pp.12-13。

2012 「モンスーンアジアにおける家畜文化史——豚・鶏・アヒル」『動物法ニュース』35: 43-45。

2012 「旅いろいろ地球人 風を求めて⑤ 砂漠の弓矢猟師」『毎日新聞』8月2日夕刊。

- 2012 「モンsoonアジアの家畜文化を考える」『牛のはくぶつかん』（牛の博物館ニュースレター）39: 2。
- 2012 「ラクダミルクこそパワーの源」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち』pp. 30-31, 東京: 丸善出版。
- 2012 「はじめに——ボツワナとはどのような国か?」『ボツワナを知るための52章』pp. 3-11, 東京: 明石書店。
- 2012 「憎きライオン——カラハリの獣害問題」『ボツワナを知るための52章』pp. 34-37, 東京: 明石書店。
- 2012 「アフリカのゾウの王国」『ボツワナを知るための52章』pp. 42-43, 東京: 明石書店。
- 2012 「ヘレロ女性の衣装に刻まれた歴史——民族のアイデンティティ形成」『ボツワナを知るための52章』pp. 84-87, 東京: 明石書店。
- 2012 「スイカの栽培から利用まで——煮込み・丸焼き・蒸し焼き」『ボツワナを知るための52章』pp. 131-134, 東京: 明石書店。
- 2012 「カラハリ砂漠の狩猟——犬と人との絆」『ボツワナを知るための52章』pp. 139-142, 東京: 明石書店。
- 2012 「新たに生まれたサン・アート——絵を描くアーティストの誕生」『ボツワナを知るための52章』pp. 146-150, 東京: 明石書店。
- 2012 「押し寄せる中国人」『ボツワナを知るための52章』pp. 163-164, 東京: 明石書店。
- 2012 「首長国の誕生と変貌——19世紀のボツワナ人」『ボツワナを知るための52章』pp. 202-206, 東京: 明石書店。
- 2012 「アフリカーナーの移住とハンシー農場——カラハリ砂漠の白人マイノリティ」『ボツワナを知るための52章』pp. 213-216, 東京: 明石書店。
- 2012 「カラハリ先住民の静かな戦い——ロイ・セサナ氏のライフヒストリー」『ボツワナを知るための52章』pp. 264-268, 東京: 明石書店。
- 2012 「おわりに」『ボツワナを知るための52章』pp. 316-317, 東京: 明石書店。
- 2012 「狩猟採集民から学ぶ自然と人との共生」『at home TIME』365: 5-6。
- 2013 「書評 高倉浩樹著 極北の牧畜民サハ——進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌」『地域研究』13(2): 450-455。
- 2013 「サハラ以南のアフリカの生活・文化」帝国書院編集部『高等学校 新地理A 教授資料』pp. 148-155, 東京: 帝国書院。
- 2013 「アンダマン島民の現在——スマトラ島沖地震の6年後」『月刊みんぱく』37(3): 10-11。
- 2013 「バングラデシュにおけるブタの遊牧について」『生態人類学ニュースレター』18: 12。

Ikeya, K.

- 2012 San Citizenship in the Central Kalahari Game Reserve, Botswana. *American Anthropological Association. 2012 Annual Meeting Program*, p. 220.
- 2012 The Taming Process of Red Junglefowl. *Abstract HCMR Symposium The 15th AAAP Animal Science Congress*, p. 14.
- 2013 Peccary Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"*, p. 11.

大光英人・池谷和信

- 2012 「JICA の活動から見たボツワナと日本——青年海外協力隊の20年」『ボツワナを知るための52章』pp. 294-299, 東京: 明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2012年11月3日 「共同研究会の目的・方法・今後の計画」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2012年12月9日 「問題提起——熱帯アメリカ低地」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2013年3月16日 「現在の狩猟採集民の狩猟行動と肉食——アフリカの事例を中心として」『肉食行為の研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年5月26日 「コンゴ民主共和国・キンシャサの養豚について」第49回日本アフリカ学会、国立民族学博物館。
- 2012年6月2日 「これまでの熱帯家畜利用研究会の活動」第12回熱帯家畜利用研究会、国立民族学博物館
- 2012年6月16日 「ペルーアマゾンにおけるペッカーリーについて」第22回日本熱帯生態学会、横浜国立大学

- 2012年6月30日 「アマゾンの生き物文化——趣旨説明」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 2012年6月30日 「アマゾンの動物と人——肉、皮、ペット」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 2012年7月7日 (中井信介と共同発表)「タイにおける山地民の政策と地域社会——狩猟採集民ムラブリの事例」日本タイ学会、大阪大学
- 2012年7月14日 「生き物文化誌『学』とは何か——新しいまなざしが新しい世界を拓く(パネルディスカッション)」(福岡伸一・柏原精一・池谷和信・宇根 豊)」第10回生き物文化誌学会大会、福岡リーセントホテル
- 2012年7月27日 ‘From Wild to Tame: the Relationship of Wild Chicken with Mountain Farmers’ 第4回環境人類学セミナー、国立民族学博物館
- 2012年7月28日 「アフリカ狩猟採集民の世界——展示場の『もの』からのメッセージ」地球おはなし村の研修、国立民族学博物館ナビひろば
- 2012年9月24日 「南アジアの環境人類学の地平——家畜・人関係を中心として」2012年度現代インド・南アジアセミナー、国立民族学博物館
- 2012年10月7日 「アフリカの地場産業——ナイジェリアのビーズ細工の事例」日本地理学会、神戸大学
- 2012年10月7日 「コメント『ゾドと遊牧知——乾燥地災害学の体系化に向けて』(代表：篠田雅人)」日本地理学会、神戸大学
- 2012年11月15日 ‘San Citizenship in The Central Kalahari Game Reserve, Botswana’ American Anthropological Association. 2012 Annual Meeting, San Francisco, USA.
- 2012年11月27日 ‘The Taming Process of Red Junglefowlthe’ The 15th AAAP (The Asian-Australasian Association of Animal Production Societies) Animal Science Congress. Thammasart University, Rungsit Campus.
- 2012年12月1日 「熱帯アジアにおける農民の生業複合——乳に依存しない家畜飼育の事例」『乳利用の有無からの牧畜論再考——旧・新大陸の対比』(代表：平田昌弘)、京都大学東南アジア研究所
- 2012年12月8日 「コメント」日本沙漠学会沙漠誌分科会『サーヘル地域における旱魃と人間活動の変容』(代表：石本雄大)、総合地球環境学研究所
- 2012年12月11日 「地球環境から見た文明の変遷——新たな人類文明史観を求めて」『惑星科学と生命科学の融合：生命概念の普遍化をめざして』(代表：長谷川真理子)、総合研究大学院大学・葉山国際湘南村センター
- 2013年1月26日 Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. The International Workshop on “Incentive of Local community for REDD and semi-domestication of non-timber forest products” (Global Environment Research Fund: E-1002, Ministry of Environment, Japan)
- 2013年2月2日 「アフリカ狩猟採集民のモラルエコノミー再考」モラルエコノミー研究会、京都大学農学部
- 2013年2月10日 「コメント」『旧人・新人の狩猟具と狩猟法』文部科学省科研費新学術領域研究「交替劇」東北大学川内キャンパス
- 2013年3月29日 「家畜化と人類文化史——民族学からのアプローチ」在来家畜研究会・日本動物遺伝育種学会合同シンポジウム『家畜化とは』、安田女子大学広島キャンパス
- 2013年3月30日 「日本のコモングと地理学」(ポスター発表)日本地理学会、立正大学熊谷キャンパス
- ・研究講演
- 2012年9月30日 「民博のビーズコレクション——フィールドワークを通して」『ビーズ イン アフリカ』、神奈川県立近代美術館・葉山
- 2012年10月26日 「コメント」みんぱく公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へ アメリカへ』、日経ホール
- 2012年11月9日 「ブタの文化史」兵庫県阪神シニアカレッジ・国際理解学科、尼崎市中小企業センター
- 2013年1月11日 「世界の多様な自然と環境——熱帯雨林と人」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
- ・展示
- 本館常設展示「日本地域の文化・山のくらし」新構築(養蜂、家畜飼育、焼畑、採集担当)
- 共催展示「国立民族学博物館コレクションによるビーズ・イン・アフリカ展」神奈川県立近代美術館(葉山)

・映像作品

池谷和信撮影・監修

『ヨルバのビーズ職人——ナイジェリア』（7分30秒、国立民族学博物館、2012年7月制作）

池谷和信ほか監修

テレビ東京「所さんの世界ビックリ村3」（2012年12月29日18～21時放送）

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、（基盤研究（S））「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」（研究代表者：嶋田義仁）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ・モラル・エコノミーを基調とした農村発展に関する比較研究」（研究代表者：松村和彦）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ熱帯林におけるタンパク質獲得の現状と将来」（研究代表者：木村大治）研究分担者、（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、環境省・地球環境研究総合推進費「地域住民のREDDへのインセンティブと森林生態資源のセミドメスティケーション化」（代表者：小林繁男）研究分担者、総合研究大学院大学・学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究：狩猟採集から食料生産への生業の変化と社会」（代表者：本郷一美）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性——歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、家禽資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Before Farming: the Archaeology and Anthropology of Hunter-gatherers, *Quarterly Online Journal* (UK) 編集委員、*Nomadic Peoples*, *Berghahn Journal* (UK) 編集委員、*Museum Anthropology* (USA) 編集委員、*Tribes and Tribals* (India) 編集委員、人文地理編集委員、人文地理学会評議員、生き物文化誌学会常任理事、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、国際commons会議 (The Congress of International Association of Commons) 準備委員、第10回国際狩猟採集社会会議 (10th Conference on Hunting and Gathering Societies) 準備委員

・非常勤講師

京都大学文学部及び大学院文学研究科「地理学特殊講義」「社会学特殊講義」、広島大学大学院国際協力研究科集中講義「途上国農村地域研究」

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】 東京女子大学文理学部史学科卒 (1976)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了 (1982)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了 (1988) **【職歴】** 東京女子大学文理学部史学科研究助手 (1976)、北海道東海大学国際文化学部助教授 (1988)、北海道東海大学国際文化学部教授 (1996)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授 (2001)、放送大学客員教授 (2006) **【学位】** Ph.D. (オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989)、M.A. (オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982) **【専攻・専門】** オセアニア先史学・民族学 1) オセアニアの土器文化、2) 島嶼環境における人間居住 **【所属学会】** 日本オセアニア学会、日本文化人類学会、日本人類学会、日本考古学協会、Polynesian Society、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』(朝日選書 715) 東京: 朝日新聞社。

[編著]

印東道子編

2007 『生態資源と象徴化』(資源人類学 7) 東京: 弘文堂。

2006 『環境と資源利用の人類学: 西太平洋諸島の生活と文化』 東京: 明石書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的

- 1) オセアニアの島嶼環境への人類の移動の様子や移動後の居住に関する研究を、科学研究費補助金(基盤研究(A))「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」(研究代表者: 松村博文)の研究分担者として行った。特に、今年度は1994年度に行ったマイクロネシア・ファイス島のハサハベイ埋葬遺跡から出土した人工遺物、人骨、自然遺物類などの分析を行った。
- 2) オセアニアへ拡散した人類文化の多様性に関して、総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」(代表者: 斉藤成也)の総括チームの一員として連携をとりながら研究を展開した。特に、人間と動植物の遺伝的多様性について、文献資料とブタの歯を利用したアイソトープ分析から考察を進めた。
- 3) 新規共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究: 資源利用と物質文化の時空間比較」(研究代表: 小野林太郎)において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々

の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で文献資料を収集した。

・成果

- 1) 2008～2012年に行った民博共同研究会「人類の移動誌：進化的視点から」の成果刊行物を企画、編集した。2013年4月に臨川書店から印東道子編『人類の移動誌』として刊行予定である。
- 2) 同上共同研究会の成果に関して企画された『みんなく公開講演会 だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』（2012年10月、東京・日経ホール）で「海を越えてオセアニアへ」と題した発表を行った。
- 3) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究分担）に関連し、ファイス島の出土人骨のDNA分析を国立科学博物館の篠田博士に依頼した結果、複雑な人類の移動史の一端が明らかになったので、連名で日本人類学会大会（慶應義塾大学）で発表を行った。
- 4) 総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」（代表者：斉藤成也）の総括チームの一員として研究を進め、日本人類学会大会で企画したシンポジウム「現生人類の多様化と均質化を遺伝子と文化から探る」（慶應義塾大学）で発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

小野林太郎・印東道子

2013 「ミクロネシア・ファイス島におけるサメ・マグロ類の利用と時間変化」『動物考古学』30: 83-104。
Storey A. A. *et al.*

2012 Investigating the Global Dispersal of Chickens in Prehistory Using Ancient Mitochondrial DNA Signatures. *PLoS ONE* 7(7): e39171.

[その他]

印東道子

2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑧ ウミガメの分配」『毎日新聞』6月28日夕刊。

2012 「島を『楽園』に変えたポリネシア人」『紫明』31: 26-30。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年6月30日 「人類の海域への急速な拡散——オーストラリアへ、そしてポリネシアへ」第2回交替劇プロジェクト公開講座、キャンパス・イノベーションセンター東京
- 2012年10月26日 「海を越えてオセアニアへ」みんなく公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』日経ホール
- 2012年11月2日 「考古データから見たオセアニアにおける現生人類の多様化と均質化——土器文化を中心に」第66回日本人類学会大会発表、慶應義塾大学
- 2012年11月4日 「ファイス島出土人骨のミトコンドリアDNA分析」（篠田謙一・印東道子）第66回日本人類学会大会発表、慶應義塾大学

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

・論文審査

博士論文審査委員長（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」（代表者：斉藤成也）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本人類学会評議員、日本オセアニア学会理事、同評議員、日本学術会議連携会員、*People and Culture in Oceania* 編集委員、*Anthropological Science* 和文誌編集委員、*Journal of Island and Coastal Archaeology* (Routledge) 編集委員、*Journal of Pacific Archaeology* (New Zealand Archaeological Association) 編集委員

小長谷有紀 [こながや ゆき] 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

1996 『モンゴル草原の生活世界』（朝日選書 551）東京：朝日新聞出版。

1991 『モンゴルの春——人類学スケッチ・ブック』東京：河出書房新社。

[編著]

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義をきたた人びとの証言』東京：中央公論新社（中公叢書）。

【受賞歴】

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

1993 第29回翻訳出版文化賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的

これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正統な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

- 1) インタビューの口述資料のうち、国立民族学博物館調査報告（SER）41号および71号に収録したインフォーマントより3名を選択し、コロンビア大学のロッサビ特任教授のもとで監修し、SER107号として刊行した。
- 2) インタビュー口述資料のうち、ハラホリン農場に係る3名のモンゴル語、日本語のテキストをそれぞれ完成させた。SERに資料として来年度に提出する予定である。
- 3) 農業については、英語論文、モンゴル語論文のほかに、国営農場の資料集をSER110号として刊行した。
- 4) ポスト社会主義時代についても、女性に焦点をあて、外来研究員のマクスダ氏と共同でインタビューの口述資料集をSER112号として刊行した。

なお、梅棹資料に関する共同研究の成果を優先させたため、未刊行の口述史資料について刊行するまでにはいたらなかった。梅棹忠夫アーカイブズに関連する業績は以下4点。

小長谷有紀 「ゲーテと梅棹忠夫」『モルフィギア』34: 33-45, ナカニシヤ出版。

小長谷有紀 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 91-122, 国立民族学博物館。

小長谷有紀 「梅棹忠夫のコレクション精神」『民族藝術』29: 60-66, 民族藝術学会。

小長谷有紀・堀田あゆみと共編 『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』（国立民族学博物館調査報告111）、

国立民族学博物館。

◎出版物による業績

[共編]

小長谷有紀・チョローン編

2013 『モンゴル国営農場資料集』(国立民族学博物館調査報告110) 大阪: 国立民族学博物館。

小長谷有紀・堀田あゆみ編

2013 『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』(国立民族学博物館調査報告111) 大阪: 国立民族学博物館。

Konagaya, Y., Lkhagvasuren, I. (interviews conducted), M. Rossabi (trans.) and M. Rossabi (ed. and intro.)

2012 *A Herder, a Trader, and a Lawyer; Three Twentieth-Century Mongolian Leaders* (Senri Ethnological Reports 107) Osaka: National Museum of Ethnology.

Konagaya, Y. and S. Maqsooda (eds.)

2013 *Development Trajectories for Mongolian Women in and after Transition* (Senri Ethnological Reports 112) Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

小長谷有紀

2012 「中央ユーラシアの社会主義的近代化——カザフスタンとモンゴルの対比から」『中央アジア環境史 第3巻 激動の近現代』pp.5-22, 京都: 臨川書店。

2012 「ゲーテと梅棹忠夫」『モルフォロジー』34: 33-45。

2012 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 91-122。

2013 「梅棹忠夫のコレクション精神」『民族藝術』29: 60-66。

2013 「モンゴルにおける遊牧——その特徴がしめす現代の変容」佐藤洋一郎ほか編『イエローベルトの環境史——サヘルからシルクロードへ』pp.88-96, 東京: 弘文堂。

2013 「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源——日本とモンゴルの応答関係から」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 425-447。

Konagaya, Y., N. Yamamura *et al.* (eds.)

2012 *The Impact of Agricultural Development on Nomadic Pastoralism in Mongolia: The Mongolian Ecosystem Network*, pp.255-267. Tokyo: Springer.

Konagaya, Y. and A. Maekawa

2012 Characteristics and Transformation of the Pastoral System in Mongolia. In N. Yamamura *et al.* (eds.) *The Mongolian Ecosystem Network*, pp.9-21. Tokyo: Springer.

2012 Mongol ulsyn gazar tariangiin salbaryn khögjil, nüüdiin mal aj akhuid nölöolsön ni. In Z. Baasanjargal *et al.* (eds.) *Mongolyn nüüdiin mal aj akhui ekosistemiin süljee*, pp.380-395. Ulaanbaatar (モンゴル語「モンゴル国における農業開発の遊牧に対する影響」).

2012 Mongol Ulsyn Belcheeriin mal aj akhuin yalgarakh whinj ba tuunii oorchlolt. In Z. Baasanjargal *et al.* (eds.) *Mongolyn nüüdiin mal aj akhui ekosistemiin süljee*, pp.451-466. Ulaanbaatar (モンゴル語「モンゴル国の牧畜の特長とその変容」).

[書評]

小長谷有紀

2012 「原 克著『白物家電の神話——モダンライフの表象文化論』」『信濃毎日新聞』4月15日朝刊。

2012 「スティーブン・ラーソン著『ミレニアム1』」『信濃毎日新聞』5月6日朝刊。

2012 「高倉浩樹編『極寒のシベリアに生きる——トナカイと氷と先住民』」『信濃毎日新聞』6月3日朝刊。

2012 「梅棹忠夫と梅棹アーカイブのいま」『新日本海新聞』6月3日朝刊。

2012 「窪田順平監修『中央アジア環境史1——環境変動と人間』」『信濃毎日新聞』7月1日朝刊。

2012 「宮本常一著『忘れられた日本人』」『信濃毎日新聞』7月29日朝刊。

2012 「山極寿一著『子育てが人間にもたらず平穏』」『信濃毎日新聞』11月4日朝刊。

2013 「ドンドウブジャ著『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある』」『信濃毎日新聞』1月6日朝刊。

2013 「小玉武著『佐治敬三』」『信濃毎日新聞』1月6日朝刊。

2013 「高野秀行著『移民の宴』」『信濃毎日新聞』2月3日朝刊。

[その他]

小長谷有紀

2012 「梅棹忠夫モンゴル見聞録」『読売新聞』7月19日夕刊。

2012 「ウマと子どもたち」企画展パンフレット『スーホの白い馬と草原の民』pp.5-7, 財団法人馬事文化財団。

2012 「トゥバ人たちの住むところ——中国・ロシア・モンゴルをまたいで」『図書』766: 14-19。

2013 「梅棹スケッチ原画の底本をつくる」『民博通信』140: 26-27。

Konagaya, Y.

2013 The History of Agricultural Development in Mongolia: Seeking the Trade off between Development and Conservation. In Akiko Sakai (eds), *Callapse and Restoration of Ecosystem Networks with Human Activity*, pp.74-78, Kyoto: RIHN (総合地球環境学研究所)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年8月25日 'Narrative on the Socialist Life as the Legacy of Perestroika', IIASワークショップ "The Legacy of Perestroika Discourses in Knowledge Production on Central Asia", ウランバートル大学

2012年9月12日 「人文科学・社会科学における研究の国際化と学際化」科学研究費助成事業支援プログラム、神戸学院大学

2013年1月15日 「スーダン調査報告」科学研究費補助金（基盤（B））『アフロユーラシアにおける初期農業・牧畜文化の比較研究』（研究代表者：佐藤洋一郎）報告会、キャンパスプラザ京都

2013年2月26日 「モンゴル文化遺産に関する日本の協力20年の全容」文化遺産国際協力コンソーシアム第16回アジア中央アジア分科会、東京文化財研究所

◎調査活動

・海外調査

2012年4月23日～5月13日—中華人民共和国（共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」の国際化に関わる中国内蒙古調査）

2012年6月6日～21日—フィンランド、エストニア（日本関連の在外資料調査）

2012年7月17日～8月20日—モンゴル、中華人民共和国、ロシア（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査、及びトゥバの現代変容に関する映像音響資料収集）

2012年8月23日～27日—モンゴル（国際アジア研究所のワークショップ参加）

2012年9月15日～10月1日—エチオピア、スーダン（アフロユーラシアにおける初期農耕・牧畜文化の比較研究）

2013年3月20日～24日—モンゴル（モンゴル国立法律研究所での科研費「モンゴルの国土利用と自然環境保全のあり方に関する文理融合型研究」報告会参加及び調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）、外国人特別研究員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究(A)）「モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究」（代表者：小長谷有紀）研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「灌漑管理統合評価指標の開発～改めて『良い灌漑とは？』」（研究代表者：渡邊紹裕）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「近代世界におけるジェノサイド的現象に関する歴史的研究」（研究代表者：石田勇治）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「モンゴルの土地利用と自然環境保全のあり方に関する文理融合型研究」（代表者：加藤和久）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

中央環境審議会委員、2012年度JRA賞馬事文化賞選考委員会委員、人間文化研究機構総合地球環境学研究所運

営会議委員、東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター運営委員会委員、日本学術会議連携委員、科学研究費委員会専門委員、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム査読委員、平成24年度グローバルCOEプログラム委員会専門委員

・学会の開催

2013年1月8日～9日 国際研究フォーラム『国際共同取材、中国・ロシア・モンゴル国のトゥバ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』国立民族学博物館

2013年2月15日 国際シンポジウム『モンゴル国における鉱業開発の諸問題——歴史的視点から』国立民族学博物館

庄司博史 [しょうじ ひろし]—————教授

【学歴】 ヘルシンキ大学文学部卒（1977）、関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了（1980）【職歴】 国立民族学博物館第3研究部助手（1980）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部部長（2000-2002）、総合研究大学院大学文化科学科比較文化専攻長（2003-2004）【学位】 文学修士（関西外国語大学 1980）【専攻・専門】 言語学、ウラル語学、言語政策論【所属学会】 日本ウラル学会、日本言語学会、日本社会言語科学会、日本移民学会、多言語化現象研究会

【主要業績】

[編著]

庄司博史編

1999 『ことばの二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容6）東京：ドメス出版。

[共編]

庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編

2009 『日本の言語景観』東京：三元社。

真田信治・庄司博史編

2005 『事典——日本の多言語社会』東京：岩波書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の多民族化・多言語化の実態についての研究

・研究の目的

本研究では近年の外国人増加にともなう地域の多民族化の実態をふまえ、多民族化がいかにかに社会の多言語化に影響するか、また多言語化はいかにかに日本社会の言語間の関係、日本人の言語意識にかかわるかに焦点をあて研究を進めてきた。今年度は、特に多言語化の実態を移民言語政策、移民母語教育とのかかわりに注目しつつ調査研究をすすめる。また非識字者の社会参加に関する研究も国際比較の観点から進める予定である。本研究は、共同研究「日本の移民コミュニティと移民言語」（代表者：庄司博史）との連携のもとすすめている。

・成果

今年度は、以下の出版、および学会での口頭による発表、講演をおこなった。

◎出版物による業績

[共編]

『月刊みんぱく』編集部編／久保正敏・庄司博史責任編集

2012 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

[その他]

庄司博史

2012 「多『民族』は共存できるのか——ヨーロッパのころみ」『月刊みんぱく』36(6): 8-9。

2012 「『みんぱく』ヨーロッパ展示の移民コーナーをリニューアル」『M ネット』150: 20。

2012 「北欧の森と人びとをつなぐビルベリー」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 8-9, 東京：丸善出版。

- 2012 「移民の母語教育最前線——フィンランド」『季刊民族学』36(3): 66-86。
- 2012 「移民の識字問題——多言語サービス、日本語指導、母語教育、そして？」『民博通信』138: 18-19。
- 2012 「マンガ文化は永遠か」『月刊みんぱく』36(11): 20。
- 2012 「セト語——国境で分断されたことばと人びと」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 68-72, 東京: 明石書店。
- 2012 「民族衣装——民族をまもり育てた一世紀」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 252-256, 東京: 明石書店。
- 2012 「エストニア全国歌謡祭——民族と国をつくった祭り」小森宏美編『エストニアを知るための59章』pp. 257-261, 東京: 明石書店。
- 2012 (翻訳解説)「サーミ言語語法」歴史学研究会編『世界史史料』11 (20世紀の世界II——第二次世界大戦後 冷戦と開発) pp. 396-397, 東京: 岩波書店。
- 庄司博史・久保正敏
- 2012 「おわりに」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 116-117, 東京: 丸善出版。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月9日 「総合コメント」シンポジウム『グローバル化社会における多言語使用と外国語教育』慶応大学次世代研究プロジェクト推進プログラム『非英語圏にすむ日本語母語話者の言語生活』共同研究プロジェクト、慶應義塾大学三田キャンパス
 - ・共同研究会

2012年11月11日 「試論——資産としての移民言語」移民言語と多言語景観研究会『日本の移民コミュニティと移民言語』(明海大学大学院言語景観研究会共催) 明海大学
 - ・研究講演

2012年8月7日 「日本の多民族化、多言語化」関西国際センター・国内大学連携大学生訪日研修、国立民族学博物館

2012年7月26日 「学校における地域を意識した多文化教育のありかた」大阪市小学校教育研究会此花支部 国際理解教育部夏季研修会(西九条小学校)

2012年11月16日 「言語景観」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2013年1月26日 「北欧のパン——ライ麦パンってどんな味？」やっぱりヨーロッパ——春のみんぱくフォーラム・パンセミナー
 - ・みんぱくゼミナール

2013年2月16日 「変わるヨーロッパの言語地図——多『言語』社会から『多言語』社会へ」第417回みんぱくゼミナール
 - ・広報・社会連携活動

2013年1月12日 (映画解説)『パリ20区、僕たちのクラス』みんぱく映画会
- ◎調査活動
- ・海外調査

2012年8月18日～9月12日—フィンランド、エストニア、スウェーデン(「移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり」の調査、海外日本資料調査研究関連の調査)
- ◎大学院教育
- ・指導教員

主任指導教員(2人)
 - ・博士論文審査

博士論文審査委員(1件)
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤(C))「移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり」(研究代表者: 金 美善) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

関西外国語大学「フィンランド語」、京都外国語大学「言語と文化」

田村克己 [たむら かつみ] ————— 教授

1949年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒業（1972）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1975）【職歴】 鹿児島大学教養部助手（歴史学科）（1975）、鹿児島大学教養部講師（文化人類学科）（1976）、鹿児島大学教養部助教授（文化人類学科）（1980）、金沢大学文学部助教授（行動科学科文化人類学講座）（1982）、国立民族学博物館研究部助教授（1989）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1989）、国立民族学博物館研究部教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科長（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2003）、国立民族学博物館副館長（2005）、国立民族学博物館情報管理施設長（2005、2010）【学位】 社会学修士（東京大学 1975）【専攻・専門】 東南アジア文化人類学【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[編著]

田村克己編

1999 『文化の生産』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 4）東京：ドメス出版。

[共編]

田村克己・根本 敬編

1997 『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』東京：河出書房新社。

[論文]

田村克己

1996 「ビルマの建国神話について」『国立民族学博物館研究報告』20(4): 607-645。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける国家と文化に関する人類学的研究

・研究の目的

東南アジアは今、大きな転換点にある。ここ数十年の経済のグローバル化、経済成長にともなう域内の経済発展により、この地域内外の関係は一層緊密化し、このことは文化の面においても現れている。ミャンマーを中心として、国家と文化の関わり方の動態を改めて調査・研究し、比較・分析することによって、この課題について新たな学問的展開を図りたい。とくにミャンマーはこの数年急激な民主化が進み、経済的・社会的変化が著しく、その中でビルマの文化の現在を国の政策との関わりから研究・調査を進める。

・成果

上記の目的にしたがい、研究を進めた。以下はその成果の一部である。2012年5月に釜山で開催された“2012 International Conference of ISEAS, IMS, IIAS/BUFS”にて、“Religious Syncretism as Outer Civilization: Comparative Study in Burma, Vietnam and Japan”というタイトルで研究発表を行い、また本発表をもとにした論文が釜山外国語大学東南アジア研究所発行のSUVANNABHUMIに掲載された。また2013年2月にはアジア太平洋無形遺産文化センターにて開催された無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』において、「ミャンマーにおける文化政策と博物館——無形文化遺産に関わって」というタイトルで講演を行った。また共同研究会「『統制』と公共性」に参加し、2013年1月には「『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後」というタイトルで発表を行った。今後も研究会参加等をとおして、社会的・文化的側面からビルマ研究を進めている。

◎出版物による業績

[論文]

Tamura, K.

2012 Religious Syncretism as Outer Civilization: Comparative Study in Burma, Vietnam and Japan.

SUVANNABHUMI 4(1): 27-42.

[その他]

田村克己

2012 「迷える『玉座』」『月刊みんぱく』36(6): 20。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑦ 日本の食べ物は『甘い』」『毎日新聞』10月18日夕刊。

2012 「二つの都ネーピードー——伝統と文化の今」『記念シンポジウム講演録 激動するミャンマーはどこへ行くのか?』大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月26日 『『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後』『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』東京外国語大学

・学外または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月18日 ‘Religious Syncretism as Outer Civilization: Comparative Study in Burma, Vietnam and Japan.’ “2012 International Conference of ISEAS, IMS, IAS/BUFS”, Busan, Korea.

・研究講演

2012年10月19日 「二つの都ネーピードー——伝統と文化の今」『激動するミャンマーはどこへ行くのか?』大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業

2012年11月3日 「趣旨説明」国立民族学博物館主催・日本文化人類学会後援 国際シンポジウム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館

2012年11月15日 「国立民族学博物館によるミャンマー博物館支援」『文化遺産国際協力コンソーシアム 第1回ミャンマーワーキンググループ』、東京文化財研究所

2013年2月17日 「ミャンマーにおける文化政策と博物館——無形文化遺産に関わって」アジア太平洋無形文化遺産研究センター・堺市主催「無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』」堺市博物館

・広報・社会連携活動

2012年6月12日 「ビルマ/ミャンマーの『民主化』と文化遺産」『教養・実務講座 災害を乗り越えてきた世界遺産の保護活動』上智大学

2012年7月8日 「ビルマ/ミャンマーの口(くち)コミカ(りょく)」第260回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年8月4日 「ビルマ/ミャンマーの『絆』の力」第410回 友の会講演会

◎調査活動

・海外調査

2012年5月17日～19日—大韓民国（釜山外国語大学における国際シンポジウム参加）

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2013年1月6日～16日—ミャンマー（ミャンマー連邦共和国における無形文化遺産の現状調査）

2013年2月20日～27日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査）

2013年3月18日～28日—ミャンマー（ミャンマーにおける精霊ナツの儀礼及び仏教儀礼の現地調査）

◎大学院教育

・論文審査

論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化機構連携研究「『人間文化研究資源』の総合的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

京都大学東南アジア研究センター研究協力者、豊中市情報収集専門家会議専門委員

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）【専攻・専門】生態人類学、漁民研究、マダガスカル地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、生態人類学会、地域漁業学会、日本オセアニア学会、環境社会学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著書]

飯田 卓

2012 『マダガスカル地域文化の動態』（国立民族学博物館調査報告103）大阪：国立民族学博物館。

[論文]

飯田 卓

2010 「ブリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

マダガスカルにおける無形文化遺産の継承

・研究の目的

無形文化遺産とは、慣習、描写、表現、知識、技術など、いわゆる文化に関わることがらのうち、実体そのものでなくその背後にある観念的なものを指している。こうした無形文化遺産の概念は、文化人類学における古典的な文化概念にきわめて近いものの、文化そのものが疑問視されている近年の潮流にあっては、無形文化遺産を保護していこうというユネスコの方針は議論を呼ぶことになる。本研究では、無形文化遺産といえどもあくまで物質的基盤があるという立場に立ち、フィールド研究をとおして、無形文化遺産の保護継承に必要な条件を考察する。

事例としては、マダガスカル共和国のザフィマニリの木彫知識をとりあげる。これは、筆者がフィールド研究を重ねてきた同国において、ユネスコが登録した無形文化遺産の唯一例である。筆者は一昨年度からこの地域についての調査を継続しており、科学研究費補助金（基盤研究（B））「マダガスカルにおける森林資源と文化の持続」（2010～2012年度）にもとづいて、研究を遂行する予定である。

・成果

マダガスカルにおける無形文化遺産の継承の状況を、特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」で紹介し、展示図録／解説書『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化のものづくり』においてさらに深く考察した。木彫り知識は単独で継承されてきたものではなく、家屋建築や編み仕事、焼畑農耕と深く関わりつつ現在のかたちになったもので、木彫り製品の商品化といった外部からの刺激も一定の役割をはたしていたことを明らかにした。

こうした無形文化遺産を「保護継承」しようとするとき、その継承に関わる社会経済的条件を凍結したほうがよいとする議論もありえよう。しかし、木彫りのかたちが商品化とも関わって変化してきた現状を考えれば、凍結による保護継承は、これまでの経緯に逆らう非現実的な提案となるおそれがある。むしろ、ゆるやかな変化を是認したうえで、一部の工芸家によってのみ木彫りがおこなわれるのではなく、その他の市井の人びとが

継承に関わっているという意識をいま以上に育むことが重要となろう。具体的には、ツーリストが看過しがちな自家製家具の製作を遺産継承の一端とみなし、また、木彫りをおこなうことのない女性による編み仕事などのものづくりを木彫りとともにザフィマニリの歴史と結びつけるような考えかたが浸透してはじめて、ザフィマニリの木彫り製作技術は、コミュニティによって支えられるという無形文化遺産の理想にかなったものとなる。

以上のような調査結果をふまえて、コミュニティという受け皿に無形文化遺産が宿るのではなく、逆に、無形文化遺産についての考えかたを軸としてコミュニティのありかたをとらえなおす可能性が生じてくる。この着想をもとに、民博の機関研究「マテリアリティの人間学」の一環として「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」を申請したところ、2013年度から3年間の実施を認められた。今後はこの期間をとおして、ザフィマニリの事例を他の地域の文化遺産（行政的なお墨付きを得たものとはかぎらない）と比較しながら、幅広い視野からとらえていく計画である。

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓責任編集

- 2013 国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり (Handicrafting the Intangible: Zafimaniry Heritage in Madagascar)』大阪：国立民族学博物館。

[論文]

飯田 卓

- 2012 「国立民族学博物館の民具資料とアチック写真・フィルム」『国際常民文化研究機構年報』3: 316-317。
- 2012 「道路をバイパスしていく電波——マダガスカルで展開するもうひとつのメディア史」羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広編『メディアのフィールドワーク——アフリカとケータイの未来』pp. 36-49, 東京：北樹出版。
- 2012 「ノマディズムと遠距離通信——マダガスカル、ヴェズ漁民における社会空間の重層化」杉本星子編『情報化時代のローカル・コミュニティ——ICTを活用した地域ネットワークの構築』(国立民族学博物館調査報告106) pp. 227-245, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「文化の象徴としての家」国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 48-55, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「焼畑から受け継いだ粗さと細やかさ」国立民族学博物館編『霧の森の叡智——マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 68-75, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月22日 「地域研究における非文字資料の利用」第335回奄美郷土研究会例会、鹿児島県立奄美図書館

・みんぱくゼミナール

2012年7月21日 「情報アクティビスト宣言——市民の知的探究と博物館」第410回みんぱくゼミナール

・研究講演

2012年7月17日 「実践における型と即興、継承と創造——マダガスカル漁民の漁法からみる」東北大学大学院環境科学研究科環境社会人類学研究室公開講座、東北大学

2012年9月22日 「霧の森にくらすザフィマニリ人」在マダガスカル日本人会文化講演会、国際協力事業団アンタナナリボ事務所長宅

2013年3月30日 「何処にでもある何処にもない世界 マダガスカル」第105回国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA 市ヶ谷ビル

・展示

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」実行委員長

◎調査活動

・海外調査

2012年4月1日～7日—フランス、イギリス (2013年春季特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」に関する資料借用交渉)

2012年5月5日～15日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の口承に関する調査)

2012年7月24日～9月25日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の森林資源利用に関する調査、民話・伝承に関

する調査)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本アフリカ学会評議員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキアム運営委員会委員

・非常勤講師

神戸大学大学院「文化情報リテラシー特殊講義」(集中講義)、放送大学「文化人類学」分担協力講師

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科第一卒 (1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退 (1990) 【職歴】 東京大学教養学部助手 (1990)、中部大学国際関係学部講師 (1992)、中部大学国際関係学部助教授 (1995)、国立民族学博物館第3研究部併任助教 (1997)、金沢大学文学部助教授 (1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授 (2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2010) 【学位】 社会学修士 (東京大学大学院社会学研究科 1984) 【専攻・専門】 文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群 【所属学会】 日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』 京都: 世界思想社。

[論文]

宇田川妙子

2004 「広場は政治に代われるか——イタリアの戶外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28(3): 329-375。

1999 「イタリアの家族論と家族概念」『日伊文化研究』37: 11-22。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性(私性)という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。

・成果

本年度は主に親密性にかんする課題を追求し、以下のように論文および研究発表という形で成果を公表した。

2012年6月1日 「ジェンダーと親族——女性と家内領域を中心に」、河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.149-177, 東京: 時潮社。

2012年10月21日 「イタリアの生殖技術論争の変遷」、生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会、日本科学未来館にて

◎出版物による業績

[論文]

宇田川妙子

2012 「ジェンダーと親族——女性と家内領域を中心に」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.149-177, 東京: 時潮社。

[その他]

宇田川妙子

2012 「生活にきざまれる農業のリズム」『月刊みんぱく』36(6): 3-4。

2012 「パンから見える多様性と共通性」『月刊みんぱく』36(6): 8-9。

2013 「人生、ここにあり！」『社会科navi』2013(3): 18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年7月21日 「イタリアの『第三セクター』の動き」『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月16日 「王権とジェンダー——人類学の視点から」第61回大阪大学歴史教育研究会、大阪大学

2012年10月21日 「イタリアの生殖技術論争の変遷」生殖テクノロジーとヘルスケアを考える研究会、日本科学未来館

・みんぱくゼミナール

2013年3月16日 「家族の今——イタリアの事例から考える」第418回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2012年5月18日 「食事と家族」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年7月31日 「イタリアと恐怖映画——イタリアのもう一つの顔」ウィークエンドサロン

2013年1月5日 国立民族学博物館友の会講演会「時間（とき）の変わり目——クリスマスからイースターにかけての祝祭から」

2013年2月3日 ウィークエンドサロン「ヨーロッパの生業と1年」

2013年3月2日 春のワークショップ「オリジナルモバイルを作ろう！」解説

2013年3月9日 やっぱりヨーロッパ関連 パンセミナー「イタリアの日常生活とパン」

2013年3月23日 みんぱく映画会『人生！ここにあり』

◎調査活動

・海外調査

2012年9月23日～10月14日—イタリア（イタリアにおける労働と生活に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究『「シングル」と家族——縁（えにし）の人類学的研究』共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

佐藤浩司 [さとう こうじ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』京都：学芸出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・成果

東南アジアの木造建築を読み解くための資料を作成中。ホームページにて逐次公開している。

<http://www.sumai.org>

◎調査活動

・海外調査

2012年5月22日～27日—インドネシア（インドネシアの木造建造物保存に関する国際共同研究—日本型修理技術の適応と保存意義における調査研究）

2012年6月30日～7月16日—インドネシア（「インドネシア・ニアス島の木造建造物群文化遺産の保存体制構築と修理技術協力」におけるニアス島の木造建造物の保存調査）

2012年10月12日～11月2日—インドネシア（インドネシアの木造建造物に関する調査）

2012年11月26日～30日—台湾（オーストロネシア語族の木造建築に関する研究）

2012年12月24日～2013年1月4日—インドネシア（インドネシア木造建造物保存に関する国際共同研究参加）

2013年2月25日～3月23日—イラン（窓の起源に関する研究）

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ] ————— 准教授

1959年生。【学歴】 オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】 科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）【学位】 Ph. D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】 先史学、民族植物学【所属学会】 Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、Society of Writers, Editors and Translators (SWET)

【主要業績】

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Matthews, P. J.

1996 Ethnobotany, and The Origins of *Broussonetia Papyrifera* in Polynesia (An Essay on Tapa Prehistory). In J. M. Davidson, G. Irwin, B. F. Leach, A. Pawley and D. Brown (eds.) *Oceanic Culture History: Essays in Honour of Roger Green*, pp. 117-132. Wellington: New Zealand Journal of Archaeology.

1991 A Possible Tropical Wildtype Taro: *Colocasia esculenta* var. *aquatilis*. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 11: 69-81.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) 「南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究」

2) オセアニア・東南アジア・アフリカにおけるサトイモの起源と進化

- ・研究の目的

- 1) 2011年度から継続中の研究プロジェクト（科学研究費補助金（基盤研究（B））（農学；資源保全））による研究を推進するために、フィリピンで3回、ベトナムで1回の野外調査を行った。
- 2) Massey University (NZ) と Oxford University (UK) の共同研究者・博士課程の学生とともにサトイモに関する共同研究を続けた。

- ・成果

ベトナム北部とフィリピン北部・中部・南部で野外調査を行った。全地域において野生種のサトイモ・野生種の他の *Colocasia* を、またフィリピン中部と南部において野生種と栽培種のクワズイモ (*Alocasia macrorrhizos*) を観察し植物標本を収集した。

サトイモ科 (Araceae) のクロロプラスト DNA (cpDNA) 分析に最適であるさまざまな遺伝子座を同定した。(Ahmed *et al.* 2012)

現在、これを用いて、アジア・太平洋地域から収集された多くの標本（野外調査により新たに加えられたものと国立民族学博物館内に保管されている DNA アーカイブからのもの）について分析を進めている。

これから研究成果として公表を予定していることは、1) 熱帯の2倍体サトイモの多くは1つの大きな母系 cpDNA 系統に属していて、インドーアジアに起源をもつと考えられる 2) 温帯の（寒冷な気候に適応した）3倍体サトイモの多くは2番目に大きい cpDNA 系統に属していて、東アジアに起源をもつと考えられる 3) 野生種には多くの cpDNA の系統があるがこのうち2つの系統のみが大部分の栽培種サトイモに寄与している 4) ベトナム北部で収集した標本の中には、形態学上は異なっているが、類似のあるいは同一の葉緑体ゲノムを示すものがあることから、この地域において異種間の交配が起こったと考えられる。ベトナムの野生種サトイモはこれまでに見つかった南と北の双方の系統を起源としているのかもしれない。食用の植物として、また、ブタの餌として人類が利用し伝播した結果として、この野生種のサトイモの交配が起こった可能性もある。

- ◎出版物による業績

[論文]

Ahmed, I., P. J. Biggs, P. J. Matthews, L. J. Collins, M. D. Hendy, and P. J. Lockhart

2012 Mutational dynamics of aroid chloroplast genomes. *Genome Biology and Evolution* 4(12): 1316-1323.

- ・広報・社会連携活動

2012年4月8日 「民族植物学の旅——くらしに葉をつかう」第248回みんぱくウィークエンド・サロン

- ◎調査活動

- ・海外調査

2012年7月30日～8月14日—ベトナム（ベトナムにおける野生サトイモに関する調査）

2012年9月23日～10月4日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

2012年10月12日～24日—イギリス（学術協定提携に関する調査研究及び施設調査）

2012年11月26日～12月8日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

2013年1月27日～2月10日—フィリピン（フィリピンにおける野生サトイモに関する調査）

- ◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

Ph. D. Supervision (Massey University, New Zealand)、Ph. D. Adviser (Oxford University, UK)

- ・非常勤講師

名古屋大学農学部「食文化論」（集中講義）

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究所 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究所 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[論文]

三島禎子

- 2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編、小倉充夫編『グローバル・ディアスポラ』 pp.105-130, 東京: 明石書店。
- 2007 「ソニンケ商人の歴史——砂漠を越え海を渡る人びと」池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『アフリカ I』(朝倉世界地理講座11) pp.286-300, 東京: 朝倉書店。
- 2001 「セネガル・モーリタニア紛争をめぐる民族間関係」和田正平編著『現代アフリカの民族関係』 pp.68-91, 東京: 明石書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の国際移動に関する人類学的考察——民族文化と経済システム

・研究の目的

本研究の目的は、移動する人びとの主体性に注目することによって、アフリカと世界との関係性を再構築することにある。「主体性」と示す指標として、アフリカ商業民の経済活動を取りあげ、これまでほとんど解明されてこなかったその移動と経済の動態を把握するとともに、ミクロな経済の営みをグローバルかつ歴史的な視点からとらえなおすことを試みる。それに加えて、アフリカの古代王国時代から今日の国民国家における統治体制のなかで、商業民がどのような政治的立場をとってきたか、商業と政治と関わりから考察する。

・成果

今年度は科学研究費『環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して』(代表: 栗田和明) によってセネガルとコンゴ共和国への調査を実施し、ソニンケ民族の経済活動の実態について、アフリカ大陸内における展開およびアフリカとアジアとのつながりに関して多くの知見を得た。セネガルではソニンケの国際文化祭に出席しシンポジウムで発表をおこなった。

また『日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する』(国立民族学博物館/パリ・デカルト大学人口開発所主催) を開催し、アフリカ研究における学際的なアプローチについて議論を深めた。

◎出版物による業績

[その他]

三島禎子

- 2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑥ 自ら管理」『毎日新聞』4月12日夕刊。
- 2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景⑥ 自転車並み」『毎日新聞』11月8日夕刊。
- 2012 「World Watching from France 殺人犯をめぐる言説」『みんぱく e-news』132 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/132>)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月30日 『日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する』代表者、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月24日 『遠隔地交易から国際貿易へ——ムスリム商人ソニンケの歴史と現在』立教大学平和・コミュニティ研究機構公開講演会、立教大学

・研究講演

2013年3月22日 「砂漠を越え海を渡ったアフリカの商人たち」京都洛西ロータリークラブ、京都全日空ホテル

・広報・社会連携活動

2012年7月24日 「遠隔地交易から国際貿易へ——ムスリム商人ソニンケの歴史と現在」立教大学平和・コミュニティ研究機構公開講演会、立教大学

2012年7月27日 「10年分の夏」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年7月29日 「移民の国フランスとアフリカの深い関係」第263回ウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2013年1月3日～2月1日—フランス、セネガル、コンゴ共和国(アフリカ大陸における商業民の移住とネッ

トワークに関する調査、フランス国立パリ・デカルト大学との学術交流協定締結)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して 2011-2014」研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「在日在沖アフリカ人の生活戦略と日中アフリカ関係の都市人類学的研究 2011-2013」研究協力者

・学会の開催

2012年5月26日～27日 第49回日本アフリカ学会開催実行委員

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1) 雲南省大理ペー族社会の研究、2) 中国における国家とエスニシティに関する研究、3) 中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ

・研究の目的

政治や経済の情勢、あるいは人々をとりまく社会状況の変化とともに、地域の人々の生活や文化・社会がどのように変化し、それとともに自身やその属する集団、社会的カテゴリー、あるいは文化に対する人々の認識や意識がどのように変化するかを現地調査データならびに民族誌などの調査資料、地方志などの歴史的資料に基づいて実証的に明らかにする。

・成果

現地調査に基づき、中国雲南省のペー族の春節時期の祝祭および人びとが人生で経験する通過儀礼、ならびに国家による伝統的文化技能保持者に関する文化政策に焦点を当て、それらが近年、どのように変化し、地域社会や文化のあり方にどのような影響を与えているかについて研究を進めた。

調査地では、春節時期の祝祭活動は、経済状況の好転にともない、より盛大に実施される一方、その儀礼的

伝承部分の多くが、大きな変化を経ることなく維持されていることが明らかになった。年配者の宗教組織が祝祭活動の運営を担っており、村の行政的リーダーと一線を画しつつ連携するという体制の存在がそれを可能にしている。他方、人びとの生活と密接な関係を持つ人生儀礼は、経済や生活の変化につれて儀礼の変化はより大きい。しかし、部分的な象徴化を進めることによって儀礼行為の元来の意味を保持している。また、近年の中国政府の文化政策は特に無形文化遺産重視の傾向を強めており、伝統的文化技能保持者の発掘・認定が進み、それをてこにした地域あるいは民族の伝統文化の発揚がはかられ、一定の成果が上がっている。

以上の成果をもとに、マルチメディア番組「雲南省のペー族の暮らしと文化」のコンテンツの制作・編集を今年度も進め、73小番組（386分）のコンテンツを完成させた。これにより3年間で合計175小番組（709分）のコンテンツが全て完成した。

◎出版物による業績

[論文]

横山廣子

2013 「博物館以及城市文化遺産の保護と発展」呉 定元主編『「維護文化遺産 發展城市文化」円卓論壇文集』pp. 66-99, 中国山西省介休: 介休市政協。

[書評]

横山廣子

2013 「鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』書評」『中国研究月報』67(2): 31-36。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2012年11月24日～25日 《機関研究成果公開》国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」第2セッション座長

・共同研究会

2012年11月17日 「湖南ペー族における民族文化とポリティクス」『中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究』

・みんぱく若手研究者奨励セミナー

2012年11月28日～30日 2012年度みんぱく若手研究者奨励セミナー「包摂と自律の人間学——空間をめぐる」総合討論発言者

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月2日 「大理から見た湖南省のペー族」ペー族文化国際学術シンポジウム、中華人民共和国湖南省桑植県

2012年9月3日 「博物館ならびに都市文化遺産の保護と発展」文化遺産の保護、運用と都市文化の発展に関する国際円卓会議、中華人民共和国山西省介休市

・研究講演

2012年4月15日 「ビデオテークより ペー族の映像民族誌——制作過程で考えること」第101回国立民族学博物館友の会東京講演会

2012年11月18日 「多様な民族がともに暮らす雲南 そして日本」岸和田市自主学習グループDa Capo 公開講座、岸和田市立公民館

2013年3月1日 「人生観のいろいろな姿」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・映像番組

横山廣子 [監修]

2012 「中国雲南省ペー族のたいまつ祭り」(国立民族学博物館海外映像音響資料、24分、2010年撮影、2012年制作)

2012 「中国雲南省ペー族の中元節」(国立民族学博物館海外映像音響資料、23分、2010年撮影、2012年制作)

2012 「中国雲南省ペー族の結婚式」(国立民族学博物館海外映像音響資料、23分、2007年撮影、2012年制作)

・広報社会連携活動

2012年12月2日 「黄土文明と現代中国——山西省介休(かいきゅう)市で展開する観光開発」第278回みんぱくウィークエンド・サロン

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

研究生受け入れ教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大阪大学「ビルマ文化講義Ⅱa、ビルマ文化講義Ⅱb」

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 助教

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）【専攻・専門】社会文化人類学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、朝鮮学会、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp. 304-336, 京都: 昭和堂。

2008 「センセーショナルリズムへの冷笑——移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp. 161-186, 京都: 人文書院。

2003 「政治と発話——現代韓国の政治文化を構築する『誤解』」『民族学研究』68(1): 44-64。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における文化の統合性と多様性

・研究の目的

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかにかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかにかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

・成果

この期間には、主として4種類の研究をおこなった。

第1に、以前におこなった脱王朝・脱植民地国家における中央エリート階層の歴史人類学的研究を総合的に整理し、韓国・朝鮮の地域有力者がどのように多様であり、しかしどのように統合されてきたのかを、再考的な視点から明らかにした。

第2に、国際移民と母国社会の相互作用に関する人類学的研究として、韓国社会における海外コリアンの表象様式や、それを海外コリアンがどう認識、解釈しているのかに関する研究をおこなった。

さらに、植民地朝鮮における文化の統合（伝統の創造、真正な文化のオーデッティングなど）のメカニズムを明らかにするため、物質文化に関する2種類の研究を展開した。

全体のうちの第3として、現在では韓国・朝鮮の伝統的な民芸品・美術品として知られる高麗青磁が、どのように復興されたのかを問い直した。

同じく第4に、韓国・朝鮮の在来文化のイメージが固定された様相を、近代における記録写真という媒体への着目から掘り下げた。

脱王朝・脱植民地国家における中央エリート階層の歴史人類学的研究を総合的に整理する作業においては、単著『양반의 탄생: 한국의 ‘진정한 문화’와 근대 일본의 지식사회 (The Birth of Yangban: Korean ‘Authentic Culture’ and Intellectual Society in Modern Japan)』として結実した。同書は、韓国での出版に向けて、印刷中である。

国際移民と母国社会の相互作用に関する人類学的研究は、総合研究大学院大学の若手教員海外派遣事業から調査研究資金を受け、かつ、科学研究費補助金（基盤研究（B））（課題番号：21401046、2009～2012年度、研究代表者：朝倉敏夫）に研究分担者として参加することにより、おこなった。この中間成果は、共編『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리 (Contemporary Aspects of Oversea Koreans: Voices of the Natives and Japanese Scholars)』として、韓国で出版された。

高麗青磁の復興に関する研究は、科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：22720337、2010～2013年度）を研究代表者として受諾して進めた。この成果の一部は、上記の単著によって公刊されようとしている。また、学術誌論文としての公刊や、韓国社会への現地還元も準備中である。

近代の記録写真に関する研究は、神奈川大学の共同研究「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」（2009～2013年度、研究代表者：角南聡一郎）により遂行してきた。この成果は、『東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』（国際常民文化研究叢書3）に、論文「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」として掲載されることとなり、印刷中である。

◎出版物による業績

[編著]

太田心平

2012 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』, 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) Seoul: 학연문화사 (『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』朝倉敏夫・太田心平編, Seoul: 學研文化社。).

[論文]

太田心平

2012 “조사자가 찾아왔다: 시점의 전환과 지식의 재귀성에 관한 메모” In 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』 pp. 315-339, Seoul: 학연문화사 (『調査者がやってきた——視点の転換と知識の再帰性に関するメモ』朝倉敏夫・太田心平編 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 315-339, Seoul: 學研文化社。).

2012 “나오며” In 아사쿠라 도시오 & 오타 심페이 (eds.) 『한민족 해외동포의 현주소: 당사자와 일본 연구자의 목소리』 pp. 341-343, Seoul: 학연문화사 (『おわりに』朝倉敏夫・太田心平編 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 341-343, Seoul: 學研文化社。).

2013 「写真のマテリアリティ——現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」神奈川大学国際常民文化研究機構編 『国際常民文化研究叢書3——東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』 pp. 85-97, 横浜: 神奈川大学国際常民文化研究機構。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年9月18日 ‘Seoul Style 2002: A Gigantic Experience of Japan’s Archeology of Present,’ Activity Report Series of Museum Anthropology No.201203, New York: Columbia University

2013年1月11日 ‘Comments from a Native Eastern Asian Curator,’ International Workshop Asian Interactions: Natures, Peoples, Changes, New York: American Museum of Natural History.

・広報・社会連携活動

新規広報メディア開発・評価担当

2013年3月31日 「韓国人主婦がカナダ生活で困るモノ——外からみた韓国物質文化」第293回みんぱくウィ

ークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2012年4月5日～2013年2月2日—アメリカ合衆国、カナダ（在米韓国系「絶望移民」に関する調査研究）

2013年2月14日～3月30日—大韓民国、アメリカ合衆国、カナダ（在米コリアンと韓国人のネットワークの人類学的研究及び標本資料収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究」（研究代表者：朝倉敏夫）研究分担者、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者、機関研究「中国における家族・民族・国家ディスコースの生成と実態——グローバルな視点から」（研究代表者：韓 敏）国立民族学博物館研究分担者、機関研究「布と人間の人類学的研究」（研究代表者：関本照夫）研究分担者、神奈川大学国際常民文化研究機構国際常民文化研究「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」（研究代表者：角南聡一郎）共同研究者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

・他機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 助教

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）

【職歴】 日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）【学位】 博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）【専攻・専門】 文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）【所属学会】 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：淡水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞受賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的

本研究は、前年度までにおこなってきた聖者アル・ハディル崇敬研究の間口を広げ、より相対的な内容にしたものである。東地中海アラビア語圏に生きるマイノリティ、ことにキリスト教徒とシーア派ムスリム、かつてはアラビア語を母語としてきた中東系ユダヤ教徒（ミズラヒーム）を対象とし、日常生活のなかで、あるいはさまざまな文化活動をとおして、彼らがどのように宗教的アイデンティティを表象してきたかについて研究を進めた。なかでもイスラエル・ガリラヤ地方とレバノン南部における、複数の聖者崇敬の様態に重点を置き、異なる宗教・教派間で崇敬を共有することに対する意識や、崇敬が彼らの相互関係に与える影響を調査した。

・成果

前年度1月～2月におこなったレバノン南部におけるフィールドワークの成果については、6月23日に日本文化人類学会で口頭発表をおこなった。また、現在論文を執筆中であり、次年度の夏までには完成予定である。また、8月～9月には東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄付講座の経費で、パレスチナ・イスラエルにおけるキリスト教徒の菜食文化について調査を実施した。2月には科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」（研究代表者：西尾哲夫）分担金にて、キリスト教徒特有の豚肉食についての調査もおこなった。後者については調査の結果、宗教的に豚肉食を禁じられているはずのムスリムやユダヤ教徒が、積極的に豚肉食あるいは豚肉流通にかかわっているという事実が判明した。次年度も調査を続行し、次年度～次々年度前半に論文を執筆する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

菅瀬晶子

- 2012 「新たなパレスチナ・イスラエル紛争論を模索する——共同研究・パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」『民博通信』13: 28-29。
- 2013 「ムジャッダラ考——とある家庭料理にみる、シャーム地方文化論」『季刊民族学』143: 57-74。
- 2013 「2-4 ギリシャ正教会」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会——基礎データと研究案内（増補版）』（SOIAS Research Paper Series 9）pp.127-130, 東京：上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構。
- 2013 「2-5 メルキト派カトリック教会（ギリシャ・カトリック教会）」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会——基礎データと研究案内（増補版）』（SOIAS Research Paper Series 9）pp.131-134, 東京：上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構。

[その他]

菅瀬晶子

- 2012 「地球ミュージアム紀行 入場無料からみえてくるもの——レバノン・サイダ旧市街の博物館群」『月刊みんぱく』36(8): 16-17。
- 2012 「駅前の異空間アンダーグラウンド——わが街・新宿と大阪駅前ビル」『月刊みんぱく』36(11): 8-9。
- 2013 「みんぱく私の逸品 メノラー」『月刊みんぱく』37(2): 21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年6月23日 「聖なるものの共有と占有——東地中海アラビア語圏における聖者アル・ハディル崇敬の事例より」日本文化人類学会、広島大学東広島キャンパス
- 2012年9月23日 「東地中海アラビア語圏における、小麦とオリーブの聖性」東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄付講座食文化共同研究会第2回公開講義『食の選択に影響を与える文化的要因——文化人類学的アプローチから』東京工業大学田町キャンパス

・研究講演

- 2012年6月15日 「中東のキリスト教」NPO 法人大阪高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

◎調査活動

・国内調査

- 2013年3月23日～24日、28日 東京都新宿区、豊島区（日本展示新構築の資料収集）

・海外調査

- 2012年8月18日～9月8日—イスラエル（アラブ人市民及び中東系ユダヤ人市民のアイデンティティ表象に関する情報収集）

2013年2月12日～3月1日—イスラエル（イスラエル・ガリラヤ地方及びパレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区のキリスト教徒間における聖者崇敬・食文化についての調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
NIHU プログラム・イスラーム地域研究東大拠点研究協力者、東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄附講座・食文化共同研究会共同研究者、大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」パレスチナ班研究分担者
- ・非常勤講師
滋賀県立大学「国際関係論」

民族文化研究部

八杉佳穂 [やすぎ よしほ] ————— 部長(併) 教授

1950年生。【学歴】京都大学文学部卒（1975）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1980）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館第2研究部教授（1997）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2001）【学位】文学博士（総合研究大学院大学 1994）【専攻・専門】言語人類学、マヤ学【所属学会】日本言語学会、古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八杉佳穂

2004 『チョコレートの文化誌』京都：世界思想社。

2003 『マヤ文字を解く』東京：中央公論新社。

Yasugi, Y.

1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective* (Senri Ethnological Studies 39). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カクチケル語の歴史的研究

・研究の目的

古典カクチケル語の代表的文献である『カクチケル年代記』を主資料にして、カクチケル語の歴史の変遷を分析する。

・成果

カクチケル語の歴史の変遷を分析した結果をもとに、“Marcadores de énfasis en los verbos Kaqchikeles”をグアテマラのパツンで開かれた Formal Approaches to Mayan Linguistics II で発表した。また「カクチケル語の焦点化構文についての一考察」を『言語学論集』21号（東北大学）に発表した。

『カクチケル年代記』の翻訳は終了したが、不明な点が多々残った。それらは文法的な解析だけでは不可能な点であり、歴史的な研究や関連諸語の語彙的な研究を行って解明する必要がある、それに向けた準備をしている。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「カクチケル語の400年の変化を考えるために」 OS 研究会、三重大学

2012年8月4日 ‘Marcadores de énfasis en los verbos Kaqchikeles.’ “Formal Approaches to Mayan Linguistics II” Patzún, Guatemala.

2012年12月9日 「逆受動の混乱の原因」OS研究会、広島大学

・ 広報・社会連携活動

2012年4月20日 「チョコレート文化誌」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年5月22日 「マヤとアステカの絵文書」懐徳堂記念会、大阪大学中之島センター

2012年7月23日 「マヤの夏」『世界の夏を楽しもう！』真夏サロン

◎調査活動

・ 海外調査

2012年7月31日～8月22日—グアテマラ（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的
研究）

2013年3月1日～20日—グアテマラ（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研
究）

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員（2人）

近藤雅樹 [こんどう まさき]————— 教授

1951年生。【学歴】武蔵野美術大学造形学部美術学科卒（1977）【職歴】修徳高等学校（東京都葛飾区）美術科講師（1977）、財団法人日本常民文化研究所委託研究員（1977）、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課県立博物館設立準備室技術職員（1980）、兵庫県立歴史博物館技術職員・学芸員（1982）、兵庫県立歴史博物館主任・学芸員（1989）、国立民族学博物館第1研究部助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1996）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2003）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2007）【専攻・専門】日本物質文化論（民具研究）、民俗学【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、日本民具学会、道具学会

【主要業績】

[単著]

近藤雅樹

1997 『ぐうたらテクノロジー——熱烈！明治・大正「特許」事情』東京：河出書房新社。

1995 『おんな紋——血縁のフォークロア』東京：河出書房新社。

[編著]

近藤雅樹編

2001 『図説 大正昭和くらしの博物誌——民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』東京：河出書房新社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

渋沢敬三研究

・ 研究の目的

渋沢敬三の学術上の功績を、彼が主導的な役割をはたして推進し、形成した民具標本コレクションを中心に解明する。

・ 成果

『渋沢敬三著作集』全5巻を読み返し、2013年度秋に開催する特別展の構想に反映させるための記事を抽出し、残された民具コレクションとの照合作業を進めた。また「MRAハウス」からの寄付金による各地への追跡調査を実施した。これらによって得られた成果は展覧会の企画に反映する予定である。

◎出版物による業績

[編著]

近藤雅樹

2012 『国際シンポジウム「在外資料の調査研究——バルト海周辺地域の日本コレクション」』国立民族学博物館。

[論文]

近藤雅樹

2012 「資料翻刻『新指定重要民俗資料特別展覧』について」『民具マンスリー』45(4): 14-21。

Kondo, M.

2012 Research on Materials Related to Japan around the Baltic Sea Area: International Forum February 4-5, 2012. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14.

[監修]

近藤雅樹

2012 株式会社どりむ編『こわい! 不思議! 江戸の怪談 絵事典 お化け・妖怪から怪奇現象まで』京都: PHP 研究所。

[その他]

近藤雅樹

2012 「砥石入」『月刊みんぱく』36(4): 21。

2012 「アチック・ミュージアムの民具コレクション34 附木」『民具マンスリー』45(7): 24.

2013 「今和次郎と石黒忠篤、渋沢敬三」『今和次郎と考現学 暮らしの“今”をとらえた〈目〉と〈手〉』pp. 176-179, 東京: 河出書房新社。

2013 「追悼 中村俊亀智 民博名誉教授を偲ぶ」『月刊みんぱく』37(3): 16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2012年9月14日 「女紋のはなし」NPO 法人大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・海外調査

2012年6月3日～18日—ロシア（ロシアと北欧における在外日本関連アジア資料の調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

2012年度文化資源プロジェクト 渋沢敬三没後50周年記念特別展開催準備活動代表者、人間文化研究機構連携研究『筌』を通してみる学際的研究」研究代表者、人間文化研究機構連携研究「画中画の世界」研究分担者

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

財団法人MRAハウス「渋沢敬三記念基金」実行委員会委員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

芦屋市文化財審議会委員、伊丹市文化財審議委員会委員、財団法人 小田家博物館むろやの園評議員、神奈川大学国際常民文化研究機構運営委員、法政大学国際日本学研究所・研究プロジェクト「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討——〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトメンバー、和歌山県立紀伊風土記の丘協議会委員

・非常勤講師

神戸大学国際文化学部「博物館概論」、宝塚大学造形芸術学部「博物館情報論」（集中講義）

杉本良男 [すぎもと よしお]————— 副館長（企画調整担当）、教授

塚田誠之 [つかだ しげゆき]————— 教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学

博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）の壮（チワン）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2010 『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』東京：有志舎。

[論文]

塚田誠之

2012 「漢族と非漢族との相互影響について——広西の「蔗園人」の習俗に関する一考察」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』（東北アジア研究専書）pp. 73-104, 京都：昭和堂。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族のネットワーク、社会・文化の動態

・研究の目的

中国広西のチワン（壮）族について、国境を越えてベトナムの同系民族のヌン族との間にネットワークが構築されている。これまでに両者間のネットワークの実態について調査に基づいて研究を行い成果を挙げてきたが、2012年度も継続して中越の双方から調査を実施し一層掘り下げた検討を行う。ネットワークとして壮族とヌン族の間に結ばれる擬制的な親族ネットワークとしての「ラオトン」関係、通婚の実態等に重点を置いて研究を行う。また、壮族のもとで文化を資源化する動きが近年顕著にみられる。社会体制も変化しつつある。これらの点についても調査研究を行う。調査研究は科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」（代表者：塚田誠之）による。なお、壮族のもとで文化を観光資源化する動きが近年顕著にみられるが、この点についても研究を行う。

・成果

中越国境地域に居住する壮族とベトナム側のヌン族・タイ族との擬制的な親族「ラオトン」関係について、中国とベトナムでの実地調査を経て、その契機、儀礼、婚葬や長寿祝い・年中行事等の際の往来、相互扶助、呼称、意識におけるその目的や重要性等、多面的な検討を行い、科研報告書「中国の『国境文化』の人類学的研究」（塚田誠之編）に論文を執筆をした。

壮族のもとでの文化の資源化の動きの現状と問題点について、中越国境線を流れる観光地「徳天瀑布」をめぐる壮族の人々、政府やその出先機関、企業、さらにはベトナム側の人々といった諸主体の動向に留意をして検討し、11月に民博共同研究会で口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[編著書]

塚田誠之編

2013 『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』（国立民族学博物館調査報告109）大阪：国立民族学博物館。

2013 『中国の「国境文化」の人類学的研究』2010～2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））課題番号22401046 研究成果報告書，大阪：国立民族学博物館。

[論文]

塚田誠之

- 2013 「もう一つの親族、“ラオトン”——チワン（壮）族とベトナム民族とのネットワークの一側面」
塚田誠之編『中国の「国境文化」の人類学的研究』2010～2012年度科学研究費補助金（基盤研究
（B））課題番号22401046 研究成果報告書, pp. 39-58, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

塚田誠之

- 2012 「中国における民族文化の資源化とポリティクスに関する中間報告」『民博通信』136: 14-15。
2013 「中国における民族文化の資源化とポリティクスの諸相」『民博通信』140: 24-25。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月4日 「総合討論」国際シンポジウム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館第4セミナー室

・共同研究

2012年11月17日 「国境地域における観光をめぐる諸問題——徳天跨国瀑布観光の事例から」『中国における民族文化の資源化とポリティクス』

◎調査活動

・国内調査

2012年6月19日—東洋文庫（戦前の海南島の情勢に関する文献調査）
2013年1月10日—国立国会図書館東京本館（戦前の海南島の情勢に関する文献調査）
2013年3月14日—東洋文庫（広西教育史等に関する文献調査）
2013年3月15日—東京大学東洋文化研究所（戦前の海南島開発政策等に関する文献調査）
2013年3月16日—国立国会図書館東京本館（戦前の広西・海南島の紀行記録に関する文献調査）

・海外調査

2012年8月13日～30日—中華人民共和国（壮（チワン）族の「国境文化」の実態調査及び漢族「屯堡人」の実態調査）
2012年11月27日～12月8日—ベトナム（ベトナムの中越国境地域におけるヌン族・タイ族の「国境文化」に関する実態調査）

◎大学院教育

・論文審査

予備審査委員（1件）

森 明子 [もり あきこ]—————教授

【学歴】 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）**【職歴】** 筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長・教授（2009）、民族文化研究部教授（2011）**【学位】** 文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】** 文化人類学 1) ヨーロッパ人類学 2) ドイツ、オーストリアの民族誌研究 3) 民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学の記述とその社会的文脈

・研究の目的

人類学の記述と社会との関わりのあり方を、政治的経済的關係を含めた歴史的な文脈のなかで検討し、社会における学問実践のあり方を問う。

具体的には、いくつかのプロジェクトとともに研究をすすめる。まず、科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」において、ベルリンの外国人集住地区の都市再生プロジェクトと保育園運動について、これを人類学研究としていかに記述するのか検討する。また、科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」において、大学研究と市民社会の関わりについてミュンヘンで約30日間の調査研究を計画している。さらに人類学的記述としての博物館展示について国際シンポジウムを開催する計画である。このほかに、すでに終了した共同研究「ソーシャル概念の再検討」の成果とりまとめ、科学研究費補助金（基盤研究（B））の成果とりまとめを行う。

・成果

- 1) 科学研究費助成事業「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」の調査研究において、70年代以降の保育園運動を中心に、資料収集とインタビュー調査をおこなった。また、中間段階での成果を6月の日本文化人類学会研究大会で発表した。
- 2) 科学研究費助成事業「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」の一環としてミュンヘンにおいて現地調査した。また、その成果を12月の共同研究で発表し、さらに、小文としても公開した。
- 3) 人類学的記述としての博物館展示に関する国際シンポジウムを3月に開催した。その成果は、次年度に『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。
- 4) 共同研究「ソーシャル概念の再検討」の成果とりまとめとして、ふたつの成果刊行のための作業をすすめた。第1は英語論文集で、1月に英語論文集を *Senri Ethnological Studies* の一巻として刊行した。第2は日本語による論文集で、編集作業が終了し出版社での作業進捗を待って次年度刊行の見込みである。
- 5) 科研費研究「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究——社会における学問実践の形」の成果の一部がイギリスの Blackwell 社刊行の図書に所収論文として刊行された。

◎出版物による業績

[編著]

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81) Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Mori, A.

2012 Japan. In R. F. Bendix and G. Hasan-Rokem (eds.) *A Companion to Folklore*, pp.211-233. Chichester, UK: Blackwell Publishing Ltd.

Mori, A.

2013 Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social: The Anthropology of Europe. In A. Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81), pp.3-14. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

森 明子

2012 「産業化とともに——一九世紀末～二〇世紀初頭のヨーロッパ」『月刊みんぱく』36(6): 6-7。

2012 「書評 石川真作著『ドイツ在住トルコ系移民の文化と地域社会』」『図書新聞』2012年8月11日版。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景⑥ 古くて新しい都市の足」『毎日新聞』12月6日夕刊。

2013 「World Watching from München 現代の民族衣装『ディルンドル』」『みんぱく e-news』140
(<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/140>)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年3月17日 'Introduction to the Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe', International Symposium, "Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe." National Museum of Ethnology, Osaka.

2013年3月17日 'Making Exhibition of European Cultures in Japan: A Case of Minpaku 2012', International Symposium, "Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe." National Museum of Ethnology, Osaka.



・共同研究会

2012年12月25日 「民俗学実践のかたち——ミュンヘン協会の変遷を事例として」国立民族学博物館共同研究会『日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで』（研究代表者：重信幸彦）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月24日 「ベルリンのキンダーラーデン運動について——1980年代から21世紀初頭へ」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

・広報・社会連携活動

2012年4月3日、5日 春の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

2012年8月7日 博学連携教員研修ワークショップ・ミュージアム解説

2012年10月25日 「ヨーロッパ展示への招待——ドイツを中心に」（学校教育協力）

2013年2月17日 「ベルリンで既製服が生まれた頃」第288回みんぱくウィークエンド・サロン

2013年2月23日 「ドイツのパン——地方の特徴、そして伝説」やっぱりヨーロッパ——春のみんぱくフォーラム・パンセミナー

・展示

新展示フォーラム 春のみんぱくフォーラム2013

・映像番組

森 明子 [監修]

電子ガイド日本語版・英語版「糸車」"Spinning Wheels"

電子ガイド日本語版・英語版「仕立て職人イダさんの生涯」"Ida's Life as a Tailor"

電子ガイド日本語版・英語版「裁縫道具」"Sewing Tools and Materials"

◎調査活動

・海外調査

2012年8月31日～10月1日ドイツ（民俗学的実践と市民社会—大学・文化行政・市民活動の社会的配置に関する日独比較に関わる現地調査）

2012年11月26日～12月15日ドイツ（21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究に関わる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学研究——ベルリン外国人集住地区の事例」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的配置に関する日独比較」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会学会誌編集委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische Anthropologie:

Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien) (ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問)

・学会の開催

2013年3月17日 国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」(国立民族学博物館)の企画・運営・発表・司会

吉本 忍 [よしもと しのお]—————教授

1948年生。【学歴】京都市立芸術大学美術学部工芸科卒(1971)、京都市立芸術大学美術専攻科修了(1973)【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手(1978)、国立民族学博物館第2研究部助教授(1990)、国立民族学博物館第5研究部助教授(1991)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1991)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(1998)【専攻・専門】民族技術、民族美術・工芸 1)全世界にわたる機織り技術の通文化的研究、2)インドネシアをはじめとする更紗や緋の染織文化研究【所属学会】民族藝術学会

【主要業績】

[単著]

吉本 忍

1996 『ジャワ更紗』東京：平凡社。

1977-78 『インドネシア染織大系(上・下巻)』京都：紫紅社。

[論文]

吉本 忍

1987 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12(2): 315-447。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の研究(継続)

・研究の目的

本研究は、1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の技術とデザインの解析をおこない、それらのうちに見いだされるジャワ更紗の技術とデザインの影響、およびその歴史的な展開をあきらかにすることをおもな目的としている。

研究対象とする原資料は、スイスのプーヴィエ・コレクションのプリント更紗の実物資料とサンプル帖であるが、本研究においては、昨年度中に撮影を完了した前記原資料のデジタル画像資料をもとに、プリント更紗の技術とデザインについて個別に検証するとともに、それらの多くに付随する文字資料の解説をおこなう。

・成果

本研究は2006年度に開始し、2010年度においては、2009年度につづいて、16,000カットに及ぶ膨大なデジタル画像の分析を継続するとともに、それらと関連する20世紀に日本で生産されていたプリント更紗の資料調査をおこなってきたが、研究は未だ終了しておらず、2013年度も分析、その他を継続する予定である。

なお、本研究は吉本 忍が研究代表者となっている科学研究費補助金(基盤研究(C)アジア、アフリカ、ヨーロッパに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究)にもとづいている。

◎調査活動

・国内調査

2013年3月13日～15日 根室市(北構コレクションの観察調査)

◎出版物による業績

[編著]

吉本 忍編著

2013 『世界の織機と織物』大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月14日 「織りの定義と織機の分類について」『手織機と織物の通文化的研究』

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2013年2月17日 「染織技術の継承に係る問題と無形文化遺産」無形文化遺産シンポジウム『アジア太平洋地域における無形文化遺産の現状と課題』アジア太平洋無形文化遺産研究センター
 - 2013年2月23日 「常呂遺跡出土の『箆』と東アジア・東南アジアの織物文化」ところ埋蔵文化財研究センター講演会、北見市常呂町公民館
 - 2013年2月24日 「アットゥシ織りと樹皮文化について」NPO法人ネットプロジェクト・オホーツククラスター湧別川流域研究会、栗原学園遠軽校舎
- ・みんぱくゼミナール
 - 2012年9月15日 「手仕事への回帰」第412回みんぱくゼミナール
- ・研究講演
 - 2012年8月19日 「白山麓の織機と東アジアの機織り文化」はたや記念館ゆめおーれ勝山
- ・広報・社会連携活動
 - 2012年10月5日 「世界の織機と織物」NPO法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
- ・展示
 - 2012年9月13日～11月27日 特別展「世界の織機と織物—織って！みて！織りのカラクリ大発見」実行委員長
- ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員
- ◎社会活動・館外活動
 - ・他機関から委嘱された委員など
文化ファッション研究機構運営委員

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[論文]

Kikusawa, R.

2003 A New View of the Proto Oceanic Pronominal System. *Oceanic Linguistics* 42(1): 161-186.

2003 Did Proto-Oceanians Cultivate *Cyrtosperma* Taro? *People and Culture in Oceania* 19: 26-54.

【受賞歴】

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——上位分岐グループ所属言語における格システムと動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的

前年度までのオーストロネシア諸語、とくに台湾域外オーストロネシア諸語（マラヨ・ポリネシア諸語）における格システムと動詞の形態法の発達に関する研究成果を基盤とし、上位分岐グループに属する言語、とくに台湾原住民諸語を中心に、これらの特徴の発達史の解明を目指す。祖語から継承された特徴と、個別の言語（もしくは言語グループ）において発達した特徴について、何を手掛かりに見分けるのかに焦点をあて、最終的にはオーストロネシア祖語における格システムおよび動詞の形態法を再建することを目標とする。なお、台湾原住民諸語に関する調査は台湾フェローシップによる助成を受けて行うものである。

・成果

- 1) Ross (2009) による台湾の諸言語の新しい系統分類における名詞化接辞の動詞接辞化仮説の妥当性について検討した。Ross は、この変化は、複数回起こったと仮定するにはあまりにも複雑であるため、オーストロネシア諸語の発達史の中でただ1回、特定の祖語においてのみみられた変化であるとするのが妥当であるとし、系統分類の基準とするにたと主張する。これに対し菊澤は、Ross は、音韻および語彙の比較再建の手法を形態統語論の特徴の比較再建にあてはめており、その前提として必要な視点が抜け落ちていることを指摘した。より具体的には、具体的な変化のメカニズムが呈示されていないこと、Ross が仮定している名詞化接辞の機能は動名詞化であり、論理的に変化の順序が成り立たないこと、さらには、形態統語論の特徴の変化はシステムの変化としてみるべきであること、したがって、driftの可能性を検討する必要があること等を示した。さらに今後、この変化のプロセスを解明していくためには、どのようなアプローチが必要かであるのかについて検討し、その結果に基づいて Ross が示したデータを試分析した。この研究は、台湾の中央研究院における調査に基づいて行い、台湾フェローシップを得て行った。その成果については、研究報告書“Verb First or Noun First? Examining “Nominalization” in the Context of the Linguistic Subgrouping of Formosan Languages”として台湾政府に提出済みである。今後はこれを出発点として、より広い台湾諸語のデータを取り込みながら、オーストロネシア諸語における動詞接辞の発達について研究を進めたい。
- 2) 言語における項構造の比較再建の手法の研究の一環として、ベルゲン大学のインドヨーロッパ諸語の比較のためのデータベースを利用しつつ、オーストロネシア諸語のデータ入力の方法について検討した。この内容については、7月の国際オーストロネシア言語学会において研究発表を行った。
- 3) オーストロネシア諸語に関する比較言語学的研究の概要について、1月のアメリカ言語学会における歴史言語学に関するワークショップにおいて口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[論文]

菊澤律子

2012 「歴史言語学で『言語』を超える——植物名称の比較と先史研究」『歴史言語学』1: 73-86.

Kikusawa, R.

2012 Standardization as Language Loss: Potentially Endangered Malagasy Languages and Their Linguistic Features. *People and Culture in Oceania* 28: 23-44.

[その他]

菊澤律子

2012 「悩ましい『系統図』という存在」『民博通信』138: 14-15.

2012 「知恵の輪が解ける瞬間」2011年度総合研究大学院大学学生セミナー実行委員チーム・セーガン編『研究者34人に聞くあなたにとって美しいものとは——美しき世界を見る34の異なる視線』pp.14-15.

2012 「CRPS とこんにちは！1 脳の不思議」『月刊みんぱく』36(12): 16-17.

2013 「CRPS とこんにちは！2 私の居場所」『月刊みんぱく』37(1): 16-17.

2013 「CRPS とこんにちは！3 『痛い』を伝える難しさ」『月刊みんぱく』37(2): 16-17.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年5月26日 「類型論的一般化と形態統語論における比較再建——オーストロネシア諸語における能格・対

格変化をめぐる』『言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味』

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年7月28日 (with Y. Osugi) 'Introducing the Sign Language and Linguistics Initiative'. "International Symposium on Signed and Spoken Linguistics (1) Description, Documentation, and Conservation". National Museum of Ethnology.

2013年2月10日 'The Application of Tree and Other Diagrams in Historical Linguistics: An Introductory Address'. International Symposium "Let's Talk about Trees". National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月19日 「インドネシア語の*-i* applicativeの発達史に関する試論」AA研共同研究プロジェクト『インドネシア諸語の記述的研究：その多様性と類似点』2012年度第1回研究会（通算第11回目）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2012年7月2日 'Identifying Cognate Structures in Austronesian Comparative Syntax'. "13th International Conference on Austronesian Linguistics". Udayana University, Bali.

2013年1月6日 'The Austronesian Language Family.' Satellite Workshop "Foundations of Historical Linguistics" The 87th LSA (Linguistic Society of America) Annual Meeting, Marriott Copley Place, Boston.

2013年1月25日 「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」2012年度学融合研究事業・公開研究報告会、総合研究大学院大学学融合センター

2013年1月26日 「オーストロネシアンの移動の軌跡をことばから探る」海域アジア研究会1月例会、国立民族学博物館

2013年1月29日 (with Y. Osugi) 'Introducing the Sign Language and Linguistics Initiative in Japan'. Asia Pacific Sign Linguistics Research and Training Program, Regional Meeting. The Chinese University of Hong Kong.

2013年2月6日 'Ergativity to Accusativity Hypothesis Revised: In response to Ball 2007'. International Conference on Oceanic Linguistics. University of Newcastle (Australia).

・研究講演

2012年9月24日 'Comparison and Reconstruction of Morphosyntactic Features: The Intersection between Typological Analysis and Historical (Comparative) Linguistics'. Typology Research Group meeting. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

2012年12月12日 'Typological Generalizations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages'. The Department of Foreign Languages and Literature, National Chi Nan University, Taiwan.

2012年12月17日 'Verb First or Noun First? Putting "nominalization" into a historical context'. Linguistic Typology Research Group meeting, Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

2012年12月19日 'From Taiwan to Oceania: Austronesian Languages and Human Dispersal in The Pacific'. National Kaohsiung University, Taiwan.

2012年12月26日 'Transitivity and Ergativity in Oceanic Languages'. The Graduate Institute of Linguistics, National Tsinghua University, Taiwan.

2013年1月17日 'From Taiwan to Oceania: Austronesian Languages and Human Dispersal in The Pacific'. English Lecture Series, The Center for Language Studies, Otaru University of Commerce.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月1日～7日—インドネシア（第12回国際オーストロネシア言語学会における研究報告および運営委員会参加）

2012年8月6日～9月10日—台湾（台湾原住民諸語の統語構造の比較および歴史的再建）

2012年9月10日～17日—アメリカ合衆国（ハワイ大学における言語の記録および保存活動の調査、手話言語学を取り組むための手法に関するプレゼンテーション、インターネット配信の方法に関する調査研究）

- 2012年 9月22日～12月31日—台湾（台湾原住民諸語の統語構造の比較および歴史的再建）
- 2013年 1月2日～9日—アメリカ合衆国（アメリカ言語学会大会参加）
- 2013年 1月28日～2月2日—香港（アジア太平洋手話研究及び研修プログラム第3回地域会議出席）
- 2013年 2月2日～2月7日—オーストラリア（第9回国際オセアニア言語学会参加）
- 2013年 2月27日～3月6日—アメリカ合衆国（言語学セミナーのインターネット配信に関する打ち合わせ）

◎大学院教育

・指導教員

副主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

「手話言語と音声言語のシンポジウム（1）『言語の記述・記録・保存』の開催」人間文化研究機構連携研究プロジェクト代表者、「国際シンポジウム『樹について考える』の開催」人間文化研究機構連携研究プロジェクト代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会理事、国際歴史言語学会（International Society for Historical Linguistics）理事、国際言語類型論学会（Association for Linguistic Typology）理事、国際オーストロネシア言語学会運営委員、第12回国際オーストロネシア言語学会専門委員、欧州リサーチ・カウンシル審査員、*Journal of Historical Syntax* 編集顧問委員、*Brill's Studies in Historical Linguistics* 編集顧問委員、*Journal of Historical Linguistics* 編集顧問委員

白川千尋 [しらかわ ちひろ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒（1990）、筑波大学大学院環境科学研究科環境科学専攻修了（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（1998）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1998）、川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科助教授（1999）、新潟大学人文学部助教授（2001）、新潟大学人文社会・教育科学系助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 1998）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

白川千尋

2005 『南太平洋における土地・観光・文化——伝統文化は誰のものか』東京：明石書店。

2001 『カスタム・メレシ——オセアニア民間医療の人類学的研究』東京：風響社。

[編著]

白川千尋・川田牧人編

2012 『呪術の人類学』京都：人文書院。

【受賞歴】

2002 第1回日本オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

国際協力ボランティアに関する文化人類学的研究

- ・研究の目的

本研究の目的は、青年海外協力隊員をはじめとする日本の国際協力ボランティアを対象として、その活動の場におけるボランティアと活動の対象となっている人々の相互交渉や感情のありようなどを分析することにより、

従来の支援概念や国際協力ボランティアに関する研究・実践の蓄積を批判的に再検討することである。また、ボランティアの活動の場における文化人類学的知見の使われ方や扱われ方に関する具体的な事例の収集と分析を行うことで、ボランティアの活動における文化人類学の位相を明らかにすることも目的とする。以上の目的にアプローチするための具体的な活動を行う際には、国立民族学博物館機関研究プロジェクト「支援の人類学」(2009～2012年度、代表者：鈴木 紀)、科学研究費補助金(基盤研究(B))「社会的包摂のための実践人類学的研究」(2011～2013年度、代表者：鈴木 紀)、科学研究費補助金(基盤研究(B))「感情と実践——開発人類学の新たな地平」(2012～2014年度、代表者：関根久雄)の経費などを活用する。

・成果

昨年度と同じく本年度も国内外での調査が本研究の主な活動の1つであった。国外調査はネパールとラオスで行った。具体的には、両国でコミュニティ・ディベロップメントに関する活動を行っている青年海外協力隊員を対象として、活動の概要、活動における問題とそれへの対応、隊員として派遣される前の研修で得た知識や情報の効用と限界などに関する聞き取りを行った。一方、国内では主に青年海外協力隊員の派遣前研修を対象として、研修の内容、研修を受講している隊員への知識や情報の教示法などに関する参与観察を行った。以上の国内外での一連の調査は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「社会的包摂のための実践人類学的研究」(2011～2013年度、代表者：鈴木 紀)と、科学研究費補助金(基盤研究(B))「感情と実践——開発人類学の新たな地平」(2012～2014年度、代表者：関根久雄)の経費を利用して行った。調査の結果、昨年度と同様に、派遣前研修では文化人類学的知見が豊富に教示されており、そのなかには現在の国際協力のあり方に対する批判的知見も少なからず含まれていること、調査対象とした隊員においてはそれらの知見が個々の活動の計画・運営・評価などに一定の影響を与えていること、隊員とその活動の対象となる人々の間には一方的な支援・被支援関係にとどまらない関係が認められることなどを把握することができた。また、それらに加えて、隊員が活動のカウンタパートたちや対象者たちとの間に信頼関係を構築してゆく過程で、感情の表出をともなう相互行為がきわめて重要な役割を果たしていることも把握することができた。以上に例示した調査結果をはじめとする本研究の成果の一端については、第46回日本文化人類学会研究大会での研究発表「青年海外協力隊をめぐる支援活動」(2012年6月23日、広島大学)や、民博共同研究『実践と感情——開発人類学の新展開』(代表者：関根久雄)での研究発表「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」(2013年2月2日、国立民族学博物館)などで取り上げた。加えて、こうした学術的な場だけにとどまらず、より実践的な場(本年度に私が担当した青年海外協力隊員を対象とした複数の研修)においても、本研究を通じて得た知見の活用と還元に取り組んだ。

◎出版物による業績

[その他]

白川千尋

2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑤ 電気のない島の電気」『毎日新聞』4月5日夕刊。

2012 「World Watching from Vientiane —— 経済成長と蚊帳」『みんなく e-news』137 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/137>)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年2月2日 「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「青年海外協力隊をめぐる支援活動」第46回日本文化人類学会研究大会、広島大学

2012年7月4日 「東南アジアにおける vector borne diseases —— デング熱とマラリアを中心に」名古屋大学環境学研究所 GCOE『地球学から基礎・臨床環境学への展開』ORT ラオス特別セミナー、名古屋大学

2012年8月4日 「KAP サーベイと文化人類学」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト『社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して』東京外国語大学本郷サテライト

2012年12月6日 ‘Malaria Control and Anthropology.’ “JICA Malaria Control Seminar.” Central Vector Borne Disease Control Office, Department of Health, Naypyidaw, Myanmar.

・研究講演

2012年6月17日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成24年度2次隊村落開発普及員隊員・普及法研修、JICA 地球ひろば

2012年7月7日 「蚊帳に見えない蚊帳のはなし」第409回国立民族学博物館友の会講演会

- 2012年 9月 9日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成24年度 3次隊村落開発普及員隊員・普及法研修、JICA 東京国際センター
- 2012年 9月28日 「青年海外協力隊員の支援活動」第23回研究者と実務者による国際協力セミナー、JICA 関西
- 2012年11月 6日 「文化人類学は国際協力に必要か？」群馬県立前橋高等学校人間社会ゼミ講演、国立民族学博物館
- 2013年 3月 3日 「医療と文化、そして現場」青年海外協力隊平成25年度 1次隊コミュニティ開発隊員・普及法研修、JICA 市ヶ谷ビル

◎調査活動

・海外調査

- 2012年 8月21日～8月28日—ネパール、タイ（青年海外協力隊員の活動と感情の相互関係に関する調査）
- 2012年10月29日～11月 4日—ラオス、タイ（青年海外協力隊員の活動と社会的包摂に関する調査）
- 2012年11月29日～12月 9日—ミャンマー（JICA ミャンマー主要感染症対策プロジェクト（マラリア対策）の活動支援）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学地域研究統合情報センター共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学的研究」（代表者：鈴木 紀）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（代表者：関根久雄）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

国際協力機構短期専門家（ミャンマー主要感染症対策プロジェクトフェーズ2・マラリア対策、医療人類学）

- ・非常勤講師

大阪大学大学院人間科学研究科「国際フィールドワーク論特講Ⅱ」、新潟大学人文学部「文化人類学特殊研究」（集中講義）

新免光比呂 [しんめん みつひろ]————— 准教授

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東欧史研究会、「宗教と社会」学会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』

24(1): 1-42。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アルバニア人の宗教と文化

・研究の目的

アルバニア人の宗教実践と民族文化の実態に関して本国アルバニアと周辺諸国における調査。

・成果

研究計画に従ってアルバニアでの調査を行い、現在の宗教実践と民族文化の実態について知見を得た。その一方、音楽文化の側面についてバルカン地域における比較を視野において研究した。成果の発表としては、研究公演の実施、みんぱくゼミナールでの講演などを行った。

◎出版物による業績

[その他]

新免光比呂

2013 コラム『『汚れなき祈り』によせて』(映画プログラム『汚れなき祈り』) pp. 22-24, マジック・アワー。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2013年1月19日 「ヨーロッパのキリスト教とファシズム—ルーマニア・レジオナル運動を中心に」 第416回
みんぱくゼミナール

・研究公演

2012年9月2日 「神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ」

◎調査活動

・国内調査

2012年4月16日～17日—静岡県(原発立地地域自治体の特殊性に関する資料収集および地域住民への聞き取り)

2012年8月4日～7日—東京都(科学研究費補助金(基盤研究(B))『ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較的综合研究』研究会)

2012年12月1日～7日—佐賀県・長崎県(日本ファシズムにおける宗教迫害の源流を明治初期のキリシタン迫害浦上四番崩れに探り、それに関する資料を現地で収集する)

2013年1月21日～25日—長崎県(キリシタン迫害に関する資料収集と調査)

2013年2月10日～10日—東京都(科研による研究会での研究発表『ルーマニア社会とマネー音楽』)

2013年2月25日～28日—熊本県(キリシタンに関する資料収集と調査)

2013年3月17日～22日—東京都(ファシズム比較研究会及びモロッコ系フランス人(ユダヤ人)への聞き取り調査)

・海外調査

2012年10月1日～25日—フランス、ルーマニア(サントリー文化財団研究助成金課題に関連するルーマニア大衆音楽の調査及びルーマニアにおける旧東欧地区における『演歌型』大衆音楽の比較研究)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1名)

・論文審査

予備審査委員(1件)

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒(1996)、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了(1999)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位修得満期退学(2005) 【職歴】日本学術振興会特別研究員PD・法政大学(2005)、法政大学社会学部兼任教員(2005)、首都大学東京非常勤講師(2006)、筑波大学非常勤講師(2007)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2008)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2013) 【学位】博士(社会人類学)

(東京都立大学 2006)、修士(社会人類学)(東京都立大学 1999)【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究
【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会

【主要業績】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

Niwa, N.

2010 Leaving their tradition behind: Development of the Lami movement in Fiji from 1949 to the 1990s.
People and Culture in Oceania 26: 81-108.

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

開発モデル村落に関する文化人類学的研究——フィジー諸島共和国の村落部を事例として

・研究の目的

本研究は、開発モデル村落の変容について文化人類学的に考察することを通じて、どのような経済開発の方法が優れていると理解されてきたのか、また、その現在における有効性について明らかにすることを目的としている。主たる事例として、オセアニアのフィジー諸島の農村部を取り上げる。

・成果

研究発表は、京都大学、国立民族学博物館開催のシンポジウム及び研究会等で行った。昨年度に引き続き、本研究課題の一部を進展させて共同研究会(「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」)を主宰することを通じて、よりオセアニアという地域研究の枠組みからの考察を行った。著作・論文は、『オセアニアと公共圏』『現代オセアニアの〈紛争〉』などの書籍で公表した。以上の課題を推進するにあたり、科学研究費補助金若手研究(B)(「オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から」)によった。

◎出版物による業績

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

丹羽典生

2012 「民族化する国家体制と離脱する人びと——フィジーのラミ運動からみる公共圏の形成」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp. 53-68, 京都：昭和堂。

2013 「フィジーにおけるクーデタの連鎖」丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』pp. 123-149, 京都：昭和堂。

2013 「〈紛争〉を考える——オセアニア現代への接近」『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』pp. 1-15, 京都：昭和堂。

[その他]

丹羽典生

2012 「フィジー」『日本大百科全書(ニッポニカ)』東京：小学館。

2012 「時事性と民族誌、そしてメラネシア問題へのアプローチ」『民博通信』137: 12-13。

- 2012 「旅・いろいろ地球人——風を求めて④ いにしへの航海者たち」『毎日新聞』7月26日夕刊。
 2012 「異聞逸聞 太平洋の島々における日本人移民の足跡」『月刊みんぱく』36(9): 20。
 2012 「旅・いろいろ地球人——鉄路叙景⑦ 南洋の陸蒸気」『毎日新聞』12月13日夕刊。
 2012 「みんぱくのオタカラ 人肉用フォーク」みんぱく e-news138 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/138otakara>)。
 2012 「カーゴカルト」世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』pp. 758-759, 東京: 丸善出版。
 2013 「フィジーの正月」『MAMOR』71: 32。

Niwa, N. (ed.)

- 2013 *Abstract of International Symposium "Cargo Cults and Contemporary Conflicts in Pacific Societies: Seeking a Path of Coexistence in the Age of Globalization"*. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年1月26日 「グローバル化における紛争と宗教的社会運動」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館
 2013年1月26日 「変革期と宗教的社会運動——先住民主体の経済開発思想への期待と変遷」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年11月17日 「オセアニアの〈紛争〉に関する比較民族誌的研究——グローバル化の中での暴力・民族対立・介入」『オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究』
 2013年2月23日 「見えない民族間通婚——フィジーにおける先住系とインド系の『婚姻』の事例から」『人類学における家族研究の新たな可能性』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年7月16日 ‘What is a Coup Culture?: Other Implication for Future Anthropological Research’ 第86回現代人類学研究会、東京大学駒場キャンパス
 2012年10月21日 「社会人類学の可能性に向けた覚え書き——オナリ神研究に着目した社会的境界への比較の視点」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究課題『地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求』共同研究会、アジアアフリカ言語文化研究所本郷サテライト
 2012年11月2日 ‘Current Pacific Islands Studies in Japan and Germany: An Overview’, International Workshop “Identifying New Topics in Fijian Studies.” 一橋大学 (with Dominik Schieder)
 2012年11月2日 ‘Expanding the Ethnography of Social Anthropology Today: A Comparative Analysis of Marriage Practices Between Indigenous Fijians and Minorities in Fiji’, International Workshop “Identifying New Topics in Fijian Studies.” 一橋大学
 2012年12月17日 「アフリカ化論再考——オセアニアから紛争を考える比較の一視点として」『現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える』国立民族学博物館
 2013年2月18日 「ヴァヌアツ移民に関する覚書——フィジーにおけるヴァヌアツ人集落の形成と現状」科学研究費補助金『太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究』研究会、京都大学品川オフィス

◎調査活動

・海外調査

- 2012年7月29日～8月21日—オーストラリア、バヌアツ (バヌアツ系移民に関する資料収集と調査研究)
 2013年3月5日～26日—イギリス・フィンランド (オセアニアの紛争と社会運動に関する史資料の収集及び聞き取り調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- AA 研共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」(研究代表者: 高倉浩樹) 共同研究員、科学研究費補助金(基盤研究(A))「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の

共存に関する人類学的研究」(研究代表者：風間計博) 研究分担者、科学研究費補助金(若手研究(B))「オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から」研究代表者

◎学会の開催

2012年12月9日 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える」(企画責任者：藤井真一) 国立民族学博物館 第5セミナー室

信田敏宏 [のぶた としひろ] ————— 准教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒(1992)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了(1995)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学(2000)【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手(2001)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手(2003)、国立民族学博物館研究戦略センター助手(2004)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授(2006)【学位】社会人類学博士(東京都立大学 2002)【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

信田敏宏

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

[論文]

信田敏宏

2004 「ドリアン・タワール村の生活世界——マレーシア、オラン・アスリ社会における階層秩序と世帯状況」『国立民族学博物館研究報告』29(2): 201-306。

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族消滅に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究では、マレーシアの先住民オラン・アスリを手がかりに、世界の諸民族が置かれている現状と比較しながら、民族消滅の可能性について研究する。具体的には、近代化・グローバル化の圧力の中で、先住民コミュニティや人びとのアイデンティティが変容していく過程や、近年になって活発に展開されている先住民運動やNGO活動などに焦点を当て、研究を進める。科学研究費補助金などの外部資金の獲得を目指す。

・成果

本研究の成果として、オラン・アスリ社会における親族システムの変容に焦点を当てた論文「親族システムの理念と実践——マレーシア、オラン・アスリ社会の母系制」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 311-330(2013年3月刊行)を発表した。

◎出版物による業績

[編著]

小池 誠・信田敏宏編

2013 『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』東京：風響社。

[論文]

信田敏宏

2013 「親族システムの理念と実践——マレーシア、オラン・アスリ社会の母系制」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 311-330。

[その他]

信田敏宏

2012 「バティンの出自と母系アダット」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp. 98-100, 東京: 時潮社。

2012 「NGO 活動が宗教の壁を越える——タイ、パキスタン、日本における支援の現場から」『民博通信』139: 12-13。

2013 「ヘビとの遭遇」『月刊みんぱく』37(1): 8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年7月22日 「問題提起：グローバル支援とは何か？」『NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

2012年12月16日 「<パブリックスケープ>という視座」『NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年11月22日 「<パブリックスケープ>の人類学——マレーシア先住民の事例」京都人類学研究会11月例会、京都大学

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

2012年11月22日 「世帯から社会を見る——フィールドワーク技術論」（1年生ゼミ、テーマシリーズ）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

東京外国語大学「東南アジア地域文化論」

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう]————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』京都: 世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪: 解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的

本年度前半には、昨年度までの研究成果をまとめた2冊の単行本を出版する。『さわっておどろく！——点字・点図がひらく世界』（共著）は、幅広い読者を対象とする触文化の概説書である。『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（編著）は、2011年10月に民博で実施した公開シンポジウムの報告書で、博物館・美術館における「さわる展示」の理論と実践事例を紹介することを狙いとしている。今年度は本館展示場に新設された「世界をさわる——感じて広がる」コーナー（探究ひろば）のキャンペーン企画として、連続講座「博物館にさわる」を担当する（6月～8月）。この内容もブックレットとして刊行する予定である。その他、「バリア・フリー」（多文化共生）という大テーマの下、アメリカ天理教、視覚障害者史に関する調査にも引き続き取り組みたい。

・成果

本年度は「世界をさわる——感じて広がる」コーナーの新設に伴い、多くのマスコミ取材を受けた。“触文化”“手学問”という新しい概念が少しずつ社会に普及していく手応えを感じている。2冊の著作『さわっておどろく！』（共著）、『さわって楽しむ博物館』（編著）の出版を通じて、これまでの私の「さわる展示」に関する実践的研究をまとめることができたのは有意義だった。6月～8月に開催した連続講座「博物館にさわる」には300名以上の参加者があり、斬新かつユニークな企画として評価された。本講座の成果は『季刊民族学』に連載中で、来年度には単行本（編著）として刊行したい。その他、アメリカ天理教、視覚障害者史についても引き続き調査、情報収集を行った。

◎出版物による業績

[編著]

廣瀬浩二郎編著

2012 『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』 東京：青弓社。

[共著]

廣瀬浩二郎・嶺重 慎

2012年 『さわっておどろく！——点字・点図がひらく世界』（岩波ジュニア新書）東京：岩波書店。

[論文]

廣瀬浩二郎

2012 「世界をさわる手法を求めて——民博の“手学問”展示コーナーがめざすもの」『視覚障害』288: 21-29（視覚障害者支援総合センター）。

2012 「語り」の宇宙へ——視覚障害者文化の復興をめざして」『科学研究費プロジェクト「障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤」公開日韓シンポジウム予稿論文集』 pp. 29-35。

[その他]

廣瀬浩二郎

2012 「語りの力」『京都新聞』6月4日朝刊。

2012 「サイエンス、コミュニケーション、アートの統合をめざして」『季刊民族学』142: 8-90。

2013 「生活さわり方運動の提唱」『季刊民族学』143: 89-94。

小山修三・廣瀬浩二郎

2012 「世界をさわる手法を求めて」『月刊みんぱく』36(7): 2-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月27日 「障害と文化」科学研究費プロジェクト『障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤』第1回研究会、京都大学

2012年9月4日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」2012年度ヒューマンインターフェース学会ワークショップ、九州大学

2012年12月15日 「瞽女の歴史と文化」科学研究費プロジェクト『障害者運動とソーシャルワークの協働と葛藤』公開日韓シンポジウム、キャンパスプラザ京都

・研究講演

2012年5月12日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」大阪府立中央図書館主催『第1回府民講座』大阪府立中央図書館

2012年6月10日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」愛媛県視覚障害者協会主催講演会、愛媛県身体障害者福祉センター

- 2012年6月17日 「さわる文化への招待」 滋賀県視覚障害者施設等連絡協議会主催講演会、ピバシティ彦根
- 2012年6月19日 「共生から共活へ」 大阪大学ボランティアサークル「フロンティア」主催講演会、大阪大学
- 2012年6月29日 「ユニバーサル・ミュージアムの試み」 大阪府高齢者大学校主催講演会、大阪市教育会館
- 2012年7月8日 「点から宇宙へ」 大東市立総合文化センター主催講演会、サーティホール
- 2012年7月27日 「世界をさわる手法を求めて」 日本視覚障害社会科教育研究会主催講演会、岐阜県立岐阜盲学校
- 2012年8月2日 「手学問の理論と実践」 全日本盲学校教育研究会主催『第87回全日本盲学校教育研究大会』基調講演、山形国際ホテル
- 2012年8月21日 「観光のユニバーサル・デザイン化をめざして」 倉敷市主催『おもてなしマイスター制度研修会』倉敷市役所
- 2012年9月18日 「視覚障害者の文化と歴史」 島根県立盲学校主催講演会、島根県立盲学校
- 2012年9月24日 「さわる文化への招待」 大阪女学院高等学校主催講演会、大阪女学院高等学校
- 2012年10月7日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」 福岡市立博物館主催講演会、福岡市立博物館
- 2012年10月8日 「さわって楽しむ美術館」 愛知県立美術館主催講演会、愛知県立美術館
- 2012年10月19日 「さわる文化とユニバーサル・ミュージアム」 大阪大学『グローバル人間学』特別講義、国立民族学博物館
- 2012年10月23日 「さわる文化への招待」 愛知県立大学『文化人類学』特別講義、愛知県立大学
- 2012年10月24日 「ユニバーサル・ミュージアムの試み」 南山大学エクステンションプログラム主催講演会、南山大学
- 2012年11月3日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」 津市ボランティア協議会主催講演会、三重県教育文化会館
- 2012年11月14日 「博物館とバリアフリー」 2012年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
- 2012年12月1日 「瞽女文化にさわる」 つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
- 2012年12月5日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 国立教育政策研究所主催『博物館学芸員専門講座』社会教育実践研究センター
- 2012年12月14日 「瞽女文化と現代」 兵庫県視覚障害者福祉協会主催講演会、兵庫県点字図書館
- 2013年1月31日 「さわって楽しむ図書館、博物館の可能性」 京都市立図書館職員研修会、京都市中央図書館
- 2013年2月2日 「ユニバーサル・ミュージアムの可能性」 NPO法人一休会主催講演会、杉並区役所
- 2013年2月27日 「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」 国立科学博物館主催講演会、筑波実験植物園
- 2013年3月13日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」 千里高等学校主催講演会、千里高等学校
- 2013年3月14日 「さわる文化への招待」 大阪教育大学附属平野高等学校主催講演会、大阪教育大学附属平野高等学校
- 2013年3月17日 「音にさわる、色にさわる、心にさわる」 キッズプラザ大阪主催ワークショップ「五感発見、暗闇探検」、キッズプラザ大阪
- 2013年3月24日 「さわって楽しむ資料館、博物館をめざして」 亀岡市文化資料館主催講演会、亀岡市文化資料館
- ・ 広報・社会連携活動
- 2012年5月2日～13日 特別展「さわっておどろく！——触覚がひらく絵画、読書の世界」監修、大阪府立中央図書館
- 2012年6月30日～8月25日 連続講座「博物館にさわる」（全6回）企画・担当
- 2012年7月4日～11日 特別展「さわる文化への招待」監修、大東市立総合文化センター市民ギャラリー
- 2012年8月5日 「さわっておどろく『手学問のすゝめ』」第264回みんなくウィークエンド・サロン
- ・ 展示
- 「日本の文化」展示新構築メンバー
- ◎ 調査活動
- ・ 国内調査
- 2012年6月15日～16日—新潟県上越市、長野市（瞽女文化に関する聞き取り調査）
- 2013年1月27日～30日—長野県栄村（秋山郷における瞽女の活動に関する調査）
- ◎ 大学院教育
- ・ 大学院ゼミでの活動
- 2012年11月8日 「“手学問”の理論と実践」（1年生ゼミ）

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

- ・非常勤講師

筑波大学理療科教員養成施設「視覚障害教育」（集中講義）、関西学院大学「障害者と人権」

山中由里子 [やまなか ゆりこ]

准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

[論文]

Yamanaka, Y.

2012 The Islamized Alexander in Chinese Geographies and Encyclopaedias. R. Stoneman, K. Erickson and I. Netton (eds.) *The Alexander Romance in Persia and the East* (Ancient Narrative Supplements 15) pp. 263-274, Groningen: Barkhuis.

【受賞歴】

2011 日本学術振興会賞

2011 日本学士院学術奨励賞

2010 島田謹二記念学藝賞

2010 日本比較文学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

- ・研究の目的

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の3つの主要な軸にまとめることができる

1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。

2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さら

に、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。

- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語り力を明らかにする。

・成果

2012年10月26日～28日にドイツのポツダムで開かれた第9回日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）において、“A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe”と題してポスター発表を行った。このために、これまでの研究で明らかになってきた中東とヨーロッパにおける驚異譚のジャンルの発展史を視覚化した比較年表のプロトタイプを作成した。今後の研究で、このプロトタイプをさらに改良し、展示などで利用できるものにしてゆく。

パリのアラブ世界研究所で開催された千夜一夜特別展の企画に協力し、図録に日本における千夜一夜について（“Le Japon et les Mille et Une Nuits”）をフランス語で寄稿した。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚嘆文学の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤B）の交付を受けている。さらに共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」とも連携している。

◎出版物による業績

[論文]

山中由里子

2012 「涙壺を求めて——ヨーロッパの聖書の東洋観とシリア派儀礼」川本皓嗣・上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』（大手前大学比較文化研究叢書8）pp.249-269, 京都：思文閣。

Yamanaka, Y.

2012 Le Japon et les Mille et Une Nuits. In Institut du monde arabe (ed.) *Les Mille et Une Nuits*, pp.238-245, Paris: Hazan.

[翻訳]

山中由里子

2013 「ゴルダン・ニコロフ『マケドニア博物館のお宝』『月刊みんぱく』37(2): 14-15。

2012 「ユーージン・オーヤン『インターカルチャー——すばらしい新世界』川本皓嗣・上垣外憲一編『比較詩学と文化の翻訳』（大手前大学比較文化研究叢書8）pp.175-201, 京都：思文閣。

[その他]

山中由里子

2012 「World Watching from Turkey アレクサンドロスが見た風景——アナトリア南部編」『みんぱく e-news』133 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/133>)。

2012 「マテマティクム——ドイツの数学博物館」『月刊みんぱく』36(10): 14-15。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景① 駅舎の優美、列車の不備」『毎日新聞』11月1日夕刊。

2013 「驚異を見る」『民博通信』140: 20-21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年3月17日 ディスカッサント、国際シンポジウム“Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe” 国立民族学博物館

・共同研究会

2012年5月26日 「驚異の媒介者としてのアレクサンドロス」『驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年10月28日 “A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe” 第9回日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）ポツダム（ドイツ）

・展示

本館展示新構築総括

・広報・社会連携活動

『月刊みんぱく』編集委員

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

2012年10月4日 「涙壺を求めて——ヨーロッパの聖書の東洋観とシーア派儀礼」（1年生ゼミ）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国際日本文化研究所共同研究「文明と身体」共同研究員、人間文化研究機構小型連携研究「画中画の世界」共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本学術振興会科学研究費委員会専門員、日本学術振興会日独先端科学シンポジウム（JGFos）Planning Group Member、日本比較文学会関西支部幹事、日本比較文学会国際活動委員会

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 助教

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2006 「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 65-83, 札幌：北海道大学出版会。

2001 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷——昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとおして」『他者像としてのアイヌ民族イメージを検証する——文化人類学におけるアイヌ民族研究の新潮流』（昭和女子大学国際文化研究所紀要6）pp. 29-42, 東京：昭和女子大学国際文化研究所。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌの工芸の変遷に関する研究

・研究の目的

昨年度に引き続き、明治～昭和初期に収集された資料を中心に、アイヌの工芸の変遷について研究を行う。アイヌがつくった生活用具等は、江戸時代から和人（本州以南の日本人）や外国人によって記録や収集品が残され、アイヌ文化が大きく変容する時代の貴重な証左となっている。これまでの素材・製作技術、文様や形状、

使用法、製作の歴史・社会的背景といった個別研究に加え、近年は資料の記録者・収集者とアイヌの人びととの関係やアイヌ文化がどのように表象されてきたかを読みとること、およびアイヌの主体性についての研究が進められつつある。今年度は、本館所蔵資料の収集過程を丹念にたどり、年代や地域、製作者などの情報の再検討をおこないながら、当時の工芸品の製作・販売状況等について明らかにしたい。

・成果

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の再検討」をスタートさせ、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料と日本民族学会附属民族学博物館（アチック・ミュージアム）旧蔵資料を中心にデータの再検討を始めた。その過程で、これまで不明とされていた原所有者／製作者等が判明したものもあり、当時の研究者らがアイヌたちからどのように民具を収集したかについて研究を進めた。経過等については、『月刊みんぱく』等に紹介した。また、アイヌ文化伝承者で彫刻家・著述家として著名な故・山本多助氏（1904-1993）の調査にも着手した。戦前から帯広や阿寒など北海道東部において、木彫品の製作販売や観光業などの先駆者として活躍した山本氏が、アイヌの民具にどのようなこだわりを持ち、どのような作品をつくっていたかが把握できた。

◎出版物による業績

[その他]

齋藤玲子

2013 「民博の北方先住民コレクションの再検討」『月刊みんぱく』37(2): 10-11.

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物⑥ 入学祝の木彫り」『毎日新聞』2月14日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年10月20日 「趣旨および民博所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料の概要説明」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』

2013年1月18日～19日 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイльта、ニヅフ資料とその付随情報に関する検証」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』

2013年2月26日 「民博所蔵の鳥居龍蔵収集アイヌ、ウイльта、ニヅフ資料について」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

・広報・社会連携活動

2012年7月24日 「国立民族学博物館の活動と資料管理」神戸女子大学『博物館実習』

2012年8月17日 「世界の夏を楽しもう！」関連ワークショップ「ステンシル版画ではがきをつくろう」解説

2012年10月7日 「アイヌの織物」第271回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年10月19日 「アイヌ民族の歴史と現在」大阪府立茨木西高等学校「教職員人権教育研修」

2012年11月29日 カムイノミ 司会・解説

2013年1月26日 特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」ギャラリートーク、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

2013年2月2日 「みんぱくコレクションを語る 明治～昭和初期の樺太資料の収集者たち」友の会講演会

2013年2月22日 「総括 博物館——博物館を愛する」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2013年2月23日 「国立民族学博物館の活動」北海学園大学『日本文化演習』

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

北海道立北方民族博物館研究協力員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

社団法人北海道アイヌ協会「アイヌ工芸品・民芸品の調査」検討委員、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」監修協力、カナダ国立美術館（National Gallery of Canada）特別展「Sakahàn: International Indigenous Art」諮問委員

・非常勤講師

神戸女子大学「多文化共生論」

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境関連研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、アメリカ人類学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

2010 『カザフの子育て——草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（ブックレット《アジアを学ぼう》⑱）東京：風響社。

[論文]

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In Yamada, Takako & Takashi Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132, Sapporo: Hokkaido University Press.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアの宗教動態と社会再編に関する人類学的研究

・研究の目的

中央アジア地域社会の再編過程においてイスラームなどの宗教がもつ意味を、歴史的動態、地域社会の分断と再編、国境を越えた移動の3つの観点から明らかにする。具体的には、カザフ社会に関する人類学データと歴史資料『トルキスタン集成』のデータを比較するほか、広くユーラシア内陸部における社会宗教動態を比較することをとおして、社会主義をへた諸宗教の再構築メカニズムを検討する。

・成果

- 1) 民博共同研究（若手）「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」の成果の中間報告として、文化人類学会分科会で「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」をオーガナイズした。
- 2) 科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子）の分担者として、アメリカ人類学会で分科会“Regime Change and Border Crossings in Modern Asia: Transnational Politics, Religion and Social Landscapes”の共同オーガナイザーを務め、Revitalizing Religion through Border Crossings in Post-socialist Spaceと題して口頭発表した。また、同科研費により、2013年3月12日から31日までの20日間、モンゴル国のウランバートル市およびバヤンウルギー県ウルギー市で、カザフ人ディアスポラにおけるイスラームの動態と共同性の再構築に関する研究資料の収集及び現地調査を行った。
- 3) カザフスタンにおける宗教的儀礼の歴史動態に関して、ヨーロッパ社会科学歴史会議の分科会“The Revelation of the Forbidden: Presentation and Self-presentations of Religions under the Pressure”で、Religious Landscape and Presentation of Muslimness: A Case Study of Kazakhstan during the Soviet and Post-Soviet Periodsと題して口頭発表した。また、京大地域研共同研究「帝政ロシアの植民地的『知』の中の中央アジア」（代表：帯谷知可）の一環として、19世紀から20世紀初頭の史料『トルキスタン集成』を中心にロシア語・カザフ語資料を読み込み、現地調査結果と照らし合わせて、「カザフ社会の近代化過程における宗教的儀礼へのまなざし——歴史資料への人類学からのアプローチ」『トルキスタン集成が示す世界』（CIAS Discussion Paper 34: 19-34）を執筆した。

◎出版物による業績

〔論文〕

藤本透子

- 2013 「カザフ社会の近代化過程における宗教的儀礼へのまなざし——歴史資料への人類学からのアプローチ」帯谷知可編『トルキスタン集成が拓く世界Ⅰ——データベース化の課題と展望、その資料としての可能性』（CIAS Discussion Paper 34）pp. 19-34, 京都: 京都大学地域研究総合情報センター。

〔その他〕

藤本透子

- 2012 「宗教が再構築されるメカニズムとは？」『民博通信』137: 26-27。
 2012 「研究フォーラム：みんなく公開講演会 ヨーロッパと日本の宗教——問いなおされる救済のかたち」『月刊みんなく』36(7): 10-11。
 2013 「大草原の小さな博物館——カザフスタンにおける博物館活動と教育活動をつなぐ試み」『月刊みんなく』37(3): 14-15。
 2013 「交錯する視点——カザフ社会の内外から伝統と近代を問う」『地域研究』13(2): 387-392。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年1月26日 「コメント——中央アジアからの視点」国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年6月9日 「越境空間におけるイスラームの再構築」『内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開』
 2012年6月9日 「社会主義をへた宗教の再構築」『内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月13日 Religious Landscape and Presentation of Muslimness: A Case Study of Kazakhstan during the Soviet and Post-Soviet Periods. Session “The Revelation of the Forbidden: Presentation and Self-presentations of Religions under the Pressure.” European Social Science History Conference, Glasgow University, Scotland, UK.
 2012年6月23日 「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」（分科会趣旨説明）日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
 2012年6月23日 「越境空間におけるイスラームの再構築——カザフ村落社会の再編過程から」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
 2012年11月17日 Revitalizing Religion through Border Crossings in Post-socialist Space: Comparative Analysis of Islam in Kazakhstan and Western Mongolia. Session “Regime Change and Border Crossings in Modern Asia: Transnational Politics, Religion and Social Landscapes.” American Anthropological Association 2012 Annual Meeting, San Francisco, USA(査読有)。

・広報・社会連携活動

- 2012年12月13日 「中央アジアの人類学——社会主義を経たイスラームの動態から考える」プレス懇談会
 2013年2月24日 「中央アジアの春の祝祭ナウルズ」第289回みんなくウィークエンド・サロン

・展示

- 文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築事前調査」館内研究員

◎調査活動

・海外調査

- 2012年4月9日～23日—ドイツ、イギリス（中央アジア・ポスト社会主義研究についての動向調査）
 2012年11月13日～20日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会年次大会参加）
 2013年3月12日～31日—モンゴル（カザフ人ディアスポラにおける共同性の再構築と宗教動態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（研究代表者：山田孝子）研究分担者、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「異宗教・異民族間コミュニケーションにおける共生の枠組と地域の複相性に関する比較研究」（研究代表者：王 柳蘭）共同研究員、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「帝政ロシアの植民地的『知』の中の中央アジア」（代表：帯谷知可）共同研究員

先端人類科学研究部

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 部長(併) 教授

1954年生。【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph.D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M.A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学 1）南インド音楽文化の研究 2）南フィリピンのゴング音楽の研究 3）北米のアジア系音楽の研究【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、Society for Asian Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) マイノリティと音楽
- 2) インド音楽・舞踏のグローバル化

・研究の目的

- 1) 国家や地域は、民族・宗教・言語・階層・カースト・ジェンダー・セクシュアリティなどによって、またはそれらの複合的な組み合わせによって分割されており、そのように分割された集団間には不均衡な力関係が存在することが多い。本研究は、その中で劣位に置かれたあらゆる集団を暫定的にマイノリティと定義し、かれらと彼らが実践する音楽・芸能の関係を具体的な事例にそって検証することを目的とする。
- 2) インドの音楽・舞踏はインド国内だけでなく、欧米・アジアのインド人コミュニティなどにおいても活発に上演されている。本課題は、インド国内外の複数地域で調査を行うことにより、これまで地域ごとに考察されてきたインド音楽・舞踏の実践を、グローバルな人的・経済的ネットワークの枠組みの中で統合的に分析することを目的とする。インド起源の音楽・舞踏が、グローバル化を背景にして、鳴り響く音響や身体の動きとそれらを支える社会関係の両面で、急激に変容している点を明らかにしたい。

・成果

- 1) 2つの事例（クリンタン音楽のフィリピン国内外における受容、沖縄移民コミュニティのエイサー）の研究を並行して進めた。①フィリピンの宗教的マイノリティであるムスリム諸集団によって伝承されてきたクリンタン音楽を軸とした映像番組“The Maranao Culture at Home and in Diaspora”（英語版、マラナオ語版）を制作した。この映画の上映会を、フィリピン大学（ディリマン校、バギオ校）およびマニラ市内のムスリム集住地域において開催し、取材国の研究者や伝統継承者たちから意見を聴取するだけでなく、マイノリティの音楽に関する通文化的な比較に関する議論を行った。フィリピンにおける上映会は科研プロジェクト「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」（代表：福岡正太）の一部として実施されたものである。また、クリンタン音楽の北米における受容に関する英文論文を刊行した。②映像番組『大阪のエイサー——思いの交わる場』を3か国（インドネシア、ネパール、日本）で上映し、その内容について議論を行った。特に、大阪市大正区における上映会では、取材現地の参加者から意見を聞くことができた。
- 2) 今年度も、昨年度に引き続き、カナダとインドにおいて現地調査を行った。カナダでは、オンタリオ州トロント市において、インド系舞踊グループ（チャンダム舞踊団、ジャナク・ケンドゥリ舞踊団）の活動について実態調査を行った（2012年8月）。メンバーへのインタビュー、リハーサル視察から、グループの活動内容、メンバーの経歴・参加動機などを調査した。また、南インド音楽・舞踊の最大のパトロンであるスリランカ系タミル人コミュニティに関する予備調査を行い、集住地域の歴史や現在の労働・生活環境に関する資料を収集した。インドでは、南インド古典音楽・舞踊の中心地であるチェンナイにおいて、インド在住の音楽家と北米在住のインド人やスリランカ系タミル人との間のネットワークについて実態調査を行った（2012年12月～2013年1月）。本研究は人間文化研究機構推進事業「現代インド地域研究」および科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」に基づいて実施したものである。また、研究成果の一部を国際学会（2012年8月、イスラエル）、国内シンポジウム（2013年1月、東京）で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

寺田吉孝

2012 「チャルメラ系楽器の歴史、分布と演奏の場——民博の音楽展示から」笹原亮二編『チャルメラを作る』（人間文化研究機構連携研究報告書）pp.40-60, 大阪：国立民族学博物館。

Terada, Y.

2012 Kulintang Music and Filipino American Identity. In Ursula Hemetek (ed.) *Music and Minorities in Ethnomusicology: Challenges and Discourses from Three Continents*, pp.75-87. Vienna: Institute of Folk Music Research and Ethnomusicology at the University of Music and Performing Arts.

[その他]

寺田吉孝

2012 「音楽がおこす小さな奇跡」総研大学生セミナー実行委員会編『研究者34人に聞く あなたにとって美しいものとは——美しき世界を見る34の異なる視線』pp.58-59。

2012 「旅・いろいろ地球人——ずらりと並べる⑥ ギターか妻か」『毎日新聞』6月14日夕刊。

2012 「私の逸品——ナーガスワラム」『月刊みんぱく』36(7): 21。

2012 「旅・いろいろ地球人——鉄路叙景⑧ インドの爽やかな朝」『毎日新聞』12月20日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年8月9日 研究発表 ‘A circulatory flow of Indian Music and Minority Nationalism’ 国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ、第7回国際大会（ツファット、イスラエル）
- 2012年10月7日 コメンテーター、日本民俗学会第64回年会、分科会『マイノリティ文化の伝承と創造——祭りを通して再生される民族（民俗）芸能』東京学芸大学
- 2012年10月31日 研究発表 ‘Eisa and Okinawan Community in Osaka, Japan.’ 北スマトラ大学（メダン、インドネシア）
- 2012年12月15日 パネリスト・司会、東洋音楽学会西日本支部定例研究会『八代妙見祭のチャルメラの復元をめぐって』国立民族学博物館
- 2013年1月4日 研究発表 ‘The Global Distribution and Performance Contexts of Double-reed Instruments’

- マドラス大学『メディアと社会』セミナーシリーズ (チェンナイ、インド)
- 2013年1月19日 パネリスト、シンポジウム『インドを奏でる人びと——その音楽受容と変容』東京音楽大学
- ・研究講演
 - 2012年7月13日 ‘Minorities in Japan: Buraku and Okinawan communities in Osaka.’ The Five College Center for East Asian Studies, 2012 Japan Study Tour, 国立民族学博物館
 - 2012年7月27日 「世界のチャルメラ、チャルメラの世界」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
 - 2012年8月4日 「『シャンカラバラナム』と南インド古典音楽」インド・クラシック映画特集、国立民族学博物館
 - 2012年12月9日 「インド舞踊の歴史と現代的展開」第279回みんぱくウィークエンド・サロン
 - ・研究公演
 - 2012年10月14日 『遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典音楽』企画、司会、解説
 - ・映像番組
 - 寺田吉孝 [監修]
 - 2012 『みんぱく映像民族誌第8集 怒——大阪浪速の太鼓集団』国立民族学博物館
 - Terada, Y. and Cadar, U. [監修]
 - 2012 『クリンタン音楽の至宝——マイモナ・カダー』(日本語)
 - 2012 Maimona Cadar: A Master Kolintang Player from the Philippines (英語)
 - 2012 Maimona Cadar: Malim sa Kakoolintang a Meranao (マラナオ語)
 - 2012 The Maranao Culture at Home and in Diaspora (英語)
 - 2012 Olaola o Meranao sa Inged a go sa Kiaparakan Kiran (マラナオ語)
 - Terada, Y. and Garfias, R. [監修]
 - 2013 Valencia’s Virgin Mary Festival and the Dolçaina (英語)
 - 2013 El Festival de la Virgen María y la Dolçaina (スペイン語)
 - [上映]
 - Drumming out a Message: Eisa and the Okinawan Diaspora in Japan (2005年制作)
 - 2012年10月31日 北スマトラ大学 (メダン、インドネシア)
 - 2012年11月23日 第2回国際民俗音楽映画祭 (カトマンズ、ネパール)
 - The Maranao Culture at Home and in Diaspora (2012年制作)
 - 2013年3月5日 フィリピン大学ディリマン校 (マニラ)
 - 2013年3月6日 キアボ・イスラム・センター (マニラ)
 - 2013年3月7日 フィリピン大学バギオ校 (バギオ)
 - 『大阪のエイサー——思いの交わる場』(2003年制作)
 - 2013年3月30日 大阪沖繩会館
 - ◎調査活動
 - ・国内調査
 - 2012年9月22日～23日—東京都代々木公園 (在日インド文化祭ナマステ・インディアの視察)
 - ・海外調査
 - 2012年8月6日～13日—イスラエル (国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ第7回国際研究大会参加)
 - 2012年8月17日～31日—アメリカ合衆国、カナダ (インド音楽・舞踊のグローバル化に関する調査)
 - 2012年10月26日～11月1日—インドネシア (論博研究者に対する研究指導)
 - 2012年11月22日～29日—ネパール (ネパールにおけるインド音楽・舞踊の調査)
 - 2012年12月26日～2013年1月6日—インド (インド音楽・舞踊のグローバル化に関する調査)
 - 2013年3月3日～9日—フィリピン (民博制作映像音響番組の社会還元に関する研究)
 - ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 副指導教員 (2人)
 - ・論文審査
 - 予備審査委員 (1件)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」研究代表者、機構連携研究「映像による芸能の人間文化資源的活用」研究分担者、科学研究費「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」研究分担者、民博共同研究「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

国際伝統音楽評議会 RILM 派遣委員、国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ理事、『アジア音楽』誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、『民族音楽学フォーラム』誌（イギリス）編集助言委員、ネパール民俗音楽映画祭国際運営委員（ネパール）、プーゲンビリヤ音楽院理事（インド）、東洋音楽学会西日本支部委員

佐々木史郎 [ささき しろう] ————— 教授

1957年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1985）、大阪大学言語文化学部助教授（1991）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）【学位】学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2）ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究【所属学会】日本文化人類学会、言語文化学会

【主要業績】

[単著]

佐々木史郎

1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（NHKブックス772）東京：日本放送出版協会。

[編著]

Sasaki, S. (ed.)

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

佐々木史郎・加藤雄三編

2011 『東アジアの民族の世界——境界地域における多文化的状況と相互認識』東京：有志舎。

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

アムール川下流域における近世から近代への転換

- ・研究の目的

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究の一部であり、各論である。今年度も昨年度に引き続き、ウデへとナーナイという特定の民族を対象にして、支配者が前近代的な中華王朝の清朝から、近代国家ロシア帝国、さらにはソ連へと交替したことによる、アムール川の先住諸民族の社会と文化の変容を、氏族、集落、個人といったより小さい単位に掘り下げていく。本年度はやはり科学研究費補助金（基盤研究（A））「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」による調査を柱に据えた研究活動を行うが、本年

度は、ナーナイやウデへの食文化における食材の種類と獲得方法、獲得場所の変化など各論部分を重点的に調査する。

・成果

本年度は、科学研究費補助金（基盤研究（A））「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」の研究プロジェクトを柱に、アムール川流域における近世から近代への転換に伴う住民の社会の変化に関する資料収集と史料分析を行った。科研のプロジェクトでは中国黒竜江省側にいるナーナイと同系統の民族とされる赫哲族の村落に関する基本的な情報を集める調査と、ロシアハバロフスク地方コンドン村での冬の氷上漁と狩猟に関する調査を行った。そしてこの科研による調査研究の全体の成果を公開するために、ロシア、ウラジオストークで、ロシア連邦極東大学とロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所を会場として国際シンポジウム「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」（2013年3月6日、7日に実施）を実施した。

科研による調査研究活動と並行して、この各個研究のテーマに関係する研究報告として、19世紀末から20世紀初頭に活躍したロシア、ソ連の民族学者L. Ya. シュテルンベルクのニヅフ研究の近代人類学における位置づけ、とりわけレヴィ＝ストロースの構造主義との関係についての以下の論考をロシア語で執筆し、それがサンクトペテルブルクでロシア科学アカデミー人類学民族学博物館が刊行した論集に掲載された。Исследование Л. Я. Штернбергом нивхского общества и структурная антропология, Резван, Е. А. от. ред. Лев Штернберг – гражданин, ученый, педагог. К 150-летию со дня рождения, СПб.: МАЭ РАН, 2012, стр.291-302. (「シュテルンベルクのニヅフ社会研究と構造人類学」E. A. レズヴァン編『市民、学者、教育者としてのレフ・シュテルンベルク——生誕150年を記念して』、サンクトペテルブルク：人類学民族学博物館、2012年、pp.291-302)。

◎出版物による業績

[論文]

佐々木史郎

2013 「近世の環オホーツク海地域南部におけるクロテン、ギンギツネの流通と狩猟方法」『北海道大学総合博物館研究報告』6: 86-102 (江田真毅・天野哲也編『環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究』)。

Sasaki, S.

2012 Исследование Л. Я. Штернбергом нивхского общества и структурная антропология, Резван, Е. А. от. ред. Лев Штернберг – гражданин, ученый, педагог. К 150 – летию со дня рождения, стр.291-302. СПб.: МАЭ РАН.

[その他]

佐々木史郎

2012 「精霊に捧げ食べる」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp.56-57, 東京：丸善出版。

2012 「春の訪れを告げるはえ縄漁」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp.60-61, 東京：丸善出版。

2012 「21世紀の民族学博物館の行方——機関研究：民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」『民博通信』13: 8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「趣旨説明：民族学資料の保存と修復」国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復：博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」）会場：奈良国立博物館・国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月6日 「趣旨説明：北東アジアの森林地域における人々の文化的適応」国際シンポジウム『北東アジアの森林地域における人々の文化的適応』（科学研究費補助金基盤研究（A）「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」）会場：ロシア極東連邦大学・ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所（ロシア、ウラジオストーク市）

・みんぱくゼミナール

2012年12月15日 第415回「樹皮舟を復元する——極東ロシアの白樺樹皮文化」

・研究講演

- 2012年10月6日 「アイヌ文化と北方世界」アイヌ文化振興・研究推進機構主催『アイヌ文化フェスティバル東京』東京国際フォーラム
- 2013年2月16日 「日本の先住民族を考える——列島文化の中のアイヌ文化」東海中学校・高等学校主催『第22回サタデープログラム土曜市民公開講座』東海中学校・高等学校
- 2013年2月17日 「鳥居龍蔵が会った北方世界——先住民族の虚像と実像」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館主催特別展『鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし』記念講演、徳島県立博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2012年5月12日～17日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する事前調査）
- 2012年6月3日～9日—ロシア（ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館における民族資料調査）
- 2012年7月4日～8日—中華人民共和国（両大戦間期におけるロシア語新聞掲載記事の調査収集）
- 2012年8月1日～12日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2012年9月9日～19日—中華人民共和国（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2012年11月29日～12月9日—ロシア（ロシア極東森林地帯における文化の環境適応に関する調査）
- 2013年3月3日～8日—ロシア（日ロ共同シンポジウム「北東アジアの森林地域における人々の文化的適応」参加）
- 2013年3月17日～23日—アメリカ合衆国（アイヌ民族資料所蔵海外博物館における所蔵資料、研究・展示等に関する実態調査及び先住民族に関する博物館先進事例調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、文化庁「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、アイヌ文化振興・研究推進機構評議委員、東北大学文学部博士論文審査委員

鈴木七美 [すずき ななみ] ————— 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）【職歴】 財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学研究所所員（2000）、国立民族学博物館共同研究員（2000）、京都文教大学人間学部助教授（2000）、京都文教大学人間学研究所兼任研究員（2001）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学人類学部客員助教授（2003）、放送大学文化人類学'04分担協力講師（2004）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、京都文教大学人間学研究所兼任研究員（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2009）【学位】 博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学 1981）【専攻・専門】 歴史人類学、医療社会史【所属学会】 日本文化人類学会、日本教育学会、日本医史学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』 京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』 東京：新曜社。

[編著]

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編

2010 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』東京：御茶の水書房。

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「ヘルシー・エイジング」とその技術開発に関する応用人類学研究

・研究の目的

高齢化する現代社会において、高齢期のウェルビーイングの基盤となる心身の健康の拡充に関わる具体的な方法に関し、情報を整理・蓄積する。また、終末期のケアとしても注目されている「オルタナティブ・メディスン」の適用に関し、実践の場への情報提供を念頭に、情報を蓄積する。さらに、エイジング研究の新しい動向に関し情報を蓄積する。

・成果

- 1) 高齢者のウェルビーイングとテクノロジーの開発について、2011年度東アジア人類学会国際会議（2011 SEAA [Society for East Asian Anthropology]）にてパネル開催した内容を精査し、アメリカ・エイジング学会（The Association of Aging & Gerontology）学会誌（American Aging Quarterly）に執筆した。Suzuki, Nanami, Creating a Community of Resilience: New Meanings of Technologies for Greater Well-being in a Depopulated Town, *Anthropology of Aging Quarterly*, Vol.33, No.3, (Special International Submission on Aging and Materiality in Japan for Special Issue: Anthropology & Aging in East Asia, Part II), pp.87-96 (2012.9)
- 2) 終末期ケアとしても注目されている「オルタナティブ・メディスン」の適用に関し、実践の場への情報提供を念頭に、情報を蓄積した。とくに、オルタナティブ・メディスンが、慢性疾患や高齢期の諸不調に適用されてきたドイツ、スイスに関し、その考え方と実践について、現地調査を念頭に、情報を蓄積すると共に、研究者・実践者のネットワークづくりを行った。これらの研究資源に基づき、2013年度以降、現地調査に着手する。
- 3) エイジング研究の新しい動向に関して情報収集を行った。地域コミュニティとの関係や多世代交流に配慮した高齢者対象住居の開発や、高齢者のライフロング・ラーニングに資する地域教育関連施設の整備をとおして、地域全体の構成を再考する動きやそのためのネットワーク形成について情報を蓄積し、実践者との共同論文（Suzuki, Nanami & Tilda Hui, Development of a Life-care Community as a “Town” Enriched with Diverse Ethnic Cultures: Focusing on the Cooperation of People Having Chinese and Japanese Cultural Background, SES）を執筆した。

◎出版物による業績

[編著]

Suzuki, N.

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Suzuki, N.

2012 Creating a Community of Resilience: New Meanings of Technologies for Greater Well-being in a Depopulated Town. *Anthropology of Aging Quarterly: The Official Publication of the Association of Aging & Gerontology* 33(3): 87-96 (Special Issue: Anthropology & Aging in East Asia, Part II).

2013 Carrying Out Care: An Exploration of Time and Space in Cooperative Life Design. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80), pp.1-19. Osaka: National Museum of Ethnology.

- 2013 A Reflection on Time and Space for Crossing Over in Life: Weaving A Story that Reverberates in the World and Outer Space. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80), pp.143-160. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

鈴木七美

- 2012 「生への関心と養生の展開」『民博通信』136: 10-11。
2013 「学融合推進センター運営委員からのメッセージ」『学融合推進センター News Letter』11: 1。
2013 「養生と共生の軌跡」『民博通信』140: 12-13。

Suzuki, N.

- 2012 “Living in a Community of Resilience: A Comparative Study on the Search for Well-being in Multicultural Aging Societies,” (Conferences), *Minpaku Anthropology Newsletter*, Number 34, 16-17.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2012年11月11日 “Heal thyself”: Care as Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America’ 国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化 (Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Life-style)』国立民族学博物館機関研究「包摂と自律の人間学」領域プロジェクト「ケアと育みの人類学」成果公開、国立民族博物館

・研究講演

- 2012年6月22日 「アーミッシュのキルト文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
2012年11月28日 「ケアと育みの人類学」国立民族学博物館みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館
2012年12月6日 「ヒーリング・オルタナティヴス——19世紀アメリカにおけるケア・自然・養生」国際理解ゼミナール、宝塚南口会館
2013年1月25日 「アーミッシュのウェルビーイングの思想とケア」兵庫県阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

- 2012年3月27日～4月10日—アメリカ合衆国（「アメリカにおけるエイジング会議」においてワークショップ「多文化的高齢化社会の文化の意味を再考」参加、アメリカの高齢化における well-being に関する資料収集及び調査）
2012年9月22日～10月11日—アメリカ合衆国（キリスト教再洗礼派の非暴力・平和主義に基づくフェアトレードの地域実践に関する現地調査）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

- 大阪地域留学生等交流推進協議会委員、総合研究大学院大学教育研究評議会評議員、総合研究大学院大学学融合推進センター運営委員会委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう] ————— 教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究科教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。

2008 『サバンナの河の民——記憶と語りのエスノグラフィ』京都：世界思想社。

2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1) アフリカ史研究、2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的

1) 2010年～2012年度の日本学術振興会のアジアアフリカ研究基盤形成事業の資金援助を受けて西アフリカのマリ共和国で考古学発掘調査を実施し、西アフリカ史研究に新たな寄与をなす。また、「世界の中のアフリカ史の再構築」が、2012～2015年度まで、同会の科学研究費補助金（基盤研究（A））に採択されたので、それを実施する。

2) 三井物産環境基金により、岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動を記録し、データとして保存する。その他、津波後の地域社会の復旧・復興のために、各地でおこなわれるまちづくりに協力する。

・成果

1) については、2012年12月に英語論文が、フランスのアフリカ関係学術誌 *Cahiers d'études africaines* に掲載された。また、アメリカのイェール大学出版会から、これまで10年にわたって実施してきたマリ国ガオ市での発掘調査に関して単行本出版の依頼を受けているので、その準備を進めた。

2) 岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動をビデオに記録し、それを活字に起こして保存した。それをもとに、中央公論新社から『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』を2013年1月に刊行した。

◎出版物による業績

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論新社。

[論文]

竹沢尚一郎

2012 「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 127-197。

2012 「移民が可能にする世界」『学鏡』109(4): 6-9。

2012 「アフリカの宗教」山折哲雄監修『宗教の事典』pp.185-194, 東京：朝倉書店。

Takezawa, S.

2012 La fête japonaise : appareil hégémonique de la cité marchande. *Techniques & Culture*. 57 (2011-2): 98-119.

Takezawa, S. and M. Cisse

2012 Discovery of the Earliest Royal Palace in Gao and Its Implications for the History of West Africa. *Cahiers d'études africaines* 208 (2012-4): 813-844.

[書評]

竹沢尚一郎

2012 「宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編著『社会統合と宗教的なもの』の書評」『宗教研究』86(1): 136-139。

[その他]

竹沢尚一郎

2012 「被災後を生きる」『月刊みんぱく』36(4): 22-23。

2012 「九州の玄関口」『食品新聞』4月。

2012 「書評へのリプライ」『宗教と社会』18: 93-95。

2013 「民族学博物館の危機」『民博通信』140: 8-9。

Takezawa, S.

2012 Living in the World after the Tsunami. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 11-12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月16日、17日 “Ethnological Museum in the 21st Century”, “Museum of Ethnology As a Hub of Contacts and Exchanges”, 機関研究「マテリアリティの人類学」国際シンポジウム、フランス人間科学館。

2013年3月24日 「博物館は東日本大震災をどう展示するか」機関研究「マテリアリティの人類学」国際シンポジウム、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「東日本大震災と人類学——人類学は被災地に対して何ができるのか」日本文化人類学会研究大会

2012年9月8日 「東日本大震災後の語り」日本宗教学会研究大会

◎調査活動

・国内調査

2012年4月8日～29日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年5月9日～18日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年5月27日～6月9日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年7月12日～31日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年8月6日～26日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年9月8日～21日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

2012年11月18日～26日一岩手県大槌町（被災後の生活再建の調査）

・海外調査

2012年10月18日～11月4日一フランス、ベルギー（アフリカ史関係の資料収集、研究者の招へいに関する討議及び国際シンポジウム準備）

2012年12月5日～27日一マリ（マリ国での学術交流と考古学発掘調査）

2013年1月1日～18日一フランス（アフリカ史に関する調査研究、機関研究によるシンポジウム参加）

2013年1月22日～2月21日一マリ、フランス（マリ国での学術交流と考古学発掘調査及びフランスでの研修調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「世界の中のアフリカ史の再構築」（2012年～2016年）研究代表者。

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

三井物産環境基金「被災の共同体から地域の復興へ」（2011年～2014年）研究代表者。

関本照夫 [せきもと てるお] ————— 特任教授

1947年生。【学歴】東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）【職歴】国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）【学位】社会学修士（東京大学 1974）【専攻・専門】仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report), Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

物質性の人類学的研究

・研究の目的

これまで行ってきたインドネシアのパティック業調査をふまえ、布の生産と消費の比較研究を通じて、モノと人の相互関係を研究する。

・成果

機関研究プロジェクト「布と人の人類学的研究」代表者として、民博主催の国際ワークショップ Living with Asian Textiles (2012.11.3)を開催し、国際シンポジウム Human Consumption of Cloth and Humans Wrapped in Clothにおいて、'Opening Remarks' および 'How Cloth Positions People in their Worlds' (2013.2.23) を発表した。さらにこれらの成果を編著書、論文として公刊準備中である。

2012年9月25日～10月4日にインドネシアに渡航し、伝統染織に関する調査を行った。

・バリ島ではプバリ財団を訪れ、インドネシア東部各地の伝統織物について調査した。その結果、各地の伝統織物生産者とプバリ財団の協力状況が明らかになった。財団が古い優れた織物を現在の生産者に見せ、生産の質について協議する状況、コストと手間を省くための新染料導入をめぐる各関係者の対応・議論の状況が明らかになった。

・ジャワ島ではジョクジャカルタ市、チレボン市を訪れ、2009年にインドネシア・パティックがユネスコ無形文化遺産に登録された以降の、パティック生産・販売の状況を調査した。パティックがユネスコ無形文化遺産に登録されたことにより、インドネシア国内にパティック消費ブームが生まれ、生産者が増える一方、価格の高騰、長期的な展望のないブーム便乗など、問題も発生していることが分かった。

◎出版物による業績

[その他]

関本照夫

2012 「今日のインドネシア・パティック産業」窪田幸子・松井 健編『アジア工芸の<現在>——工芸の人類学の基礎研究』東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター公募研究成果報告書, pp. 67-75, 東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター。

2012 「みんぱくのオタカラ 日本人が好む輪タク」みんぱく e-news 134 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/134otakara>)。

2012 「捨てるもの、捨てられないもの——国際ワークショップから」『民博通信』138: 12-13。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑥ 確かに、蟻も悪くない」『毎日新聞』10月11日夕刊。

2013 『国際ワークショップ「アジアの布と生きる」プロシーディングス』大阪：国立民族学博物館。

2013 『国際シンポジウム「布を使う人、布に包まれる身体」プロシーディングス』大阪：国立民族学博物館。

Sekimoto, T.

2012 Consuming Textiles Through Their Uses and Reuses: International Workshop, February 7-8, 2012. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14-15.

2012 Discardable and Undiscardable Textiles and Clothing, *MINPAKU Anthropology Newsletter*, 35: 1-3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年2月23日 ‘Opening Remarks’ および ‘How Cloth Positions People in their World’ 国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月11日 ‘Indonesian Batik as Second-hand Goods’, in a session “Second-hand circulations in world perspective: global transformations in the value of used goods”, organized by Ilja van Damme and Miki Sugiura, of the World Economic History Congress 2012, at Stellenbosh, South Africa.

・研究講演

2012年6月14日 「ジャワ更紗を作る女性たち」まちだ市民大学、神奈川県町田市

2012年10月19日 「ジャワ更紗を作る人たち」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

・広報・社会連携活動

2012年9月9日 「インドネシアの市場（いちば）と商人」第268回みんぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2012年7月7日～14日—南アフリカ共和国（世界経済史学会分科会「グローバルな視座からみる中古品の流通」参加）

2012年9月25日～10月4日—インドネシア（インドネシアの伝統染布バティック業関係者の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター公募共同研究「アジアの工芸の〈現在〉——工芸の人類学の基礎研究」分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、筑波大学大学院学位論文審査委員、東京大学大学院学位論文審査委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・外部評価委員、国立大学教育研究評価委員会委員

齋藤 晃 [さいとう あきら] ————— 准教授

1963年生。【学歴】京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2009 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』 京都：人文書院。

[共編]

Saito, A. et Y. Nakamura (dir.)

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響

・研究の目的

スペイン統治下のアメリカでは、広い範囲に分散する小規模な集落を西欧式の大きな町に統合する集住政策が、植民地全土で実施された。本研究は、この政策の先住民社会への長期的影響を、南米のさまざまな地域の事例の比較を通じて解明する。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較」（2010～2012年度、代表者：齋藤 晃）、および民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度、代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

7月15日から20日にかけて、ウィーン（オーストリア）のウィーン大学において、第54回国際アメリカニスト会議の一環として、「La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica」（日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果）と題する国際シンポジウムを実施した。このシンポジウムでは、数日にわたる集中的な討議を通じて、集住政策の先住民社会への効果について、通説とは異なる新たなモデルを構築することができた。8月23日と9月6日には、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、「La política de reducciones en la América española」（日本語訳：スペイン領アメリカの集住政策）と題する公開セミナーを実施した。このセミナーでは、ボリビアと米国から専門家を招聘し、最新の研究成果を報告してもらい、議論を交わした。

◎出版物による業績

[論文]

Saito, A.

2012 Cartas de misioneros de Mojos conservadas en la Biblioteca Nacional del Perú. En *Acta de las XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas*, CD-ROM, simposio 7, pp.1-9. San Ignacio de Velasco: El Comité Organizador de las XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas.

[その他]

齋藤 晃

2012 「中南米のカトリック伝道団体（修道会）」世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』pp.718-721, 東京：丸善出版。

2012 「国際共同研究の枠組みの構築——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』138: 10-11。

Saito, A.

2012 Resettlement Policy and Its Impact on Native Society in Spanish South America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年7月20日 “Las reducciones indígenas: ¿instrumento de etnocidio o espacio de etnogénesis?”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, simposio 544: La política de reducciones y sus

impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica. Viena: Universidad de Viena.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年8月9日 “Cartas de misioneros de Mojos conservadas en la Biblioteca Nacional del Perú”. XIV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas. San Ignacio de Velasco: Universidad Católica Boliviana “San Pablo” – Chiquitos.

2012年10月12日 “Usos del documento entre los indígenas en las misiones de Mojos”. Participación como expositor virtual. Primer Congreso de Historia Religiosa, Educación y Militar de Tierras Bajas de Bolivia. Villa Montes: Metanoia.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月13日～9月9日—オーストリア、ブラジル、ボリビア、ペルー（国際シンポジウム「スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果」参加、南米辺境地域の集住化とキリスト教宣教に関する資料調査、第14回国際イエズス会ミッション会議参加、機関研究の成果刊行のための会合）

2013年2月27日～3月22日—ドイツ、ポルトガル（機関研究の成果刊行のための会合、イエズス会の海外宣教に関する資料調査、科研費による研究成果刊行のための会合）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

鈴木 紀 [すずき もと] ————— 准教授

1959年生。【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】 ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）【学位】 社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】 開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1) 開発援助プロジェクト評価、2) フェアトレード、3) マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4) メキシコのナショナリズム 【所属学会】 日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、Society for Applied Anthropology

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp. 45-66, 東京：明石書店。

2008 「プロジェクトからいかに学ぶか——民族誌による教訓抽出」『国際開発研究』17(2): 45-58。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトの成果が、プロジェクト対象社会で持続、発展していくための条

件を、プロジェクトのインパクトに関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、市場取引を活用した国際開発のアプローチであるフェアトレードを研究対象とする。貿易業者とフェアトレード契約を結んだ生産者が、いかに経済的成果を拡大していくか、またフェアトレードによって生産者にどのような社会、文化的な影響が生じるかを検討する。そのためラテンアメリカ地域のフェアトレード認証を受けたカカオ生産者団体の現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」（研究代表者：鈴木 紀）による。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」を活用し、2012年7月28日から8月11日までボリビアで調査をおこなった。同国では、国際フェアトレードラベル認証機構の認証をうけているカカオ生産者団体エル・セイボを訪問し、同団体が開催した第5回有機カカオフェスティバルの様態を参与観察した。フェアトレードによる経済・社会的便益が生産者の文化的創造性に寄与していることと、生産者の世代交代の中で文化の更新が始まっていることが観察された。

前年度からの研究成果および上記の調査に関して、学会発表を2件おこなった。

- 1) 2012年6月23日「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」（単独）日本文化人類学会第46回研究大会（広島大学）
- 2) 2013年3月2日「Fair Trade Tourism: From Market-driven Ethical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens. (フェアトレード観光：市場主導の倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ)」（単独）応用人類学会第73回大会（デンバー、アメリカ合衆国）

また、これまでの研究成果を以下の出版物で公表した。

- 1) 鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの視点とジェンダーの視点』明石書店、2013年。
- 2) 鈴木 紀「国際開発における協働」鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの視点とジェンダーの視点』pp.13-35, 明石書店、2013年。
- 3) Suzuki, Motoi “Ethnographic Evaluation of a Rural Development Project for Poverty Reduction.” Utagawa, Takuo (ed.) *Social Research and Evaluation of Poverty Reduction Project*. pp.103-121. Tokyo: Harvest, 2013.

◎出版物による業績

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2013 「国際開発における協働」鈴木 紀・滝村卓司編『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』pp.13-35, 東京：明石書店。

Suzuki, M.

2013 Ethnographic Evaluation of a Rural Development Project for Poverty Reduction. Utagawa, Takuo (ed.) *Social Research and Evaluation of Poverty Reduction Project*. pp.103-121. Tokyo: Harvest.

[その他]

鈴木 紀

2012 「生きることを大切にしておく」『月刊みんぱく』36(5): 18-19。

2012 「僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia.」『社会科NAVI』1: 8。

2012 「機関研究のアウトリーチ——みんぱくワールドシネマの試み」『民博通信』138: 2-7。

2012 「少年と自転車」『社会科NAVI』2: 18-19。

2013 「みんぱくを持ち帰ろう」『月刊みんぱく』37(1): 18-19。

2013 「人類学的支援とは」『民博通信』140: 10-11。

Suzuki, M.

2012 Comments from Commentator. *STEP International Mini-Symposium Record Happiness: An Economic View*, pp.15-19. 関西大学社会的信頼システム創生センター。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年12月15日 「趣旨説明」機関研究国際ワークショップ「グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング」国立民族学博物館

・共同研究会

2012年7月22日 「グローバルな互恵性と人類学的支援」『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』

2012年10月13日 「嫉妬と妬み——メキシコの参加型農村開発のサステナビリティ（自立発展性）を巡って」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「分科会：グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ 趣旨説明」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2012年6月23日 「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2013年3月21日 “Introduction: The Anthropology of Global Supporting: How Can We Forge Reciprocal Bonds between Civil Societies?” (趣旨説明：グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか) The 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology, Denver Marriott City Center Hotel, USA.

2013年3月21日 “Fair Trade Tourism: from Market-driven Ethnical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens” (フェアトレード・ツーリズムー市場型倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ) The 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology, Denver Marriott City Center Hotel, USA.

・研究講演

2012年6月28日 「グローバルな支援とはなにか——フェアトレードの仕組み」第22回 研究者と実務者による国際協力セミナー (JICA 関西・みんぱく・阪大GLOCOL 共催)、JICA 関西

・広報・社会連携活動

2012年7月13日 「フェアトレード」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2012年10月28日 「チョコレート・ジャーニー」第43回 One Village One Earth 遊と講、西宮男女共同参加センター・ウェイブ

・映像番組

鈴木 紀・伊藤敦規 [監修]

2012 「アメリカ先住民のホピの銀細工づくり——銀板に重ねあわせる伝統」国立民族学博物館ビデオテーク

◎調査活動

・海外調査

2012年7月28日～8月11日—ボリビア (フェアトレードの社会的インパクト調査)

2012年3月27日～4月2日—アメリカ合衆国 (第72回応用人類学会参加、社会的包摂に関する文化人類学的研究についての情報収集および調査研究)

2013年3月19日～25日—アメリカ合衆国 (第73回応用人類学会の年次大会参加)

・指導教員

副指導教員 (1人)

・大学院ゼミでの活動

「研究の社会的意義——開発人類学の視点」(1年生ゼミ；テーマシリーズ)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国際開発学会常任理事 (学会誌『国際開発研究』編集長)、博士論文審査委員 (早稲田大学大学院文学研究科)

・非常勤講師

大阪大学「ボランティア論」

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計画学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）【職歴】ハーバード大学フェアバンクスセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会学科非常勤講師（2001）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）【学位】国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

[単著]

陳 天璽

2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

[編著]

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

2012 『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』東京：新曜社。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

越境時代における身分証明・パスポートの再考

・研究の目的

人が頻繁に移動する現代社会における、パスポートや在留カードなど各種の身分証明書が有する機能、そしてそれらの身分証明書の有無が個人の越境、アイデンティティ、日常生活などに与える影響について考察する。

・成果

- 1) 科学研究費助成事業「グローバル時代の国籍とパスポートに関する文化人類学」（若手研究（A））のもと、アメリカにおける重国籍の子供たちが、国籍・パスポート、そしてアイデンティティをいかに使い分けているのか、そして家族はどのような対応を行っているのかについて調査した。その研究成果は、2012年11月サンフランシスコで行われたアメリカ人類学会において発表した。
- 2) 科学研究費助成事業「東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚（離婚）移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ」（基盤研究（B））では、日本とインドネシアで遠距離生活をしている無国籍者の家族を事例として、無国籍者をめぐる結婚と離婚の問題について調査した。
- 3) 機関研究「支援の人類学」の館内メンバーとして、日本における無国籍者の支援活動について調査を行い、その成果を第46回文化人類学会、JICA・GLOCOL・民博共催のワークショップ、アメリカ実践人類学会などにおいて報告した。
- 4) 共同研究「移動と身分証明の人類学」の成果の一部として、タイのマヒドン大学で行われた国際シンポジウムにおいて無国籍者の身分証明書に関する発表を行った。また、移民政策学会において日本における無国籍者の類型に関する発表を行った。2013年2月には、小笠原返還と欧米系民の身分証明書に関する研究会を開き、当事者（欧米系島民、当時の法務省事務官など）を交えて、返還当時の身分証明の調査、発行、アイデンティティの揺れなどについて議論を行った。なお、小笠原の事例については、成果の一部を日本展示新構築に活用する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Chen, T.

- 2012 Statelessness in Japan: Management and Challenges. In C. Podhisita and K. Richter (eds.) *Journal of Population and Social Studies* 21(1): 70-81.
- 2013 Stateless or Belonging to Taiwan or PRC? Nationality and Passport of Overseas Chinese. In Tan C-Beng (ed.) *Routledge Handbook of the Chinese Diaspora*, pp.310-322. Routledge.

[その他]

陳 天璽

- 2012 「『国籍』と『人権』どちらが重要か?」『であい(全同教機関誌月刊「同和教育」)』608: 14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月24日 ‘The Stateless in Japan: Management and Policy.’ “Migrants, Minorities and Refugees: Integration and Well-being” 2nd MMC Regional Consultative Meeting, Mahidol University, Salaya, Nakhon Pathom, Thailand.
- 2012年5月14日 「移民・難民と無国籍問題」AA研共同研究会「移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2012年6月23日 「日本における無国籍者をめぐる支援活動」『グローバル支援の人類学：支援研究から人類学的支援へ』第46回日本文化人類学会、広島大学
- 2012年7月7日 ‘Being Stateless: An Anthropologist of Stateless’ “Twisted Souls, Estranged Minds: Living Anthropologically in East Asia” East Asian Anthropology Association, Chinese University of Hong Kong.
- 2012年9月29日 「国際結婚と無国籍——その原因と結果」東京大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究『東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚(離婚)移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ』東京外国語大学 アジア・アフリカ研究所
- 2012年11月15日 ‘What Does Nationality Mean to Us? Families with Multiple Nationalities between US and Japan.’ Panel Chaired by A. Takamori and S. Yamashita, Invited Session: “Hybridity in Transnational Japan: Beyond the Multi-ethnic Frame” American Anthropological Association, San Francisco.
- 2012年12月8日 「はざまに生きる人々——国籍、民族への問い」国際常民文化研究機構主催 第4回国際シンポジウム『二つのミンゾク学——多文化共生のための人類文化研究』神奈川大学
- 2013年12月15日 ‘Transnational Marriage and Stateless People.’ International Conference on Dynamics of Marriage/Divorce-related Migration in Asia, ILCAA Joint Research, Tokyo University of Foreign Studies.
- 2013年3月20日 ‘Research and Support of Stateless People: the Role of Anthropology’ in Panel Chaired by M. Suzuki, “Anthropology of Global Supporting.” Society for Applied Anthropology, Denver, USA.

・研究講演

- 2012年10月26日 「グローバルな支援とはなにか——無国籍者の支援活動」第24回研究者と実務者による国際協力セミナー、JICA 大阪・国立民族学博物館・大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)、JICA 関西
- 2012年12月9日 「世界のパスポート——パスポートの世界」、JICA 横浜海外移住資料館・財団法人千里文化財団「国立民族学博物館友の会」主催、国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA 横浜海外移住資料館。
- 2013年1月12日 「無国籍者——日本でどう暮らしているのか」一般公開ワークショップ『難民ってなんだろう——アジア・アフリカの国からはみだした人々』静岡県立大学国際関係研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター、静岡県コンベンションアーツセンター
- 2013年1月26日 「無国籍と入管行政」大阪国際行政書士入管手続き研究会、スイスホテル南海大阪
- 2013年3月13日 「日本に暮らす無国籍の人々」千里高校特別講座、大阪府立千里高校

・研究公演

2012年6月9日～10日 『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』国立民族学博物館および若松公園鉄人28号広場

・広報・社会連携活動

2012年9月29日 「僕らの国際関係論」『ニッポンのジレンマ』NHK Eテレ

2013年2月26日 「日本で暮らす無国籍たち」『ハートネットTV』NHK Eテレ

◎調査活動

・海外調査

2012年4月22日～27日—タイ（マヒドン大学にて「移民・マイノリティ・難民、統合と包摂」会議参加）

2012年7月4日～13日—中華人民共和国（香港中文大学において東アジア人類学会出席及び華僑華人の身分証明に関する調査）

2012年7月25日～8月7日—台湾（国際結婚のもとに生まれる子どもたちの国籍、言語習得、アイデンティティ調査）

2012年8月10日～25日—アメリカ合衆国（無国籍者、重国籍者に関する情報収集）

2012年11月11日～19日—アメリカ合衆国（アメリカ人類学会参加）

2012年11月21日～26日—台湾（日台エリート青年サミット会議参加及び中国展示場の新構築に関する資料収集）

2013年2月4日～10日—インドネシア（無国籍者の国際結婚、離婚に関するインタビュー調査及び資料収集）

2013年2月27日～3月7日—インドネシア、中華人民共和国（無国籍者の国際結婚・離婚における情報収集及びインドネシア華人の国際結婚に関する資料収集）

2013年3月19日～23日—アメリカ合衆国（アメリカ応用人類学会の年次大会参加）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会『東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学——結婚（離婚）移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ』共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会「移民／難民のシティズンシップ——国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践」共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

NPO 法人無国籍ネットワーク代表理事、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

・非常勤講師

同志社大学大学院「アジアの移民とディアスポラ」

研究戦略センター

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——センター長(併)教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1) カナダ・イヌイットの社会変化 2) 都市在住のイヌイットの民族誌的研究 3) 先住民による海洋資源の利用と管理【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族芸術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』 京都: 世界思想社。

[編著]

Kishigami, N. and J. Savelle (eds.)

2005 *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカにおける現代の先住民捕鯨に関する民族誌的研究

・研究の目的

アメリカ合衆国アラスカ州の北西海岸地域に居住するイヌピアットの人びとは、国際捕鯨委員会の認可のもとでホッキョククジラ猟に従事している。一方、カナダ極北地域のイヌイットやイヌビアルイットは、国際捕鯨委員会の枠外で1990年代以降にホッキョククジラ猟を復活させ、現在に至っている。本年度は、この2か国における先住民の捕鯨について下記のような調査を実施する。

- 1) アラスカ地域の現地調査は2006年から継続して実施しているが、本年は、アメリカ合衆国アラスカ州バロー村の捕鯨祭であるナルカタック祭において、祝宴や食物分配がどのように社会的に組織され、実践されているか、それらの特徴や背後にある世界観について現地調査を実施し、データを収集する。また、これまで収集してきたホッキョククジラの解体と分配に関するデータを分析し、現地に還元用の英文報告書の準備を進める。さらに捕鯨民イヌピアットに関する現代民族誌の作成のための準備を行う。
- 2) カナダにおける先住民捕鯨の実態についてヌナヴィク地域における捕鯨活動を事例として復活の経緯や準備、実施、影響、問題点などについての調査を行う。その上で、アラスカの先住民捕鯨と比較し、共通性や差異について検討を加える。

なお、本研究は、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（代表者：岸上伸啓）の一部として実施する予定である。

・成果

2012年度は、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（代表者：岸上伸啓）および2012年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「フード・セキュリティの人類学」（代表者：栗本英世・阪大）を活用して、カナダ国オタワ（2012.5.20-5.27）および米国アラスカ州バロー（2012.6.25-7.4および2013.2.4-2.17）において現地調査を実施した。

オタワでは1990年代に復活したカナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権との関係、捕鯨復活の経緯や準備、実施、影響、問題点などについて調査を行った。その結果、現在の捕鯨にはさまざまな問題が付随していることや、復活した捕鯨は生存のためというよりも、文化的および政治的により大きな意義を持つことが判明した。

バローでは、捕鯨祭「ナルカタック」における祝宴と食物分配に関する現地調査と複数の村からドラム・ダンサーや親戚、友人を招待して実施される「使者祭」に関する現地調査を実施した。「ナルカタック」祭には捕鯨の成果を村人全員に分配する社会的機能があり、「使者祭」にはアラスカ北西地域のイヌピアットやユピートの村々を横断して食料やモノを贈与したり、交換したり、友好関係を確認・維持・促進させる社会的効果があることが判明した。

ナルカタク祭については、研究ノート「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタクについて——宴会における共食と鯨肉の分配を中心に」を『国立民族学博物館研究報告』（2013年、37巻3号）から出版した。また、過去4年のバロー村での捕鯨に関する現地調査報告書として *Sharing and Distribution of Whale meat and other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA* を作成し、バロー村の関係者に提出し、研究成果を地元に戻すとともに、民博のホームページから公開した (http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/research/activity/organization/staff/kishigami/pdf/Research_Report2013.pdf)。カナダ・イヌイットの捕鯨と先住権については、論文「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ鯨の復活と先住権」を『カナダ研究年報』に投稿した。

◎出版物による業績

[翻訳]

岸上伸啓訳

2012 Ben Crow and Suresh K. Lodha 著『格差の世界地図』 (*The Atlas of Global Inequalities*) 東京: 丸善出版。

[論文]

岸上伸啓

2012 「イヌイット」山折哲雄監修、川村邦光ほか編『宗教の事典』 pp. 404-412, 東京: 朝倉書店。

2012 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタクについて——祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』 37(3): 393-419。

Kishigami, N.

2013 (Research Report) *Sharing and Distribution of Whale Meat and Other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA*. Osaka: Kishigami's Office, National Museum of Ethnology.

2013 「On Sharing of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA.」『北海道立北方民族博物館研究紀要』 22: 1-19。

2013 「What Is A Susistence Activity?: With a Special Focus on Beluga Whale Hunt by Inuit in Arctic Canada.」『人文論究』 82: 79-90。

[その他]

岸上伸啓

2012 「『格差』に関する訳者あとがき」 Ben Crow and Suresh K. Lodha 著、岸上伸啓訳『格差の世界地図』 pp. 124-125, 東京: 丸善出版。

2012 「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」日本文化人類学会第46回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会第46回研究大会発表要旨集』 p. 257, 広島: 広島大学大学院総合科学研究科。

2012 「イヌイットの暮らしをささえる——ワモンアザラシ」『月刊みんぱく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』 pp. 48-49, 東京: 丸善出版。

2012 「世界の捕鯨の歴史と現状」『食生活』 106(8): 50-53。

2012 「カナダにおけるイヌイットのホッキョククジラ鯨と先住権」日本カナダ学会第37回年次研究大会実行委員会編『日本カナダ学会第37回年次研究大会プログラム・要旨』 p. 14. 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「イエローナイフ」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 11, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「イヌイット」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 11, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「準州」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 70, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「先住民アート」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 pp. 78-79, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「ノースウエスト準州」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 pp. 103-104, 大阪: 日本カナダ学会。

2012 「バフィン島」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』 p. 108, 大阪: 日本カナダ学会。

- 2012 「ファースト・ネーションズ」日本カナダ学会カナダ豆事典編集委員会編『カナダ豆事典』p.113, 大阪: 日本カナダ学会。
- 2012 「World Watching from the Arctic 岐路に立つ先住民生存捕鯨」『みんぱく e-news』135 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/135>)
- 2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷① 北極海のクジラ料理」『毎日新聞』9月6日夕刊。
- 2012 「先住民の生活舞台——極北、北西海岸、そして都市」飯野正子・竹中 豊編『カナダを旅する37章』pp.132-139, 東京: 明石書店。
- 2012 「先住民アート——イヌイットと北西海岸先住民の美」飯野正子・竹中 豊編『カナダを旅する37章』pp.286-292, 東京: 明石書店。
- 2012 「PROJECT なぜ人は他の人にモノを与えるのか?」『民博通信』139: 16-17。
- 2013 「コラム 変わるカナダ北部に住むイヌイットの生活——民族学者岸上伸啓さんのお話」東京法令出版教育出版部編『ニュースタイル ビジュアル 地理 世界・日本』p.16, 東京: 東京法令出版。
- 2013 「シンポジウムの成果」北海道立北方民族博物館編『第27回北方民族文化シンポジウム 網走 環境変化と先住民の生業——海洋生態系における適応』pp.47-48, 網走: 北方文化振興協会。

Kishigami, N.

- 2012 The Inuit's Migration Patterns and Drastic Increase in Urban Centers of Canada. ICCS (International Council for Canadian Studies) (ed.) ICCS International Conference Abstracts/Resumes/Biographies, p.19, Ottawa: International Council for Canadian Studies.
- 2012 The Inuit's Bowhead Whale Hunt and Indigenous Rights in Canada. The Program and Summary of the 37th Annual Conference of the Japanese Association for Canadian Studies p.15, Osaka: The Japanese Association for Canadian Studies.
- 2013 Homeless Inuit of Urban Centers in Canada: Results from Montreal Research. In The Society for Applied Anthropology 2013 Program Committee(ed.) Program and Abstracts of SFAA 2013 Annual Meeting, pp.106, Denver: Society for Applied Anthropology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年5月23日 The Inuit's Migration Patterns and Drastic Increase in Urban Centers of Canada. ICCS (International Council for Canadian Studies) International Conference, University of Ottawa.
- 2012年6月23日 「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」分科会『グローバル支援の人類学』（代表者：鈴木 紀）日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
- 2012年9月13日 「カナダにおけるイヌイットのホッキョククジラ猟と先住民権」日本カナダ学会第37回年次研究大会セッションIII、関西大学
- 2012年10月14日 「全体のまとめ (concluding remarks)」第27回北方民族文化シンポジウム網走「環境変化と先住民の生業文化——海洋生態系における適応」網走市オホーツク／文化交流センター大会議室
- 2013年3月21日 “Homeless Inuit of Urban Centers in Canada: Results from Montreal Research. Paper read at the 73rd Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology”, Denver Marriott City Center Hotel, Denver, Colorado, USA.

・研究講演

- 2012年11月10日 「アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と捕鯨祭」日本文化人類学会公開シンポジウム『食と儀礼をめぐる地球の旅——先住民文化からみたシベリアとアメリカ』東北大学片平さくらホール
- 2013年2月9日 “Sharing and Distribution of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA.” Public Lecture delivered at UIC Science Center, Barrow, Alaska, USA.

◎調査活動

・海外調査

- 2012年6月25日～7月4日—アメリカ合衆国（米国アラスカ州バロー村の捕鯨祭「ナルカタック」）における祝宴と食物分配に関する調査

- 2012年 8月19日～9月3日—カナダ（ホームレスイミットの社会的包摂と自立に関する調査）
- 2013年 2月4日～17日—アメリカ合衆国（アラスカ先住民社会におけるフード・セキュリティ問題の調査）
- 2013年 3月18日～24日—アメリカ合衆国（アメリカ応用人類学会の年次大会参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論II、比較社会演習II、「先住民生存捕鯨再考——政治生態学とアクターネットワーク論の視点から」（1年生ゼミ）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

第22期日本学術会議連携会員（地域研究）、第25期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、地域研究コンソーシアム理事、民族芸術学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、大阪大学 GLOCOL 外部評価委員、東北大学東北アジア研究センタープロジェクト外部評価委員

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第1研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1) 日本の獅子舞の民俗学的研究 2) 日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究 3) 民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』pp. 273-294, 京都：思文閣出版。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西日本における島々の民俗芸能の諸相

・研究の目的

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海海域がある。そこでは古来、漁労・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が

形作られた。こうした「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。本研究では、こうした海域の島々で行われている民俗芸能を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた多様性に富む島嶼世界の民俗文化として注目し、その実態を解明する。

・成果

瀬戸内海域・天草諸島とその周辺地域・五島列島とその周辺地域などの各地の民俗芸能や祭について現地調査を行ったほか、それらの地域の民俗芸能に関する論文調査報告映像記録その他の関連資料を各地の図書館博物館資料館等において調査収集した。また、同様の多島海海域の事例として、奄美群島においても同様の研究を行った。

それらの成果は、笹原亮二「チャルメラと『民俗芸能を巡る諸相』」（国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム・人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」『チャルメラを作る』2012所収）、短編映像番組『夏日踊りを踊るシマ——徳之島井之川集落誌』作成、日本展示新構築などを通じて公開した。

本研究は、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「九州とその周辺における島の芸能の研究——開放性・自律性境界性の中の民俗文化の諸相」のほか、人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」・日本展示新構築に関わる資料収集によって実施した。

◎出版物による業績

[編著]

笹原亮二編

2012 『チャルメラを作る』国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム・人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都市立芸術大学伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」（代表：後藤静男）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

島根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」、阪南大学国際コミュニケーション学部「民俗学概説」

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈をおこなう。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B. C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金（基盤研究（S））をあてた。

・成果

2011年度から科学研究費補助金（基盤研究（S））を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、発掘の概報として欧文論文を1点発表したほか、2009年に発見された貴人墓の被葬者を含む人骨分析の欧文論文を1本、被葬者に関する和文論文1本を出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて8本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[編著]

染田秀藤・関 雄二・網野徹哉編

2012 『アンデス世界——交渉と創造の力学』、京都：世界思想社。

[論文]

関 雄二

2012 「翼を持つ女性——ペルー、パコパンバ遺跡におけるシンボリズムとイデオロギー」『共生の文化』7: 66-72, 愛知：愛知県立大学多文化共生研究所。

2012 「戦うことの意味——アンデス文明初期における戦争と世界観」染田秀藤・関 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp. 275-299, 京都：世界思想社。

2012 「遺跡管理における住民参加の意味を問う——国際協力の現場から」『平成24年度 遺跡等マネジメント研究集会（第2回）パブリックな存在としての遺跡・遺産 講演・報告資料集』pp. 6-9, 奈良：奈良文化財研究所 文化遺産部遺跡整備研究室。

Nagaoka, T., Y. Seki, W. Morita, K. Uzawa, D. A. Paredes and D. M. Chocano

2012 A case study of a high-status human skeleton from Pacopampa in Formative Period Peru. *Anatomical Science International* 87: 234-237, DOI 10.1007/s12565-011-0120-z.

[その他]

関 雄二

2012 「復興と文化遺産」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』45: 3, 東京：アムプロモーション。

2012 「南米ペルーにおける文化財としての魚食」『vesta』88: 37-39, 東京：味の素食の文化センター。

2012 「3000年ぶりの神殿間の交流」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』46: 3, 東京：アムプロモーション。

2012 「神官の墓の発見——ペルー北高地パコパンバ遺跡における権力の萌芽」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』46: 4-7, 東京：アムプロモーション。

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物⑧ 王と庶民は相身互い」『毎日新聞』2月28日夕刊。

2013 「チリバからティワナクへ——古代文明の変遷」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』pp. 204-207, 東京：明石書店。

2013 「インカ帝国の進出——年代記に残るティティカカ湖地方の創世神話」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』 pp. 208-211, 東京: 明石書店。

2013 「ティワナク遺跡」真鍋周三編『ボリビアを知るための73章 [第2版]』 pp. 212-213, 東京: 明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月19日 Yuji Seki, Diana Aleman y Daniel Morales “La doncella alada: Simbolismo e ideología en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, University of Vienna, Austria.

2012年7月19日 Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai and Yuji Seki “Arquitectura, Paisaje y Cosmovisión en el centro ceremonial Formativo de Pacopampa”. 54 Congreso Internacional de Americanistas, University of Vienna, Austria.

2012年8月21日 “Formación de la sociedad compleja y la memoria social en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú”. XX Congreso Nacional de Estudiantes de Arqueología, Universidad Nacional de Trujillo, Perú.

2012年12月1日 鶴澤和宏、関 雄二、マウロ・オールドーニェス、ディアナ・アレマン、ファン・パブロ・ビジャヌエバ「ペルー北部高地パコパンバ遺跡における偶蹄類利用」古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

2012年12月1日 関 雄二、ファン・パブロ・ビジャヌエバ「ペルー北高地パコパンバ遺跡における金製品を副葬した墓の発見」古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

2012年12月21日 「遺跡管理における住民参加の意味を問う——国際協力の現場から」奈良文化財研究所 平成24年度遺跡等マネジメント研究集会（第2回）「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、奈良文化財研究所平城宮跡資料館

2013年1月26日 「アンデス形成期社会の経済基盤と神殿建設」ワークショップ「古代文明における経済基盤と祭祀——マヤとアンデスの比較」、東京大学総合研究博物館ミュージアムホール

2013年1月27日 「アンデス文明における権力の発生——最新成果報告」公開フォーラム「古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較」、キャンパス・イノベーションセンター東京

2013年2月16日 “Simposio Internacional: Diversidad y Uniformidad en el Horizonte Medio” (国際シンポジウム: 中期ホライズンの多様性と共通性) を渡部森哉とともに組織・開催、国立民族学博物館第6セミナー室

2013年2月19日 フォーラム「古代アンデスにおける国家の成立と展開」を渡部森哉とともに組織・開催、南山大学名古屋キャンパス教室R31

2013年3月23日 「パコパンバ遺跡2012年度発掘報告」『権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築』2012年度研究会、山形大学人文学部

・広報・社会連携活動

2012年10月15日 “Patrimonio Arqueológico y Turismo Responsable”. Dirección Regional de Cultura-Cajamarca (DRCC), Sala “Kazuo Terada” – Conjunto Monumental de Belén (Jr. Belén cdra. 6), Cajamarca, Perú.

2012年10月26日 「最初のアメリカー人の足あと」国立民族学博物館公開講演会、日経ホール

2012年12月7日 「アンデスの自然と人々の暮らし」大阪府高齢者大学校

2012年12月15日 「パコパンバ遺跡2012年調査報告」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

2013年2月18日 「インカの発見——マチュ・ピチュ発見史」芦屋川カレッジ大学院、芦屋市民センター

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日—オーストリア（第54回国際アメリカニスト会議参加）

2012年7月29日～9月19日—ペルー（中央アンデス地帯における発掘調査）

2012年9月22日～10月21日—ペルー（中央アンデス地帯における発掘調査）

2013年1月4日～16日—ペルー（ペルー国アマソナス州文化局組織強化及びクエラップ地方開発プロジェクト参加）

2013年2月26日～3月17日—ペルー、エクアドル（ペルーとエクアドルの遺跡の考古学的調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（4人）

・論文審査

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本学術会議連携委員、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援検討専門分科会委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会（NPO）クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究所センターアドバイザー

◎学会の開催

2012年12月1日 古代アメリカ学会、国立民族学博物館第4セミナー室

西尾哲夫 [にしお てつお]—————副館長（研究・国際交流担当）、教授

野林厚志 [のばやし あつし]—————教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1）人間と動物との関係史、2）生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会、国際動物考古学協議会（ICAZ）

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2009 『百年來の凝視』台北：順益台湾原住民博物館（日本語／中国語）。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4): 623-679。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用

・研究の目的

本研究の目的は、1)台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）が台湾の日本統治期（1895-1945年）に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2)現在の台湾社会における民族認定の様相

とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3) 1)と2)の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。

・成果

本年度は研究計画にしたがい、台湾より原住民族の工芸作家を招聘し、民博の収蔵資料の分析を共同で行い、民族ごとによる物質文化の諸相の相違について検討を行った。具体的には、タイヤル族の工芸家とともに、民博に収蔵されている約150件の衣類資料の熟覧と詳細な分析、ならびに歴史的、民族誌的背景について文献資料を中心に検討した。資料の大半は日本統治時代に収集されたものであり、それらの形態や制作技術の変化が社会的な要因と結びついていることがいくつかの資料のデータから明らかとなった。例えば、帯状の織物の幅が日本統治時代の後半になると大きくなることや、それまでは単なる装飾紋様だと解釈されていた織紋や刺繍紋が、母親と娘への織物技術の継承時に伝えられるものであり、技術伝承が母系で伝えられていく尺度になりうるといった新たな知見が得られた。また、年度下半期には、台湾から原住民族も含めた研究者を科研費で招聘し、ワークショップを開催し、原住民族文化の歴史的形成過程に関する最新の研究の紹介とそれに関する討論を行った。これらの成果は、本館研究報告等で随時発表していく予定である。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B・海外）「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用」（課題番号22401046）と連動して行った。

◎出版物による業績

[論文]

野林厚志

2012 「『佐久間財団蕃族参考品』の収集活動』『台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用（科学研究費補助金中間報告書）』 pp. 65-119。

2013 「国立民族学博物館収蔵の平埔族資料——収集された背景と物質文化の特徴』『族群歴史文化與認同 台湾平埔原住民』（Proceedings）国立台湾歴史博物館、台南。

[その他]

野林厚志

2012 「肉食行為の研究」『月刊みんぱく』36(12): 10-11。

2012 「人間はなぜ肉食を行うのかを考える」『民博通信』139: 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年11月10日 「時空間と物質に対する人間の認識（解釈）との関係」『物質性の人類学』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月21日～22日 「国立民族学博物館収蔵の平埔族資料——収集された背景と物質文化の特徴」『族群歴史文化與認同 台湾平埔原住民国際学術検討会』国立台湾歴史博物館

・展示

本館常設展示「日本地域の文化・山のくらし」新構築

・広報・社会連携活動

2012年11月17日 「大学共同利用期間シンポジウム2012」東京国際フォーラム

2013年1月20日 「すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見」

◎調査活動

・国内調査

2012年11月19日～20日—富山県滑川市（総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査）

2012年12月17日～19日—富山県滑川市（総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査）

・海外調査

2012年4月25日～28日—台湾（奨学寄付金による研究活動（2011年度）の報告と2012年度研究活動計画に関する調査研究）

2012年8月20日～30日—台湾（「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者

の相互作用」にかかる野外調査ならびに情報収集)

2013年3月8日～13日—台湾(総合研究大学院大学学融合推進センター学融合研究事業「資源利用と環境に関する学融合的研究——狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」に関する調査)

2013年3月20日～27日—台湾(国立台湾歴史博物館特別展示「看見平埔」開幕式参加、記念国際シンポジウム参加及び国際連携展示の準備会合参加)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(1人)

・論文審査

博士論文審査委員(1件)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(基盤研究(B)海外学術)「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究:学術、制度、当事者の相互作用」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(C))「博物館空間におけるユーザー視点からの展示評価の実践的研究」研究分担者、総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「資源利用と環境に関する学融合的研究:狩猟採取から食料生産への生業の変化と社会」研究分担者

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

台湾原住民族の文化と歴史に関する研究(奨学寄付金「順益台湾原住民博物館研究賛助金」)

平井京之介 [ひらい きょうのすけ] ————— 教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒(1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了(1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了(1998)【職歴】花王株式会社本社チェーンストア部(1988)、国立民族学博物館第1研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2006)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2013)【学位】Ph. D.(ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部1998)、M. Sc.(ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部1992)【専攻・専門】社会人類学1)アジア産業労働者の人類学的研究2)ラオス仏教の人類学的研究3)コミュニティの政治人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経歴』東京:NTT出版。

[編著]

平井京之介

2012『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都:京都大学学術出版会。

[論文]

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe(ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135-160, Chiang Mai: Silkworm Books.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイ・ラオスにおける仏教僧コミュニティの民族誌的研究

・研究の目的

本研究の目的は、急速に変化の進むタイとラオスの社会において、僧コミュニティの実践と社会変容との接合

関係を明らかにすることである。僧コミュニティは一種の教育装置であり、そこには近代的言説や国家行政などが強力に作用している。こうした作用は弾圧や禁止といった形を取るだけでなく、慣習的な行為や知識との競争といった形によっても進められる。本研究は、都市化や資本主義化、消費社会化、国際化が急速に進み、人々の伝統的な価値観や生活様式が大きく揺さぶられている東南アジア大陸部において、こうした知識をめぐる競争の実態を明らかにすることを試みる。

・成果

2013年1月および2～3月に、科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動」（研究代表者：田辺繁治）の研究分担者として、タイ北部において、コミュニティ博物館の文化復興運動についての現地調査をおこなった。そして、これまでの研究成果をもとに、3月8日にチェンマイ大学社会科学部でおこなわれた国際ワークショップ「東南アジアのコミュニティ運動」において、「The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s」と題する研究発表をおこなった。また、『国立民族学博物館研究報告』にて、「タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か、寺院か？」を論文として発表した。

◎出版物による業績

[論文]

平井京之介

2013 「タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か、寺院か？」『国立民族学博物館研究報告』37(3): 281-310。

[その他]

平井京之介

2012 「威信財」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』p. 48, 東京: 弘文堂。

2012 「経済人類学」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』pp. 340-341, 東京: 弘文堂。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年3月8日 ‘The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s’, “Community Movements in South East Asia”, Chiang Mai: Faculty of Social Science, Chiang Mai University.

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2013年1月15日～24日—タイ（東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動の研究）

2013年2月10日～3月11日—タイ（東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動の研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

樫永真佐夫 [かしなが まさお] ————— 准教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会、早稲田大学文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』東京: 雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京: 雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナム、ラオスにおける黒タイの伝統文化

・研究の目的

今年度も昨年に引き続き、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当て、現地調査を基軸とする研究を継続する。今年度は、黒タイのあいだでよく知られている叙情歌『ソン・チュー・ソン・サオ』を翻訳し、黒タイの生活、伝統文化、歴史にかんする解説を付す。そのために、ベトナムとラオスにおける黒タイ村落を中心に現地調査を行い、また可能な限り各国における文献調査もおこなう。この各個研究に関連して、研究分担者として参加している科研プロジェクト（科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」研究代表者：塚田誠之）の研究を継続して実施する。そのために、グローバル化の中で黒タイ村落における暮らしぶりについて調査する。また人類学的視点からの格闘技研究のために、日本、タイ、ラオスなどで現地調査と文献調査を行う。

・成果

2012年度は、ベトナムとラオスにおける黒タイ村落を中心に現地調査と文献調査もおこなった。その成果から、『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』（雄山閣）ほか、「国境貿易と在地性——ベトナムとラオスの黒タイの事例」をはじめとする論文やエッセーを刊行した。またボクシングを中心とする格闘技の文化史的研究のために、中国北京を訪問し、『月刊みんぱく』などにエッセーを発表した。

◎出版物による業績

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡<ソン・チュー・ソン・サオ>——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

[論文]

樫永真佐夫

2013 「国境貿易と在地性——ベトナムとラオスの黒タイの事例」塚田誠之編『中国の「国境文化」の人類学的研究』（科学研究費補助金（基盤研究（B））「中国の『国境文化』の人類学的研究」成果報告書）pp. 99-112。

[その他]

樫永真佐夫

2012 「おれは最高だ！」『月刊みんぱく』36(5): 16-17。

2012 「ゴング」『月刊みんぱく』36(6): 16-17。

2012 「暴力の採点」『月刊みんぱく』36(10): 6-7。

2012 「盆地の生活と変化——ターイ族の暮らし、民族雑居」今井昭夫、岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章（第2版）』pp. 100-103, 東京：明石書店。

2012 「西北地方の町の市場」今井昭夫、岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章（第2版）』pp. 132-134, 東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2012年4月7日 「ベトナム北部山地における盆地民と山地民」第406回国立民族学博物館友の会講演会

2012年5月11日 「昆虫を食べる」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年6月22日 「こんなものも、あんなものも食べてみた」大阪成蹊女子高等学校美術・イラスト・アニメーションコース進路講演、大阪成蹊女子高等学校

2012年6月14日 「ベトナム、黒タイの村の生活と伝承」イナンナ関西支部6月例会、イナンナ関西支部主催、国立民族学博物館

2012年7月17日 「ムコはつらいよ——ベトナム、黒タイの村から」『猫町西村トークショー』、フリースペース

猫町西村

2012年12月1日 「樫永真佐夫&谷 由起子トークショー 少数民族の暮らしと手仕事」展覧会『H. P. E. 谷由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり (2012年11月14日～12月3日)』OUTBOUND (東京都武蔵野市)

・ 広報・社会連携活動

2012年7月24日 「チャン家の跡取り」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年10月14日 「ベトナム、黒タイ村落の機織り文化」第272回みんなくウィークエンドサロン

◎調査活動

・ 海外調査

2012年4月19日～22日—中華人民共和国 (国境地域のタイ族に関する資料調査および中国における格闘技動向調査)

2012年11月7日～14日—ベトナム (ベトナム西北部における国境文化の研究)

2013年2月5日～13日—ベトナム、ラオス (ラオス北部における国境文化の研究)

2013年2月12日～19日—ラオス (ラオス北部における国境文化の研究)

◎大学院教育

・ 大学院ゼミでの活動

担当授業「東南アジア文化研究演習II」

2012年12月6日 「フィールドワークと、書くこと」(テーマシリーズ)

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒 (1986)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了 (1988)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学 (1992) 【職歴】東京大学教養学部助手 (1992)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師 (1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授 (1999)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授 (2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2004)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授 (2008) 【学位】社会学修士 (東京大学大学院社会学研究科 1988) 【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会 【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[編著]

三尾 稔編

2011 『インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開』大阪：千里文化財団。

[共編]

出口 顯・三尾 稔編

2010 『人類学的比較再考』(国立民族学博物館調査報告90) 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

Mio, M.

2009 Young Men's Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh Parivar in a western Indian town. In David Gellner(ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia*, pp. 27-56. New Delhi: Sage.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・ 研究の目的

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。そこで、本年度の各個

研究においては、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第3年度目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。この研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点におけるテーマは、「現代インドの文化と宗教の動態」である。各個研究のテーマは、この大テーマに密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマの本での1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算を獲得した標本・映像音響資料収集作成プロジェクト「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」も、重要な人生儀礼である婚礼がこの地域の文化・社会変化の下でどのように変容を遂げているのかという点を映像取材を通じて研究することを目的としており、各個研究のテーマとも関連させながら映像の編集を実行する。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2012年7月から8月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して短期間の現地調査を行った。この成果は、これまで数年間の調査の成果と合わせて、2012年10月18日英国エジンバラ大学南アジア研究センターで開催された同センターのセミナーで、“Enchantment of the Past: Nature of ‘Faith through Things’ in the Worrier Spirit’s Cults of Southeastern Rajasthan.”として口頭発表し、同センターの研究者らと、この課題に関して意見交換を行った。

またインド西部の社会変化と宗教伝統の変容に関して「インド西北部」立川武藏・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 4 南アジア』（pp. 183-192, 東京: 朝倉書店, 2012年）を発表し、ラージャスターンの社会変化に関して社会構成の基盤であるカーストの動態という観点から、金基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』（東京: 明石書店, 2012年）に、3編の小論「ネットワークとしてのカースト」（同書 pp. 24-25）、「クマーワット<ラージャスターン州>——カーストの『生成』」（同書 pp. 48-58）、「ラージプート<ラージャスターン州>——『伝統』を生きる人びと」（同書 pp. 157-165）を発表した。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ1「現代インドの宗教——運動と変容」及びグループ2「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を5回開催した。報告者はこれらの国内研究会の企画立案に関与し、研究会を主宰した。また、1970年代後半から30年あまりにわたりインドの宗教祭礼、民俗芸能、生業、建造物等の文化遺産の写真撮影を続けてきた写真家 沖 守弘氏の写真および関連文書資料を本館アーカイブとして受け入れるプロジェクトを主導し、同資料の仮受け入れと内容調査、沖氏への聞き取り調査を行った。アーカイブ資料は本館に受け入れる計画であるが、内容調査や聞き取り調査にあたっては「現代インド地域研究」推進経費を活用した。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。本年度は、原稿の取りまとめ等の編集作業を進め、来年度中に刊行が開始される見込みである。また、「現代インド地域研究」ネットワークに参加する若手研究者を海外に派遣し、国際的研究ネットワークの構築を行うため日本学術振興会から「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣」事業の資金を今年度も継続して受託し（研究プロジェクト名「現代南アジア研究の国際的ネットワークの構築」）、このプロジェクトの主担当研究者として今年度も総計6名の若手研究者をインドとイギリスに長期派遣した。また、その研究成果の一環として2012年10月17日にエジンバラ大学で国際研究ワークショップ“Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia”を、また同12月21日、22日の2日間インド・ナガランド州コヒマ市において国際シンポジウム“Looking Beyond The State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”を開催した。三尾はこの2つの国際研究集会の企画立案、研究者の招聘・派遣にあたり、基調報告と司会を行った。後者のシンポジウム開催にあたっては、本館館長リーダーシップ支援経費（研究成果公開プログラム）も活用した。

文化資源プロジェクトによる標本・映像音響資料収集プロジェクト「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」においては、2011年度に実施した映像音響資料取材に基づき、長編番組1本（前編・後編で1

本)、短編番組1本の計2本の番組の制作・監修を行った。これらの番組は2013年度中に公開される予定である。

2011年度までに文化資源プロジェクトの一環として実施したインド西部の女神祭礼の変容に関する映像音響資料収集と取材の成果公開として、2012年11月8日、9日にドイツのハイデルベルク大学で開催された研究ワークショップ“Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties.”に招待されて参加し、“Transformation of Navaratri in Western India and Its Socio-political Implications.”と題して招待講演を行った。また、この映像資料収集プロジェクトの成果は、『みんなく映像民族誌第9集 インド西部の女神祭礼』として刊行された。

◎出版物による業績

[論文]

三尾 稔

2012 「インド西北部」立川武蔵・杉本良男・海津正倫編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語4 南アジア』pp.183-192, 東京: 朝倉書店。

[その他]

三尾 稔

2012 「ネットワークとしてのカースト」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.24-25, 東京: 明石書店。

2012 「クマールワット<ラージャスターン州>——カーストの『生成』」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.48-58, 東京: 明石書店。

2012 「ラーム・レワリ——カースト・アイデンティティの誇示の場」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.155-156, 東京: 明石書店。

2012 「ラージプート<ラージャスターン州>——『伝統』を生きる人びと」金 基淑編『カーストから現代インドを知るための30章』pp.157-165, 東京: 明石書店。

2012 「旅・いろいろ地球人 伝統と電灯⑦ ポンプの功罪」『毎日新聞』4月19日夕刊。

2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる① 牛糞燃料」『毎日新聞』3月7日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年10月17日 “Opening Address”, Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia. University of Edinburgh (Edinburgh, UK)

2012年12月21日 “Opening Address”, Looking Beyond The State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India. Japhu Christian College (Kohima, Nagaland, India)

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年10月18日 “Enchantment of the Past: Nature of ‘Faith through Things’ in the Worrier Spirit’s Cults of Southeastern Rajasthan.” Centre for South Asian Studies Seminar. University of Edinburgh (Edinburgh, UK)

2012年11月8日 “Transformation of Navaratri in Western India and Its Socio-political Implications.” Workshop “Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties.” University of Heidelberg (Heidelberg, Germany) 招待講演

・研究講演

2012年11月3日 「祭礼の変容を映像で見る——インド・グジャラートの女神祭礼」国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・映像番組

三尾 稔 [制作・監修]

長編番組 『ラージャスターンの結婚式』(前編・後編)

短編番組 『ウダイプルの婚礼』、『ウダイプルのホーリー祭』

みんなく映像民族誌 『第9集 インド西部の女神祭礼』

◎調査活動

・海外調査

2012年7月24日～8月13日—インド(現代インドにおける宗教の動態に関する調査)

2012年10月15日～22日—イギリス(国際研究ワークショップ参加、エジンバラ大学南アジア研究セミナー参加および資料調査)

2012年11月6日～12日ドイツ（国際研究ワークショップ参加）

2012年12月17日～26日インド（国際シンポジウム参加及びシンポジウム研究成果についての討議）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表、日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」『現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成』 主担当研究者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員

伊藤敦規 [いとう あつのり] ————— 助教

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（社会学学士）（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（社会人類学修士）（2003）、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了（2008）、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了（2009）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学（2009）【職歴】三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A:shiwi A:wan Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、日本学術振興会特別研究員PD（2009）、立教大学兼任講師（2009）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

山崎幸治・伊藤敦規編著

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

[論文]

伊藤敦規

2013 「民族誌資料の制作者名廻り調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 495-633。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 471-526。

2008 「協働作品としての『ホピ・ズニ作家展』——北米先住民の知的財産保護に向けた日本での実践」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』（みんぱく実践人類学シリーズ4）pp. 103-136, 東京: 明石書店。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的

本研究は5年計画で実施される。その目的は、第1に日本国内の博物館等が所蔵しているアメリカ先住民資料(物質文化)の来歴や情報管理や保存状況を総合的に把握することである。第2の目的は日本国内での調査結果をアメリカ先住民コミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第3の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、具体的な調査対象機関は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館(宮城)、豊島みみずく資料館(東京)、静岡市立芹沢銈介美術館(静岡)、柏木博物館(長野)、リトルワールド(愛知)、天理参考館(奈良)、国立民族学博物館(大阪)、日本郷土玩具博物館(広島)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(香川)、の9機関とする。また、資料調査対象とする民族集団は、約20のプエブロ諸民族、ナバホ、アパッチ、ヤキなどである。なお、必要な場合はアイヌ民族も対象に含める。

・成果

2012年度は、民博とA:shiwí A:wán Museum and Heritage Centerとの間で学術協定を結び、日本国内研究機関等が所蔵する米国西部先住民資料の協働調査に向けて制度固めを行った。また、本調査成果の一部は、『国立民族学博物館研究報告』37巻4号、『民博通信』139号、*MINPAKU Anthropology Newsletter* No. 35などにまとめた。海外調査時にそれらを制作者コミュニティ成員に閲覧させたところ非常に高い関心を得た。マスコミからも関心が寄せられ(『中国新聞』2013年3月29日)、結果として社会還元にも努めた。

◎出版物による業績

[論文]

伊藤敦規

2013 「民族誌資料の制作者名廻り調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 495-633。

2013 「評論・展望 研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で得られた民族誌的知見」『民博通信』139: 2-7。

[監修]

伊藤敦規

2012 『週刊 一度は行きたい世界の博物館48 世界の民族博物館——ビショップ博物館・ハード博物館・カナダ文明博物館』東京: 朝日新聞出版。

[その他]

伊藤敦規

2012 「旅・いろいろ地球人 風を求めて② 保留地から都市へ」『毎日新聞』7月12日夕刊。

2012 「異聞逸聞 走ることの理由」『月刊みんぱく』36(10): 20。

2012 Agreement of Academic Co-operation between Minpaku and the A:shiwí A:wán Museum and Heritage Center. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 12-13.

2013 「旅・いろいろ地球人 贈り物④ 祈りの羽根」『毎日新聞』1月31日夕刊。

2013 「コレクション再発見⑥——カチナ人形(日本郷土玩具博物館)」『中国新聞』3月29日13面。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2013年2月18日 「民族誌資料情報のデジタル共有——ズニ博物館によるフォーラム型データベース構築の取組」『交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ』

・みんぱく研究懇談会

2012年6月27日 「民族学博物館とソース・コミュニティとの標本資料情報協働管理について」第240回研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月22日 「協働展示実践が顕在化させる主客不可分状況について」東北大学東北アジア研究センター共同研究会『協働による展示実践を通した人類学方法論の探求』(代表: 高倉浩樹) 2012年度第1回研究会、広島YMCA学園

2012年6月23日 「協働展示実践が顕在化させる主客不可分状況について」第46回日本文化人類学会研究大会(代表: 高倉浩樹) 分科会『展示による社会的関与は人類学に何をもたらすか——日本・ロシア・北米の先住民調査研究の視座から』広島大学

2012年11月2日 「民族学資料の利用に関する著作権処理と孤児著作物化防止のプロセスについて」地域研究コ

ンソーシウム運営委員研究会、北海道大学スラブ研究センター小会議場

・展示

2012年5月29日 “Report on Minpaku and Hopi Relationship: Collection in 2010 and Renewal Event in 2012”, Shungopavi Community Center, Second Mesa, AZ.

・映像番組

2012 『アメリカ先住民ホピの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』国立民族学博物館ビデオテーク

2013 『米国南西部先住民の宝飾品制作場の変遷』国立民族学博物館電子ガイド

2013 『ホピのホールマーク』国立民族学博物館電子ガイド

2013 『宝飾品制作の技法』国立民族学博物館電子ガイド

・広報・社会連携活動

2012年11月20日 「民族学資料を文化的に活かすために——ソースコミュニティとの協働資料管理」北海道アイヌ協会・国立民族学博物館、第2回研修生講義、国立民族学博物館。

◎調査活動

・海外調査

2012年4月12日～23日—アメリカ合衆国（ズニ博物館で開催されるワークショップ参加、ソーシャルダンスに関する聞き取り調査および民族学資料の情報管理に関する研究）

2012年5月24日～6月7日—アメリカ合衆国（在アメリカ合衆国南西部の先住民博物館等文化施設の調査および博物館資料情報の協働カタログ制作調査）

2013年2月28日～3月7日—アメリカ合衆国（ハード博物館での博物館資料情報の協働カタログ制作に関する調査）

2013年3月21日～31日—アメリカ合衆国（ズニ博物館などでの博物館資料情報の協働カタログ制作に関する調査）

小川 さやか [おがわ さやか]————— 助教

1978年生。【学歴】信州大学人文学部人間情報学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD（2007）、京都光華女子大学非常勤講師（2009）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2009）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、京都精華大学非常勤講師（2010）、甲南大学非常勤講師（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2009）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2007）【専攻・専門】アフリカ地域研究、文化人類学、都市研究【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

小川 さやか

2011 『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチングの民族誌』京都：世界思想社。

[論文]

小川 さやか

2012 「もう一つの使い捨て文化——東アフリカにおける古着の流通・消費」『アスティオン』（サントリー文化財団）77: 116-133。

2012 「タンザニア都市零細商人の瀬戸際の狡知——ウソと時間をめぐる一考察」『歴史と民俗』（神奈川大学常民文化研究所論集28 特集「騙り——不幸なる芸術」）pp. 97-125, 東京：平凡社。

【受賞歴】

2011 第33回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究

・研究の目的

アフリカでは、衣料品や家電製品をはじめ輸入消費財の多くを先進諸国からの中古品でまかかってきた。近年では、アジア製の非正規品が中古品と市場を二分するようになった。これらの中古品・非正規品は、日本をふくむ先進諸国の消費文化（使い捨て文化や、イメージや記号の消費にもとづく消費文化）とふかく関連して生みだされた特別な商品である。本研究の目的は、欧米やアジア諸国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、東アフリカ諸国間で越境交易で循環し消費される過程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を、現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指している。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B））の助成を受けて実施する。

・成果

『民博通信』および学術雑誌『アスティオン』（サントリー文化財団）に古着の流通のしくみとアフリカにおける古着の消費について考察した小論を提出した。また、アジア経済研究所の研究会『発展途上国とリユース』報告書（小島道一・福西隆弘編・アジア経済研究所、2013年3月）に、タンザニアの消費者による中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の購買行動を、両製品の品質面や供給システムの違いに着目して比較分析した論文を発表した。また国際学会・シンポジウム等での発表として、7月に南アフリカで開かれた世界史学会において「セカンド・ハンド品の歴史」に関する分科会をおこない、中古衣料品の流通システムの変容について発表したほか、2月に国立民族学博物館において国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト『布と人間の人類学的研究』（代表：関本照夫））において、アフリカにおける中古衣料品と非正規品（ぱちもん）の流通・消費に関する研究発表をおこなった。そのほかに、2012年10月より、民博共同研究会（若手）『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』の研究代表者を務め、消費文化の人類学的な研究の新たな可能性を模索している。

◎出版物による業績

[論文]

小川さやか

2012 「もう一つの使い捨て文化——東アフリカにおける古着の流通・消費」『アスティオン』（サントリー文化財団）77: 116-133。

[その他]

小川さやか

2012 書評「上半期の収穫から」『週刊読書人』7月27日。

2012 「使い捨て文化の裏側から新たな消費文化論へ——アフリカにおける中古品・非正規品の流通・消費から」『民博通信』137: 1-10。

2013 「第3章タンザニアにおける衣料品の消費行動に関する考察——中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の供給システムの違いに着目して」小島道一・福西隆弘編『「国際リユースと発展途上国」調査研究報告書』pp. 35-53, 千葉: アジア経済研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年2月23日 「古着とぱちもんの消費に見るタンザニアの現代消費文化」国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト「布と人間の人類学的研究」（代表：関本照夫））、国立民族学博物館

・共同研究会

2012年12月23日 「(趣旨説明) 現代消費文化をめぐる人類学的研究」『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

2013年2月16日 「現代消費文化をめぐる人類学的アプローチの検討——消費社会論との違いに着目して」「非正規品の世界からみる現代アフリカの消費文化」『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年5月26日 「政治のストリート化とストリートの政治化」日本アフリカ学会第49回学術大会、国立民族学博物館

2012年6月8日 「瀬戸際の狡知とウジャンジャ——タンザニアの都市零細商人マチングの商実践を事例に」第

61回神戸人類学研究会、神戸大学

- 2012年 6月25日 「ばちもんの世界からみる現代アフリカの消費文化」京都人類学研究会 6月例会、京都大学
2012年 6月30日 「都市世界の流動性・匿名性を捉える——タンザニアでの調査を事例に」2012年度海外学術調査フォーラム『フィールドで「採る」——フィールドサイエンスの可能性』東京外国語大学
2012年 7月11日 ‘Trans-Border Trade of Second-hand Clothing in East Africa.’ “World Economic History Congress”, Stellenbosch, South Africa.

・研究講演

- 2012年 4月20日 「タンザニアの零細商人マチングの研究から」高齢者大学研究フォーラム『タンザニア』、大阪
2012年 8月24日 「逞しきタンザニアの路上商人」『廿日会』益田市の企業家の集まり（島根）
2012年11月16日 「異文化にみるコミュニティ結合原理」『21世紀文明研究セミナー』ひょうご震災記念21世紀研究機構

・広報・社会連携活動

- 2012年 5月19日 「逞しき路上商人」『ラジオ深夜便』NHK 大阪放送局
2012年 5月26日 「アフリカの都市」『茂山童司のおとぎの暇』大阪 ABC ラジオ放送局
2012年 8月20日 「アフリカ都市の恐怖体験」『夏休み企画』国立民族学博物館
2012年 8月21日 「働くって何?」『夏休みこども企画』国立民族学博物館
2013年 1月27日 「路上空間は誰のもの?——路上商人による暴動を事例に」第285回ウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

- 2012年 7月7日～14日—南アフリカ共和国（世界経済史学会分科会「グローバルな視座からみる中古品の流通」参加）
2012年 9月6日～23日—タンザニア、ケニア、ウガンダ（東アフリカにおける中古品および非正規品の消費行動に関する調査）
2013年 3月17日～20日—中華人民共和国（中国におけるアフリカ人街の形成とアフリカ系商人による商品買い付けの調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「交錯する態度への民族誌的接近——一連結符人類学の再考、そしてその先へ」（研究代表者：岩佐光広）共同研究員、国立民族学博物館共同研究若手「現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」（研究代表者：岸上伸啓）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

アジア経済研究所研究会「国際リユースと発展途上国」委員

・非常勤講師

甲南大学「アフリカ研究」、神戸大学「開発運営論特論」（集中講義）

・学会の開催

2012年 5月26日 日本アフリカ学会大49回学術大会

文化資源研究センター

朝倉敏夫 [あさくら としお]————— センター長(併) 教授

1950年生。【学歴】武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1988）、

国立民族学博物館第1研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010）【学位】政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977）【専攻・専門】社会人類学、韓国社会論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

[単著]

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化1 韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

[共編]

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

海外コリアンの人類学的研究

・研究の目的

海外に居住する韓国人は700万人を数えるが、なかでも日本、中国、沿海州、サハリンといった東アジア地域には、20世紀以前から移住したオールドカマーズとともに、近年に韓国から移住したニューカマーズが生活している。また、近年はベトナム、タイをはじめ東南アジア地域にも、韓国人が多く移住している。これらの海外コリアンの生活文化を比較研究するための基礎的資料を収集し、それらを分析していきたい

2009年度から「東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究」（代表：朝倉敏夫）という研究課題で科学研究費補助金の交付を受けている。今年度は最終年度であり、韓国、サハリン、ベトナムなどで補充の現地調査を行い、成果を公開していく。

・成果

今年度は、韓国、中国昆明において調査を行った。また、これまでの研究の中間報告として科学研究費補助金の一部を利用して、韓国において外部出版した。

아사쿠라 도시오・오타 심페이 엮음 『한민족 해외동포의 현주소——단사자와 일본 연구자의 목소리』학연문화사, 2012년（朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』、学研文化社、2012年）である。

◎出版物による業績

[編著]

朝倉敏夫編

2012 『火と食』（食の文化フォーラム30）東京：ドメス出版。

朝倉敏夫・太田心平編著

2012 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』ソウル：学研文化社（韓国語）。

[論文]

朝倉敏夫

2012 「はじめに」朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 5-8, ソウル：学研文化社（韓国語）。

2012 「日本から見た海外コリアン」朝倉敏夫・太田心平編著 『韓民族海外同胞の現住所——当事者と日本の研究者の声』 pp. 11-27, ソウル：学研文化社（韓国語）。

2012 「『火と食』のフォーラムに向けて」朝倉敏夫編 『火と食』（食の文化フォーラム30） pp. 9-18, 東京：ドメス出版。

2012 「火と食を考える」朝倉敏夫編 『火と食』（食の文化フォーラム30） pp. 195-219, 東京：ドメス出版。

2012 「あとがき」朝倉敏夫編『火と食』（食の文化フォーラム30）pp.267-275, 東京：ドメス出版。

[監修]

朝倉敏夫

2012 NHK 韓国ドラマ・ガイド『王女の男』東京：NHK 出版。

[編集協力]

朝倉敏夫

2013 NHK 韓国ドラマ・ガイド『太陽を抱く月』東京：NHK 出版。

[その他]

朝倉敏夫

2012 「二兎を追う」『民博通信』137: 10-11

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑧ おかずはないけど」『毎日新聞』10月25日夕刊。

2012 「韓流時代劇に見る『薬食同源』」『食物と健康』156: 3-5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2012年4月21日 「サハリンのキムチ」第407回みんぱくゼミナール

・研究講演

2012年8月8日 「日韓比較文化——食を通して」第5回教職員韓国文化研修、大阪韓国文化院

2012年9月13日 「日韓比較文化考——義理・人情を中心に」洋書協会

2012年10月6日 「한국인의 생활문화와 정체성——식과 정을 키워드로 해서」韓国円光デジタル大学

2012年11月22日 「민족학에서 김치를 생각한다」韓国慶熙大学

2012年12月14日 「食から見る韓国：Identity, Acculturation, Nationalism, Globalization, etc.」『朝鮮半島問題研究会』富山大学

2013年2月3日 「韓国の生活文化と色」金沢21世紀美術館

・広報・社会連携活動

2012年4月27日 「韓国の食文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年5月13日 「『済州島の民家』の調査と模型」第253回みんぱくウィークエンド・サロン

2012年8月7日 「『すごろく教材』で異文化理解」（恵庭市立若草小学校：東峰宏紀、中部大学：宇治谷 恵、国立民族学博物館：朝倉敏夫）博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく『学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする』

2012年8月10日 「韓国人の消夏法」『世界の夏を楽しもう！』真夏サロン

2012年9月20日 「ようこそ、みんぱくへ！——モノの見方」智辯学園奈良カレッジ中学部

2013年1月20日 「漢字語は日本と韓国では同じ？ちがう？」『すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見』吹田にぎわい観光協会

2013年3月25日 「みんぱくの国際理解教育の概要」大阪府教職員組合ルーツネット学習会

◎調査活動

・海外調査

2012年6月14日～16日一大韓民国（韓国国立民俗博物館との交流協定更新）

2012年7月12日～17日一大韓民国（「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と収集）

2012年8月27日～9月6日一大韓民国（植民地における朝鮮半島の文化に関する標本資料の収集及びみんぱく「韓国」制作に関する調査）

2012年10月6日～8日一大韓民国（円光デジタル大学開校10周年記念シンポジウム参加）

2012年11月21日～25日一大韓民国（慶熙大学「アジア研究」講座での講義及び全羅北道での植民地期文化の調査）

2013年1月10日～15日一大韓民国、中華人民共和国（海外コリアンの人類学的研究のための資料収集と現地調査）

2013年2月14日～18日一大韓民国（韓国における海外コリアン研究の調査及び「朝鮮半島の文化」展示新構築の資料収集）

2013年3月20日～24日一台湾（国立台湾歴史博物館特別展示「看見平埔」開幕式ならびに記念国際シンポジウム参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸女子大学「世界の食文化」

久保正敏 [くほ まさとし] ————— 教授

1949年生。【学歴】京都大学工学部電気工学科卒（1972）、京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了（1974）【職歴】京都大学工学部情報工学科助手（1974）、国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、京都大学大型計算機センター助教授（1990）、京都大学学術情報ネットワーク機構兼務学術資料情報担当（1990）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（1998）、国立民族学博物館情報管理施設長（2000～2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）【学位】工学博士（京都大学 1986）、工学修士（京都大学大学院工学研究科 1974）【専攻・専門】コンピュータ民族学（情報組織化論、博物館情報論）、民族情報学（先住民とメディア文化論）【所属学会】情報処理学会、日本文化人類学会、民族藝術学会、日本産業技術史学会、アートドキュメンテーション学会

【主要業績】

[単著]

久保正敏

1996 『マルチメディア時代の起点——イメージからみるメディア』（NHK ブックス779）東京：日本放送出版協会。

[論文]

久保正敏

2003 「模倣と創造——エスニック・アートとファイン・アート」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』pp.215-239, 東京：勉誠出版。

久保正敏・堀江保範

2006 「オーストラリア交通事情——アウトバックの距離を克服する」『季刊民族学』118: 3-41。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像アーカイブズ構築のための諸課題の検討と指針策定——倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して

・研究の目的

国立民族学博物館所蔵の映像資料は、国内外共有の文化資源として極めて貴重である。しかし、その長期保存と利用の両立を図るためには、媒体変換など技術問題の背後にある、知的財産権保護と共同利用性の両立をいかに解決するかが必要となる。本研究では、素材の世代管理を含む映像アーカイブズの構造設計とともに、知的財産権保護と利用の両立を実現できる媒体管理手法を図る手法を検討する。映像アーカイブズを運用する諸機関の実態調査を行いながら、当館にとって現実的・具体的な指針を設計する。

・成果

業務委託で製作してきた民博の映像制作体制が変化し、映像機器の普及とともに研究者自身が撮影・編集した映像資料を民博が受け入れる状況も生まれ、映像資料の再定義（研究用資料、活動記録資料、公開可能な資料、資産化できない資料）が必要となっている。これらに関わる諸課題の検討を進めるとともに、日本写真学会主催「画像保存セミナー」、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源の総合的研究」研究班「人間文化資源の保存環境研究」、民博共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうことの方法と理論」などに参加し、意見交換を踏まえた結果を下記にて発表した。

〈論文等〉

- 1) 「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科学術交流フォーラム2012 報告書（ウェブ版）』総合研究大学院大学（2013年3月12日，仁藤敦史・落合博志・近藤智嗣・小島道裕・荒木浩・紅林健志・門脇朋裕との共著）。
- 2) 「写真のある美術館・博物館・資料館 国立民族学博物館」『日本写真学会誌』76(1): 3-4, 日本写真学会

(2013年2月25日)。

〈口頭発表〉

- 3) 'Public Information in Museums: Rights and Ethics.' "International Workshop on Asian Museums and Museology in Mongolia", Mongolian National University of Science and Technology (2012年7月19日)。

◎出版物による業績

[共編]

『月刊みんぱく』編集部編／久保正敏・庄司博史責任編集

2012 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

[その他]

久保正敏

2012 「考現学と民博」『月刊みんぱく』36(4): 2-3。

2012 「みんぱくのオタカラ 大村しげの長火鉢」『みんぱく e-news』130 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/130otakara>)。

2012 「特別展 今和次郎 採集講義——考現学の今」『国立民族学博物館友の会ニュース』205: 1。

2012 コメント「庶民の暮らし広く細かく——カフェ店員の制服、茶わんの欠け方…」『考現学』始祖・今和次郎 みんぱく』『大阪日々新聞』5月9日朝刊。

2012 コメント「身近な生活 記録する意味 民博」『今和次郎 考現学の今』『朝日新聞』5月15日夕刊。

2012 コメント「暮らしの諸相 観察し尽くす 大正・昭和を切り取った『今和次郎展』」『日本経済新聞』5月17日夕刊。

2012 コメント「今も息づく『考現学』創始者の業績——人、物、暮らしを考察 大阪・民博で『今和次郎展』」『神戸新聞』5月25日朝刊。

2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑤ 考現学的な展示」『毎日新聞』6月7日夕刊。

2012 コメント「暮らし観察 考現学に再評価 昭和の京町家 家財道具も並ぶ 民博で『今和次郎展』」『京都新聞』6月12日朝刊。

2012 「友の会講演会要旨 第407回 考現学と民族学」『国立民族学博物館友の会ニュース』206: 4。

2012 「おわりに」『月刊みんぱく』編集部編 『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』東京：丸善出版。

2012 「友の会講演会要旨 第408回 タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」『国立民族学博物館友の会ニュース』207: 4。

2012 「旅・いろいろ地球人 鉄路叙景④ 南北縦断 100年の夢」『毎日新聞』11月22日夕刊。

2012 「私鉄王国の文化」『月刊みんぱく』36(12): 7-8。

2012 「虹へび」『年末年始展示イベント へび 解説パネル』国立民族学博物館。

2013 「考現学の遺伝子を受け継ぐ」『今和次郎と考現学——暮らしの“今”をとらえた〈目〉と〈手〉道の手帖』pp. 74-78, 東京：河出書房新社。

2013 「写真のある美術館・博物館・資料館 国立民族学博物館」『日本写真学会誌』76(1): 3-4。

久保正敏・仁藤敦史・落合博志・近藤智嗣・小島道裕・荒木 浩・紅林健志・門脇朋裕

2013 「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科 学術交流フォーラム2012 報告書 (ウェブ版)』(http://www.initiative.soken.ac.jp/forum_2012/symposium/index.html)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年9月1日 “General Guide to the National Museum of Ethnology.” Post-Retreat Excursion of 4th iCeMS Retreat by Kyoto University, 国立民族学博物館

2012年10月22日 ディスカッション「シンポジウム・博物館の役割——集める・保つ・伝える・究める」『総合研究大学院大学文化科学研究科 学術交流フォーラム2012』国立歴史民俗博物館

・研究講演

2012年5月6日 「考現学と民族学」国立民族学博物館友の会第407回講演会、国立民族学博物館

2012年6月2日 「タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」国立民族学博物館友の会第408回講演会、国立民族学博物館

2012年7月19日 ‘Public Information in Museums: Rights and Ethics.’ “International Workshop on Asian

Museums and Museology in Mongolia”, Mongolian National University of Science and Technology

- 2012年11月5日 特別講義「科学から見るオーストラリア——時空の広さを知ろう 気候・進化・天体・先住民文化」『SPP事業 洛北サイエンス3年——オーストラリアの自然現象を探求する』京都府立洛北高等学校附属中学校
- 2012年11月25日 「民族学・文化人類学と民博の概要」『総研大学生セミナー第1回 総研大基盤機関見学——民博と日文研で学ぶ』国立民族学博物館
- 2013年1月21日 「エアーズロック（ウルル）とアボリジニ文化」『芦屋川カレッジ大学院講座 世界遺産への旅——知的冒険に出かけましょう』芦屋市民センター
- 2013年3月2日 「フィールドワークの方法① 民族学調査と考現学」『阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座』芦屋市立美術博物館
- 2013年3月9日 「フィールドワークの方法② 社会調査法概略と調査の留意点」『阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座』芦屋市立美術博物館

・広報・社会連携活動

- 2012年5月5日 「みんなばくで考現学的パワースポットを探そう」『特別展開連ワークショップ』国立民族学博物館
- 2012年5月19日 「コレいく？ 今和次郎 採集講義 考現学の今」『ぐるっと関西おひるまえ』NHK総合テレビ
- 2012年6月3日 「みんなばくの考現学遺伝子」第256回みんなばくウィークエンド・サロン

◎調査活動

2012年7月14日～22日——モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長、京都大学地域研究統合情報センター共同研究員、国際協力機構技術協力専門家（遺物の取り扱いワークショップ）

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など
ボランティア組織「Multimedia Educational Forum」代表、特定非営利活動法人MEF (Multimedia Educational Forum) 理事長
- ・非常勤講師
大阪教育大学「博物館情報・メディア論」

小林繁樹 [こばやし しげき]——教授

1949年生。【学歴】南山大学文学部人類学科卒（1973）、南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1976）【職歴】野外民族博物館リトルワールド学芸研究員（1976）、東京造形大学造形学部助教授（1992）、東京造形大学学芸員課程室室長（1994）、東京造形大学造形学部教授（1997）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館館長補佐併任（2005）、国立民族学博物館情報管理施設長併任（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター長併任（2009）【学位】文学修士（南山大学大学院文学研究科 1976）【専攻・専門】道具人類学、文化人類学、博物館学【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、民族藝術学会、道具学会、日本展示学会

【主要業績】

[単著]

小林繁樹

2004 『世界一周道具パズル これ、なんに使うのかな？』電子書店 mm 文庫，東京：光文社。

[論文]

小林繁樹

2011 「次世代展示はモノコミだ！」（特集10のキーワードで語る“博物館展示の未来”6 モノ：情報集合）『展示学』49: 36-39。

2009 「世界のものづくり——創造のキッカケを動詞で試みる」国立民族学博物館編『茶の湯のものづくりと世界のわざ——千家十職×みんなく』pp. 154-157, 東京: 河出書房新社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の活用に関する研究

諸文化における道具人類学的研究

・研究の目的

文化資源の活用に関する研究においては、人類が生み出し、育み、築いてきている人類文化を文化資源としてとらえ、その活用に関する一連の過程（認識し、理解し、留め、さらには伝え、促進し、より有効な利用へと展開させる）を全般的に調査研究するが、特に研究組織間や博物館同士の連携のあり方やその具体的方策の検討と文化人類学・民族学博物館における文化資源の有効な活用についての考察や実験的研究に重点をおく。

諸文化における道具人類学的研究においては、ことに身体の動きと道具との関連の考察を進める。

・成果

文化資源の活用に関する研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、日本展示学会（会長：高橋 貴）主催、国立民族学博物館、地域博物館活性化実行委員会共催による「日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム 博物館展示と地域活性化」の実行委員会委員として本館を会場にした実施に携わり、パネルディスカッションのコーディネーターを担当した。また、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、ICOM-CECA（国際博物館会議 教育と文化活動委員会）主催による「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」の実行委員会委員として国立歴史民俗博物館を会場にした実施に携わり、第3セッション「社会とのつながり」の司会を担当した。これらの討議を通して文化資源の効果的な提示に関して認識を深めた。さらに、国際協力機構からの委託集団研修事業である「博物館学コース」に運営委員会委員長として携わり、講義を担当し、ニューズレターを編集するなど外国人受託研修員の研修に当たり、博物館社会連携専門部会長として民博のサポート団体である「みんなくミュージアム・パートナーズ」の会員養成研修を実施するなど、民博の文化資源の有効活用に関する実践的研究を試みた。学会誌『展示学』50号の編集長も務め、博物館資料の理解の仕方やこれからの展示の在り方を展望した。

また、恒例で9回目となる年末年始展示イベント「へび」のプロジェクトチーム・リーダーとして計画、実施を担当し、あわせてこれに伴う展示活動研修会を主催した。

諸文化における道具人類学的研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、創造のための工夫に関する研究講演や講義を重ねた。

◎出版物による業績

[共編]

Kobayashi, S., N. Sonoda and I. Hayashi (eds.)

2013 *Museum Co-operation 2012 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

小林繁樹

2012 「後書」『展示学』50: 151。

2012 「国立民族学博物館本館展示新構築『オセアニア』『アメリカ』2011年の展示」『展示学』50: 72。

2012 「貨幣経済を問う視点—オセアニアの島と島をつなぐ交易活動から、私たちの暮らしを考える」『国立民族学博物館友の会ニュース』206: 3。

2012 「美味なるかな、カメの甲羅焼き（再録）」『月刊みんなく』編集部編『食べられる生きものたち——世界の民族と食文化48』pp. 72-73 東京: 丸善出版。

2012 「空きカンを使った、街角の鍼灸治療」『道具学への招待』89 (<http://dougology.exblog.jp/17850989/>) 道具学会。

2012 「旅・いろいろ地球人 美味望郷⑤ 亀鍋」『毎日新聞』10月4日夕刊。

2013 「地球ミュージアム紀行 エルデニ・ゾー博物館 モンゴル最古のチベット仏教僧院」『月刊みんなく』37(1): 14-15。

2013 「暮らしに息づく世界のへび」『神戸新聞』1月5日朝刊。

2013 「国立民族学博物館 世界各地の標本や写真展示 えとの『へび』がテーマ」『大阪日日新聞』1月7日朝刊。

2013 「ひとと抄 かばんに『世界』詰めて」『読売新聞』2月2日夕刊。

Kobayashi, S.

2013 Preface. In S. Kobayashi, N. Sonoda and I. Hayashi(eds.) *Museum Co-operation 2012 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*, pp.4-5, Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年12月1日 <司会>国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会 第3セッション「社会とのつながり」国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館・ICOM-CECA(国際博物館会議教育と文化活動委員会)主催、国立歴史民俗博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年11月17日 <実行委員、パネル・ディスカッション コーディネータ>「日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム 博物館展示と地域活性化」日本展示学会主催、国立民族学博物館・地域博物館活性化実行委員会共催、国立民族学博物館

・共同研究会

2013年1月20日 「贈物交換活動と地域社会」『贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』

・研究講演

2012年6月9日 「貨幣経済を問う視点——オセアニアの島と島をつなぐ交易活動から、私たちの暮らしを考える」第102回国立民族学博物館友の会東京講演会、江戸東京博物館

2012年6月17日 「世界の文化を博物館展示で表象する」2012年度リトルワールドカレッジ・マスターコース第3回、野外民族博物館リトルワールド

2012年10月12日 「世界の道具をみる」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年12月10日 「交易を支える歌と踊り——ニューギニアの経済、生活、平和」伊丹市文化振興財団主催2012年度後期講座文化サロン『話題探訪』、伊丹アイフォニックホール

2013年3月2日 「フィールドワークを語る——ヨソモノが感じ、考えたこと」第417回国立民族学博物館友の会講演会

・展示

特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」実行委員会(委員長:久保正敏)委員、夏期無料観覧期間企画「世界の夏を楽しもう」実行委員会(委員長:八杉佳穂)委員、「年末年始展示イベント『へび』」プロジェクト責任者

・映像番組

小林繁樹[監修]

2012 「交易」みんなく電子ガイド

・広報・社会連携活動

2012年6月10日 「国立民族学博物館とは」2012年度みんなくミュージアムパートナーズ新規募集研修

2012年8月3日 「ニューギニアの夏」『世界の夏を楽しもう!』真夏サロン

2012年8月6日 「国立民族学博物館の紹介」大阪府教育センター『平成24年度初任者研修における社会体験研修』、国立民族学博物館

2012年8月7日 <司会>「博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく 学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催、国立民族学博物館

2012年8月16日 「アフリカ仮面のモビールを作ろう」『世界の夏を楽しもう!』関連ワークショップ(講師:田主 誠)担当教員

2012年9月27日 「民博の展示活動」博物館学コース、国立民族学博物館

2012年11月7日~12月12日 2012年度展示活動研修会/年末年始展示イベント「へび」責任者

2012年11月24日 「人物表現あれこれ 十顔身という仏の見方—チベット仏教の仏画のしかけ」2012年度前期MMP・地球おはなし村合同継続研修、国立民族学博物館

2012年12月23日 「年末年始展示イベント『へび』と教職員研修会」第281回みんなくウィークエンド・サロン

2012年12月26日 「年末年始展示イベント『へび』について』『とっておきの11時「みんなのみんなく』」FM千里

2013年1月14日 「へび」年始年末展示イベント『へび』関連イベント みんなく教員によるギャラリートーク

2013年1月14日 「カルタを作って世界の『へび』をみてみよう！」年始年末展示イベント『へび』関連イベントワークショップ

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～22日一モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

野外民族博物館リトルワールド客員研究員、人間文化研究連携共同推進事業『国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会』（代表：小島道裕）人間文化研究機構連携研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

道具学会理事、日本展示学会副会長、日本展示学会理事、日本展示学会学会誌『展示学』50 編集長、「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」実行委員、日本展示学会創立30周年記念国際シンポジウム「博物館展示と地域活性化」実行委員会委員

・非常勤講師

川崎医療福祉大学「道具文化特論」、愛知県立芸術大学「陶磁論」、宝塚大学「博物館経営論」（集中講義）、金沢大学人間社会学域「物質文化論」（集中講義）

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 教授

【学歴】パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）【職歴】フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）【学位】Doctorat de 3^{ème} cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）【専攻・専門】保存科学【所属学会】ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3^{ème} cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

環境問題に配慮した資料保存環境の構築

・研究の目的

21世紀の博物館には環境への配慮が求められる。20世紀後半のオゾン層保護に関わる問題は、日本の博物館における防虫・殺虫方針を根本から見直す契機となった。近年は地球温暖化の問題に加えて、東日本大震災を受けて全国規模で節電の動きが起きている。これまでに研究開発してきた保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を最大限に活用し、省エネを考慮しつつ、適切な資料保存環境の条件を見いだす。

・成果

人間文化研究機構・連携研究の一環として研究開発した保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を活用し、平常時と節電時のデータを年間にわたり総合分析した。結果、節電対策による温度・湿度の変動は、最低限に抑えられていたことを明らかにした。また、日単位での稼働時間制限のほうが、週単位での稼働時間制限よりも、温度や湿度の暴れを小さく抑えられることが実証できた。平常時と節電時の実測データを長期間にわたり比較検証した事例は殆どないため、本研究で得られた知見は、国内外の学会で研究成果として発表する。

◎出版物による業績

[論文]

Sonoda, N.

2012 Preventive Conservation for Museum Collection. In N. Kamba and M. Menu (eds.) *French-Japanese Workshop "Science for Conservation of Cultural Heritage"*, pp.143-150. Paris: Hermann.

[その他]

園田直子

2012 「資料の公開・活用をささえる予防保存——国立民族学博物館での取組みから」『博物館研究』（特集「資料の公開と保存」）47(1): 5-9。

2012 「第2章 博物館資料の保存環境2.4. 生物被害」石崎武志編著『博物館資料保存論』pp.54-70, 東京: 講談社。

2012 「民俗・民族資料」財団法人日本博物館協会編『博物館資料取扱いガイドブック——文化財、美術品等梱包・輸送の手引き』pp.185-197, 東京: ぎょうせい。

2013 「特集 はじめに光ありき——資料保存と展示と光」『月刊みんぱく』37(2): 9。

園田直子・日高真吾・橋本沙知

2012 「露出展示における資料の事故分析——国立民族学博物館の事例から」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.278-279, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

園田直子・日高真吾・和高智美

2012 「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.296-297, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・雨森久晃・二俣 賢・木川りか

2012 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京研究発表要旨集』pp.304-305, 日本大学文理学部百周年記念館（6月29～30日）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「予防保存と資料管理——国立民族学博物館の事例から」、国際ワークショップ「民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復」、「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」、機関研究「マテリアリティの人間学」、国立民族学博物館

・機構の連携研究会での報告

2012年6月25日 「人間文化資源の保存環境研究 2012年度研究状況中間報告」「人間文化資源」の総合的研究 総括班会議 人間文化研究機構

2012年11月12日 「2012年度版 温度・湿度分析システムの概略」「人間文化資源」の総合的研究：「人間文化資源の保存環境研究」東京国立博物館平成館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月1日 (ポスター発表)「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」(園田直子・日高真吾・和高智美)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月1日 (ポスター発表)「露出展示における資料の事故分析——国立民族学博物館の事例から」(園田直子・日高真吾・橋本沙知)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月1日 (ポスター発表)「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」(日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・雨森久晃・二俣賢・木川りか)文化財保存修復学会第34回大会、日本大学文理学部百周年記念館

2012年7月16日「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」、日本とモンゴルにおける博物館・博物館学の比較研究(ミュージアム・クリルタイ)、日本学術振興会研究拠点形成事業——B.アジア・アフリカ学術基盤形成型『アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流』、カラコルム博物館(モンゴル)

2012年10月7日「国立民族学博物館におけるIPMの実践とその協力体制」(園田直子、和高智美)平成24年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)公開シンポジウム「市民とともにミュージアムIPM」、一橋大学一橋講堂

・広報・社会連携活動

2012年8月5日「資料の保存・取り扱いについて」MMP2012年度新規メンバー養成研修⑤

2012年11月2日「みんなの舞台裏」NPO法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年11月21日「標本資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2012年度年末年始展示イベント『へび』

2012年12月16日「資料の公開・活用のためのひとくふう」第280回みんなのウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2012年5月25～26日—九州国立博物館(資料保存に関する意見交換ならびに情報収集)

2012年6月25日—人間文化研究機構(「人間文化資源」の総合的研究第1回総括班会議出席)

2012年8月28～29日—高知県立紙産業技術センター(紙資料の強化処理実験に関する研究会)

2012年10月13日—一橋大学一橋講堂(絵画資料の保存修復に係わる情報収集)

2012年11月12日—東京国立博物館(「人間文化資源の保存環境研究」研究会開催と発表)

2012年12月5日—東京文化財研究所(文化財の微生物劣化とその対策に関する情報収集)

2013年2月13日—情報システム研究機構(「人間文化資源」の総合的研究第2回総括班会議出席)

・海外調査

2012年6月3日～11日—ロシア(ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館において調査研究)

2012年7月14日～22日—モンゴル(モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2013年2月20日～28日—ミャンマー(ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：「人間文化資源の保存環境研究」(研究代表者)、科学研究費補助金(研究基盤(B)(一般))「劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発(課題番号：24300307)(研究代表者)、日本学術振興会研究拠点形成事業——B.アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」(日本側コーディネータ)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、独立行政法人文化財研究所自己点検評価・外部評価委員、IIC(International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works) Council member(～2013年1月)

・非常勤講師

東京藝術大学大学院美術研究科「博物館における予防保存」(集中講義)

吉田憲司 [よしだ けんじ] 教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒(1980)、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了(1983)、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学(1987)【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員(1984)、大阪大学文学部助手(1987)、国立民族学博物館助手(1988)、国立民族学博物館助教授(1992)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1993)、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授(2000)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授(2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター長(2006)、放送大学客員教授(2010)【学位】学術博士(大阪大学大学院文学研究科1989)、文学修士(大阪大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、王立人類学協会(Royal Anthropological Institute イギリス)、アフリカ学会美術協議会(The Arts Council of the African Studies Association アメリカ)

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

1999 『文化の「発見」』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

[共編]

吉田憲司・熊倉功夫編

2005 『柳 宗悦と民藝運動』京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族芸術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞(芸術・文学部門)

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の管理と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的

ユネスコによる無形文化遺産条約の成立に伴い、有形と無形を含めた文化遺産の管理・継承における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化遺産をいかに管理・継承し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。文化遺産の管理と表象にかかわる博物館・美術館のありかたを歴史的に検証し、その問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を考究するのが、本研究の目的である。

本年度は、筆者を代表とする科学研究費補助金による基盤研究(A)「物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証」によって、アフリカにおける文化遺産の管理と表象に関する現地調査を実施するとともに、国内外の博物館の動向調査とその成果とりまとめを通じて、ネットワーク型ミュージオロジーの提言につなげた。

・成果

1997年の特別展「異文化へのまなざし」から2008年の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」を経て、現在に至る筆者の博物館をめぐる一連の活動を、20世紀末から21世紀にかけての世界の博物館の動向の中に位置づける作業を行い、『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』(刊行は2013年4月)と題する著書にまとめた。同書は、ネットワーク型ミュージオロジーについての提言となっている。

また、「物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築」については、その成果を同タイトルの報告書にまとめ、あわせて英文による出版の準備を進めた。

◎出版物による業績

[共編]

吉田憲司・水沢 勉・池谷和信編

2012 『ビーズ・イン・アフリカ』葉山: 神奈川県立近代美術館。

[監修]

吉田憲司

2012 『旅する仮面』中里なぎさ・金城美奈子編, 那覇: 沖縄文化の杜。

[論文]

吉田憲司

2012 「記憶の継承——津波災害と文化遺産」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.140-165, 大阪: 千里文化財団。

2012 「ビーズに見るアフリカの文化」吉田憲司・水沢 勉・池谷和信編『ビーズ・イン・アフリカ』pp.98-105, 葉山: 神奈川県立近代美術館。

2012 「仮面という装置・再考——人はなぜ、もうひとつの顔をつくるのか」中里なぎさ・金城美奈子編『旅する仮面』pp.90-93, 那覇: 沖縄文化の杜。

2012 「人はなぜ仮面をかぶるのか——仮面という装置が明かす人類の普遍性」『嗜み』17: 64-69。

2013 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』140: 2-7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年5月26日 ‘Opening Remarks: Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?’ at International Symposium 2012 “Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?”, National Museum of Ethnology.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月20日 「記憶の継承——津波災害と文化遺産」日本学術振興会研究拠点形成事業公開セミナー『災害と文化遺産——東日本大震災の事例から』モンゴル科学技術大学、ウランバートル(モンゴル)

2012年8月28日 ‘The Museum, a Platform for the Intangible Cultural Heritage.’ at the International Research Symposium “Museums and Intangible Heritage” National Folk Museum of Korea.

2012年11月2日 “Museum Exhibitions in the World”, Museum Workshop 2011, Lusaka: National Museum of Lusaka.

2012年11月19日 〈対談、荒俣 宏氏と〉「シンポジウム 東日本大震災から考える——地域の再生・文化の継承」産経新聞社主催、エルセラーンホール(大阪)

2013年3月17日 「万博からみんぱくへ」特別シンポジウム『Energy of EXPO——万国博のちから』関西環境開発センター主催、国立民族学博物館

・研究講演

2012年8月4日 「アフリカ、ビーズの世界」神奈川県立近代美術館主催、神奈川県立近代美術館

2012年8月12日 「世界の仮面、仮面の世界」沖縄文化の杜主催、沖縄県立博物館・美術館

・展示

『国立民族学博物館コレクション ビーズ・イン・アフリカ』(2012年8月4日～10月21日) 主催: 神奈川県立近代美術館、共催: 国立民族学博物館、神奈川県立近代美術館、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』(2012年9月27日～12月27日) プロジェクト・メンバー

◎調査活動

・海外調査

2012年7月14日～21日—モンゴル(モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2012年10月1日～11月4日—モザンビーク、ザンビア(モザンビークとザンビアにおける物質文化の現代的展開に関する研究および「武器を農具に」プロジェクトに関わる立体造形作品ならびに関連民族誌標本資料の収集)

2013年2月11日～25日—ドイツ、トルコ、ポルトガル、イギリス(ヨーロッパに所蔵されるアフリカに関する初期コレクションの資料調査)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム アフリカ分科会 会長、UCLA African Arts Consulting Editor

・非常勤講師

放送大学「博物館概論」、お茶の水女子大学「文化情報論」（集中講義）、大阪芸術大学「藝術行動学特論」（集中講義）

・学会の開催

2012年5月26日～27日 日本アフリカ学会第49回学術大会（実行委員長）、国立民族学博物館

林 勲男 〔はやし いさお〕 ————— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 1) パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究 2) オセアニア近代史の人類学的研究 3) 自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会

【主要業績】

〔編著〕

林 勲男編

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

〔共編著〕

岩崎信彦・田中泰雄・林 勲男・村井雅清編

2008 『災害と共に生きる文化と教育——〈大震災〉からの伝言（メッセージ）』京都：昭和堂。

〔論文〕

林 勲男

2006 「意識の変容、多次元的な自己——ベダムニにおける夢と交霊をめぐって」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』pp.351-378, 京都：世界思想社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害研究における民族誌的方法に関する研究

・研究の目的

災害研究の分野では、被災地調査を含め、短期ではあるが頻繁に同じ調査地に足を運び、フィールドワークを行う研究者が増えてきている。本研究では、実態の正確な把握と、人類学が育んできたエスノグラフィの災害研究における可能性を、その問題点を踏まえた上で検討する。昨年度に引き続き、国内外の調査報告書や論文等の文献調査と、昭和東南海・南海地震津波被災地となった紀伊半島南部における被害想定見直しによる防災の変化に関する調査と、2011年3月に発生した東日本大震災被災地での地域コミュニティ再建に関するフィールドワークを継続する。調査は、私が代表者となっている科研費補助金と館外のプロジェクトによる予定である。

・成果

東日本大震災に関しては2012年11月22日～23日にシンガポール国立大学アジア研究所主催による国際シンポジウム Salvage and Salvation: Religion, Disaster Relief, and Reconstruction in Asia に出席し、Edifications 1のパネルにて、The Bereaved and the Folk Performing Arts in the East Japan Earthquake Disaster 2011のタイトルで発表した。また、Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan EarthquakeがAsian Anthropology Vol.11に掲載された。「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」が人間文化研究機構監修の『HUMAN』Vol.3（平凡社）に掲載された。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男

- 2012 「仮のすまいとコミュニティ——その連続と断絶」『建築雑誌』127(1633): 4-5。
- 2012 「伝統文化の振興と観光資源化——パプアニューギニア、ナショナル・マスク・フェスティバルをめぐって」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.303-325, 東京: 風響社。
- 2012 「防災の英知を海外に——津波防災教材としての『稲むらの火』」『月刊みんぱく』36(9): 8-9。
- 2012 「文化遺産支援を通じたネットワークづくり——鹿踊りの研究公演を例に」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.134-138, 大阪: 千里文化財団。
- 2012 「災害を伝える——記憶と記録をこえて」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.173-181, 大阪: 千里文化財団。
- 2012 「鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活」『月刊みんぱく』36(11): 22-23。
- 2012 Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake. *Asian Anthropology* 11: 75-87。
- 2012 「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」『HUMAN ——知の森へのいざない』3: 83-90。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月16~17日 「災害の記憶を残す」国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 分科会(代表)「復校・教育・地域社会——3.11と人類学」文化人類学会、広島大学

2012年7月20日 「東日本大震災における無形文化遺産の被害と支援」公開セミナー『東日本大震災と文化遺産の保存』モンゴル国立科学技術大学

2012年11月22~23日 ‘The Bereaved and the Folk Performing Arts in the East Japan Earthquake Disaster 2011’. 国際シンポジウム“Salvage and Salvation: Religion, Disaster Relief, and Reconstruction in Asia”シンガポール国立大学アジア研究所

・研究講演

2012年7月6日 「災害からの復興」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館

2012年7月20日 ‘Preservation of intangible cultural properties.’ 国立民族学博物館主催、モンゴル国立科学技術大学

・研究公演

2012年6月9日~10日 「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」国立民族学博物館(9日)、神戸市長田区若松公園(10日)共催: ジョイプラザ名店会・株式会社神戸ながたTMO

2012年11月18日 みんぱく公演「南部藩壽松院年行事支配太神楽」国立民族学博物館

・展示

企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」実行委員

・広報・社会連携活動

2011年7月24日 「南太平洋の宣教師」第214回みんぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・国内調査

2012年6月26日~31日—岩手県普代村、大船渡市、宮城県南三陸町(連携展示に関する資料調査)

2012年7月7日~9日—岩手県遠野市、大船渡市、花巻市、宮城県南三陸町(収集資料に関する調査)

2012年8月18日~20日—奥州市、大船渡市、花巻市(民俗芸能に関する情報収集)

2012年8月31日—東京国立博物館(特集陳列「地震研究と歴史資料」展の情報収集)

2012年10月25日~27日—東京文化財研究所(「第7回無形民俗文化財研究協議会」に出席)

2012年12月22日~25日—宮城県南三陸町(宮城県南三陸町の無形民俗文化の伝承者・伝承団体・関連施設の支援と活動の現状に関する調査)

2013年1月10日~12日—山寺芭蕉記念館、仙台国際センター、せんだいメディアテーク(シシ踊りに関する調査、シンポジウム「東日本大震災アーカイブ——過去と現在の記憶・記録を未来へ伝

えるために」参加、協議)

2013年3月6日～7日—東京文化財研究所（第1回無形文化遺産情報ネットワーク協議会に出席）

2013年3月17日～18日—日本学術会議（日本学術会議公開シンポジウム「災害と環境教育——内発的なESDからの復興の道筋の展望」への参加と、国立国会図書館東日本大震災アーカイブに関する調査）

2013年3月26日～30日—釜石市郷土資料館。大船渡市郷土芸能協会、遠野市立博物館、えさし藤原の郷、春日流八幡鹿踊り保存会（岩手県被災地およびその支援地域における博物館を通じた復興支援活動に関する調査）

・海外調査

2012年7月14日～22日—モンゴル（モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2012年10月29日～11月5日—インドネシア、シンガポール（アチェ津波博物館、シアクアラ大学津波防災研究センター、シンガポール国立博物館での研究会）

2012年11月21日～25日—シンガポール（シンガポール大学での研究会及び国際シンポジウム参加）

2013年2月3日～11日—パプアニューギニア、オーストラリア（「大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究」に関わる文献調査ならびに聞き取り調査）

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 准教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1995）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1995）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

【受賞歴】

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

加温二酸化炭素処理法の開発

・研究の目的

本研究は、二酸化炭素を利用した殺虫処理のシステムを利用して、効率的な博物館の殺虫処理法のシステムを開発することを目的とするものである。

二酸化炭素による殺虫処理は、化学薬品を用いない殺虫処理法として、国内外の博物館で積極的に導入されている。しかし、殺虫処理条件として25℃以上の温度を要するということから冬季の博物館環境では実施できない点と2週間という処理期間が長いという問題点の指摘があり、2011年度の研究ではこれらの問題を解決するための加温二酸化炭素処理システムをほぼ完成することができた。一方、梱包材の中で特に発泡体について二酸化炭素による変形等が生じることが確認された。以上のことから、2012年度は二酸化炭素処理による梱包

材の影響試験を実施する。

・成果

通常の美術梱包で使用する材料のうち、特に発泡体を抽出し、試験体とし、重量、寸法、顕微鏡による発泡体の形状について、二酸化炭素処理と未処理のものを1年間観察し、両者の違いを比較検証した。その結果、二酸化炭素処理後において、若干の寸法変化、形状変化がみられたものの、その後、大きな変化は見られなかった。このことから、梱包材そのものを処理することは問題ないものの、若干の変化があることを認識した上で、その後の取り扱いを考える必要があることを明らかにした。

◎出版物による業績

[論文]

日高真吾

2012 「国立民族学博物館の活動」『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成23年度活動報告書』 pp. 131-135, 東京: 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会。

2012 「東日本大震災における文化財レスキューについて——民俗資料を中心に」文化財保存修復学会編『災害から文化財をまもる』 pp. 81-89, 東京: 文化財保存修復学会。

2012 「博物館資料の被災防止と救援活動」石崎武士編『博物館資料保存論』 pp. 84-98, 東京: 講談社。

日高真吾・岡田 健

2012 「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」日高真吾編『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』 pp. 56-67, 大阪: 千里文化財団。

[その他]

日高真吾ほか5名

2012 「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」『日本文化財科学会第29回大会発表要旨』 pp. 414-415, 東京: 文化財保存修復学会。

日高真吾・園田直子ほか7名

2012 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」『文化財保存修復学会第34回大会発表要旨』 pp. 304-305, 東京: 文化財保存修復学会。

2012 「震災と保存科学」『月刊みんぱく』 36(9): 6-7。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月17日 「東日本大震災で被災した有形文化遺産の復興支援」国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』(加藤幸治・沼田 愛(東北学院大学)との合同報告)、国立民族学博物館

2013年1月27日 「東日本大震災における民俗資料の修復」国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』(民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究 代表: 佐々木史郎)、国文学研究資料館

2013年3月8日 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産 被災地を展示するということ」人間文化研究機構災害連携研究報告会、国文学研究資料館

2013年3月17日 「日本における日本の文化の展示」国際シンポジウム“Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe”、国立民族学博物館

2013年3月21日 「東日本大震災での文化財レスキュー」人間文化研究機構連携研究シンポジウム『大規模災害と人間文化研究』フクラシア東京

2013年3月24日 「文化財レスキュー事業で救出した文化財の現状と課題」シンポジウム『大規模災害と人間文化研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日～24日 「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」(日高真吾他5名による合同報告)『日本文化財科学会第29回大会』京都大学

2012年6月30日～7月1日 「災害対策調査部会の2011年度の活動」(内田俊秀・日高真吾・中村晋也・村上 隆・森田 稔による合同報告)『文化財保存修復学会第34回大会』日本大学

2012年7月1日 「二酸化炭素処理における梱包材の物理的変化について」(日高真吾他7名による合同報告)『文化財保存修復学会第34回大会』日本大学

2012年7月20日 ‘Preservation of the Tangible Cultural Heritage’ 公開セミナー “The Great East Japan

Earthquake and the Preservation of Cultural Heritage” (日本学術振興会研究拠点形成事業 (B, アジア・アフリカ学術基盤形成型) 「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」 (代表：園田直子))

・展示

企画展 (人間文化研究機構連携展示) 「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」、企画展関連写真展 「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」

・広報・社会連携活動

2012年10月21日 「鶴鳥神楽」 みんぱく公演 (企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連)

◎調査活動

・海外調査

2012年6月3日～11日—ロシア (ロシア民族学博物館、人類学民族学博物館において調査研究)

2012年7月17日～22日—モンゴル (モンゴルの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査)

2012年11月30日～12月15日—エジプト (大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト (フェーズ2) における遺物管理データベースの策定と収蔵方法の策定のための技術指導)

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、日本民具学会理事、文化財虫害研究所総合的防除対策検討委員会委員

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒 (1986)、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了 (1991)、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学 (1994) 【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手 (1994)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手 (1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004) 【学位】芸術学修士 (東京藝術大学大学院 1991) 【専攻・専門】民族音楽学 東南アジア、とくにインドネシア、西ジャワのスダ伝統音楽について研究 【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」 端 信行編『民族の二〇世紀』 (二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9) pp.144-160, 東京: ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2): 257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア伝統音楽の近代史

・研究の目的

この研究は、録音技術の発展とマスメディアの普及、国民国家の成立とナショナリズムに基づく文化政策、楽器の製作流通を含む音楽産業の成立などの中で、東南アジアの伝統音楽がどのように変化したのかを明らかにすることを目的としている。主な研究対象の1つとして西ジャワの伝統音楽を取り上げるが、同時に東南アジア諸地域間の関連をさぐり、近代東南アジア世界における伝統音楽の動態を明らかにする。具体的には、1) 1930年代から50年代にかけて、レコードやラジオとともに、西ジャワ伝統音楽がどのように変化したのかを明らかにする。2) 東南アジア各地におけるゴングの製作と流通について調査し、そこにどのような変化が見られ

るのかを明らかにする。

・成果

1) マスメディアの発展とともに急速に新しいレパートリーが形成されたカウイとよばれるジャンルについて分析を進めた。2) 科学研究費補助金（基盤（B））「映像を用いた東南アジアゴング文化の音楽人類学的研究」（代表者：福岡正太）により、インドネシアおよびベトナム、ラオスにてゴングの製作と流通およびゴング演奏について調査撮影をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

福岡正太

2012 『東南アジアの人形芝居——舞台の小さな主役たち』大阪：堺市博物館。

[書評]

福岡正太

2013 「書評 細川周平編『民謡からみた世界音楽：うたの地脈を探る』」『ポピュラー音楽研究』16: 38-42。

[その他]

福岡正太

2012 「みんぱくと映像」『月刊みんぱく』36(5): 6-7。

2012 「芸能の映像記録とその活用について」笹原亮二編『チャンメラを作る』国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム，人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」pp. 87-94。

2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる③ 祖先にささげる歌」『毎日新聞』3月21日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月15日 「芸能の映像記録とその活用について」パネルディスカッション『八代妙見祭のチャンメラ復元製作をめぐる』東洋音楽学会西日本支部第258回定例研究会、国立民族学博物館。

2012年8月8日 “Audio-Visual Documentation of Performing Arts in Minpaku”, 2012 International Field School Alumni Seminar on Safeguarding Intangible Cultural Heritage in Asia Pacific (co-hosted by International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region, Japan and Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Thailand), Lamphun Province, Thailand.

・広報・社会連携活動

2012年7月15日 「みんぱくの展示と映像」第261回みんぱくウィークエンドサロン

・展示

情報展示新構築

◎調査活動

・国内調査

2012年8月13日～16日一鹿児島県硫黄島（三島村硫黄島の盆行事に関する調査撮影）

2012年10月22日～25日一鹿児島県硫黄島（三島村硫黄島の民俗芸能に関する調査撮影）

2012年12月1日～3日一鹿児島県徳之島（徳之島の民俗芸能の調査・保存・伝承への映像の活用に関する資料収集）

2013年2月23日～25日一鹿児島県徳之島（徳之島の民俗芸能の調査・保存・伝承への映像の活用に関する資料収集）

・海外調査

2012年8月5日～11日一タイ（無形文化遺産と博物館に関する国際研究会参加）

2013年1月5日～10日一インドネシア（インドネシアのゴングの製造と流通に関する調査）

2013年3月1日～10日一ベトナム、ラオス（ベトナムとラオスのゴング文化に関する調査）

2013年3月14日～22日一インドネシア（インドネシアのゴングを用いる芸能に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

東洋音楽学会理事、堺市博物館スポット展示「東南アジアの人形芝居——舞台の小さな主役たち」監修（2012年10月2日～11月4日）

- ・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、同志社大学「芸術学特論」、京都文教大学「音楽人類学」

南 真木人 [みなみ まきと] ————— 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2008 Overstaying Undocumented Workers on the Decrease in Japan: The Case of Nepali Immigrant Workers. In S. Yamashita, M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.) *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), pp.89-99. Osaka: National Museum of Ethnology.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

社会的包摂の「表現型」——エスニシティに基づく連邦制の議論から

- ・研究の目的

本研究の目的は、新しいネパール連邦民主共和国の連邦制の議論において、その鍵となる社会的包摂という概念がいかに利用ないしは流用され、民族（とくにマガル）およびカースト（とくにダリット）、地域（とくにマデシ）の自治の議論や運動に影響を与え、表出しているのかを明らかにするものである。具体的には、運動をリードする人びとの包摂に対する認識と戦略、運動に直接は関わらない人びとの認識や選択を現地調査によって探る。

- ・成果

制憲議会は、連邦制の内容の議論に立ち入る以前に、エスニシティに基づく連邦（民族名を冠した州。以下、民族州）は国家の統合にとって脅威になるのではないかという根源的な議論と対立に終始し、2012年5月、憲法を制定できずに期限切れで失効した。この疑義を提出するバフンやチェトリという「ドミナント・カースト」

集団は、ネパールはマジョリティと呼べるような集団がない、自らもその一つとするマイノリティーズの国家であり、ネパール人という共通のアイデンティティに基づく連邦を採用すべきだと主張する。他方、民族出身の政治家の一部は、民族州の採用を躊躇する既存の政党を離党し、民族州と民族自治を求める民族のための新たな政党を立ちあげはじめた。ただし、民族も一枚岩ではなく、同調者は必ずしも多くはない。もとよりネパールでは、特定の民族やカースト、地域の人々が自らの利益を追求するために組織する民族/カースト/地域単位の政党は、政党要件に抵触するとして選挙管理委員会が認めてこなかった。だが、2008年の制憲議会選挙において「マデシ人民の権利フォーラム」というマデシ地域政党を公認せざるを得ず（一連の暴動による）、同党が選挙で第4党になったことにより、なし崩し的にこの要件が緩和した背景がある。社会的包摂の議論はアイデンティティ・ポリティクスに結びつき、ネパールの場合それが実際の政治に大きな影響を与えているのである。

他方で、国家アカデミーが「国際母語デー」に合わせて大統領の臨席の元、各民族の母語による詩の朗読会を開催するなど、多様な民族の文化の維持、発展を支援する文化的な「包摂」の施策のほうは少しずつだが確実に増加している。社会的包摂の一つの契機と位置づけられる留保制度に関しては、さまざまな分野で法制化され始まっているが、その実効性の担保についての追跡調査はできず課題として残った。

◎出版物による業績

[その他]

南 真木人

2012 「みんなのオタカラ ネパールのビーズ “ジー”」『みんな e-news』132 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/132otakara>)。

2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる② つながるビーズ」『毎日新聞』5月17日夕刊。

2012 「『幸せの国』のあやうさ」『月刊みんな』36(4): 20。

2013 <情報提供協力> 『在留外国人の宗教事情に関する資料集——東南アジア・南アジア編』文化庁文化庁宗務課。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2012年10月4日 「カースト社会を読み解く——ネパールの事例から」国際理解ゼミナール、宝塚南口会館

2012年12月1日 「みんなコレクションを語る——ネパールの金（きん）のはなし」第414回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2013年1月20日 「1 + 1 は2ではない!! (算数)」『すいたんと行こう！——みんな学校で世界のくらし大発見』吹田にぎわい観光協会主催、国立民族学博物館

2013年1月26日 コメンテーター「第64回関西ネパールロビー——ネパールの平和と民主化への道」日本ネパール協会関西支部、京都私学会館

・展示

2012年7月14日～9月2日 巡回展「マンダラ展——チベット・ネパールの仏たち」石川県立歴史博物館

◎調査活動

・海外調査

2012年12月6日～21日—カタル、アラブ首長国連邦（中東におけるネパール移民の生活調査）

2013年3月18日～31日—ネパール（労働移民経験が社会的包摂に与える影響についての調査）

◎大学院教育

・論文審査

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究（研究代表者：名和克郎）研究分担者

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）【学位】工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）【専攻・専門】文化資源情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館 PORTA と人間文化研究機構 統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2: 53-68。

山本泰則・安達文夫

2009 「博物館資料情報統合検索のためのコアメタデータ」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）2009(16): 287-294。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176: 239-266。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人文系博物館資料のコアメタデータに関する研究

・研究の目的

博物館に収蔵されている資料のうち、いわゆる「もの」資料がもつ情報は、文書や書籍、絵画、写真などと比べて著しく異なった特質をもつ。というのは、ふつう情報はその内容とそれを保持する入れ物（媒体、メディア、キャリア）から構成されるが、もの資料の場合は内容と入れ物の区別があいまいで、資料の存在そのものが情報を表現しているためである。

本研究では、国立民族学博物館の民族誌資料（標本資料）を中心として、人が製作に関与して博物館に所蔵され、人文科学の研究対象となるもの資料について、それらを記述するために必要不可欠で最小限の共通属性（コアメタデータ）を抽出する。また、それを応用したものの資料情報の記述と蓄積、所蔵機関を超えた情報交換、横断検索の方法についての研究をおこなう。

・成果

昨年度抽出したコアメタデータの有用性を検証する方法のひとつとして、すでに提案されている博物館資料記述のための標準的なメタデータを本コアメタデータに変換できることを示すという方法をとった。国際博物館会議が提案する「博物館資料情報のための国際ガイドライン」および東京国立博物館が提案する「ミュージアム資料情報構造化モデル」のメタデータを分析し、これらで記述された情報を本コアメタデータへうまく変換できることを示した。

◎出版物による業績

[論文]

山田太造・山本泰則・古瀬 蔵・安達文夫

2012 「人文科学データベース統合検索のためのメタデータとその応用」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）2012(7): 71-78。

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176: 239-266。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年11月17日 「人文科学データベース統合検索のためのメタデータとその応用」『人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2012」：つながるデジタルアーカイブ——分野・組織・地域を越えて』情報処理学会、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟。

・広報・社会連携活動

2012年7月22日 「あたらしくなったビデオテーク——みんぱく最後のビデオテーク???'」第262回みんぱくウィークエンド・サロン

上羽陽子 [うえば ようこ]————— 助教

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[論文]

上羽陽子

2010 「NGO 商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2): 204-223。

2008 「インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編、藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』pp. 292-299, 京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的

現代インドにおいて、ものづくりの作り手の創意工夫や、手工芸技術の継承法について実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに選択しているかを明らかにすることを目的とする。同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップを通じて実践的研究を行なう。なお、本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）「伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究」）の課題として2010年～2012年にわたって実施した。

・成果

2012年度は、民族芸術学会で東ネパールの羊毛織物を対象とした学術報告をおこなう一方で、科学研究費補助金（若手研究（B）「伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究」）に関わる研究論文（「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37-1）を刊行した。また、実践的研究として、手工芸文化の理解を目的としたものづくりワークショップを特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見』、『マダガスカル 霧の森のくらし』などで、企画・実施した。

◎出版物による業績

[論文]

上羽陽子

- 2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1): 1-51。

[その他]

上羽陽子

- 2012 「糸づくりから織物まで」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「飾り紐」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「女性用巻衣 サリー」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「夜着」『国立民族学博物館カレンダー2013』。
 2012 「旅・いろいろ地球人 ずらりと並べる⑦ 組み合わせは無限大」『毎日新聞』6月21日夕刊。
 2012 「(特集・座談会)世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」『月刊みんぱく』36(8): 2-9。
 2012 「触ってみる！感じてみる！——織物再発見」『月刊みんぱく』36(8): 8-9。
 2012 「みんぱくのオタカラ インドのパトラ布団」『みんぱく e-news』135 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/135otakara>)。
 2012 「つくり手の『勘どころ』を記録する(私の研究と出会い)」人間文化研究機構監修『HUMAN』3: 142-146。
 2013 「衣装デザインと光」『月刊みんぱく』37(2): 4。
 2013 「みんぱく私の逸品 ザフィマニリの女性用帽子」『月刊みんぱく』37(3): 21。
 2013 「みんぱくのオタカラ 育児用寝台」『みんぱく e-news』141 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/141otakara>)。
 2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる② 『香ばしい』帽子」『毎日新聞』3月14日夕刊。
 2013 「くらしに生きる造形と装飾」国立民族学博物館編『霧の森の叡智 マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』pp. 86-93, 大阪: 国立民族学博物館。

Ueba, Y.

- 2013 Art and Decoration in Daily Life. In National Museum of Ethnology (ed.) *Handicrafting the Intangible: Zafimaniry Heritage in Madagascar*, pp. 86-93. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2013年3月28日 「ラバーリーのからだ機について」『手織機と織物の通文化的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年4月22日 「東ネパール・ルムジャタル村における羊毛織物のフェルト化について」『第28回民族藝術学会大会』大阪歴史博物館

・研究講演

- 2012年6月5日、12日、26日 「模写実践による異文化理解——インド西部刺繍布の製作技術から考える」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール(3回連続講座)
 2012年6月18日 「手織り絨毯の織技術について」『シルクロード絨毯塾』株式会社絨毯ギャラリー主催、神戸ファッションマート
 2012年8月22日 「インド、ラバーリーの刺繍布と通過儀礼——牧畜社会にみる伝統的形態の継承を考える」『第72回月例会——歴史・文化に親しむ会』NPO Klub Zukunft主催、梅田エステート・ビル5階
 2012年9月21日 「インドの刺繍」NPO 法人大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪市教育会館
 2012年11月6日 「インドの手工芸文化について」『群馬県立前橋高等学校(学外研修)』国立民族学博物館第5セミナー室
 2013年1月20日 「世界の糸、大集合！」『すいたんと行こう！みんぱく学校で世界のくらし大発見(技術・家庭)』一般社団法人吹田にぎわい観光協会主催・国立民族学博物館共催、国立民族学博物館第3セミナー室
 2013年2月23日 「一枚布をまとう世界——南アジアの女性たちのくらしと布」ふろしき研究会主催『第83回ふ

ろしきトーク』法然院

・広報・社会連携活動

- 2012年 8月 7日 「織機のカラクリ大発見」『博学連携教員研究ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」』関連ワークショップ、国立民族学博物館セミナー室・本館展示場内
- 2012年 9月 23日 「南アジアの衣装と文様表現」『第269回みんなくウィークエンド・サロン』
- 2012年10月 7日 「インド、牧畜民のからだ機について——ラバーリーを事例に」『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見』関連ミニレクチャー、国立民族学博物館特別展示場内
- 2012年10月21日 「見方を発見——染織資料と出会ってみよう」第273回みんなくウィークエンド・サロン
- 2012年10月23日、11月24日 「(機織りの実演) ジャカード織機の実演」特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見 (実行委員長：吉本 忍)』関連ワークショップ、国立民族学博物館
- 2012年10月28日 「インド、ラバーリーのからだ機に挑戦！」特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見 (実行委員長：吉本 忍)』関連ワークショップ、国立民族学博物館特別展示場内
- 2012年11月23日 「My 織機を作って裂織に挑戦！」大阪日本民芸館主催、秋季特別展『芹沢銈介と日本の染織』関連ワークショップ、大阪日本民芸館
- 2012年11月25日 「ヤギ毛の繊維利用について」第277回みんなくウィークエンド・サロン
- 2013年 3月 17日 「くらしに生きる編みもの」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』関連催し『ザフィマニリの敷物を編もう (おはなしの時間)』(7回連続講座の第1回目)、国立民族学博物館特別展示場内

・展示

特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」実行委員、特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」実行委員

◎調査活動

・海外調査

- 2012年 7月24日～8月 4日—マダガスカル (ザフィマニリ地域の森林資源利用に関する調査)
- 2013年 1月23日～2月14日—インド (伝統的技術の戦略的継承法—現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究の現地調査)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

「国際シンポジウム ICOM-CECA アジア太平洋地区研究集会」『人間文化研究連携共同推進事業』(代表：小島道裕) 連携研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会編集 (学会誌) 委員

- ・非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、京都嵯峨芸術大学「工芸概論」、「工芸研究」

川瀬 慈 [かわせ いっし] ————— 助教

1977年生。【学歴】京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了(2010)【職歴】日本学術振興会PD(2007)、マンチェスター大学研究員(2010)、ベルギー SoundImageCulture 客員講師(2011)【学位】博士(地域研究)(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010)【専攻・専門】映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[編著]

北村皆雄・新井一寛・川瀬 慈編

2006 『見る・撮る・魅せるアジア・アフリカ！——映像人類学の新天地』東京：新宿書房。

[論文]

Kawase, I.

2012 The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia-Challenges and Prospects for the Documentation. In J. Kawada (ed.) *Cultures Sonores d'Afrique V*, pp.65-80, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon. Yokohama: Universite Kanagawa.

[映像作品]

川瀬 慈

2012 『精霊の馬/When Spirits Ride Their Horses』

【受賞歴】

[国際映画祭入選]

2013 第10回 Worldfilm Festival of Visual Culture (エストニア)

2012 第6回モスクワ国際映像人類学祭

2012 第32回北欧人類学映画協会主催映画祭 (ノルウェー)

2012 第9回スラヴォニア国際民族映画祭 (クロアチア)

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovativo イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカの無形文化の保護と継承に資する民族誌映画制作

・研究の目的

今日消滅ないしは著しい変容を強いられているアフリカの地域社会の無形文化の保護と継承に資する民族誌映画の制作と活用の指針を示し、研究機関、国際機関、現地行政、現地社会等の中で議論を促進させる。

・成果

2012年度は第18回国際エチオピア学会（10月、ディレデワ大学、エチオピア）において、フィルムセッションを企画・実行し、エチオピア人研究者や報告者を含む6名が制作した民族誌映画の上映を行った。本セッションには研究関心を共有する学者や国際機関のスタッフ等が多数参加し、民族誌映画作品の制作方法論とその活用の在り方をめぐって活発な議論を行うことができた。2012年度、報告者の作品は、第6回モスクワ国際映像人類学祭、第32回北欧人類学映画協会主催映画祭（ノルウェー）、第9回スラヴォニア国際民族映画祭（クロアチア）、第10回 Worldfilm Festival of Visual Culture（エストニア）等の審査付の国際学術映画祭に入選し、公表された。

◎出版物による業績

[共著]

坂本龍一・塚田健一・分藤大翼・川瀬 慈ほか

2012 『Traditional Music in Africa』(commons: schola vol.11) 東京: Commons.

[論文]

Kawase, I.

2012 The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia: Challenges and Prospects for the Documentation. In J. Kawada (ed.) *Cultures Sonores d'Afrique V*, pp.65-80, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon. Yokohama: Universite Kanagawa.

2013 「文化の記録と映像表現——ブリュッセルの映像制作実習コース見聞記」『フィールドプラス』9: 24-25。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・映像番組

川瀬 慈 [映画制作]

2012 『精霊の馬—— When Spirits Ride Their Horses』 Hi-Vision、28分、アムハラ語（日本語・英語字幕）

2013 『春駒——群馬県川場村門前地区のまつり』 Hi-Vision、40分、日本語

2013 『ザフィマニリストイル』 Hi-Vision、35分、マダガスカル語（日本語字幕）

[映画公開]

2013年3月9日 『春駒——群馬県川場村門前地区のまつり』（Hi-Vision、40分、日本語）、第35回日本映像民俗学の会大会、福島県立博物館

・広報・社会連携活動

2013年3月1日 テレビ出演「アフリカの音楽（3）」『スコラ——坂本龍一 音楽の学校』NHK Eテレ

2013年3月8日 テレビ出演「アフリカの音楽（4）」『スコラ——坂本龍一 音楽の学校』NHK Eテレ

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年1月7日 “The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondar” First International Conference on Azmari, Centre for World Music, Hildesheim University.

◎調査活動

・海外調査

2012年5月7日～16日—ドイツ（第11回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭において審査員として参加）

2012年8月25日～9月11日—マダガスカル（特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」に関わる映像取材）

2012年10月13日～11月23日—ドイツ、エチオピア（エチオピア北部の音楽職能に関する調査と資料収集）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

第11回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭審査員

・非常勤講師

ベルリン自由大学メディア・映像人類学修士課程（集中講義）

国際学術交流室

西尾哲夫 [にしお てつお]————— 室長 兼：副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター

印東道子 [いんとう みちこ]————— 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子 [きくさわ りつこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

陳 天璽 [チェン ティエンシ]————— 兼：民族社会研究部教授

信田敏宏 [のぶた としひろ]————— 兼：民族文化研究部准教授

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]————— 兼：民族社会研究部准教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]————— 兼：民族文化研究部准教授

機関研究員

相島葉月 [あいしま はつき] 研究員

1977年生。【学歴】上智大学比較文化学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科博士課程修了（2011）【職歴】有限会社美誠社（2002）、現代東洋学研究所客員研究員（2009）、現代東洋学研究所研究員及びベルリン自由大学ムスリム文化・社会研究科ポストドク研究員（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師（2012）【学位】博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、北米中東学会、アメリカ人類学会、英国中東学会

【主要業績】

[論文]

Aishima, H.

2013 “Nicht nur Not Just for Fun”: Sport und Gesellschaftsschicht im neoliberalen Ägypten. In T. G. Schneiders (trans. and ed.) *Die Araber im 21. Jahrhundert: Politik, Gesellschaft, Kultur*, pp. 353-364. Wiesbaden: Springer VS.

2012 Contesting Public Images of ‘Abd al - Halim Mahmud (1910-78): Who is an Authentic Scholar? In P. Pinto et al. (eds.) *Ethnographies of Islam: Ritual Performances and Everyday Practices*, pp. 170-178. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Aishima, H. and A. Salvatore

2010 Doubt, Faith and Knowledge: The Reconfiguration of the Intellectual Field in Post-Nasserist Cairo. In F. Osella and B. Soares (eds.) *Islam, Politics, Anthropology*, pp. 39-53. London: Wiley-Blackwell.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトの空手家コミュニティに関する社会人類学的研究

・研究の目的

本研究の目的は、エジプトを代表する大衆的スポーツである空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考することにある。中東におけるモダニティの系譜を探究するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の1つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋的近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。

・成果

今年度の目標は、エジプトで空手道が「大衆的スポーツ」として受容された歴史的経緯の把握し、空手家コミュニティの形成と発展の過程を考察することであった。国営日刊紙アル＝アハラーム新聞で空手を紹介する記事が初めて掲載されたのが1972年3月に遡ることから、1960年代後半もしくは1970年代初頭から空手の稽古が行われてきたのではないかと仮説のもとに調査を始めた。

60歳代のエジプト人空手家への聞き取り調査を行った結果、1969年頃より上流階級向けの会員制スポーツクラブにて日本大使館職員による空手道の稽古が細々と行われていたことが判明した。エジプトはボクシングやレスリングなどの格闘技が盛んな国とはいえ、カラテの知名度は低く、稽古は体育館や道場ではなく屋外で行われていた。しかし、1971年にブルース・リー主演のカンフー映画『ビッグ・ボス』が大流行したのをきっかけに、自己防衛を目的としたスポーツとしてカラテ人気が一気に高まったという。1967年の第三次中東戦争でイスラエルに大敗を期して以来、軍事力の向上のため取り入れられた空手道が「大衆的スポーツ」として認識されるようになった背景には、中国拳法などの格闘シーンを取り入れた香港のアクション映画の流行が深く関

わっていたようだ。カンフー映画を鑑賞した上で空手を始めたとはいえ、「東洋」をひとくりにし、日本と中国の格闘技を混同していた様子は見られなかった。カンフー映画の流行が空手の普及に貢献した過程については今後の調査で明らかにしたい。

また、エジプト・オリンピック委員会の資料室で収集した文献より、空手の大衆化には政府の青少年教育政策も関わっていたことを裏付ける資料も見つかった。カンフー映画の流行により空手の知名度が向上したとはいえ、空手道の競技者は軍人か高級スポーツクラブの会員である富裕層に限られていた。しかし、1980年代以降に空手が青年及びスポーツ省の推奨スポーツに指定され、公営の文化施設で空手教室が開かれたことが大衆化につながったと言える。エジプトの学校教育についての先行研究は多数存在するものの、福祉政策の一環としてのスポーツ教育についての研究は皆無である。今後はエジプト政府が青少年教育や福祉政策の一環として空手道にどのような期待を持ち普及させたかを考察していきたい。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月27日 “Between ‘Public’ Islam and ‘Private’ Sufism: Producing a National Icon through Mass Mediated Hagiography.” 現代中東イスラーム世界・フィールド研究会、京都大学。

2013年3月7～8日 “Round Table.” Religion, Secularity, and the Public Sphere in East and Southeast Asia. アジア研究所、シンガポール国立大学。

◎調査活動

・海外調査

2013年3月25日～4月11日—エジプト（首都カイロの空手家コミュニティについての臨地調査および資料収集）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

英国イスラーム研究学会（BRAIS）諮問委員

岩谷洋史 [いわたに ひろふみ] ————— 研究員

1970年生。【学歴】鳥取大学教育学部総合科学課程卒（1995）、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了（1999）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得満期退学（2005）【職歴】神戸学院大学地域研究センターポストドクトラルフェロー（2005）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター（2010）【学位】修士（京都大学 1999）【専攻・専門】文化人類学、認識人類学、メディア論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、日本記号学会、日本認知科学会

【主要業績】

[論文]

岩谷洋史

2008 「仕事場における資源としてのインスクリプションの役割——酒蔵を事例として」『ソシオロジ』53(1): 55-72。

岩谷洋史・川村清志・星野次郎・大崎雅一・森下淳也

2008 「人類学研究支援環境DWBを用いた調査資料の再構成——多様な人類学的視点を内包するシステム構築」情報処理学会編『サービス指向のデジタル技術へ——人文科学のポテンシャル 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』（情報処理学会シンポジウムシリーズ）15: 129-136。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的調査資料のデジタルアーカイブ化に関する研究

・研究の目的

本研究の目的は、コンピュータなどのデジタルメディアを利用した人類学的な研究方法のあり方を模索し、主に調査によって収集された資料のデジタルアーカイブ化に関して考察することである。大学教育教材や文化資源として利用など社会的な還元を射程に入れた上で、収集された調査資料を映像民族誌として、あるいはデータベースとして、デジタルアーカイブ化していく方法を研究すると同時に、専門家でない一般の人においても

手軽に映像などを作成できることを前提に、コンテンツの作成や編集に関する手法や作成に際しての技術的な諸問題の検討を行う。簡素で効果的な作成プロセスを研究し、地域住民の手で地域文化を手軽に記録・編集・発信できるようなモデルを探究する。

・成果

人類学的な調査で収集された静止画像を用いて、ユーザ間で共有を目的とする双方向的なデータベースを構築し、試験的な運用を重ねた。

◎調査活動

・海外調査

2012年2月26日～3月12日—ウガンダ（ミエル・アグワラ儀礼にかかわる映像撮影・音声記録の情報収集）

加賀谷真梨 [かがや まり] ————— 研究員

1977年生。【学歴】お茶の水女子大学文教育学部卒（2001）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻（博士前期課程）修了（2003）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻（博士後期課程）修了（2006）【職歴】放送大学非常勤講師（2005-現在）、法政大学非常勤講師（2006-2011）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究院研究員（2006-2009）、札幌医科大学非常勤講師（2008-現在）、日本学術振興会特別研究員PD（2009-2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】博士（社会科学）（お茶の水女子大学 2006）【専攻・専門】文化人類学、民俗学南西諸島研究、ジェンダー研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、American Folklore Society

【主要業績】

[学位論文]

加賀谷真梨

2006 「小浜島と竹富島の生存戦略にみる女性の実践——沖縄におけるジェンダー関係の再検討」お茶の水女子大学。

[論文]

加賀谷真梨

2011 「『新しい公共』という概念への批判的一考察——沖縄の高齢者福祉の現場に見られる人々の〈間〉に着目して」『九州人類学会報』38: 63-70。

2005 「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242: 35-63。

【受賞歴】

2006 第26回日本民俗学会研究奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 沖縄の離島社会における高齢者ケアを通じた〈共同体〉の再生に関する研究
- 2) 離島の子どもの身体観・健康観・医療観に関する研究

・研究の目的

- 1) 2000年の介護保険法施行に伴い、沖縄の離島社会に内発的に形成された高齢者にケアを提供する住民団体とその活動が家族介護を代替する可能性、及び、その活動を軸に地域社会が《共同体（親密さや紐帯をもたらす感情や身体経験が産み出される場）》として刷新する可能性を検証する。
- 2) 「離島医療離れ」が生じている離島社会における子どもの身体観・健康観・医療観と親世代のそれとの比較を通じて、その連続性／不連続性とそうした現象が生じる要因、及び、「離島医療離れ」が子どもの身体と健康にもたらしている現象を明らかにする。

・成果

- 1) 2012年度は、高齢者福祉の推進を目的に結成された住民団体を擁する沖縄のある離島に関して、既に入手していたデータを整理分析した。高齢化率が30%を超えるこの離島において、介護予防事業を担う同活動の重要性は多くの島民に認識されている。にも関わらず、管見の限り、同団体の活動は島民全体が与するような

大きなうねりには至っていない。この背景として、〈イエ〉規範、〈近代家族〉規範、個人主義等、価値観や規範の輻輳の状況が島民を分化させたままに止め置いていることを具体的な事例から明らかにした。他方で、積極的に高齢者ケアに携わっている同団体の職員に目を転じると、彼らは伝統的な司祭者の家筋の者か本土出身者のいずれかに二分できる。前者の理由として、島民の生活の安定に深く関与してきた彼らの属性がケアの授受関係と合致し、またそうした役割期待をケアの実践過程で再帰的に強化していることを挙げた。後者は、福祉という旧来的な島の社会構造と分離した実践だからこそ、そうした構造に組み入れられていない本土出身者が参画しやすいためだと分析した。この住民団体のように、新たな共同性を創出し継続させていくには、理念だけでは不十分であり、旧来的な社会構造やそれに付随する役職が暗に陽に牽引要因になっていることを国立民族学博物館第246回研究懇談会で発表した。この成果については目下執筆中であるが、共同性の立ち現れ方に関する考察の一端を第46回文化人類学会研究大会で発表し、その発表内容を東京大学東洋文化研究所の雑誌『東洋文化』に寄稿した。

- 2) 2012年度は、沖縄・八重山諸島のある離島で3度に亘りフィールドワークを行った。調査協力を得た親と子それぞれに行ったインタビュー調査から、子どもの身体観・健康観・医療観が、小学校での教育指導の影響よりも、親の世界観に大きな影響を受けていることが明らかになった。沖縄の離島には当該社会を自然の宝庫としてまなざすと同時に、管理社会への批判的意識を持つ本土出身の母親が少なくない。そうした意識が強い親の子どもの方が、より自分の身体や動物の生命に対して自然主義的観念を持つことが明らかになった。また、小学校での参与観察から、幼少期から少人数で長く付き合っている環境が、肥満や痩せといった身体的特徴やジェンダー規範を形骸化させている一方で、そうした環境下にあっても子ども同士の差異の有徴化は行われていることが明らかになった。この研究成果については、2013年度中に論文にまとめ寄稿する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

加賀谷真梨

2012 「プロセスとしての〈共同体〉——沖縄・波照間島の『戦争マラリア』をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93: 79-97。

[その他]

加賀谷真梨

2012 「『なんくるないさ〜』とはいかない沖縄離島の高齢者福祉」『月刊みんぱく』36(10): 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年1月27日 「人類学でいじめを読む」『現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」』

・みんぱく研究懇談会

2013年1月23日 「〈地域共同体〉の再定位に挑む——沖縄離島社会における高齢者福祉の展開に着目して」第246回みんぱく研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「『戦争マラリア』の記憶に見透かせる〈共同性〉と〈絶対矛盾的自己同一〉」日本文化人類学会第46回年会、広島大学

・広報・社会連携活動

2012年8月12日 「沖縄の離島社会における高齢者福祉」第265回みんぱくウィークエンド・サロン
2012年6月16日 神奈川県民間支援団体等スタッフ研修事業 講師

◎調査活動

・国内調査

2012年5月7日～5月13日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2012年8月24日～9月1日—沖縄県竹富町（小浜島の盆行事及び親族構成に関する調査）

2012年11月11日～20日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2013年3月6日～17日—沖縄県竹富町（離島の子ども身体観・健康観・医療観に関する調査）

2013年3月23日～29日—沖縄県竹富町（小浜島の婚姻習俗に関する研究）

・海外調査

2013年2月3日～18日—フランス（フランス国内の家族・親族研究の動向調査）

◎社会活動・館外活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
法政大学沖縄文化研究所研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「沖縄近代法の構造とその歴史的 성격」（代表者：田里 修）研究協力者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「離島の子どもの身体観・健康観・医療観と医療環境とのかかわりに関する人類学的研究」（代表者：道信良子）研究分担者
- ・他の機関から委嘱された委員など
比較家族史学会編『追補版 新修事典家族』（仮題）編集委員
- ・非常勤講師
お茶の水女子大学「地域文化論」、放送大学「家族の人類学」、札幌医科大学「21世紀問題群」

河合洋尚 [かわい ひろなお] 研究員

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）【職歴】嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）【専攻・専門】社会人類学、都市人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[論文]

河合洋尚

- 2012 「広東省東江流域における客家文化の創造と景観建設」瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再生——歴史と空間からの総合的検討』pp.135-166, 東京：風響社。
- 2010 「客家文化を再考する——エスニック空間の生産とその景観化の視点から」『贛南師範学院学報』（中国江西省贛南師範学院編集部）31(2): 3-9（中国語）。

Kawai, H.

- 2011 The Making of the Hakka Culture: The Social Production of Space and Landscape in Global Era. *Asian Culture* (Singapore Society of Asian Studies) 35: 50-68.

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環南シナ海における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 客家研究にまつわる先行研究の整理

・研究の目的

- 1) 日本では萌芽的な段階にある景観人類学を理論的に整理するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解説する。
- 2) 漢族のサブ・エスニック集団である客家に特に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。華南地方の客家に対する理解を深めるとともに、中国西南地方および東南アジアの華人社会における客家とのつながりを考察する。
- 3) 国際的な対話に欠ける客家研究の現状を脱するべく、とりわけ日本やアメリカで蓄積された客家の人類学的研究を再読し、それを中国客家学に紹介する。

・成果

- 1) 景観人類学的手法から、華南客家社会における空間／景観の形成過程について明らかにした。その結果、客家というエスニシティは、自然発展的なものではなく、市場経済化政策採択以降の空間政策と関連した、空

間の生産の産物であることを明らかにした。この研究成果は、国外の雑誌だけでなく、『国立民族学博物館研究報告』でも整理した。

- 2) フィールドワークおよび文献調査を通し、中国広東省、広西チワン族自治区、四川省の客家についての研究を継続させた。また、東南アジアの客家をめぐるフィールドワークも促進させた。空間的ネットワークから客家を捉える視点は、国際シンポジウムおよび日本の学会にて発表した。
- 3) 国内外の客家研究の動向を学会誌にて発表した。他方、日本の客家研究について1冊の本にまとめる機会を得ることができ、原稿を出版社に提出した。目下、出版待ちである。

◎出版物による業績

[論文]

河合洋尚

- 2012 「囲龍屋の多角的分析に向けて——広東省河源市の伝統民居をめぐる一考察」房 学嘉・鄔 観林・冷 剣波・宋 徳剣編『客家河源』pp. 344-352, 広州: 華南理工大学出版社 (中国語)。
- 2012 「『民系』から『族群』へ——1990年代以降の客家研究におけるパラダイム転換」『華僑華人研究』(日本華僑華人学会) 9: 138-148。
- 2012 「囲龍屋の伝統的知識とその重層性について——景観人類学のアプローチによる客家建築文化研究の再考」『嘉応学院学報』(中国嘉応大学) 153: 5-11 (中国語)。
- 2012 「客家地区における風水とその動態性——景観人類学のアプローチから」『客家研究輯刊』(中国嘉応大学客家研究所) 40: 14-22 (中国語)。
- 2012 「広西省玉林市における客家意識と客家文化——土着住民と帰国華僑を対象とする予備的考察」『客家と多元文化』(亜州文化総合研究所出版会) 9: 28-47。
- 2012 「風水範疇の可変性について——客家囲龍屋をめぐる景観人類学的考察」『アリーナ』(中部大学国際人間学研究所) 14: 159-168。
- 2013 「空間概念としての客家——『客家の故郷』建設活動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』(国立民族学博物館) 37(2): 199-244。
- 2013 「中国客家地域における『霊性』と宗教景観の再生」『唯物論研究』(唯物論研究会) 122: 110-120。
- 2013 「中国客家地域におけるインドネシア帰国移民の再統合」伊藤 眞編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』2010~2012年度科学研究費補助金(基盤研究(B))報告書(課題番号22320175) pp. 89-105。

Kawai, H

- 2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World* 3(1): 39-56.

[その他]

河合洋尚

- 2012 「World Watching from South China 変わりゆく清明の節句の墓参り」『みんぱく e-news』130 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/130>)。
- 2012 「覚醒する自己——四川省郊外の客家意識」『月刊みんぱく』36(9): 22-23。
- 2013 「瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』」『中国21』(愛知大学現代中国学会) 38: 227-232。
- 2013 「景観人類学の新たな可能性を探る」『民博通信』140: 28-29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2012年11月3日 「客家都市の建設——梅州市における華僑ネットワークと景観創造」国際フォーラム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』国立民族学博物館
- 2012年11月25日 「エスニック・ディスコースと社会空間——広西と四川における客家空間の生産」国立民族学博物館機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第1回国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2012年10月14日 「景観人類学の理論と射程」『ランドスケープの人類学——視覚化と身体化の視点から』

・みんぱく研究懇談会

- 2012年9月26日 「中国人類学における漢族研究の動向」第242回みんぱく研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年7月22日 「趣旨説明」、「『客家らしい』景観の創造と再解釈——広東省梅州市の都市部の事例より」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会・東アジア人類学研究会共催シンポジウム『文化のフロー——東／東南アジアにおける言説・モノの流動と摩擦』早稲田大学
- 2012年11月10日 「客家ディスコースと文化産業——梅州、玉林、成都を例として」2012年中台湾客家文化學術研討会（台中市政府客家事務委員会・橋光科技大学主催）、東勢高級工業職業学校（中国語）
- 2013年3月10日 「趣旨説明——公共人類学について」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会・東アジア人類学研究会・仙人の会共催シンポジウム『公共人類学と東アジア——日本での経験から』法政大学

・広報・社会連携活動

- 2013年3月3日 「客家建築の世界」第290回みんなくウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

- 2012年6月27日～7月7日—シンガポール、マレーシア（東南アジアにおける漢族研究の動向調査）
- 2012年8月7日～21日—マレーシア（マレーシア・サバ州における華人の移動と適応に関する社会人類学的研究調査）
- 2012年12月18日～21日—中華人民共和国（中国教育部青年科学研究費プロジェクト成果報告会参加）
- 2013年1月10日～20日—中華人民共和国（広東省の客家華僑文化に関する調査）
- 2013年2月4日～18日—オーストラリア、フィジー（オセアニアにおける華僑華人研究の動向調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

- 流通科学大学「民族文化誌」

呉屋淳子 [ごや じゅんこ] ————— 研究員

1978年生。【学歴】沖縄国際大学法学部卒（2001）、ソウル大学大学院人類学科修士課程修了（2007）、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】ソウル大学大学院人類学科ティーチングアシスタント（2005）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2012）【学位】修士（人類学）（ソウル大学大学院 2007）【専攻・専門】教育人類学【所属学会】日本文化人類学会、韓国教育人類学会、日本比較教育学会

【主要業績】

[論文]

呉屋淳子

- 2011 「学校教育における郷土芸能の実践様相と教師の役割——沖縄八重山諸島の事例を中心に」韓国教育人類学会編『教育人類学研究』14(2): 184-208。
- 2007 「音楽をする (musicking)」を通して見る国楽教育——小学校音楽教科時間を中心に」韓国教育人類学会編『教育人類学研究』10(2): 171-195。

Goya, J.

- 2011 “Tanedori” of Taketomi Island: Education of Performing Arts and Interrogational Transmission. *International Journal of Intangible Heritage* 6: 86-94.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代沖縄の高等教育機関における伝統芸能の継承と創生に関する研究

・研究の目的

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来に

はなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から 1) 高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、2) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が与える影響を明らかにする。

・成果

- 1) 沖縄県の高等教育機関に設けられた伝統芸能コースで教授を受けた若手実演家を対象に、2012年10月から2013年2月までインタビュー調査を行い、彼らのライフストーリーの収集・分析を行った。その結果、二重的な教授過程に見られる両者の関係（高等教育機関と従来の徒弟制のなかでの教授）が明らかになった。
- 2) 2013年1月に国立歴史民俗博物館で行われた『平成22年度共同研究：人の移動とその動態に関する民俗学的研究』において琉球芸能の流派をめぐる教授の実態に着目して明らかにした研究を発表した。また、この成果については、2013年度中に『国立歴史民俗博物館研究報告』で成果論集を出版予定である。
- 3) 若手芸能実演家のライフストーリーをもとに、二重的な教授過程に見られる両者の関係（高等教育機関と従来の徒弟制のなかでの教授）に着目し明らかにした研究は、2013年4月に米国・サンディエゴで開催される“2013 Biennial Meeting of the Society for Psychological Anthropology”において発表予定（2013年4月5日）である。

◎出版物による業績

[その他]

呉屋淳子

2013 「わたしの芸能三番口説（くどうち）」『月刊みんぱく』37(1): 22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年7月15日 「学校教育における伝統芸能の技の継承と『流派』——八重山の高等学校を事例に」沖縄文化協会2012年度公開発表会、沖縄国際大学
- 2013年1月26日 「人の移動の八重山芸能の誕生」『平成22年度共同研究：人の移動とその動態に関する民俗学的研究』国立歴史民俗博物館
- 2013年1月30日 「学校教育のなかの伝統芸能——沖縄県八重山諸島の事例から」『2013年国際学術大会・日本の文化と芸能』中央大学（韓国）

・広報・社会連携活動

- 2012年度学習キット「みんぱく ソウルの子ども時間」制作担当
- 2012年7月1日 「音楽の祭日2012 in みんぱく」プロジェクトメンバー、国立民族学博物館
- 2012年8月7日 「仮面をつくって語って異文化理解」プロジェクトメンバー、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく『学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする』国立民族学博物館
- 2013年3月17日 「学校の中の八重山芸能」第291回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

- 2012年8月17日～28日—沖縄県（沖縄研究の可能性についての意見交換および現地の博物館における沖縄展示の方向性についての調査）
- 2012年10月13日～15日—沖縄県（琉球芸能の指導に関する聞き取り調査）
- 2012年11月14日～17日—沖縄県（琉球芸能の指導に関する資料調査）
- 2013年1月7日～9日—東京都（琉球芸能に関する聞き取り調査）
- 2013年2月2日～8日—沖縄県（琉球歌劇に関する聞き取り調査）
- 2013年2月9日～11日—東京都（琉球芸能に関する資料調査）
- 2013年2月12日～14日—沖縄県（琉球歌劇に関する聞き取り調査）
- 2013年2月28日～3月10日—東京都、愛知県（琉球芸能に関する聞き取り調査および名古屋における韓国関係文化資料の調査）

・海外調査

- 2012年5月7日～9日—大韓民国（海外コリアン研究のための資料収集）
- 2012年6月14日～20日—大韓民国（みんぱく韓国版制作のための調査）

- 2012年9月3日～16日—大韓民国（みんぱっく制作および共同研究）
 2012年10月4日～8日—大韓民国（海外の高等教育機関における琉球芸能の教育実践に関する現地調査）
 2012年11月7日～11日—大韓民国（韓国総合芸術大学における琉球芸能の教育に関する聞き取り調査）
 2012年12月6日～10日—大韓民国（韓国総合芸術大学における琉球芸能の教育に関する聞き取り調査）
 2013年1月28日～30日—大韓民国（中央大学日本研究所2013年国際学術大会参加）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究」研究代表者

松本雄一 [まつもと ゆういち] ————— 研究員

1976年生。【学歴】東京大学文学部歴史文化学科卒（1999）、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程修了（2001）、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程単位取得退学（2006）、イエール大学大学院人類学部修士課程修了（2007）、イエール大学大学院人類学部博士課程修了（2010）【職歴】イエール大学人類学部教授付アシスタント（2010）、南山大学人類学研究所非常勤研究員（2011）、東京医科歯科大学教養部非常勤講師（2011）、埼玉大学教養学部非常勤講師（2011）、ハーバード大学附属ダンバートンオークス研究所研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】Ph. D. (Anthropology)（イエール大学大学院人類学部 2010）、M. Phil. (Anthropology)（イエール大学大学院人類学部 2007）、修士（考古学）（東京大学大学院 2001）【専攻・専門】アンデスの考古学及び人類学、特にアンデス文明の初期形成過程の研究【所属学会】古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[博士論文]

Matsumoto, Y.

2010 The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in The Peruvian South-central Highlands. Ph. D Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.

[論文]

松本雄一

2013 「神殿における儀礼と廃棄——中央アンデス形成期の事例から」『年報人類学研究』3: 1-4。

Matsumoto, Y.

2012 Recognizing Ritual: The Case of Campanayuc Rumi. *Antiquity* 86: 746-759.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

周縁から見たアンデス文明の形成過程

・研究の目的

従来の研究で、“周縁”社会とされて重視されていなかった社会の考古学的研究からアンデス文明の形成過程を問い直す。

・成果

2007年から2008年にペルー中央高地で行った考古学調査の成果を元に論文を執筆し、英文・和文計4本が査読誌に掲載された（下記業績参照）。

◎出版物による業績

[論文]

松本雄一

2013 「神殿における儀礼と廃棄——中央アンデス形成期の事例から」『年報人類学研究』3: 1-41。

Matsumoto, Y.

2012 Recognizing Ritual: The Case of Campanayuc Rumi. *Antiquity* 86: 746-759.

Matsumoto, Y. and Y. C. Palomino

2012 Early Horizon Gold Metallurgy from Campanayuc Rumi in The Peruvian South-central Highlands. *Ñawpa Pacha: Journal of Andean Archaeology* 32(1): 115-130.

Matsumoto, Y., J. Nesbitt, and D. Paracios

2012 Mitomarca: a possible fortification in the Upper Huallaga Basin. *Andean Past* 10: 272-277.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年1月27日 「遠隔地交流と複雑社会の形成——アンデス中央高地の事例から」 民ぱく公開フォーラム 『古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較』 キャンパス・イノベーションセンター東京

・民ぱく研究懇談会

2013年2月27日 「“周縁”社会における文明の初期形成——アンデス形成期の事例から」 第247回民ぱく研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年7月19日 ‘Al sur de Chavín: interacción interregional entre la sierra central y la costa sur del Perú durante el Periodo Formativo.’ Symposium “La complejidad social del periodo Formativo en los Andes Centrales” at 54th International Congress of Americanists, University of Vienna, Austria.

2012年12月1日 「ペルー、カンパナユック・ルミ遺跡における神殿の再利用に関する考察」(ユリ・カベロ・パロミーノ、エディソン・メンドーサと合同報告) 古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館

・研究講演

2012年9月15日 「考古学理論とアンデス形成期研究」アンデス文明研究会定例講座。

・広報・社会連携活動

2013年1月20日 「アンデスの神殿とその魅力」第284回民ぱくウィークエンドサロン

◎調査活動

・海外調査

2012年6月27日～7月7日—シンガポール、マレーシア（研究戦略センター研究動向調査）

2012年7月14日～22日—オーストリア（第54回国際アメリカニスト会議参加）

2012年8月7日～21日—マレーシア（科学研究費補助金調査）

2013年1月10日～20日—中国（中国広東省科学研究費補助金調査）

2013年2月4日～18日—オーストラリア、フィジー（研究戦略センター研究動向調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

愛知県立大学（特殊講義）

吉田ゆか子 [よしだ ゆかこ] ————— 研究員

1976年生。【学歴】国際基督教大学教養学部卒（2000）、筑波大学地域研究研究科東南アジアコース（修士課程）修了（2002）筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻（博士課程）修了（2012）【職歴】株式会社インテージ マーケティング事業部（2002-2004）、日本学術振興会 特別研究員（DC2）（2009-2010）、筑波大学人文社会系博士特別研究員（2012）、国立民族学博物館 研究戦略センター研究部機関研究員（2012）【学位】博士（学術）（筑波大学 2012）、修士（地域研究）（筑波大学 2002）【専攻・専門】文化人類学 インドネシア（バリ）地域研究 芸能研究【所属学会】日本文化人類学会、東方学会、「宗教と社会」学会

【主要業績】

[論文]

吉田ゆか子

2011 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1): 11-32。

2011 「仮面が芸能を育む——バリ島トベン舞踊劇に注目して」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』pp. 191-

210, 京都: 京都大学学術出版会。

2009 「バリ島仮面舞踊劇トベン・ワリと『観客』——シアターと儀礼の狭間で」『東方学』117: 156-139。

【受賞歴】

- 2011 みんなく若手セミナー賞
- 2009 東方学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究
- 2) バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面の利用に関する研究
- 3) 観光ショーにおける仮面の利用に関する研究

・研究の目的

- 1) 儀礼の一部でありかつ人々を楽しませる芸能でもある仮面舞踊劇トベン・ワリ。仮面を取り換えながら巧みに役を演じ分ける演者の名人芸としてとらえられてきたこの演目を、非演者中心的な視点から再考する。上演を生み出す主体は社会か演者個人かと問うのではなく、仮面や伴奏曲や観客の反応に身をゆだねながら、「自分ではない何者か」になろうとする演者の受動性や、仮面のエージェンシーや、仮面が媒介する他の人々と神格の働き、仮面を与えたり助言や批評をくわえたりして演者を育てる周囲の人々に着目しながら、人・モノ・神格の動的な複合体としてのトベン・ワリの姿を解明する。
- 2) ケテウェル村の仮面舞踊「天女の舞 (*topeng legong*)」は長い歴史と際立った神聖性においてバリ社会で特別な価値を置かれている奉納芸であり、そこに使われる一連の仮面はご神体としてパヨガン・アグン寺院にて祀られている。この演目は芸術祭などの世俗のイベントに招かれることがあるが、仮面の神聖性を守るため、寺院はレプリカの仮面を作成しそちらで代用している。本研究は、このレプリカの仮面の位置づけがしばしば曖昧であり、かつオリジナルとの境界をかく乱するような側面を有していることに着目する。そして、このレプリカの仮面が天女の舞の実践や地元共同体にどのような影響をもたらしているのかを明らかにし、レプリカや類似品の制作や利用といった営みが有している豊かな可能性について考える。
- 3) バリの村落ではバロンの仮面がご神体として祀られている。バリでは、観光芸能ショーなど世俗の上演にはこれらご神体ではなく、神聖でない仮面を用いることが法令で定められている。しかし実際には、この観光用の仮面が、次第に神聖性を帯びたり、儀礼で地元のご神体の仮面と共演したりというケースがある。本研究は、観光ショー用に生み出された仮面が引き起こす様々な出来事や、人々と仮面の関わり合いを分析し、これまで人間中心的に論じられてきた観光化という現象をモノ（仮面）の側からとらえなおす。

・成果

- 1) 本年度は特に、トベン演者が70年代と比較して非常に増加している現象に焦点をあてた。近年の宗教儀礼の活性化による上演頻度の上昇、学校教育機関における育成や印刷メディアの発達による知識の流通など学習チャネルの多様化がこの現象の背景にあることがあきらかになった。またその中で、村の外からやってくる専門家によって担われていたトベンは現在観客にとっての身近な隣人によって上演されることが多く、そのなかで演者と観客の関係も変化しつつあるということが理解された。この分析結果は6月に「宗教と社会」学会で発表した。また前年度までの研究成果を合わせ、博士論文を筑波大学に提出し、日本人類学会の近畿地区懇談会で口頭発表をおこなった。
- 2) 1年半に一度巡ってくるパヨガン・アグン寺院の大祭を調査し、この儀礼においてオリジナルとレプリカの仮面がそれぞれどのように扱われ、どのように使い分けられているのか、仮面を取り巻く人々の振る舞いを比較した。またレプリカが作られた時代の踊り子たちから、当時の様子についてインタビューした。さらに、天女の舞を収録したテレビ番組やDVD、ネット上の動画を収集・分析した。前年度までの研究成果を合わせ、『国立民族学博物館研究報告』に投稿すべく執筆を開始した。
- 3) 現在活動中あるいは過去に活動していた7つのバロン・ダンス観光ショーの上演劇団に対してインタビューをおこない、設立の経緯や、仮面の入手、手入れ、活動履歴や現在の活動状況等を明らかにした。また、それらのうちのいくつかの劇団の地元で祀るご神体のバロンの履歴や儀礼実践に関する観察および情報収集をおこなった。調査の中で、ご神体のバロンと、観光ショー用のバロンのほかに、門付け芸 (*lawang*) に用いられる数々のバロンがあること、それらのバロンも、観光ショーの仮面と類似して、非神聖なものとして

生み出されながら、次第にご神体になってゆく事例が数多いことも明らかになった。この調査の結果を踏まえ、より対象劇団をしばり、観光ショーや儀礼実践のほか門付け芸も視野に入れた形での重点的な次回の調査を計画中である。

◎出版物による業績

[博士論文]

吉田ゆか子

2012 『バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究——名人芸からネクサスへ』筑波大学大学院人文社会科学
研究科。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月18日 「バリ島仮面舞踊劇トベンの演者増加とその背景——1970年代との比較から」『宗教と社会』
学会第20回学術大会、長崎国際大学

2013年3月30日 「バリ島仮面舞踊劇トベンの人類学的研究——名人芸からネクサスへ」日本文化人類学会近畿
地区研究懇談会 2012年度博士論文・修士論文発表会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2013年2月2日 「バリ島の仮面文化——トペン舞踊劇を中心に」レクチャーと仮面舞踊デモンストレーショ
ン、ガネシャ&ヘリテイジOB会、ジュンバタンメラ赤坂（東京）

◎調査活動

・海外調査

2012年6月18日～7月7日—インドネシア共和国（バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面に関する調査）

2013年2月25日～3月12日—インドネシア共和国（観光芸能ショー用の仮面に関する人類学的研究調査）

◎社会活動・館外活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

2012年7月～2013年6月 「観光芸能ショー用の仮面の人類学的研究——バリ島バロン・ダンスの事例から」平
成24年度三島海雲記念財団学術研究奨励金（人文）

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

宮本万里 [みやもと まり]——— 研究員

1977年生。【学歴】山口大学人文学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程
研究指導認定退学（2006）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2006）、京都大学東南アジア研究所研究員
（2009）、北海道大学スラブ研究センター学術研究員（2009）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド
地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学 2009）、修士（地域研究）
（京都大学 2006）、学士（文学）（山口大学 2000）【専攻・専門】南アジア地域研究、現代ブータン研究、政治人類
学、国民形成と環境政治【所属学会】日本南アジア学会、日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

宮本万里

2009 『自然保護をめぐる文化の政治——ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策』東京：風響社。

[論文]

宮本万里

2008 「森林放牧と牛の屠殺をめぐる文化の政治——現代ブータンの国立公園における環境政策と牧畜民」『南
アジア研究』20: 77-99, 日本南アジア学会。

2007 「現代ブータンにおけるネイション形成——文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」『人文学報』
94: 77-100, 京都大学人文科学研究所。

【受賞歴】

2009 日本南アジア学会賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ブータンにおける環境主体の形成と村落の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

・研究の目的

行政システムの精緻化に伴い様々な制度が急速に農村に入り込みつつある近年のブータンにおいて、人々が偏在する国家や制度をいかに引き受けようとしているのかを、特に環境保護にかかわる統治と主体化のプロセスに注目しながら考察する。

・成果

今年度は研究課題に関してブータンでの2度のフィールド調査および英国での1度の資料調査を行った。ブータン国立ウゲンワンチュック環境研究所との連携のもと、ブータンの村落社会における価値体系の変容を、開発と民主化そして森林資源の利用の変化を手掛かりに考察した。また、ブータンの民主化プロセスをより多面的に理解するために、ブータン国外で居住する人々への調査の可能性について、英国でブータン難民の第三国移住者の政治意識に関しての予備調査を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

宮本万里

2012 「チャンからみたブータンの村落社会と国家」松本 淳・横山 智・荒木一視編『モンスーンアジアのフードと風土』pp.204-220, 東京: 明石書店。

2013 「現代ブータンの祭りと儀礼——顔のない踊り「テル・チャム」」細井尚子編『ユーラシアにおける仮頭の研究』pp.49-57, 東京: 立教大学アジア研究研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム・研究集会などでの報告

2012年6月24日 「現代ブータンにおける制度と民主化をめぐる政治人類学的研究」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

2012年7月4日 「ブータン——『幸福社会』という国づくり」東洋大学国際哲学研究センター第3ユニット第2回研究会、東洋大学

2012年8月18日 「現代不丹の聖俗界线——查姆舞の参与者及其变迁」中国湖南临武侗文化国际学术研讨会、临武县临武国际大酒店一楼大厅

・みんぱく研究懇談会

2012年11月21日 「『環境にやさしい我々』という自画像および主体をめぐる文化の政治について——現代ブータンの国立公園の事例から」第244回みんぱく研究懇談会

◎調査活動

・海外調査

2012年8月26日～9月5日—ブータン（体制転換期ブータンにおける自然保護体制の変化と国立公園下の村落の社会変容に関する政治人類学的調査）

2013年2月11日～25日—イギリス（19世紀ヒマラヤ地域の社会と文化に関する資料収集および、英国移住者に関する資料収集と聞き取り調査）

2013年3月10日～26日—ブータン（自然国立公園における自然保護体制と人々の資源利用の変化に関する聞き取り調査および植物採集）

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進センター「現代インド地域研究」国立民族学拠点拠点研究員、北海道大学スラブ研究センターGCOEプログラム「境界研究の拠点形成」共同研究員、科学研究費補助金（若手研究（B））「ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「コミュニティで支える高齢者ヘルスケア・デザ、イン——国際地域比較研究」

(研究代表者：松林公蔵) 研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(研究代表者：名和克郎) 研究分担者、立教大学学術推進特別重点資金(SFR)「ユーラシアにおける反文化圏的な世界認知の研究——仮頭・仮面に注目して」(代表者：細井尚子) 研究分担者

・非常勤講師

大阪大学外国語学部「南アジア文化演習Ⅱ」、立命館大学国際関係学部「南アジア研究Ⅱ」、神戸大学国際文化学部「南アジア社会文化論」

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

STIRK, Ian Christopher [スターク、イアン・クリストファー]——教授

1946年生。【学歴】ケンブリッジ大学卒(1967)、北ウェールズ大学教職専門課程修了(1969)、エセックス大学言語学部博士課程単位取得(1978)【職歴】アンカラ大学講師、トリポリ大学(リビア)講師、エセックス大学講師を経て大阪外国語大学外国人教師(1980)、国立民族学博物館併任助教授(1994)、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員助教授(2004)【学位】M. A.(エセックス大学 1976)

【主要業績】

[論文]

Stirk, I. C.

2005 「Restoring the naturalness of deduction」『大阪外国語大学英米研究』29: 43-61。

2004 「Naturally ad absurdum」『大阪外国語大学英米研究』28: 99-109。

2003 「On the Welsh verb system」『大阪外国語大学英米研究』27: 19-32。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

対照言語学の研究

・研究の目的

自然言語の統語論的解析をすすめ、類推(analogy)にもとづく構文文法の成立過程を考察する

・成果

本年度は以下の覚書や論文を記した。これらはホームページ(<http://www.iancstirk.com/Language/>)にて参照することができる。

1) 個人言語について(Something from my idiolect? 2012年10月31日)

「編集された、～による導入(edited and with an introduction by …)」の表現についてのまとめを行った。非常に非文法的だが、私が出会ったすべてのネイティブスピーカーは、それを許容している。個人言語からなにか発見があるかは疑問である。

2) 類推の理論(A theory of analogies? 2012年11月5日)

類推は、基本的にかなり曖昧な概念であるので、ここで私は、言語学习上、私の仕事に採用する予定の類推の種類を規定することで、それを少し強化してみた。そのアイデアはやや独断的であるが、それらが許容可能な結果につながるように今後もそれを用い続けることにした。

3) ラテン語の別視点(Another look at Latin 2012年12月1日)

屈折言語として、ラテン語は、人間が母国語を学ぶ方法論として類推の非常に良い用例である。本論文では、実際に英語の意味とラテンの文章の集合を取り、その統語構造が類推することによって決定すること可能かどうかを実証することを試みた。

4) 単語の境界と類推(Word boundaries and analogy 2013年3月26日)

明らかに単語の境界は書き言葉において最も明白であるが、ネイティブスピーカーは話し言葉によっても、

自然に特定の単語の境界がある。ここでは、これらの境界も類推によって定めることができること、およびネイティブスピーカーの記憶に効率的に語彙を保存することを可能にすることを示そうとした。本論文では、再びサンプルを提供するために屈折言語であるラテン語を使用している。私は彼らがその言語でのネイティブスピーカーと同じ境界を作るかどうかを調査するために、今後、トルコの膠着語で同じ類推の方法を使用したいと考えている。

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

山内直樹 [やまうち なおき]————— 教授

1947年生。【学歴】早稲田大学第二文学部卒業（1977）【職歴】山内編集事務所設立（1984）、季刊文化誌『is』編集長（1984）【所属学会】文化資源学会

【主要業績】

[共著]

山内直樹・辛島 昇・坂田貞二他
1981 『インド』東京：実業之日本社。

[編著]

山内直樹編
1998 『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』東京：ポラ文化研究所。

[論文]

山内直樹
1976 「中部インド・ビームベトカの岩壁画群Ⅰ～Ⅲ」『考古学ジャーナル』121, 124, 125。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

広報誌のあり方に関する研究

・研究の目的

みんぱくの広報誌は研究活動・博物館活動を市民に伝え、文化人類学・民族学および関連諸分野に係る活動を広く社会に還元することを目的とする。そのために、これらの分野に関する出版、放送、ネットなど各種メディアの発信と受容の社会的動向を把握しながら、広報誌研究の事例として民博に焦点をあて、比較分析する。

・成果

みんぱくの活動を市民に伝え、かつ研究の社会的還元媒体である広報誌のあり方、またその内容のテーマ性、現在の意義について検討を重ね、比較分析の結果として特集テーマの内容、連載記事（新企画）等に反映させた。

中山京子 [なかやま きょうこ]————— 准教授

1972年生。【学歴】東京学芸大学教育学部卒（1990）、東京学芸大学教育学研究科修士課程修了（1997）【職歴】静岡県公立小学校教諭（1994）、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭（1998）、京都ノートルダム女子大学講師（2005）、京都ノートルダム女子大学准教授（2009）、帝京大学准教授（2010）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2010）【専攻・専門】社会科教育 国際理解教育【所属学会】日本国際理解教育学会、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、日本移民学会、異文化間教育学会

【主要業績】

[単著]

中山京子
2012 『先住民学習とポストコロニアル人類学』東京：御茶の水書房。

【編著】

中山京子編著

2012 『ガム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』東京：明石書店。

森茂岳雄・中山京子編著

2008 『日系移民学習の理論と実践——グローバル教育と多文化教育をつなぐ』東京：明石書店。

【受賞歴】

2012 沖永壮一文化学術奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

・研究の目的

本研究では、以下の2つを目的とする。

- 1) 文化人類学と教育が重なる領域「教育人類学」に関する文献を収集し、これまで内外で示されてきた概念および領域の整理をする。その検討をふまえて、現代の「教育人類学」の定義、整理を試みる。
- 2) 1)の中から特に国際理解教育に関わる方法論・内容論に着目し、具体的な教材開発やワークショップを行う。

以上の研究の目的の達成にむけて、まず、5月にリニューアルが進んでいる本館展示を本研究の視点から調査する他、民博研究者へのヒアリングを行う。

7月には、日本国際理解教育学会研究大会にて、スタディーツアーを検討する分科会を組織し、教師のフィールドワークの在り方や教材の選択について議論を行う。

8月7日開催予定の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」（文化資源プロジェクト）においては、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語」を行い、マリアナ諸島チャモロダンスを事例に、チャモロダンスが「創られた」経緯やスパニッシュステップが組み込まれているというコロニアル／ポストコロニアルな背景などを参加者と共有し、「伝統や文化」に関する教育のあり方を国際理解教育の視点から考える。

夏から秋にかけて、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていない太平洋島嶼で、教育人類学の視点からフィールドワークを行う。特に、学校教育現場の観察を通して、教育人類学に関する資料収集を行う。

今年度後半には、民博のオセアニア展示を中心に展示の構成や内容を再度分析し、文化人類学と教育をつなぐ「国際理解教育」として、どのように展示を活用することが可能か、教育現場でどのように太平洋島嶼をテーマに教材開発や授業をすることができるか、検討をする。また、民博にある教育人類学に関する資料を調査、解読したい。

・成果

リニューアルが進んでいる本館展示を本研究の視点から見学をし、教材開発や教員研修の素材としての可能性を検討した。

7月に埼玉大学で開催された日本国際理解教育学会研究大会では、スタディーツアーを検討する分科会にて、教師の海外フィールドワークの在り方やフィールドワーク後の教材開発について議論を行った。教師の海外フィールドワークに関しては、近年開発教育の視点が強く反映されるが、文化人類学の視点を取り入れることの意義を主張し、日本国際理解教育学会の課題研究の中で引き続き検討されている。

8月に開催された「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」では、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語」を行い、マリアナ諸島チャモロダンスを事例に、チャモロダンスが「創られた」経緯やスパニッシュステップが組み込まれているというコロニアル／ポストコロニアルな背景などを参加者と共有し、「伝統や文化」に関する教育のあり方を国際理解教育の視点から考えた。参加教員が秋以降の学校現場での実践に取り入れるなどの普及成果がみられた。

外部資金（科学研究費補助金「ポストコロニアルの視点にたった太平洋地域学習の教材開発」（代表：中山京子、2011～2013年度））を活用し、文献収集およびフィールドワークを本研究と連携して研究を進めた。

◎出版物による業績

〔論文〕

中山京子

- 2012 「社会科における多文化教育の再構築——ポストコロニアルの視点から先住民学習を考える」『社会科教育研究』116: 35-44。
- 2013 「英米のドラマ教育の視点からみる低学年における劇活動——『へんしん！おはなしくろう！ごっこ遊びからお話づくり、劇づくりへ』の検討」『帝京大学教育学部紀要』1: 87-96。
- 2013 「グローバル・ヒストリーにおける太平洋地域の意義と歴史教育——マリアナ諸島を中心に」『グローバル教育学会編『グローバル教育』15: 76-88。

〔その他〕

中山京子

- 2012 「多文化社会と博物館」日本メディア教育学会編『博物館情報・メディア論』pp.150-152, 東京: ぎょうせい。
- 2012 「文化人類学と社会科」日本社会科教育学会編『新版社会科教育学事典』pp.390-391, 東京: ぎょうせい。
- 2012 「エスノセントリズム」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.30, 東京: 明石書店。
- 2012 「人種・エスニシティ・民族」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.31, 東京: 明石書店。
- 2012 「本質主義／構築主義」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.32, 東京: 明石書店。
- 2012 「ポストコロニアル」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.38, 東京: 明石書店。
- 2012 「伝統と文化」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.44, 東京: 明石書店。
- 2012 「先住民(族)」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.114, 東京: 明石書店。
- 2012 「生活科と国際理解教育」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.149, 東京: 明石書店。
- 2012 「フィールドワーク」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.175, 東京: 明石書店。
- 2012 「国際理解教育の実践史」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.188, 東京: 明石書店。
- 2012 「ワールドカルチャー」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.199, 東京: 明石書店。
- 2012 「パールハーバー教員ワークショップ」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.205, 東京: 明石書店。
- 2012 「太平洋島嶼国の国際理解教育」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』p.265, 東京: 明石書店。

■文化資源研究センター

前川啓治 [まえがわ けいじ]————— 教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部准教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）【学位】博士（文学）（筑波大学 1993）【専攻・専門】文化人類学・民俗学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

〔単著〕

前川啓治

- 2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京: 新曜社。
- 2000 『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』東京: 新曜社。

〔共編著〕

綾部恒雄監修, 前川啓治・棚橋 訓編

- 2005 『オセアニア（講座世界の先住民民族 ファースト・ピープルの現在09）』東京: 新曜社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバルゼーションから見る組織文化の比較研究

・研究の目的

地域づくりの過程における組織作りの成否は、地域づくりの成否につながるといっても過言ではない。筑波山麓の地域づくりのための主体の組織化は、「筑波山麓地域づくり団体連絡協議会」という5地区連合という形の中域連合によってなされており、新たに構築した「秋祭り」などのイベントに関しては、協力体制により、かなりの成果を上げている一方、竜巻被害からの復興などの点では、たとえばコミュニティ・レストランのような持続的な地域づくりの拠点形成に時間がかかっている。こうした問題における原因の1つを地域づくりの組織化の問題に求め、組織化の現状を分析するとともに、たとえば、大学など外部組織のかかわりが地域の人々による組織化にどのような影響を与えてきたのか、また今後与えるのかを、フィールドワークによる理解と組織化への参与という実践から取り組んでゆく。

・成果

筑波大学人文社会系プロジェクト資金により、映像アーカイブの作成を行った、筑波山麓地区にある神社2か所において、神社にまつわる伝承、地域の歴史解説からはじめ、地域の変化に関するパーセプションに基づく地域づくりへの展開・組織化について、氏子総代による語りの映像記録を作成した。また、(大学関係者が支援する)国登録有形文化財保存運動を行うNPO法人の理事による建築的・文化財の特徴の解説をガイドという形式で映像に記録し、保存活動に参加する地元住民による地域の昔話、活動への取り組みと、地域づくりの組織化に関する見解などを、同時に記録した。

また、筑波大学社会連携費の資金により、報告書『筑波山から学ぶ』を刊行した。編著の形式であるが、筑波山麓地域の歴史や文化への理解が、具体的な地域づくりやその組織化の過程とどのように結びついているのかという点も明らかにしている。

◎出版物による業績

[単著]

前川啓治

2012 『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

[共著]

前川啓治

2012 『会社神話の経営人類学』大阪：東方出版。

中村嘉志 [なかむら よしゆき] ————— 准教授

1971年生。【学歴】神奈川大学理学部情報科学科卒(1994)、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士前期課程修了(1996)、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程退学(1997)【職歴】電気通信大学大学院情報システム学研究科助手(1997)、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員(2002)、独立行政法人産業技術総合研究所研究員(2005)、芝浦工業大学大学院連携大学院客員助教授・客員准教授(2006)、独立行政法人産業技術総合研究所技術研究員(2010)、電気通信大学大学院情報システム学研究科非常勤講師(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター客員准教授(2010)【学位】博士(工学)(電気通信大学2005)【専攻・専門】情報システム学、情報通信工学、メディア情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、IEEE、ACM

【主要業績】

[論文]

中村嘉志・濱崎雅弘・石田啓介・松尾 豊・西村拓一

2008 「個人端末をWeb支援システムIDへリンクする一手法の提案」『日本知能情報ファジィ学会誌』20(4): 130-141。

中村嘉志・並松祐子・宮崎伸夫・松尾 豊・西村拓一

2007 「複数の赤外線タグを用いた相対位置関係からのトポロジカルな位置および方向の推定」『情報処理学会論文誌』48(3): 1349-1360。

中村嘉志・多田好克

2003 「ATMのセル廃棄を許容するソフトウェア DSM向け一貫性プロトコル」『情報処理学会論文誌』44(9): 2299-2307。

【受賞歴】

2003 Best Presentation Award, The 29th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON2003)

2003 優秀論文賞, 情報処理学会マルチメディア, 分散, 協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2003)

2002 野口賞 (優秀デモンストレーション賞), 情報処理学会マルチメディア, 分散, 協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2002)

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

・研究の目的

情報展示新構築を推進するため、学術資料の情報提供を来館者に行うためのインタラクティブな情報支援システムの方法論および設計法について、情報工学の側面から実践的に研究する。具体的には、資料情報のデータ整備、資料の研究情報の抽出、そして、情報提供のためのインタフェースそれぞれを対象とする。

・成果

2012年度では、情報展示新構築のための情報支援システムの運用、主に学術資料のデータベースと情報提供インタフェースについてのシステム運用を開始させた。具体的には、本館2階のインフォメーション・ゾーンに探究ひろばを設置し、机（リサーチデスク）に埋め込み式のみんなく資料と展示に関する情報支援システム：インフォメーション・ファインダーの運用を行った。また、第411回みんなくゼミナールにおいて、この探究ひろばやインフォメーション・ファインダーに関する学術的な解説を行った。これにより来館者へのサービス提供の一助とした。

◎出版物による業績

[その他]

中村嘉志

「探究広場の情報化」『月刊みんなく』36(5): 8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2012年8月18日 「ソーシャルメディアに見る人とモノの関係」第411回みんなくゼミナール（企画および聞き手）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

情報処理学会ヒューマンコンピュータインタラクション研究会幹事、日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ（WISS）運営委員

・非常勤講師

電気通信大学大学院情報システム学研究科「情報システム学特別講義4」

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 准教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、

【主要業績】

[監修]

平井康之

2006 『インクルーシブデザインハンドブック』財団法人たんぽぽの家編, 奈良: 財団法人たんぽぽの家。

[論文]

Elokla, N., Y. Hirai and Y. Morita

2010 Emotion Measurement: A Proposal for Measuring User's Kansei. *Journal of Kansei Engineering and Emotional Research International Conference*, pp.2281-2292.

平井康之

2009 「共感を得られる新世代オフィスを実現するアプローチ」新世代オフィス研究センター編『オフィスの夢集合知——100人が語る新世代のオフィス』pp.186-187, 東京: 彰国社。

【受賞歴】

- 2010 第4回キッズデザイン賞 (ソーシャルキッズサポート部門)
- 2009 2009年度グッドデザイン賞 (パブリックコミュニケーションデザイン部門)
- 2009 第3回キッズデザイン賞 (コミュニケーションデザイン部門)
- 2008 2008年度グッドデザイン賞 (子どもの服薬に関するデザイン研究、こども+くすり+デザイン)
- 2008 第2回キッズデザイン賞 (リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども+くすり+デザイン)
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑 (英国) 掲載 (審査付、Full Metal Jacket Chair)
- 1996 1996年度グッドデザイン賞 (シナジアシリーズ)
- 1996 海南デザインコンペティション大賞 (健康器具バンボレオ)
- 1996 1996年度レッド・ドット賞<ドイツ・エッセンデザインセンター> (インタープレイスシリーズ)
- 1994 1994年度グッドデザイン賞 (インタープレイスシリーズ)
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選 (インタープレイスシリーズ)
- 1993 コクヨ株式会社功労賞 (インタープレイスシリーズ)
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑 (英国) 掲載 (審査付、Perch Chair, Stacking Table)
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関わる実践的研究

・研究の目的

ユニバーサルミュージアム実現のために、館の入り口から展示スペースまで、ユーザーの視点から調査を行い、現状の物品や空間の物理量、ユーザーの気づきの分析をもとに、インクルーシブデザインの手法を用いて展示デザインに関わる館内外の関係者にわかりやすい指針を確立することを目的とする。

・成果

全体の館内マップと触地図を融合したデジタル触地図のプロトタイプを制作し、視覚障がい者によるユーザー評価を実施した。その結果触地図の課題をあきらかにすることができた。また、展示デザインに関わる館内外の関係者のヒアリングとフォーマットへのフィードバックについては、1月から3月まで企画連携係、広報企画室、情報企画課、新構築チームメンバーの参加で合計3回の打合せを開催し、アクセスデザインについての基本計画策定を成果としてまとめることができた。この研究内容はアクセスデザインワーキングとして2013年度に向けて継続し、実現を図ることとなった。

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男 [すえなり みちお] 教授

1938年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）【職歴】聖心女子大学文学部専任講師（1972）、北京外国語学院日本学研究中心客員教授（1987）、ピッツバーグ大学フルブライト派遣客員教授（1990）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、同定年退職（2005）【学位】社会学博士（東京大学社会学系大学院 1971）【専攻・専門】社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀——潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

[責任編集]

末成道男

1995 『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

1975 第8回澁澤賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的

- 1) 東アジア人類学フォーラム「人類学と『歴史』」のまとめ。
- 2) 中部ベトナムにおける祖先祭祀現地調査。

・成果

- 1) 報告書作成 報告書の題目：人類学と歴史。すでに、原稿を収集、日中両文への翻訳も終えており、中国中山大学人類学部において、出版申請中である。
- 2) 中部ベトナムにおける祖先祭祀現地調査。2013年1月24日～4月24日の3か月間、ベトナムフエ市近郊農村において実施している。その成果は、帰国後順次まとめ、研究会の口頭発表や論文執筆で発表してゆく予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2012年11月23日 「中華漢族の家族と家——東アジアの人類学的調査から見えるもの」(A Family of Han Chinese: Viewed from My Social Anthropological Research in East Asia) 機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』

古谷嘉章 [ふるや よしあき] 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1980）、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】東京大学助手（1988）、九州大学助教授（1989）、九州大学教授（2002）【学位】博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 1992）、社会学修士（1982、東京大学大学院）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

古谷嘉章

2003 『憑依と語り』福岡：九州大学出版会。

2001 『異種混淆の近代と人類学』京都：人文書院。

[論文]

古谷嘉章

2010 「物質性的人类学に向けて」『社会人類学年報』36: 1-23。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代社会における先史文化の物質性についての研究

・研究の目的

過去の時代に生きた人々の生活の営みは、現在でも物質的に存在しているが、その様態は様々である。本研究は、先史文化すなわち歴史資料の存在しない過去の社会に生きていた人々の文化が、現代社会において物質的に存在している（あるいは存在しなくなっている）様態について、人類学的に分析することを目的とする。具体的には、一方で、考古学的調査研究を対象として、他方で、現代の世界各地の社会において「先史文化がどのように物質的に存在しているか」を対象として、人類学的に研究する。

・成果

国立民族学博物館共同研究「物質性的人类学——物性・感性・存在論を焦点として」を組織し、4回の研究会を主宰した（内容の一部は「ゴミと物質性」『民博通信』139号、「物質文化を文化人類学する」『月刊みんぱく』第36巻10号に掲載した）。船橋市立船橋飛ノ台史跡公園博物館における「縄文国際コンテンポラリーアート展」に協力し、その一部をなす座談会において講師を勤めた。科学研究費補助金・基盤研究C「先史土器復興を中心とするブラジル・アマゾン先史文化の現代的利用の人類学的研究」の研究代表者として、ブラジル・アマゾン地域において、先史土器復興について調査を行うとともに、サンパウロ州立大学（UNESP）において調査結果について口頭発表を行った。

森山 工 [もりやま たくみ]————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1984）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（1994）【職歴】 広島市立大学国際学部講師（1994）、広島市立大学国際学部助教授（1997）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（2000）、東京大学大学院総合文化研究科教授（2012）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院、1994）、修士（社会学）（東京大学大学院、1986）【専攻・専門】 文化人類学、マダガスカル地域文化研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本オセアニア学会

【主要業績】

[単著]

森山 工

1996 『墓を生きる人々——マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京：東京大学出版会。

[編著]

森山 工・鏡味治也・関根康正・橋本和也編著

2011 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』日本文化人類学会監修，京都：世界思想社。

[博士論文]

森山 工

1994 『マダガスカル、シハナカにおける墓と社会関係の諸相——情緒・ことば・実践』東京大学大学院総合文化研究科。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

・研究の目的

本研究計画は、マダガスカル中央高地北東部の農村地域における現地調査にもとづき、国家独立後の農村開発事業の影響によって変化しつつある葬送の実態を明らかにするとともに、そこにおいて遺体を「所有する」ということが持つようになった社会的意義を解明するものである。遺体の「所有」をめぐるのは、当該の死者に連なる過去、および当該の死者から連なる過去によって現在を正当化するという観点から、その「所有」のあり方を考察する。マダガスカルについては、1988年以来断続的に行っている現地調査を継続するとともに、マダガスカル以外の他地域についても歴史学的・人類学的な文献を精査することにより、比較論的な視角から考察をほどこす。

・成果

2012年度は、マダガスカル側の政情が前年度に引き続いて不安定であり、現地調査を行うことができなかった。それを補うべく、上記の「研究の目的、内容」に応じた文献による調査を鋭意実施し、本研究課題に関連する業績として、以下の研究成果を発表した。

◎出版物による業績

[論文]

森山 工

2013 「墓が刻むクロノロジー——マダガスカル、シハナカにおける祖先観の変化と〈家〉」小池 誠・信田敏宏編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』pp. 267-289, 東京：風響社。

山本直美 [やまもと なおみ] ————— 准教授

【学歴】お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒（1990）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（2003）【職歴】お茶の水女子大学文教育学部教育学科助手（1992）、放送大学非常勤講師（2001）、お茶の水女子大学人間文化研究所特別研究員（2003）、関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員（2005）、自治医科大学非常勤講師（2005）、関東学院大学非常勤講師（2006）、専修大学非常勤講師（2006）、同志社大学非常勤講師（2008）、大阪医専非常勤講師（2009）、立命館大学非常勤講師（2010）【学位】博士（人文科学）（お茶の水女子大学 2003）、教育学修士（お茶の水女子大学1992）【専攻・専門】文化人類学、社会学、対抗文化運動、共同体論【所属学会】日本文化人類学会、日本社会学会、関東社会学会

【主要業績】

[単著]

山本直美

2007 『「居場所のない人びと」の共同体の民族誌——障害者・外国人の織りなす対抗文化』東京：明石書店。

[論文]

山本直美

2007 「コミュニケーション不全を介して成立する〈つながり〉」浮ヶ谷幸代・井口高志編『病いと〈つながり〉の場の民族誌』pp. 47-67, 東京：明石書店。

2009 「リサーチクエスションを変えていく」箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際Ⅱ——分析・解釈編』pp. 175-192, 京都：ミネルヴァ書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代日本におけるマイノリティの共同性と個人のライフデザイン

・研究の目的

本研究は、現代日本の共同性の希求される場面において、多様な個々人の欲求や困難がいかにして調整されるかの検討を目的とする。本研究の内容は、特定の共同体をフィールドとして、その成立と存続、成員の参入

と離脱の過程をめぐって考察を行うものである。

・成果

社会的弱者をめぐり、国家やNGOが行う「上から」の包摂と、個々人の生の形式に発する「下から」の包摂とがせめぎ合うという観点を踏まえた上で、一方の包摂が他方の包摂を絡め取るような複雑な状況を分析する必要性を認識し、次のように現代日本の具体的フィールドをめぐり調査研究を進めた。

1) 外国人の精神障害者を含む共同体（群馬県）、2) 知的障害者を含む共同体（静岡県）、3) 宗教的信念を共有する世代継承のある共同体（京都府）。

特に3)の事例については、100余年の集団小史に伴い独自の儀礼を成立させてきた過程を検討し、2012年6月の日本文化人類学会において発表、その後所属する関東学院大学キリスト教と文化研究所の『所報』（2013年3月）において論考としてまとめた。集団外部者をも巻き込む儀礼のあり方を描き、「下から」の包摂として生まれたものが、「上から」の包摂として絡め取られる過程、なおも「下から」の包摂としての底力を示す過程に関連して検討を行った。

◎出版物による業績

[論文]

山本直美

2012 「小集団の維持における儀礼と共同性——宗教的小集団『一燈園』の場合」『関東学院大学キリスト教と文化研究所所報』11: 219-230。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「『もうひとつの生き方』一燈園における共同性と人間観」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

立命館大学大学院「応用人間科学研究法」、同志社大学「社会学演習」「ファーストイヤーセミナー」、大阪医専「文化人類学」

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

佐々木利和 [ささき としかず] ————— 教授

1948年生。【学歴】國學院大學文学部文学科卒（1976）、法政大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了（1979）【職歴】東京国立博物館（1969）、文化庁（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2006）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授（2010）【学位】博士（文学）（早稲田大学 2000）【専攻・専門】日本近世史、アイヌ民族史【所属学会】日本文化人類学会、日本考古学会

【主要業績】

[単著]

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』千葉：草風館。

[共編]

佐々木利和・ビルギト・マヤ編

2003-2006 『在独日本文化財総合目録1～3』東京：国書刊行会。

[学位論文]

佐々木利和

2000 「アイヌ絵誌の研究」早稲田大学。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族学博物館におけるアイヌ文化展示の研究

- ・研究の目的

民博の展示改定計画のなかで、アイヌ文化に関するそれをいかに行うかを検討する。

- ・成果

直接の展示改定計画とはつながらないが、民博外関連事業として、アイヌの現代アートの特別展（北海道立近代美術館など）に関与し、アイヌ展示の新しい視点や意義等について得るものは多かった。

鈴木裕之 [すずき ひろゆき] ————— 教授

【学歴】 慶應義塾大学法学部政治学科卒（1987）、慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了（1989）、慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学（1995）**【職歴】** 国士舘大学教養部専任講師（1995）、国士舘大学法学部助教授（1998）、国士舘大学法学部教授（2000）**【学位】** 社会学修士（慶應義塾大学大学院社会学研究科1989）**【専攻・専門】** 文化人類学・アフリカ音楽**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ポピュラー音楽学会、ICTM

【主要業績】

[単著]

鈴木裕之

2000 『ストリートの歌——現代アフリカの若者文化』 京都：世界思想社。

[論文]

鈴木裕之

2006 「アビジャン・レゲエと政治の関係——アルファ・ブロンディの歌詞に表現される政治的視点の変化」『社会人類学年報』 32: 25-6。

1996 「コミュニケーション様式の創造過程としての都市化——アビジャン・レゲエとストリート文化」『アフリカ研究』 48: 1-18。

【受賞歴】

2000 渋沢クロード賞・現代フランス・エッセイ特別賞（毎日新聞社・日仏会館共催）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

グローバル化時代のアフリカ音楽

- ・研究の目的

現代アフリカ音楽の世界的展開について、そのプロセスを研究する。とくに西アフリカ仏語圏諸国の音楽家が旧植民地宗主国フランスのパリに移住し、最先端のテクノロジーを利用しながら世界マーケットを視野に入れた音楽を制作するプロセスに注目しながら、世界システムとアフリカ音楽との関連をあきらかにする。

- ・成果

ギニアおよびコート・ジヴォワールにおいて、ポピュラー音楽のマーケットが欧米、とくにフランスのショウ・ビジネスとどう関わり合っているのか、両国のショウ・ビジネスの中心地であるコナクリとアビジャンにおいて関係者への聞き取り調査をおこなった。そこで、1980年代にアーティストがパリに移住してゆく社会的背景を理解することができた。成果の一部は、国立民族学博物館で開催された日本アフリカ学会第49回学術大会（2012年5月27日）、および日仏研究フォーラム「人口学から世界を理解する」（2012年11月30日）において発表した。

◎出版物による業績

[論文]

鈴木裕之

2012 「アフリカ音楽事情② メッセージを伝える音と声」『音楽文化の創造』 64: 26-27。

2012 「アフリカ音楽事情③ ストリートから生まれる新しい音楽」『音楽文化の創造』 65: 34-35。

2013 「アフリカ音楽事情④ ワールド・ミュージックの時代」『音楽文化の創造』 66: 26-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2012年5月27日 「アビジャンの音楽産業とグリオの伝統的技芸——近代化の中で継承される〈誉め歌〉の伝統」日本アフリカ学会第49回学術大会、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「アフリカ無形文化遺産存続の条件を探る」（代表者：川田順造）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

外務省「アフリカンフェスタ2011」プログラム委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、日本アフリカ学会評議委員

- ・他大学の非常勤講師

日本女子大学「比較社会論」、聖心女子大学「文化人類学特講」、東京外国語大学「アフリカ文化論」、沖縄県立芸術大学「アフリカ音楽論」

大貫美佐子 [おおぬき みさこ] ————— 准教授

【学歴】東京外国語大学外国語学部インドシナ科卒（1986）【職歴】文部省学術国際局（1986）、ユネスコ・アジア文化センター（1987）、ユネスコ・アジア文化センター文化協力課長（1999）、金沢大学客員准教授（2013）、国立文化財機構アソシエイト・フェロー（2010）、ユネスコ無形文化遺産研究センター副所長（2011）【学位】文学士（東京外国語大学 1986）【専攻・専門】無形文化遺産の保護に関するユネスコの条約におけるコミュニティ活性化の研究及び地域還元型プロジェクトの開発研究、アジア・太平洋地域文化遺産マネジメントに関わるキャパシティ・ビルディング【所属学会】日本文化政策学会、日本 ICOMOS 学会

【主要業績】

[論文]

Ohnuki, M.

2009 Challenges of the ACCU's Community-based Project for the Promotion of the Convention for the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage: Some practices of Asia's communities' safeguarding approaches. *Le Patrimoine Culturel Immatériel à la Lumière de l'Extrême-Orient (Internationale de l'imaginaire Nouvelle 24)* pp.81-89, Paris: Maison des Cultures du Monde.

2008 Safeguarding of Intangible Cultural Heritage and the Capacity Building of the Community. *International Symposium on International Cooperation and Role of Japan for the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage 2008*, pp.117-122, Tokyo: National Research Institute of Cultural Properties.

大貫美佐子

2002 「アジアのユネスコ加盟国における子どもの本の共同制作の評価と課題——ユネスコ・アジア文化センターの共同出版事業を通して」『子ども社会研究』8: 107-119。

【受賞歴】

2009 ベトナム文化省国際協力貢献賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

「無形文化遺産の保護に関する条約」の課題とインパクトに関する研究

- ・研究の目的

ユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」に関するこれまでの研究のまとめとして、この条約の17条の「危機に瀕する無形文化遺産の一覧表」が具体的に締約国にとって役割を果たすために必要な要素と内容を研究

成果から引き出し、次の視点において海外の専門家と議論をし、提案書を含め最終報告書にまとめる。さらに、無形遺産条約を継承するコミュニティへの研究成果の還元方法として、危機に瀕する無形遺産の保護措置の1つとして、具体的な提案（ガイドライン）とその効果の実証プログラムを実施する。

・成果

2013年1月に同条約のリスト記載に関する基準をテーマにした研究会を企画し、条約の起草に関わった国内外の専門家（6名）と、2つのリストの記載基準の分析と課題について総合的な議論を行い提案書としてまとめた。提案書において、記載基準の主要な問題は、1) 基準のあいまいな目的設定、2) 2つのリストの基準に類似した文言があること 3) 基準の曖昧な言語の選択などの問題点を明らかにした。さらにリスト記載に関しては、法的措置が要請されないため、無形文化遺産条約が提供する基準の枠組みは、世界遺産条約に比べて弱い。このため調査と提案書を作成し、2013年3月にIRCIより出版した。また議論の内容をプロシーディングスにまとめて共有した。

無形遺産条約は、無形遺産の保護においてコミュニティの関与の必要性を強調している。そのため過去の研究において、17条の基準のみならず、保護措置のプランニングが最も重要であり、そのためには危機に瀕する無形遺産を抱えるコミュニティとともに、危機の要因の特定要素の分析を調査し、問題点を共有し、復興に向けたプランニングを実施することが必要なプロセスである。このため、インド、ベトナム、タイにおいて、コミュニティ主導で保護にあたるためのメソッド開発WSを日本で企画・実施し実践的な研究会を実施した。その成果について、2013年9月にユネスコ主催の無形文化遺産条約の専門家会合にて発表予定。

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Consortium on Training in Language Documentation and Conservation 専門員メンバー（研究グループ：Resource Network for Linguistic Diversity Australia）、文化審議会文化財分科会無形文化遺産保護条約に関する特別委員会委員

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

池田光穂 [いけだ みつほ] ————— 教授

1956年生。【学歴】大阪大学大学院医学研究科博士課程単位取得済退学（1989）【職歴】東日本学園大学助教授（1992）、熊本大学文学部助教授（1994）、熊本大学文学部教授（2000）、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授（2005）【学位】医科学修士（大阪大学大学院医学研究科 1982）【専攻・専門】医療人類学、中米民族誌学、ヒューマンコミュニケーション研究【所属学会】日本文化人類学会、American Anthropological Association、日本ラテンアメリカ学会、日本保健医療社会学会

【主要業績】

[単著]

池田光穂

2010 『看護人類学入門』東京：文化書房博文社。

2001 『実践の医療人類学——中央アメリカ・ヘルスケアシステムにおける医療の地政学的展開』京都：世界思想社。

[共著]

阿保順子・池田光穂・西川 勝・西村ユミ

2010 『認知症ケアの創造——その人らしさの看護へ』東京：雲母書房。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

医療労働市場と医療労働者の国際移動に関する研究

・研究の目的

医療労働市場と医療労働者の国際移動に関する研究、とりわけ国際間の医療労働者の移民に関する国際規約の整備ならびに、トランスナショナルな移動の現状を理解することで、各国の医療労働の現場で生起しているさ

まざまな「医療と保健に関する文化的問題」を考える基礎とすることを目的とする。

・成果

日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア医療福祉にみる看護・介護人材送出実態の実証研究対日EPA問題を中心に」（研究代表者：奥島美夏・天理大学国際学部准教授）の研究分担者となっており、2012年度はインドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州において、現地の高齢化ケアの実態ならびに、近年成長をとげつつある介護ケア人材の育成に関する視察をおこなった。旧年度（2011）から先行研究の検討を通して明らかになりつつあるが、移住先の専門職独占という事情があり、医療労働者の国際移動には、それに先行する家事労働者や介護労働者の移動とは異なった経路と定着過程があることが明らかになった。

小池 誠 [こいけ まこと] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（1979）、埼玉大学大学院文化学研究科社会文化論専攻修士課程修了（1983）、東京都立大学社会科学部研究科社会人類学専攻博士課程単位修得退学（1991）【職歴】広島大学総合科学部（社会人類学）助教授（1991）、桃山学院大学文学部（文化人類学）助教授（1996）、桃山学院大学文学部教授（2000）、桃山学院大学国際教養学部教授（2008）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学大学院 2004）、文学修士（埼玉大学大学院 1983）【専攻・専門】社会人類学・インドネシア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、比較家族史学会、日本民俗学会、日本オセアニア学会、日本国際文化学会

【主要業績】

[単著]

小池 誠

2005 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』京都：晃洋書房。

1998 『インドネシア——島々に織りこまれた歴史と文化』（新アジア生活文化読本）東京：三修社。

[論文]

小池 誠

1989 「イエとムラ——インドネシア、東スンバにおけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54(2): 137-165。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学における家族・親族研究の現代的意義

・研究の目的

人類学における家族・親族研究を再検討し、社会学などで研究が進んでいる「現代家族の揺らぎ」という問題に対して、人類学の立場から如何なる貢献が理論と民族誌の点から可能か、検討していく。とくに、定住する家族に焦点を当てるだけでなく、移住労働など移動の相にある家族に着目し、その特徴を明らかにしたい。その研究の一環として、科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」（研究代表者：小池 誠）によって、インドネシア・スンバの家族と親族の変容について調査・研究を進める。また、科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）によって、台湾在住のインドネシア人労働者とその家族に関する調査を実施し、さらに調査データの整理、分析を進める。なお、本各個研究は国立民族学博物館共同研究「人類学における家族研究の新たな可能性」と関連させて進めて行く。

・成果

第1に、科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」によって継続してインドネシアの東スンバ県で家族と親族に関する社会人類学的調査を実施した。これまでの調査成果を「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」（『桃山学院大学総合研究所紀要』38-1）と「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——『家族圏』再考」（『比較家族史研究』27）という論文にまとめた。第2に、連携研究者として参加する科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）によって、台湾在住のインドネシア人労働者を対象として社会人類学的調査を実施し、グローバルな人の移動と家族の変容に関する調査研究を進めた。その研究成果を「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すイン

ドネシア女性労働者のネットワーク」（『国際文化論集』46）と「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」（科研報告書）として発表した。第3に、研究代表者を務める国立民族学博物館共同研究「人類学における家族研究の新たな可能性」において、人類学における新しい家族研究の構築に向けて4回の研究会を開催した。

◎出版物による業績

[編著]

小池 誠・信田敏弘編

2013 『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』東京：風響社。

[論文]

小池 誠

2012 「『家』の存続と生命観——レヴィ=ストロース以後の家社会論」河合利光編『家族と生命継承——文化人類学的研究の現在』pp.101-122, 東京：時潮社。

2012 「インドネシア・スンバ島における世帯と家計の人類学的研究」『桃山学院大学総合研究所紀要』38(1): 27-48。

2012 「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク」『国際文化論集』（桃山学院大学総合研究所）46: 1-31。

2013 「家族なき時代の『家』」小池 誠・信田敏弘編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』pp.319-328, 東京：風響社。

2013 「インドネシア人帰還移民の社会福祉活動——台湾からインドネシアへ」伊藤 眞編『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』（2010年度～2012年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書）pp.25-43, 首都大学東京社会人類学研究室。

2013 「インドネシア・スンバの父系社会における家族の多様性——『家族圏』再考」『比較家族史研究』27: 7-26。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「変動するインドネシアの農村社会における家族・親族の人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（研究代表者：伊藤 眞）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など
比較家族史学会理事

沢山美果子 [さわやま みかこ]——教授

【学歴】 福島大学教育学部卒（1973）、お茶の水女子大学大学院教育学研究科修士課程修了（1976）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻単位修得満期退学（1979）**【職歴】** 東京都婦人情報センター専門員（1979）、順正短期大学講師（1982）、順正短期大学助教授（1986）、順正短期大学教授（1987）、順正短期大学退職（2008）、岡山大学大学院客員研究員（2008）**【学位】** 学術博士（お茶の水女子大学 1998）、教育学修士（お茶の水女子大学 1978）、教育学士（福島大学 1973）**【専攻・専門】** 日本教育思想史、女性史**【所属学会】** 日本教育学会、比較家族史学会、日本人口学会、歴史学会

【主要業績】

[単著]

沢山美果子

2008 『江戸の捨て子たち——その肖像』東京：吉川弘文館。

2005 『性と生殖の近世』東京：勁草書房。

1998 『出産と身体の近世』東京：勁草書房。

【受賞歴】

- 2006 岡山市出版文化賞
- 1999 第14回女性史青山なを賞
- 1989 両備聖園記念賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近世における「家」と女の身体・子どものいのちの社会史

・研究の目的

本研究の目的は、「家」の維持・存続のために、子どもを産む女の身体と子どものいのちが着目されていく近世社会を対象に、女の身体と子どものいのちの結節点にある「乳」に焦点を当て、近世社会における女の身体と子どものいのちをめぐる問題を多様な側面から明らかにすることにある。とくに大阪の捨て子関係史料の解説・分析を進めることで、農村と都市の関係性の中で捨て子養育の問題を深めるとともに、近世人のライフコースという視点から女の身体と子どものいのちの関係史に焦点をあてる。

・成果

今年度の研究成果として、2012年度科学研究費補助金（基盤研究（C））の交付も受け、1）「妊娠・出産を通してみた女・子どものいのちと医療——一関藩領内を中心に」（一関市博物館『江戸時代の病と医療』（2012年9月、pp.78-89）をまとめ、女の身体と子どものいのちの関係史を深める作業をおこない、2）科研報告書『「乳」からみた近世社会の女の身体・子どものいのち』（2013年3月、p.297）を刊行するとともに、3）近代の女の身体と子どものいのちの問題を考察した論考も含む『近代家族と子育て』（吉川弘文館、2013年3月、p.269）を刊行した。また口頭発表としては、1）日本科学史生物学会分科会主催「いのちの」歴史学にむけてで「乳からみた近世社会の胎児・赤子のいのち」と題する報告（2012年8月4日、東京大学駒場キャンパス）、2）一関市博物館シンポジウム「つながる命」での報告（2012年10月14日、一関市市役所）、3）国立民族学博物館公開国際シンポジウム「ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化」で、「赤子と母のいのちを守るための江戸時代の民間療法」と題する報告（2012年11月11日）国立民族学博物館）をおこなった。

関根久雄 [せきね ひさお] ————— 教授

1962年生。【学歴】法政大学文学部卒（1985）、広島大学大学院社会科学科博士課程前期（社会人類学）修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程中退（1996）【職歴】名古屋大学大学院国際開発研究科助手（1996）、筑波大学社会科学系専任講師（2000）、筑波大学社会科学系助教授（2003）、筑波大学大学院人文社会科学科准教授（2004）、筑波大学大学院人文社会科学科教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特別客員教授（2010）、筑波大学人文社会系教授（2011）【学位】博士（文学）（1998、総合研究大学院大学）【専攻・専門】文化人類学、地域開発論、オセアニア島嶼研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、国際開発学会、太平洋諸島学会、日本国際文化学会、日本社会学会、日本国際地域開発学会

【主要業績】

【単著】

関根久雄

2001 『開発と向き合う人びと——ソロモン諸島における「開発」概念とリーダーシップ』東京：東洋出版。

【論文】

関根久雄

2012 「疎外される州民——ソロモン諸島における『開発的公共圏』」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.257-274、東京：風響社。

2012 「国家からの離脱と『市民社会』——ソロモン諸島における開発的公共圏の伸縮」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp.35-52、京都：昭和堂。

【受賞歴】

- 2001 国際開発学会賞奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「感情」からみるオセアニア島嶼国の近代化——ソロモン諸島における開発の事例から

・研究の目的

ソロモン諸島では、1998～2003年に発生した国内紛争を機に、州レベルの大規模開発の模索、州への政治的権限の委譲（連邦制移行）という社会情勢の変化に加え、村落における現金収入源の確保やサブシステムの維持を指向した生業活動の安定化のための活動（社会開発）がNGOや援助共与国のODAなどによって試みられている。これらの動きには、いずれもその起点および実施過程において人々の感情とそれに基づく様々な行為の束が関与し、それらが同国の近代化に関わる事柄の動向を左右し、実質的に近代化の姿を形作っているともいえる。本研究では、ソロモン諸島における有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトの実施プロセス、州社会から国家に向けられる低開発の語りなどに現れる人々の感情に注目し、ソロモン諸島民にとっての近代化あるいは開発の意味を再考する。

・成果

2011年度に研究代表者として立ち上げた国立民族学博物館共同研究会「実践と感情——開発人類学の新展開」の研究会を4回開催し、その2012年度第1回研究会（2012年9月29日）において、ソロモン諸島における有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトを事例に、開発実践に関わる人々の感情の「管理」とそれに基づく開発実践との連続性に関する報告を行った。

また、それに関連する継続的な現地調査を、2012年11月に、科学研究費助成事業基盤研究（B）「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（研究代表者・関根久雄）、および同基盤研究（B）「社会的包摂のための実践人類学的研究」（研究代表者・鈴木 紀）を通して行った。

本研究課題に関連する成果の公表として、共著書『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』（須藤健一編、風響社、2012年8月）、『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』（柄木田康之・須藤健一編、昭和堂、2012年12月）を刊行した。また、日本文化人類学会第46回研究大会（2012年6月23日、広島大学）における分科会「グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ」（代表・鈴木 紀）において、研究発表「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」を行った。さらに、国際開発学会第23回全国大会（2012年12月1日、神戸大学）において研究発表「可能性としての人類学的評価——線的視点による叙事的解釈の応用」を行った。

◎出版物による業績

[論文・その他]

関根久雄

2012 「『感情』から開発実践を考える」『月刊みんぱく』36(6): 12-13。

2012 「疎外される州民——ソロモン諸島における『開発的公共圏』」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp.257-274, 東京: 風響社。

2012 「忘却のかなたのエヴァンズ＝プリチャード——『共犯』の人類学」風間計博・中野麻衣子・山口裕子・吉田匡眞編『共在の論理と倫理——家族・民・まなごしの人類学』pp.399-421, 東京: はる書房。

2012 「国家からの離脱と『市民社会』——ソロモン諸島における開発的公共圏の伸縮」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp.35-52, 京都: 昭和堂。

2013 「感情経験・感情文化・『怒り』の管理」『民博通信』140: 18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2012年9月29日 「『怒り』を管理する——ソロモン諸島における開発実践と感情経験」『実践と感情——開発人類学の新展開』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年6月23日 「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」日本文化人類学会第46回研究大会における分科会『グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ』（代表者: 鈴木 紀）広島大学

2012年12月1日 「可能性としての人類学的評価——線的視点による叙事的解釈の応用」国際開発学会第23回全国大会、神戸大学。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学的研究」研究分担者、国際開発学会「地域社会と開発」研究部会、研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「実践と感情——開発人類学の展開」研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、太平洋諸島学会理事・学会誌編集委員長、茨城県つくば市北条まちづくり振興会相談役

関根政美 [せきね まさみ] ————— 教授

1951年生。【学歴】慶應義塾大学法学部卒（1974）、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻前期博士課程修了（1976）、慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程修了（1979）【職歴】慶應義塾大学法学部専任講師（1979）、慶應義塾大学法学部助教授（1984）、慶應義塾大学法学部教授（1989）、豪州NSW州立大学経済・商学部訪問研究員（1980）、在豪日本大使館専門調査員（1989）【学位】社会学博士（慶應義塾大学 1989）、法学修士（慶應義塾大学 1976）【専攻・専門】社会学、国際社会学、人口移動と人種・民族・エスニシティの国際社会学、現代オーストラリア論、多文化共生・競生論【所属学会】オーストラリア学会、日本国際政治学会、日本社会学会、日本政治学会

【主要業績】

[単著]

関根政美

- 1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア——多文化社会オーストラリアの社会変動』東京：成文堂。
- 1994 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』愛知：名古屋大学出版会。
- 2000 『多文化主義時代の到来』東京：朝日新聞社。

【受賞歴】

- 2000 義塾賞
- 1990 桜田会奨励賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会的研究

- ・研究の目的

従来より、関根はオーストラリア研究者として、オーストラリアにおける多文化共生についての研究を行ってきた。2012年度も「多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会学的研究」と題する課題のもとに、多文化主義の現状に関する国際社会学的研究を行った。具体的には2010年10月のメルケル独首相と2011年2月のキャメロン英首相の多文化主義失敗発言と、2011年7月のノルウェーにおいて生じた、移民制限・多文化主義反対を唱える極右テロリストによる大量殺戮事件の関係を考察し、多文化主義（多文化共生）を巡る現在の社会状況に加え、多文化主義とテロの活動との関係をより詳しく検討しようとした。多文化「凶生」時代の到来を防ぎたいと考えたからである。

- ・成果

上記研究の成果を、以下の形で既に報告している。

関根政美 「第1章 多文化社会の将来に向けて——ノルウェー事件と日本」吉原和男編著『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会（2013年3月）。

本研究からの知見は、グローバリゼーションのもとで生活不安を感じているノルウェー国民にとり、ムスリム系移民の増大は、生活不安に文化不安を追加するものであり、反多文化主義・反移民の雰囲気、移民推進・多文化主義支持者国民や政党への右翼保守主義者の反感を増幅し、さらに、多文化主義失敗というヨーロッパ首脳の高率な発言は、凶行の引き金になったのではないかということである。移民マイノリティ支援と同時に、国民への生活支援を忘れてはいけないということである。疎外感を感じている国民への配慮は必要ではないのか。

◎出版物による業績

関根政美

2013 「第26章 アジアのなかのオーストラリア——アジア・太平洋の白豪主義国家から多文化主義国家へ」
松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか——記憶・権力・価値』pp. 598-623, 京都: ミネルヴァ書房。

2013 「第1章 多文化社会の将来に向けて——ノルウェー事件と日本」吉原和男編『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』pp. 19-39, 東京: 慶應義塾大学出版会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2012年12月9日 <司会とまとめ>ジェラルド・ブシャー（ケベック大学シクチミ校教授）「基調講演：インターカルチュラリズムとは何か——ケベック、そしてグローバルの視点から」青山学院大学国際交流共同研究センター主催国際シンポジウム『多文化社会の課題と挑戦——インターカルチュラリズムの可能性』青山キャンパス総研ビル12階大会議室

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

慶應義塾大学グローバルCOE「市民社会のガバナンスに関する教育・研究」拠点推進委員

・非常勤講師

駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『グローバルシティズンシップ』2013年春季

・学会の開催

2012年7月7日 三田社会学会2012年度大会（会長）、慶應義塾大学三田キャンパス南校舎445教室

曾我 亨 [そが とおる]————— 教授

【学歴】名古屋大学理学部卒（1988）、京都大学大学院理学研究科後期博士課程修了（1994）【職歴】京都大学理学部助手（1994）、弘前大学人文学部助手（1995）、同助教授（2000）、同教授（2010）【学位】理学博士（京都大学1999）【専攻・専門】生態人類学 1) 北東アフリカの牧畜社会を対象とした生業・社会に関する研究 2) エスニシティと稀少資源に関する研究 3) 難民の生存戦略に関する研究 4) 人類進化論的研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、生態人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共著]

高倉浩樹・曾我 亨

2011 『シベリアとアフリカの遊牧民』宮城: 東北大学出版会。

[論文]

曾我 亨

2011 「国家に抗する拠点としての生業——牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井 健・名和克郎・野林厚志編、『生業と生産の社会的布置』pp. 389-426, 京都: 昭和堂。

曾我 亨

2007 「<稀少資源>をめぐる競合という神話——資源をめぐる民族関係の複雑性をめぐって」松井 健編『資源人類学06 自然の資源化』pp. 205-249, 東京: 弘文堂。

【受賞歴】

1999 高島賞（日本ナイル・エチオピア学会）

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化する現代社会における生業の意義

・研究の目的

本研究の目的は、グローバル化する社会において、生業がいかなる意味をもつかを考察することである。南部エチオピアに住む牧畜民ガブラ・ミゴを題材にとり、彼らが厳しい環境のなかで生み出してきた生業に関する技術に焦点をあてる。20世紀後半、ガブラ・ミゴは何度も難民となり、他国に逃げている。その要因を探ると、国際政治の影響に加え、近年においてはグローバル化した低強度の紛争、すなわちカルドーの言う「新しい戦争」の影響が認められる。こうした困難な状況において、ガブラ・ミゴの人々が、生業を活用しながらいかに生き延びようとしているのかを明らかにするのが本研究の目的である。なお、本研究は科学研究費・基盤研究(C)「難民となった牧畜民の生存にかかわる経済活動の人類学的研究」(代表者：曾我 亨)などによる。

・成果

昨年度は、科学研究費補助金を用いて約2週間の現地調査を実施した。2011年度の調査から、2006年に南部エチオピアで起きた民族紛争に牧畜民ガブラ・ミゴも巻き込まれ、一部は難民化して都市に暮らし、一部は家畜を連れて牧野に残って暮らしていることが判明している。また都市と牧野をつなぐようにして新たな生業活動が形成されていることも明らかになっている。

そこで2012年度は、ラクダの売買を中心に調査を行った。この数年、北ケニアでは相次ぐ旱魃によって家畜が疲弊しているが、エチオピアは比較的降雨に恵まれている。ケニアとの国境の都市に暮らす難民たちは、北ケニアから痩せ衰えたラクダを購入し、南エチオピアの牧野に暮らす親族や友人を通して市場で売却して利益をえていた。さらに南エチオピア地域のガブラ・ミゴの人々は、肥育したラクダをアラブ諸国に輸出する仕事に係ることで、利益を得ていることが判明した。

このラクダ取引には、ガブラ・ミゴだけでなく近隣の半農半牧民グジも参加している。ガブラ・ミゴはラクダの放牧や移動に係っていたのに対し、グジはガブラ・ミゴ商人から痩せたラクダを購入し、収穫後の畑を利用して肥育を行っていた。これは、各民族の生業経済を生かした係わり方であり、経済学のいう比較優位論にあてはまる事例であると考えられ、この取引は、難民化したガブラ・ミゴの生存を経済的に保障するだけでなく、異民族との共存を保障するものにもなっている可能性がある。

以上の知見の一部は、国立民族学博物館で開催された日本アフリカ学会で発表した。

大杉 豊 [おおすぎ ゆたか] ————— 准教授

【学歴】 University of Rochester (米国ロチェスター大学) 大学院言語研究科博士課程修了 (1997) 【職歴】 人形劇団「デフパペットシアターひとみ」団員 (1983)、学校法人名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校教員 (1989)、米国ロチェスター大学アメリカ手話学科客員教員 (1997)、財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所長 (2000)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部准教授 (2007) 【学位】 Ph. D (ロチェスター大学 1997) 【専攻・専門】 手話学、ろう者学 【所属学会】 日本特殊教育学会、日本手話学会、日本聾史学会

【主要業績】

[単著]

大杉 豊

2005 『聾に生きる——海を渡ったろう者山地彪の生活史』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[編著]

大杉 豊編

2002 『国際手話ハンドブック』東京：三省堂。

[共編]

金沢貴之・大杉 豊編

2010 『一歩進んだ聴覚障害学生支援——組織で支える』東京：生活書院。

【2012年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成に向けての現状調査

・研究の目的

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長期的な目標とし、今年度は国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因の整理を行うことを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として「手話言語と音声言語のシンポジウム 1)『言語の記述・記録・保存』」を7月末に実施する過程で研究者との情報・意見交換を行う。また、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業にて実施する言語学分野に対応した手話通訳の研究会にて問題点を明確にする等を中心に調査をすすめる。

・成果

人間文化研究機構連携研究として、「言語の記述・記録・保存」をテーマとする「手話言語と音声言語のシンポジウム」1)のコーディネートを菊澤律子准教授と共同で担当する中で、国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因について情報・意見交換を行った。その結果を踏まえて、手話言語学研究ネットワーク拠点構想を、9月開催（於：米国ハワイ大学）の「アジア・太平洋地域の手話言語の記録・保存に関するミーティング」及び、2013年1月開催（於：香港中文大学）の「アジア・太平洋手話言語教育プログラムに関する地域会議」において報告し、同ネットワーク拠点構想に関する議論をもつ機会を得られた。とくにハワイ大学でのミーティングの直接的な成果として、同大学言語学部及びカピオラニカレッジにおいてハワイ手話に関する記述取組みが開始されたことがあげられるものの、それらの成果を出版物としてまとめるには至らなかった。執筆については、来年度の課題としたい。なお、成果の一部は国立大学法人筑波技術大学で2014年度開設が予定されている大学院情報アクセシビリティ専攻（仮称）手話教育研究領域のカリキュラム設計に活かされている。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、言語学分野に対応した手話通訳の研究会を6回開催する中で、1) 言語学知識を有する手話通訳者の不足、2) 言語学用語に対応する手話語彙の未整備、3) 言語学分野の手話通訳知識と経験を蓄積する機能の不在の3点を課題として明確にした。1)については、2013年度より手話通訳者を対象とする言語学講座を実施することを決定した。2)については、総合研究大学大学院学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning 開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」により、SNSを活用しての手話語彙の検討を進めた。3)については、手話通訳を行った言語学分野の学術発表を素材に言語学的な情報を付与したコーパス試作版を作成して2013年度以降の継続につなげた。

・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO 法人日本 ASL 協会会長、財団法人現代人形劇センター理事

清水郁郎 [しみず いくろう] ————— 准教授

1966年生。【学歴】 芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）【職歴】 大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）【学位】 博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】 建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

[単著]

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文]

清水郁郎、蟹澤宏剛、木本健二、畑 聰一、増田千次郎、パタナー・ポンティップ、トンワン・テップカイソン
2011 「ラオス深南部山地のロングハウスに関する統合的研究——『高密度居住』を可能にする木造長大家屋の特質と居住文化」『住宅総合研究財団研究論文集』37: 121-132。

【受賞歴】

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築建設にかかわる比較研究

・研究の目的

本研究は、東南アジア大陸部と島嶼部を対象に、木造建築、とくに住居の建設にかかわる比較研究をおこなうことを目的とする。研究においては、国立民族学博物館に収蔵、展示されている資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の分類をおこなう。そのさいには、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、またそれらによって産み出される建築構法に着目する。さらに、物質的側面のみならず、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握もおこなう。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解に一定の貢献をしたい。

・成果

2012年度は、科学研究費補助金（基盤研究（B））（代表：清水郁郎）により、東南アジア大陸部ラオス人民民主共和国において、木造住居を対象とした2週間程度の調査をおこなった。具体的な調査地は、同国ルアンパバーン県ナムバック郡近郊に住むルーの村落である。そこにおいて、住居と村落の実測、建設道具の把握、建築生産の様態について以下の諸点に着目して調査を進めた。

- ・住居の構造：住居型式は高床式が主流だが、近年は工場産品の建築部材を利用した平屋に加え、高床の床下部分に壁をつくり居室化している住居が増えつつある。
- ・構法：住居の構造は棟持ち柱構造だが、棟木を支えるのは床上長手方向端部から立ち上がる二本の柱のみで、他は梁上から束を立て、棟木を受けている。そのために、屋内は一室の大空間として利用可能となる。
- ・間取り：妻入りがもっとも多く、階段が上がった踏み込みを経て屋内に至る。内部にはもともと炊事用と出産用のふたつの炉があったが、現在は炊事棟を別棟にしていることが多い。屋内の最奥に壁を仕切りとした寝室がある。
- ・方位観：住居の建設に際しては、伝統的な方位観、柱の末口と元口の向きといった位置関係が尊重され、加えて宗教的観念とも結びつき、多様な空間概念が並存している。
- ・建設手順：地面で構造材を組み立て、それに縄をかけて引き立てる方法をとる。そのさいに、垂直や水平の取り方に独特の方法を使う。
- ・大工道具：大鋸を使うことで、大寸法の部材を得ることができる。細かい作業には、手斧、鑿、山刀などを駆使する。
- ・職能：専門職の大工はいない。かつては、農閑期に村人の住居建設を監督する能力を持ついわゆる棟梁が数名いた。村内に現存する古民家の建設は、すべてそれら棟梁の指図により村人が協働で建設したものである。書籍等の成果、また、発表等の成果としては、以下が該当する。

◎出版物による業績

[編著]

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

[論文その他]

清水郁郎

2012 「住まいと暮らしのフィールドワークに出かけよう！」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.13-22, 東京：風響社。

2012 「フィールドワークのおもしろさ——なぜフィールドに向かうのか？」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.43-54, 東京：風響社。

- 2012 「実測のしかた」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.206-209, 東京：風響社。
- 2012 「画像と映像の撮影のしかた」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.210-213, 東京：風響社。
- 2012 「フィールドワークのための新しい道具」日本建築学会編『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』pp.224-226, 東京：風響社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年9月12日 「村落における近年の住居形式の変化に関する考察——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その1」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1135-1138
- 2012年9月12日 「各種オーダーからみる住まい方の特質——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究——その2」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1137-1138
- 2012年9月14日 「信仰体系からみた村落の空間構成——来間島を事例として」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1437-1438
- 2012年9月12日 「こどもとこども部屋の関係——モノに着目した空間の分析」日本建築学会学術講演梗概集E-1（中部）：1189-1190

・共同研究会

- 2012年7月8日 「研究成果発表——映画をめぐる空間」『映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論』

◎社会活動・館外活動等

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本建築学会建築計画委員会比較居住文化小委員会委員・同出版ワーキンググループ主査、国立民族学博物館共同研究『映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論』共同研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究『アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象』共同研究員、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））「東南アジア大陸部低湿地帯社会における生態環境と居住空間の相互環」研究代表者

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CAO Jiannan (曹 建南) [ツァオ、ジエンナン] ————— 准教授

任期：2012年1月25日～2013年1月24日

研究課題：茶文化の日中比較——ものとアートの視点から

【学歴】南京師範学院中文科卒（1980）、東京学芸大学大学院修士課程修了（1991）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（1996）【職歴】上海師範大学外国語学院講師（1996）、上海師範大学人文学院講師（2001）、上海師範大学人文学院副教授（2003）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程 1996）【専攻・専門】民俗学、民族学

【主要業績】

[博士論文]

曹 建南

1996 「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」総合研究大学院大学文化科学研究科。

[論文]

曹 建南

2010 「日本禅院茶礼瑣議」『茶禅東伝寧波縁——第五届世界禅茶文化交流大会文集』pp.205-213, 北京：中国農業出版社。

2010 「従飲茶習俗看中日民俗觀念的差異」『日本語言文化研究論集（第2輯）』pp.25-37, 上海：華東理工大学

出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東京学芸大学の修士課程で「おしらさま」を典型とする養蚕信仰の日中比較に関する論文をまとめ、総合研究大学院大学博士課程では中国の養蚕伝承を学位論文「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」に結実させた。これは養蚕地帯のフィールドワークにもとづき、養蚕の歴史の変遷と生産技術、経営体制、儀礼・信仰の側面を明らかにした着実な研究であった。この論文の中国語での出版を滞在期間中に準備する。

私の茶文化研究は、2003年サントリー文化財団助成の「17世紀における茶文化の日中比較研究」に加わったことから始まった。これまで、茶にかかわる文化に見られる中日両国の異なったとらえ方や、両国共通の朝茶の習慣、婚姻儀礼の結納茶、新年祈願の大福茶などにおける茶の象徴性の相違について考察してきた。とくに中国における「茶徳観」、茶堂（中国では「茶亭」）にまつわる民俗、茶道と茶芸、茶道具の美意識などについて論文を発表している。

招聘期間中は日本の茶文化についての資料調査と実地調査に従事し、茶文化の日中比較を研究課題とし、物質文化（もの）と芸事（アート）の視点から研究をすすめる。とりわけ、四国の茶堂や九州の結納茶などの調査を予定している。

・成果

茶文化事象には日中両国の民族文化にさまざまな相違がみられ、比較研究として非常に有意義な成果があった。国立民族学博物館には日本の茶文化に関する文献が豊富にあり、熊倉功夫氏（名誉教授）をはじめ人脈もひろげることができた。

物質文化研究については国立民族学博物館の機関研究「マテリアリティの人間学」（代表：岸上伸啓）のなかの「モノの崇拝——所有・収集・表象研究の新展開」（代表：竹沢尚一郎）において研究発表を行った。また、近畿民具学会で「上海万博で展示された茶の道具」を報告し、AJJ第15回年次大会において「中国と日本の茶文化」を発表した。国立民族学博物館の研究部が主催する研究懇談会でも報告し、国立民族学博物館研究報告に論文を寄稿する。

1年間の研究成果を単行本にまとめ、『茶文化の日中比較』（仮題）として刊行する予定である。

Chuluun Sampildondov [チョローン サンピルドンドフ]————— 教授

任期：2012年4月2日～2013年3月29日

研究課題：モンゴル・ロシア関係に関する歴史人類学的研究

【学歴】モンゴル国立大学卒（1999）、モンゴル国立大学修士課程修了（2001）モスクワ国立教育大学博士課程修了（2004）【職歴】モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員（1999）、モンゴル国立大学歴史学部助教授（2004）、ケンブリッジ大学モンゴル内陸アジア研究所・客員研究員（2008-2009）、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長・教授（2009）【学位】文学博士（モスクワ国立教育大学 2004）、歴史学修士（モスクワ国立教育大学 2001）【専攻・専門】歴史学・民族学

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル・ロシア関係に関する歴史人類学的研究

・研究の目的

近年あらたに現地調査を実施して発見された資料類と、ロシアのアルヒーブで保存されている資料類を照合して、17世紀から20世紀にかけてのモンゴル史について歴史人類学的観点から研究をおこなってきた。招へい期間中は、ロシアとの関係が飛躍的に展開する17世紀と20世紀に焦点をあてる。

17世紀については、これまでの史料調査の成果を生かし、主として民族間関係の変遷ならびに地域集団の形成過程を明らかにする。

20世紀については、これまでの写真資料の収集成果を生かし、主として図像による歴史の視覚化をおこなう。写真資料の解釈については、さまざまな関係者の視点を再構成することによって人類学的考察の意義を明示する。

・成果

17世紀についての研究成果は、国立民族学博物館調査報告（SER）に論文集として投稿を準備中である。

20世紀の写真資料のうち寺院関係については *Монголын Бурханы Шашины Соёл: Хэнтий, Хангайн Сүм, Хийдийн Судалгаа* (Senri Ethnological Reports113) として刊行し、グローバルな記録資料の蓄積と発信という役割を果たした。また、「社会主義的近代化」というテーマで本館において実施してきた継続的な研究成果とその発信の一環として『モンゴル国営農場資料集』（国立民族学博物館調査報告110）を刊行した。

来日後、直ちに共同で整理作業を開始し、滞在期間中に校正までを終えたい。

2011年度下半期から実施される予定の共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」に参加し、民族誌的記述の解説に関して、地域間比較ならびに時代比較の観点から助言をあたえる。滞在中に実施する予定の、本件に関する国際シンポジウム（2012年2月）に参加し、発表する。

【主要業績】

[博士論文]

Chuluun, S.

2004 History of Ethnic and Social-Economical Development of Khotgoid People in Mongolia. State Pedagogical University of Moscow, Russian Federation.

[単著]

Chuluun, S.

2010 *Stalin and Mongolia* (Documents of Archives). Ulaanbaatar.

2010 *Study of Mongolian History XVII-XIX Century*. Ulaanbaatar.

◎出版物による業績

[共著]

小長谷有紀・S.チョローン

2013 『モンゴル国営農場資料集』（国立民族学博物館調査報告110）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

М.И. Клягина-Кондратьева, Хэвлэлд бэлтгэж, хянасан С.Чулуун Т.И.Юсупова

2013 *Монголын Бурханы Шашины Соёл: Хэнтий, Хангайн Сүм, Хийдийн Судалгаа* (Senri Ethnological Reports113) Osaka, National Museum of Ethnology (in Mongolian and Russian).

CREIGHTON, Millie Rosetta [クレイトン、ミリー ロゼッタ]—————教授

任期：2012年9月20日～2013年8月30日

研究課題：日本におけるデパートとアジア系小売商の文化人類学研究——消費主義と日本社会の変貌

【学歴】 ミネソタ大学卒（1977）、ワシントン大学修士課程修了（1983）、ワシントン大学博士課程修了（1988）【職

歴】 ハーバード大学ポスドク研究員（1988）、プリティッシュ・コロンビア大学助教授（1989）、プリティッシュ・コロンビア大学准教授（1995）【学位】 博士（人類学／日本学）（ワシントン大学 1988）、修士（人類学／日本学）（ワシントン大学 1983）【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[論文]

Creighton, M. R.

2010 Taiko, Selves, Japan; Travels with My Garbage Can, World Connecting Drums. *Asia Pacific World* 1(2): 109-127.

2009 Japanese Surfing the Korean Wave: Drama Tourism, Nationalism and Gender via Ethnic Eroticisms. *Southeast Review of Asian Studies* (SERAS) 31: 10-38.

2008 Fu shi hui: cong gudai riben de dazhong wenhua meixue dao dandai riben liuxing wenhua shenfen xisanzheng ["Ukiyoe from Historic Japanese Mass Culture Aesthetic to Contemporary Popular Culture Identity Icon"] *Journal of Jinan University* 18(1): 63-69.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本におけるデパートとアジア系小売商の文化人類学研究——消費主義と日本社会の変貌

・研究の目的

本研究では、文化と消費主義との相互作用を日本のデパートと日本の韓人系・南アジア系小売商を事例として研究したいと考えている。20世紀の初めに日本では大規模なデパートが出現する。それは、当初、日本人の欧米への関心を反映した商品を守る場であった。デパートの販売戦略や商品の変化は、大正期や昭和初期のモダン化、第2次世界大戦、戦後の復興、経済的繁栄、バブルの崩壊を経験した日本社会の変化を反映している。21世紀に入ると日本人の消費者の関心やショッピングの内容が多様化し、その変化に関連して在日韓国・朝鮮系や南アジア系の小売商が日本において活発に商売を展開している。本研究では、関西のデパートや、大阪の韓国・朝鮮系小売商、神戸の南アジア系小売商について調査を実施、日本社会の変化を消費の展開との関係から解明する。

・成果

デパートを日本社会の変化を象徴的に示す窓口であると仮定し、通時的視点から調査研究した結果、20年の間に日本のデパートでは、韓国や南アジアの商品を物産展や常設コーナーで販売するようになり、経営戦略が西欧志向からアジア志向の販売へと明確に移行してきたことが判明した。

デパート調査の成果の一部は、7月10日開催のみんぱく研究懇談会で報告した。また、このテーマに関連するエッセイを *MINPAKU Anthropology Newsletter* に寄稿した。さらに、デパートの広告に関する論文を、同志社大学の Bruce White 教授が編者を務める商業本に寄稿するとともに、多文化主義からみたデパートに関する論文を *Social Science Japan Journal* (SSJJ) に投稿した。

DANIELS, Inge Maria [ダニエルズ、インゲ マリア] ————— 准教授

任期：2013年3月15日～2013年5月8日

研究課題：フォトグラフィーの民族誌——現代日本の商業・宗教・社会生活

【学歴】 ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン人類学部博士課程修了（2001）【職歴】 オックスフォード大学インスティテュート・オブ・ソーシャル・エンド・カルチュラル・アンソロポロジー講師（2006）【専攻・専門】 文化人類学・社会人類学

【主要業績】

[モノグラフ]

Daniels, I. M.

2010 *The Japanese House: Material Culture in the Modern Home*. Oxford: Berg.

[論文]

Daniels, I. M.

2012 Beneficial Bonds: Luck and the Lived Experience of Relatedness in Contemporary Japan. *Social Analysis* 56 (1 & 2) special issue: Economies of Fortune.

2009 The Social Death of Unused Gifts: Loss and value in contemporary Japan. *Journal of Material Culture* 14(3): 385-408.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

これまで日本をフィールドとする社会人類学、贈り物交換、宗教的なものの商品化、地元写真、モノの廃棄過程、家内空間などのテーマについて研究している。2009年からは“Photography beyond the Frame: An Ethnography of the Japanese Ritual Economy”プロジェクトを開始した。日本人が日常的に撮影する写真を、民族誌をなすものとしてとらえ、現代日本の贈り物交換や宗教のかたちをあぶりだしていこうとする研究で、成果は展示という形でも公開する。現代日本の商業、宗教、社会生活の相互依存的な関係を明らかにし、写真の新しいテクノロジーによって新しいソーシャリティのかたちがあらわれていることに注目する。

招へい期間中は、このプロジェクトに関連して、館内および館外の研究者と意見交換し、関連する資料も収集して、さらなる批判的検討を重ねて研究を遂行する。研究の遂行にあたっては、民族文化研究部 森 明子教授がカウンターパートとなっている。

・成果

- 1) 国際シンポジウムへの参加（3月15日～18日）：本館で開催した国際シンポジウム（代表者：森 明子）において、ヨーロッパで行う日本展示という立場から、研究報告と議論を行った。
- 2) フィールドワークと資料収集：大阪、京都、神戸、奈良での調査研究と資料収集（モノ、写真、サウンド）を行った。
- 3) アーカイブおよび図書館での調査：本館の図書および標本資料をはじめ、東京都写真美術館でも短期の調査を行った。
- 4) 研究者との意見交換：本館の機関研究（マテリアリティの人間学）をはじめとして、関連する研究者との情報交換、意見交換を行った。
- 5) 研究成果を、研究報告論文として公開することを計画している。

DENG Xiaohua (鄧 曉華) [ドン、シャオホア]————— 教授

任期：2011年12月15日～2012年6月14日

研究課題：東南中国におけるエスニック・グループと地域文化との相互関係についての研究

【学歴】中国龍岩師範学校中文学科卒（1980）、中国華中科技大学言語学研究所修士課程修了（1987）、中国華中科技大学言語学研究所博士課程修了（2006）【職歴】中国龍岩師範学校教師（1980）、中国厦門大学人類学部講師（1987）、中国厦門大学人類学部准教授（1993）、中国厦門大学人類学研究所書記（1994）、中国厦門大学人類博物館館長（2000）、国立民族学博物館外国人研究員（2000）、香港城市大学中国言語学研究所客員研究員（2001）、中国厦門大学人類学部教授（2003）【学位】博士（文学）（中国華中科技大学 2003）【専攻・専門】文化人類学・言語学・文化遺産研究

【主要業績】

[単著]

鄧 曉華

2005 『汉语方言研究与语言演变理论的建构（漢語方言研究と言語の変化に関する理論の構築）』香港靄明出版社。

[編著]

鄧 曉華編

2002 『中国人類学の理論と実践（中国人類学の理論と実践）』香港華星出版社。

[共編]

鄧 曉華・李 如龍編

2009 『客家語研究』鄧 曉華、李 如龍（主編）福建人民出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南中国におけるエスニック・グループと地域文化との相互関係についての研究

・研究の目的

多元的な文化をもつ東南中国では漢族、チュワン・トン語およびミャオ・ヤオ語系の民族等の多くのエスニック・グループが共存している複雑社会である。とくに福建省では、漢族の閩語系および客家語系のサブ・エスニック・グループ、少数民族である畬族、回族、蛋民など、言語文化の多様性がみられる。ここ10年にわたって現代化の波が押し寄せる中、これらのエスニック・グループがもつ言語文化やその関係性にも大きな変化が起きている。

これまで長期にわたって中国南部の人類学研究に従事しており、主に東南中国の諸エスニック・グループの言語文化における歴史的な関係の構築、各民族の“文化遺産運動”の分析研究において、多くの研究成果を得ている。本研究では、日本における研究者と協力して、近年の現地調査で得られた資料の分析作業を行い、さらに一歩踏み込んだ研究を行う。その概要として、近年、現地調査で収集した豊富な一次的な資料に基づき、各

エスニック・グループと地域文化の相互関係、及びエスニック・アイデンティティとエスニック・グループ間の関係性の再構築過程に注目し、その変容状況および社会的な役割を究明する。

・成果

華僑華人学会で「閩西南客家村落の経済変化と華僑——福建省南靖県書洋鎮塔下村を例に」と題する講演を行うとともに、論文「従身体部位名称看客的認知模型」を *Journal of Chinese Linguistics* に発表した。また機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の第1回研究会において発表「地域から読み解く『世界遺産』のもたらした影響——福建省永定県の初溪楼群を事例として」を行った。それをもとにした論文を『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。さらに、研究公開プログラム「漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学のアプローチ」(2012年11月)において基調講演を行った。

GARFIAS, Robert [ガルフィアス、ロベルト]—————教授

任期：2013年1月7日～2013年3月29日

研究課題：民博映像番組の有効利用に関する研究

【学歴】サンフランシスコ州立大学卒(1956)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校修士課程修了(1958)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程修了(1965) 【職歴】ワシントン大学音楽部助教授(1965)、ワシントン大学民族音楽学大学院プログラム所長(1965-1975)、ワシントン大学音楽部准教授(1968)、カリフォルニア大学パークレー校客員准教授(1969)、ワシントン大学音楽部教授(1973)、ワシントン大学副学長(1977)、カリフォルニア大学アーヴァイン校芸術部部長(1982-1987)、カリフォルニア大学アーヴァイン校人類学部教授(1987-現在)、カリフォルニア大学国際教育プログラム、コスタリカ研究センター所長(1992-1993)、カリフォルニア大学アーヴァイン校チカノ・ラティーノ研究センター所長(1997-2000) 【学位】Ph. D.(カリフォルニア大学ロサンゼルス校 1965)、M. A.(カリフォルニア大学ロサンゼルス校 1958) 【専攻・専門】民族音楽学

【主要業績】

[単著]

Garfias, R.

2004 *Music: The Cultural Context* (Senri Ethnological Reports 47). Osaka: National Museum of Ethnology.

1976 *Music of a Thousand Autumns, The Togaku style of Japanese Court Music: an analysis of Theory in Practice*. Berkeley: University of California Press.

[共著]

Garfias, R. with A. D. Firtgou

1976 *Spanish-American Music and Its Roots..* Morristown: Silver Burdett.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民博映像番組の有効利用に関する研究

・研究の目的

民博ではこれまで数多くの映像番組を制作してきた。これらの番組は世界各地の文化を紹介することを目的にしており、現地で収集した映像音響資料を編集し番組化したものである。民博が映像メディアを用いて蓄積してきた情報はすでに膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われてこなかった。完成した番組は館内のビデオテーク・ブースなどで公開され来館者に好評を博しているが、それ以外では十分に活用されているとはいえず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、取材対象国・地域における民博映像番組の有効利用のための具体的な方法と問題点を整理・検討することを目的とする。

・成果

民博の映像音響資料収集プロジェクトに海外協力者として参加し、スペイン、ポルトガル(2006年)、プエルトリコ(2007年)において調査と映像取材を行った。今回の在任中には、これらの調査で収集した映像資料のすべてを精査し、すでに完成していた日本語版番組「バレンシアの聖母マリア誕生祭と管楽器ドゥルサイナ」の英語版、スペイン語版を完成させた。また、ポルトガルとプエルトリコのギター音楽に関する番組を各1本制

作するため、英文による解説台本の執筆および収録、インタビューの翻訳、キャプションの執筆などの作業をおこなった。これら2番組には、これまで見るができなかった貴重な映像が含まれており、完成後には、取材国だけでなくより広い地域で上映する価値がある。

GUARNÉ CABELLO, Blai [ガルネー カベロ、ブライ] 教授

任期：2012年11月26日～2013年4月25日

研究課題：日本社会における「過去」の見せ物化：アイデンティティ、マテリアリティ、表象に焦点をあてて

【学歴】 バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科卒（1995）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科修士課程修了（1998）、バルセロナ自治大学（スペイン）大学院政治科学・社会学部政治科学・公法学科修士課程修了（2000）、東京大学大学院総合文化研究科外国人研究生（日本政府留学生）（2004-2006）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科博士課程修了 **【職歴】** 国立ミッション大学（アルゼンチン）人文社会学部文化人類学科客員研究員（1995）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部社会人類学科講師（1995）、エーテボス・ローランド大学（ハンガリー）社会人類学科客員研究員（1997）、カタルーニャ自由大学（スペイン）人文学部心理学・教育科学科講師（2000）、東京大学大学院総合文化研究科（文化人類学）客員研究員（2004）、カタルーニャ自由大学（スペイン）人文学部東アジア学科講師（2006）、バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部社会人類学科助教授（2007）、ボンバウ・ファブラ大学（スペイン）人文学部人文学科助教授（2007）、スタンフォード大学（米国）社会科学部文化人類学科ポスドクリサーチフェロー（2008）、バルセロナ自治大学（スペイン）翻訳学部翻訳学科東アジア研究プログラム（ファン・デ・シエルバ・ポスドクフェロー）専任講師（2010） **【学位】** 社会人類学博士（バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科 2007）、社会法学修士（バルセロナ自治大学（スペイン）大学院政治科学・社会学部政治科学・公法学科 2000）、社会人類学修士（バルセロナ大学（スペイン）地理歴史学部人類学科 1998） **【専攻・専門】** 文化人類学

【主要業績】

〔編著〕

Guarné, Blai (ed.)

2006 *Identitat i representació cultural: perspectives des del Japó*. Revista d'Etnologia de Catalunya (Catalan Review of Ethnology 29).

〔論文〕

Guarné, Blai

2011 Shall We Westernize? Cultura popular y representación orientalista en la interpretación del Japón contemporáneo. In Elena Barlés and David Almazán (eds.) *Japón y el mundo actual*. Zaragoza: AEJE (Spanish Association of Japanese Studies) pp. 721-743, Zaragoza: Universidad de Zaragoza.

2010 The Japanese Oxymoron: A Historical Approach to the Orientalist Representation of Japan. In Ignacio Lopez-Calvo (ed.) *One World Periphery Reads the Other: Knowing the "Oriental" in the Americas and the Iberian Peninsula*. pp. 309-329, Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本社会における「過去」の見せ物化——アイデンティティ、マテリアリティ、表象に焦点をあてて

・研究の目的

本研究の目的は、日本文化の表象について「過去」の商品化および見せ物化という点に焦点を合わせ文化人類学的に分析することにある。とくに理想的な「過去」を郷愁的に構築していく概念として「故郷（ふるさと）」をとりあげ、その物質化、視覚化の様相を多角的に分析する予定である。この「故郷」という概念は、人やモノの越境などグローバル化する日本社会の脈絡において近年ますます重要になりつつあり、日本人のアイデンティティ構築を考える上で最適の研究対象と考えられる。さらにこの分析を「日本人論」の脈絡に置き直し、そこにおいて登場するステレオタイプ化された日本文化の表象と比較考察を行っていくつもりである。こうした一連の日本および日本イメージの相対化ともいべき作業は、世界各地で見られるアイデンティティ、文化そして国家などの概念生成過程を分析する際に重要な視座を提供するものと考えられる。

・成果

- 1) 研究テーマである「ふるさと」のイメージがどのように物質文化に体现され、それ自体が逆に「ふるさと」のイメージを生成、増殖させていくのかについて、グローバル化の進む現代社会のなかで考察するため、日本人論をテーマにした研究書の分析を行い、日本人研究者との交流を図った。とくに第4回アジア人文科学会議や、EU主催の科学者ネットワーク会議などの国際会議に出席し、日本を対象とした人類学的研究と地中海域を対象とした人類学的研との比較をオリエンタリズムの概念を用いて分析した。
- 2) 来日以前にアメリカ人類学会年次大会において組織した「グローバル循環における文化資源と移住のポリティックス」シンポジウムの成果を論集としてまとめるべく編集を行った。民博の研究報告として発表する予定である。
- 3) 現代日本社会において使用されるカタカナ言葉の分析を通じたアイデンティティ形成論を単著（スペイン語）として書き上げた。この著作については、現在、印刷段階にあるが、スペイン語で著された数少ない現代日本文化論であり、今後、スペイン語圏の国際学界からの反応が期待される。
- 4) 人類学を含む日本の代表的な人文科学、社会科学の著作をスペイン語に翻訳するプロジェクトにも積極的に関わり、国際交流基金への申請をとりまとめた。

◎出版物による業績

[単著]

Guarné, Blai

2012 *La escritura de lo ajeno. Representación e identidad cultural en el katakana japonés*. Madrid: CSIC (Spanish National Research Council), Government of Spain.

[編著]

Guarné, Blai (ed.)

2012 *Antropología de Japón: Globalización e Identidad Cultural en Asia Oriental*. Barcelona: Edicions Bellaterra – Casa Asia (Government of Spain).

[共編]

Guarné Blai and Paul Hansen (eds.)

2012 “Escaping Japan: Inside and Outside (Volume I).” *PAN-JAPAN: The International Journal of Japanese Diaspora*.

2012 “Escaping Japan: Inside and Outside (Volume II).” *PAN-JAPAN: The International Journal of Japanese Diaspora*.

HUANG Jan-yen (黄 貞燕) [ホワン、ジェンイエン]————— 教授

任期：2012年7月2日～2012年9月19日

研究課題：博物館、知識の生産と市民参加——知識観と知識の公共性から考える

【学歴】国立台湾大学歴史学科卒（1990）、国立台湾大学芸術史研究所修士課程修了（1994）、京都大学美学美術史学研究科修士課程修了（2000）、京都工芸繊維大学修士課程修了（2005）【職歴】国立台北芸術大学博物館研究所助理教授（非常勤）（2005）、国立台湾芸術大学芸術と文化政策管理研究所助理教授（非常勤）（2007）、国立台北芸術大学博物館研究所助理教授（2009）【学位】博士（学術）（京都工芸繊維大学 2005）【専攻・専門】日本博物館史、地域博物館、博物館政策、無形文化遺産保護制度

【主要業績】

[単著]

黄 貞燕

2008 『日韓無形の文化財保護制度』（日韓における無形の文化財保護制度）。宜蘭：国立伝統芸術総処籌備處。

[編著]

黄 貞燕編

2011 『民俗／民族文化的蒐藏與博物館』（民俗・民族文化の収集と博物館）。台北：国立台北芸術大学。

2003 『日本現代美術館学（日本現代美術館学）』。台北：五観芸術管理会社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館、知識の生産と市民参加——知識観と知識の公共性から考える

・研究の目的

本研究は、現在、民博が、博物館学関係の様々な研究プロジェクトや本館展示新構築、「博物館学集中コース」の実施を通じて実践的な形で構築しようとしている新たな博物館学の構築の一助となるとともに、台湾における博物館学の確立にも寄与するものと期待される。

・成果

- 1) 日本における地域コミュニティと連携した博物館の実践例を出来る限り収集し、その評価を行った。
- 2) とくに社会的課題の中から「環境」の問題を取り上げ、日本の環境問題における専門家知識の役割の変化や博物館における知識の取り上げ方の変化について具体的事例に即しながら分析を行った。
- 3) 滋賀県立琵琶湖博物館や神奈川県平塚市博物館など、市民参加型調査を通じて地域コミュニティの活性化に大きく貢献している博物館の実地調査を実施し、特にローカルな知識の誘出方法や集積方法、提示の方法に焦点を当てて検討し、より創造的な博物館と市民の協働の在り方を抽出した。
- 4) 民博との学術協力協定に基づき過去3年間にわたって台北・大阪で実施してきた「民族/民族文化に関する博物館学ワークショップ」の評価と成果取りまとめを進める一方、とくにコミュニティと博物館に焦点を当てた向こう3年間のプログラムの策定に当たった。

LIAO Guoyi (廖 国一) [リャオ、グォイー] ————— 教授

任期：2012年5月1日～2012年8月1日

研究課題：壮（チワン）族の伝統文化の観光人類学的研究

【学歴】 四川大学歴史系考古学専攻卒（1986）、四川大学大学院修士課程歴史系考古学専攻修了（1988）、中央民族大学大学院博士課程歴史文化学院歴史学専攻修了（2011）【職歴】 広西師範大学歴史文化与旅游学院助理研究員・同大学広西地方民族史研究所助理研究員兼任（1988）、広西師範大学歴史文化与旅游学院副研究員・同大学広西地方民族史研究所副研究員兼任（1997）、広西師範大学歴史文化与旅游学院研究員・同大学広西地方民族史研究所研究員兼任（2003－現在）、広西師範大学歴史文化与旅游学院教授（2007－現在）、同大学旅游研究所副所長兼任（2005－現在）、日本東洋大学国際地域学部国際観光学科外国人研究員（2005－2006）、東洋大学アジア文化研究所客員研究員（2005－現在）【学位】 歴史学博士（中央民族大学大学院 2011）【専攻・専門】 民族史学

【主要業績】

[編著]

廖 国一編

2004 『歴史教学与田野調査』南寧：広西民族出版社。

1998 『広西史稿』桂林：広西師範大学出版社。

[論文]

廖 国一

2010 「郷村博物館の建設与郷村旅游業的發展——以海南島五指山冲山鎮歴史文化名村番茅村為例」広西壮族自治区博物館・広西文物考古研究所編『博物館与旅游』南寧：広西科学技術出版社。

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

壮（チワン）族の伝統文化の観光人類学的研究

・研究の目的

これまで広西の壮族・瑶族・苗族・京族・漢族、海南島の黎族等の民族の現地調査を通じた文化面の研究や、環北部湾（トンキン湾）地域を中心とした考古学・歴史学的研究を幅広く行ってきた。民族学研究や現地調査の方法論に関する著作もある。壮族の伝統文化とその観光開発については、広西の龍勝県・陽朔県・靖西県・宜州市などの地域で調査研究を行ってきた。壮族村落の観光開発について、この十数年来、一面では壮族の伝

統的な建築・服飾・工芸品・飲食・歌舞等、伝統文化の復興を引き起こした。しかし、他方では、観光開発は壮族の伝統文化に負の影響をもたらした。たとえば村民の商品意識の改変、収入の不均等、伝統的な生産方式の変化、村の環境汚染の増大などが挙げられる。村の観光開発は、壮族の伝統文化と外来文化の衝突・融合を促している。こうした現象について、これまでも「龍勝少数民族民俗風情旅游景点開発与管理現狀的調查研究」(『桂林旅游高等専科学校学報』2004年第1期)、「環北部湾经济圈少数民族文化的開發与保護」(『广西民族研究』2007年3期)、2010「北部湾旅游新村的建設与“泛北部湾旅游圈”的構建」(東洋大学『アジア文化研究所研究年報』45号)をはじめ、観光開発の現状とそれにもなう文化の管理・保護、政府と村民との関係などの諸問題に焦点を当てた研究論文を公表してきた。民族史と観光人類学を結びつける視点から、壮族の伝統文化が中国の観光経済の発展という条件下にいかに関係・変遷を経てきたか、壮族の伝統文化がいかに関係・変遷を経てきたか、壮族の伝統文化がいかに関係・変遷を経てきたか、資源化されているのか、壮族の伝統文化の変容と経済発展との関係はどのようなものであるのか、観光開発や文化の管理保護に各級政府がどのような役割を果たしているのかといった問題点について、広西の壮族の生態・歴史的条件の異なるいくつかの村落の事例から研究を行う計画である。

・成果

観光開発の民族文化に与える影響について、東興市沱尾村・龍勝県平安寨・大新県板橋村・龍州県板池村など観光開発の舞台となった村落で訪問調査を行った。そして民博での滞在期間中に、塚田誠之教授が代表を務める共同研究会「中国における民族文化の資源化とポリティクス」で口頭発表を行った。また塚田誠之教授等との討議や文献閲覧、日本の観光人類学の業績の理解を通じて一層研究を深めた。その研究成果の刊行はもっか準備中である。

NIKOLOV, Gordan [ニコロフ、ゴルダン] ————— 准教授

任期：2012年6月18日～2013年6月17日

研究課題：伝統陶器についての民族学的・博物館学的研究

【学歴】ベオグラード大学哲学部卒(1992)、聖ツィリル・メトディ大学(マケドニア)地理学研究科修士課程修了(2012)【職歴】マケドニア国立博物館キュレーター(1992)、マケドニア国立博物館上級キュレーター(1997～現在)、マケドニア国立博物館運営協議会議長(2003)、マケドニア国立博物館企画運営部長(2005)、マケドニア国立博物館館長代行(2005)、マケドニア国立博物館館長(2006)【専攻・専門】民族学

【主要業績】

[単著]

Nikolov, G

2009 *Amazing Macedonia*. Skopje: Treto Uvo doel (in Macedonian & English) (DVD付).

[論文]

Nikolov, G

2010 Bread Casserole from Neolithic to Present in South: East Europe; The Beginning of Ethno archeological Cooperation in the Region. *Ethno Archeology and Material Culture*, Rome: Italian Association of Ethno Archaeology.

2007 Cultural Heritage of Maleshevo Region: Possibility for Development of the Berovo Municipality, *Malesh 100 years after Dimitar Pop Georgiev Berovskis' dead: past, present, future*. pp.99-207, Berovo (in Macedonian).

【2012年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

伝統陶器についての民族学的・博物館学的研究

・研究の目的

マケドニア国立博物館のキュレーターとして経験と実績を積み、民族陶器を専門分野としており、彼の研究は単に陶器自体を対象とするのではなく、今日および過去においておこなわれてきた同国内の陶器製造を調査し、とくに西部マケドニア Kichevo 市近郊の村落で営まれている陶器製造に焦点をあてて研究をおこなっている。さらに、製造工程そのものに参画し、技術そのものの習得を通して、伝統的手法を再構成し、記録、保存、研

究をおこなっている。同時に、陶器製造の背景となる生産、流通、消費を調査し、その環境との関わり、地域性、実践的・状況的知識などを明らかにしている。

本研究課題においては、こうした研究をさらに進展させ、民族学および博物館学の観点から研究をすすめる。すなわち人類学・民族学における物質文化研究の最新の研究動向をふまえ、我が国における同様の研究事例とも比較することによって、より普遍的な脈絡において陶器製造について考察を深める。また、博物館学的観点からは、国家や国民文化にとっての博物館の役割、地域的・歴史の変異との関わりを、ことに陶器製造の研究を通して明らかにするとともに、研究の社会還元の内実についても知見を得る。

・成果

現地的調査については、丹波篠山を2012年6月から訪問し、伝統的な立杭焼の制作過程を調査をはじめた。また雅峰窯を持つ陶芸家市野秀之氏らが主催するワークショップに参加し、日用品としての陶器の制作技術について研修をおこなった。さらに益子焼の窯元を訪問した。また、研究課題について現地調査を行うとともに、本館の研究懇談会で発表“Folk Pottery in Macedonia”を行い、『月刊みんぱく』37巻2号に“The Treasure of the Museum of Macedonia”を執筆した。そのほか立命館大学等への訪問を通じ、積極的に学術交流を行った。

ROUÉ, Michèle Josette Marie [ルエ、ミッシェル ジョセット マリー]————— 教授

任期：2011年12月16日～2012年9月14日

研究課題：日本の都市における季節性——自然とその変化をめぐる関係性の社会的構築

【学歴】レネ・デカルト／ソルボンヌ大学卒（1966）、レネ・デカルト／ソルボンヌ大学修士課程修了（1971）レネ・デカルト／ソルボンヌ大学博士課程修了（1975）【職歴】フランス国立科学調査センター（CNRS）・国立自然史博物館・研究員（1980）、フランス国立科学調査センター（CNRS）・国立自然史博物館・研究部長（1998）【学位】博士（民族学）（レネ・デカルト／ソルボンヌ大学 1975）、修士（民族学）（レネ・デカルト／ソルボンヌ大学 1971）【専攻・専門】民族学

【主要業績】

[単著]

Roué, M.

1992 *Silatunirmut: The Pathway to Wisdom. Montreal: Nunavik Educational Task Force. Collective Report by the Working Group on Education in Nunavik.*

[共著]

Roué, M. and Y. Delaporte

1989 *Chants lapons. Collection «Arctique». Paris: Peeters/SELAF.*

1986 *Une communauté d'éleveurs de rennes: Vie sociale des Lapons de Kautokeino. Paris: L'Institut d'Ethnologie, Musée de l'Homme.*

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の都市における季節性——自然とその変化をめぐる関係性の社会的構築

・研究の目的

私は、1970年代から1990年代にかけてフィンランドやノルウェー、スウェーデンのサーミ民族のトナカイ遊牧、カナダのイヌイット民族やクラー族の狩猟に関する民族学的な研究を行った。近年はユネスコと共同で、自然に関する先住民の伝統的知識や自然景観に焦点を当てながら、文化多様性と生物多様性の関係を研究するとともに、生物多様性を持続させる上で先住民の知識やNGOの諸活動が果たす役割について調査を行っている。招へい期間中に、私は春のサクラに注目し、日本の都市における季節の変化と社会（社交性）の関係について京都と大阪で調査を実施する予定である。私は、都市における自然を社会的に構築された環境の1つであると考え、季節の移ろいととも人間との関係が周期的に変化すると考えている。とくに都市にある庭園や公園、寺社の敷地、通り、広場のような公共空間においてサクラ（花見）の季節における都市人と季節との関係を調査、分析し、都市エスノグラフィーの作成を構想している。

・成果

都市環境に関する人類学的な研究は、重要な課題のひとつである。日本人が都市環境において自然をいかに社会化し、儀礼化してきたかを問うこのプロジェクトにおいて、私は民博内外の研究者や大学院生と協力しながら中心的な調査者の役割を果たした。

第1期（2011年12月15日～2012年2月15日）には、共同研究者らと協力し、基本文献の渉猟とともに現地調査の準備を行った。また、予備調査としてサクラを管理している人にインタビューを行うとともに、春のイベントについて日記をつけてくれるボランティアのグループを組織した。

第2期（2012年2月15日～4月15日）には、万博記念公園など大阪や京都の特定の場所でインタビューや参与観察を実施した。

第3期（2012年4月15日～6月15日）には、とくに花見に造詣の深い人や関心のある人にインタビューや参与観察を継続した。また、これまで収集してきたインタビュー・データや写真、映像記録を分析した。

第4期（2012年6月15日～9月14日）には、資料の分析を完了させ、英語論文の執筆を開始した。

成果の一部は、欧米の学術雑誌に投稿する予定である。

◎出版物による業績

[論文]

Roué, M.

2012 A Saami Reindeer Herder's Cultural Landscape: Memory, the Senses and Ethics. In N. Raasakka and S. Sivonen (eds) *Northern Landscapes: "Implementation of the European Landscape Convention in the North Calotte Area Municipalities" Conference in Inari, Finland 7-9.9.2011* (Reports 48), pp.45-50, Centre for the Economic Development, Transport and the Environment.

WANG Jianxin (王 建新) [ワン、ジェンシン]—————教授

任期：2012年11月27日～2012年12月26日

研究課題：貴州東南部苗族の刺繍の素材選択——少数民族の生活知恵と文化創造

【学歴】東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退(1996) 【職歴】中国新疆放送大学教育番組制作部職員(1985-1988)、日本民族学振興会研究員(1996-1999)、神奈川大学常民文化研究所外国人研究員(1999-2001)、立正大学文学部非常勤助教授(2001-2002)、中国中山大学人類学系助教授(2002-2004)、同人類学系教授(2004-2012)、蘭州大学西北少数民族研究センター副主任・民族学研究院教授(2012-現在) 【学位】博士・学術(東京大学 2004) 【専攻・専門】文化人類学、民族学

【主要業績】

[単著]

Wang, J.

2004 *Uyghur Education and Social Order: The Role of Islamic Leadership in the Turpan Basin*. (Studia Culturae Islamicae No.76). Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

【2012年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

貴州東南部苗族の刺繍の素材選択——少数民族の生活知恵と文化創造

・研究の目的

民博の関係文献を利用し、関係研究者との交流を行いながら、苗族におけるもの造りや素材の選択に見られる文化の創造とエスニックバウンダリーの構築のメカニズムを解明する。

・成果

関本教授を初めとする機関研究プロジェクト「布と人間の人類学的研究」のメンバーと、貴州省苗族刺繍について議論と意見・情報交換をし、このテーマをより広く布・衣の人類学として考えるための多くの貴重な意見を得た。現代のグローバル市場、都市住民の消費文化と伝統的な染織、刺繍等の関わりについて、とくに新し

いアイデアを得ることができた。この3年間で、苗族関係の成果には、論文「高排苗族牯藏节调查与思考」（原生态民族文化学刊 2010年）と編著『南岭走廊民族宗教研究——道教文化融合的视角』（上下册、宗教文化出版社 2011年）などがある。

◎出版物による業績

[その他]

王 建新

- 2012 「サラール族」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』pp. 56-60, 東京: 明石書店。
- 2012 「ムスリムのシャーマニズム」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 188-192, 東京: 明石書店。
- 2012 「『エスニック・コリドー』理論とムスリム宗教文化の研究」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 317-319, 東京: 明石書店。
- 2012 「中央アジアのドゥンガン」中国ムスリム研究会編『中国のムスリムを知るための60章』 pp. 347-351, 東京: 明石書店。
- 2012 「唐汪川民族関係調査」北方民族大学学報第4期。
- 2012 「哈萨克斯坦东干人的民族教育与群体建构」西北民族研究第2期。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2012年12月9日 「領土紛争を抱えながらも経済と文化の交流を続けるべき」NIHU 現代中国地域研究コロキウム『日中関係の危険な現状——打開策をどう見出すか?』愛知大学国際中国学研究センター
- 2012年12月10日 「ケンブリッジ大学の Uradin Bulag による発表 “Looking as a Minority: Political Tourism in China” についてのコメント」中国西部少数民族研究学術研究会、愛知大学国際交流学部
- 2012年12月22日 「中国の民族学人類学博士養成の現状分析——日本、韓国との比較の視点から」中国ムスリム研究やヤオ族研究など2人の若手研究者の発表についてコメント」東アジア人類学研究会、首都大学東京

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」とは近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」はある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究を行う活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導で行うのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募も行っている。応募された共同研究の提案は、公募、館内募集の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、当の共同研究会のメンバーだけではなく研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究活動である。すなわち、館員個人の研究活動も、申請することによって館の公的な研究活動の一環に組み入れているわけである。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」と『人間文化資源』の総合的研究」という2種類の大型プロジェクトが実施されている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが館長のリーダーシップ支援経費と科学研究費補助金などの外部資金である。前者では特に機関研究の推進のために「機関研究推進経費」という枠組みがあり、大規模なシンポジウムの準備と開催のためにこの経費を使用することができる。同じくリーダーシップ支援経費には「研究成果公開プログラム」という枠組みもある。機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、7件の機関研究プロジェクト、42件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性、社会性を担保していく上でも、科学研究費補助金などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、学振以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。

また、これら外部資金に付随する間接経費も貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、リーダーシップ支援経費の「事業調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の一環である刊行物に関しては、2012年度には『国立民族学博物館研究報告』37巻1～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2011』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会が、東京と大阪で開催されている。

2004年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革を行った結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けている。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、文化資源プロジェクトの一環として海外資料収集が行われており、寄贈等により新たに加わった資料もある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環として行われている。文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSIS-CAT (全国共同利用総合目録データベース) への登録作業を推進しており、日本語をはじめとし、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語などの図書資料や難解語図書などの遡及入力を行った。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、インターネットを介して検索するシステム (OPAC) により、広く一般に公開され利用されており、本館所蔵の図書資料の相互利用での貸出受付が2012年度は1,091件、文献複写受付

は2,414件と、共同利用に貢献していることがわかる。さらに、2008年9月より館外貸出を開始し、一般利用者にも館外貸出利用可とした。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録を公開してきた。2012年度は、木内信敬アーカイブ資料について整理を終えた。また、土方久功アーカイブ資料のうち、ノート全40冊のデジタル化を完了した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応できるようにし、利用者に対するサービス向上を図った。2012年度には422件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

共同利用を促進させるために、実査を兼ねた資料IDラベルと不正持ち出し防止用磁気テープの貼り付けを2010年度より3か年計画で進めている。2012年度にはその第3期として約20万冊を処理した。また、書架資料落下防止テープ貼付、書庫階段部壁塗装、図書館シャッター改修、書庫エレベーター内へのレスキューキャビネットの設置などを行った。

そのほか、大学や研究機関等の研修・授業、あるいは学会の開催のために、展示場や講堂、セミナー室などの本館の施設が利用されている。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題に、文化人類学・民族学の立場から組織を挙げて重点的に取り組む機関研究として、共同研究や国際研究集会などを組み合わせた、大型で公開性の高いプロジェクトを実行している。この機関研究には、全国の大学や研究機関に所属する研究者も参加するなど、大学共同利用機関、さらには我が国における文化人類学・民族学の研究拠点としての機能を高める役割も果たしている。また、実施プロジェクトの内容は、大学・研究機関等の外部者からの意見を取り入れつつ研究戦略センター会議や機関研究運営会議において検討しており、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。

2009年度に学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域を機関研究として新たに設定し、国際性と機関間連携を重視した館全体が取り組む重点型の共同研究として位置づけた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあわせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。2012年度には、研究領域「包摂と自律の人間学」では「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」（代表者：鈴木 紀）、研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（代表者：齋藤 晃）、「ケアと育みの人類学」（代表者：鈴木七美）、「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓 敏）の4つの研究プロジェクトが、研究領域「マテリアリティの人間学」では「モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開」（代表者：竹沢尚一郎）、「布と人間の人類学的研究」（代表者：関本照夫）、「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表者：佐々木史郎）の3つの研究プロジェクトが実施された。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、2012年7月にオーストリアにおいて国際シンポジウム『スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果』、同年11月に国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』、同『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』、2013年3月にはアメリカ合衆国において国際ワークショップ『グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか』など合計8件の研究集会を開催した。また、成果の一部として Nanami Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (SES No.80, 2012, National Museum of Ethnology) などが出版された。

研究領域「マテリアリティの人間学」では、2012年11月に国際ワークショップ『アジアの布と生きる』、2013年1月にはフランスにおいて国際シンポジウム『21世紀の民族学博物館』、国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』、同年3月には『博物館は悲惨な記憶をどう展示するか』など合計6件の研究集会を開催した。

2012年度機関研究一覧

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：岸上伸啓)	支援の人類学——グローバルな互惠性の構築に向けて	鈴木 紀	2009～2012
	近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究	齋藤 晃	2011～2013
	ケアと育みの人類学	鈴木七美	2011～2013
	中国における家族・民族・国家のディスコース	韓 敏	2012～2014
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開	竹沢尚一郎	2009～2012
	布と人間の人類学的研究	関本照夫	2010～2012
	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究	佐々木史郎	2012～2014

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：岸上伸啓

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

「支援の人類学——グローバルな互惠性の構築に向けて」

代表者：鈴木 紀 2009～2012

研究目的

本研究は2つの目的をもつ。第1に、経済と情報のグローバル化がすすむ現代世界を読みとくキーワードとして「支援」に着目し、グローバル化の弊害にたいするさまざまな支援の在り方を民族誌的に比較検討しながら、地球規模の互惠性の在り方を構想することである。第2に、その互惠性の中に人類学者の営為自体をも取り込み、人類学者による支援研究が実際の支援活動にどのような貢献ができるかを問うことにより、問題解決の実践的ツールとしての人類学の性質を研磨することである。

本研究で支援に着目する理由は、機関研究の領域 1 包摂と自律の人間学の方法論を明確にするためである。包摂と自律という課題は、社会から排除されたマイノリティをマジョリティに包摂しつつも、マイノリティの自律性を維持し、同時にマジョリティの在り方自体にも変容をもたらすことを求めるものである。本研究は、このようなマイノリティの包摂と自律、およびマジョリティの変容のための学習の契機として、個別具体的な支援活動を想定する。そして支援の現場に焦点をあて、そこに関与する支援者と被支援者の関係性を民族誌的に解明することにより、包摂と自律の過程を実証的に把握し、それが達成される条件を考察することが可能になる。

また本研究で人類学の実践性を重視する理由は、前機関研究「文化人類学の社会的活用」を継承発展させるためである。前研究では、『みんぱく実践人類学シリーズ』にて、主として開発途上国の社会、経済問題に対する文化人類学の活用を提示したが、本研究では、先進国と開発途上国双方に関わる、まさにグローバルな取り組みを必要とする領域へと研究対象を広げていく。

実施状況

- 2012年6月23日、第46回日本文化人類学会研究大会（広島大学）の分科会の形で、『グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ』ワークショップを開催した。ワークショップでは、プロジェクトリーダーの鈴木 紀の趣旨説明に続き、岸上伸啓「カナダにおける都市先住民イヌイットをめぐる支援活動」、関根久雄（筑波大学）「人類学的評価という協働——ある『支援』の試み」、白川千尋「青年海外協力隊をめぐる支援活動」、鈴木 紀「フェアトレードの『支援の言説』と人類学的支援」、および陳 天璽「日本における無国籍者をめぐる支援活動」の5つの研究発表をおこなった。これに対し亀井伸孝（愛知教育大学）と清水 展（京都大学）がコメントした。会場には約50名の参加があった。
- 2012年12月15日、国立民族学博物館にて国際ワークショップ『グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング』を開催した。鈴木 紀の趣旨説明の後、リオール・ノラン（パデュー大学）「Practicing Anthropology: Challenges, Rewards, and Career Planning（実践人類学——挑戦、報酬、キャリア・

プランニング)、佐藤 峰 (JICA 研究所)「当事者の声を反映させる小さな仕組み作り——開発実践・援助実務・学際研究での試み」、福武慎太郎 (上智大学)「日本の国際協力 NGO の課題と未来——東ティモールにおける NGO 活動の経験から」、藤掛洋子 (横浜国立大学)「国際協力の実践と研究の往還を超えて——パラグアイとの 20年間の関わりを振り返る」の 4 つの発表をおこなった。最後の総合討論では、参加者との質疑応答がおこなわれた。参加者は 41 名。

- 3) 2013年 3月21日、第73回応用人類学会 (Society for Applied Anthropology) (米国コロラド州デンバー市) の分科会の形で、国際ワークショップ『グローバル支援の人類学——どのように市民社会間に互恵的絆を育むか? (Anthropology of Global Supporting: How Can We Forge Reciprocal Bonds between Civil Societies?)』を開催した。鈴木 紀の趣旨説明の後、岸上伸啓「カナダ都市部のイヌイト・ホームレス——モントリオール調査の結果から (Homeless Inuit in Urban Centers of Canada: Results from Montreal Research)、陳 天璽「無国籍者の調査と支援——人類学の役割 (Research and Support of Stateless People: The Role of Anthropology)」、内藤直樹 (徳島大学)「長期滞在するソマリア難民と地元ケニア人コミュニティとの社会経済的関係——下からの平和構築に学ぶ (The Socioeconomic Relationships between Somali Protracted Refugees and Host Communities in Kenya: Lessons from Peace Building Practices from Below)」、鈴木 紀「フェアトレード観光——市場主導の倫理的消費からグローバル市民間の倫理的出会いへ (Fair Trade Tourism: From Market-Driven Ethical Consumption to Ethical Encounter between Global Citizens)」の 4 つの発表をおこなった。

成果

本年度は研究 4 年目、最終年度にあたり、第 2 の研究目的、すなわち人類学的研究の支援活動への貢献について、過去 3 年度にわたる研究成果を振り返りながら検討してきた。6 月 23 日のワークショップでは、主として人類学者が研究成果をどのように支援活動に反映させるか、人類学者ならではの貢献はなにかをめぐって議論した。フィールドワーク、文化相対主義、民族誌などの人類学の方法論を支援のツールとして活用すること、調査と支援の不可分性、および長期にわたる情報提供者との付き合いの重要性などが指定された。2012年 12月 15日の国際ワークショップでは、実践人類学者 (支援活動を専門に行う人類学者) に焦点をあて、そうしたキャリア形成の方法と、実践人類学者の役割としての支援事業に関連した「異文化」間翻訳、実務批判、学術的活動への貢献などの論点が提示された。

2013年 3月 21日の国際ワークショップでは、これらの論点を整理して再提示し、国際的な場で議論をおこなった。

機関研究に関連した成果の公表実績

- 1) 実施状況でのべた 3 回のワークショップ
- 2) 鈴木 紀「機関研究のアウトリーチ——みんなくワールドシネマの試み」『民博通信』138: 2-7, 2012
- 3) 鈴木 紀「人類学的支援とは」『民博通信』140: 10-11, 2013

「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」——

代表者：齋藤 晃 2011～2013

研究目的

集住政策とは、広範囲に分散する小規模な集落を、計画的に造られた大きな町に統合する政策であり、16世紀以降、スペイン統治下のアメリカ全土で実施された。その目的は、先住民のキリスト教化を促進し、租税の徴収と賦役労働者の徴発を容易にすることだが、それに加えて、人間は都市的環境でのみ、その本性を発現する、という考え方が背景にある。およそ 3 世紀にわたって数百万の人びとを数千の町に強制移住させたこの政策は、スペインによるアメリカ支配の基礎を固めるとともに、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれている。

本研究は互いに関連するふたつの目的をもつ。

- 1) 集住政策の先住民社会への影響の解明。この点に関しては、研究者のあいだでいまだ合意ができていない。先住民の多くが新設の町から逃亡した事実をもって、政策は失敗したと唱える者がいる反面、同政策は地域ごとに多様だった先住民社会を画一化し、今日の共同体構造の基礎を築いたと主張する者もいる。本研究では、さまざまな地域の事例を比較検討することで、集住政策が先住民社会に与えた影響の全貌を解明する。
- 2) ヒスパニック世界における国家と共同体の関係の解明。アメリカにおいて集住政策が実施されていたとき、スペイン本国では、中央集権国家の建設が進むとともに、中世以来の自治共同体が根強く存続していた。本研究では、集住政策をスペイン帝国版図における国家と共同体の緊張関係の一局面ととらえる。そして、スペイン本国や南米以外の植民地の事例も参照しながら、両者の関係について新たな像を構築する。

実施状況

以下の実施状況には、機関研究経費に頼らず外部資金のみで実施した事業も記載されている。

2012年6月30日、国立民族学博物館において、集住化の成否をテーマとした国内研究集会を開催した。

2012年7月15日から20日にかけて、ウィーン（オーストリア）のウィーン大学において、第54回国際アメリカニスト会議の一環として、『La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica』（日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果）と題する国際シンポジウムを開催した。

2012年8月23日、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、Roberto Tomichá (Universidad Católica Boliviana) を講師として、『La política de reducciones y sus efectos en la sociedad chiquitana (siglos XVII-XVIII)』（日本語訳：チキタノ社会における集住政策とその効果（17～18世紀））と題する公開セミナーを開催した。

2012年9月6日、リマの教皇庁立ペルーカトリカ大学において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、Steven Wernke (Vanderbilt University) を講師として、『Un orden improvisado: el emplazamiento y la construcción de una reducción en el Valle del Colca (Arequipa, Perú)』（日本語訳：即興の秩序——コルカ渓谷（ペルー、アレキパ）のある集住区の位置と建築）と題する公開セミナーを開催した。

2012年12月27日、国立民族学博物館において、集住化と社会空間の変容をテーマとした国内研究集会を開催した。

成果

2012年7月にウィーンで開催した国際シンポジウムは、国際共同研究員を含めたメンバーが一堂に会し、それまでの研究の成果を発表し、直接議論を交わす重要な機会だった。このシンポジウムでは、数日にわたる集中的な討議を通じて、スペイン領南米の集住政策の効果について、通説とは異なる新たなモデルを構築することができた。従来の研究では、集住政策は南米の先住民の社会と文化を全面的に否定し、西欧的な制度や価値を強制するものとみなされてきた。そして、その効果はもっぱら攪乱や破壊などの否定的なものだったと考えられてきた。しかし、本研究では、しばしば先住民が集住政策の客体から主体へと転身し、本来抑圧的な制度を飼い慣らし、支配と被支配の狭間で自分たちの利益を追求したこと。そして、集住政策により先住民に押しつけられた制度や価値が、在来の制度や価値と予想外のかたちで接合し、そこから社会の再編と文化の再生の複雑なプロセスが生じたことを、さまざまな事例の検討を通じて明らかにすることができた。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

Diez, Alejandro (ed.)

Tensiones y transformaciones en comunidades campesinas. Lima: Cisepa / Dpto de CCSS, PUCP, 2012.

Diez, Alejandro

Conceptos políticos, procesos sociales y poblaciones indígenas en democracia: estudio binacional Perú-Bolivia. Lima: Movimiento Manuela Ramos/Ciudadanía, 2012.

Diez, Alejandro

Gobierno comunal entre la propiedad y el control territorial: el caso de la comunidad de Catacaos. En Raúl Asencio, Fernando Eguren y Manuel Ruiz (eds.) *Perú: el problema agrario en debate — Sepia XIV*, Lima: Sepia, pp.115-148, 2012.

Diez, Alejandro

Nuevos retos y nuevos recursos para las comunidades campesinas. En Alejandro Diez (ed.) *Tensiones y transformaciones en comunidades campesinas*. Lima: Cisepa/Dpto de CCSS, PUCP, pp.14-38, 2012.

Glave Testino, Luis Miguel y Roberto Choque Canqui

Mita, caciques y mitayos. Gabriel Fernández Guarache: memoriales en defensa de los indios y debate sobre la mita de Potosí (1646-1663). Sucre: FCBCB/ABNB, 2012.

松森奈津子

「近代スペイン国家形成と後期サラマンカ学派——ルイス・デ・モリナの権力論を中心に」孝忠延夫・安武真隆・西平 等編『多元的世界における「他者」(上)』大阪：関西大学マイノリティ研究センター，pp.239-260，2013。

Moreno Jeria, Rodrigo

Reformismo borbónico y el extrañamiento de los jesuitas: consecuencias misionales en Chiloé. *Boletín de la Academia Chilena de la Historia* 122, 2012.

齋藤 晃

「国際共同研究の枠組みの構築——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』138: 10-11, 2012。

Saito, Akira

Resettlement Policy and Its Impact on Native Society in Spanish South America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 14, 2012.

Takeda, Kazuhisa

Cambio y continuidad del liderazgo indígena en el cacicazgo y en la milicia de las misiones jesuíticas: análisis cualitativo de las listas de indios guaraníes. *Revista Tellus* 23, 2013.

Wilde, Guillermo

Relocalisations autochtones et ethnogenèse missionnaire dans la frontière sud des empires ibériques: le cas des réductions Guarani au Paraguay (1609-1768). *Recherches Amerindiennes au Québec* 41(2-3): 13-28, 2011.

Wilde, Guillermo

Indios misionados y misioneros indianizados en las tierras bajas de América del Sur: sobre los límites de la adaptación cultural. En Salvador Bernabeu, Christophe Giudicelli y Gilles Havard (coords.) *La indianización: cautivos, renegados, « hombres libres » y misioneros en los confines americanos (siglos XVI a XIX)*, Sevilla: CSIC/EEHA/EHES/Editorial Doce Calles, pp.291-310, 2012.

Zuloaga Rada, Marina

La conquista negociada: guarangas, autoridades locales e imperios en Huaylas, Perú (1532-1610), Lima: IEP/IFEA, 2012.

2) 公開シンポジウム

国際シンポジウム『La política de reducciones y sus impactos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica』(日本語訳：スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果)、2012年7月15～20日、ウィーン大学(ウィーン、オーストリア)、実行委員長：齋藤 晃、Claudia Rosas Lauro

「ケアと育みの人類学」

代表者：鈴木七美 2011～2013

研究目的

近年、ウェルビーイングに配慮した生活の場のありかたが、国家単位の福祉のみならず、人々の権利を視野に収めたグローバルな視点に基づく市民社会の目的という観点から注目され、ウェルビーイングの指標も提示されている。だが、ウェルビーイングは多様であり、また、終わりの見えない紛争や著しい格差拡大など、「よい状態」や「幸福」・「希望」を思い浮かべることすら難しいという状況を考えると、画一的な「ウェルビーイング」を目指すだけでは、人々が希望を失わず安心して生きる場を共有する道を拓くことには繋がらない。

そこで私たちは、個々人の状況や望むことがらを掬いとる人類学研究として、「ケア」という言葉で表現される領域に注目している。「ケア」は、人々が、他者とは限らず、自分や環境について、思いを馳せる、配慮するという意味で使われてきた。これら「ケア」は、「良い・正しい」という価値観に基づくものではなく、気にする、大切に思う等、固執する人々の姿を照らし出す。したがって、多様なケアの検討は、人々が守りたいものや価値観、そして、それらが齟齬や争いを引き起こす過程や共存する姿に迫るものである。

本研究の目的は、個々人の生をめぐる関心やこだわりとしての多様な「ケア」を出発点として、これらが表現され議論される機会を得ることによって、生きる場を共有することに繋がる幾つもの道を、生命を継承してきた各地域の葛藤と共生の軌跡から探ることである。

実施状況

1) エイジングから考える「養生」時間

2012年度は、第1に、「年を重ねること」「養生」という意味をもつ“aging”について議論を深め、論文集 *The Anthropology of Aging and Well-being*, (Senri Ethnological Studies (SES) No.80), 2013においてその成果を提示した。

この論文集の特徴は、心身の変化や移動によって新たな文化に遭遇する高齢期へのケア(関心・配慮)が、さまざまな世代の人々や環境へのケアへと展開する様相を、国内外のフィールドワークと第1次資料に基づいて描き出すことにある。生活環境を問い直し整える共同作業としての高齢期ケアが、新たな地域文化を生み出す過程

を照射し、すべての世代の人々が、人生時間の使い方を柔軟に選択できることによって、差異を活かし、多様な希望に応える生活環境を構想する可能性について明示した。

2) 教育の現場から考える「養生」空間

2012年度は、第2に、多様な人々が文化を創造しつつ共存する方途を構想できるのかという教育の人類学のテーマについて検討し、論文集 *The Anthropology of Education and Well-being in Multicultural Societies* の原稿をまとめた。この論文集の目的は、急速に多文化化が進行しつつある社会で、人々のウェルビーイングと、社会における価値観を基盤とした次世代育成を目指す実践との関係および課題について、検討することである。各論文は、一方で自律、平等、包摂など現代市民社会において重視される価値観に基づく教育が、多文化社会の教育現場において排除の要素を生み出している現状を指摘し、他方で、エスニシティに関わる文化的価値観を次世代に継承することを明確な目的として掲げている教育の場にあっても、議論に開かれた空間を生み出す可能性について、具体的な情報を提示している。

3) 「ヒーリング・オルタナティヴス」における養生と選択

2012年度は、第3に、国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』（2012年11月11日）を開催し、地域の歴史のなかで、ヒーリング・オルタナティヴスの位置づけと果たしてきた役割を検討することをとおして、近代的な「治療」に包括されないケアと養生の考え方、および実践の多様性とその変動に関し考察を加えた。現代の科学知識によって薬剤の有効性が十分に確認され得なくても、治療が有効であるという経験が蓄積されているケースにおいて、この治療法を選択する人々の「自由」を尊重する場合の具体的な方法に関しても知見を深めた。

4) 紛争と「宗教的社会運動」から考える共生と希望

2012年度は、第4に、国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』（2013年1月26日 企画代表者：丹羽典生、企画協力者：藤本透子）を開催した。このシンポジウムの目的は、近年のグローバル化のなかで生起している紛争や宗教運動を、〈人々の生きる場を確保する運動〉と捉え、多元化の波にさらされている人々が共生の空間をいかに形成しているのか、その特質と過程を、「希望」などをキーワードとして検討した。この成果の出版（SES）に向けて、編集作業を進めた。

5) 抗議レポーターによる知識・実践・アイデンティティの創出と共生

2013年度に開催する国際シンポジウム『東アジアにおける社会運動の人類学』（2014年2月開催予定 企画代表者：平井京之介）の準備をおこなった。このシンポジウムでは、国家統治や資本主義の拡大によって生じた矛盾に抵抗する幅広い形態の集合的実践（抗議レポーター）について、知識や実践、アイデンティティの生産媒体という観点から、議論する。

6) 多様な文化的存在を活かす空間デザインの思想と実践

2011年度におこなった国際シンポジウム『インクルーシブ・デザインとはなにか——ケアと育みの環境を目指して』国際ワークショップ『包摂した社会空間の実現にむけて——課題とインクルーシブ・デザインの解決モデル』（2012年3月3日～4日 企画代表者：野林厚志）の成果を、学術論集（日本語）として出版する準備を進めた。この学術論集では、多文化共生に向けた環境の創出という観点から、インクルーシブ・デザインの思想と具体的実践について検討する。本研究の特色は、1980年代後半にアメリカで提唱されたユニバーサルデザインのような共通項を見いだす立場とは異なり、多様な文化的存在を活かして新たな共存の場を構想しようとするところである。本研究は、博物館や美術館における経験の共有のためのプログラムや展示デザイン、障害者の自立を支援から協働へと変えていく社会的なデザインについて、思想と実践について情報を蓄積し考察を加える。

成果

プロジェクト「ケアと育みの人類学」は、グローバル化・多様化する社会において、人生のみちゆきにおける諸課題に応えるために育まれてきた文化に焦点をあて、共生の軌跡を辿り、共有可能なかたちで具体的に提示することを目指している。人々の多様なウェルビーイングに応える環境を醸成するために、一人ひとりのニーズを十分に活かす方法を考察することは、社会の福祉（ウェルフェア）を考えるうえでも重要なテーマとなっている。

本研究では、第1に、「ウェルビーイングの人類学」を検討することの意義について、人間文化の多様性という観点に留まらず、とくに20世紀半ば以降、人々の権利との関わりで提示されてきた「ウェルビーイング」の画一性に関わる問題点について、「ウェルビーイング」の歴史的意味の変遷の検討とフィールドワークをとおして指摘している（Suzuki ed. 2013）。

そのうえで、生活者のウェルビーイング観を掬いとる方法として、配慮する、気にする、拘るなどの広い意味を有する「ケア」の考え方と実践について、調査研究の対象として重視している（藤田 2005; 鈴木 2005; 工藤 2009 等）。1980年代以降、とくに社会の高齢化の認識のもとに、「ケア」は2者間の関係性として把握され検討される傾

向が顕著となっている（上野『ケアの社会学』等）。だが、本研究は、「ウェルビーイング」観の検討の成果でもある「生きて今日あることの喜び」に向けた「養生」が、すべての年代の人々に開かれる社会を、地域に生きる人々が対面的・非対面的な関係性や環境との関わりの中で創り続けることができるのか、をテーマとしている。

「豊かな」「よりよい生活」を目指す高齢者の「ケア」の展開に注目したSuzuki (ed.) 2013では、高齢者が望むことを実現しようとする試みが、他の世代の人々にも、影響を与える変革となることを明示した。

現在編集中のSuzuki (ed.) 2014は、問題や文化葛藤を抱える高齢者や子どもたちの生活の場に注目し、ホスト社会の中心的な価値観に基づく「ウェルビーイング」への「同化」的対処では、多様な文化的背景をもつ高齢者や子どもたちのニーズに応えることが困難であること、またその困難さとジェンダーとの関わりについて指摘した。

宗教的社会運動に関するシンポジウムでは、グローバル化する社会において、「独自の文化」を守り生かすために紡がれてきた生活全般をめぐるコミュニケーション技法について議論を深めた。表現手段を持つ人々以外の声を聴くことやそれを反映した研究のありかたが、課題として指摘された。本観点については、2013年度に予定しているシンポジウムにおいても、課題として共有される。また、インクルーシブ・デザインに関する研究においても、同様の問題に関わる実践について、考察を続けている。

また、ウェルビーイングにおける養生という観点と、近年の生涯教育への注目に关わる問題群に关しても、2013年度の課題として考察を深める。本観点に关する基礎的視点については、ヒーリング・オルタナティヴスに关する研究においても、提示してゆく。

シンポジウムの成果に关しては、英語の論文集を出版し、全体構想に关しては、日本語の文献として提示する。

機関研究に关連した公表実績

1) 出版

Suzuki, Nanami (ed.)

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together* (Senri Ethnological Studies 80). Osaka: National Museum of Ethnology.

2) 公開シンポジウム

① 国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』

(2012年11月11日 国立民族学博物館)

主企画メンバー：鈴木七美・沢山美果子・白水浩信

主催：国立民族学博物館

共催：同志社大学人文科学研究所

協力：Institute for the History of Medicine of the Robert Bosch Foundation (Germany)

The Section of the History of Medicine at the Yale University School of Medicine (U. S. A.)

後援：日本医史学会、日本文化人類学会

② 国際シンポジウム『グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法』

(2013年1月26日 国立民族学博物館)

主企画メンバー：丹羽典生・藤本透子

主催：国立民族学博物館

後援：日本文化人類学会・日本オセアニア学会

「中国における家族・民族・国家のディスコース」

代表者：韓 敏 2012～2015

研究目的

家族・民族・国家は、人類の普遍的現象である。特に中国において、家・族・民族・国・国家などの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作り出す重要な要素でもある。上記の概念の中に家、族、国のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば、民族、国家のような外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行の中、上記の2種類の概念は複数の主体によって様々な状況に応じて再構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産化などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再構築される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による国際共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権の誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を検討するところにある。またグローバルな観点か

ら、中国の家族・民族・国家のディスコースの特殊性と普遍性の議論を通して非欧米型の人類学の視点と理論を構築する作業も射程に入れる。

実施状況

今年度は予定通りに2つの企画を実施した。

1) 準備会合の実施

2012年5月19日民博で開催された機関研究の初回研究会において、国内のメンバーが集まり、代表の韓敏が本機関研究プロジェクトの趣旨、問題意識および方法論について、説明をおこなった後、各メンバーが趣旨に沿って今後どのように個別の研究を展開していく予定であるかを報告した。

機関研究のメンバー、鄧曉華客員教授から「世界文化遺産客家土楼からみる家族と国家のインタラクションと競合」の発表があり、メンバー約30名が議論・検討をおこなった。

また2012年度11月開催の国際シンポジウム『中国における家族・民族・国家のディスコース』の内容と形式について議論した。

2) 国際シンポジウムの実施

2012年11月24日～11月25日、日本文化人類学会の後援を得て、中国社会科学院民族学・人類学研究所と韓国ソウル大学から研究者を招き、国際シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』を、国立民族学博物館の第4セミナー室で開催した。

成果

1) 2012年5月19日民博で開催された機関研究の初回研究会において、問題意識の共有、ならびに研究の役割分担の明確化がおこなわれた。各メンバーがどのように研究を進めていくかについて認識や展望を交換でき、各自の方向性を確認することができた。またプロジェクトメンバーとの意見交換の機会を持つことができ、本機関研究の今後の新しい展開の一助となった。

2) 2012年11月24日～11月25日、2日間にわたり開催された国際シンポジウムでは、中国、韓国および日本各地から幅広い年齢層の94名の研究者と参加者が集り、家族・民族・国家の概念やその動態を扱う人類学的方法について、理論的な枠組みを検討し、再構築を図った。さらに、民族に焦点を当て、華夷秩序、近代国家、社会主義国家における民族の生成、およびグローバル化における民族文化の再構築について、各地の事例を通して検討をすすめた。

本国際シンポジウムの開催において、中国の社会関係に関する主要な概念である家、民族、国家について、歴史的かつ民族誌的な視点から研究をおこない、さらに日本・旧ソ連・西洋との比較を通してより広い視野で近代とグローバル社会における国家と社会、民族とエスニシティという普遍的な課題について国際共同研究を展開することができた。

同時に中国およびアジアにおける人類学の研究連携とそのネットワークを強化し、アジアおよび世界の人類学・民族学研究に関する本館のプレゼンスを示すことができた。

シンポジウムの参加者が口頭で発表したものについては論文にまとめている段階である。国立民族学博物館のSenri Ethnological Studiesの1冊として中国語で研究成果を出版することを準備している。

機関研究に関連した公表実績

韓敏

2012a 「家族・民族・国家のディスコース——社会の連続性と非連続性を作りだす仕組み」『民博通信』137: 8-9。

2012b 「国際シンポジウム 中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』139: 31。

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：寺田吉孝

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野にいれて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「モノの崇拜——所有・収集・表象研究の新展開」

代表者：竹沢尚一郎 2009～2012

研究目的

後期近代ないし大量消費社会の到来とともに、規格化された製品が世界中にあふれている。その反面、「モノの崇拜」とも呼ぶべき、モノの所有・収集・表象に関する異常な熱意が存在するのも事実である。モノの収集・展示・

評価に特化した施設としての博物館が世界中で増殖していること、アート作品に対する常軌を逸した価格の付与、文化遺産に関する世界的な関心の高まりや、ブランド品に対する異常なまでの嗜好は、どのように考えればよいのか。さらに、整形医療やピアス、タトゥー等の身体加工の流行は、人間の身体を操作可能なモノとみなし、過剰なまでに関心と情緒を投入する身体=モノ崇拝の一形態ではないのか。

本研究は、後期近代において新たな形態をとりつつある人間とモノとの関係性について、多角的かつ斬新な視点から理解を深めようとするものである。とりわけ、モノに対して特権的価値が付与される場としての博物館、モノとその記憶、アートとアーティファクトの関係性等について、一段と深い理解を得ることを目的とするものである。

実施状況

2012年5月26日に、日本アフリカ学会と共催で国際シンポジウム『アートと博物館は社会の再生に貢献しうるか?』を国立民族学博物館で実施した。

2013年1月15～16日に、パリ人間科学館で国際シンポジウム『21世紀の民族学博物館』を実施した。

2013年3月24日に国立民族学博物館で、国際シンポジウム『博物館は悲惨な出来事をどう展示するか』を実施した。

成果

5月26日のシンポジウムからは、アートが社会のなかでどのように生きることが可能であり、とくに平和構築にどのように貢献しうるかについて、アフリカ・モザンビークの事例から多くの示唆と理解を得られた。

1月15～16日のシンポジウムでは、ヨーロッパの民族学博物館の関係者9名の発表が行われ（私も加えれば10名）、ヨーロッパの民族学博物館の抱える課題と今後の展示の方向性等について掘り下げた議論がなされた。

「布と人間の人類学的研究」

代表者：関本照夫 2010～2012

研究目的

この共同研究は、モノと人との関係を布に焦点を当てて考察する。参加者はいずれも世界の各地において、伝統染織、それに関連する工芸、あるいは衣服の研究を行い、個々に研究成果を発表してきた。こうした成果を総合し、国際的な学術集会、実践家・愛好者等を加えたワークショップ、さらにこの領域で人類学上新たなスタンダードとなるような書物の刊行、マルチメディア的な資料集の公開を通じ、布から出発しモノと人の関係を論ずる新たな人類学的領域を築く。現代世界における布・衣服について生産、流通、消費の諸相にわたって検討することにより、人の身体性、環境規定性、実践的・状況的知識、地域性、人與人、モノと人のネットワークについて、新たに具体的な知見を生み出すことが目標である。

実施状況

- 1) 国際ワークショップ「アジアの布と生きる」を2012年11月3日に本館講堂で開催し、全国から170人の参加者があった。
- 2) 国際シンポジウム「布を作る人、布に包まれる身体」を2013年2月23日に本館第4セミナー室で開催し、全国から57人の参加があった。
- 3) 本プロジェクトのメンバーによる成果公開のための2回の準備会合を、2012年7月21～22日および2013年3月22～23日に本館で開催し、それぞれ11月と2月の国際ワークショップ、国際シンポジウムのための準備討議と役割の分担、その後の成果公刊などについて討議した。
- 4) 2012年11月27日～12月26日のあいだ、本機関研究プロジェクトの国際共同研究員である中国・蘭州大学の王 建新教授が、外国人研究員客員として本館に滞在し、中国雲南省・貴州省少数民族の刺繍布作りを巡って討議を交わしたほか、人類学におけるモノ研究についても、中国・日本その他の国々での研究状況を互いに確認し、今後の方向を議論した。

成果

今年度は2回の公開シンポジウム、ワークショップを開催した。11月の国際ワークショップ「アジアの布と生きる」では、大学・研究機関に身を置かず在野の研究や実践を行っている6人の方々（内インドネシアから2人、オーストラリアから1人）を招き、現代アジア太平洋地域における伝統染織の展開と今後の方向について、実践と理念・価値観をつなぐ議論を行った。伝統染織の製作・流通・マーケティングに関わる人々、愛好家が多く会場に集まり、研究者、院生と1つの場で議論を行って、新しいつながりを作った。2月の国際シンポジウムでは、文化人類学者と並んでファッション史・ファッション研究の専門家など6人の発表を受け、「着る」ことの現象学、「ファッション」概念の解剖が行われた。これは今後テキスタイルと衣服を巡る人類学研究を進める重要なステップとなるものだった。これらの成果は英文ないし日本語での出版を準備している。

機関研究に関連した公表実績

1) 出版

関本照夫

「今日のインドネシアバティック産業」窪田幸子・松井 健編著『アジア工芸の〈現在〉——工芸と人類学の基礎研究』pp.65-70, 東京大学東洋文化研究所, 2012。

関本照夫

「捨てるもの、捨てられないもの——国際ワークショップから」『民博通信』138: 12-13, 2012.

Ogawa, Sayaka

Regaining 'Fashion' Value: The Transborder Trading of Second-hand Clothing in East Africa. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 9-10, 2012.

Sekimoto, Teruo

Consuming Textiles through their Uses and Reuses, International Workshop, February 7-8, (Conference Report). *MINPAKU Anthropology Newsletter* 34: 14-15, 2012.

Sekimoto, Teruo

Discardable and Undiscardable Textiles and Clothing. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 1-3, 2012.

Sugiura, Miki

Shifting Functions of Two Major Second Hand Clothing Markets in 17th-18th Century Edo: Tomizawa and Yanagihara. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 5-7, 2012.

Tamura, Ulara

Sacred Rag, Shoddy Rag. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 7-8, 2012.

van Damme, Ilja

Urban Transformations in the Value of Used and Old Textiles. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 35: 3-4, 2012.

2) 公開ワークショップ、シンポジウム

国際ワークショップ「アジアの布と生きる」2012年11月3日、国立民族学博物館講堂

国際シンポジウム「布を使う人、布に包まれる身体(からだ)」2013年2月23日、国立民族学博物館第4セミナー室

「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」

代表者：佐々木史郎 2012～2015

研究目的

本研究プロジェクトの目的は、民族学資料（標本資料と映像音響資料から構成される）の収集、保存、修復、情報化、そして利活用までを包括する総合的研究と実践を通じて、本館の大学共同利用機関としての機能と博物館としての機能を高め、その存在感を向上させることにある。そして、この目的を達成するために、2010年度に協定を締結したロシア民族学博物館（ロシア連邦サンクトペテルブルク市）との国際共同研究を実施する。

実施状況

2012年6月3日にサンクトペテルブルクに出向き、4日、5日、6日の3日間にわたって、ロシア民族学博物館側との協議とバックヤード視察を行った。それに続き、当博物館の紹介により、7日と8日には同市にある人類学民族学博物館、エルミターージュ美術館のバックヤードも視察し、研究者と意見交換を行った。

さらに、2013年1月24日～28日の日程で、ロシア民族学博物館から3名の研究員を招聘して、元興寺文化財研究所での修復作業の実演と、奈良国立博物館と国立民族学博物館でのバックヤード視察を交えた国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』を実施した。

成果

サンクトペテルブルクでの視察と意見交換、そして奈良と大阪でのワークショップを実施した結果、民族資料あるいは民族学資料の保存と修復の基本方針について、ロシア側と日本側との間で議論と意見交換が行われ、相互に新しい知見を得るとともに、情報を共有することができた。

機関研究に関連した公表実績

奈良と大阪で実施した国際ワークショップの抽象集を編集するとともに、その主要な内容を Web で公開した。

共同研究

2012年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2012年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	5	4	11	16
		課題2	1	1		
	客員	課題1	1		3	3
		課題2				
	公募	課題1	8	2	14	16
		課題2				
若手 ※10	課題1	6	3	4	7	
	課題2					
計		21	10	32	42	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、□印は特別客員教員（申請時）による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究	朝倉敏夫	1	2009～2012
言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味	菊澤律子	1	2009～2012
オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究	丹羽典生	1	2009～2012
○ サファリングとケアの人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2009～2012
○ プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性	落合雪野	1	2009～2012
○ アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス	真崎克彦	1	2009～2012
○ 映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論	村尾静二	1	2009～2012
中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究	塚田誠之	1	2010～2012
驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に	山中由里子	1	2010～2013
□ 人類学における家族研究の新たな可能性	小池 誠	1	2010～2013
日本の移民コミュニティと移民言語	庄司博史	1	2010～2013
手織機と織物の通文化的研究	吉本 忍	1	2010～2013
○ 非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ	堀内正樹	1	2010～2013
○ 日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	川田順造	1	2010～2013
○ 海外における人類学的日本研究の総合的分析	桑山敬己	1	2010～2013
○ 日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで	重信幸彦	1	2010～2012
● 映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究	吉本康子	1	2010～2012
● 交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ	岩佐光広	1	2010～2012

● 内陸アジアの宗教復興 ——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開	藤本透子	1	2010～2012
梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用	小長谷有紀	2	2011～2013
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	菅瀬晶子	1	2011～2014
実践と感情——開発人類学の新展開	関根久雄	1	2011～2013
人の移動と身分証明の人類学	陳 天璽	1	2011～2014
NGO 活動の現場に関する人類学的研究 ——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	信田敏宏	1	2011～2014
□ 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	古谷嘉章	1	2011～2014
○ ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	関根康正	1	2011～2014
○ ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	名和克郎	1	2011～2014
○ グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	松川恭子	1	2011～2014
○ 現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	道信良子	1	2011～2014
○ 音盤を通してみる声の近代 ——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	劉 麟玉	2	2011～2014
● 帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界	奈倉京子	1	2011～2013
○ 災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承	橋本裕之	1	2012～2014
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究 ——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	池谷和信	1	2012～2014
贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	岸上伸啓	1	2012～2014
肉食行為の研究	野林厚志	1	2012～2014
触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築	廣瀬浩二郎	1	2012～2014
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012～2015
アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究 ——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012～2015
「統制」と公共性の人類学的研究 ——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012～2015
● 現代消費文化に関する人類学的研究 ——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	小川さやか	1	2012～2014
● ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から	河合洋尚	1	2012～2014
● 「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	津田浩司	1	2012～2014

「朝鮮半島北部地域の民俗文化に関する基礎的研究」

内容

世界各地を研究対象とする文化人類学という学問分野は、人間の文化についての普遍的な洞察はもちろん、地域研究として各地の民俗文化に関する個別的な見地を蓄積することによっても、広く社会に貢献してきた。本研究の目的は、これまで欠落してきた朝鮮半島北部地域の民俗文化を研究対象とすることで、こうした文化人類学の蓄積をさらに補完することにある。

朝鮮半島北部地域についての研究は、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が成立して以来、その政治・外交・経済に関しては進められてきたが、民俗文化の研究は特に日本においてまだ欠落している。現地調査が行えないためである。しかし、朝鮮半島北部地域の民俗文化が研究できないわけではない。1つには、北朝鮮が成立する以前に作られたこの地域の民俗文化に関する資料もあるし、北朝鮮の生活文化に関する先行研究も韓国においては少なからず出版されており、それらを通じた基礎的研究が可能である。また、中国の東北地方、中央アジア、日

本などの北朝鮮系の人びとを通して、周縁から内情を知ることという方法もある。

本研究は、こうした方法を介することで、朝鮮半島北部地域の文化人類学的研究を日本においても始動させようというものである。

代表者 朝倉敏夫

班員 (館内) 太田心平 小長谷有紀
(館外) 李 愛俐娥 伊藤亜人 浮葉正親 岡田浩樹 川上新二 河上(小谷)幸子 韓 景旭
高 正子 島村恭則 林 史樹 秀村研二

研究会

2012年 9月15日

岡田浩樹 「北朝鮮避難民受け入れと日本社会——『難民』『難民性』の観点から」

河上(小谷)幸子 「移住履歴から見る朝鮮半島北部——在米コリアン高齢者の語りから」

2012年12月 8日

鈴木文子 「日朝京都友好ネットワーク訪朝報告(人類学班)」

秀村研二 「韓国キリスト教(プロテスタントイズム)と北朝鮮」

2013年 2月23日

小長谷有紀 「モンゴルから見た朝鮮半島」

浮葉正親 「朝鮮学校卒業生の祖国訪問体験と祖国像の表出」

成果

今年度の活動としては、一昨年度から引き続き行ってきたように、メンバーが各自のテーマを発表した。また、これとあわせて「日朝京都友好ネットワーク」で訪朝した鈴木文子教授(仏教大学)を招いて、北朝鮮の現状についての知見を得た。

それぞれのテーマ発表は、北朝鮮でのフィールド・ワークができない現状にあって、韓国キリスト教が北朝鮮のキリスト教をどうみているか、在米コリアン、モンゴル、日本の朝鮮学校などと北朝鮮の関係性をみることで、北朝鮮の現状にアプローチしようというものであった。

また、北朝鮮が崩壊前後に予想される「北朝鮮難民」は、日本においてどのような問題をもたらすのか、この問題を検討することにより見えてくる人類学的課題とは何かを検討した。

「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」

内容

現在地球上で話される約7,000という言語は「語族」と呼ばれるいくつかの系統に分類されており、それぞれの語族ではさらに、系統図で示されるような言語間の「系統関係」が呈示されている。語族や系統関係は、本来の定義では、共通する祖先となる言語(祖語)から発達したことが比較方法(Comparative Method)を用いて検証できるかどうか、によって決まる。ところが、実際の言語の系統分類では、類型論的特徴や地理的区分、歴史に関する記録なども手掛かりとされることもある。本研究では、それぞれの語族における 1) 最新の系統分類がどのようなもので、何を手掛かりにどのような方法で系統関係が議論されているのか、2) 1)で出てきた手法の妥当性と他語族への適用の可能性、3) 各地域における言語の系統分類の先史・歴史研究における意味づけについての現状を把握し、方法論を検証・一般化することで、科学的でより汎用性の高い言語の系統分類研究の手法を探ること、またその成果を先史・歴史研究への関連付けに結びつける道を探ることを目的とする。

代表者 菊澤律子

班員 (館内) 庄司博史 西尾哲夫 八杉佳穂 大杉 豊(客員)
(館外) 蝦名大助 神山孝夫 木部暢子 佐藤知己 中山俊秀 稗田 乃 福田静香
松森晶子 吉田和彦 吉田 豊 Lawrence Andrew Reid
Robert R. Ratcliffe 渡邊 己

研究会

2012年5月26日

中道静香 「アラビア語方言における『b(i) ——未完了形』の歴史的経緯——現代方言記述と Middle Arabic 資料からわかること」

菊澤律子 「類型論的一般化と形態統語論における比較再建——オーストロネシア諸語における能格・対格変化をめぐって」

2012年5月27日

大滝靖司 「日本語の借用語適応における通時的変化——分節音・母音挿入・重子音化を中心に」

佐藤知己 「日本語とアイヌ語間の借用」

2013年1月12日

松森晶子 「日本語複合語アクセントの記述と日本語史研究」

大杉 豊 「古鹿児島手話語彙集から探るろう教育黎明期の手話語彙形成」

ディスカッション（出版計画について）

2013年1月13日

蝦名大助 「ケチュア語とスペイン語との言語接触」

鈴木博之 「音標文字による制約と音変化——チベット系諸言語の前鼻音の歴史」

成果

本年度は視点を広げて、系統樹等では表すことのできない言語接触や借用関係等も視点にいれながら、言語変化全般に関して検討した。メンバーが対象言語グループにおいてそれぞれが研究を進めている内容を報告することで、成果出版物の具体的な方向についての検討をすすめた。2月9～10日には、成果公開および締めくくりとして、生物学や遺伝学の研究者と共に「系統樹について考える」というテーマで国際シンポジウムの開催を行った。なお、歴史言語学における聴覚障害者に対する情報保障として、研究会はすべて筑波技術大学「情報保障に関する研究基盤構築——日本語—手話コーパスの作成」事業と連携して開催したことを記しておく。

「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」

内容

冷戦以降の第三世界における民族紛争の増加や、低強度紛争という新たな戦争形態の出現という近年の変化と、応用研究に対する関心の高まりと相即して、広い意味での紛争に関する人類学的研究は、増加傾向で、人間の安全保障、平和構築などの新たな視点からの理論構築や事例分析がなされている。本研究では、こうした理論的な先行研究を踏まえた上で、オセアニア地域研究という視点から紛争に関する比較民族誌的な考察を行いたい。ことにオセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990年代後半から暴動から民族紛争、クーデターまでさまざまな政治的問題が起きている。しかし、オセアニア地域の政治的不安定性に関わる諸問題をどう理解するか、あるいはそれらをどう記述・分析するかに関して総合的な見地からの研究は不足している。そこで、本研究ではそうした諸問題をひろく〈紛争〉としてとらえ、〈紛争〉とその処理及び常態への回復の様態について、比較民族誌的に検討することを通じて総合的な見地から見直しをはかると同時に、記述する側と対象社会の関係をも視野に組み込んだ新たな〈紛争〉の民族誌を案出することを目的としている。

代表者 丹羽典生

班員 (館内) 須藤健一

(館外) 石森大知 岩本洋光 小柏葉子 風間計博 行木 敬 比嘉夏子 深川宏樹
深山直子 三田 貴 宮澤優子 山本真鳥 吉岡政徳

研究会

2012年11月17日

全 員 「成果とりまとめと出版について」

2012年12月26日

参加者 「成果とりまとめと出版について」

成果

本年度は、昨年度まで開催した研究会の成果を踏まえつつ、また、各人の発表以降の〈紛争〉の動向にも注意しつつ、議論を重ねることで、研究成果の公開に向けた作業を行った。研究会を2回開催することで、〈紛争〉にかかわる理論という一般的な軸と、オセアニアという具体的な地域的枠をかけることがみえてくる、一般的な特徴と個別的な要因が交叉する現状がみえてきた。また、共同研究終了後の研究計画の立案に向けた討議も行った。

「サファリングとケアの人類学的研究」

内容

最終年度は、「現代社会での生活の場や臨床の場から生まれるサファリングの意味を問い、サファリングをめぐるケアのあり方を再検討することで、『人間の生を構成する根源的なスタイル』としてのサファリングとケアの概念の再検討する」という共同研究の目的を成就するための総括の年度とする。共同研究会を2回開催する。第1回は「近代の制度的専門家」のサファリングとケアについて医師と作業療法士を例に検討する。第2回は、フィンランドと北米における高齢者介護サービスのあり方とライフケア・コミュニティについて比較検討する。第2回の後半は、3年半の共同研究成果の報告内容について検討し、具体的な成果の媒体形式（論文集）と手続き、刊行について話し合う予定である。また、日本文化人類学会第46回研究大会で、制度的専門家（医療、福祉、葬祭業の専門家）のサファリングとケアについて、分科会「界面に立つ専門家——専門家のサファリングとケアの人類学」（代表者：浮ヶ谷幸代）を企画している。12月末に、研究成果の発表形態として論文集を刊行するために、共同研究員全員で各自の掲載論文についての報告会を開催する予定である。

代表者 浮ヶ谷幸代

班員 (館内) 鈴木七美 廣瀬浩二郎
(館外) 渥美一弥 阿部年晴 沖田一彦 加藤直克 川添裕子 近藤英俊 田中大介
濱 雄亮 福富 律 星野 晋 松繁卓哉 村松彰子

研究会

2012年5月12日

宮口英樹 「リハビリテーション医療における生活リスクコミュニケーション」

日本文化人類学会第46回研究大会分科会 「界面に立つ専門家——専門家のサファリングの人類学」のプレ発表
(浮ヶ谷・沖田・田中・松繁・星野)

2012年5月13日

山上実紀 「医師の失敗経験と対処プロセス」

2012年7月14日

高橋絵里香「互酬と消費——フィンランドの高齢者介護サービスからみる福祉国家の論理」

鈴木七美 「北米における高齢期ライフケア・コミュニティの展開——新たな専門家の創出と生活者のウェルビーイング」

2012年7月15日

共同研究成果報告書の打ち合わせ

2012年12月22日

ワークショップ：共同研究成果報告書用の論文企画の報告

趣旨説明 浮ヶ谷幸代

I. サファリングとケアの理論的再構築

星野 晋：サファリングの生態学

加藤直克：ケアにおける暴力性と創造性

阿部年晴：病気の原因の観念をめぐって——現代社会におけるサファリングとケア

II. ソーシャルサファリングと回復

渥美一弥：サファリングとしての「植民地的状況」、ケアとしての「居留地」——カナダ先住民サーニッチに
とってのアルコールとライフコース

浮ヶ谷幸代：苦悩とその創造性——ピアサポートによる回復の継承性

III. サファリングと共同性

濱 雄亮：「病縁論」の射程と課題

村松彰子：根源的受動性と人と人との〈つながり〉をめぐる試論

IV. 専門家のサファリング

沖田一彦：理学療法士のサファリング

福富 律：援助専門職の専門性・対人援助や専門職と社会との関係とは

松繁卓哉：専門家（現代の制度的職能者）のサファリング

V. 展望

田中大介：死をめぐるサファリングとケア——その人類学的研究の射程と展望

総合ディスカッション

成果

2回の定例の共同研究会、そして共同研究の総括として開催したワークショップ（共同研究員12人の報告）を通して、本共同研究の成果の全体像を構想した。成果の発表方法として、1) 制度的専門家のサファリングとケアについての論文集と、2) 現代社会における生活の場におけるサファリングが生まれる社会背景とその様態、そしてサファリングに対処するケアのあり方についてのエスノグラフィックアプローチによる論文集、という2つの論文集の刊行を目指すこととした。1)の論文集は、『文化人類学』（77-3）の特集論文を軸として、コアメンバーと特別講師の執筆者を加えて、『苦悩することの希望——専門家のサファリングとケアの人類学』と題した論文集を刊行する予定である。読者層として専門家と研究者、そして一般の人を対象とするという設定で、出版社との打ち合わせに入っている。また、2)の論文集に関しては、まず2013年度の日本文化人類学会第47回研究大会で分科会「サファリングとケア、その創造性」と題して成果発表を予定している。これらの報告を基にした論文を軸として、コアメンバーと特別講師の寄稿論文で構成し、『サファリングとケアの人類学（仮題）』と題して刊行する企画である。こちらは民博の『国立民族学博物館論集』での刊行を視野に入れている。

「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」

内容

本研究の目的は、植物に由来する種々のモノ [=プラント・マテリアル] に対してその外見的变化と意味的変容の両面からアプローチし、対象と主体がせめぎあう境界面における相互作用の結果としてモノをとらえることにより、空間的・時間的広がりの中で変化していく価値づけという行為と主体間の関係性を明らかにすることにある。

本研究ではさまざまな目的のために植物種が利用され、民族集団間、民族集団内でやりとりされてきた東南アジア大陸部山地、すなわちミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、中国雲南省が国境を接する地域を対象とする。当該地域では近年、市場経済の発展にともなって中規模グローバル圏のような様相を呈し、やりとりが量的・質的に拡大するなどの実態が生じている。このような状況を背景に、自然科学分野、人文科学分野の共同研究者が対象となる植物と植物を利用する主体とをたがいに関連づけながら議論し、具体的なモノを手がかりに植物と人の相互作用、またその表われとしての生活世界を実証的に記述することを目指す。

代表者 落合雪野

班員 (館内) 樫永真佐夫 白川千尋
(館外) 綾部真雄 飯島明子 加藤 真 神崎 護 Christian Daniels 佐々木綾子
高井康弘 田中伸幸 土佐桂子 馬場雄司 速水洋子 松田正彦
柳澤雅之 横山 智

研究会

2012年10月20日

速水洋子 「植物と人と生命の交わり——山地居住カレンの場合」

飯島明子 「マイ・ヒヤツ竹の行方——チェンマイの手工業を支えるタケをめぐる」

全 員 成果取りまとめに関する打合せ

2012年10月21日

綾部真雄 「価値の源泉——タイ山地民リスにおけるケシの社会的位置づけをめぐる」

全 員 総合討論

2013年2月16日

全 員 成果取りまとめのための論文構想発表と打合せ

成果

本年度は2回の共同研究会を開催した。第9回研究会（10月20～21日開催）では、共同研究員3名が発表をおこなった。飯島明子によるタケを素材にした上座仏教の供具カント、綾部真雄によるケシを原料にしたアヘン、その変形としての覚醒剤については、共同研究員の発表3群（『民博通信』134: 11）のうち、第2群「ある特定の植物に着目し、これを原料や素材につくられるプラント・マテリアルの変化の諸相を論じる」にあたるものとなった。速水洋子によるイネとカレンについては、3群のいずれにもあてはまらない、existentialな関わりを論じるものとなった。さらに、国立民族学博物館収蔵庫において、標本資料に用いられた植物素材や加工方法を観察した。

第10回共同研究会（2月16日開催）では、これまでの発表と討論を総括し、その成果を論文集（単行本）の形で公開することを確認し、共同研究員全員が担当する原稿のタイトルと内容についてその構想を発表した。最後に論文集のテーマや内容について検討し、共同研究会を締めくくった。

「アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス」

内容

民主的な制度や民主化運動の展開が、アジア・アフリカの地域社会にどう受容され、人びとの生活をどう変えたのか（あるいは変えなかったのか）という問題について、地域の歴史文化的な文脈を踏まえつつ、その場所で生活する人びとの具体的な関係性に注目して検討する。既存のデモクラシー論では、権利や正義、あるいは共同体規範といった概念が中心に据えられてきた。そのため、人びとがそれぞれの生をよりよく生きようとする試みに、それら概念がどういった影響を与えるのかについては充分注意が払われてこなかった。本研究会では、民主的な制度や運動の展開が、人びとの具体的なつながり方や関わり方にどう干渉してきたのかについて考察する。

代表者 真崎克彦

班員 (館内) 信田敏宏 宮本万里
(館外) 石山 俊 黒崎龍悟 白石壮一郎 菅野美佐子 武貞稔彦 内藤直樹 西 真如
増田和也 丸山淳子 南出和余 目黒紀夫

研究会

2012年9月29日

丸山淳子 「多層的〈デモクラシー〉のなかで——サン社会のウチ／ソトの政治」

南出和余 「『まつりごと』——下からみたバングラデシュ選挙空間」

田中正隆 「ベナンにおけるジャーナリズムとデモクラシー——ジャーナリストと視聴者参加番組の事例から」

2013年3月9日

西 真如 「〈デモクラシー〉の人類学」とは？」

総合討論 議論のまとめ、今後の展望

成果

政治理論では、民主主義の制度的妥当性について、また正義が実現される条件について綿密な議論が行われてきたが、中には「身体を持つ、具体的な生」への配慮に着目するものもある。「身体を持つ、具体的な生」への配慮は、たとえば福祉制度から排除しないこと、家父長的イデオロギーから解放されていること、ナラティブに耳を傾けることなどに結びつけて論じられる。しかし「具体的な生」への配慮を謳いながら、政治理論における議論は往々にして、制度論や抽象的な人格論にとどまり、さまざまな価値や利害のせめぎ合う中を生きる人たちの生活感にまで踏み込めていない。したがって、政治理論における「具体的な生」についての議論に呼応しつつ、人類学のフィールドより、「具体的な生」への配慮がどのように確保され、あるいは見過ごされてきたのかを示すことは有意である。

「映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論」

内容

人類学では、民族誌映画の制作をはじめとする研究、教育、そして成果の公表に至るまで、映像が積極的に活用されるようになった。一方、このような状況が、映像に関する共通理解がないままに進行しているのもまた事実である。なかでも研究者と調査地の人々は映像をいかに共有しうるのか、映像制作にまつわる倫理とは何かという問題は、いま本格的に議論すべき課題である。

これまで民族誌映画の制作に関して主に議論されてきたのは、撮影と編集の方法論であった。それに対して本研究が問題とするのは、共有という視点から映像制作の各過程を捉えなおす認識論である。映像制作とは 1) Pre-Production「立案」2) Production「調査地での交渉」「撮影と折衝」3) Post-Production「編集」「調査地での試写」「成果の公表」「保存」からなる複合的な活動である。本研究の目的は、この映像制作の各過程を対象とし、人類学映像をささえる倫理と権利、受容と共有の方法についての多角的な議論へと発展させ、映像人類学の可能性を拓くことにある。研究者と調査地の人々はともに映像制作の主体であるとする考え方は、人類学と映像との新しい関係を築いていくうえで重要なものになると考えている。

代表者 村尾静二

班員 (館内) 飯田 卓 久保正敏 清水郁郎 (客員)
(館外) 大村敬一 大森康宏 木村裕樹 坂尻昌平 中村真里絵 南出和余 宮坂敬造
箭内 匡

研究会

2012年7月7日

南出和余 「『子ども』と映像——映像による個人の記録と社会の記憶」

村尾静二 「映像の共有人類学——方法と理論」

大森康宏 「ジャン・ルーシュと民族誌映画教育」

2012年7月8日

清水郁郎 「映像による返礼——フィールドでの映像上映をとおした空間共有の可能性」

中村真里絵 「技術映像がつたえるもの——焼き物づくりの事例から」

飯田 卓 「テレビによる共有人類学」

木村裕樹 「消えゆく文化の記録——洪沢敬三の記録映画が問いかけるもの」

総合討論

2013年1月27日

全体討論 「研究成果原稿の読み合わせ」

2013年1月28日

全体討論 「研究成果原稿の読み合わせ」

成果

これまで共同研究会では、人類学映像を共有という視点から捉えなおし、多角的に議論してきた。なかでも、人類学者（制作者）は調査地の人々といかに関わり合うなかで映像を制作しているのか、あるいは、人類学者による映像制作は調査地の人々にはどのように映っているのか、といった問題は、複数の事例を取り上げ、検討してきた。

本年度は、各メンバーがこれまで共同研究を通して考察してきたテーマを順番に発表し、議論した。「共有」を共通のテーマとして、民族誌映画の歴史と現状、映像人類学と教育、民族誌映画の制作過程、撮影地において現地の人々と映像を共有することの諸問題、映像人類学による技術・身体知識の研究手法、写真の活用、文化人類学とマスメディア、映像の保存と活用（アーカイブズ）、など、その内容は多岐にわたる。

現在、各メンバーはこれらの内容を論文にまとめており、刊行準備中である。

「中国における民族文化の資源化とポリティクス——南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」

内容

中国は少数民族や漢族など多くの民族集団が存在する多民族国家である。それら民族集団の文化は、近現代において資源化され続けてきたのであり、グローバル化の進む現在もその動きが進行中である。文化資源の多様性やその生成と変貌のありようについては前回の共同研究で一定程度明らかにし得た。その成果をふまえて、現代の流動的な中国諸民族の社会において、文化がどのように資源化されて利用されているのか、またそこにいかなるポリティクスが働いているのかのダイナミズムについて深く掘り下げた検討が必要である。本プロジェクトでは華南地域の諸民族の文化資源について、文化がどのように保存・発展・利用され資源化されているのか、また文化の資源化に際してさまざまな主体、すなわち中央、地方の各級政府、知識人、企業、一般民（都市住民、農民等）の間でいかなるせめぎあいが見られるのか、民族学と歴史学の共同作業を通じ検討を加えて解明するとともに、文化資源論への新たな展望を得ることを目指したい。

代表者 塚田誠之

班員 (館内) 榎永真佐夫 韓 敏 横山廣子
 (館外) 稲村 務 上野稔弘 片岡 樹 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔
 高山陽子 武内房司 谷口裕久 長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 長谷川 清
 松岡正子 吉野 晃

研究会

2012年 6月16日

廖 国一 「キン(京)族の伝統文化の資源化とその影響——中国広西東興市万尾村を事例として」
 瀬川昌久 「氏姓のポリティクス——現代中国における文化資源としての族譜とその活用」

2012年11月17日

塚田誠之 「国境地域における観光をめぐる諸問題——徳天跨国瀑布観光の事例から」
 横山廣子 「湖南ペー族における民族文化とポリティクス」
 曾 士才 「生態博物館の17年」

2012年 1月26日

研究成果のとりまとめに関する打合せ
 吉野 晃 「中国ヤオ族の民族文化資源に関する動向の一端」
 長谷川 清 「〈森〉の資源化と精霊祭祀——中国・西双版纳、タイ族の事例から」

2013年 3月 2日

長谷川 清 「文化をめぐるポリティクス——雲南徳宏タイ族自治州を事例として」
 研究成果のとりまとめに関する打ち合わせ

成果

第1に、民族文化のさまざまな側面が資源化されている現状と問題点が明らかにされた。

廖は、広西のキン族の国家無形文化遺産「哈節」(歌祭り)の近年の実情について検討した。瀬川は、広東の漢族やシヨオ族の族譜を検討した。塚田は、中越国境地域にある著名な観光地・徳天瀑布を事例として、国境の瀑布観光の現状を検討した。横山は、13世紀半ばに雲南省からモンゴル軍の遠征に参加して湖南省に移住したペー族について、移住先での民族文化の再構築について検討した。曾は、民族文化の保護を目的に貴州で創設された4か所の生態博物館の歴史と現状について検討した。吉野は、中国のヤオ族の文化資源の動向として、ヤオ族の故地「千家洞」の資源化や、伝承上の祖先「盤王」の多義性について検討した。長谷川は、雲南西双版纳のタイ族地区の原生林の保護をめぐる近年提唱されている「竜林文化」に関する議論や精霊祭祀の変遷について検討した。また、長谷川は雲南徳宏タイ族自治州の内部資料に基づき、文化に政治が関わっている現状を検討した。

第2に、文化資源をめぐる、一般の人々、知識人や企業、さらには各級政府といった諸主体間でのせめぎあいや協同など複雑な関係が見られることが明らかにされた。廖は、政府主体の祭りの商業化や民族文化とは無関係のイベントの開催によって人々との間にせめぎあいが生じていることを検討した。塚田は、瀑布の資源化をめぐる、企業が主導し、政府が管理し、村人が参与するという協同関係を検討した。

第3に、政府や知識人が資源化に果たす役割が大きいことが明らかにされた。瀬川は、シヨオ族の少数民族籍獲得運動や客家の漢族としての正統性の主張といった動きの中で族譜が重要なツールとして用いられているが、そうした動きに地方政府や学者が参与していることを検討した。横山は、ペー族の文化の再編や創造に知識人が重要な役割をはたしていることを検討した。曾は、生態博物館が学者が提言し政府が取り組んでいる実態を検討した。吉野は、「千家洞」の資源化に湖南や広西の各県の政府や学者が参与していることを検討した。

このように資源化の諸相、資源化をめぐる諸主体のありよう、政府や知識人の役割など、中国諸民族の文化の資源化の実態と特徴が、幅広い民族・地域の事例から明らかにされた。

「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」

内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で 'ajā'ib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。

本共同研究は中東およびヨーロッパの文学・歴史の専門家によって構成されており、これらが協力して各時代・地域の「驚異譚」を比較し、伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムなどを次の3つの主要軸を中心として解明してゆく。

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性

代表者 山中由里子

班員 (館内) 菅瀬晶子

(館外) 池上俊一 大沼由布 小倉智史 亀谷 学 黒川正剛 小宮正安 杉田英明
鈴木英明 辻 明日香 二宮文子 林 則仁 見市雅俊 守川知子 家島彦一

研究会

2012年5月26日

大沼由布 「『マンデヴィルの旅行記』と『見る』ことの権威」
池上俊一 「彷徨の詩人——中世ヨーロッパにおける魔術師ウエルギリウス伝説」
山中由里子 「驚異の媒介者としてのアレクサンドロス」
「境界を見た人びと」事例提供・全体討議

2012年9月30日

全体討論 「東洋文庫資料にみる驚異のイメージ」
林 則仁 「イスラーム絵画史の中のカズウィーニー著『被造物の驚異』の挿絵」
金沢百枝 「聖堂美術と驚異譚——南イタリア・オトランド大聖堂の床モザイクを中心として」
「驚異の視覚化」事例提供・全体討議

2012年12月9日

大沼由布 「知識の集約と編纂——ヴァンサン・ド・ボーヴェの『大いなる鏡』」
見市雅俊 「情報・驚異・好奇心——ロバート・プロットと17世紀イギリスの自然誌」
守川知子 「トゥーサーのペルシア語著作『被造物の驚異』と12世紀の西アジア社会——『イスラーム的宇宙観』による初の百科全書編纂の時代」
「驚異の編集」事例提供・全体討議

成果

5月の会では、驚異を媒介する「目撃者」としての旅人のトポスを採りあげた。驚きは「見る」という視覚体験によってまず目撃者に生じ、その目撃の共有が驚異譚であるともいえる。誰かが「見てきた」、すなわちそれは存在したという前提がなければ、読者は驚きを共有できない。作り話とわかっている話は、悲哀や熱情、興奮などの感情を喚起したとしても、日常的にはあり得ない奇異の存在に対する驚きにはつながらない。

9月の会では「驚異の視覚化」というテーマを採りあげた。驚異を描いて「見せる」ことは、二次的な目撃者を作り出すという行為に等しい。中世の場合、画家自身が驚異を目撃しているわけではなく、驚異譚のテキストから想像し、自身が知っているもののかたちの誇張や、通常はありえない奇妙なものの組み合わせで視覚的なイメージが創生されていった。

12月の会では、「驚異の編集」をテーマとした。旅行記などに含まれていた驚異の目撃譚がもともとの文脈から抽出され、博物誌や百科事典といった知識の集大成として編纂される過程をヨーロッパと中東の場合で比較した。

今年度から、各会のテーマに関連した事例紹介を発表者以外からもつり、充実した議論を行うことができた。

「人類学における家族研究の新たな可能性」

内容

本研究の目的は、人類学における家族の研究を現代的な課題に答えられるように見直すことである。生殖医療、国際養子縁組、国際結婚、Transnational family、高齢者のケア、開発・近代化に伴う家族の変容の問題など、現代世界で生起する多様な問題を取り上げ、親子関係や家族とは何かという根源的な問いを念頭に置きつつ、家族研究の最前線を切り開きたい。一見バラバラに映る上記の問題群を「家族」という視点から捉えなおすことを意図している。人類学の家族・親族研究の蓄積と断絶するのではなく、シュナイダー以降の親族研究、とくにM・ストラザ

ーン、J・カーステンなどの研究成果も視野に入れて研究を進めたい。家族という分析概念の有効性自体に疑念が呈されていることを考え、その限界も検討し、また家族・親族に代わる概念、たとえば「つながり」(relatedness)の有効性も議論し、新たな家族研究のパラダイムを構築したい。

代表者 小池 誠 (客員)

班員 (館内) 丹羽典生 信田敏宏 森山 工 (客員)
(館外) 伊藤 眞 岩本通弥 上杉富之 木曾恵子 久保田裕之 高橋絵里香 津上 誠
出口 顯 森 謙二 横田祥子

研究会

2012年 5月19日

工藤正子 「トランスナショナル・ファミリーにみる家族の分散と〈つながり〉——パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から」

横田祥子 「台湾の国際結婚——代替不可能な家族へ」

2012年 7月14日

深海菊絵 「インティメイト・ネットワーク——ポリアモリー実践が形づくる関係性」

小泉明子 「婚姻防衛法 (Defense of Marriage Act) の意味するもの——婚姻概念をめぐる論争」

2012年12月 1日

上野加代子「ラブゲイン——シンガポールの住み込み外国人家事労働者にみる親密性の変容」

南出和余 「バングラデシュ農村の出稼ぎ家族——海外で働く若者と送り出す家族を繋ぐ」

2013年 2月23日

飯高伸五 「現代パラオにおける家族の動態——現地人の米国・米領内移動と外国人労働者の流入の分析から」

丹羽典生 「隠された民族間通婚——フィジーにおける先住系とインド系の『婚姻』の事例から」

成果

2012年度は、現代における家族と婚姻の変容を大きなテーマに掲げて4回の研究会を開催した。第1回の研究会では、工藤正子(特別講師)と横田祥子が、国際結婚とそれが作り出す家族の「つながり」について人類学の立場から発表した。第2回の研究会では、アメリカ合衆国における従来とは異なる婚姻の概念について、深海菊絵(特別講師)がポリアモリー実践を人類学の立場から、そして小泉明子(特別講師)が同性婚に関する議論を法学の立場から取り上げた。第3回の研究会では、上野加代子(特別講師)と南出和余(特別講師)が、労働者の海外移住に伴う、移住先における親密性と家族の「つながり」の変容について、それぞれ社会学と人類学の立場から発表した。第4回の研究会では、現代オセアニアを取り上げ、飯高伸五(特別講師)が国際人口移動と家族の変容について、そして丹羽典生が民族間関係と婚姻について、人類学の立場から発表した。

「日本の移民コミュニティと移民言語」

内容

今日日本では移民の流入にともない多くの言語(移民言語)が用いられているが、それらの日本語との接触における変容、使用実態、さらに維持や教育に関して、全体像は明らかにされていない。本研究では、日本の移民言語の現状を総合的に研究する上で前提となる、個々の移民言語の現状把握、さらにそれらに関与する諸要因を移民コミュニティ、言語政策、教育、言語とジェンダーとのかかわりから考察する。具体的には、日本における代表的な移民言語に関し、1)言語接触、干渉、コードミキシング・変化などの言語実態、2)言語領域・言語機能など言語使用、3)言語維持、言語教育状況の把握を主たる目的とする。また以上と並行して、移民が現実社会参加、社会上昇においてかかえる言語問題のうち、特にジェンダー、識字、学校教育とかかわる部分に焦点をあて考察する。

代表者 庄司博史

班員 (館外) 井上史雄 大上正直 オストハイダ・テーヤ 川上郁雄 金 美善 窪田 暁
宋 実成 高橋朋子 陳 於華 中田梓音 中谷潤子 中野克彦 野元弘幸
平高史也 福永由佳 安田敏朗 山下暁美 渡戸一郎

研究会

2012年6月9日

山下暁美 「ハワイ日系人の日本語の特徴」

福永由佳 「滞日パキスタン人の社会生活と言語事情」

2012年7月28日

中田梓音 「飲食メニューに見られる日本語に関する一考察」

川上郁雄 「移民の子どもはどのように語られてきたか——ことばとアイデンティティに注目して」

杉村美紀 「日本の中華学校における多様化と母語教育の変容」

2012年11月11日

中野克彦 「多言語メディアによる新たな異文化コミュニケーションの可能性と課題——ニューコム的事例分析」

井上史雄 「日本（語）にまつわる多言語表示の象徴機能」

庄司博史 「試論——資産としての移民言語」

2013年3月16日

野上恵美 「ベトナムコミュニティの言語状況について——神戸の事例より」

窪田 暁 「ドミニカ人の言語使用と言語意識——在米移民を中心として」

福永由佳 「移民を対象とした親子の識字教室——アメリカの事例より」

成果

日本における移民コミュニティの言語状況としては、パキスタン人、ベトナム人について最近の調査にもとづく報告がなされた。一般に移民コミュニティにとって社会参加は定住の要件とみなされ、日本語学習はその必須の条件とされている。この観点からみて、必ずしも日本語能力に依存せず生業を営むパキスタン人経営者たちの存在はある意味で、議論の前提へ再考をうながすものであった。また移民コミュニティの中の弱者である子どもたちや非識字者に焦点をあてた報告では、語り手の意識や認識により幾通りにも語られてきた言説から彼らのことばやアイデンティティを研究する際の課題、米国に多数存在する非識字者を子どもの学習支援をつうじて識字学習にとりこむ試みなどが紹介された。またホスト社会における移民言語教育への公的支援および学習動機の維持の観点から、移民言語の資産性についての問題が提起された。その他、エスニックメディアと移民コミュニティのかかわり、中華学校の多言語学習の場としての展開の事例、ハワイでの日本移民の言語変容や米国における南米移民の言語状況にかんする報告も移民言語について新たな知見を提供した。11月11日の明海大学での研究会は、首都大学東京および明海大学の大学院研究会と合わせて開催され、特に移民言語のもたらした言語景観に関する報告や情報交換が活発に行われた。

「手織機と織物の通文化的研究」

内容

本共同研究は、研究代表者である吉本 忍が1987年に『国立民族学博物館研究報告』12巻2号で発表した論文「手織機の構造・機能論的分析と分類」にもとづき、吉本をはじめとする共同研究の参加者が、これまでに蓄積してきた世界の諸民族のもとで使用されてきた手織機と、それらの手織機によって織られてきた織物を研究対象として、人類史の中核技術のひとつとして位置づけられる機織り技術の通文化的、かつ歴史的な展開をあきらかにするとともに、産業革命やIT革命と深くかかわってきた機織り技術の実態をあきらかにすることをおもな目的としている。また、本共同研究においては、産業革命、そしてIT革命によって進展している機械化や大量生産によって、人類が古代から培ってきた手仕事の存続が危ぶまれる今日的な状況を、機織り技術を基軸として精査し、今後のデジタル化時代における手仕事というアナログシステムのあるべき姿を模索することも計画している。

代表者 吉本 忍

班員 (館内) 上羽陽子

(館外) 井関和代 内海涼子 大野木啓人 金谷美和 ひろいのおこ 藤井健三 柳 悦州

研究会

2012年4月14日

鳥丸知子 「中国・貴州省のカード織り新発見について」

全 員 「特別展の展示に関する研究討論」

全 員 「特別展の展示解説とカタログ、および特別展開連事業について」

2012年 6月 2日

全 員 「特別展の展示に関する研究討論」

全 員 「特別展の展示解説とカタログ、および特別展開連事業について」

2012年 6月 3日

全 員 「糸素材と織構造の関係性について」

2012年 6月23日

全 員 「民博所蔵の織物資料に関する研究討論-1」

全 員 「特別展の展示解説とカタログについて」

2012年 6月24日

全 員 「民博所蔵の織物資料に関する研究討論-2」

全 員 「体験型展示のアクティビティに関して」

2013年 1月14日

吉本 忍 「織りの定義と織機の分類について」

上羽陽子 「染織文化とものづくりワークショップについて」

全 員 「来年度の成果報告について」

2013年 3月27日

吉本 忍 「成果報告に関する打ち合わせ」

行松啓子 「日本と東南アジアの絹の現状について」

全 員 「総合討論」

2013年 3月28日

ひろいのぶこ 「韓国とウズベキスタンの細幅織物用織機」

上羽陽子 「ラバーリーのからだ機について」

全 員 「総合討論」

成果

本共同研究では、共同研究員が実行委員として2012年秋の特別展『世界の織機と織物——織って！みて！織のカラクリ大発見』を9月13日から11月27日まで開催し、会期中に特別展示場内で織りの体験展示をおこなうとともに、共同研究員や研究協力者ほかが講師として、特別展開連イベントとしてのみんぱくゼミナール（3回）、みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう（9回）、ワークショップ（9回）、ミニレクチャー（15回）、機織りの実演（5回）をおこなった。また、特別展開連書籍として『世界の織機と織物』を出版した。

「非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ」

内容

アラブ諸国では、いわゆる「コネ」が社会を動かす基本的な手段になってきた。しかしその背後には、絶えざる交渉によって作り上げられる諸個人のあいだの、必ずしも功利的とばかりとは言えない複雑な関係が横たわっている。ともあれ組織や制度ではなく、具体的な顔をもった人間関係が社会の主役なのである。そうした実名性に担われた人間関係は、中東を起点として8世紀以来今日まで、三大陸を舞台に国家や民族、言語、宗教、地勢などの境界を超えて、切れ目のない世界規模の人間のネットワークを生み出してきた。人々の、境界に拘泥しないフレキシブルな意識構造がそれを可能にしている。そうして結びついた広大な多文化複合空間を「非境界型世界」と呼ぶことにする。本研究は、その世界で実際にどのように人間関係が営まれているのかをネットワークのハブである中東各地にさぐり、非境界的な人間関係のしくみとその成立条件を当の人々の感覚や世界観にまで踏み込んで解明することを目的とする。

代表者 堀内正樹

班員 (館内) 西尾哲夫

(館外) 新井和広

小田淳一

池田昭光

荻谷康太

井家晴子

小杉麻李亜

宇野昌樹

齋藤 剛

大川真由子

錦田愛子

大坪玲子

水野信男

奥野克己

米山知子

研究会

2012年 5月19日

井家晴子 「私の身体と医学的リスク——モロッコ農村部におけるオーラリティとリテラシー」

2012年 5月20日

西尾哲夫 「言語と文化の境界——言語人類学の再構築のために」

2012年 7月21日

全 員 「中間総括：問題の再定義」

2012年 7月22日

全 員 「中間総括：非境界的研究指針について」

2013年 1月26日

錦田愛子 「イスラエル調査報告」

2013年 1月26日

佐久間 寛 「見せる顔、隠される顔——非境界型世界の末端から」

2013年 1月27日

溝口大助 「マリ共和国南東部セヌフォ社会における夢と埋葬儀礼」

2013年 1月27日

堀内正樹 「非境界型世界をどう表現すべきか」

成果

本年度は、非境界型世界を支える「文化情報の非中心性と非拘束性」という特徴を検証した。井家晴子はモロッコで、妊娠や出産にかかわる文化情報の矛盾や不整合や曖昧性がなんの問題も引き起こさない例を通して、重要な語彙が拘束的な言辞の対極に位置することを論じた。西尾哲夫はエジプトでのフィールドワークに基づいて独自の言語的文化認識モデルを示し、言語と文化の境界をめぐる言語人類学の再構築を提案した。その後全員による本研究の中間総括を踏まえて、錦田愛子は、可視的な政治的・社会的境界が堅固に張り巡らされたイスラエルで不可視の境界が形成されるプロセスと、それを乗り越えるプロセスの重要性を論じた。境界の可視化と不可視化は本共同研究の根幹に関わる問題でもあるため、外部から特別講師を招聘し、この点に関する知見を求めた。佐久間寛はニジェールの開発に関わる場面で具体的な顔が意図的に隠される、つまり不可視化される局面の重要性を論じ、溝口大助は逆にマリの村落において不断に社会的・文化的境界が可視化されるプロセスを論じた。堀内正樹は今後こうした多様な局面を総合的に表現してゆくための問題点を整理した。

「日本の『近代化』をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する」

内容

明治維新によって形成された大日本帝国が、アジアの近隣諸国にも日本自身にも大きな災厄をもたらして77年で崩壊した事実から見ても、日本の「近代化」が、大きなゆがみを内包していたことは明らかだ。東アジアの一国である日本が、アジア・アフリカ諸国（以下 AA と略記）の中で、これからどのように自らを位置づけて行くのか、「歴史認識」など、中国、台湾、韓国等との間に対応を迫られている諸問題を考える上でも、広い視野に立った認識が、いま問われている。この共同研究は、AA の視点から日本の近代化を検討できるほど、それぞれの地域に通じた研究者と、AA を含む広い比較の視野をもつ研究者とを選びすぐって、この認識のあり方を根底から再考することを目的としている。講師は招かず、徹底討論によって成果を得て刊行し、学界だけでなく、政治・外交・経済・文化の諸領域の識者に投げかけ、批判を受けたいと考えている。

代表者 川田順造

班員 (館内) 小長谷有紀 佐々木史郎 田村克己
(館外) 伊藤亜人 白杵 陽 勝俣 誠 金子正徳 栗本英世 桑山敬己 清水 展
濱下武志 古田元夫 三尾裕子 水島 司 宮崎恒二 吉澤誠一郎

研究会

2012年 6月17日

三尾裕子 「植民地台湾における『近代』——迷信を事例に」

コメンテーター 古田元夫

2012年9月17日

古田元夫 「ヴェトナムの植民地化と『近代化』」

コメンテーター 三尾裕子、伊藤亜人

2012年12月2日

田村克己ほか 「居住地社会論——イギリス、オランダの東インド会社にさかのぼってのセトルメントの比較」

金子正徳 「インドネシアのエリート（特に地方エリート）の成り立ちと教育との関係」

コメンテーターは定めず、出席者全員で討論

2013年2月3日

濱下武志 「グローバリゼーション下の中国に見るナショナリズムの多様な形態」

コメンテーター 吉澤誠一郎

成果

本年度は4回の研究会で、特に東アジア、東南アジアをとりあげたが、常に他のアジア地域やアフリカの問題も踏まえながらの広い視野で検討でき、この研究会の特色を生かすことができた。例えば、「近代化」期における新宗教の誕生とその役割の問題など、幕末から明治にかけていくつもの新宗教を生んだ日本も含む、アジア・アフリカ共通の問題の1つとして、比較研究が期待される。その際、16世紀から19世紀にかけて世界に進出したヨーロッパ世界の根底にあった、キリスト教の普遍性に対する信念、植民地支配と重ね合わされた「文明化の使命」の、action/reactionの様相を、アジア・アフリカの視野でまず検討することは、将来、オセアニアや南北アメリカも含めた世界大の視野に到る一步の意味をもちうるだろう。また被植民地的状況における「エリート」の問題は、三尾報告における台湾、金子報告におけるインドネシア、前年度までの伊藤報告における朝鮮、吉澤報告における中国などに加えて、アフリカ社会の問題としても、来年度には取り上げたい課題の1つである。

「海外における人類学的日本研究の総合的分析」

内容

本共同研究の最大の目的は、海外における人類学的日本研究の実態を把握し、異文化としての日本の表象にまつわる問題を検討することにある。地域的には研究蓄積のもっとも多い英語圏を中心とする。そのため、メンバーの半数以上は英米の大学で日本を研究対象に学位を取得した者であるが、日本を自文化として研究してきた日本民俗学の視点を活用すると同時に、日本が位置する東アジアにおける日本研究との比較も視野に入れる。以下は本共同研究会の具体的目標である。1) 綿密な文献リストおよび文献解題の作成：徹底的な文献調査を行って研究会の基礎資料とする。2) 知的系譜の同定：主要な著作の理論的・民族誌的・政治的背景などを検討して、かの地における日本観の流れを明らかにする。3) 文化研究全般の再検討：自文化が異文化として外部者に描かれたときの問題を通じて、文化研究の在り方そのものを再検討する。4) 対話の場の形成：描かれた者が描いた者といかに対話して、双方に満足のいく文化像を提示するかを考える。

代表者 桑山敬己

班員 (館内) 太田心平

陳 天璽

(館外) 岩崎まさみ

太田好信

岡田浩樹

加藤恵津子

川橋範子

James E. Roberson

菅 豊

住原則也

泉水英計

竹沢泰子

中西裕二

中牧弘允

沼崎一郎

研究会

2012年5月19日

太田好信 「『菊と刀』に内在する文化理論の限界とその可能性」

2012年5月20日

岡田浩樹 「韓国人類学から見た日本社会」

2012年9月21日

James Roberson 「英語圏における沖縄の民族誌について」

2013年1月26日

中牧弘允 「谷口シンポ『文明学』の日本研究」

2013年1月27日

陳 天璽 「日本における国籍・戸籍のない人びと」

2013年1月27日

菅 豊 「民俗学の世界史的展望」

成果

前年度（2011年度）に引き続き、メンバーの個人発表を主な活動とした。共同研究会発足当初の計画では、海外における人類学的日本研究の知的系譜を辿ることを1つの目的としたが、メンバー間の討議の結果、後世に影響を及ぼした主要な作品を中心に据えて、今日的観点から振り返ることで合意を見た。太田好信がベネディクトの『菊と刀』を取り上げたり、桑山敬己がエンブリーの *Suye Mura* とピアズレー他 *Village Japan* に焦点を当てて『民博通信』第139号に「第2次世界大戦前後のアメリカ人研究者による日本村落の研究」を寄稿したりしたもの、そうした合意の反映である。その一方で、主要作品を特定しにくい分野や国もあるので、当初の計画の骨格は生かされている。

「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで」

内容

本研究は、アカデミックシステムを整える以前の民俗学が、各地の多様な文化運動と共鳴しながら存在していたという事実に着目し、民俗学の形成を、それら民間における多様な文化運動のなかに位置づけなおすことを目的としている。1960年代以前の民俗学は、文学（短詩型文学、小説）、歴史（郷土史）、考古学、それら人文系の知と深く関わっていた博物学など、各地域を拠点とした民間の多様な知の実践の選択肢の1つとして存在していた。そうした、地域を拠点とした運動は、学校のOB、職域などの多様な人脈や、雑誌刊行などを通じて外部と交渉しながら、他地域の知識人と重層的に関わりながら展開していた。さらに初期の人類学者たちもまた、これらの文化運動と少なからず接点をもっていた。口碑や伝承文化、古老の記憶の発見などを通して、自らの生活を自省的に見直す民俗学という実践は、こうしたローカルな文化運動のなかに胎動した。本研究を通して、民俗学も含め、広く近代日本の民間における人文学的知の展開を、多元的な重なりと動態から見直す地平を切り拓くことを目指している。

代表者 重信幸彦

班員 (館内) 森 明子

(館外) 飯倉義之 岩本通弥 門田岳久 菊地 暁 小池淳一 小国喜弘 佐藤健二
中西由紀子 久野俊彦 松本常彦 室井康成

研究会

2012年7月29日

佐藤健二 「ある民間学者の仕事——十二階の喜多川のケーススタディ」

中西由紀子 「北九州の雑誌文化」

真鍋昌賢 「民間〈知〉の実践のかたち——関心と想像力の共有とネットワーク」

2012年10月28日

松本常彦 「雑誌の領分——中島利一郎の場合」

門田岳久 「文化運動のなかの宮本常一——1970年代南佐渡における対抗文化と民俗学的実践」

2012年12月25日

森 明子 「民俗学実践のかたち——ミュンヘン協会の変遷を事例として」

全員討論 「文化運動のかたちを見渡すために——成果報告にむけて」

2013年3月9日

坂野 徹 「雑誌という場をひもとく——『ドルメン』『ミネルヴァ』『あんとろぼす』と甲野 勇」

2013年3月10日

全員報告・討論 「最終報告に向けて——テーマと視点」

成果

最終年度である2012年度は、主に以下の1)～4)に整理した問題について議論を深めた。1)ローカルな文化運動における雑誌の捉え方について、北九州地域を例に同人雑誌群の相関を網羅的に把握することや(中西報告)、一方福岡の中島利一郎を例に、1人の実践家が複数の雑誌の編集に携わる過程を探ること(松本報告)など、雑誌媒体の分析の仕方について検討した。また、雑誌という場を媒介に、どのように文化運動のネットワークが構築されるか、

その捉え方について『民俗芸術』を例に議論した（真鍋報告）。2)次にローカルな文化運動に関わる主体の、アカデミックな調査研究の技法と異なるリテラシーのあり方について、蒐集家・時代考証家である喜多川周之を例に議論した（佐藤報告）。そしてまた、外部から関与しローカルな文化運動が生起する媒介としての役割を果たす主体について、宮本常一と佐渡の文化運動の関わりを素材に議論した（門田報告）。今年度はさらに3)民族学とローカルな文化運動との関わりについて、考古学・民ソク学が相互に場を共有し展開していた雑誌『ドルメン』等を素材に検討した（坂野報告）。4)そして、本研究は日本を主なフィールドとしてきたが、ミュンヘンにおける民俗学協会のあり方の歴史的展開を踏まえ、ローカルな文化運動の組織のかたちについて、私的な同人組織を中心とした日本の場合と比較検討することもできた（森報告）。

「映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究」

内容

本研究は、様々なテーマに基づいて撮影・記録された映像資料を通して、東アジア、西アジア、中央アジア、東南アジア、アメリカ合衆国、西アフリカ、そして日本の各地で展開しているイスラーム的宗教実践の実態を知り、「イスラームの統一性と多様性」といった枠組みを再検討しようとするものである。とりわけ、イスラームの「共通項」として自明視される傾向にあったクルアーンの朗誦法、礼拝に伴う動作、ラマダンに過ごし方、モスクの構成要素や機能などの地域的展開に焦点を当てることで、各地域において解釈されている「普遍性」を地域横断的に考察することを第1の目的としている。その為の方法として、報告者が、調査地の人々にとって「ムスリム」としてのアイデンティティを顕在化する効果のある儀礼や行為を、映像資料を用いて紹介し、既存の宗教用語を用いるだけでは十分に説明できるとは限らない、その地域独自の文脈の中で説明されるべき概念や情報があるという事例をメンバー間で共有することを出発点とする。文字媒体による情報の伝達の限界を認識した上で、イスラームをめぐる従来の概念枠組みについて討論する。また、宗教実践の地域間比較研究を可能にするための方法として映像資料の可能性を検討することを本研究の第2の目的とする。

代表者 吉本康子

班員 (館内) 相島葉月 菅瀬晶子 藤本透子 山中由里子
(館外) 阿良田麻里子 伊東未来 熊谷瑞恵 黒田賢治 小杉麻李亜 椿原敦子 福田義昭
村尾静二 米山知子 今中崇文

研究会

2012年6月1日

阿良田・今中・黒田・菅瀬・吉本 「文化人類学会分科会——映像資料にみるイスラーム的宗教実践のプレ発表1」
山中由里子 「コメント」
全体討論 「研究成果の公表準備にむけて」

2012年6月2日

米山知子 「トルコ・都市におけるアレヴィーの儀礼ジェムのセマー——コミュニケーションとしての映像という視点から」
阿良田・今中・黒田・菅瀬・吉本 「文化人類学会分科会——映像資料にみるイスラーム的宗教実践のプレ発表2」
中西裕二 「宗教実践をめぐる記述と分類の問題——日本とベトナムの事例にみる」
全体討論

2012年10月8日

成果発表の検討・打ち合わせ
熊谷瑞恵 「ムスリムの国へ行ったムスリム——トルコ・イスタンブールに住む中国新疆ウイグル族の事例から」
久志本裕子 「マレーシアの預言者生誕祝い（マウリド）——民衆のイスラーム実践において誦まれるもの」
白川琢磨 「文化資源論からの提言」
全体討論

2013年1月27日

見市 建 「インドネシアにおける宗教『伝統』とメディア、政治」
ハリチハン・パタル 「在日インドネシア人ムスリムの宗教生活に関する社会学的考察——国際結婚をしているインドネシア人ムスリムへの聞き取り調査に基づいて」
全体討論

2013年3月3日

成果発表の検討・打ち合わせ

福田義昭 「昭和戦前・戦中期の在日ムスリム・コミュニティとモスク建立」

川崎のぞみ 「在日ムスリムのナシード（宗教歌）の実践について」

長津一史 「インドネシア・境域のイスラーム実践——言語使用を中心に」

全体討論

成果

本共同研究の最終年度に当たる2012年度は計4回の研究会を開催し、第46回日本文化人類学会において分科会『映像資料にみるイスラーム的宗教実践——地域間比較研究における「家族的類似」概念の可能性をめぐって』を主催した。研究会の成果としては、以下のものを挙げる事が出来る。

- 1) 1回目及び2回目の研究会においては、トルコおよびマレーシアの事例が新たに報告された。また上記の分科会のプレ発表を行い、これまでの各地域の報告を踏まえた上で、様々な指標によって存在する実態としての「イスラーム」や「ムスリム」を、ひとつの弁別特性も共有しない多配列分類ないし家族的類似という概念で捉え直すことの可能性を討論した。
- 2) 3回目及び4回目の研究会においては、インドネシアおよび日本国内のムスリムの事例が報告された。各回では「越境」や「移民」という新たなキーワードが浮上し、イスラーム的な知識ないし表象の伝達媒体としての映像という側面についても議論した。
- 3) 全回を通して、それぞれの地域において展開するイスラーム的宗教実践の実情と、「共通性」ないし「普遍性」の解釈の多様性について、各報告から得られた知見を共有することができた。また地域にとって「正当」なムスリムの実践を示すとされるクルアーン朗誦の節回しや動作についての報告等を通し、映像資料の有効性が確認できた。

「交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ」

内容

近年、医療や開発などの言葉で人類学を修飾する「連辞符人類学」が急増し、関連領域を含む再帰的な議論が展開されている。だがこれらの研究は、各領域における近代知批判という図式のもとで特定の場面を断片的に切り取り、そこでの目的遂行的な行為のみに焦点化し記述する傾向が指摘されている。本共同研究では、民族誌研究がもつ本来の魅力、つまり様々な当事者がそれぞれの立場や利害から現場に関わり、目的外の行為も含めて進行する現場の全体性を通時的／共時的に捉えるという視点に立ち返り、人類学者が他専門領域と関わる際に共有可能な基盤の再考を目的とする。

その際、ある対象や状況に対する行為の準備状態あるいは感情的傾向である「態度」、とくに現場の物事の経過を「流す態度」（看過、いなす、諦めるなど）と「澁ませる態度」（配慮、拘る、悩むなど）に注目する。当事者のそうした態度を、その現場に特有の言語表現、感情管理のやりとり、そして調査者自身の経験を手掛かりに探り出し、目的遂行的／目的外の諸行為とともに記述し直すことで、現場の全体性への民族誌的再接近を試み、その作業を通じて、人類学が他領域と関わるための共通基盤を探求する。

代表者 岩佐光広

班員 (館内) 伊藤敦規 小川さやか

(館外) 伊藤まり子 工藤由美 佐川 徹 松尾瑞穂

研究会

2012年7月7日

伊藤まり子 「道徳と情感——ベトナム北部地域の宗教組織における『対抗的道徳』をめぐる態度を事例として」

工藤由美 「当事者たちの一貫性のない態度と人類学者——マプーチェのフィエスタをめぐって」

2012年7月8日

全 員 「最終年度の計画について」

2013年1月27日

松尾瑞穂 「苦悩のエイジェンシー——インド女性にとっての流産にみる応答の模索」

佐川 徹 「東アフリカ牧畜民ダサネッチが戦いに臨む態度と感情」

全体議論

2013年2月18日

伊藤敦規 「民族誌資料情報のデジタル共有——ズニ博物館によるフォーラム型データベース構築の取組」

成果

本年度は、これまでのキー概念の整理を踏まえつつ、メンバーがフィールドワークを行ってきた地域の具体的な事例をとりあげながら検討を行った。それらの事例の検討を通じて、刻々と変化する現場の状況が人びとの応答／態度を喚起し、いっぽうでそれに人びとが応え続けることで現場は現在進行形の社会状況として立ち現れるという、現場とそこに関わる人びとの相互性が明らかになった。また、その相互性の今・ここにおける具体的な現れとして人びとの応答／態度に注目することで、現場におけるアクチュアリティへの接近の可能性を見出すことができた。こうした研究成果を踏まえ、日本文化人類学会第47回研究大会（2013年6月8～9日、慶応大学）に分科会「応答／態度の人類学——現場のアクチュアリティへの民族誌的接近に向けて」を申請し、採択された。

「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」

内容

本研究は、グローバル化が進展し多文化状況にある現代を読み解く重要なカギとして宗教に着目し、越境と流動化の進む現代社会における宗教復興のメカニズムを明らかにすることを目的とする。特に、最近20年間に社会主義体制からの移行と越境というはげしい社会変動を経験した内陸アジアの多文化社会の事例をとおして、宗教復興にみられる地域固有の歴史社会的・政治経済的諸要因、越境と宗教実践の多様な展開、地域社会に生きる人々にとってローカル／グローバルに宗教を復興することの意味の解明を目指す。本研究の意義は、第1に複数の国家における社会主義の経験と宗教復興の関係性の解明に寄与すること、第2に国民国家の枠組みを超えて再編される宗教・民族・地域の連関を越境という角度から解明すること、第3に生と死という人間存在の根本に関わる問題に着目し宗教復興現象から他者との共生という現代的課題に貢献する点にある。

代表者 藤本透子

班員 (館外) 王 柳蘭 菊田 悠 小島敬裕 小西賢吾 小林 知 島村一平 趙 芙蓉
和崎聖日

研究会

2012年5月12日

小林 知 「セイマーとバロメイ——宗教空間にみるカンボジア仏教再生の動態」

小西賢吾 「越境するボン教徒——普遍性と個別性からみる『伝統』の存続」

総合討論

2012年6月9日

藤本透子 「社会主義をへた宗教の再構築（趣旨説明）」

藤本透子 「越境空間におけるイスラームの再構築」

島村一平 「感染するシャーマン」

小西賢吾 「宗教の再構築における指導者と地域社会再編の関係」

小島敬裕 「中国雲南省徳宏州における仏教実践の断絶と再構築」

王 柳蘭 「中国雲南系ムスリムの越境と宗教ネットワークの再構築」

総合討論

2012年12月15日

和崎聖日 「中央アジア定住ムスリムの婚姻と離婚——シャリーアと民法典の現在」

成果報告について討議

2013年1月13日

成果報告について討議

井上大介 「社会主義体制下で発展する新宗教運動——キューバにおける創価学会を事例として」

滝澤克彦 「モンゴルにおけるキリスト教への改宗をめぐる」

総合討論

2013年3月2日

研究成果原稿の読み合わせ

成果

文化人類学会で分科会「社会主義をへた宗教の再構築——地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」を開催したほか、国立民族学博物館で5回の研究会を行った。ユーラシア内陸部の歴史動態をふまえて民族誌データを分析することで、シャマニズム（シャーマニズム）、仏教、ボン教（ボン教）、イスラームという多様な宗教が、それぞれ災因論的感覚、浄域の観念、在家信徒、師弟関係、移民のネットワークなどに依拠することで、社会主義経験をへて再構築され、地域社会の再編に特定の役割を果たしたことが明らかとなった。宗教の重要性は、結婚／離婚に関する国家の制定法に対するイスラーム法の優位や、シャマン（シャーマン）による病氣治療など、日常生活に密接にかかわる諸側面にみられる。宗教実践はしばしば国境を越えて再構築されるが、近年ではボン教のヨーロッパ布教やキリスト教のモンゴルにおける布教などのように、遠隔地における布教、改宗、新宗教運動も社会動態との関連から重要となっていることが論じられた。

「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」

内容

本館の創設に尽力し、初代館長をつとめた梅棹忠夫ののこした資料は「梅棹アーカイブズ」とよばれている。それらのうち写真資料およそ3万5千点はすでに登録されたが、その他の資料については2011年度より順次デジタル化作業がおこなわれている。本研究は、そうした資料整備によっていかなる学術的な活用を展開しうるかを具体的にしめす先例となるように、アーカイブズ資料の学術的な利用を目的とする。

梅棹忠夫ののこした資料のうち、もっとも多大なまとまりは1944年から46年にかけて中国内モンゴル自治区などで調査研究がおこなわれたときの資料である。本研究は、それらの梅棹忠夫モンゴル研究資料に関するデジタル・データ化作業を活用して、それらの記載内容について、学術的に整理し、分析するものである。分析にあたっては、国際学術交流協定にもとづき、中国関係諸機関とともに、別途、国際的な共同研究を実施し、その成果を公開して、地元にも還元する。

代表者 小長谷有紀

班員 （館外）大野 旭（楊 海英） 呉人 恵 那沁 縄田浩志 堀田あゆみ

研究会

2013年1月9日

小長谷有紀・堀田あゆみ 「2012年5月の中国内モンゴルでの調査結果について」

那沁 「梅棹草稿論文における放牧論について」

2013年2月16日

小長谷有紀・堀田あゆみ 「遊牧図譜の原画集の刊行について」

縄田浩志 「フィールドノート47号および48号における研究企画について」

成果

昨年の共同研究の成果にもとづいて、現地調査を実施するために、別途、館長リーダーシップ経費を申請し、これにより、2012年5月に中国内モンゴル大学を訪問し、新たに学術交流協定を締結するとともに、それにもとづいて共同で現地調査を実施した。

その学際的かつ国際的な成果は「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37巻1号として刊行され、物質文化の変容が明らかになった。またさらに、『梅棹忠夫モンゴル調査スケッチ原画集』（国立民族学博物館調査報告111号）を刊行した。1990年の梅棹著作集編集時の誤りをただすなど、資料としての底本をつくることができた。

那沁は、梅棹の放牧に関する論文草稿を分析し、GPSや衛星画像など今日的な方法によって再検討できる可能性を示した。また、縄田浩志は、現地調査前に書かれた2冊のフィールドノートの詳細な分析から、遊牧論の成立過程を明らかにできる可能性を示した。

「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

内容

本研究会の目的は、パレスチナ・ナショナリズムとシオニズム、アラブ・ナショナリズムの比較研究を、人類学的、歴史学的、政治学的、地理学的視点から多角的におこなうことにある。

パレスチナ・ナショナリズムの起源は1834年、オスマン帝国治下のパレスチナの主要都市で起こった民衆蜂起にさかのぼるといわれている（Kimmering and Midgal 1995）。しかしながら、これについては批判も多く、列強によるシリア行政州の分割と植民地化が契機であるとする反論がなされてきた。なかでも、シオニストとの対峙によってパレスチナ人アイデンティティが形成されたとする、ハーリディの説（Khalidi 1997）が有名である。いずれにせよ、同じくオスマン帝国治下にあった周辺アラブ地域におけるアラブ・ナショナリズム、およびロシア・東欧地域からのシオニストによる入植活動に触発されて、パレスチナ・ナショナリズムが発生したことについて、疑問を差し挟む余地はないであろう。本共同研究会は、この三者を扱う研究者をメンバーに迎え、互いに情報を提供しあうことで、三者の相関関係を解明してゆくことを目的とする。

代表者 菅瀬晶子

班員 （館外） 赤尾光春 池田有日子 今野泰三 白杵 陽 奥山真知 金城美幸 田浪亜央江
田村幸恵 鶴見太郎 奈良本英佑 早尾貴紀 藤田 進 細田和江 森 まり子
山本 薫 横田貴之

研究会

2012年 7月22日

鶴見太郎 「シオニズムとナショナリズム論——いかにパレスチナ問題を論じるか」

田浪亜央江 「パレスチナ文化における『オーセンティシティ』の行方——ラクスを事例として」

2012年10月14日

金城美幸 「植民地化／植民地主義とシオニズム——概念の洗練化に向けての試論」

池田有日子 「ユダヤ人問題からパレスチナ問題へ——暴力連鎖の構造」

2013年 2月10日

蒲生裕恵 「パレスチナの都市に生きるシングル女性——仕事と結婚を中心に」

菅瀬晶子 「本年度までのまとめと今後について」

成果

2年目の今年度は、パレスチナとイスラエル双方のナショナリズムの比較と、パレスチナ人アイデンティティの表象のありかたという、2つの研究テーマを軸として研究発表をおこない、討議を重ねた。このうち後者については、今年度はヨルダン川西岸地区の事例を中心に取り上げ、前年度おこなったイスラエルにおけるアラブ人市民の事例と比較しつつ、そのアイデンティティ表象にみられるあらたな潮流の動向や、世代間の格差、イスラエルを含む非アラブ圏からの影響などについて確認した。

前者については、今年度はおもにシオニズム成立初期の歴史に注目し、ヨーロッパにおけるナショナリズム論や植民地主義の影響を洗い直すという作業をおこなった。パレスチナ・ナショナリズムとの接点をさぐる本格的な作業は、次年度に受け継がれることになるであろう。次年度末に予定している国際シンポジウムの開催にむけて、より議論を集約し、洗練化してゆくことをめざしたい。

「実践と感情——開発人類学の新展開」

内容

本研究は、開発や開発援助の文脈における人々の「感情」に注目した実践的人类学の可能性を検討することを目的とする。社会開発や人間開発に係る諸実践において、調査者が可能な限り支援の対象となる人々の目線に近づきながら「リアリティ」を捕捉することの重要性が指摘されて久しい。それは、一面において開発実践のプロセスを、人々の心のうねりと感情の動態の中で把握することを意味する。しかし実際には、これまでそれは、感情語や開発ジャーゴンに還元され、客観化されてきた。例えば、「人々のモチベーションを高め、持続させる」ことを開発援助の実務における主要な課題の1つとして示されることが多いが、そのような一般的表現では開発の場において「やる気を高められない」、あるいは「高めない」人々の抱く「リアルな」感情が浮かび上がってこない。そこで本研究では、ODA、NGOの海外における実践や国内での広報、啓発活動も含むさまざまな開発事例に関係する人々の行

為や思考、語りに現れる感情を、感情語（例えば「怒り」「喜び」「やる気」など）によって示される一般的・抽象的レベルだけでなく、その元にある個々の生きられた感情経験そのものにおいて捉える。

代表者 関根久雄（客員）

班員 （館内）岸上伸啓 白川千尋 鈴木 紀 信田敏宏
（館外）青山和佳 井上 真 小國和子 亀井伸孝 佐藤 峰 鷹木恵子 玉置泰明
内藤順子 縄田浩志 藤掛洋子 真崎克彦

研究会

2012年9月29日

関根久雄 「『怒り』を管理する——ソロモン諸島における開発実践と感情経験」

2012年10月13日

小國和子 「共感と合理——インドネシア南スラウェシ農村灌漑の『水守り人』の意義と機能を事例に考える」

鈴木 紀 「嫉妬と妬み——メキシコの参加型農村開発のサステナビリティ（自立発展性）を巡って」

2013年2月2日

縄田浩志 「村入りで『感情的になる』——現地調査の流儀をめぐって」

白川千尋 「感情と信頼関係——青年海外協力隊の事例より」

2013年3月2日

《共同研究『NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座』
（代表：信田敏宏）と合同開催》

藤掛洋子 「連帯から分裂へ——パラグアイ農村部における国際協力活動より（1993-2013）」

上田直子 「援助とソーシャル・キャピタル——中米シャーガス病対策でのサシガメをめぐるセンチメント」

成果

本年度第1回研究会において関根久雄（筑波大学）は、ソロモン諸島における農村開発事業を事例として取りあげ、現地の人々が開発に関わる事態を前にしていかにして「怒り」の感情を抱き行為化させるのか（感情経験、感情実践）、どのように怒りを管理しているのか（感情の文化的管理の実践形態）ということについて考察し、人々の感情経験と開発プロジェクトの実践活動との接点を明示した。

第2回研究会では、小國和子（日本福祉大学）がインドネシア南スラウェシ農村における灌漑水路管理における「水追い人」に係る事例に注目し、現地の人々がプロジェクトの過程で経験する近代合理性と社会的リアリティとの葛藤において生み出される社会的感情（例えば「共感」）が人々の行為や関係にどのように作用し、プロジェクトの持続性に貢献しうるかについて考察した。また鈴木 紀は、メキシコで実施された国際協力機構（JICA）の農村開発プロジェクトのフォローアップ研究のデータを取りあげ、それを人々の感情に着目して再評価を試み、プロジェクトの自立発展性の阻害要因として感情による説明が有効であることを示した。

第3回研究会では、白川千尋が青年海外協力隊員に注目し、村落開発活動に関わる彼ら（彼女ら）が現地の人々との信頼関係と感情的な関係を通じて活動を展開している様相について報告した。また、縄田浩志（総合地球環境科学研究所）は調査者である縄田自身のフィールドにおける感情経験に注目し、開発人類学における実践と感情をめぐる新たな考察の視角を提示した。

第4回研究会では、藤掛洋子（横浜国立大学）が長年携わっているパラグアイ農村における実践活動を取りあげ、藤掛自身の研究と実践の往還過程において生じる現地の人々との感情的もつれについて考察を行った。また、上田直子（横浜国立大学）は中米ホンジュラスの寄生虫感染症であるシャーガス病への対策活動に注目し、援助プロジェクト終了後においても援助の成果の持続的展開が可能となった事例を社会関係資本の視点から検証し、持続性を有する援助と社会関係資本との関係を感情の視点から明らかにした。

いずれの発表、報告においても、実践活動の起点及びその様々な事象との結節点に人々の感情経験が介在していることを明確に示す好例であり、本研究会の方向性をメンバー間で具体的に共有することができた。

「人の移動と身分証明の人類学」

内容

本研究は、人の移動・越境・滞在と身分証明をめぐる法的・行政的制度、またそれらを利用する実践のあり方について明晰化することを狙いとする。具体的には、生から死に至るまで、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、

移動する人々の人生と次世代にどのような影響を与えるのかという視点に立ち、旅券、渡航証、身分証といった身分証明は、個人のアイデンティフィケーションや社会のトランスナショナリズムにどのように関わっているのかを解明する。身分証明が、越境の時代、ボーダーレスな経済社会にどのような影響を与えているのかは、研究価値の非常に高いテーマである。そのテーマを直視し、グローバルなネットワークが進行する過程で、国籍や在留資格など身分証明が果たしている役割と管理される側の一人ひとりの人権を人類学・社会学・法律学など各分野の研究者が学際的視点で議論、研究する。

代表者 陳 天璽

班員 (館内) 庄司博史 南 真木人
(館外) 明石純一 李 仁子 石井香世子 大西広之 郭 潔蓉 川村千鶴子 窪田順平
小林真生 小森宏美 近藤 敦 佐々木てる 館田晶子 中牧弘允 錦田愛子
西脇靖洋 付 月 松田睦彦 南 誠 柳下宙子 柳井健一 山上博信
山田美和 林 泉忠

研究会

2012年6月2日

川村千鶴子 「ライフサイクルの視座」
大西広之 「身分証明書の分類」
近藤 敦 「『多文化共生社会』における身分証明のあり方」
山田美和 「タイにおけるミャンマー人移民労働者と国籍・身分証明」

2012年9月15日

佐々木てる 「移動と身分証明の社会学」
Takamori Ayako “Positioning US-Japan Relations: Japanese American Cultural Citizenship”
小林真生 「スポーツ選手の国籍選択——トンガ人ラグビー関係者を事例として」

2012年12月1日

李 仁子 「脱北、脱南、そして難民——身分証明をめぐるあくなき闘い」
大川洋子 「米国における国籍取得および身分事項の立証」
総合討議

2013年2月23日

山上博信 「導入・小笠原諸島における人の移動とその国籍について」
DVD鑑賞 『知られざる国境・小笠原』とその討論
嘉陽ジャネット 「小笠原復帰の前後を経験した欧米系島民のくらしと身分証明」

2013年2月24日

長谷川 馨 「小笠原復帰に先立ち派遣された東京都職員の間」
デービッド チャップマン 「海外からみた小笠原諸島の人びとと戸籍」
ディスカッション

成果

本年度の前半は、まず、本共同研究会の基本的な理論的枠組みとして設定しているライフサイクル、ライフステージなどの理論的概念について提案者（川村）の発表をもとに研究会メンバーで議論を行った。また、本共同研究会のもう一つの柱として注目している身分証明書についても概念を整理し、分類方法を検討した。さらに、グローバル化、多文化化する現代社会における身分証明の意味についても議論を行った。

概念整理を踏まえ、年度の後半は各共同研究会メンバーの専門分野やフィールドに基づき、ケーススタディ報告を行った。その内容は、タイにおけるミャンマー人移民労働者、日系アメリカ人、脱北・脱南者、小笠原復帰と欧米系島民などに及ぶ。また、スポーツ選手の国籍選択やアメリカにおける国籍取得や身分事項についても議論を行った。

「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」——

内容

グローバルな支援の輪が地球規模で広がっている今日、NGOの活動域は、人類学が伝統的に研究のフィールドと

してきた世界各地の周辺地域にまで及んでいる。人類学が対象とするフィールドの人びとは、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築するようになってきており、NGO活動に関わる人びとは、グローバルな社会的ネットワークの中に自らを世界とつながる存在として位置づけるようになってきている。一方、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカルNGOや国際NGOが様々な支援活動を行っているのを目にするようになり、時には人類学者自身もNGOの活動に深く関わり、場合によっては自らが支援のエージェントとなっている。こうしたNGOと人類学が接近しつつある今日の状況を鑑みて、本研究では、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性とグローバル支援のメカニズムを、人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことを目的とする。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」が進行する中で、国家や世界秩序の変革・再編にNGOをはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも大きな目的となっている。

代表者 信田敏宏

職員 (館内) 宇田川妙子 白川千尋 鈴木 紀 関根久雄 (客員)
(館外) 綾部真雄 小河久志 加藤 剛 清水 展 杉田映理 内藤直樹 中川 理
子島 進 福武慎太郎 藤掛洋子 増田和也 三浦 敦 渡邊 登

研究会

2012年6月16日

子島 進 「国際協力を地続きのものとする理念と実践——JFSA 西村光夫さんの事例から」

2012年7月21日

宇田川妙子 「イタリアの『第三セクター』の動き」

中川 理 「コメント」

2012年7月22日

信田敏宏 「問題提起——グローバル支援とは何か？」

加藤 剛 「人類史からグローバル支援を考える」

鈴木 紀 「グローバルな互惠性と人類学的支援」

2012年12月16日

秋保さやか 「開発とクメール農民の『革命の時』——NGO—農民関係の変容に着目して」

信田敏宏 「<パブリックスケープ>という視座」

2013年3月2日

《共同研究『実践と感情——開発人類学の新展開』(代表：関根久雄)と合同開催》

藤掛洋子 「連帯から分裂へ——パラグアイ農村部における国際協力活動より(1993-2013)」

上田直子 「援助とソーシャル・キャピタル——中米シャーマン病対策でのサシガメをめぐるセンチメント」

成果

研究が本格化した本年度は、メンバーおよび特別講師による研究発表に加えて、メンバー間で共有すべき諸概念(「グローバル支援」「パブリックスケープ」等)について集中的に討議した。NGO活動が世界各地で展開している時代背景を意味する「グローバル支援」については、グローバルに展開する支援活動という字義通りの意味に留まらず、普遍的でグローバルに受け入れられている価値(人権、環境保全、貧困、疾病、教育、災害、民主主義など)に基づいた支援活動という意味づけも共通認識となりつつある。また、試みの段階にある「パブリックスケープ」については、さしあたり、公式/非公式のアクターが介在し、人びとの関係性が変化し新たな形で活性化しているフィールドの状況と定義し、さらなる検討を加えることになっている。メンバーの間に共有すべき概念や認識等が浸透し、次年度以降のさらなる理論的精緻化に向けて準備が整ったことで、本共同研究は第一段階をクリアし、次の段階に進んだと言える。

「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」

内容

インターネットをはじめとするテクノロジーの革新による仮想現実の蔓延の結果、人文社会科学の領域においても、人間にとっての物質世界の重要性が急速に低下しているかに見える。しかし、人間は依然として、(それぞれ特

定の物性をもつ生物や無生物、自然物や人工物から構成される)物質世界のなかに存在し、その物質世界に物質たる身体の感覚を介して物質的に関与する、それ自身徹頭徹尾、物質的存在でありつづけている。本研究は、人間の生活と人生の基盤をなす「物質性」(materiality)が人類学においてこれまで不当に看過されてきたとの認識に立ち、今後の人類学が問うべき「物質性」に関する問題系を、物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて明らかにすることと、「物質性」に照準する具体的な手触りのある事例研究を、各自のフィールドワークに基づいて生みだし、今後の研究のために範を示すことを目的とする。

代表者 古谷嘉章(客員)

班員 (館内) 関 雄二 野林厚志
(館外) 秋山 聡 鏡味治也 川田順造 佐々木重洋 武井秀夫 出口 顕 松本直子
溝口孝司 箭内 匡 渡辺公三

研究会

2012年5月12日

全 員 「ゴミと物質性」をめぐるミニ問題提起

全 員 「ゴミと物質性」をめぐる総合討議

2012年7月28日

秋山 聡 「西洋中近世におけるキリスト像の生動性をめぐって」

出口 顕 「エンバーミングと記号化する身体」

武井秀夫 「からだを形作ることば」

全 員 「からだと物質性」についての総合討論

2012年11月10日

松本直子 「考古学からみた物質性——象徴的人工物と物質性」

溝口孝司 「物質性と考古学——社会性の変容との関連から」

野林厚志 「触感という観点からの展示物の解釈」

全 員 「考古学からみた物質性」についての総合討論

2013年2月2日

川田順造 「モノとケガレ——物質が内包する不可触性と不可視性」

質疑応答およびコメント

全体討論

成果

起承転結の「承」にあたる第2期(2012年度)においては、メンバー各自による個別研究の提示と交錯する論点の整理を行い、「物質性」という問題系の多様性ならびに広がりを確認した。具体的には、計4回の研究会を実施し、第1回研究会においては、「ゴミと物質性」というテーマで出席者全員がミニ報告を行った後、世界の物質性について考える際に「ゴミ」という切り口がどのように有効であるのか自由討論を行った。第2回研究会においては、「西欧中近世におけるキリスト像」「現代日本のエンバーミング」「コロンビアのトゥユカ族の身体」についての報告を通して「物質性」という視点から「からだ」について討論した。第3回研究会においては、人の進化とモノとの関わりについての考古学の見地からの2報告ならびに展示物の触感についての一報告が行われた。第4回研究会においては、(不)可視性と(不)可触性という観点からケガレとモノについて報告があった。

「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」

内容

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障なき世界をストリートに近接して剥き出しで生きる現代の前衛と言える。主流ホーム社会の中核の人々さえも現代社会の強い遠心力に不安を募らせている。故に、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知は、今日すべての人々に要求されている。この図式を現代の地域構造に向ければ、今日のローカリティの盛衰も広義の「ストリート現象」と言える。流動する時間を生きるグローバル・シティの強大化の下で、周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて格闘している。この狭義から広義までの「ストリート」現象(敗北と再創造の過

程)の記述分析が本研究の第1の目的となる。つまり、主流社会の設計主義が通用しない、偶有的なフローを資源にしたストリートの戦術的生き延び方のエスノグラフィを作成する。

代表者 関根康正 (客員)

班員 (館内) 岸上伸啓

(館外) 朝日由実子 阿部年晴 小田 亮 姜 竣 北山 修 高坂健次 鈴木晋介
近森高明 トム ギル 内藤順子 西垣 有 根本 達 野村雅一 古川 彰
丸山里美 南 博文 森田良成 和崎春日

研究会

2012年5月13日

サラ・ティーズリー 「グローバルデザイン史の方法論をめぐって」

関根康正 「ローカリティの生産と変質——ロンドンの南アジア系移民のヒンドゥー寺院建設活動」

全員討論と打ち合わせ

2012年7月21日

野村雅一 (国立民族学博物館名誉教授) 「冷戦と経済成長・開発 (デベロプメント) ——ギリシャからの展望」

森田良成 (摂南大学非常勤講師) 「映像作品『アナ・ボトル——西ティモールの町と村で生きる』をめぐって」

全員討論と打ち合わせ

2012年12月15日

サラ・ティーズリー 「日本の家具製作に見るグローバルデザインヒストリー」

小田 亮 「災害ユートピアと日常性」

村松彰子 「仮設という暮らし」

総合討論と打ち合わせ

2013年1月13日

門脇 篤 (門脇篤まちとアート研究所代表) 「震災後のコミュニティとアート」

高坂健次 (関西学院大学名誉教授) 「個体的体験事実と全体的客観事実とのパラドクス—— Frustrated achiever、
民工、セクシャル・マイノリティ」

全員討論と打ち合わせ

成果

サラ・ティーズリーは、通常のワールドデザインヒストリーに対して脱中心化のモメントをもつ「グローバルデザインヒストリー」を提唱している。それは、ローカルな文脈における“design as practice and product”という非常にダイナミックな、あるいは generative な方法論的な見方であり、そのことを具体的には日本の家具製作のフィールドに見出されるローカルデザインとグローバルデザインのトランスナショナルな関係把握において実証してみた。それを通じて、日本における近代デザインの普及過程で既にトランスナショナルな流動の中でプリコラージュ的にローカルなものが産出されていたという指摘がなされ、通常の都市計画にみられるユートピア・デザインに抗して、現代のストリートとローカリティをめぐるヘテロトピア・デザインなるものを構想している本プロジェクトには大きな示唆を与えられた。そこではデザインとは、人とモノの対称性を説く ANT 的な布置 (“history through things”) の中での an intentional action to change environment と定義され、阿部年晴の言う、そうした対称性なしには人は育まれない後背地論的な「文化」と人間中心の近代「文明」の区別と交差させてみる価値があることが見い出され、ストリートとホームとの関係理解に脱中心的な把握を持ち込むのに示唆がある。

門脇 篤の大震災以降の宮城での糸を張るアートによるモノと人が対話しながら創造されるような下からの街づくり運動は、この文脈に照らして理解でき、またその方法と実践のイメージを具体的に豊穡化している。

野村雅一の冷戦構造の力の拮抗点に位置する経済危機のギリシャの事例を踏まえた、日本の戦後を冷戦下という見方で相対化する洞察的議論は、間違いなくワールドデザインヒストリーのヘゲモニーを十分相対化したときに初めて可能になるグローバルデザインヒストリーの見方と通じるものであり、日本国家の戦後史を、世界 (ワールド) システムの中で半周辺ないし周辺に改めて位置づけ直す。つまり、ローカル・ステイトとして戦後日本における「主体性」とはなんであったか、その無根拠さやその受動性を明るみに出すことで明確化し、その上で、改めて私たちの当事者性を構築しなおす必要があることを唱えた。

さらに、そうしたグローバルシステムの中での移民の生活空間形成に注目したのが関根康正の英国の南アジア系

移民の間での研究である。関根は目下、莫大な資金（資本）をかけてヒンドゥー寺院建設を行う彼らの深い意図を探っている。この意図は、サラ・ティズリーから教示された co-design あるいは open-design という概念の核にあるとされる「サバイバルのためのデザイン」によって説明できる可能性を看取した。

この関根によって提示された一定の資本力を持ったローカルデザインの事例に対して、森田良成はインドネシアの西ティモール社会の街で、まさにグローバルシステムの縁辺の縁辺を生きる廃品回収業に従う村人、つまり資本なき人々の生き様を浮き彫りにする。同じローカルでもこの資本の有無の幅がシステムとの相互作用として行われるストリートのプリコラージュの内容を考察する際の幅にも対応するだろう。すなわち、ローカルな場でのサバイバル・デザインを構成する相互扶助的対応の現出の在り方の閾値の諸段階資本の有無はかかわると思われる。その点にもかかわって、大災害後の被災地域住民や社会的マイノリティーという広義の周辺化された場所（ローカルな場）に注目するとき、上からのシステムの管理的把握という権力行使と当事者個々人の日常生活経験にみられる創発的な実践との関係性を正確に腑分けしていくことが重要である。

この点を理論的に提示してくれたのが、小田 亮の「災害ユートピアと日常性」での慈善と相互扶助の区別であり、その実証部分が村松彰子による被災後の「仮設という暮らし」のシステムと日常の接点での現地調査報告であった。

また高坂健次による相対的剥奪を「個的体験事実と全体的客観事実とのパラドクス」の中で測り出す数理社会学的研究において、当事者の日常的視点への正確な接近方法・理論が模索された。ストリートに立つ、ローカルに立つとは、どういうことかを考察するうえで示唆が多かった。

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」

内容

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカーラン（「包摂」）を鍵概念として明らかにするものである。カースト的秩序から一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められた1990年以降のネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナルな水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の間の関係と齟齬を多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することが目的である。

代表者 名和克郎

班員 (館内) 南 真木人 宮本万里
(館外) 石井 溥 上杉妙子 鹿野勝彦 佐藤斉華 橋 健一 田中雅子 外川昌彦
藤倉達郎 別所裕介 Maharjan, Keshav Lall 森本 泉 安野早己 渡辺和之

研究会

2012年7月7日

中川加奈子「カトマンズにおける民主化・市場化と下からの社会的包摂——「カドギ」によるカースト・イメージの読み替え」

森本 泉 「ガンダルバと社会的包摂——新ネパール再構築過程で/を歌う」

共同討議 「昨今のネパール情勢について」

2012年7月8日

佐藤斉華 「彼女たちはいかにして『仕事に満足』か?——カトマンズ周辺の建築労働者女性の場合」

2012年11月17日

別所裕介 「開発と仏教——ネパールの包摂ポリシーにおけるチベット仏教集団の動向」

安野早己 「あるブラーマンの死亡事件——人民戦争後の村落社会の変化」

石井 溥 「ネパールとブータン——類似と対照」

2013年1月12日

森田剛光 「ネパール、タカリーの民族範疇に関する考察」

丹羽 充 「拡がるアイロニーと共同の可能性、もしくは不可能性——カトマンズ盆地のプロテスタンティズム

を事例に」

渡辺和之 「村に残った人々の暮らしはどう変わったか？ 東ネパール、ルムジャータル村における家畜頭数、耕作地、村落開発委員会における女性とダリットの役割の変化」

2013年3月2日

Khadga K. C. “Civil Military Relations in Nepal”

共同討議 「ネパールの平和構築における『包摂』について」

田中雅子 「人身売買被害者にとっての包摂——村に戻ったサバイバーの暮らしと当事者運動」

全 員 「次年度の研究計画について」

成果

第2年次にあたる本年は、共同研究者との日程調整の結果、4回の研究会を開催することとなった。共同研究者及び特別講師の発表は、特定の間接集団に焦点を当てたもの（森本、中川、森田、別所）、特定の村に焦点を当てて状況の変化とその複雑性を論じたもの（安野、渡辺）、ネパールの「包摂」を巡る既存の議論枠組では容易に捉えられなかった事象を扱ったもの（佐藤、丹羽、別所、田中）、さらには他国との状況比較（石井）に及んだ。さらに、京都大学に滞在中であったネパールの政治学者 Khadga K. C. 先生には、ネパールの軍という、決定的に重要ではあるが外部者には容易に扱いたくない存在を巡る問題について概観する発表をしていただいた。以上の発表とそれに伴う議論から、現在ネパールで「包摂」を巡って議論を行う際に考慮しておくべき事象の幅が大まかに明らかになり、次年度以降、それぞれのフィールドの具体的なデータに基づいて「包摂」を巡る問題をより深く比較検討していく準備が整ったものと考えている。

「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」

内容

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。インドで起こった1990年代の経済自由化を端緒として、2000年代に入り南アジアの社会変化は更に進展した。そして、演劇、舞踊、音楽などの南アジア芸能が、多様化する情報メディアの拡大及び人の移動を通じて幅広く受容・消費される状況をもたらした。それに合わせ、芸能の実践形態や実践者の社会経済的な状況に大きな変化が生じていると同時に、海外への芸能の拡散状況や南アジアへの逆輸入という現象がみられる。本研究では、芸能実践者たちが従来の社会関係を越えたネットワークに参入することで生じる、南アジア芸能の再定義と拡張について考察を行う。現代の芸能実践者たちは、様々な観客・消費者の嗜好に応えるため、従来とは異なる美意識とパフォーマンスを身につけ、市場経済原理に合わせたマネジメントとマーケティングを行う必要に迫られている。彼らが新たな需要に応える一方で、既存の芸能形態や社会形態を維持しつつ、南アジア芸能を創発・変容させていく過程を描き出す。

代表者 松川恭子

班員 (館内) 杉本良男 寺田吉孝

(館外) 飯田玲子 岩谷彩子 岡田恵美 小尾 淳 古賀万由里 小西公大 竹村嘉晃

橘 健一 村山和之 山本達也

研究会

2012年8月25日

小尾 淳 「『神々の名を唱える』 芸能の『環流』 状況を考える——ナーマ・サンキールタナの現代的様相」

岩谷彩子 「環流する『ジプシー』 共同体——北西インドの芸能民カルベリアの踊りとコミュニティの生成」

全 員 「全体討論」

2013年1月12日

古賀万由里「バラタナーティヤムのグローバル化と揺れるジェンダー」

村山和之 「スーフィー芸能師たちの大衆音楽的世界——カウワーリーと民謡から」

全 員 「全体討論」

2013年1月13日

松川恭子 「インド、ゴア社会の演劇シアトルにみる地域的想像力の展開」

2013年2月9日

飯田玲子 「メディアの変化とタマーシャーの変容」

竹村嘉晃 「20世紀におけるインド芸能の伝播——あるマラヤーラー・シンガポール人のライフヒストリーを事例に」

全 員 「全体討論」

2013年2月10日

小西公大 「“Folk Music” が生み出されるとき——『レモン唄』にみるタール沙漠世界のモダニティ」

成果

本年度は研究会を3回開催し、グローバル化の最中にある南アジア芸能の現在について具体的な事例の検討を行った。その結果、以下の3点が明らかになった。1)南アジア系移民の動きにとまらぬ、南アジア地域外で受容されるようになった芸能が現地で変容を遂げ、南アジアに戻っていく、あるいは、更に他地域に広がっていく環流現象がみられる（小尾・古賀・竹村の発表）。その一方で、南アジア外で実践されていても、特定のコミュニティ外に受容されにくいゴア・クリスチヤンの演劇のようなケースもある（松川の発表）。言語の理解が必要な演劇と言語が理解できなくても観賞が可能な音楽・舞踊との違いを考える必要がある。2)英語能力、海外とのコネクションなどを有さないローカルな芸能実践者たちが、公的組織やプロデューサー的役割を担う外部者とのネットワークとのつながりによって、海外公演や海外から来た客へのレッスンを実施することが可能になっている。従来の社会関係を基盤とした観客層とは異なる人々の需要に応えようとする動きがある（岩谷・飯田の発表）。3)CD・DVD、テレビ、映画、インターネットなどのメディアを通じて、芸能自体が大きく変容している（村山・飯田・小西の発表）。その変化に芸能実践者たちが意識的に対応している場合もあれば、芸能実践者たちのやっていることとメディアを通じて消費される芸能が完全に違ったものになっている場合もある。

「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』**内容**

人類学、社会学、医学および保健医療分野の研究者と実践家による学際共同研究を行い、現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」のありようとそのとらえ方について考察する。具体的には、次のテーマで4回の研究会を行う。1)子どもの死別経験とグリーフ、2)文化人類学におけるこども理解やいのちのとらえ方、3)医療環境や医療資源によって規定されるこどものいのち、4)予防接種行政・感染症対策におけるこどものいのちのとらえ方。これらの研究会を通して、人類学、社会学、医学および保健医療分野におけるこども理解を深め、社会的意義のある取り組みに研究結果を応用することを目指す。

代表者 道信良子**班員** (館内) 白川千尋(館外) 岩本喜久子 神谷 元 亀井伸孝 木村晶子 波平恵美子 樋室伸顕 藤田美樹
山崎浩司**研究会**

2012年6月9日

岩本喜久子「子どもにとっての生と死の経験、子どもの死別体験もふまえて」、山崎浩司 コメント

神谷 元 「日本の予防接種・感染症対策と子どものいのち」、白川千尋 コメント

2012年10月27日

高田 明 「子どものエスノグラフィ——進化、ポリティックス、相互行為」

波平恵美子「こどものいのちと親子の関係、その変化を通しての分析」

2013年1月26日

藤田美樹 「ザンビア共和国プライマリーヘルスケアプロジェクト——踊る大保健教育」

加賀谷真梨「人類学でいじめを読む」

道信良子 「北海道利尻島で生活する児童の身体性——身体と生活環境とのかかわりから」

2013年3月9日

幅崎麻紀子「子どもの『身体の声』を理解するローカルな営み——ネパールを事例として」

道信良子 「今年度共同研究のまとめ」

成果

第1回公開研究会の岩本報告は、グリーンワークにおいてこどもの声を傾聴し、それをおとなの立場から解釈しないことの大切さを指摘した。神谷は「集団予防」という概念を用いて予防接種の社会的意味について述べた。第2回研究会の波平報告は、日本の村落社会において人のいのちは家族、親族、地域社会による承認の上に成り立っていたことを示した。高田は、アフリカのサンの養育者とこどもとのかかわりの詳細を「共同的音楽性」と「ジムナスティックス」という概念を用いて分析した。第3回研究会では、藤田がザンビア共和国における住民参加型の母子保健プロジェクトの内容と効果について、加賀谷が日本の離島の小学校におけるいじめの構造について、道信が小学生児童の身体性について離島の生活環境や学習規律とのかかわりから論じ、フィールドワークによるこども理解の可能性と課題について述べた。第4回研究会では、幅崎がネパールにおける乳幼児のケアにおいて、養育者がこどもの身体動作に応答するような文化的様式があることを指摘した。

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」

内容

現在、私たちが耳にする音楽の大半は録音されたものである。その点において、20世紀のレコード産業の発展は近代の音楽のあり方を決定づけたと言っても良いだろう。

本研究の目的は、国立民族学博物館に所蔵されているレコードを含め、日本、台湾、上海におけるレコード音楽の比較研究を行うことであり、この分野における本研究の重要性は以下の2点にある。

- 1) 1930～40年代の日本のレコード会社は、ハードウェアの仲介者、生産者でありながら、ソフトの制作者でもあった。したがって、日本、台湾、上海の関わりを調べることは、この3地域のレコード史を研究する上で、また東アジア全体におけるレコード産業の歴史を研究する上で重要となる。
- 2) 現在の音楽文化の一部は、台湾、上海の近代音楽の生成をその源とする。したがって、20世紀初頭の音楽に遡って調査し、それらの音楽を研究する際には、レコード産業に関わる側面とレコードによって作り出された音楽という側面を研究することが重要となる。

代表者 劉 麟玉

班員 (館内) 野林厚志 福岡正太
(館外) 今田健太郎 大畑(長嶺)亮子 尾高暁子 垣内幸夫 黄 英哲 西村正男
星名宏修 細川周平 三澤真美恵 四方田(垂水)千恵

研究会

2012年6月9日

三澤真美恵「植民地期台湾映画フィルム資料へのアプローチ」

康 尹貞 「The Formation of Taiwanese Theatrical Theme during 1900s-1930s.」

2012年10月8日

陳 培豊 「郷土文学の声と大衆」

今田健太郎 「日本における物語の音楽的演出についての試論」

2013年1月13日

垣内幸夫 「近現代の評弾——調(流派)の確立と伝承」

細川周平 「『世界音楽としての民謡』の反省と展望」

成果

本年度の研究会では、共同研究員による研究報告が4件と特別講師による研究報告が2件行われた。共同研究員による研究成果は、「映画と音声」と「民謡のあり方と伝承」の2つのカテゴリーに分けることができる。本報告では「映画と音声」に関する研究を中心に述べる。近年台湾で、台湾総督府の宣伝用映画が多数発見された。三澤はその複製とフィルムの整理に携わっており、それらの映画の内容がその時代の政策とどのような関わりがあるのかについて分析した。また、無声映画時代の台湾人弁士による映画解説が収録されたSPレコードが民族学博物館に所蔵されている。この資料に関しては、弁士の声に焦点を当て、弁士の解説の魅力がどこにあるのかを今後解明していく。更に、伝統的な演劇からアニメまで、様々な物語において音楽的演出は不可欠であるが、今田は日本におけるその特徴を「囃子」という語彙を手がかりに説明を試みた。欧米の音楽的演出が、物語世界の外側からコメントするようなものに対し、この「囃子」は物語世界の内側にある音・音楽というだけでなく、それを通じて人々は

物語世界に入り込み、あたかも登場人物のようにふるまう習慣とさえいえるのではないかと指摘した。

「帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界」

内容

本研究の目的は、「帰還移民」の生活世界について比較民族誌的に考察をし、「帰還」や「故郷」の概念を通文化的に検討し、概念の再検討を行うこと、同時に「帰還移民」の生活世界について実証的に検証していくことである。

一般的に帰還といった場合、同一人物の往還を意味する。移民について言えば、ある人が母国から移住先国へ行き、移住先国から母国へ戻ることを指す、つまり一世代限りの出身国への帰還である。しかし、移住先国で生まれ育ち、未だ見ぬ「母国」へ「帰国」することになった移民の二世世代以降の人々が存在する。彼ら彼女にとって「故郷」とはどこか、「帰」にはどのような含意があるのか、「帰国」してからどのように日常生活を送っているのだろうか。こういった問題群に我々の関心がある。

本共同研究では、移住先国で生まれ育った二世世代以降の移民の「帰還」に注目し、当事者の視点に立ち、「帰還」という現象がどのように捉えられているかということ考察し、個人の行動の選択にとって中心的なファクターが何であるのか、といったことを検討することを目的とする。更に、「帰還」という行為や「帰還」後の生活や文化を考察する場合、移住の目的、「帰還」の理由、祖国の側の対応、祖国と移住先国の間の政治的・経済的關係、国際関係上の問題などにより、全く異なる枠組みが必要となる。この点において、比較民族誌的研究を行うことに意義があり、これにより、多元的地域研究の重要性の提唱が期待できる。

代表者 奈倉京子

班員 (館外) 足立 綾 飯島真里子 市川 哲 大川真由子 比留間洋一 山田香織 渡会 環

研究会

2012年4月21日

奈倉京子 前回の議論の整理

市川 哲 「親族・家屋・墓地——パプアニューギニア華人にとっての帰郷にまつわる観念と実践」

松田ヒロ子「植民地台湾を生きた沖縄人——歴史・記憶・表象」

2012年7月29日

松浦雄介 「アルキの『帰還』とフランスポスト植民地主義」

足立 綾 「ピエ・ノワールの『帰還』と『故郷』」

2012年12月9日

浅川晃広 「北朝鮮帰還事業と戦後日本人概念」

飯島真里子「帰還移民の戦争体験と記憶——フィリピン引揚者を事例として」

成果

2012年度は3回の研究会を行い、ゲストスピーカーを含む6人が報告を行った。研究会の中で、まず「帰還」概念について、対象国の行政用語・法律用語での呼称や位置付けられ方、当事者の語りを通して自己認識の仕方、研究者など第三者の捉え方について整理を行い、誰が「名づける」のか、誰が「名乗る」のかに注意しながら比較検討を重ねた。加えて、植民地からの人の移動を表す場合に用いられる傾向にある「引揚」という語を「帰還」と同じ意味で使用してよいのかという問題も提起された。

次に、「入植型帰還移民」の経験に関する事例報告を通して、当事者の経験は「ホスト社会」においてどのように公共的な記憶として想起されるのか、「不可視的移民」とも呼ばれる帰還移民はいかにして可視化されるのか、集合的アイデンティティはどのように形成されるのか、といった問題についてディスカッションを行った。これに付随して、国民国家や国民がもつ両義性についても議論された。

「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」

内容

被災体験の記録化や記憶の継承は、被災者自身による体験記の執筆や第三者による聞き取り調査などによって、これまでも数多く試みられてきた。近年では、災害発生によって予期せぬ事態に遭遇した際の判断と行動に関して、一般市民だけでなく災害の現場での対応に当たった行政官や消防士などをも対象として、言語記録として残し、そしてそれを災害状況下での教訓として共有化を図るための災害エスノグラフィも実践されている。しかしながら災

害エスノグラフィでは、将来の防災や減災への貢献を目的に、災害発生直後や避難所などの非日常的な環境下での判断・行動にテーマが限定されがちである。本研究は、人びとが自然・社会環境と日々関わる中で形成される実践的、経験的な知（在来知）を、災害発生により被った影響やその再生の活動、地域社会の再建に果たす役割、さらにはそうした経験の継承に注目し、社会的・歴史的背景に照らして、解明することを目的としている。主な対象は東日本大震災における無形文化とする。

代表者 橋本裕之

班員 (館内) 林 勲男 吉田憲司
(館外) 猪瀬浩平 大矢邦宣 川島秀一 木村周平 佐治 靖 寺田匡宏 政岡伸洋
松前もゆる

研究会

2012年6月9日

橋本裕之・林 勲男 「本研究会の趣旨と実施計画」

全 員 「各自研究紹介」

林 勲男 「東北の民俗芸能・鹿踊り再生への支援と被災地復興について」

全 員 「研究会の内容について」

2012年6月10日

橋本裕之 「無形民俗文化財への支援活動」

2012年11月16日

林 勲男 「災害の記憶を残す」

橋本裕之 「東日本大震災と無形文化遺産」

吉田憲司 「記憶の継承」

2012年11月17日

日高真吾 「東日本大震災で被災した有形文化遺産の復興支援」

阿部武司 「記録DVD『3.11 東日本大震災を乗り越えて』について」

2012年11月18日

佐治 靖 「『民俗知』から『在来知』へ——災害研究への、2、3の提言」

日高真吾・吉田憲司・林 勲男 「企画展『記憶をつなぐ』について」

全 員：企画展講評

橋本裕之・林 勲男 「年行司太神楽について」

松前もゆる「東日本大震災と学生による支援活動」

2013年1月27日

木村周平 「人類学における災害研究——これまでとこれから」

総合ディスカッション

2013年2月15日

政岡伸洋 「民俗行事の復活とは何だったのか——宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の春祈祷の場合」

加藤幸治 「脱・文化財レスキュー——救助・復旧活動から地域研究へ」

政岡伸洋・加藤幸治 「東北学院大学博物館・文化財レスキュー資料および関連施設の収蔵設備等について」

文化財レスキュー資料・関連施設の収蔵設備等に関する討論

2013年2月16日

川島秀一 「山口弥一郎の三陸津波研究」

成果

2012年度は4回の研究会を開催した。有形・無形文化遺産の被災状況への対応について実践的な活動が報告され、被災地復興や生活再建プロセスの中での文化遺産のもつ意味・役割について意見交換をした。こうした支援活動の成果の記録化や大学教育での意義についても実践報告がなされた。また、災害の記憶の継承の在り方や媒体をめぐっては、神社の位置や津波碑を例にした議論がなされた。東北の被災地での以上のような具体的な実践事例を踏まえて、在来知をめぐりこれまでの議論や文化人類学における災害研究へのアプローチについての報告があり、今後の研究の展開の可能性について議論された。東北太平洋沿岸被災地の文化と災害という点で、同地域をフィールド

としている政岡が、民俗行事の復活の意味について考察を巡らし、川島が山口弥一郎の研究からキーワードを抽出し、今後の研究で注目すべき問題を提起した。

「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」

内容

本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。代表者によると、彼らの歴史は、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できる。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。具体的な問いは、時間軸に沿って1) 狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地において自給的に暮らしていたのか、2) どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係がみられたのか、3) 前近代の国家形成（ムガル帝国と林産物、コンゴ王国と象牙など）や植民地形成にともない狩猟民はどのように対応したのか、4) 沈香などの森林産物や象牙を求める中国経済の増大などグローバル化が進むなかで、狩猟民社会にどのような変化がみられたのか、などである。これら4つの個別の問題を解くことによって、これまでの都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することが研究会のねらいである。

代表者 池谷和信

班員 (館内) 信田敏宏

(館外) 伊澤絃生 稲村哲也 大石高典 大橋麻里子 小谷真吾 小野林太郎 加藤裕美
金沢謙太郎 小泉 都 佐藤廉也 鮫島弘光 関野吉晴 高田 明 鶴見英成
中井信介 那須浩郎 服部志帆 増野高司 松井 章 松浦直毅 八塚春名
山本太郎

研究会

2012年11月3日

池谷和信 「共同研究会の目的、方法、今後の計画」

理論・生態・歴史

佐藤廉也 「生業はヒトの生涯をどれだけ規定するか？」

鮫島弘光 「ボルネオ熱帯林の哺乳類」

鶴見英成 「北部パルー最古の神殿遺跡群にみる経済活動の特徴」

資源利用

高木 仁 「カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲——ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例」

辻 貴志 「フィリピンにおける自然利用活動と資源利用」

小泉 都 「ボルネオのプナンの植物知識」「狩猟採集民が農耕を始めるときの内在的困難——ボルネオのプナンの例」

八塚春名 「タンザニアの多民族混住地域における生業と資源利用——サンダウェとハツツアの比較から」

民族間関係

加藤裕美 「ボルネオの狩猟採集民シハンの資源利用と民族間関係」

中井信介 「タイの農耕民からみた狩猟採集民像」

大石高典 「貨幣経済浸透下のカメルーン東南部における農耕民・狩猟採集民関係」

国家・商品経済

小谷真吾 「商業的狩猟採集民の可能性——マレーシア半島部オランアスリの事例から」

金沢謙太郎 「サラワクの熱帯原生林をまもる人びと——バラム河上流域の狩猟採集民と農耕民」

信田敏宏 「サカイ、アボリジニ、オラン・アスリ——統治される森に生きる「狩猟採集民」

服部志帆 「森と人の共存への挑戦——カメルーンの熱帯雨林保護と狩猟採集民バカの文化の両立に関する研究」

松浦直毅 「アフリカ熱帯林の狩猟採集社会の現代的変容」

増野高司 「東北タイの山村における漁撈活動の実態把握に向けて——ラオ族の事例」

2012年11月4日

那須浩郎 「農耕と環境——文明と環境に関する植物考古学研究」

山本太郎 「人類、感染症、文明」
稲村哲也 「熱帯高地と狩猟採集民」
松井 章 「考古学と狩猟採集民」
コメント：那須浩郎

2012年12月9日

池谷和信 「問題提起——熱帯アメリカ低地」
高木 仁 「カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲——ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例」
コメント：池口明子
山口吉彦 「アマゾン川のカメと人」
伊沢紘生 「アマゾンの自然と動物」
コメント1：鮫島弘光
コメント2：大石高典
関野吉晴 「南アメリカ熱帯低地の自然と人」
コメント1：大橋麻里子
コメント2：佐藤廉也
総合討論

成果

今年度の研究会は、2回開催した。1回目は、メンバーが人類学を中心として考古学、地理学、生態学、社会学、医学などの専門家から構成されるので、研究会の目的やキー概念などの共有化に努めた。そして、申請者によるわが国の研究の動向が概観されて、世界の研究と比べての違いが認識された。また、複数の異なった分野から「狩猟採集民」をどのように規定しているのか、狩猟や農耕などの活動や社会関係からみて「狩猟採集民」と農耕民ではどこが異なるのかなど理論的な問題が議論された。

2回目は、3つの大陸のなかで1つの大陸に焦点が当てられた。例えば、国内でもっとも研究の遅れている南アメリカにおいて、どのような「狩猟採集民」が暮らしてきたのか、彼らと農耕民との生存基盤での違いや類似性はどのようなものであるか、両者の共生関係は存在してきたのかなど、アジアやアフリカの研究では説明できないものを見出すことができた。これによって、熱帯の狩猟採集民像の大きな転換が必要になると考えている。

「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」

内容

本研究の目的は、アメリカやオセアニア、アジア、アフリカ、ヨーロッパなど世界各地における贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することである。また、それによって贈与や交換、分配などの概念と、モースやサーリンズ、テスタールらが提案した説明モデルの内容や有効性を検証する。さらに、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配慣行がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

本研究は、学際的な比較検討を通してこれまでの中心的な人類学概念やモデルを検証することにより、それらの有効性と限界を把握し、理論的な展開につなげることを目指す点に意義がある。さらに、贈与や交換、分配に関する通文化的かつ学際的な研究は、個別の行為の背後にある特定のタイプの社会や人類に共通する側面を解明する手掛かりとなり、新たな人間観や社会観を提起できる可能性がある。

代表者 岸上伸啓

班員 (館内) 小川さやか 小林繁樹 丹羽典生 藤本透子
(館外) 井上敏昭 小田 亮 風戸真理 佐川 徹 立川陽仁 友野典男 中川 理
中倉智徳 仁平典宏 比嘉夏子 深田淳太郎 丸山淳子 溝口大助 山極壽一
山口 睦 渡辺公三

研究会

2012年10月7日

岸上伸啓 「趣旨説明と問題提起」
全 員 「検討および各自の研究紹介」
全 員 「今後の予定の検討」

2013年1月20日

岸上伸啓 「問題提起」
 小林繁樹 「贈物交換活動と地域社会」
 深田淳太郎 「コメント」
 溝口大助 「贈与論と供犠論——『聖なるもの』と『霊的なもの』を手がかりに」
 渡辺公三 「コメント」
 全体討論

2013年3月3日

岸上伸啓 「問題提起」
 立川陽仁 「クワクワカククのポトラッチと贈与・分配」
 井上敏昭 「グイッチン社会における分配・相互扶助・贈与——資本主義国内に包含された狩猟社会における意義について」
 全 員 「次年度の研究計画の検討」

成果

第1回目の研究会では岸上がモースに端を発する贈与論の系譜を概略しつつ、クラ研究、ポトラッチ研究、狩猟採集社会に関する分配研究について概略的な全体像を提示し、分配・交換・再分配・贈与などの概念を再検討するための問題の共有化を図った。

第2回目の研究会ではクラ研究とモースの贈与論をテーマとした。小林がクラの概要とシアン諸島の贈物交換について報告し、検討を加えた。溝口はモースの贈与論を供犠論との関係から論じ、レヴィによるモースへの学問的影響の可能性について指摘した。小林は、クラや贈物交換は社会的活動である点を強調するとともに、マリノフスキーのクラ研究をワイナーの女財の研究を紹介しながら批判した。

第3回目の研究会ではクワクワカククのポトラッチとグイッチンのポトラッチを検討した。立川は、ある時期、社会的序列を決定するために競争的なポトラッチが行われたが、ポトラッチ自体は一方的な贈与である点を指摘した。一方、井上は現在のポトラッチがきわめて先住民社会の内的な社会性や対外的な政治性と結びついている点を強調した。

「肉食行為の研究」

内容

本研究の目的は、人類の採食行動の構成要素の1つである肉食に焦点をあて、その生態学的適応と文化的位置づけとの関係、さらに今日のグローバル消費社会のなかで変質してきた人類の肉食行為の動態を明らかにし、将来の展望を与えることである。人類は進化の過程において、肉食と菜食の双方に生態学的に適応するとともに、それを文化的な行為として社会の中に位置づけてきた。食肉の分配や共食、供犠における利用、肉食の忌避や規範化は、人類学が明らかにしてきた肉食の重要な社会的機能である。食肉の生産や流通が産業化された20世紀後半から、肉食は先進国社会の中で日常化される反面、動物から食肉を得るという光景は希薄となった。こうした社会的背景のもと、欧米では「動物解放論」に代表される倫理的なアプローチを中心に、肉食の是非を含めた動物の権利をめぐる議論が盛んとなった。しかしながら、これらは功利主義と義務論が中心で、異なる社会的、文化的脈絡の中で人間と動物との関係が構築されてきたことについては必ずしも注意がはられていない。本研究では、肉食とそれに関連する行為の背景にある複雑で多様な問題群を明らかにしたうえで、これからのグローバル消費社会における肉食のありかた、さらには、人間と動物との関係のありかたに新たな視座を作り出すことをねらいとする。

代表者 野林厚志

班員 (館内) 池谷和信 岸上伸啓
 (館外) 伊勢田哲治 五百部 裕 鵜澤和宏 内澤句子 梅崎昌裕 永ノ尾信悟 大森美香
 小川 光 加藤裕美 筒井俊之 林 耕次 原田信男 本郷一美 山田仁史

研究会

2012年11月23日

野林厚志 「肉食行為の研究」共同研究の趣旨と見通し
 参加者全員 「自己研究紹介、研究会の方向性についての意見交換」

2012年3月16日

五百部 裕 「ヒト上科における肉食行動の進化」

池谷和信 「現在の狩猟採集民の狩猟行動と肉食——アフリカの事例を中心として」

2012年3月17日

鶴澤和宏 「肉食行動と人類進化——先史人類の食性変化と身体・行動・社会の共進化」

参加者全員 「総合討議、次年度研究計画の策案」

成果

第1回目の研究会合では、研究代表者の野林が、研究計画全体の説明と研究課題の背景となる問題群の予察を行った。それをふまえたうえで、参加者が全員による自己研究紹介ならびに本研究会の問題意識との接合点について説明し、研究計画全体の目的ならびにそれぞれの役割分担の確認を行った。第2回目の研究会合では、肉食行為を人類進化史の観点から議論することを目的とし、霊長類、初期人類、狩猟採集民の肉食行為についての研究発表と議論を行った。霊長類の狩猟対象の選択性や食肉獲得そのものが日和見的であるのにたいし、人間の狩猟も含めた食肉獲得の手段の多様性が明らかとなり、肉食が「計画的」「既知」なる行為ゆえに人間が意味付けをする機会が増えていくという、肉食の生態学的側面から文化的側面への変換点がうきあがった。進化的な視点から考えた場合、肉食が生態学的な適応をこえて、生物に変化をもたらせる（具体的には「人類」への進化と「大脳化、人間化」）1つの要因となったシナリオは、肉食のインパクトがいかに強いものであるかがあらためて示されたと言える。草食動物の肉食行動や肉食動物の肉食による変化（進化上）についても今後の問題群に加え、比較進化的にもとらえる必要があることが明らかとなった。

「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」

内容

本共同研究は、2009～2011年度に実施した科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究——視覚障害者を対象とする体験型展示の試み」を発展的に継承し、人類学的視点から「触文化」（さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴）について考察することを目的としている。上記科研プロジェクトの成果としてまとめられた廣瀬編『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社、2012年5月）は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の入門書、実践事例集と位置づけることができる。この本の内容を敷衍する形でユニバーサル・ミュージアム、さらには21世紀の多文化共生社会の具体像を指し示すための理論構築を試みるのが本研究の狙いといえよう。これまでの人類学においては、視覚（映像）・聴覚（音響）などに比較して、触覚に注目する研究は少なかった。本研究では、博物館展示を活用した“手学問”理論を切り口として、「触文化」にアプローチする。

代表者 廣瀬浩二郎

班員 (館外) 石塚裕子 及川昭文 大石 徹 大高 幸 小山修三 五月女賢司 鈴木康二
原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 増子 正 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2012年11月11日

廣瀬浩二郎 「共同研究の趣旨と目標」

石塚裕子 「触る街並み観光の効果に関する基礎的研究」

大石 徹 「都市のモニュメント調査から」

堀江典子 「公園の博物館的機能とユニバーサルデザイン」

山本清龍 「野外リクリエーションの質を問う」

2013年3月2日

原 礼子 「湯浅八郎と民芸品コレクション」

堀江武史 「文化財の修復と複製——府中工房の活動から」

2013年3月3日

尾関育三 「視覚障害者の大学進学——過去・現在・未来」

高橋玲子 「体験発表Ⅰ 1980～1990年代の状況」

安原理恵 「体験発表Ⅱ 1990～2000年代の状況」

増子 正 「インクルーシブ教育の未来を展望する」

成果

本共同研究は、「1)ユニバーサル・ミュージアムの普及をめざして——“手学問”の確立」「2)博物館から社会へ——“手学問”の展開」の2つを課題としている。まず今年度の第1回研究会ではメンバーの自己紹介（研究テーマの確認）ののち、1)の課題について議論した。「視覚障害者の美術鑑賞」に関して活発な意見交換がなされ、「さわる絵画＝二次元表現の三次元への翻案」の研究の必要性（可能性と問題点）が確認できた。

第2回の研究会では2)の課題を意識し、「高等教育のユニバーサルデザイン化」に関する体験発表を元に討論した。障害学生支援という福祉的な文脈でなく、視覚障害者の触覚活用術（手学問）を積極的に教育現場に導入してみよう、触文化理論は大学教育を活性化する潜在力を持っているはずだ、というのが研究会を企画した意図である。研究会のディスカッションを通じて、情報技術の進展により視覚障害学生の学習環境が飛躍的に改善されたこと、その一方で学生と大学の教職員、ボランティアの関わりが希薄化していること、個々の学生のニーズへの対応が難しくなっていることなどが浮き彫りとなった。触文化論から高等教育を問い直す試みは、来年度以降も継続する予定である。

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討」

内容

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなのは、アイヌが1000点以上、ウイルタで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは、素材や製作技法などに伝統的な特徴をよく残しており、物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。

ただ、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなのが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。

本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同で研究をおこない、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から終戦までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

代表者 齋藤玲子

班員 (館内) 近藤雅樹 佐々木史郎
(館外) 大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2012年10月20日

齋藤玲子 「趣旨および民博所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の概要説明」

全員・自己紹介と研究テーマについて

2012年10月21日

全員・自己紹介と研究テーマについて

研究計画打ち合わせ

2013年1月18日

齋藤玲子 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料とその付随情報に関する検証」

2013年1月19日

齋藤玲子 「東京大学理学部人類学教室旧蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料とその付随情報に関する検証」

大矢京右 「馬場 脩の研究・収集活動」

小西雅徳 「石田収蔵資料——特に北方民族調査について」

加藤 克 「東大人類学教室台帳とみんぱくデータベースの照合結果——今後の検討課題」

2013年2月26日

齋藤玲子 「民博所蔵の鳥居龍蔵収集アイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料について」

高島芳弘 「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の概要」
鳥居龍蔵収集のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の実見と討論
田村将人 「鳥居龍蔵のサハリン・樺太調査に関するいくつかの資料」
手塚 薫 「千島列島の考古学——鳥居の研究成果をどのように活用すべきか」
今年度のまとめと次年度研究計画打ち合わせ

成果

2012年度は3回の研究会を開催し、民博のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の概要を把握し、役割分担などを検討するとともに、主な収集者の足跡などの研究発表をおこなった。

資料については、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料に関する目録や出版物の情報と現在のデータベースの比較をおこなった。また、資料の実見により、資料そのものや貼付された紙などに書かれた情報があるが、一部はデータベースに反映されていないことも確認した。

収集者については、岡 正雄とともに昭和12~13年に樺太などで約170点の民具を収集した馬場 脩、明治~昭和初期にかけて樺太での調査と収集を重ね、ノートや日記などの関連資料が残る石田収蔵、千島と樺太で貴重な資料収集と研究成果を挙げた鳥居龍蔵の研究歴や調査収集の足取りについての発表があった。これらに基づいて討論をおこない、今後の課題を検討した。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」—— 内容

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類史的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠軸と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

代表者 小野林太郎

班員 (館内) 飯田 卓 印東道子
(館外) 赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 長津一史
橋村 修 山形真理子 山口 徹

研究会

2012年11月11日

小野林太郎「共同研究会の目的、方法、今後の計画、メンバー紹介」
長津一史 「東南アジア海域研究が拓く可能性——海民論と境域論を手がかりに」

2012年11月12日

小野林太郎「東南アジア海域からオセアニア海域世界の海民とネットワーク社会——先史時代における事例の検討」

2013年1月29日

片桐千亜紀「沖縄諸島における更新世——完新世期の人類史と資源利用」
田中和彦 「フィリピン諸島における更新世——完新世期の人類史と資源利用」
山口 徹 「オセアニアにおけるサンゴ礁の発達と人類の資源利用史」

成果

本年度の主な研究成果としては、2回の共同研究会の開催があげられる。このうち1回目の共同研究会は2012年の11月11日から12日にかけて開催し、研究代表者である小野より本研究会の目的や方法、今後の計画について各メンバーに紹介した上でメンバー紹介を踏まえながら、各メンバーがどのようなテーマ、方法、時間・空間軸より本研究に貢献できるかを検討することができた。また1回目の共同研究会では、民族誌的な時間軸の事例としてメンバーの長津による研究事例の紹介と総合討論を行い、対する考古学的な時間軸の事例として小野による研究事例の

紹介と総合討論を行った。

また2回目の共同研究会は2013年1月29日に開催し、この研究会では考古学的時間軸による各海域の資源利用に関する研究事例の紹介と総合討論を目的とし、沖縄海域に関する事例としてメンバーの片桐、フィリピン海域の事例として田中、オセアニア海域の事例として山口による研究発表を踏まえた上で、各海域における共通性や独自性について検討することができた。

『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』

内容

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウインの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルタナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という2つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを旨とする。

代表者 土佐桂子

班員 (館内) 白川千尋 田村克己
(館外) 飯國有佳子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子 高谷紀夫 田村慶子
テツテツヌステイ 松井生子

研究会

2012年10月14日

土佐桂子 「統制」と公共性の人類学的研究——趣旨説明

全 員 今後の研究計画についての討論

2013年1月26日

テツテツヌステイ 「軍事政権末期におけるヤンゴン市内の動き——『批評空間』の再編をめぐって」

田村克己 『『ビルマ式社会主義』下の農村社会、そしてその後』

総合討論

成果

本研究会では、各研究者のフィールドにおける従来の研究や民族誌を、統制ないし公共性といった観点から再検討することから始めた。2012年度は時代の幅も考慮しつつ、どのような議論が生じうるかといった点を考察した。社会主義政権下では、厳しい物資・情報が統制されたなかで、人類学的調査そのものの政治性をもとらえつつ、「社会主義」を実践、経験としてとらえる視点の重要性が指摘できる（田村）、また、「ムラ」の再考も必要となろう。政治の末端でもあり、一種の「公共空間」ともいえるが、他方では、ネットワークとムラの境界との関係など、今後考察すべき重要な視点が多々存在する。一方、近年では、ネットや新たな情報機器利用に伴う「空間」やそのなかに存在する公共性をいかにとらえるかも重要な課題となる。軍事政権下で物資の統制はかなり解除されたものの言論統制は厳しく続いた。一方ネットの使用は2000年代半ばから飛躍的に拡大し、国内のインターネット識字層、さらにはディアスポラでもある難民、海外移民、あるいは留学者等が意見交換できる「批評空間」が生じた（テツテツヌステイ）。今後こうした「批評空間」を射程に入れた公共性、民主化の広がり、影響関係といった考察も必要となろう。

『現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して』

内容

本研究の目的は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に注目した、現代消費文化に関する人類学的研究の新しい可能性を提起することにある。具体的には、アフリカにおける中古品やコピー商品、タイに輸入

される日本アニメ、ガーナやラオスのフェアトレード製品、ネパールの宝石、既製服化される中国ミャオ族の民族衣装、トルコの手織り絨毯、エジプトに浸透する空手や化粧品、学校教育、鯨肉の流通・消費における日本人論の消費といった多様なモノの流通・消費にかかわる事例報告をおこない、以下の2つの課題に取り組む。第1に、先進諸国・新興国・研究対象地域のあいだをモノが動くプロセスと、そこでのモノの価値変化を明らかにし、グローバルな経済システムの再編・再創造のあり方を考察する。第2に、モノの流通・消費の実践にみられる研究対象地域の自己表現のあり方やアイデンティティの変容、新しい環境観・ジェンダー観、階層化や世代間関係を析出し、研究対象地域間、および日本をふくむ先進諸国におけるそれらとの共通性・異質性を考察する。

代表者 小川さやか

班員 (館内) 相島葉月

(館外) 牛久晴香 田村うらら 鳥山純子 箕曲在弘 宮脇千絵 若松文貴 渡部瑞希

研究会

2012年12月23日

小川さやか 「(趣旨説明) 現代消費文化をめぐる人類学的研究」

共同研究員参加者全員 「これまでの研究と本共同研究会での研究テーマ」

全体討論

2013年2月16日

前回欠席者 「これまでの研究と本共同研究会での研究テーマ」

小川さやか 「現代消費文化をめぐる人類学的アプローチの検討——消費社会論との違いに着目して」

小川さやか 「非正規品の世界からみる現代アフリカの消費文化」

若松文貴 (ハーバード大学) 「日本における鯨肉の流通・消費と文化ナショナリズム」

全体討論

成果

第1回の共同研究会では、消費を対象とした人類学的調査・研究の困難性として、生産者や流通業者とは異なり、消費者はモノを消費するにあたり必ずしもまとまりやコミュニティを形成しない点について確認し、これを打破する人類学的なアプローチとして、1)モノの移動とその過程におけるモノの価値変化に着目するという視点、2)日常的な消費を通じた自己や集団のアイデンティティの構築・変容に着目する視点、3)モノが消費される場面におけるモノと人のエージェンシーの相互関係を微細に観察するという視点について検討した。これらの議論を踏まえ、『民博通信』No.141に本共同研究会の紹介を投稿した。また、個人発表として小川が第1の視点および消費者が商品に付与する価値・実践を生産者や流通業者が商品に付与する価値・実践との連続性のうえで捉える視座について、また若松が第2の視座について、鯨肉をめぐる商品フェティシズムと文化ナショナリズムとの交差を検討する報告をおこなった。

「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」

内容

グローバル化の進展に伴い世界各地で地域的特色をつくりだす動きが顕著になっているが、なかでも自然、建築、公園などの景観は、現地の歴史文化や民族文化と結合し、その特色を示すランドマークとなっている。しかし、こうした景観と文化のポリティクスの関係性について、我が国の人類学はいまだに十分な議論を展開しておらず、景観人類学という分野も定着していない。本共同研究は、多様な行為主体による景観への意味付与や競合に焦点を当てることで、景観研究における人類学の意義と役割を考察する。

本共同研究は具体的に、主に2つの視点から、世界各地における景観形成のメカニズムを検討する。まず、地方政府、プランナー、開発業者、旅行会社、マス・メディアなどが、紋切型の現地文化を可視化し、現地らしい景観を物理的に構築していく「視覚化」の力学1)について探求する。次に、そうした景観が住民、観光客、芸能集団の身体経験に基づき再解釈されていく「身体化」の過程2)を、民族誌的記述により探求する。さらに、この2つの枠組みを統合する理論モデル3)を導き出すことで、日本における景観人類学の促進を図ることを、本共同研究の目的とする。

代表者 河合洋尚

班員 (館外) 石村 智 大西秀之 小西公大 小林 誠 里見龍樹 椿原敦子 土井清美
安田 慎 辻本香子

研究会

2012年10月14日

趣旨説明

河合洋尚 「景観人類学の理論と射程」

全体ディスカッション 「景観人類学の方法論、課題、可能性について」

今後の計画について

成果

景観人類学をめぐる課題を認識し、議論の土台をつくるため、特に1990年代欧米諸国で展開されてきた議論を整理し、討議した。具体的には、景観人類学の基本的視座、概念や台頭した理由、研究史、射程について発表し、現段階における問題点や課題について、社会文化人類学、生態学、考古学などの視野から議論した。

景観人類学は、ここ20年間多くの研究成果を生み出しているが、とりわけ景観の「視覚化」と「身体化」をめぐる2つの方向に乖離している。しかし、これらの方向性はいずれも認知論に偏重しているため、他分野との対話を促進し、また、景観人類学の脱領域的な方向性を模索するためには、物質論をより重視すること、さらに認知性と物質性の間の関係性をより明確にしていく必要があることを確認することができた。他方で、この研究会では、「視覚化」と「身体化」をめぐるアプローチだけでなく、両者の相関関係を探求する第3のアプローチに取り組んでいく課題も確認され、地域的な多様性、および時間的な変遷などを考慮した研究をより促進していく方向性が、理論と事例の両面で示された。

『『国家英雄』から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生』

内容

現代インドネシアでは、中央の民主化と地方分権化政策に呼応した地方の小地域社会や民族集団が、独自の文化や歴史を創生し、国家レベルの認証制度を活用しながらその権威づけを目指す動向が顕在化している。本研究では、これらの諸動向を複数の地域・民族間で比較検討することで、対象社会が国家中央との関係を模索しながら文化的自己呈示を行い、そこから「地方」や、特定地域への帰属によらない「民族」といった人間集合が生成、再生する動態を、文化、歴史、政治、開発など複眼的に考察する。具体的には、本来は国民統合の手段であった「国家英雄」認定制度に注目することで、1) 近現代の国民国家の形成過程を再検討し、2) 国民統合とは異なる次元で進む「国家英雄推戴運動」による地域振興や文化創生の現状、3) その動機と背景となる各対象社会の歴史過程を共通の問題として探求しながら、脱中央集権を標榜する国民国家と「地方」や「民族」との関係を、グローバルな政治経済的状況や民主化動向を視野に入れながら明らかにすることを目指す。

代表者 津田浩司

班員 (館外) 太田 淳 岡本正明 小國和子 金子正徳 津田浩司 中野麻衣子 見市 建
森下明子 森田良成 山口裕子 横山豪志

研究会

2012年12月23日

津田浩司 「共同研究会趣旨説明」

金子正徳 「データにみる『国家英雄』」

山口裕子 「東南スラウェシにおける『国家英雄』推戴運動の事例」

津田浩司 「インドネシア近現代史の再考と国家英雄」

佐々木拓雄 「“Pahlawan Nasional” をめぐる言説」

成果

本年度は研究集会を1回開催した。各発表からは、国家英雄という制度を媒介としながら、地域社会・少数民族・宗教団体そして国家が、自らの過去・現在・未来を創造する社会文化動態や、その論理が明らかになった。議論を

通じた成果をいくつか挙げるならば、1) 国家英雄の地理的な偏差や特性の時代変化、2) ナショナリズムの論理が、抵抗の称揚から統治・馴化へと変容したこと、3) 周辺地域社会における転倒した周辺意識という、中央対地方の構図では説明できない動機が存在、4) 国家英雄の語りと公定のナショナル・ヒストリーにおける事後の必然性や目的論的語りという共通性、5) 国家英雄が、イスラーム急進派には「イスラームの闘士」という英雄価値を矮小化するものである一方で、穏健派には信仰とナショナリズムとを接合する装置として機能すること、6) エリート主義的な国家英雄像への一般大衆の抵抗感、7) スハルト体制期におけるナショナリズムの語り为国軍を支持勢力としたため武力闘争に中心をおいたという事実、などが挙げられる。

人間文化研究機構連携研究

「人間文化資源の保存環境研究」

代表者：園田直子

目的

本研究は、これまで人間文化研究総合推進事業で進めてきた「文化資源の高度活用：有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成」（2006～2008年度）、「保存環境解析法の再検証」（2009年度）の研究成果を発展的に継承し、より広範囲な資料群を対象とした保存環境研究を行うことを目的としている。研究対象はモノ資料にかぎらず、映像音響資料、図書文書資料、さらには電子データなど多様な形態から構成される研究資源に広げ、それぞれの形態に応じた保存環境モデルを構築するための保存環境分析システムを研究開発する。

成果

1) 研究成果の概要

本研究等で開発してきた保存環境分析システム（生物生息調査分析システム、温度・湿度分析システム）を、より汎用的・効率的に使用できるように改良した。この改良をもって、現時点で必要とされている操作性の問題はほぼ解決できたと考える。今後は基盤機関の国立民族学博物館だけでなく各連携機関においても、保存環境分析システムを資料管理の業務、そして保存科学研究で利活用できる段階にはいった。

2) 論文名

園田直子・日高真吾・和高智美・河村友佳子

2012 「過去20年間の生物生息調査からみる捕獲虫の推移と傾向——国立民族学博物館でのゾーニング別分析」『文化財保存修復学会第34回大会 in 東京発表要旨集』（日本大学文理学部百周年記念館、6月29～30日）pp.296-297。

Sonoda, N.

2012 Preventive Conservation for Museum Collection. In N. Kamba and M. Menu (eds.) *French-Japanese Workshop "Science for Conservation of Cultural Heritage"*, pp.143-150. Paris: Hermann.

3) 研究会・シンポジウム等

2012年11月12日 2012年度第1回研究会（東京国立博物館）

園田直子 「2012年度版温度・湿度分析システムの概略——操作性向上に向けた改良その②」

河村友佳子「2012年度版温度・湿度分析システムの操作説明」

神庭信幸 「東京国立博物館の環境制御に関する取り組み」

東京国立博物館保存修復関連施設の調査

4) その他

その他のシンポジウム、研究会、講義等

2012年10月7日 2012年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）公開シンポジウム「市民とともにミュージアム IPM」、一橋講堂

園田直子・和高智美「国立民族学博物館における IPM の実践とその協力体制」

日高真吾ほか10名（ディスカッション）「ミュージアム IPM の実践と課題」

2012年11月2日 NPO 法人 大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」、国立民族学博物館

園田直子「みんなの舞台裏」

2012年12月10日 東京藝術大学大学院美術研究科 集中講義、東京藝術大学

園田直子「博物館における予防保存」

2013年1月27日 国立民族学博物館 機関研究<マテリアリティの人間学>「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究、国際ワークショップ『民族学資

料の保存と修復：博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材の修復』、国立民族学博物館
園田直子「予防保存と資料管理：国立民族学博物館の事例から」
橋本沙知「露出展示における資料の事故分析」
和高智美「国立民族学博物館における生物生息調査の捕獲虫の推移と傾向」
河村友佳子「温湿度モニタリングの現状と制御レベル」

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

代表者：福岡正太

目的

一定の視点から芸能の動きと音を記録し、再生することができる映像は、第三者に具体的に芸能の姿を伝えることができる。その性質により、学術資料であっても、多くの人に活用され、芸能のイメージを広めることにひと役買う可能性も持っている。一方、芸能の関係者にとって、外部の人間が撮影編集した映像を見ることは、外からのまなごしを意識し、自己イメージを再形成する機会ともなる。この研究は、映像による芸能の民族誌的記録が、芸能を支える人々や研究者、映像を視聴する第三者など、立場を異にする人々のあいだにどのような相互関係を築き、どのように芸能の上演と伝承に影響を与えうるのかを実践的に明らかにし、学術的な民族誌映像の作成および活用の望ましいあり方を探ることを目的としている。

成果

1) 研究成果の概要

これまでの研究活動により、硫黄島のような小規模なコミュニティ、徳之島のような複数の町からなる地区、東南アジアのような大きな規模の地域など、調査記録の対象とする社会の規模や性質により、映像記録作成における視点や有効な映像活用の方法が異なりうることが明らかになってきた。硫黄島については、これまで中心的に調査記録をおこなってきた八朔太鼓踊りに加え、今年度は盆行事と九月踊りと呼ばれる芸能の調査撮影をおこなった。2013年度に、地元の関係者の意見を入れながら映像のとりまとめをおこなう予定である。徳之島については、本年度にてほぼ当初想定していた調査撮影を終え、最終的な映像のとりまとめ段階に入っている。ただし、地元教育委員会からの要請があり、教育委員会との共同研究という形で、今後追加調査と撮影をおこなう可能性も協議している。また、地元の文化施設において流す映像を今年度末をめどに作成している。東南アジアにおいては、主に科研費より、本年度から本格的な調査と撮影を開始した。なお、刊行予定であったシンポジウム報告書は、まだ一部の原稿が揃わないため、2013年度に印刷を見送った。

2) 著作物名

笹原亮二編『チャンメラを作る』（DVD付）、発行：国立民族学博物館音楽展示プロジェクトチーム、人間文化研究機構連携研究プロジェクト「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」2012.10

3) 論文名

現在とりまとめ中

4) 研究会・シンポジウム等

① 「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」研究会

開催日：2012年7月8日

場 所：国立民族学博物館 第3演習室

内 容：研究発表「映像記録事業を伝承の支えとするために——無形民俗文化財記録映像の事例から考える」俵木 悟（成城大学）、「徳之島における芸能の映像記録作成について」笹原亮二、「ジャワ島とバリ島におけるゴング製作と流通に関する調査について」梅田英春（静岡文化芸術大学）ほか。

② 東洋音楽学会西日本支部第258回定例研究会「八代妙見祭のチャンメラの復元製作をめぐる」

研究発表「チャンメラを作る」笹原亮二、「チャンメラの唱歌」寺内直子（神戸大学）、「チャルメラ系楽器の分布と演奏の場」寺田吉孝、「芸能の映像記録とその活用について」福岡正太

5) その他

笹原亮二監修、マルチメディアコンテンツ「徳之島の唄と踊りと祭り」、2013年（これまでの徳之島で撮影した映像を整理編集したコンテンツ。昨年度製作のものに新たな映像素材を加えて発展させたもの）

人間文化研究総合推進事業

『筌』を通してみる学際的研究

代表者：近藤雅樹

目的

渋沢敬三により開拓された漁撈用具の調査研究、古文書の発掘の一環として、漁撈民のみならず広く農民による河川池沼にも供された筌の研究は、第二次世界大戦の激化によって中断を余儀なくされた。今日まで、その体系的な研究はなされてこなかった。本研究は戦時下にもかかわらず遂行しようとした渋沢と、彼が主宰するアチックミュージアム同人たちの遺業を、国立民族学博物館に伝世された実物資料ならびに現今の筌製作・筌漁の調査を通じて、筌の形態分類、用途、用法、食物禁忌伝承、伝説や、絵画・文芸作品に表された史資料を、多角的な観点から調査して学際的に融合した成果を獲得しようとするものである。

成果

1) 研究成果の概要

国内において製作使用されてきた筌類の概略分布状況が判明した。

2) 論文名

執筆中

3) 研究会・シンポジウム等

班員がそれぞれ滋賀県、栃木県、宮城県、熊本県、広島県、沖縄県の筌を調査、分析した。埼玉県では班員による合同調査をおこなった。また、2013年秋の渋沢コレクションに関する特別展示で、成果の一部を展示公開する予定である。

4) データベース等の公開

予定なし。

「画中画の世界」

代表者：宇田川妙子

目的

「画中画」とは、なんらかのテーマをもって描かれた絵画作品の中に背景あるいは点景として描かれたものである。日本画であれば、絵巻物・屏風・襖絵、衝立などの調度、錦絵・引札類に描きこまれた掛軸、襖絵、屏風などがある。欧米諸国では、王侯貴族とその家族の肖像画や静物画などの背景にあしらわれた額絵・タピストリー・装飾家具、また飾戸棚に並べられた絵皿などがある。それらの中には、オリエンタリズムなどが反映している作品も多々あるが、異国趣味以外にも、さまざまな幻想的・牧歌的な風景や神話の場面が描かれている事例も少なくない。

「画中画」は、絵画本来の主題とどのようなかかわりをもって描かれるのだろうか。この連携研究は、従来美術史の範疇で論じられてきた諸説に拘束されることなく、学際的な観点から自由な着想により考察し、意見交換して成果を得ようとするものである。意図的な暗喩、あるいは格別の意図はなく偶然に描きこまれたものだったのか、いずれの場合もあり得る「画中画」は、時代・地域・階層を問わず人びとの日常的な「あこがれ」や「祈り」などを可視化し、自己実現の擬似行為を図ろうとした、その点を、いみじくも描き出していると考えられる。

如上のように、この連携研究では「画中画」のさまざまな態様に着目し、新研究領域の創出をめざして多面的なアプローチを試みるものである。

成果

1) 研究成果の概要

日本の資料では絵巻物を中心に古典の中に表現されている画中画の検索データを整理中である。西洋画においても古典作品の中から検出作業をすすめており、画中画の多様性と多義性がおおむねあきらかになった。

2) 研究会・シンポジウム等

国立民族学博物館で7月24日、11月9日、2月12日の3回の研究会を開催した。また、最終年度に公開研究フォーラムを開催するための準備を進めている。

3) データベース等の公開

予定なし。

「手話言語と音声言語のシンポジウム(1)『言語の記述・記録・保存』の開催」

代表者：菊澤律子

目的

本研究では、言語の記述・記録・保存に関するラウンドテーブルおよびシンポジウムを開催する。これまで危機言語の文脈でとりあげられなかった手話言語に焦点をあて、音声言語の状況と対照することにより、国内外の研究現場および話者コミュニティにおける現状を総合的に把握し、今後の方向性を明らかにすることを目的とする。

成果

1) 研究成果の概要

本シンポジウムは、手話言語と音声言語の国際シンポジウムシリーズの第1回という位置づけで行った。使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話で、内容を一般参加者にも公開するため、日本語、日本手話の同時通訳を加えて行った。参加者数は初日（参加登録は定員で締め切り）は122名、2日目は204名の参加となった。

1日目は、第4セミナー室でのラウンドテーブル会議とし、菊澤、大杉 豊（筑波技術大学、国立民族学博物館特別客員）より、「手話に関する研究拠点ネットワーク構想」の説明を行い、各国から招待した手話言語学や言語の記述・記録・保存に関する専門家からの提案や意見を聴くためのきっかけとした。また、ネットワーク構想参加の同意を得ている香港中文大学およびハワイ大学言語学部から、関連教育課程や研究活動について、また前者の教育過程で学んでいるろうの学生によるプレゼンテーションが行われた。最後に、手話言語に関するコーパス作成に関する紹介があった。各発表後の質疑応答は、時間および通訳の関係で事実関係確認のみに限定したが、ディスカッションの時間には、一般参加者からの質問や意見に対してディスカッサントが自由に回答する形で進めた。一般からの質問等の受付は、質問フォーム（日本語・英語）およびビデオ撮影（日本手話・アメリカ手話）を通して行った。

2日目のシンポジウムでは、手話のフィールドワークの現場からさまざまな報告を受けた。報告は手話に関するものを中心とし、各地の手話の記述・記録に携わる研究者からの報告を依頼、同地域の音声言語の研究者からのコメントを組み合わせることで、手話言語と音声言語の研究者間での情報交換の糸口とした。1日目同様、一般参加者を含むフロアからの質問を受ける形でのパネル・ディスカッションを行い、まとめとした。

本シンポジウムのすべての内容はインターネットで生中継を行った。これは、総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ—メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者：菊澤律子）によるもので、合計アクセス数600、各配信へのアクセス数は常時、12から30を数えた。国内外でのインターネットによる聴講者からも、修了後、さまざまなコメントや感想が届き、配信側にとっても有意義な試みとなった。

今回のシンポジウムは、2013年9月末開催を検討している。

2) 著作物名

Senri Ethnological Studiesとして出版のため、現在準備中。

3) 研究会・シンポジウム等

『手話言語と音声言語のシンポジウム(1)「言語の記述・記録・保存」』

開催日 2012年7月28日～29日

場 所 国立民族学博物館（同時通訳（英語／アメリカ手話／日本語／日本手話）付）

主 催 人間文化研究機構／国立民族学博物館、共催 筑波技術大学、協賛 香港中文大学

後 援 日本言語学会、日本手話学会、社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所、財団法人全日本聾唖連盟

4) その他

総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ—メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者：菊澤律子）による。以下のサイトに掲載するために準備中。<http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssl/index.html>

「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」

代表者：日高真吾

目的

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。

成果

2012年度は、「1.有形の文化遺産の恒久的な保管体制の構築について」では、一時保管場所として、東北学院大学、気仙沼市旧月立中学校の環境モニタリングを実施し、また、塩分除去法の開発として石巻所蔵の民俗文化財を対象に処理実験をおこなった。「2.無形の文化遺産への支援と社会貢献」ではみんなばく公演として、「南部藩松壽院年行事太神楽」、「鶴鳥神楽」を国立民族学博物館で実演した。「3.震災の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸、紀伊半島沿岸の津波碑等のデータベースの作成をおこなった。なお、これらの進捗の成果は、国立民族学博物館と国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館共催による、連携展示「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」で展示公開した。なお、「4.災害時におけるミュージアムの連携体制の構築」では引き続き、「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」との連携を模索している。

1) 研究成果の概要

なお、これらの進捗の成果は、国立民族学博物館と国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館共催による、連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』で展示公開した。また、関連イベントとして下記のように、公演とシンポジウムを開催した。

2012年5月31日～8月21日 『写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー』企画展関連写真展

2012年10月21日 『鶴鳥神楽』 みんなばく公演

2012年11月18日 『南部藩松壽院年行司支配太神楽』 みんなばく公演

2) 著作物名

日高真吾編 『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』千里文化財団、2012年。

3) 論文名

青木 陸 「国文学研究資料館における東日本大震災の支援活動と今後」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.87-94, 千里文化財団, 2012。

阿部武司 「民俗芸能を記録する」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.52-53, 千里文化財団, 2012。

岡田 健 「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.56-67, 2012。

加藤幸治 「大学生と取り組む文化財レスキュー」『月刊みんなばく』36(9): 9, 2012。

「東北学院大学における被災文化財への支援活動」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.68-86, 2012。

川島秀一 「三陸の海と信仰」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.18-25, 2012。

小池淳一 「国立歴史民俗博物館における東日本大震災の支援活動と今後の課題」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.95-102, 千里文化財団, 2012。

小谷竜介 「波の伝わる谷——開村伝承と津波」『月刊みんなばく』36(9): 8, 2012。

「契約講と春祈祷——震災前のくらしと後」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.36-43, 2012。

西岡圭司 「思い出は流れない写真救済プロジェクト」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.166-172, 千里文化財団, 2012。

橋本裕之 「民俗芸能と地域社会——岩手県沿岸部における秘密」『月刊みんなばく』36(9): 4-5, 2012。

「岩手県沿岸部の民俗芸能——東日本大震災以前の鶴鳥神楽と釜石虎舞」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.44-51, 2012。

「岩手県沿岸部における無形民俗文化財への支援と今後の課題」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.122-133, 2012。

「岩手の伝統芸能と復興への取り組み」『東日本大震災、文化芸術の復興・再生の取り組み——被災と支援の実態調査と事例からこれからのを考える』pp.181-188, 文化芸術による復興推進コンソーシアム設立準備事務局, 2012。

「祭を再開する理由——東日本大震災以降の現状と課題」『建築雑誌』127(1631): 25, 2012。

「沿岸の心意気」『とりら』(第6号特別版ふるさと岩手の芸能と震災) pp.78-81, ふるさと岩手の芸能とくらし研究会, 2012。

「津浪と芸能——東日本大震災以降の現状と課題」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』54, pp.44-57, 日本演劇学会, 2012。

「体験を経験に昇華させる方法」『民博通信』137: 24-25, 2012。

「細く長く続けたい——民俗芸能支援の現在進行形」『日本ナショナルトラスト報』490: 2-4, 2012。

「南部藩松壽院年行司支配太神楽と国立民族学博物館——企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化

遺産』関連イベント『南部藩壽松院年行司支配太 神楽みんぱく公演』に寄せて』『季刊民族学』142: 71-84, 2012。

林 勲男 「災害を伝える——記憶と記録をこえて」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.173-181, 千里文化財団, 2012。

「文化遺産支援を通じたネットワークづくり——鹿踊りの研究公演を例に」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.134-138, 千里文化財団, 2012。

「民俗芸能の再生——鹿踊りへの支援から」『HUMAN』3: 83-90, 2012。

Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake, *Asian Anthropology* vol.11, pp.75-87, 2012.

「鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活」『月刊みんぱく』36(11): 22-23, 2012。

「仮のすまいとコミュニティ——その連続と断絶」『建築雑誌』127(1633): 4-5, 2012。

日高真吾 「震災と保存科学」『月刊みんぱく』36(9): 6-7, 2012。

「被災した文化遺産のレスキュー活動——東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会と国立民族学博物館」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.56-67, 千里文化財団, 2012。

「東日本大震災における民俗文化財のレスキューと将来への課題」『日本文化財科学会第29回大会 研究発表要旨集』pp.414-415, 2012。

平川 新 「歴史資料と災害への備え」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.103-111, 千里文化財団, 2012。

森本 孝 「三陸沿岸の漁村と漁業」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.26-35, 2012。

吉田憲司 「記憶をつなぐ——過去・現在・そして未来」『月刊みんぱく』36(9): 3, 2012。

「記憶の伝承——津波災害と文化遺産」『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』pp.140-165, 千里文化財団, 2012。

4) 研究会・シンポジウム等

2012年11月16日～11月17日 国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』、国立民族学博物館

2012年9月27日～11月27日 連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、国立民族学博物館

2013年1月30日～3月15日 連携展示『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、国文学研究資料館

「国際シンポジウム『樹について考える』の開催」

代表者：菊澤律子

目的

国立民族学博物館の共同研究「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」の最終年度にあたって、とりまとめの研究会および成果公開の一環として国際シンポジウム『樹について考える』を開催する。

成果

1) 研究成果の概要

2月9日に通訳との打ち合わせ及び準備作業、2月10日に一般公開でシンポジウムを行った。シンポジウムでは、系統樹モデルの持つ意味や、歴史、表現方法や表現内容について活発な議論が交わされ、真の意味で学際的な性格の強いディスカッションをすることができた。会場参加者数は65名であった。会議の内容については、ストリーム配信を行った。視聴者数のべ427名、同時視聴平均人数25人、最大35人という高い数字が見られる結果となった事は、このテーマへの関心の高さを反映しているといえる。

2) 研究会・シンポジウム等

国際シンポジウム『樹について考える』

開催日：2013年2月10日

場 所：国立民族学博物館

プログラム：

菊澤律子「(趣旨説明) 言語学における系統図——なぜ今、樹について考えるのか」(英語)

言語学におけるツリーモデル

セーレン・ウィッチマン (マックスプランク進化人類学研究所)「言語学におけるさまざまなツリー (および他の) モデル」(英語)

遺伝学におけるツリーモデル

木村亮介 (琉球大学亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構)「進化遺伝学における系統解析」(日本語)

系統学

三中信宏（農業環境技術研究所／東京大学大学院農学生命科学研究科）「生物・写本・言語におけるツリーとネットワーク：系統推定論における構造モデル選択について」（日本語）

歴史言語学

ウィーラ・オスタピラト（タイ・マヒドール大学）「東アジアにおける大言語族の系統樹を見直す」（英語）

文献学

吉田 豊（京都大学）「死語の方言と系統樹モデル——中世イラン語東方言を例に」（日本語）

オーストロネシア諸語をめぐるケーススタディ 1

ローレンス・A・リード（ハワイ大学）「異系統の言語を樹形図に組み込む——フィリピン・ネグリート族の言語を例に」（英語）

オーストロネシア諸語をめぐるケーススタディ 2

シヴァ・カリヤン（ノーザンブリア大学）、アレクサンドル・フランソワ（CNRS/LACITO）「樹形モデルの限界——北ヴァヌアツの言語を例に」（英語）

ディスカッション

コメント：斎藤成也（国立遺伝学研究所／総合研究大学院大学／東京大学大学院理学系研究科）

コメントに対する回答：各発表者

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2012年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

国際的共同研究の基盤整備と推進

2010年度に応募・採択された日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」）の主担当研究機関となり、「現代インド地域研究」プロジェクトと密接に関係を保ちながら本事業を推進した。2012年度は「現代インド地域研究」プロジェクトに携わる6名の若手研究者をインドおよびイギリスに派遣し、各自の研究の推進を通じてデリー大学、インド国立統計研究所、ロンドン大学政治経済学院（LSE）、エジンバラ大学等との国際研究ネットワークの形成・強化を図った。また本事業の成果公開の一環としてエジンバラ大学において国際研究ワークショップ、またインド・ナガランド州コヒマ市において国際シンポジウムを開催した。後者のシンポジウムの実施にあたっては本拠点の予算も活用して外国人研究者を招聘した。

2010年度にエジンバラ大学南アジア研究センターと締結した研究交流のための覚書に基づき、同センターと協力してRoutledge社から刊行する予定の叢書の編集作業を行った。国立民族学博物館拠点はこの事業の交渉窓口としての役割を果たした。

インド研究アーカイブ資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する計画を立て、必要な交渉を行った。交渉に基づき、沖氏から資料を本拠点に仮受け入れし、資料の点検・調査を行うとともに、沖氏から取材の目的・経過・成果等についての聞き取り調査を行った。拠点は、2013年度以降も民族学博物館と協力し、デジタル化やデータベース化にあたり、条件が整い次第公開を始める計画である。

【拠点の活動と成果】**国際シンポジウムの共催**

「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」(「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」)の成果公開の一環として企画された国際シンポジウム(“Looking beyond the State: Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”)を、本拠点予算の経費で支援し、共催した。シンポジウムは12月21日、22日の2日間、インド・ナガランド州コヒマ市にあるジャブ・クリスチャンカレッジで開催され、グローバル化の進むインドにおける社会的マイノリティーの包摂と排除をめぐる、日本、インド、イギリスからの計16本の研究発表に基づいて討論が行われた。

現代インド・南アジアセミナーの開催

「現代インド地域研究」プロジェクトでは毎年全国の南アジア研究を志す若手研究者を対象として若手セミナーを行っており、2012年度は国立民族学博物館拠点が開催拠点となって第3回目のセミナーを9月22日～24日の3日間、国立民族学博物館2階第5、第7セミナー室で開催した。セミナーは毎年南アジア研究の各分野の専門家を講師として招く連続講義と、大学院生とポスト・ドクターおよび推薦を受けた学部生を対象とする研究発表会によって構成される。今回は歴史学、経済学、文化人類学、地理学、生態学を牽引する8名の講師陣による講義が展開され、一般参加者を含め3日間で総計94名が聴講した。また、研究発表会には大学院生を中心に11名が参加を申請し、うち5名が発表を行い、研究員や講師陣を交えて活発な議論が展開された。

研究会活動

研究グループ1および2合同の拠点研究会を合計5回開催した。研究会では、各自の海外調査の中間報告に基づいてグループ相互間で積極的に意見交換を行い、問題意識を共有するとともに今後の調査方針を確認し、次年度以降の調査の深化を図った。また今年度の研究会は、ネットワーク型の拠点研究プロジェクトに参加するのが難しい大学等に所属する若手研究者を積極的に招聘し、研究発表の場を提供するとともに、拠点プロジェクトメンバーとの意見交換を行い、日本における現代インド・南アジア研究の全体としての活性化を図った。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

①第1回合同研究会

開催日：2012年6月16日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報告1：ヴァルヴァラ・フィルソヴァ(国立民族学博物館外来研究員)「在日するインド商人ディアスポラ」

報告2：前島訓子(名古屋大学)「生きられる『仏教聖地』——『聖地』構築への社会的影響」

②第2回合同研究会

開催日：2012年7月19日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報 告：工藤正子(京都女子大学)「パキスタン系移住者ネットワークにおける日本——日本人女性との家族形成を中心に」

③第3回合同研究会

開催日：2012年9月27日

場 所：国立民族学博物館大演習室

報 告：鎌田由美子(早稲田大学高等研究所)「グローバルな商品としてのインド絨毯と日本の祭礼」

④第4回合同研究会

開催日：2012年10月15日

場 所：国立民族学博物館第6セミナー室

報告1：B. Balasubramanian(米国ウェスリヤン大学)“Indian Music in North America: History and Current State”

報告2：Nair Achuthan Raman Unni(ブーゲンビリヤ音楽院)“Deteriorating Usage of Indian Classical Music in Popular Music Culture”

⑤第5回合同研究会

開催日：2013年2月16日、17日

場 所：国立民族学博物館 第6セミナー室

報告1：小日向英俊(国立音楽大学)「インド音楽・舞踊の日本における受容」

報告2：小尾 淳(大東文化大学大学院博士課程)「タミル地方におけるマラーティー歌謡の受容——ナーマ・サンキールタナの現代的様相をめぐる」

報告3：松尾瑞穂（新潟国際情報大学）「代理出産の文化論」

報告4：田中铁也（関西大学博士課程後期課程）「商業集団マールワリーによるヒンドゥー寺院運営——2つのサティール寺院を事例として」

海外調査

拠点の研究メンバーをのべ17回インド、パキスタン、スリランカ、アラブ首長国連邦、タイ、シンガポール、ベトナム、イギリス、フランス、カナダ等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

①ゾロアスター教徒コミュニティの比較調査

出張期間：2013年2月10日～2013年2月16日

出張先：カラチ市（パキスタン）

出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所準研究員）

②キリスト教改宗問題とコミュニズムに関する調査

出張期間：2012年12月26日～2013年1月4日

出張先：タミルナードゥ州チェンナイ、オリッサ州カンダマル

出張者：アントニサーミー・サガヤラージ（南山大学人文学部准教授）

③スリランカにおける民族・カースト・宗教をめぐる現代的流動状況の事例調査

出張期間：2012年11月18日（日）～2012年12月1日（土）

出張先：キャンディ市周辺（スリランカ）

出張者：鈴木晋介（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）

④ラージャスターン州のローカルな憑依霊信仰とメディアの関係に関する現地調査

出張期間：2012年7月24日～2012年8月13日

出張先：ラージャスターン州ウダイプル市

出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）

⑤エジンバラ大学南アジア研究センター・セミナーでの研究報告

出張期間：2012年10月18日～10月22日

出張先：エジンバラ大学南アジア研究センター

出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）

⑥英国におけるブータン関連資料の調査および英ネパール系ブータン難民に関する予備調査

出張期間：2012年2月11日～2013年2月25日

出張先：マンチェスター大学、エジンバラ大学南アジア研究センター

出張者：宮本万里（国立民族学博物館現代インド研究拠点拠点研究員）

⑦中東におけるネパール移民の生活調査

出張期間：2012年12月6日～2012年12月21日

出張先：南カタール（アラブ首長国連邦）

出張者：南 真木人（国立民族学博物館准教授）

⑧インドとタイの宗教施設に関する調査

出張期間：2012年8月16日～2012年9月4日

出張先：ティルッチラーッパッリ、マドゥライ、チェンナイ（インド）、バンコク（タイ）

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）

⑨シンガポール市内のタミル系ヒンドゥー寺院における寺院儀礼の撮影・観察

出張期間：2013年2月1日～2013年2月12日

出張先：シンガポール市（シンガポール）

出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）

⑩南インドのポピュラー・カルチャーとナショナリズムの関係についての調査研究

出張期間：2012年12月15日～2012年12月23日

出張先：チェンナイ（タミルナードゥ州・インド）

出張者：杉本良男（国立民族学博物館教授）

⑪ケーララ州北部に伝わる神霊信仰の脱領域的な拡がりに関する調査

出張期間：2012年8月31日～2012年9月25日

出張先：コチン市、カンヌール市、ムンバイ市、デリー市（インド）

- 出張者：竹村嘉晃（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑫「エピック・ウーマン2012」会議への出席とインド・シンガポールの芸能に関する調査
出張期間：2012年12月20日～2012年1月8日
出張先：チェンナイ、バンガロール（インド）、シンガポール
出張者：竹村嘉晃（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑬インド人世襲音楽家一族のグローバルネットワークと音楽活動に関する調査
出張期間：2012年8月16日～2012年9月3日
出張先：パリ市、アンジェ市（フランス）
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑭トロント市とその周辺地域におけるインド音楽・舞踊に関する予備調査
出張期間：2012年8月22日～2012年8月31日
出張先：トロント市（オンタリオ州・カナダ）
出張者：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
- ⑮植民地期インドにおける商家建築の装飾様式に関する比較調査
出張期間：2013年1月28日～2月20日
出張先：シンガポール、ホーチミン市・ミトー市（ベトナム）、タミルナードゥ州シヴァガンガイ県・西ベンガル州コルカタ県・ラージャスターン州ジュンジュヌー県、シーカル県（インド）
出張者：豊山亜希（国立民族学博物館外来研究員）
- ⑯インドの「宗教産業（Religious industry）」に関する調査
出張期間：2012年8月6日～2012年8月31日
出張先：マハーラーシュトラ州（インド）
出張者：松尾瑞穂（新潟国際情報大学講師）
- ⑰食文化と遺産に関する国際会議への参加
出張期間：2013年1月2日～2013年1月5日
出張先：香港中文大学（中国）
出張者：松川恭子（奈良大学准教授）

資料整備

現代インドの宗教と文化の動態に関する文化人類学およびその関連分野の研究図書および民族誌のなかから、国立民族学博物館にすでに所蔵されていないものを14冊を購入した。購入書籍は、本拠点事務局内の書架に配架した。

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖 守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する計画を立て、必要な交渉を行った。交渉に基づき、沖氏からスライド写真2万点あまりとその関連文書資料を本拠点に仮受け入れし、資料の点検・調査を行うとともに、沖氏から取材の目的・経過・成果等についての聞き取り調査を行った。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：近藤雅樹

目的

19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち、まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを、可能な限り総合的に調査研究する。その際、少なくとも資料に関する詳細なデータを、できる限り多く共有することで、同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち、いくつかのモデルケースを設定し、国内外の研究者コミュニティが、詳細な「記録」というかたちであれ、「実物」のままであれ、未来にわたって「共有」するために、長期にわたって継続でき、かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案、実行する。同時に、すでに目録が整備されているもののうち、相互利用に関する合意ができる場合は、協定など利用規程を定めたくて「共用」化を進める。さらに、資料群の現状（状態）を把握することで、今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指す。

毎年度海外の博物館等の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催する。この国際フォーラムは「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」（代表：近藤雅樹、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」の一

環)の企画である。その目的は、バルト海沿岸地域の諸都市を中心に博物館などが所蔵する日本および東アジア関連の民族資料(物品、写真、映像、文献など)を6か年計画で幅広く調査し、未紹介資料を含めて概要を明らかにしようとするものである。

成果

- ・ビョートル大帝記念人類学民族学博物館(ロシア)において江戸時代の絵画資料などを2週間かけて調査した。
- ・国立諸文化博物館(フィンランド)の展示物及び収蔵庫調査、タリン歴史博物館(エストニア)の収蔵庫調査を実施した。
- ・ロシア・北欧の上記の調査において、調査先博物館で日本資料に関する教示を求められることがあり、必要に応じて日本国内で調査を継続した。
- ・2012年度プレゼンポジウム報告書を発行した。
- ・2013年2月2日から3日にかけて国立民族学博物館でフィンランド、スウェーデン、デンマークから研究者を招聘して国際フォーラムを開催した。このフォーラムの報告書は次年度に刊行する予定である。
- ・国際フォーラムで来日したスウェーデン・デンマークの研究者と、次年度の海外調査に先立ち、調査協力要請および事前打ち合わせを実施した。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国際シンポジウム「手話言語と音声言語のシンポジウム(1)『言語の記述・記録・保存』の開催」

2012年7月28日～29日 国立民族学博物館

代表者：菊澤律子

趣旨

言語の記述・記録・保存に関するラウンドテーブルおよびシンポジウムを開催する。これまで危機言語の文脈でとりあげられてこなかった手話言語に焦点をあて、音声言語の状況との対照から、国内外の研究現場および話者コミュニティにおける現状を総合的に把握し、今後の方向性を明らかにすることを目的とする。

手話については、音声言語と比べ、フィールドワークによる記述研究が少なく、また、話者自身が記録・保存に取り組む場もほとんどない。その対応の必要性および緊急性は、国際的に強く認識されており、2011年7月の国際ワークショップ(手話の歴史言語学)で国内外の研究ネットワークの形成が提案された。今回のシンポジウムは、その具体化に加え、手話研究を音声言語研究と意識的に付き合わせ、言語の総合的な把握を試みる点で、従来の手話に関する取り組みとは異なる。

シンポジウムは一般公開とする。手話が「言語」であるとは認められにくい現状において、国立の研究機関において手話をも含んだ言語学に関するシンポジウムを開催することは、社会的な意義も大きいと考える。

実施状況

予定通り、7月28日および29日にシンポジウムを行った。

- 1) 最終プログラムおよび講演要旨等については、日本語および英語で本館のホームページに掲載した。
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20120728-29> (日本語)
<http://www.minpaku.ac.jp/english/research/activity/news/rm/20120728-29> (英語)
- 2) 使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話。これに一般参加者を考慮して、日本語、日本手話の同時通訳を付けた。
- 3) インターネット配信については、累計アクセス人数が600名、各セッションのアクセス数は、12～30名。
- 4) その他詳細については、「成果」参照。

成果

本シンポジウムは、手話言語と音声言語の国際シンポジウムシリーズの第1回という位置づけで行った。使用言語は英語、アメリカ手話、香港手話で、一般参加者に公開するため、日本語、日本手話の同時通訳を加えて行った。参加者数は初日(参加登録は定員で締め切り)は122名、2日目は204名の参加となった。

1日目は、第4セミナー室でのラウンドテーブル会議とし、菊澤、大杉 豊(筑波技術大学、国立民族学博物館特別客員教員)より、「手話研究に関する研究拠点ネットワーク構想」の説明を行い、各国から招待した手話言語学や言語の記述・記録・保存に関する専門家からの提案や意見を聴くためのきっかけとした。また、ネットワーク構想参加の同意を得ている香港中文大学およびハワイ大学言語学部から、関連教育課程や研究活動について、また前者の教育過程で学んでいるろうの学生によるプレゼンテーションが行われた。最後に、手話言語に関するコーパス作

成に関する紹介があった。各発表後の質疑応答は、時間および通訳の関係で事実関係確認のみに限定したが、ディスカッションの時間には、一般参加者からの質問や意見に対してディスカッサントが自由に回答する形で進めた。一般からの質問等の受付は、質問フォーム（日本語・英語）およびビデオ撮影（日本手話・アメリカ手話）を通して行った。

2日目のシンポジウムでは、手話のフィールドワークの現場からさまざまな報告を受けた。報告は手話に関するものを中心とし、各地の手話の記述・記録に携わる研究者からの報告を依頼、同地域の音声言語の研究者からのコメントを組み合わせることで、手話言語と音声言語の研究者間での情報交換の糸口とした。1日目同様、一般参加者を含むフロアからの質問を受ける形でのパネル・ディスカッションを行い、まとめとした。

本シンポジウムのすべての内容はインターネットで生中継を行った。これは、総合研究大学院大学学融合推進センターのプロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」（研究代表者 菊澤律子）によるもので、合計アクセス数600、各配信やのアクセス数は常時、12から30を数えた。国内外でのインターネットによる聴講者からも、修了後さまざまなコメントや感想が届き、配信側にとっても有意義な試みとなった。次のシンポジウムは、2013年9月末開催を検討している。

国際シンポジウム「大規模災害とコミュニティの再生」

2012年11月16日～17日 国立民族学博物館

代表者：杉本良男

趣旨

東日本大震災などの大規模等災害被災地における「ローカル・メディアによる情報発信」、「文化遺産の復興支援」、「災害の記憶の継承」の活動に注目し、大規模災害からのコミュニティの再生について、海外の大規模災害への取り組み事例も踏まえながら考える。

実施状況

11月16、17日の両日にわたり、計20の報告、コメントなどを通じて、多角的な議論が行われた。外国からは8名の報告者、コメンテーターが参加し、一般聴講者ものべ111名にのぼった。

成果

シンポジウム初日は、冒頭の趣旨説明ののち、第1部「大規模災害時にローカルメディアが果たす役割」が行われた。本セッションでは、東日本大震災及びインド洋津波災害時におけるローカル・メディアが果たした、あるいは果たすべき役割について、日本、インドネシア、タイからの事例報告と、インド、日本の事例を念頭においたコメント、討論、総括が行われ、いずれの地域でも大メディアよりローカル・メディアのほうが小回りがきいて、より重要な役割を果たしたことが指摘された。2日目は第2部「災害から文化遺産が復興する意義」について、とくに博物館を中心とした日本、インドネシア、タイにおける経験と、復興に果たす意義についての報告と討論が行われ、有形、無形の文化財の復興に果たした、あるいは果たすべき役割の重要性が指摘された。つづく第3部「コミュニティにおける災害の記憶の継承」においては、博物館や公共施設を拠点にした記憶の継承について、日本とアメリカの事例報告及び討論が行われ、とくにハリケーン後のアメリカの博物館の事例が、今後の博物館の可能性の1つとして関心を集めた。最後に全体討論が行われ、各セッションをまたぐ比較と討論を通じて、今後の展開について実践的、学知的に考えていく方向性が議論された。今後もアカデミックなレベルにおいて、人類学を中心とした、広く外国の比較事例を含めた学際的、総合的な検討の必要性があらためて強調され、全体が閉じられた。今回は、日本、アメリカそれにアジア諸国のさまざまな事例が報告され、またこれらを比較、総合した議論が熱心に行われた。日本の研究者、実践者を含めて、各国からの参加者にも強いインパクトを与える意義があった。民博における復興関連プロジェクトは今後とも継続されるが、将来を見ずえたさらなる研究の展開をはかる必要があることが確認された。

各報告者からのフル・ペーパーとコメンテーターのペーパーを加えて、来年度中に民博の出版物等で成果刊行を行う。

国際シンポジウム「グローバル化時代の包摂と排除——インドにおける社会的包摂と排除の新しいかたち」

2012年12月21日～22日 インド、ジャプフ・キリスト教大学

代表者：三尾 稔

趣旨

本館を経費受け入れ機関とする日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（事業名「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」）の研究成果公開の一環として、インド・ナガランド州にお

いてグローバル化の進む現代インド社会における包摂と排除をテーマに国際研究フォーラムを開催する。ナガランドはインド先住民が多数居住する州の1つで、フォーラムのテーマと関係の深い地域だが、辺境地帯にあるためこれまであまり国際研究集会在が開催されてこなかった。このような地域で、日本発のインド研究の成果を問い、なおかつ国際的な研究者コミュニティとの意見交換の機会を設ける意義は大きい。

実施状況

2012年12月21日と22日の2日間にわたり、インド・ナガランド州のコヒマ市にあるジャプフ・キリスト教大学において上記の国際シンポジウムを開催した。申請時に招聘する予定だった英国の研究者のうち1名はスケジュールの調整がつかなくなり、招聘ができなかった。予定変更が11月初旬であったため代替の研究者を招聘することは不可能で、結局本支援経費で招聘した研究者は英国からの1名となった。

それ以外の経費で参加予定であったインド人研究者も数名がやむを得ない事情により参加を直前になって取りやめた。しかし、シンポジウム自体は基本的なプログラム構成を変更することなく、無事に発表と質疑応答、討論を行い、終了した。

成果

インドにおける社会的包摂と排除に関する社会学的研究においては、カースト制度の下での被差別民や先住部族民を国家の枠組みのなかでいかに包摂し、彼らにどのような権利を認めるべきかが大きな論点とであった。しかし、グローバルな人、資本、情報のフローが活性化する中で国家の境界は流動化し、国家のみが包摂と排除をめぐる交渉のアリーナではなくなっている。差別からの解放を求める運動も国際化し、新しい理念や方法のもとでの運動や交渉が行われるようになってきている。

シンポジウムでは、このような状況認識の下で具体的にどのような情報や人、モノのフローがインドの社会的包摂と排除をめぐる議論や運動に影響を与えているのかを探り、新しい社会状況のもとでどのような新たなコンフリクトが生まれているのかについて議論した。カーストによる差別や先住民族への差別は依然として深刻な社会紛争の対立点ではある。しかし、人の移動の活発化はそれまで隣人関係になることのなかった者同士の接触を生み、新しい民族間の軋轢を生じさせている。また経済・社会の変容は、従来とは異なる形での貧富格差やジェンダー関係を生み出している。その結果、従来の対立軸だけではない多様な亀裂が社会に生じつつあることが浮き彫りとなった。

一方、社会主体の多様化はインドの社会や国家の分裂・解体に必ずしも直結しない。新しい社会的なステーク・ホルダーが次々に誕生するなかで、従来の対立軸にせよ新しい対立軸にせよ、そこで生じている人びとの政治経済的・社会的要求は柔軟なインドの民主制のなかに声をあげる余地を見出している。社会運動の活発化とインドの民主制のヴァナキュラー化や深化の様相もまた本シンポジウムにおいてさまざまな発表で浮き彫りにされた。最終的な議論においては、このような動きを「インド型の発展経路」の基礎と見なすのか、それともそれは結局のところグローバルな政治経済体制のもとに回収されるものと見るのかに関して活発な議論が戦わされた。この論点は、容易に結論を得られるものではなく、次の同種のシンポジウムでの課題となることが確認された。

インドの辺境に位置し、長らくインド国家からの分離独立闘争が続いてきたナガランド州において、このようなテーマで国際シンポジウムが開催されたことは画期的な意義を持つ。それは現地の英字新聞3紙でこのシンポジウムの内容が詳報されたことから傍証される。シンポジウムへの出席者も初日が65名、2日目が62名にのぼり、関心の高さがわかる。本館のイニシアチブで、インドにおいて日・印・英の研究者を派遣・招聘し注目度の高いシンポジウムを開催でき、国際的な現代インド研究の進展に貢献することができた。

さらに討論を踏まえ、論点を練り直した論文を編集し、英文論文集を刊行する。2013年度、本館の外国人客員教授として来日する Abhijit Dasgupta 教授（本シンポジウムの実行委員でもあった）が編集に協力する。また論文集は、これも本館とエジンバラ大学南アジア研究センターの研究協力のもとで企画が進んでいる南アジア研究の英文叢書シリーズの中の1巻として出版する計画である。

国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」

2013年3月17日 国立民族学博物館

代表者：森 明子

趣旨

日欧の文化展示に携わる民族誌研究者／展示制作者が集い、日本におけるヨーロッパ展示、ヨーロッパにおけるヨーロッパ展示、ヨーロッパにおける日本展示、日本における日本展示のそれぞれについて、展示される文化と、展示を見る側の文化の関係を検証する。文化の遠近法という視点から民族誌展示の生産的なあり方について議論する。

実施状況

3月15日、16日の両日、海外からの参加者が、館内の博物館施設と研究施設を視察し、研究打ち合わせを行った。3月17日、国際シンポジウムを開催した。まず参加者全員がヨーロッパ展示場を、製作に関わった3名の研究者の解説のもとに視察した。その後、シンポジウム会場にもどり、研究発表と討論を行った。参加者は合計40名であった。3月18日、シンポジウムの総括を行い、成果公開について打ち合わせを行った。

成果

シンポジウムでは、みんぱくのヨーロッパ常設展示（2012年3月、全面改修し公開）、ベルリンのヨーロッパ諸文化博物館における新しい常設展示（2011年12月、初公開）、ロンドンのジェフリー博物館における日本の家に関する特別展（2011年、春公開）、みんぱくの日本常設展示（2013年3月、一部改修し公開予定）をとりあげた。それぞれの展示制作者は、完成した展示場写真を示しながら、展示のねらいと実際の展示制作にあたって遭遇した諸条件を報告し、さらに完成した展示を来館者がどのように受容したかについても明らかにした。また、当該展示が配置されている博物館の歴史的背景や社会的な位置づけについても報告した。こうして4つの報告は、相互に参照しながら議論する枠組みのなかに配置された。

議論には、展示制作に直接的に携わった研究者と、ヨーロッパ文化に造詣の深い文化人類学者、歴史学者が参加した。そこで、展示される文化と来館者の担っている文化の関係、常設展示と特別展示の使命、展示場を構成するストーリーと個々の標本に関する詳細情報のバランス、民族学博物館の役割などのテーマをめぐって、密度の濃い意見交換が行われた。また、自己の文化では気が付かない視点が異文化展示で生かされること、その一方で自己の文化の展示が外国人には難解になりうることも再認識された。展示トピックとしての食とその保存・廃棄や、展示における画像の可能性、来館者の体験を展示にフィードバックする実験などをめぐっても、さまざまな提案や意見が出された。

これらのテーマのそれぞれについて議論をつくす十分な時間はなかったが、いくつものテーマについてさまざまな視点が提示され、実験的な試みが紹介されたことは、きわめて有意義であった。また、専門的な国際シンポジウムとしては、一般の参加希望者が多かったこと、そこに隣接分野の若手研究者が多く含まれていたことも特筆される。シンポジウムで口頭発表された論文を編集し、『国立民族学博物館研究報告』に投稿する計画である。

●研究フォーラム

国際研究フォーラム「漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ」

2012年11月3日～4日 国立民族学博物館

代表者：田村克己

趣旨

これまで漢族をめぐる人類学的研究は、中国における特定の漢族社会を研究する「中国漢族研究」と、非華人社会へ移民した漢族を研究する「華僑・華人研究」とに区分されてきた。しかし、グローバル化が進む現在、中国南部の漢族社会と東南アジア華僑社会は、相互に影響を与えつつ文化を構築しており、両者の間の文化の流動性を捉える視点が重要となってきた。田村は、アモイ大学・鄧 曉華氏を本館客員教授として招聘し、この点につき共同で研究を進め、また、共同提案者の河合洋尚も日本文化人類学会課題研究懇談会「文化のフロー」のセッションで館外研究者とともにこの研究を深めた。

本シンポジウムでは、こうした主題の研究に取り組む日中の若手研究者を発表者として招聘することで、「中国漢族研究」と「華僑・華人研究」の枠を超えて、新たな研究の展開をめざすとともに、田村がこれまでおこなってきた東アジアと東南アジアの社会や文化（宗教など）についての研究相互間の架橋をめざす。またシンポジウムの成果を、本館の中国展示新構築の華人文化の展示につなげていくとともに、機関研究と連動して、本館の漢族社会研究を深める効果が期待される。

実施状況

日程：2012年11月3日～4日

会場：国立民族学博物館第4セミナー室

使用言語：日本語、中国語（同時通訳）

11月3日

10：30～12：00 座長：田村克己（国立民族学博物館教授）

館長挨拶 須藤健一（国立民族学博物館館長）

趣旨説明 田村克己（国立民族学博物館教授）

基調講演 鄧 曉華（中国・アモイ大学教授）

第1セッション<中国漢族と国際ネットワーク>

座長：芹澤知広（奈良大学教授）

13：00～13：40

俞 雲平（アモイ大学准教授）「移民のエスニック・アイデンティティと地域アイデンティティ——福建省松坪華僑農場を例に」（中国語題目：移民の族群認同与地域認同——以福建松坪華僑農場為例）

13：40～14：20

河合洋尚（国立民族学博物館機関研究員）「客家都市の建設——梅州市における華僑ネットワークと経験創造」

座長：韓 敏（国立民族学博物館教授）

14：30～15：10

川口幸大（東北大学准教授）「香港から国内都市部へ——珠江デルタにおける移動ベクトルの現在」

15：10～15：50

稲澤 努（東北大学教育研究支援者）「広東の一地方都市における『香港』の役割」

16：00～17：00

コメンテーター：志賀市子（茨城キリスト教大学教授）、飯島典子（広島県立大学准教授）

質疑応答

11月4日

第2セッション<東南アジア華僑における中国>座長：韓 敏（国立民族学博物館教授）

10：00～10：40

櫻田涼子（京都大学GCOE研究員）「華字紙『星州日報』創刊時の東南アジア華僑と中国本土の関係」

10：40～11：20

陳 碧（玉林師範大学准教授）「民間団体と脱地域文化交流——シンガポール道教総会およびその廟会員の活動を例に」（中国語題目：民間団体与跨地域文化交流——新加坡道教総会及其宮廟會員活動為例）

11：30～12：10

呉 雲霞（広東外語外貿大学講師）「ベトナム北部における村落民俗の中国記憶」（中国語題目：越南北部の郷村民俗展演的中国記憶）

12：10～13：10

コメンテーター：陳 天璽（国立民族学博物館准教授）

質疑応答

14：10～16：40

総合討論

座長：田村克己（国立民族学博物館教授）

コメンテーター：芹澤知広（国立民族学博物館客員教授）

16：40～16：50

閉会の挨拶 塚田誠之（国立民族学博物館教授）

11月5日

10：00～13：00

今後の成果とりまとめ及び学術交流の打ち合わせ

成果

本シンポジウムでは、田村克己による趣旨説明、鄧 曉華による基調講演の後、7名の若手研究者による研究発表が展開された。具体的に、本シンポジウムは、2つのセッションに分け、1) 華人社会の影響による中国漢族社会の動態的な変化、および、2) 中国漢族社会の影響による東南アジア華人社会の動態的な変化について、それぞれ議論を展開した。

まず、1)については、俞 雲平が、マレーシアから中国福建省へ戻った帰国移民の問題を扱い、帰国移民が中国に及ぼす影響について論じた。また、河合と稲澤は、たとえヒトの移動がなくても情報技術を通して、海外華人社会の影響を受けつつ中国漢族社会が構築されていることを示した。例えば、河合は、広東省梅州市における都市景観の建設を扱い、当該市における景観イメージが、むしろ台湾や東南アジア諸国の華人を引き寄せるためにつくられている点を指摘した。稲澤は、同じ広東省東部の汕尾市に着目するが、ここでは香港が先進的な文化として理想化とされており、西洋＝文明＝香港の図式より地元文化が刷新されているプロセスを論じた。それに対して、川口の研究する広東省中部の広州市では、ここが華南地方最大の都市であるにもかかわらず、ヒトや文化の流動性が比較的小さいことが指摘された。他方、2)については、櫻田が、戦前の華字新聞を扱うことで、今から100年近く前

にはすでに、東南アジアの華人社会が中国を意識しながら自社会を位置づけていたことを明らかにした。また、陳碧は、シンガポールの廟活動を題材とし、その廟が「真正なる」文化をもつ中国漢族社会とのネットワークを重視して活動を行ってきたことを紹介した。そして、呉 雲霞は、ベトナムの廟においても「中国らしさ」が意識されており、それに応じて儀礼のあり方が刷新されていることを論じた。

中国漢族社会と華僑華人社会の間のネットワークについては、これまで全く議論がなかったわけではなく、コメンテーターの芹澤、志賀らが先駆的な事例報告をなしていた。しかし、この問題について複数の人類学者が集まり、理論的・体系的に議論がなされたのは、おそらく日本においても中国においても今回が初のことである。総合討論で塚田が指摘していたように、今回のシンポジウムで集まった若手研究者が今後、中国漢族研究と華僑華人社会の枠組みを超えた、漢族社会をめぐる新たな研究組織を国際的につくっていく必要性が改めて確認された。

本シンポジウムにおける以上の発表内容に基づき、田村克己・鄧 曉華・河合洋尚の編で書籍『漢族社会におけるヒト、モノ、情報の移動——人類学的アプローチ』（仮）を刊行する予定である。

国際研究フォーラム「日仏研究交流フォーラム——人口学から世界を理解する」

2012年11月30日 国立民族学博物館

代表者：三島禎子

趣旨

本フォーラムは、国立民族学博物館とフランス国立パリ・デカルト大学人口開発研究所（CEPED）とのあいだに締結された学術協定 2012～2015年の第1回目の研究交流を目的として開催された。

今回はCEPED所長のイヴ・シャルビ氏の基調講演をふまえ、国内のアフリカ研究者が異なる学問領域から参加し、社会の変化に対応する今日的な研究のあり方を模索することを試みた。このような学際的かつ国際的な研究の機会をフランスと日本の研究者が共有することによって、あらたなアフリカ研究の方向を見出すことができると期待される。

実施状況

シャルビ・イヴ氏（パリ・デカルト大学人口開発研究所・所長）による「変化と適応の理論——総合的人口学のために」と題する基調講演をふまえ、2人のコメンテータからそれぞれ発表がおこなわれた。シャルビ氏は人口学という一見、無機質な学問領域に、複雑な社会変化にも対応するようなアプローチをもたらす学際的な研究の方向性について講演した。

正木 響（金沢大学）氏からは経済学の立場から「社会の視方——ミクロからマクロへ、マクロからミクロへ」について発表し、鈴木裕之（国士舘大学）は文化人類学の視点から「よりよき他者理解のために——フィールドワークでのふたつの個人的体験から」について意見を述べた。

館外からは8人、館内からは6人が参加して活発な議論が交わされ、充分な人的交流の場となるとともに、今後の計画を確認するうえでの有益な研究フォーラムとなった。

成果

文化人類学において個人や家族が古典的テーマであると同時に、人口学もまたそれらを研究の単位としてきた。前者の特徴は、人間の慣習や社会制度、心理的傾向性、言語、物質文化など、多様な要素からなる広義の文化に焦点をあて、個々の文化的特性を記述すると同時に、民族／社会間の比較研究を行うことである。他方、人口学は出生、死亡、結婚、移動といった変数要因に注目して、人口動態に関する法則性やメカニズムを対象に研究する。両者の関係については、文化人類学が質的データを重視するのに対し、人口学は数量的データに基づいて分析を行うのであるが、今日の複雑な社会を対象とするようになって、人口学においても文化人類学的なデータ収集と分析の必要性が認識されている。すなわち、フィールドワークにおいて取得される直接的なデータを用いることによって、より個別な状況を理解する必要性が人口学において生じている。一方、文化人類学においても、グローバル化社会における個性を理解するための新しいアプローチが求められ、学問領域も応用人類学に代表されるように、現代社会なさまざまな社会問題に対応して多様化している。同様の指摘は、同じようにマクロなアプローチを手法とする経済学においても見られた。

本研究フォーラムでは、シャルビ氏が人口学の立場から学際的な研究の方向性について講演をおこない、経済学と文化人類学からの事例報告とコメントを議論の柱としながら、変化の激しいアフリカ社会に対峙する学際的な方法論について、異なる分野の研究者がそれぞれの立場から模索した。

同時に、学術協定のもとでおこなう研究プロジェクトについて議論をし、来年度のシンポジウムの方向性と内容についてお互いの理解を深めた。

本研究フォーラムは、フォーラムの前日に民博とフランス国立パリ・デカルト大学とのあいだに締結された学術

協定にもとづく3年間の研究プロジェクトのプレ・シンポジウムに位置づけられる。研究成果は2013年度以降開催される2つのシンポジウムを経たうえで、フランス語と日本語でそれぞれ出版する。

国際研究フォーラム「国際共同取材『中国・ロシア・モンゴル国のトゥバ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』」

2013年1月8日～9日 国立民族学博物館

代表者：小長谷有紀

趣旨

本館の開発提供してきたビデオテークは、研究者が取材に同行すること、研究資料として映像記録を残すこと、編集作業を経て一般的な映像番組としていること、という3点で、他の一般的な放送番組とは異なり、非常に貴重な情報資源である。にもかかわらず、開館以来30年余を経て、あまり知られなくなっている。このたび、トゥバと呼ばれるロシア、モンゴル、中国の3か国にまたがって居住する民族に関して、現地の研究者がカウンターパートとして協力するばかりでなく、第三国をともに調査するという形で、4か国の研究者が3か国を共同で取材した。この成果は、取材に参加した研究者らによって、日本語のほかにロシア語・中国語・モンゴル語の計4か国語版となり、現地に還元される予定である。国際共同取材と現地還元という試みを紹介することで、ビデオテークそのものの貴重な存在価値を一般に知らしめたい。本フォーラムでは、報道関係者に焦点をあてて公開し、新聞記事を通じて、あまり関心のない人びとにも知っていただくという方法をとる。

実施状況

トゥバでは、マイナス54度の厳寒期を迎えるなか地震が発生し、2012年12月21日に、人口3,753人のホブアスキイという町の暖房システムがダウンした。このため、学校と幼稚園の児童を首都へ避難移送することとなり、予定していたトゥバ文部大臣ビチュエルデイ夫妻の来日は延期され、また、モンゴル国からトゥバ人を代表して来日予定であった、科学アカデミー西方支部のゾルバヤル教授も、パスポートコントロールの誤りにより来日できなかった。

このため、当日、参加した国内のトゥバ研究者たちにより、予定どおり、2013年1月8日と9日に開催した。8日は、編集途上のビデオ映像をもちいて、取材の状況ならびにトゥバについての解説をおこなった。翌9日は、田中克彦氏の講演により、日本および世界におけるトゥバ研究の歴史をひもといた。また、トゥバ料理を紹介した。

なお、トゥバ文部大臣ビチュエルデイ夫妻は、その後、2月6日から11日まで来日し、日本との学術交流を果たすことができた。

成果

当初予定していたトゥバ人の来日日程の変更により、新聞社としてはわずかに朝日新聞および京都新聞の参加にとどまったが、朝日新聞では文化面（2月12日付）で比較的大きくとりあげられ、1) トゥバそのものの紹介、2) 本館におけるトゥバ研究の紹介、3) ビデオテークについての紹介、という3つの目的を果たすことができた。また、トゥバ文部大臣夫妻の来日については、他に日本経済新聞でも紹介された。これらの記事に対する一般読者の反響がみられた。

本フォーラムでは、本館のビデオテーク番組『トゥバに魅せられた人びと』で撮影対象となった日本人研究者4名のうち、現役で研究をしている3名が全員集まった。第一世代1名と第二世代2名である。彼らの交流により、今後の研究プロジェクトのターゲットが定まった。

なお、3か国で取材したトゥバ語資料およびモンゴル語資料のテキスト化を終了し、トゥバ人およびモンゴル人による校閲をおこなった。これらをもちいて映像番組を作成する。

上述の朝日新聞による紹介記事を本館ホームページ上で公開している。

本フォーラムの要件である、ビデオテーク番組は、2013年度に配分される予算に合わせて、日本語版のほかに各国版を作成する。

2013年9月8日の研究公演『喉歌（のどうた）のふるさと』にあわせて、ビデオテーク番組も紹介する。このように、研究公演をビデオテーク番組と連動させることによって、研究成果の集積的な発信としたい。

国際公開フォーラム「古代文明の生成過程——マヤとアンデスの比較」

2013年1月27日 キャンパス・イノベーションセンター東京

代表者：關 雄二

目的

米国アリゾナ大学のマヤ考古学者を招へいし、中米と南米の古代文化における権力生成の比較フォーラムを、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫茨城大学教授）、古代アメリカ学会の協

力を得て行う。

これは、科研費プロジェクト(基盤研究(S))「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」代表：關 雄二)の成果公開を兼ねており、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

具体的には、フォーラムを通じ、アメリカ大陸において成立した古代文明の経済的基盤を明らかにするのみならず、権力形成という視点を通して、経済を支えていた農作物、海産物、動物資源、そして他の自然資源の、宗教を含む非経済的側面にまで光を当てる予定である。これにより、生態学、あるいはマルクス主義的歴史観の中で矮小化されてきた先史時代の資源利用をより複合的にとらえることが可能になる。またメソアメリカ地域と比較することで、アンデス文明の特徴が浮かび上がることは間違いない。結果として、これは文明論の新たな研究動向を一般社会に公表し、人類の未来像を探るための機会を提供することにつながると考えられる。

実施状況

プログラム

關 雄二 あいさつ

猪俣 健(アリゾナ大学)「セイバル遺跡の発掘成果とマヤ文明の起源」

青山和夫(茨城大学)「石器研究からみるマヤ文明の盛衰」

松本雄一(国立民族学博物館機関研究員)「遠隔地交流と複雑社会の形成——アンデス中央高地の事例から」

關 雄二「アンデス文明における権力の発生——最新成果報告」

ディスカッション

成果

中米のマヤ文明と南米のアンデス文明を対象に、最新の調査成果を発表し、さまざまな観点から分析できた意義は大きい。マヤについて、猪俣は、近年発掘調査を実施したセイバル遺跡のデータをもとに、先古典期における低地マヤ社会では、従来考えられていたよりも古くから公共建造物とそれに伴う埋納儀礼が検出され、すでに社会の複雑化が進んでいたメキシコ湾岸地域と地域交流を持っていたことを明らかにした。青山は、石器分析の観点から、社会の複雑化と石材の入手、および石器製作の統御とが関連することを示し。その生産体制が社会的エリート自身に属するものであることを指摘した。松本は、自身の発掘データをもとに、かつて汎アンデス的に広がったと考えられたチャビン文化の実態を地方政体の自立性の点から問いなおし、関は、チャビン同様にアンデス文明初期に出現する大規模建造物を築いた社会の成立基盤に地域性を見いだす発表を行った。

とくに、マヤ、アンデス双方の文明ともに、紀元前にさかのぼる初期段階で公共建造物が出現し、それが時代とともに大規模化していくことが共通点として押さえられた。しかし、そこではマヤとアンデスそれぞれの地域の歴史的背景や生態環境の違いを考慮する必要もあり、村落の共同祭祀空間であったものが、儀礼、饗宴の結果生じる廃棄物を埋め土にしながら建物が拡大する点では同じであっても、無意識の産物であるのか、あるいは指導者の意図により、祖先崇拜を想起させる埋葬や儀礼用具の埋納などの結果、巨大化したのかなど、深く論議する必要性が感じられた。またそうした建造物の巨大化の過程で、王とは特定できずとも、指導的リーダーの誕生が認められる点でも両文明で共通性を持つが、リーダーの権力基盤については、マヤでは一般に石器生産に多くを投資するのに対して、アンデスでは遠隔地交易や金属器製作など、権力者が操作する資源に地域差があるなど、両文明間の違いも大きいことが確認された。こうした比較により、各文明において注目すべき新たな視点が浮き彫りにされた点は大きな収穫といえる。

今回1回のシンポジウムだけでは、議論がまだ煮詰まらないところもあり、科研費による研究期間中に再度討議する場を設け、その結果を市販書として刊行していく予定である。出版関係者、新聞社も数社参加しており、いずれも、記事掲載や刊行に積極的な意見を表明した。

国際研究フォーラム「在外資料の調査研究Ⅲ——バルト海周辺地域の日本コレクション」

2013年2月2日～4日 国立民族学博物館

代表者：近藤雅樹

趣旨

従来あまり視野に入らずにいたバルト海周辺の民俗資料を中心にその所在状況を調査する。

実施状況

2013年2月2日～4日にかけて国立民族学博物館において公開研究フォーラムを開催した。

成果

今回のフォーラムは、人間文化研究機構が推進している「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトにおいて、6月に実施した「バルト海周辺地域の日本コレクション」調査に関連し、スウェーデン、フィンランド、およびデンマークと日本在住外国人研究者などの招聘研究者及び本館の研究者による報告とコメント、並びに全体討議という形式で進めた。

スウェーデンのペトラ・ホルムベリ氏（ストックホルム東アジア博物館）からは、ストックホルム東アジア博物館所蔵の日本資料の所在と、その由来についてご報告いただいた。

フィンランドのミンナ・エヴァスオヤ氏（ヘルシンキ大学芸術・美学研究所）からは、フィンランド国内の日本関連資料について、包括的なご報告を頂いた。

デンマークのヨアン・ホーンビー氏（デンマーク国立博物館）からは、デンマーク国立博物館の日本資料の所在と、その由来についてご報告いただいた。

「日本関連在外資料調査研究」研究班からは、6月に行ったフィンランド・エストニア調査について報告があった。

ディスカッションの場では、活発に意見が交わされ、さらに、大阪歴史博物館の伊藤廣之氏にコメントを頂いた。また、ヨアン・ホーンビー氏、ペトラ・ホルムベリ氏に、「日本関連在外資料の調査研究」研究班による来年度デンマーク・スウェーデン調査の受入れをご内諾いただくことができた。

報告内容は報告書としてまとめ、2013年度内に刊行する予定である。

●国際研究集会への派遣

「ペー族文化国際学術シンポジウム」

2012年6月30日～7月5日 中国湖南省桑植県

横山廣子

趣旨

中国湖南省の桑植県白族（ペー族）学会が雲南省大理白族自治州白族学会ならびに湖南省張家界市白族学会と共催して桑植県で初めて開催する大規模な学術シンポジウムに参加する。シンポジウムで研究報告および学術交流をおこなうとともに、期間中、桑植県地域のペー族に関する情報を収集し、自身の研究に資する。

実施状況

6月30日に出発し、7月1日から4日まで中国湖南省桑植県で開催された「ペー族文化国際学術シンポジウム」に参加し、7月5日に帰国した。

今回のシンポジウムの参加者は合計33名。中国国外からの参加者は私のみで、湖南省内から桑植県ならびに張家界市の白族学会員を中心に、省内の大学や省、市、県の各レベルの行政部門関係者が計15名、雲南省大理白族自治州からは州白族文化研究所員6名を筆頭に、州内各地の研究・文化部門の研究者計13名、そのほか西安、北京、南京の大学に所属する研究者が4名参加した。研究報告をおこなったのは17名で、不参加だが論文を寄稿して予稿集に収録された者が3名あった。

私は1986年、87年に桑植県を訪れ、短期調査をおこなっている。今回当時の調査から得られた知見を総括するとともに、その後得られた情報と考察を整理し、雲南省大理地域で調査研究を続けてきた者の視点から「大理から見た湖南省のペー族」という論文を提出し、報告をおこなった。

成果

ペー族の公表された最新の中国国内総人口は約193万人（2010年）に上る。唐代に雲南の大理盆地を都として栄えた南詔国、続く宋代の大理国の末裔と言われ、近年でも100万人以上が雲南省大理白族自治州に集中して居住する。ところが、雲南省大理から遠く離れた湖南省桑植県で1984年にペー族4万人余りが、宋代にモンゴル勢力によって大理国が倒された後、モンゴル軍に参加して遠征した人びとの子孫だとして、国家の認定を受けた。つまり、歴史を700年遡っての民族の認定がおこなわれた。その後、当県では漢族や土家族として登録していた人びとが民族的帰属をペー族に変更する事例が増加し、2000年の桑植県のペー族人口は9万5,000人を超えた。大理白族自治州以外の全国の県の中で、最も多数のペー族が居住する地域となっている。つまり、桑植県を中心とするペー族は、特異な存在と言える。

80年代初頭におこなわれた湖南省のペー族の民族識別は、80年代前半に中国でおこなわれた一連の民族識別における典型事例の1つとして注目に値する。また、その後、今日に至るまでの湖南省ペー族の文化発揚・復興・再創造のプロセスも興味深い。

私の論文では、まず、80年代の民族識別の根拠とされた歴史的資料、民族集団名称、言語、その他の文化的特徴のうち、後者3点に関して指摘された大理との共通性について、決定的な根拠とするには問題点が残ることを考察

した。同時に、桑植県のペー族の民族的帰属の変更が成功した背景には、省内の民族識別において先行した土家族の問題の存在、土家族問題にも関与しつつ、ペー族の民族識別を牽引した中心的人物らの存在が重要であったと指摘した。この報告に対しては、他の報告には見られなかった反響があった。今後、報告時点では省いた詳細な論拠を加えて、最終稿を完成させる予定である。大会の主催者では、本シンポジウムの成果を論文集として中国の出版社から刊行する計画を立てている。

「第12回国際オーストロネシア言語学会における研究報告」

2012年7月1日～7日 インドネシア、ウダヤナ大学

菊澤律子

趣旨

菊澤はオーストロネシア言語学を専門とし、記述言語学、比較言語学、オーストロネシアの先史に関する学際的研究をすすめている。第12回国際オーストロネシア言語学会では、昨年度末にマックスプランク進化人類学研究所、ベルゲン大学、オックスフォード大学への派遣時に研究をすすめ、帰国後さらに発展させた形態統語論的研究の内容の中で、とくに同系構文の特定に焦点をあてて研究報告をする。発表タイトルは Identifying Cognate Structures in Austronesian Comparative Syntax (オーストロネシア比較統語論における同系構文の特定)。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、研究報告を行い、運営委員会に出席した。

成果

さまざまな関連トピックの中から、データベースを利用して大量のデータを対象とした同系構文の分析をするときに着目すべき特徴に焦点を絞り、どのような観点で、何を基準にデータベース化してゆくことがこのようなアプローチにおいて有効であるのか、インド・ヨーロッパ語族を対象とした格標識の比較統語論的研究とオーストロネシア諸語を対象とする場合の違い等にも触れながら、報告した。

学会で得たフィードバックを、現在、ベルゲン大学の比較統語論研究チームとの協力を検討しているオーストロネシア諸言語の比較統語論的研究のためのデータベース構築に反映させる予定である。

「国際伝統音楽評議会『音楽とマイノリティ』研究グループの第7回国際研究大会における研究発表」

2012年8月6日～13日 イスラエル、ツファット学術大学

寺田吉孝

趣旨

イスラエルのツファット市で開催される国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第7回国際大会に参加し研究発表をおこなう。

実施状況

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第7回国際大会は、イスラエル、ツファット市にあるツファット・アカデミア大学を会場として、8月8日から11日まで4日間にわたり開催された。「音楽とマイノリティ研究の方法論」「音楽とマイノリティ・ナショナリズム」「映像メディアにおけるマイノリティ音楽の表象」「音楽教育とマイノリティの文化的アイデンティティ」の4つの研究テーマに沿って23本の研究発表がおこなわれた。申請者は大会1日目の第2セッションの司会を務めると共に、2日目の第3セッションにおいて研究発表をおこなった。

成果

国際伝統音楽評議会 (International Council of Traditional Music) は世界最大規模の音楽・芸能学会であり、傘下にある19の研究グループが定期的に国際大会を開催している。「音楽とマイノリティ」は、特に活発に活動を続けている研究グループの1つであり、大会の報告書も遅延なく刊行されてきた。

申請者は大会統一テーマの1つである「音楽とマイノリティ・ナショナリズム」に沿って、「A circulatory flow of Indian music and minority nationalism」の題目で発表をおこなった。発表では、杉本良男が近年提唱している文化の「環流」の概念を援用して、インド古典音楽・舞踊が世界各地にあるインド人コミュニティにおいて実践されているだけでなく、その活動がインド国内における音楽文化にも多大な影響を与えており、そのような現代的な展開を分析するためには、どちらか一方だけを研究対象とするだけでは不十分であり、複数地域間の双方向的な流れを調査することが必要である点を指摘した。また、「環流」の概念は、音楽の真正性と特定の国家・地域を無批判に結びつける従来の音楽研究の傾向を相対化する点でも有効であることを述べた。

全体討論では、マイノリティ概念の再検討が提案され、2013年7月に上海で開催予定である同評議会の世界大会

で、このテーマに沿ったパネルまたはラウンドテーブルを組織することが決定された。また、研究グループの次回の大会（2014年に開催予定）における研究テーマに関する議論がおこなわれ、これまでの民族や宗教などを軸にしたマイノリティの事例研究に加え、ポストコロニアル理論、文化政策、デジタル・メディア、亡命、セクシュアリティなどをテーマとして加える必要性が議論された。

「アメリカ言語学会大会参加および講演」

2013年1月2日～9日 ポストン マリオネット コーブリー プレイス

菊澤律子

目的

今回の渡航は、アメリカ言語学会の参加、および歴史言語学に関する特別ワークショップでの講演を目的とする。

この特別ワークショップは、世界各国で活躍する歴史言語学におけるさまざまな分野の専門家が一堂に会し、それぞれの分野での最新研究動向等を披露することで、今後の歴史言語学研究の発展に結び付けることを目的として、申請時現在、出版準備がすすめられているルートリッジ（Routledge）出版の学術ハンドブック・シリーズの『歴史言語学に関するルートリッジ・ハンドブック』（*The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Claire Bowern and Bethwyn Evans）の編集者の発案・企画により、開催されるものである。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、講演を行った。

成果

アメリカ言語学会における歴史言語学に関する特別ワークショップで講演を行った。

菊澤はこれまで、オーストロネシア諸語を対象とした歴史言語学的研究を専門としており、このハンドブックでは、「オーストロネシア諸語」（The Austronesian Language Family）という項を担当している。ワークショップに参加することで、『ハンドブック』の出版に先立ち、歴史言語学の諸分野における最先端の研究成果を聞く機会を得、担当項に反映させることができたこと、また、自分の項に関する内容を発表し、出版前にフィードバックを得ることができた。

「第9回国際オセアニア言語学会への出席」

2013年2月4日～8日 オーストラリア、ニューキャッスル大学

菊澤律子

趣旨

菊澤はオーストロネシア言語学を専門とし、記述言語学、比較言語学、オセアニアの先史に関する学際的研究をすすめており、第9回国際オセアニア言語学会で、“The Ergative-to-accusative Hypothesis Revisited: A Response to Ball 2007” というタイトルで研究報告を行うことを目的とする。これは、菊澤が学位論文以来、取り組んできたテーマに関する発表であるが、今回は特に Kikusawa 2002, 2003への批判記事（Ball 2007）に対して公の場で学術的に回答する。

実施状況

予定通りの日程で渡航し、研究報告を行い、座長をつとめた。

成果

オセアニアの言語を専門とする研究者が集まるもっとも大きな国際学会の場で研究内容を報告しフィードバックを得たこと、また、現在進行中の関連研究に関する発表を聞き、それに関する質疑を行うことで、当該研究をよりレベルの高いものにし、また、新たな研究分野における視点を取り入れることができた。

学会で得たフィードバックを反映させた response article を *Oceanic Linguistics* に投稿予定である。

総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業

総合研究大学院大学の教育研究の中核を担う若手教員を、海外の独創的・先進的な教育研究を行っている大学・研究機関等に派遣し、専攻する学問分野等の調査研究を通じて教育研究能力等の向上を図り、本学の国際的通用性の向上に資することを目的とし、併せて総研大国際ネットワークを構築するものとして、総合研究大学院大学若手教員海外派遣事業がある。

2011年4月19日～2012年4月18日 フランス

三島禎子

これまで西アフリカを故地とするソニンケ民族について、文化人類学的な立場から数々の調査研究を積み重ねてきた。その成果は、「家族形態の研究」、「村落開発に関する研究」、「労働移民に関する研究」、「商業と移動に関する研究」という4つの大きなテーマに集約される。そのもっとも大きな成果は、この研究において調査の対象としたソニンケ民族が経済的な動機で頻りに移動していたために、かれらの母村と移動先で調査をおこなっただけでなく、それに加えて移動ルート上にある複数の滞在地においても調査をおこない、20世紀以降のソニンケの移動についておよそその全体像を把握できたことである。すなわち、各時代に経済の中心となった地域に移動していたという事実、移動には商業という経済活動を常にともなっていた事実、そしてアフリカにおける20世紀の移動ルートから、今日におけるアジア経済の発展に対するソニンケの対応としての移動ルートまでを明らかにした。

今回の調査研究の拠点となるパリは、20世紀中葉以降のソニンケの主たる移動先である。そして植民地支配という歴史的つながりからソニンケがパリのアフリカ系移民のなかでも大多数を占めてきたという事実において、本研究において重要な場所となっている。他方、フランス社会においては政治的なレベルでソニンケの同化あるいは統合という点が問題となってきた。またフランスの移民研究においてもソニンケ研究はフランスのアフリカへの窓口としての重要なテーマであり、そのような植民地支配に始まった歴史的な蓄積をもっている。さらに労働移民の帰還という関心から、ソニンケの母村の社会インフラの整備や経済開発もまた移民研究の大きなテーマである。

それに対して三島の研究範囲は、今日の労働移民という一面にとどまらず、世界中で貿易を展開する大商人としてのソニンケ、また歴史を通じて地域経済の中心的役割を担いながら移動と商業を営んできたソニンケという側面におよぶ。その点においてフランスを中心とした旧宗主国によるソニンケ研究とは異なり、それを超越する方向をめざしている。

今回はフランス国立パリ・デカルト大学の客員研究員として調査研究に従事した。同大学の人口開発研究所には2009年5月から11月の半年間、客員研究員としての招聘を受け、国立民族学博物館の「リーダシップ支援経費」の援助を得て滞在した経緯がある。そこでは「アジアにおけるセネガル人の商業ネットワークについて」の研究を深め、その成果は小川 了編著『セネガルとカーボベルデを知るための60章』に3篇の論文（2010年刊行）として、また三島禎子「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」小倉充夫・駒井 洋編『ブラックディアスポラ』明石書店（2011年刊行）に発表した。今回はその成果を踏まえ、同大学の人口開発研究所が主催する「アフリカ出身者の国際移動に関する比較研究」についての連続セミナーの運営にたずさわり、自らも参加した。同セミナーには世界各国から研究者が集まり学際的な意見交換をおこなう。そこにおいて上述のような国際移動に関する斬新な見解を提示し、有益な議論を交わすことができた。

本研究は、アフリカの一族を対象にしたケーススタディとして、あるいはまた労働移動という側面からグローバル化された世界における今日的な現象の研究のひとつにすぎないとみなされがちである。しかし、本研究は以下の点において普遍的なテーマにつながる学際的な研究である。第1に、ソニンケという民族がアフリカという地域において果たしてきた歴史的役割を考えると、アフリカ経済の再発見につながるものである。ソニンケによる商業の展開をとおしてアフリカ地域が歴史的にどのような経済的活力を内包していたのかを探ることによって、低開発といわれる今日のアフリカ経済が異なった意味を提示することがわかる。それはまた、今後のアフリカ経済の発展にとっても重要なポイントになる。第2に、従来の移民研究の分析枠ではエマニュエル・トッドというフランスの人口学者が主張したように、移民は社会にとって「同化か排除か」という課題をもたらすだけであるが、本研究では、人はなぜ移動するのかというような個人的な動機や民族文化的な要因について具体的な問いを提出する。その問いは、国民国家の存続や、地球上の経済格差といった従来の分析枠を超え、移動における文化的、あるいは宗教的な側面がうきばりになる。そしてさらに、移動する人がどのように政治に関与するのかという点において、アフリカおよび他地域の民族との比較研究を可能にする視座を提示する。このように、本研究はケーススタディと比較研究という両面をもち、さまざまな学問的広がり内包する。

本研究では「アフリカ人商人の国際移動に関する歴史人類学的研究」をさらに深めるとともに、フランスの研究機関との密接なる提携において国際的交流の成果を生み出す重要な機会を得ることができた。具体的には、個人的業績のほか、2012年度にパリ・デカルト大学の人口開発研究所と学術協定を結び、同年11月には同研究所・所長を招いて日仏研究フォーラムを開催し、これを発展させて2013年度に国際シンポジウムを開催する旨を了解した。

2012年4月5日～2013年2月2日 アメリカ・カナダ

太田心平

20世紀の100年間で、朝鮮半島からは人口の10%もの人びとが海外に流出した。前半の植民地期には、旧日本の政

策による移住や、抵抗としての移住の歴史があり、後半には、貧困からの脱出や、クオリティー・オブ・ライフを求めた移民が目立った。数こそ凄まじいが、いずれも政治経済的な解放を求めたもので、移民の動機としては他の地域の人びとにも共通して広く見られるものだった。

ただ、21世紀に入ってから、状況が一変した。第1に、韓国を後にする国外移民者たちの勢いは、20世紀よりもさらに急増している。ここ10年間には、毎年平均で人口の少なくとも0.3%もの人びとが国外に移民しており、この勢いが続けば21世紀には韓国の人口の30%以上が他国に流出してしまう計算となる。第2に、移民の目的も、20世紀とは大きく違っているとされる。政治的な難民や亡命、経済的な移民は、ほとんどなくなったが、代りに目立つようになったのが、「絶望移民」と呼ばれる国外移民の形態である。

絶望移民とは、1980年代に民主化学生運動を担った世代の人びとが、民主化（1993年）後の現在に韓国の国家や社会に絶望し、国外に移民することであり、2001年にはすでに大手新聞紙上で話題となった。ここで「絶望」といわれるものは、次にあげるような感情の総体とされる。第1に、青春を運動に費やしたにもかかわらず、その代価を得られていないという損失感があげられる。第2に、民主化前に運動勢力が強く批判していた貧富の格差や権威主義が、民主化後に一部でむしろ助長されているという敗北感がある。第3は、民主化運動が終わったことで、ハビトゥスとしての闘争行動の矛先を失くしたという喪失感である。第4に、この世代が独特の感情や文化をもつ集団として社会から異化されたり、逆にみずから社会に溶け込みたがらないという、他の世代からの疎外感がみられる。

太田は、こうして世代が韓国国内のあらたな社会分化として顕在化している点に着目し、文化人類学的な視座から韓国の政治文化を研究してきた。そのなかでは、大韓民国という国家の政治史や韓国社会の社会史の文脈を雄弁に語りうる文化的な現象として、しばしば絶望移民の存在にも言及してきた。また、社会内集団が集会的感情を政治的にもちいているという側面から、単一民族的で内部葛藤がみえにくい韓国の社会文化を、人類学的な政治文化研究の議論に節合させることにも成功してきた。

今回の調査研究では、彼／彼女らが移民後に経験している社会生活、母国感情、世代対立についてフィールドワークをおこなった。つまり、既存の社会に絶望した者どうしがどのように人間関係を結び、絶望させた社会（母国社会）との関係をどうやりくりし、絶望に共感しない人びととの軋轢をどうやって乗り越えているのかという、移民後の彼／彼女らの日常的な政治実践をひもといた。この意味で、今回の調査研究は、韓国の政治文化研究に寄与するためのものである。

また、これと同時に太田は、米国の人類学界においてセンターとしての役割を担ってきたアメリカ自然史博物館の研究者たちと議論を重ねながら、この独特の移民現象のメカニズムを解明しようとした。この意味で、今回の調査研究は、太田がこれまでの行ってきた研究を、移民研究という新たな方向に発展させるための追跡調査であり、先行研究のない絶望移民に関する萌芽的研究でもあった。1960年代生まれを中心とした韓国系の人びとに独特の絶望移民という行為は、移民研究の分野において旧来から定式化されてきた移民の動機の類型論からいって、どの類型にも当てはまらないものであり、研究者たちの関心を呼んでいる。「絶望移民」の移民動機や移民後の生活を明らかにした本研究は、今後人類学的な移民研究の進展にも寄与するものと期待される。

リーダーシップ支援経費による事業・調査

新広報用ポスター掲載の標本資料の展示

概要：2011年度末に作成した新広報用ポスターの広報効果を高めるため、ポスターに掲載されている標本資料をオセアニア展示場入り口付近に常設展示した。ポスターに掲載された標本資料に興味を示した来館者が実物を観覧することができることによって、本館の展示に対してより一層の興味をもってもらえるようになった。

学術情報リポジトリ運用指針の多言語翻訳

概要：学術情報リポジトリの運用指針は、日本語版、英語版、スペイン語版、ドイツ語版、フランス語版、ロシア語版、中国語（簡体字・繁体字）版、韓国語版が作成され Web 上で公開されている。このうち翻訳の見直しなど英語版の精査がおこなわれたため、英語版をベースとして作成されているスペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の各版の再翻訳をおこなった。

学術情報リポジトリの運用方針は、その Web サイトから誰でも読めるものであるが、本館のように多言語で運用方針を公開している機関は他に無い。今回の翻訳により、本館の学術情報リポジトリがどのような方針で構築され、公開されているかを正しく、広く世界に広報できるようになった。

平成24年度 外国調査研究旅費報告書

共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究の学術的研究」の国際化に関わる中国内モンゴル調査

申請者：小長谷有紀（民族社会研究部教授）

概要：国立民族学博物館では梅棹忠夫の残した資料について、民族学・文化人類学の歴史を記録する学術アーカイブズとして整理を進めており、共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」はさらにそれを分析して公開する目的をもつ。この共同研究を進めるにあたっては、調査対象地域の現地研究者との研究協力が必要であり、中国内蒙古大学とは国際協定のもと協力を得る環境は整っている。

今回は、事業レベルの協定を締結し具体的な作業を開始することにより、共同研究の国際化という本館の課題を実現する。具体的には、北京では中央民族大学および社会科学院で聞き取り調査、フフホトでは内蒙古大学の学術的支援による内蒙古博物館資料調査をおこない、通遼では内蒙古民族大学の学術的支援による民族博物館資料調査及び、牧畜民宅での資料調査をおこなった。

東日本大震災被災地復興支援のための情報の収集と整理

申請者：林 勲男（民族社会研究部准教授）

概要：2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれによる津波、さらには福島第一電子力発電所の事故による被災地および被災者に対し、民博による支援の在り方を検討するための情報収集と整理を実施する。

本事業では、岩手県・宮城県・福島県内の被災自治体の復興計画並びに実施計画の公開情報および東日本大震災関連の遺構・記念碑・モニュメント・記念公園などの保存・設置・建造をめぐる動きに関してウェブ上の情報を収集し、リストを作成するとともに位置を地図に落とし込む作業をおこなった。その成果を民博HP上からリンクを張り公開することで、情報の活用を広く社会に促すことができた。

東日本大震災被災地における無形文化遺産の復興支援関係資料の緊急収集

申請者：林 勲男（民族社会研究部准教授）

概要：2011年3月に発生した東日本大震災による甚大な被害に対して民博では、有形・無形文化遺産の復興支援をおこなってきており、普代村の鶴鳥（うのと）り神楽、釜石市の虎舞、大船渡市の鹿踊りの衣装・道具について、復興制作が進められることとなった。

本事業では6月に開催した研究公演「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」で岩手県大船渡市から招へいた仰山流笹崎鹿踊保存会の仲立（踊り手のリーダー）の衣装・道具一式を復興制作の記録として収集した。衣装・道具類一式を収集するに当たっては現地調査も実施し、製作過程についても詳細な情報を収集し、その調査データは企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」に活用した。また同収集資料については「日本の文化」展示の新構築に際して展示をおこなった。

平成24年春季特別展『今和次郎採集講義——考現学の今』

概要：青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアムで開催された「今和次郎 採集講義」展の全資料を展示して多岐にわたる今和次郎の活動を紹介するとともに、民博所蔵・展示資料を併せて取り上げ、本館展示では語り切れない、民族学・文化人類学研究の最前線と民博所蔵資料の豊かさを示し、観覧者に、今和次郎の活動と民博の諸活動を再発見してもらう特別展を開催した。

本事業では、展示施工・資料輸送及び演示・広報物作成、開幕時のオープニングセレモニーをおこない、開幕後は、展示運営と同時に、シンポジウム等のイベント開催、展示記録としてパノラマムービーの作成をおこなった。閉幕後には撤去及びその後の青森県立美術館・パナソニック汐留ミュージアム各借用先への資料返却をおこなった。

研究公演『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』神戸会場

概要：本事業では、東日本大震災で被災した大船渡市の仰山流笹崎鹿踊保存会を招き、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田区において研究公演を実施した。本研究公演は、東日本大震災被災地の無形文化遺産に関する調査研究とそれに基づく支援の成果を広く紹介するため実施され、以下の成果をあげた。

・生活と密接に結びついた民俗芸能の被災とはいかなるものか、その復興にはどのような条件が必要かを示しながら、東日本大震災被災地の長期的な復興過程に継続的な社会の関心を促した。

・神戸、東北の2つの大災害被災地であることによるこれまでの支援／受援関係を、共に復興を目指すという新たな「つながり」へと変化させる1つの契機となった。

- ・民博が支援に対する社会的役割を果たそうとの積極的なメッセージを約2,000人の参加者をはじめ、社会に発信した。

夏のみんぱくフォーラム2012関連連続講座『博物館にさわる』

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新情報展示（探究ひろば）を広報するため企画された新情報展示PR事業「夏のみんぱくフォーラム2012 「知りたい、触れたい、調べたい——『みんぱく流』探究のすすめ」の一環として実施した連続講座であり、「世界をさわる」コーナー新設のキャンペーンとして、幅広い角度から「さわる展示」の魅力と可能性を来館者に伝えるため6月～8月の土曜、祝日の午後6回の講演とワークショップを実施した。

本事業の実施により、来館者が、情報を集積し、接合し、発信していく空間としての博物館に新たな関心を持ち、その社会的役割について理解を深める機会となるとともに、来館者を新情報展示へと誘導した。

新ヨーロッパ展示PR事業関連研究公演

『神に捧げる響きと民衆の踊り——バッハからバルトークへ』

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新ヨーロッパ展示を広報するため企画された新ヨーロッパ展示PR事業の一環として実施した研究公演である。本公演では、新たなヨーロッパ展示に合わせ、クラシック音楽を生み出したヨーロッパの伝統の中で、とくに舞踏音楽を中心とした民衆文化をダイナミックに表現して伝えることとし、バロック音楽の大家と見なされるバッハの音楽における舞踏的要素という観点からクラシック音楽と民衆文化との関連を提示した。

本公演の実施により、来館者が、解説者による古楽、バロック音楽の説明とともに、第一線で活躍している音楽家による演奏を体験することで、音楽を通してヨーロッパの歴史と文化への関心と理解を深める機会になるとともに、来館者を新ヨーロッパ展示場へと誘導した。

写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー

概要：本事業は9月開催の企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』で使用した写真パネルを用い、本企画展のプレ展示をかねて実施した。実施にあたっては、東日本大震災において人間文化研究機構の一員として活動した国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館の写真パネルとともに、東北太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の現地本部が置かれた仙台市博物館で開催した震災復興パネル展の写真展示をおこなった。

この展示により、9月27日より開催の企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」の効果的な広報活動をおこなうと共に、昨年度実施した民博をはじめとする人間文化研究機構3機関及び民博教員が携わった愛 deer プロジェクト東北地方への支援活動を来館者に解説することができた。

夏休み観覧無料企画『世界の夏を楽しもう』

概要：夏の節電対策に対する取り組み「7/21～8/26の観覧無料化」をより効果的に実施するため、小中学生及び家族連れを主な対象として、夏の楽しい過ごし方や涼の取り方などを紹介した。

世界各地の夏の過ごし方や涼の取り方などを教員が展示場で話す「真夏サロン」、涼を感じる館内の展示資料をめぐるワークシートを作成することを中心に、ものづくりワークショップなど「夏」をテーマにした各種イベントを通して、世界の文化への関心と理解を深める機会となるとともに、民博の魅力を広く社会にアピールすることで館の知名度を高めることができ、来館者の増加につながった。

中国展示にかかる時空間画像データ表示装置の開発

申請者：野林厚志（研究戦略センター教授）

概要：本事業は、これまでに民博に蓄積されてきた画像データを活用し、現地社会が変容していく動態を時間軸と空間軸にそって可視化させるためのデータ表示プログラムを開発するものであり、特別展「みんぱくキッズワールド」の携帯型展示資料情報表示端末、特別展「ウメサオタダ展」のPhotoviewer、本館展示場「探究ひろば」のイメージファインダーでの開発経験を十分に生かし、それらを拡張、進展させた連続性を持ったものである。

本プログラム開発により、本館教員の研究、調査活動を通じて蓄積されてきた中国地域に於ける民族誌画像データを、撮影年、民族、撮影された主題、背景にもとづき、分類、検索して表示することが実現し、

画像資料が持つ学術資源としての価値を高めるとともに、将来的に蓄積されていく新たな資料と連動させることによって、時代と空間について拡張性をもったデータベースとして学術研究にきわめて有効なツールとなることが期待できる。

『鵜鳥神楽——みんぱく公演』

申請者：杉本良男（民族文化研究部教授）

概要：みんぱくでは震災後速やかに被災地支援の方針を打ち出し、有形・無形の文化遺産の復興支援を中心に活動を展開しており、その取り組みの一環として連携展示「記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産」を開催したが、本公演ではその関連イベントとして、民博施設内で鵜鳥神楽の実演をおこなった。

この公演により、展示内容についてより理解が深まる機会となり、また、これまで伝承されてきた三陸沿岸部の文化を実際に見て、触れ合うことで、来館者に東日本大震災についての関心をもってもらうことができた。

日本の文化展示におけるつくりものコーナーの構築等

概要：2012年度は日本展示場の祭りと芸能、日々の暮らしが新構築の対象であり、祭りと芸能のセクションで最大の新構築となるコーナーの作りものの展示においては、熊本県山都町の巨大な造り物「金剛力士像」を中心に、穀類や野菜を材料としてつくられる富山県福岡町のつくりもん「蘭陵王」、瀬戸物を材料とした島根県平田の平田一式飾り「義経と弁慶」を展示した。

これまでの祭りや芸能関係の展示では、神事中心に構成されていたこともあり民衆の造形感覚や創作力を必ずしも十分に引き上げられてこなかったが、各地の祭事において人びとが造形に様々な趣向を凝らしたつくりものを展示することで、来館者に対してモノの持つ迫力や造形感覚、創作力がより伝わる展示が実現した。

新ヨーロッパ展示関連みんぱく映画会

概要：本事業は、2012年3月にオープンした新ヨーロッパ展示を広報するため企画された新ヨーロッパ展示PR事業の一環として実施した映画会である。

作品の選定にあたっては、ヨーロッパ展示が取りあげたヨーロッパの現状に関わるテーマとして「移民と労働者」をとりあげ、ヨーロッパの多様な歴史・文化・信仰から生み出された生活様式、世界を変えることになった近代の産業革命以後の文化、グローバル化した現代の人の移動と文化の交流が生み出す想像力を実感し、ヨーロッパ社会と文化への関心と理解を深める機会になるとともに、来館者を新ヨーロッパ展示場へ誘導する効果を生み出すことができた。

南部藩壽松院年行司支配太神楽みんぱく公演に係る撮影業務委託等

概要：東日本大震災で被災した文化遺産レスキュー活動を通じての民博の被災地支援について広く知ってもらうため、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』の関連事業として神楽公演を実施するにあたり、そのビデオ撮影及び写真撮影を委託した。これにより、今後の民博の研究・教育活動及び広報活動に活用可能な本公演の記録映像及び記録写真を収録することができた。

新ヨーロッパ展示PR事業関連 パンセミナー

概要：今回のパンセミナーでは「ヨーロッパ展示」リニューアルの記念イベントの一環として、2013年1月から3月にかけて、ヨーロッパ各地に根づくパン文化を4回にわたり紹介した。毎回のパンセミナーでは、フィンランド、ルーマニア、ドイツ、イタリアの特色あるパンと文化や宗教とのかかわりについて、各地のパンを味わいながら、民博研究者とゲストの話を参加者が聞いた。

本セミナーを通してヨーロッパのパンと文化や宗教とのかかわりを実感し、ヨーロッパ文化への関心と理解を深める機会となったと同時に、参加者をヨーロッパ展示場へ誘導する効果を生み出した。

梅棹資料室整備

申請者：杉本良男（民族文化研究部教授）

概要：情報システム課事務室の第1計算機室への移転に伴い、空き室となった本館3階事務室および映像機器利用コーナーを「梅棹資料室」として使用するため、床・天井等の必要な整備をおこなった。

本整備により、「梅棹資料室」の床面積は約2倍となり、梅棹資料の集約、整理保存管理が容易におこなうことが可能となった。また、梅棹資料に一部占有されていた「みんぱく準備室」及び「みんぱく図書室書庫」は本来の目的に沿った利活用が可能となった。

スマートフォン利用者に対するあらたな広報手段の開発

申請者：飯田 卓（民族社会研究部准教授）

概要：スマートフォン用専用アプリの開発を通して、展示者側と利用者側をつなぐ新たな仕組みのあり方を模索する。民博ではまだ実施していないスマートフォン利用者向けのサービスを、特別展開催に関連したかたちで実験的に実施した。

スマートフォン利用者は、特別展に関する情報をいつでもどこでもアプリを通じて享受し、特別展へのアクセスが容易になっただけでなく、展示者側もアンケートを通じて利用者からのフィードバックを容易に収集することができた。今後は、特別展期間中の利用状況を分析することで、より効果的な普及を期待できる。

（その他、館の整備、運営などに関するもの15件）

みんぱく研究懇談会

第240回 2012年6月27日

伊藤敦規 「民族学博物館とソース・コミュニティとの標本資料情報協働管理について」

第241回 2012年7月25日

川瀬 慈 「民族誌映画制作における映像ナラティブの探求」

第242回 2012年9月26日

河合洋尚 「中国人類学における漢族研究の動向」

第243回 2012年10月24日

曹 建南 「日本における超自然的茶の文化」

第244回 2012年11月21日

宮本万里 「『環境にやさしい我々』という自画像および主体をめぐる文化の政治について——現代ブータンの国立公園の事例から」

第245回 2012年12月19日

Gordan Nikolov “Folk pottery in Macedonia: Field experiences”

第246回 2013年1月23日

加賀谷真梨 「＜地域共同体＞の再定位に挑む——沖縄離島社会における高齢者福祉の展開に着目して」

第247回 2013年2月27日

松本雄一 「“周縁”社会における文明の初期形成——アンデス形成期の事例から」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2012年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新規	基盤研究（A） 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015
	基盤研究（A） 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究（B） 一般	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発	園田直子	2012 ～2014
	基盤研究（B） 一般	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	福岡正太	2012 ～2014

新	基盤研究 (C) 一般	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究	松岡葉月	2012 ～2014	
	若手研究 (B)	中古品と非正規品の越境取引にみる現代アフリカの消費文化に関する研究	小川さやか	2012 ～2015	
	若手研究 (B)	現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015	
	研究活動スタート支援	ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造・流通に着目して	柳沢英輔	2012 ～2013	
	研究活動スタート支援	生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から	新本万里子	2012 ～2013	
	研究活動スタート支援	現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究	呉屋淳子	2012 ～2013	
	規	研究成果公開促進費 (学術図書)	ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言語の生成と展開	マリア・ヨトヴァ	2012
		特別研究員奨励費	タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究	八塚春名	2012 ～2014
		特別研究員奨励費	民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして	田村うらら	2012 ～2014
		特別研究員奨励費	タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究	岡部真由美	2012 ～2014
	特別研究員奨励費	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	小長谷有紀 Caijilahu	2012 ～2014	
継	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015	
	基盤研究 (A) 一般	モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究	小長谷有紀	2009 ～2013	
	基盤研究 (A) 一般	物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証	吉田憲司	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究	林 勲男	2008 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究	長野泰彦	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究	池谷和信	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	ロシア極東森林地帯における文化の環境適応	佐々木史郎	2009 ～2012	
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015	
	基盤研究 (B) 一般	マダガスカルにおける森林資源と文化の持続——民族樹木学を起点とした地域研究	飯田 卓	2010 ～2012	
	続	基盤研究 (B) 一般	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	山中由里子	2010 ～2014
		基盤研究 (B) 一般	社会的包摂のための実践人類学的研究	鈴木 紀	2011 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権	岸上伸啓	2009 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究	朝倉敏夫	2009 ～2012
		基盤研究 (B) 海外	中国の「国境文化」の人類学的研究	塚田誠之	2010 ～2012
		基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用	野林厚志	2010 ～2013
		基盤研究 (B) 海外	旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較	齋藤 晃	2010 ～2012

	基盤研究 (B) 海外	東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動	田辺繁治	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究	寺田吉孝	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究	Peter J. Matthews	2011 ～2013
	基盤研究 (B) 海外	宗教と移民のアイデンティティ・共生： 南アジア系ディアスポラを事例として	辻 輝之	2011 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と 言語支援とのかかわり	金 美善	2010 ～2012
	基盤研究 (C) 一般	21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究 ——ベルリン外国人集住地区の事例	森 明子	2010 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グロー バリゼーションの研究	吉本 忍	2011 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリ ー・アプローチ	韓 敏	2011 ～2013
	基盤研究 (C) 一般	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	笹原亮二	2011 ～2014
継	若手研究 (A)	グローバル化時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研 究	陳 天璽	2010 ～2013
	若手研究 (B)	伝統的技術の戦略的継承法 ——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究	上羽陽子	2010 ～2012
続	若手研究 (B)	実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエ ージェントの人類学的研究	太田心平	2010 ～2012
	若手研究 (B)	オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究： フィジー諸島共和国の事例から	丹羽典生	2010 ～2012
	若手研究 (B)	ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に 関する政治人類学的研究	宮本万里	2010 ～2013
	若手研究 (B)	東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究	増野高司	2011 ～2013
	若手研究 (B)	チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究	吉本康子	2011 ～2013
	若手研究 (B)	生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様 性と普遍性	風戸真理	2011 ～2014
	特別研究員奨励費	聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究 ——現代のイギリスを事例に	河西瑛里子	2010 ～2012
	特別研究員奨励費	東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族 考古学的研究	東村純子	2011 ～2013
	特別研究員奨励費	民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築	梶丸 岳	2011 ～2013
	特別研究員奨励費	互助実践の外延的拡大とその位相 ——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究	森 一代	2011 ～2013

【新規】

基盤研究 (A) 一般

世界の中のアフリカ史の再構築

代表者 竹沢尚一郎

目的・内容

本研究の目的は、経済、政治、交易、宗教、生態、考古などの諸分野を専門とし、地域的にもアフリカ全土をカバーする研究者の結集により、『アフリカの歴史』全5巻を完成させることにある。

歴史研究は当該の諸社会の深い理解のための前提条件であるが、わが国のアフリカ史研究は立ち遅れた状況にある。そのため、上記の目的の達成のためには、多数の研究者による長期にわたる共同研究が不可欠である。

本研究はこうした観点から構想されたものであり、本研究が実現されたなら、アフリカ史研究はもちろん、文化

人類学、地域研究、国際関係論、政治学、開発研究などの諸分野の一層の発展のために多大な貢献をなすとともに、とりわけ文化人類学的なアフリカ研究をさらに発展させるための基礎的資料となるはずである。

活動報告

本研究の最終目的である『アフリカの歴史』全5巻を世界的に評価される水準にするには、1) 斬新な問題意識の構築と、2) 未公刊史料の開拓、および3) 世界各国の研究者との緊密な連携が不可欠である。

本年度は、まず本研究に参加する研究者全員が参加する研究会を組織して、徹底した討議を通じて1)の斬新な問題意識の構築をめざした。

また、2)の未交換資料の開拓のために、各研究者が現地に赴いて研究を進めた。具体的には、アフリカ各国での考古学の発掘調査の実施やその最新の知見の吸収、各地域の資料館や文書館での一次史料の入手、口頭伝承の収集とその分析につとめた。

さらに、3)の世界的な研究ネットワークの拡充に関して、各自がこれまでに築いたネットワークの連携を強化した。

本研究はアフリカ全土をカバーし、なおかつ通時的にも、歴史の始まりから現代までをカバーするものであるため、以下の分担を行った。

地域別分担 北アフリカ担当=大稔哲也、高宮いづみ(連携研究者)。東アフリカ担当=鈴木英明、松田素二(連携研究者)、富永智津子(研究協力者)。西アフリカ担当=竹沢尚一郎、坂井信三。中部アフリカ担当=杉村和彦、武内進一(連携研究者)。南部アフリカ担当=北川勝彦。

分野別分担 政治史=松田素二、武内進一。経済史=北川勝彦、富永智津子、武内進一。対外交渉史=竹沢尚一郎、大稔哲也、富永智津子。生態史=杉村和彦。農耕史=杉村和彦、竹沢尚一郎。オーラルヒストリー=坂井信三、松田素二。ジェンダー史=富永智津子。考古学=竹沢尚一郎、鈴木英明、高宮いづみ。

テーマ的には、以下の課題を念頭に置きながら、各研究者が研究を遂行した。1) 新たな歴史資料の発掘(考古学、碑文、旅行記、行政文書、植民地資料、口述記録等)。2) アフリカ史記述のための単位の設定。3) 世界の中のアフリカ史記述の実現(中東、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジアとの関係)。4) オーラルヒストリーを歴史記述に採用するための手続きの明確化。5) 環境変化と社会経済システムの変容の関係を重視。6) アフリカ史研究の意義の明確化(世界史・人類史の視点からの明確化)。

本年度は、このうちとりわけ1)、2)、3)に重点を置いて、研究を進めた。

基盤研究(A) 一般

アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く

代表者 西尾哲夫

目的・内容

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト(千一夜物語)は、シリアで私家本として伝承されていたが、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭にとまなう中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、現在のようになった。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

活動報告

本研究では、前述した目的を達成するために、アラビアンナイト形成に関する新仮説、1) エジプトではシリア系物語群を核とする複数の伝承が並行的に存在し「いくつものアラビアンナイト」が流布していたこと、2) エジプト系伝承形成には中流層の文字文化をめぐる社会変化が関係していること、3) 複数伝承併存状況がガラソニ以降に終焉しヨーロッパ化された文学伝統の中で標準化が進行したことを実証するため、具体的に以下の研究項目を実施した。

- 1) 文学伝統の地域民衆化で形成されたエジプト系写本群の分類と系統の分析として、①全エジプト系写本中の物語構成情報データベースの作成、②新発見の非標準写本の校訂出版と系統の分析、③非標準伝承になる物語の系統分析を実施した。これらは全期間にわたる研究であり、順次他の写本を対象とする。
- 2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、①「カルカット第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙辞典の編纂→全期間、②国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析とそのための海外調査→2月～3月のべ30日、③国民共通文化形成における民衆文化の現代的変容の分析とそのための海外調査→2月～3月のべ30日を実施した。

- 3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパの文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、①マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とそのため海外調査1月～3月のべ30日、②アラブ世界での再受容と文学伝統の関係の分析とそのため海外調査→2月～3月のべ30日、③日本での受容と文学伝統の関係の分析とそのため国内調査→1月～2月を実施した。

得られた結果を基にして、研究会を開催し、研究情報を研究分担者間で共有し、研究計画全体の実施方法に関する検討を行う。さらに得られた成果を取りまとめ学会発表や論文執筆を行う。

※アラブ世界は現在、広域にわたって民主化運動のさなかにあり、情勢が不安定である。従って、上記の海外調査は調査者の安全を考慮し、調査地域や日程を変更する可能性がある。この件に関しては研究会等で十分に検討する。

基盤研究 (B) 一般

劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発

代表者 園田直子

目的・内容

本研究の目的は、日本の酸性紙研究で未解決となっている課題、実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、現在稼働している気相型の脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することにある。前者では、強化剤の重合度や溶剤を再検証するとともに、柔軟剤や保湿剤の添加を検討し、手法の最適化をはかる。また、新たに紙表面にナノ繊維を紡糸して補強する可能性を検討する。後者では、従来の脱酸性化処理法（ドライ・アンモニア・エチレン法）の改良法として、酸性物質の中和剤を揮発させて酸性紙に直接付着させる手法を検討する。本研究では、技術改良の成果を自然科学的に検証したうえで、開発した手法の文化財への適用の判断までを総合的に行う。

活動報告

本研究は、日本の酸性紙研究で未解決となっている課題のうち、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理、2) 既存の気相型脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することを目的としている。

- 1) 紙資料の強化処理の一手法であるフリース法を科学的に検証した。フリース法とは、脆弱化した紙資料の表面に新たな強化繊維層を薄く均一に貼り付ける方法である。強化繊維により新たな強度を得ることができ、既にドイツでは実用化されている。しかしながら、薄い繊維層を使用しても表面を覆ってしまうため、文字情報が読みにくくなるという欠点をもつ。そこで、①強化繊維層の厚さ、②強化繊維のバルブ化条件、③強化繊維の種類、これらを検討し、劣化抑制効果を検証した。また、④楮の薄紙の表打ちによる強化法を併せて試験し、劣化抑制効果を比較した。結果、フリース層の厚さは坪量 2 g/m^2 程度であれば比較的文字情報を阻害することなく、強化物性が最適であることが分かった。楮繊維のバルブ化条件として、ヘミセルロース分や微細繊維の水洗除去の有無を比べたが、顕著な差異は認められなかった。強化繊維の種類では、楮、三桠、雁皮のいずれにおいても強化効果が確認できた。
- 2) 従来のドライ・アンモニア・酸化エチレン法の改良法として、酸性物質の中和剤であるエタノールアミン類の一種ジエタノールアミン（DEA）を揮発させ、酸性紙に直接付着させる方法を検討した。DEAを用いた気相処理により、良好なpH上昇効果が得られることが分かった。また、脱酸性化処理後の試料は、通常環境条件下の保存において、pHの低下はほとんど認められなかった。DEA処理は、 105°C 及び $80^\circ\text{C}/65\% \text{ r.h.}$ の加速劣化処理条件において、酸性上質紙の耐折強さ、ゼロスパン引張強さの劣化抑制効果を示した。

上記結果をもとに、1)と2)のそれぞれにおいて次年度の研究を進める準備が整った。

基盤研究 (B) 一般

映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究

代表者 福岡正太

目的・内容

東南アジア諸地域において、ゴングは、霊的な力を備えた音具、楽器、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、東南アジア諸地域のゴング文化の特徴と相互の関連を、現地調査と映像記録作成を通じて明らかにし、東南アジアのゴング文化を総合的に理解することを目的としている。特に、1) これまで研究の少なかった地域のゴング文化の調査、2) 各地におけるゴング製作と調律技術の比較、3) 主にゴング流通からみた地域間の相互関連の解明に重点をおく。また、映像を重要な研究手段として位置づけ、現地における映像上映と意見交換を通じて、研究成果をフィードバックし、ゴング文化を支える人びととともに東南アジアのゴング文化についての新たな知を構築する試みをおこなう。

活動報告

2012年度には、1) ベトナム中部、ラオス南部、タイ、2) フィリピン、3) ジャワ島、バリ島、ロンボク島にて調査撮影等をおこなった。

- 1) ベトナム中部及びラオス南部は、カンボジア北部やフィリピン・ルソン島とともに、平ゴングを用いるアンサンブルを特徴としている。これらの地域のゴング演奏等を調査撮影するとともに、ホイアン近郊の村にて、現在も平ゴングが製造されていることを確認し、調査撮影をおこなった。ラオスやカンボジアにおいては、これまで平ゴングの製造を確認できていないが、今後、これらの地域が平ゴング流通においてどのようにつながっているのかを明らかにする端緒となるだろう。また、タイにおける小型こぶつきゴング製造過程の調査撮影の成果と合わせて、他地域におけるゴングの製造や調律の技術との比較研究の素材としても重要である。
- 2) フィリピンは、治安上の問題により、ゴング・アンサンブルをもつ地域の調査撮影は困難な状況にあるため、過去に国立民族学博物館が撮影した映像の上映会をマニラ等においておこなった。上記地域を出身地とする人々の参加を得て、彼らのコミュニティにおけるゴング・アンサンブルの重要性を明らかにするための手がかりとすることができた。
- 3) ジャワ島、バリ島、ロンボク島では、ゴングの製造と流通の過程について、調査撮影をおこなった。特に大型こぶつきゴングの製造については、ジャワ島中部が東南アジア島嶼部のセンターとして機能していることが明らかになってきた。一方、小型ゴングの製造や調律作業等は、ゴングが使用される地域でおこなわれる傾向が強く、ゴング関連楽器の製造と流通における分業が見られることも明らかになっている。また、マレー半島からジャワ島へのゴング製造の注文も多いことが明らかになり、今後、マレーシアにおける調査により、島嶼部のゴング流通やゴング文化の動態を明らかにすることができるだろう。

基盤研究 (C) 一般

博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

代表者 松岡葉月

目的・内容

代表者は一般の人々が人文あるいは自然科学の様々な切り口から科学に関心を持てるように、研究者の視点から文理融合の新たな手だてにおいて、天文・宇宙分野の科学映像「誰も知らなかった星座～南米天の川の暗黒星雲」を企画・制作した。さらに宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所を窓口として普及までの手だてを整えた。

本研究は、この科学映像を全天周映像化し、博物館などのドーム型スクリーンで上映し、全天周科学映像による視聴者への影響・効果を、これまでに成されていなかった人文・社会学的側面から明らかにすることを目的とする。つまり、視聴者の多様な視聴特性を、人間工学的分析ではなく、視聴者の社会文化的背景と心理的、教育的影響との関わりから分析する。さらに、通常の平面版映像の上映効果との比較も踏まえて、全天周映像の特性と視聴者への影響、および研究者の視点からの映像を効果的に伝える方法を明確化する。

活動報告

研究者による全天周映像の制作・普及という国内でも初の試みにおいて、対処すべき課題が明確化できつつあるとともに、博物館・科学館での上映を経て、文理融合の手だてにおける映像の視聴者への影響・効果を人文・社会学的側面から検討するための調査・解析を進めている。本研究では、学術・教育目的の普及の観点から、全天周映像の構成要素（連番画像と音声ファイル）を無償提供しているが、投影ではドームスクリーンの仕様に応じた編集作業を必要とする。上映協力館は編集発注経費を自己負担する事情により、上映協力は編集施設をもつ館が多い傾向がある。また、家族向けの娯楽的内容を好む博物館などが少なく、研究者による学術映像は敬遠されがちでもある。しかし、上映館では幅広い層の視聴者から高評価を得られており、文理融合的観点からの学術映像が、幅広い視聴者に受容されたり、幅広い視聴者に刺激を与えたりする可能性について、各館に理解を得られつつある。

全天周映像の特質は、臨場感や没入感であるが、高精細画像という条件が、必ずしも臨場感や没入感には直結しないことが明らかとなった。視聴者の意見から人的要因（視聴者属性、心理的側面）と、環境要因（元画像画素値、プロジェクター性能、スクリーン径、博物館立地条件）の調査観点が得られ、これらの相互観点から分析を進めている。さらに、全天周映像は通常の平面映像とは異なる視聴環境が生じるため、平面映像との比較を踏まえて視聴特性を分析する必要がある。これまでに双方の投影方法において協力館を得られ、アンケートなどにおいて理解度や満足度などを定量的に評価する方法や、自由記述の言葉から抽出したキーワードを用いた分散分析によって視聴特性を分析しており、年齢や視聴経験から特定の傾向が導き出せつつある。以上の研究成果を博物館学や天文学関係の国内外の学会等で発表している。発表に際し、独自の球形立体表示装置を開発し教育普及を手がけている研究者から、全天周映像ならではの臨場感を見出すための新たな調査指針も得られ、意見交換を図りながら研究を進め

ている。

若手研究 (B)

中古品と非正規品の越境交易にみる現代アフリカの消費文化に関する研究

代表者 小川さやか

目的・内容

中古品（リサイクル品）と非正規品（コピー商品、バッタ品）は、近代特有の消費文化から生みだされた特徴的なモノである。中古品は、産業革命以降の大量生産・廃棄の消費システム（使い捨て文化）から生みだされたモノであり、非正規品はイメージや記号の消費に特徴付けられる消費文化を流用して生みだされたモノである。本研究の対象地域であるアフリカはこの2つの商品の最大の消費地である。

本研究の目的は、先進国や新興国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、同諸国間を越境交易で循環し消費される課程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指す。

活動報告

中古品・非正規品は、日本をふくむ先進諸国の消費文化（使い捨て文化や、イメージや記号の消費にもとづく消費文化）とふかく関連して生みだされた特別な商品である。本研究の目的は、欧米やアジア諸国で廃棄／生産され、アフリカ諸国に輸出されているこの2つの商品が、東アフリカ諸国間を越境交易で循環し消費される過程と、この「モノの履歴」における価値変化の実態を、現地調査を通じて明らかにすることにある。また、そこから従来の西欧中心的な消費文化論を、「廃棄から再消費」あるいは「コピーから消費」の世界から再考し、文化人類学の立場から新たな消費文化論を構想することを目指している。

本年度は、『民博通信』（国立民族学博物館）および学術雑誌『アスティオン』（サントリー文化財団）に古着の流通のしくみとアフリカにおける古着の消費について考察した小論・論文を発表した。ここでは古着輸入の是非をグローバルな経済関係に留まらず、現地の商人および消費者によるミクロな実践に即して検討する必要性を指摘した。また『発展途上国とリユース報告書』（小島道一・福西隆弘編、アジア経済研究所）に、タンザニアの消費者による中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の購買行動を、両製品の品質面や供給システムの違いに着目して比較分析した論文を発表した。

国際学会・シンポジウム等での発表として、7月に南アフリカで開かれた世界史学会において「セカンド・ハンドの歴史」に関する分科会をおこない、中古衣料品の流通システムの変容について発表したほか、2月に国立民族学博物館において国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』（機関研究プロジェクト『布と人間の人類学的研究』（代表：関本照夫））において、アフリカにおける中古衣料品と非正規品（ばちもん）の流通・消費に関する研究発表をおこなった。

若手研究 (B)

現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

代表者 相島葉月

目的・内容

中東におけるモダニティの系譜を探求するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の1つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋的近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。エジプトを代表する大衆のスポーツである空手道コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考する。

活動報告

2012年度の目標は、エジプトで空手道が「大衆のスポーツ」として受容された歴史的経緯の把握し、空手家コミュニティの形成と発展の過程を考察することであった。国営日刊紙アル＝アハラーム新聞で空手を紹介する記事が初めて掲載されたのが1972年3月に遡ることから、1960年代後半もしくは1970年代初頭から空手の稽古が行われてきたのではないかという仮説のもとにエジプトでの現地調査を始めた。

60歳代の空手家への聞き取り調査を行った結果、1969年頃より上流階級向けの会員制スポーツクラブにて日本大使館職員による空手の稽古が細々と行われていたことが判明した。1971年にブルース・リー主演のカンフー映画『ビ

「ボス」が大流行したのをきっかけに、自己防衛 (al-difa' 'an al-nafs) を目的としたスポーツとして空手人気が一気に高まったという。1967年の第三次中東戦争でイスラエルに大敗を期して以来、軍事力の向上のため取り入れられた空手道が「大衆的スポーツ」として認識されるようになった背景には、中国拳法などの格闘シーンを取り入れた香港のアクション映画の流行が深く関わっている。カンフー映画をみてブルース・リーに憧れた者が空手を始めたとはいえ、「東洋」をひとくりにし、日本と中国の格闘技を混同していた様子は見られなかった。カンフー映画の流行が空手の普及に貢献した過程については今後の調査で明らかにしたい。

また、空手の大衆化には政府の青少年教育政策も関わっていたことを裏付ける資料も見つかった。カンフー映画の流行により空手の知名度が向上したとはいえ、空手道の競技者は軍人か高級スポーツクラブの会員である富裕層に限られていた。しかし、1980年代以降に空手が青年及びスポーツ省の推奨スポーツに指定され、公営の文化施設で空手教室が開かれたことが大衆化につながったと言える。

研究活動スタート支援

ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造・流通に着目して

代表者 柳沢英輔

目的・内容

本研究では、東南アジアにおけるゴング文化の総合的な理解に向けた一歩として、ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態を、楽器の製造・流通に着目して明らかにする。具体的には、ベトナム中部高原の少数民族村落および中部沿岸部にあるキン族のゴング製作工房において実施する現地調査によって、ゴングの製造・流通の実態を明らかにし、ベトナムのゴング文化の動態について考察することを目的とする。

活動報告

本年度は、ベトナム中部地域におけるゴングの製造と流通の実態について明らかにするため現地調査を行った。現地調査は、2012年10月、2013年2月～3月の間に行った。中部クアンナム省にあるキン族が経営するゴング製作工房においてゴングの製作方法に関する調査を行った。具体的には、ゴング製作職人へ聞き取り調査を行い、ゴングの製作工程をビデオカメラを用いて詳細に記録・分析した。その結果、キン族のゴング製作者は、少数民族ごとに異なる需要に合わせて、ゴングの鑄造に用いる材料の選定や調音などを行っていることが分かった。ゴング製作者は少数民族に直接ゴングを販売する他、国道沿いの路面店でもゴングをはじめとする金属工芸品を販売していることが分かった。また中部ダナン市内の書店において、関連する資料を収集した。

ベトナム中部高原コントゥム省、および、ジャライ省の複数の少数民族村落で、ゴングの所有者、ゴング調律師などに対し、ゴングの取引について聞き取り調査を行った。人々は必要に応じて直接ゴングを売買しており、それらは村落や少数民族の垣根を越えて行われていることが分かった。またジャライ族のゴング調律師が各地域を回って使われていないゴングセットを収集（購入）し、適切な音階に調律して、必要とする村に売却するなど仲買人としての役割を果たしている事例も確認した。

以上より、当該地域におけるゴング製作・流通の実態について、その一部を把握することができた。来年度、現地で収集した資料をもとに学術論文および研究会などで、研究成果を公表する予定である。

研究活動スタート支援

生理用品の流入による女性の身体観の変容：パプアニューギニアの事例から

代表者 新本万里子

目的・内容

本研究は、モノの受容・流通が起こす身体観の変容を、ジェンダーの視点から文化人類学的に考察することを目的とした。具体的には、メラネシアにおける生理用品（ナプキンなど西洋起源の道具）の受容を事例に、月経にまつわる慣行や、その使用による身体観の変容を明らかにすることを目的とした。

月経と出産などの生理的現象を忌避する社会は広く世界各地にみられ、死の不浄などとともに、文化人類学においては「ケガレ」として理論化されてきた。そうした先行研究を踏まえ、メラネシアにおける身体観の変容を、女性たちの生理用品受け入れの経験という次元で考察するために、月経の禁忌が発達したパプアニューギニアの村落を調査地として取り上げ研究を進めていく。

活動報告

本年度は、東セピック州マプリック地区ニヤミクム村において予備調査を実施し、パプアニューギニア大学図書館のほか、マプリック地区で活動している NGO などで資料収集を行った。

調査村では、20代から80代までの女性29名に、これまでに使用した月経処置の道具、使用の仕方、使用感、廃棄

の仕方について聞き取りを行った。その結果、月経処置の道具は、1) 月経小屋のなかに敷いたヤシ科植物の仏炎苞（実を包むように成長する羽状の葉） → 2) 布（仏炎苞の上に敷く） → 3) 布（パンツをはいて固定する）、または4) 生理用ナプキン、というように変遷し、世代間で月経処置の経験が異なることが明らかになった。このうち、1)の月経小屋はすでに現存しておらず（2006年までは確認できた）計測できなかった。月経小屋を使用した経験のある女性から、複数の月経中の女性が一緒に過ごすことがあったこと、直接仏炎苞に座るため肌がくっつくという不快感があったこと、月経中でも森へ行き薪集めなどを行ったこと、泉で頻繁に体を洗ったことなどを聞き取った。女性たちが次第に月経小屋を利用しなくなるのは、ナプキンの普及を要因としており、これらの普及には、流通ルートの確保と学校での保健授業が関連していることも明らかになった。

これまで、月経小屋にまつわる慣行は、その存在こそが知られていたが基礎的なデータの水準で存在していなかった。本年度のデータ収集は、そうしたデータの欠落を埋めるとともに、生理用品というモノの普及と、身体的な感覚、月経についての意識の関係を明らかにするのにつながるものである。

研究活動スタート支援

現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究

代表者 呉屋淳子

目的・内容

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。

現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響を明らかにする。

活動報告

- 1) 沖縄県立芸術大学の琉球芸能専攻を在学または修了した若手芸能実践家のライフストーリーから現代沖縄の伝統芸能の継承に関する実態の分析を行った。その際、沖芸の琉球芸能専攻を修了した若手芸能実践家のライフストーリーから学習者が「継承の主体」となっていく様子に着目した。本研究のキーインフォーマントの協力を得て、「研究所」での活動、彼らが歩んできた芸能人生においてどのように芸を学習し、そして継承者としての自覚を身につけてきたかについて具体的な継承の実態を明らかにした。
- 2) 「研究所」と高等教育機関は、教育形態や継承内容が異なるものの、沖芸に在学または修了した若手芸能実演家らはこの双方の場において芸を磨いた経験を持っている。1)で明らかになったことを踏まえ、それぞれの場における教授の特徴を明らかにし、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が及ぼす影響について検討した。その成果は、2013年1月の国立歴史民俗博物館で開催された共同研究会で発表した。
- 3) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの伝統芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察した。その結果、彼らの「二重的な教授の経験」、つまり、従来の修練の場である「研究所」に加え、高等教育機関において芸能を修練は「沖縄らしさ（Okinawanness）」をいかに表現するかという問いに向き合う切っ掛けとなっていた。また、このような経験は、沖縄人としてのアイデンティティを再考する機会ともなっており、芸能を「創造」することにも繋がっていた。

研究成果公開促進費（学術図書）

ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言語の生成と展開

代表者 マリア・ヨトヴァ

目的・内容

- 1) 刊行の目的：ブルガリア研究の空白を埋める

ブルガリアは、冷戦時代の枠組において、東欧のなかでもソ連に最も忠実な国として冷視されてきた。研究面でもソ連圏と同一視され、個別の研究はほぼ皆無であった。こうした背景において本書は、ブルガリアの代名詞でもあるヨーグルトを対象とした初めての文化人類学的研究の成果である。ヨーグルトを主題として、1940年代から現在まで、ブルガリア人の生活文化と国民意識の変容を解明し、従来の研究の空白を埋めることが、本書刊行

の大きな目的である。

2) 刊行の内容：ブルガリアにおけるヨーグルトをめぐる諸言説の生成と展開

本書は、ブルガリアと日本を架橋するヨーグルトをめぐる様々な言説を取り上げ、歴史的に生成されてきた経緯をたどりながら、ヨーグルトが伝統的な食品からグローバルな健康食品、そしてナショナル・アイデンティティを包摂する食品へと変化していく過程を考察した文化人類学的研究の成果である。具体的な考察点は、①科学研究における“ブルガリアヨーグルト”という言説の誕生、②社会主義期における“ブルガリアヨーグルト”の確立、③“ブルガリアヨーグルト”の国際化、④ポスト社会主義期における“ブルガリアヨーグルト”の再帰性、という4点である。

そこから本書では、ブルガリアという小国家がソ連やEUの「属国」ないし「周縁国」として軽視されてきた歴史を背景に、輝かしい言説を包摂するヨーグルトが自己規定のために極めて重要な役割を担っていることを結論として導き出した。また、ヨーグルトのナショナル・アイデンティティ化過程における日本との関わりに注目し、その極めて大きな役割を明らかにした。現在も、グローバルとローカルの対立の中でヨーグルトをめぐる、新たな言説が生まれている。ただし、この複数の声にずれ・対立があるとしても、主体同士の対話の中で相互に影響が見られ、自国文化を称賛する点では共鳴しているところも見出される。本書は、これらの言説を抽出し、ヨーグルトが理想的な自画像を提示する上で、ブルガリアの人々にとっていかに重要な存在であるかを論じている。

成果刊行物

マリア・ヨトヴァ

2012 『ヨーグルトとブルガリア——生成された言説とその展開』 大阪：東方出版株式会社。

特別研究員奨励費

タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

代表者 八塚春名

目的・内容

本研究の目的は、アフリカの狩猟採集社会を対象に、これまであまり注目されてこなかった狩猟採集民の生業複合に正面から取り組み、今日のアフリカの狩猟採集社会における農耕の多様な展開を明らかにすることである。このことをとおして、狩猟採集社会をめぐる狩猟採集か農耕かといった二元論を突破し、狩猟採集と農耕のあいだにある人びとの生業実践のグラデーションを明らかにする。近年、狩猟採集民は先住民の議論や文化観光に取り込まれることで、実際の生業実践よりも狩猟採集のイメージばかりが注目されがちだが、本研究をとおして、グローバル化するアフリカ経済のもとで、狩猟採集民がローカルに実践する多彩な生業展開のあり方を提示する。そのために、以下の3つの課題を設定する。

- 1) 狩猟採集社会の農耕実践を把握する
- 2) 土地利用の推移を聞き取りやGIS分析および過去の画像・映像資料を利用して解明する。
- 3) 狩猟採集以外の生業活動をおこなうに至った社会的背景を明らかにする

調査地としては主にタンザニア中央部のサンダウェ社会と北部のハツツァ社会を予定しており、比較のためにカメルーンのピグミー社会とボツワナのサン社会での調査も計画している。以上を総括し、アフリカ狩猟採集社会における狩猟採集と農耕とのあいだのグラデーションを、その実態と背景を含めて明確に示す。

活動報告

本研究の目的は、アフリカの狩猟採集社会を対象に、これまであまり注目されてこなかった狩猟採集民の生業複合に正面から取り組み、今日のアフリカの狩猟採集社会における農耕の多様な展開を明らかにすることである。このことをとおして、狩猟採集社会をめぐる「狩猟採集か農耕か」といった二元論を突破し、両者のあいだにある人びとの生業実践のグラデーションを明らかにしたい。主な研究対象はタンザニアに暮らすサンダウェとハツツァという2民族である。

2012年度は本研究の初年度であり、サンダウェとハツツァの生業に関する一次資料収集を目的として、タンザニアでの3か月半にわたる現地調査をおこなった。ドドマ州チェンバ県において、サンダウェの近年の農耕や狩猟採集に関する動向を把握するとともに、彼らの養蜂に注目してデータを収集した。この現地調査から、養蜂の技術や知識、ハチミツの収量といった基礎情報に加え、養蜂と他生業との関係性や生計における重要性について明らかにした。一方、ハツツァに関する調査はアルーシャ州のマンゴラ地区でおこない、生計維持の仕組みを主に観光業と食事に注目して明らかにした。同時に、同地域に暮らす農耕や牧畜をおこなう人びとにも、生計に関する聞き取りを実施した。以上の調査から、ハツツァ社会における農耕や農作物の位置付け、近隣民族との関係といった点についても、おおよそ把握することができた。

また、国際学会2件、国内学会1件、および複数の研究会での報告をおこなった。

特別研究員奨励費

民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして

代表者 田村うらら

目的・内容

本研究の目的は、トルコ絨毯というグローバルな価値をもつ民族工芸品の再生と保存の営みを、トルコ国内外において仔細に検討することを通して、民族的・ローカルなモノが、生産の文脈を離れて流通し消費される際に、いかにモノが捉え直され、モノが人びとを組織するかを明らかにすることである。さらに、絨毯生産における共同性、絨毯生産者たちの絨毯消費の社会性、絨毯流通における価値の交渉と再交渉という申請者のこれまでの研究と連結させることにより、ローカルなモノの意義を多面的に明らかにし、かつそれらが現代において創造的に再生産され続ける条件の理論化を目指す。なお、より広い文脈における本研究の目的は、以下2点に要約される。

- 1) 第1に、経済人類学と物質文化研究の接点において、人間文化の基層を探る、新たな地平を切り拓くことである。
- 2) 第2に、申請者自身の従来の調査研究を土台として、現代の諸民族文化の多様性に対する、悲観的な消滅の語り、主体的で政治的な「文化の客体化」の語りを乗り越え止揚することにより、民族手工芸品の新たな存続の可能性を探るという点である。

第2の点を強調するならば、本研究が、販売額や収入の増加などという市場価値と直接的に連動する数字によってのみ測られてきた文化保護／復興のあり方を転換する契機に繋がれば、文化人類学的社会貢献として意義深いことと考える。商品性がローカルな文脈での価値を瓦解させないバランス点を一定程度理論化することに成功すれば、市場経済に従属しすぎず、かつ内発的な創造性を確保しうる、現代的伝統文化のより自律的で（必ずしも市場経済世界における他者を志向しない）創造的な方向性の基礎理論となりうるだろう。

活動報告

日本学術振興会特別研究員（PD）として、上記研究課題に3年かけて取り組むべく、その初年度を、国立民族学博物館（以下、民博）を研究従事機関とし、関本照夫特任教授に受入れをお願いした。当該年度の具体的な研究活動の主なものとしては、理論や事例を中心とする文献研究、論文執筆活動、現地調査、および単著出版に向けた準備作業が挙げられる。

民博においては、関本教授に逐次ご指導を賜ったことに加え、文献収集や共同研究会およびシンポジウム等への参加、関連企画展の観覧などを通して、有意義な意見・情報・資料などを得た。特に、「モノの人に対するエイジェンシー性」への再考を促す契機を得られたのは貴重であった。

成果発表の最大のもは、単著出版である。8月頃、期待より約1年早く出版助成が内定したため、予定を繰り上げて単著を年度内に出版するに至った。その準備過程で、文献等の精読等とおしてさらに理論的な鍛錬を行い、当研究課題と共通する課題について大いに前進があった。論文については、今年度発表に至ったものは、当研究課題の範疇ではなかったが、7月にSenri Ethnological Studiesに英語論文“Turkish Carpets in Motion: The Various Phases of Local Consumption and Incidental Commoditization”を寄稿した。

また、5月と3月に延べ5週間程度のトルコ現地調査を行い、絨毯修繕師や絨毯商にたいする観察・インタビュー、博物館等訪問などを通して、民族工芸の1つである絨毯の保存や展示に関わる現状について子細な情報を得た。

以上、展示と保存という営みを中心としながらも、広くモノ研究を人類学的に展開することの意義と多角的視点について、今後につながる多くの示唆を得ると同時に逐次成果発表に生かすことができた。

特別研究員奨励費

タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

代表者 岡部真由美

目的・内容

本研究の目的は、タイにおける仏教僧ネットワークを対象に、近代化・グローバル化が進行する現代世界においてコミュニティが動的に編成される過程を解明することである。より具体的には、第1に、1960年代以降の開発の進展とそれに伴う急速な社会変化を背景として、上座部仏教の僧侶たちが、国家・サンガ・地域社会という既存の脈絡を越えたネットワークを形成してきた歴史的経緯と現状を、第2に、僧侶たちが、ネットワーク外部の諸勢力、制度や集団との接合過程をつうじて創出する、価値や倫理ならびに共同性の特質を、北タイ地域を中心とする現地調査から明らかにする。これを踏まえ、本研究では、人類学および関連諸分野におけるコミュニティ研究の問題点を乗り越えることが目指される。

活動報告

3年間の研究期間のうち、初年度にあたる本年度は、北タイ地域における仏教僧ネットワークにかんする基礎的なデータ収集のための現地調査を中心として、以下のような研究活動を実施した。

まず、現地調査は、1) 2012年10月～11月における12日間と、2) 2013年1月～2月における30日間との2度に分けて行った。調査では、とくに「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」という一僧侶グループに着目し、1) では、同グループに参加するメンバー僧侶の個人レベルでの活動状況を把握するために、僧侶たちへのインタビューと観察を行い、また2) では、同グループ結成の歴史的経緯と現状や、集合レベルでの活動状況を把握するために、同グループの拠点のある北タイ・チェンマイ県を中心として、関係者（僧侶、元僧侶、NGOワーカーなど）への聞き取りを行った。さらに、2) については、他地域との関連性について明らかにするため、首都バンコクおよび東北タイ3県においても関係者への聞き取りを行った。

その結果、1) 北タイにおいても、東北タイにおいても、1980年代後半～1990年代にはすでに、地域開発に取り組む僧侶たちが、国内外NGOの影響を受けながら、互いの開発活動について意見交換することを目的とした僧侶グループを複数結成していたこと、2) それに対して、「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」は、特定の師弟関係や地域に限定されない僧侶たちによって構成される点に特徴を有していること、3) 個々の僧侶は、この僧侶グループに参加することによって、地域開発にかんするさまざまな類の知識を交換・共有するとともに、そこで獲得された知識を用いて、個別の寺院や地域コミュニティにおける自らの実践を再構成していること、である。

とくに3) については、僧侶が寺院や地域コミュニティを基盤とする地縁や血縁のほか、さらには地域を越えて広がる在家者のネットワークなどを独自に組み合わせて展開していることが明らかとなった。

こうした調査結果の分析と、先行研究の検討とを併せて行うことで、仏教僧ネットワークの形成をとおして生み出される、僧侶の新たなコミュニティの編成について理解するためには、今後は、地域開発に取り組むことで自己アイデンティティを模索する僧侶が、新たなコミュニティへの参加をとおしていかに知識を交換・共有しているのか、また僧侶が属する複数のコミュニティ（サンガや地域コミュニティ）の重層性をいかに横断しているのか、といった点について、民族誌的なデータを収集し、考察する必要があることが分かった。

なお、これらの研究活動の成果は、2012年度中に発表した、論文2本と口頭発表2本のなかですでに公表した。

特別研究員奨励費

内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

代表者 小長谷有紀/Caijilahu

目的・内容

1940年代から1970年代にかけて、近代中国において「社会主義改造」、「文化大革命」などの社会主義的イデオロギーによる洗脳運動が全国的におこなわれた。しかし、1980年代以来の内モンゴル東部地域においてはシャマニズムが復活しつつある。シャマニズムは現在、多民族的中国の宗教政策、医療政策、民族政策に対応した柔軟性を発揮しながら、モンゴル人社会の日常と絡んで生き残っている。シャマニズム的諸活動のかなで、治療行為は重要な部分をなしており、依頼者の心身両方の要求を満たしている。

本研究では、そういった民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生と関連する諸問題を文化人類学的に捉える。そして、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようと試みる宗教政策、民族政策、医療衛生政策の本質と軌跡を解明することが強く求められるなか、シャマニズムを支持する人々と依頼者の視点から、シャマニズムと仏教、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題をエスニシティの問題として究明する。さらに、そういった諸問題が存在する内モンゴル東部のホルチンとフルンボイル両地域を相対化する目的で、モンゴル国に赴き、ダルハドやブリアートの間で生き残っているシャマニズムに関するフィールドワークをおこない、豊富な事例のデータを活用して、多様な医療の選択肢があるなかシャマニズムの治療が選択される状況をエスニシティの問題として論じる研究へと収斂させていく。

活動報告

中国内モンゴル東部地域においてシャマニズムが復活しつつある。本研究の目的は、多民族的社会主義中国の宗教政策、医療衛生政策、民族政策を視野にいれながら、民間医療と絡んでいるシャマニズムの各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題を文化人類学的に捉えることである。この研究は、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようとする諸政策の本質と軌跡を学問的に解明することが強く求められるなか、その分野に対する新しい知見を提供することである。

本年度は研究計画通りに以下のような作業をおこなった。

まず、東京大学図書室、大阪大学図書館、国会図書館、国立民族学博物館図書室などの国内の諸施設において、オルタナティブ医療論、エスニシティ論、及びシャマニズムの治療に関する研究の最新情報を収集した。次に、海外において、中国内モンゴルにおけるオルタナティブ医療、医療衛生政策、民族政策、宗教政策に関する文献を渉猟する目的で、中国の国家図書館と北京大学図書館などの諸施設へ出張した。最後に、医学史、医療人類学及びシャマニズムをあつかった研究会に参加し、内モンゴルにおけるオルタナティブ医療、エスニシティ論、及びシャマニズムの治療などについて、得られた資料を取りまとめ学会発表をおこなった。

そして、以上の資料調査と学術交流で得られたデータを基に、1) オルタナティブ医療とエスニシティ問題の関係性に注目した研究史を整理し、最新研究に対する分析をおこない、書評などを執筆した。2) 中国の民族医療衛生政策、民族政策、宗教政策などに関する文献を解説・分析したうえ、それらの政策が如何にして内モンゴルのシャマニズム、オルタナティブ医療、エスニシティ問題などを影響したかを考察し、学術論文を執筆中である。

【継続】

基盤研究 (S)

権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

代表者 關 雄二

目的・内容

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも権力という新たな分析視点と分野横断的な手法を考古学調査に導入し（ミクロ・レベル）、文明初期における complex society の成立過程を追究する（メソ・レベル）とともに人類史における文明形成を理論的に解明することにある。本研究では権力生成の特徴を、経済、軍事、イデオロギーという権力資源間の関係性に注目しながら帰納的に抽出する。具体的には、アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、ペルー北高地のパコパンパ遺跡を調査し遺構や遺物の分析を分野横断的に進める（ミクロ・レベル）。さらに、同時期の遺跡のデータと比較することで文明初期の多様な社会状況を把握する（メソ・レベル）。ここから得られた文明形成論を、中米および旧大陸の文明形成過程と比較し、相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

活動報告

アンデス文明初期における権力の変容をさぐるため、形成期（前3000年～紀元前後）の祭祀遺跡パコパンパ（ペルー北高地）を3か月にわたって調査し、遺構、出土遺物の分析を行い基礎資料の収集に努めた。とくに、金製リングや銀製の針を副葬した墓を発見した点は秀逸であった。これまで金製品を伴う埋葬は、同遺跡後期（前800～500年）の初頭、しかも建築完成前の脈絡でしか確認されておらず、この発見により完成後にも社会的差異が存在していたことがわかった。人骨と獣骨の食性解析からは、同遺跡後期に導入されたトウモロコシが豊かな副葬品を持つ墓の被葬者よりも簡素な墓の被葬者の方でより多く消費されていた可能性が示された。新種の食糧・飲料が社会的地位の高い人間のイニシアティブで導入されたとは限らないことになる。また動物の移動性を探るべくシカとラクダ科動物の歯を用いたストロンチウム分析を行った結果、ラクダ科動物の生育環境がシカと比べて一定であることが判明した。飼育場所を特定するデータではないが、トウモロコシを摂取した個体が多いことから、遺跡周辺での飼育が想定される。

この他、考古学GISデータベースの作成を進めた。さらに、同じペルー北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡、ヘケテベケ谷中流域でも調査を展開し、文明初期の多様な社会状況の把握に努めた。これらのデータの統合を図るべく2013年3月に山形大学でワークショップを開催し、また成果の一部は、内外の学術誌、出版物で公表するとともに、2012年7月にウィーンで開催された国際アメリカニスト会議においてシンポジウムを組織し討議した。さらに2013年1月にはマヤ文明研究者を招聘し、経済面での比較を主とするシンポジウム（東京）、また同年2月には米国、ペルーの研究者を招聘し、アンデス文明国家形成時代のシンポジウムを開催し、比較というマクロレベルの研究を実施し高い評価を得た。

基盤研究 (A) 一般

モンゴル・中央アジアにおける社会主義的近代化に関する比較研究

代表者 小長谷有紀

目的・内容

本研究は、現代ユーラシアを理解するには社会主義のもとでの変容に関する把握を欠かすことはできないという観点から、当時の公的な「記録写真」と、ポスト社会主義の現在から語り得る私的な「記憶」との、異なる2種類

の資料を併用して対比的に分析し、その成果を国際的に発信するものである。

具体的にはロシア連邦ブリヤート共和国、モンゴル国、カザフスタン共和国、キルギス共和国、ウズベキスタン共和国の5か国を対象とする。社会主義的近代化という共通の歴史に着目し、その実践を比較し、普遍性と個性性を明らかにして地域理解を促進する。

比較研究の方法として、公的な記録写真から当時のプロパガンダと、人々の語りを組み合わせて分析し、過去と現在の認識を共に明らかにする。写真という物質文化を援用しながら、歴史学、文化人類学、政治学の人文系諸学の協業を果たし、更に地域差の分析に際して自然科学系諸学と連携し、新しい知見を得る。

活動報告

モンゴルについては、社会主義的近代化を代表する典型的な分野として国営農場に焦点をあて、その実態に関する資料を整理して基礎データとして刊行するとともに、農業に関連する口述資料の分析を進めた。とりわけ農業と寺院との親和性、伝統的農業との差異、環境上の問題点などに焦点をあてて、国際会議で発表し、論文を英語、モンゴル語で刊行した。なお、現代においてシャマニズムが再興されている地域もまた国営農場地帯であり、現代の文化現象がいかに社会主義時代の近代化と密接に結びついているかという歴史的關係性があきらかになった。

ウズベキスタンについては、新聞、雑誌、論文等の記事を利用し、モスクワからの政策的まなざしとその現地化を分析し、社会主義的近代化の支配的言説ならびにその現地化や現地での言説との齟齬をあきらかにした。一方、伝統的な都市コミュニティが、支配的な言説に内包された画一的な近代化に対して、柔軟な適応力を発揮したことも、オーラルヒストリーからあきらかになった。

キルギス（クルグスタン）については、農村コミュニティを対象として、イデオロギーに支配されない民間力をナラティブからあきらかにしようと試みた。

以上のように、全体として、オーラルヒストリーを有効に活用できるとともに、オーラルヒストリー以外の写真、新聞、ポスターなど支配的な公共の言説に関するナラティブ資料も対比的にあつかうことができた。

また、地域間比較としては、カザフスタンとモンゴル、モンゴルとブリヤート・モンゴルについて比較考察した。

基盤研究（A）一般

物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築——国際協働による在来知と外来知の体系的検証

代表者 吉田憲司

目的・内容

本研究は、現代ユーランアを理解するには社会主義のもとでの変容に関する把握を欠かすことはできないという観点から、当時の公的な「記録写真」と、ポスト社会主義の現在から語り得る私的な「記憶」との、異なる2種類の資料を併用して対比的に分析し、その成果を国際的に発信するものである。

具体的にはロシア連邦ブリヤート共和国、モンゴル国、カザフスタン共和国、キルギス共和国、ウズベキスタン共和国の5か国を対象とする。社会主義的近代化という共通の歴史に着目し、その実践を比較し、普遍性と個性性を明らかにして地域理解を促進する。

比較研究の方法として、公的な記録写真から当時のプロパガンダと、人々の語りを組み合わせて分析し、過去と現在の認識を共に明らかにする。写真という物質文化を援用しながら、歴史学、文化人類学、政治学の人文系諸学の協業を果たし、更に地域差の分析に際して自然科学系諸学と連携し、新しい知見を得る。

活動報告

2012年度（最終年度）には、まず5月に国立民族学博物館（民博）で日本アフリカ学会学術大会を開催するのに合わせて、国際シンポジウム「アートと博物館は社会の再生に貢献しうるか？」を開催し、内戦後のモザンビークで民間に残された武器を農具と交換に回収し、その武器でアートの作品を制作して平和構築を進めるというTAE（Transformação de Armas em Enxadas）「武器を農具に」の活動に焦点をあてて、アートや博物館の平和構築に向けた可能性を検証した。これをうけて、研究代表者の吉田憲司は10月にモザンビークへ赴き、TAEのプロジェクトによる作品（後に民博で収蔵）の製作の全過程を追跡・記録するとともに、このプロジェクトの評価を行った。吉田はあわせてザンビアで仮面文化の新たな展開を調査した。

研究分担者・連携研究者では、亀井哲也が南アフリカにおけるビーズ文化の歴史的展開について、井関和代がエチオピアにおける織りと編みの技術の由来について、栗田和明がマラウイとタンザニアにおける生活物資の国際移動について、それぞれ現地調査を行った。また、飯田卓と川口幸也はマダガスカルにおける木彫技術の現代的展開について調査した。その成果は、民博における特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」で公開した。

一方、本研究計画を通じたアフリカにおけるビーズの研究については、神奈川県立近代美術館・葉山にて「国立民族学博物館コレクション ビーズ・イン・アフリカ」を開催し、その成果を公表した。

一連の研究活動により、アフリカの物質文化について、在来の知・技術の内的展開と外界との接触・交流による変容を具体的に跡づけることができた。また、本研究は、その成果を公開シンポジウムや展示という形で公開することで「物質文化を通じた新たなアフリカ像」を実践的に提示するものとなった。

基盤研究 (A) 海外

大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究

代表者 林 勲男

目的・内容

大規模自然災害による自然及び社会環境の変化を、被災地での現地調査に基づき、その地域社会は被災をいかに受け止め、その社会の持つ脆弱性をどう評価し、その克服に向けてどのような取り組みをしているのかの実態を明らかにすることを目的としている。

調査研究対象地域は、1998年7月のパプアニューギニアのアイタベ津波災害被災地であるサンダウン州、2001年1月発生のインド西部地震被災地のグジャラート州カッチ県、2004年12月発生のインド洋地震津波災害被災地であるインドネシアのアチェ州、南インドのタミルナドゥ州、スリランカのマータラ県・ハンバントタ県、タイのブーケット県・パンガー県、また東日本大震災被災地である岩手県・宮城県・福島県の沿岸部を比較研究のための調査対象地としている。

活動報告

本年度の現地調査は、研究代表者の林 勲男がパプアニューギニアのサンダウン州において、災害後の再定住地での土地権問題と生業について現地調査を実施した。

2004年のインド洋地震津波災害被災地調査としては、研究分担者の高桑史子がスリランカ南部および南東部の復興住宅団地での被災者の生活に関して調査した。研究分担者の杉本良男は南インドで、津波災害復興過程での宗教の役割に関する調査を実施した。インドネシアのバンダアチェでは、研究協力者の齋藤千恵が被災者の居住地移転と復興住宅に関する調査を実施した。タイでは研究協力者の鈴木佑記がパンガー県とブーケット県にて、被災地の観光開発に伴う土地問題について調査をおこなった。

インド西部地震被災地に関しては、研究協力者である金谷美和がグジャラート州において集団移転に関する調査をおこなった。

研究分担者の田中 聡は比較研究のため、インドネシアのバンダアチェにて、住宅建設に関する耐震性への認識について現地調査をおこなった。林は比較研究のため新潟県中越地震被災地、東日本大震災による東北被災地、インドネシアのバンダアチェにて、脆弱性克服の取り組みと土地利用について現地調査を実施した。研究協力者の柄谷友香は、比較研究のため、東日本大震災被災地の岩手県沿岸部にて、地域コミュニティ再建に関する調査を実施した。

研究協力者の牧 紀男と山本直彦は本年度の現地調査は、別の調査資金で実施した。

基盤研究 (A) 海外

ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究

代表者 長野泰彦

目的・内容

ギャロン語は、チベット・ビルマ諸語の複数の下位言語グループに亘る文法的特徴を兼ね備えた言語（繫聯言語）で、チベット・ビルマ諸語の歴史を探究する上で不可欠の研究対象である。本計画では、ギャロン語及びギャロン系言語群の語彙と形態統辞論的な文法的特徴（形態統辞法）を網羅的に記述し、より精確なギャロン祖語を再構するとともに、そのデータベースを作成・公開することによって、チベット・ビルマ系諸言語の系統関係と下位分類を精密化することを目的とする。また、これを通じて、歴史言語学の主要な方法である「比較方法」に「接触・基層」の視点を取り入れることがどこまで有効であるかを検証する。

活動報告

81のギャロン語方言を共通の400・1,200語語彙調査票により記述し、同時に文の基本構造が分かる200の例文を蒐集した。

2012年度はこれらのデータベース整備を主に行い、調査結果をWEBの地図上で検索できるシステムを開発し、国立民族学博物館のデータベースとして公開する準備を行った。プログラム開発は2012年度中に完成し、2013年7月に一般公開できる予定である。

このデータベースとの関連において、各方言の音声・音韻Inventory及び語彙索引を、語彙と200例文の音声データとともに国立民族学博物館の調査報告として2014年度内に刊行予定である。

ギャロン系諸語が基層をなしている可能性が高い、未解読古文獻言語、シャンシュン語の構造解明のため、新シャンシュン語データベース作成をも行い、比較研究を行った。これと関連して、北京の故宮博物院が所蔵する『川番譯語』を解析し、そのチベット字が表す言語がギャロン語であることを実証した。現地調査は限定的な補遺調査に留めた。

基盤研究 (A) 海外

熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究

代表者 池谷和信

目的・内容

本研究では、熱帯地域における農民の家畜飼育をめぐる資源利用に注目することで、過去100年間における資源利用の過去と現在を環境史的に把握することを目的とする。具体的には、熱帯地域を対象にして、ブタ、ニワトリ、ウシ、水牛、アヒルなどの家畜利用の現状およびその歴史の変遷を明らかにすることである。また、家畜生産システムは、「移動型」、「(日帰り・泊まり)放牧型」、「舎飼い型」の3つに分類し、それらによって家畜飼育空間の拡大の仕方が異なるという仮定のもとに対象地域を位置づける。本研究を通じて、熱帯農民の家畜利用はどのような特性を持ってきたものであるのか。また、彼らの家畜のなかで、在来家畜とされていたものも、歴史の変遷を検討する。本研究では、これまで熱帯の地域研究において基礎資料がほとんどなかった農民の家畜利用の事例を通じて、新たな「熱帯家畜文化学」を構築することをめざす。

活動報告

まず2012年6月において、研究メンバー全員が国立民族学博物館に集まり、研究成果をまとめた論文集の刊行に向けた中身の検討をおこなった。本プロジェクトは、各個人の研究は蓄積されてきたが、組織全体としての統合がまだまだ不十分であるため、家畜利用や環境史や在来家畜などのキー概念が議論された。とりわけ、今回の中心的な研究成果として「モンスーンアジアの家畜文化複合」の概念の持つ意義について検討した。

まず、アフリカの農民は、池谷・研究分担者の佐藤廉也・上田 元が担当した。池谷(移動型)は、ボツワナおよびナイジェリアの農村を対象にして、地域社会のなかで最も社会経済的に重要なウシに注目して、彼らの放牧資源利用の形を示す地図を作成した。佐藤(放牧型)は、エチオピア国家の周辺に位置する焼畑農村を調査地に選定して、地域社会のあり方の違いを明らかにした。上田(舎飼い型)は、ケニア西部の農民の家畜飼育や資源利用に注目し、農民の家畜利用を生業全体のなかで位置づけた。

次に、南アジアでは、池谷・上羽陽子・篠田 隆が担当した。池谷(移動型)は、バングラデシュでの農民のブタ遊牧におけるブタ群の移動ルートを跡づけることをおこない、遊牧を成立させている条件の維持を考察した。上羽(移動型)は、ネパール東部地域で、羊の毛の加工技術やウシ放牧の資源利用を示す地図の作成に努めた。篠田(放牧型)は、インド・グジャラート州での水牛やウシの利用実態とその変化について調査を進めていく。渡辺和之(舎飼い型)は、ネパール西部のヒンドゥー社会にみられるブタの伝統的飼養のあり方に注目した。

東南アジアの農村は、高井康弘が担当した。高井(放牧型)は、タイ国内での水牛の調査を継続し、山地の土地利用の1つとして水牛の放牧地の地図を作成した。以上のように、本研究による成果をすみやかにまとめて、本研究の事例の持つ理論的な位置づけについて論議すること、さらには国際シンポジウムを開催すること、および論文集を刊行する予定である。

連携研究者の増野高司・辻 貴志は、フィリピンの海岸部において漁民がおこなう農業および家畜利用の実態について研究した。また研究協力者の中井信介は家畜の飼養形態を強く意識しながら、タイにおいてウシやブタを中心とする家畜飼育に関する調査を実施した。

基盤研究 (A) 海外

ロシア極東森林地帯における文化の環境適応

代表者 佐々木史郎

目的・内容

本研究は、極東ロシア南部の冷温帯及び亜寒帯森林地帯に暮らす人々の文化の特性を環境適応という観点から明らかにすることを目的としている。その適応すべき環境には、自然環境だけでなく、政治経済的な要因によって歴史的に形成される人為な環境(「歴史的環境」)をも含めることにする。つまり、ある地域の文化と所与の自然環境・歴史的環境との間にどのような相互作用が見られるのかを明らかにする。そのために、本研究では調査、分析方法として文化人類学と民族考古学を柱に、生態学人類学、歴史学、民俗学、環境学の手法を援用する。また、従来の文化人類学や民族考古学では先住民族に焦点を当てがちだったが、本研究では調査対象を先住民族に限らず、ヨー

ロップパロシアなどから移住してきた移民の社会にも広げる。現状では先住民族と移民が隣接・共存する村が多く、彼らが協力して所与の環境に適応しようとする現実を的確に捉えるためである。

活動報告

2012年度は事前調査を1回、実地調査を4回、そして4年間の調査研究の成果公開のためのシンポジウムを1回実施した。

事前調査は2012年5月12日～17日にロシア連邦ウラジオストーク市においてこの年度の調査についてロシア側の研究協力者と打ち合わせを行い、さらにウスリースク市の近郊において前年度の考古学調査に関する補足調査を行った。

本調査では、まず8月1日～11日にかけて研究代表者がロシア連邦トゥヴァ共和国東部山岳地帯でトナカイ飼育狩猟民の現状調査を行った。次いで9月9日～19日には、研究代表者と連携研究者の他、ロシアと中国の研究協力者が加わって、日中ロ3か国の研究者による中国黒竜江省の赫哲族（ロシアのナーナイと同じ民族）の生業と居住形態に関する合同調査を行った。引き続き、1人の連携研究者が9月19日～21日に中国内モンゴル自治区でエヴェンキの食文化の調査実施し、さらに11月29日～12月9日の日程で、研究代表者と連携研究者がロシア連邦ハバロフスク地方のコンドン村で、ナーナイの狩猟と氷下漁に関する実地調査を行った。これにより、本調査研究プロジェクトによる実地調査の予定はすべて完了した。

3月には4日～8日の日程で、ロシア連邦立極東大学とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所（両者ともウラジオストーク）で研究成果を公開するための国際シンポジウム「ロシア極東森林地域における文化の環境適応」を実施した。そこにはこの科研の調査プロジェクトに参加した日ロ両国の研究者全員が集まり、研究報告と討論を行った。

基盤研究 (A) 海外

熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて

代表者 山本紀夫

目的・内容

熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、そこは古くから多数の人口を擁し、高度な文明も成立、発達した可能性が大きい。また、近年はアンデスやチベットなどの高地において急激に人口が膨張し、環境変化の動きが加速するとともに、環境破壊の問題も深刻になっている。本研究の目的は、このような熱帯高地に焦点をあて、そこでの環境と人間との相互関係を環境開発および地域間比較の視点から究明することである。さらに、研究代表者が40年あまりに及ぶフィールドワークをもとに提唱するに至った「高地文明」の仮説を検証確立することも大きな目的とする。これらの目的を達成することにより、熱帯高地における環境と人間の関係、とくに環境を改変し文明を成立させるに至った人類史の基本的枠組みが明らかとなる。

活動報告

前年度の調査に引き続き、分担研究者の月原敏博がブータンおよびネパールにおいて2度にわたり約1か月間の現地調査をおこなった。また、研究代表者の山本紀夫と連携研究者の本江昭夫はネパール東部のクンプ地方において2週間の現地踏査をおこない、アンデスとの比較調査を試みた。さらに、研究代表者の山本、分担研究者の大山修一、連携研究者の杉山三郎、稲村哲也がメキシコにおいて環境利用および遺跡分布に関する2週間の踏査をおこなった後、杉山はペルーおよびアメリカ合衆国において約1か月間の比較調査を実施、大山もペルーにおいて中米との比較調査をおこなった。さらに、連携研究者の川本 芳はブータンからタシ・ドルジ博士（ブータン農業省畜産局）を日本に招聘し、京都大学霊長類研究所において在来家畜の起源に関する遺伝学的研究を共同でおこなった。

調査地への経路は、ブータンへはバンコク経由ティンブー着、そこからは陸路、メキシコへは空路でメキシコ・シティー着、そこからは陸路、ネパールへは空路でカトマンドゥへ、そこからは陸路である。

基盤研究 (B) 一般

マダガスカルにおける森林資源と文化の持続——民族樹木学を起点とした地域研究

代表者 飯田 卓

目的・内容

生物多様性のホットスポットと目されながら脱森林化が著しいマダガスカルにおいて、森林資源と「生活の知恵」を保全継承するため、村落生活者による木材資源利用を調査し、その過程で森林行政と文化行政の連携も試みながら、成果を効果的に役立てるための研究交流をおこなう。

現地調査においては、2つの方法を主として用いる。1) 樹種ごとの生育状況やその経年変化を把握するため、森

林内に多数の調査区を設置する森林生態学的手法（多点プロット調査法）と、2) 樹種・樹齢ごとの利用法や利用頻度、その経年変化を把握するため、木材標本を見せながら聞き込みをおこなう社会学的調査法（エリシテーション調査法）である。両者の結果は、木材サンプルの材質分析の結果などと総合し、特定の樹種・樹齢に偏った木材利用を分散させるための提言に反映させる。

活動報告

7月から9月にかけての2か月間、飯田、吉田 彰、伊達仁美および研究協力者3名が交替しながら調査地を訪れ、現地調査をおこなった。とくに、前年度に予定していながら実行できなかった森林生態学的調査を集中的におこなった。研究協力者3名のうち1名は、前年度経費から今年度に繰り越した分の経費によって現地調査を遂行した。

調査は実り多いもので、これまで調査地近辺での分布が確認されていなかったヤシ科植物が確認された（もしくは新種の可能性もある）ほか、6か所120平方メートルの調査区に100種あまりの樹木種を確認するなど、当初予想されていた以上に森林生態系の多様度が高いことが明らかとなった。いずれの成果も分析途中であり、発表にむけて準備をしている。

また、調査区において葉と材のサンプリングをおこない、材の機能特性を推定するための資料を得た。また、建材や家具材として用いる樹種40種あまりに関しては、木材サンプリングをおこなってじっさいに材の機能特性を測定した。これらの結果は分析中だが、どのような機能特性の材がどのような用途に用いられており、特定の樹種が減少した場合にはどのような樹種が代替となり得るかを分析していく予定である。

このほか、2013年3月に代表者が所属する国立民族学博物館で、調査地のくらしに関する特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」を開催した。これに関連して、家屋建設のようすや家財所有状況の記録もおこなったので、今後この資料も分析し、これまでに得られた資料とつき合わせて考察を深める予定である。

基盤研究 (B) 一般

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

代表者 山中由里子

目的・内容

本研究が対象とする驚異譚とは、ラテン語で「ミラビリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説であり、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場する。本研究の主要な軸は次の3点である。

- 1) 驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通するモチーフや逸話を関連作品から抽出し、分類を試みる。
- 2) 知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

活動報告

国立民族学博物館における共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と連携させ、研究会を3回開き、研究代表者と分担者は本研究課題と各自の専門テーマの関連について発表を行った。また、本研究の分担者以外にも発表を依頼し、活発に議論を行った。

1回目の会では、驚異を媒介する「目撃者」としての旅人のトポスを採りあげた。驚きは「見る」という視覚体験によってまず目撃者に生じ、その目撃の共有が驚異譚であるともいえる。誰かが「見てきた」、すなわちそれは存在したという前提がなければ、読者は驚きを共有できない。作り話とわかっている話は、悲哀や熱情、興奮などの感情を喚起したとしても、日常的にはあり得ない奇異の存在に対する驚きにはつながらない。目撃者が必ずしも実在した人物ではなかったり、あるいは実在した人物の目撃情報とされていてもそれが史実ではありえない場合でも、「誰それが実際に見た」という証言が、驚異譚の信憑性を高める仕掛けとして機能していることがわかった。

2回目は「驚異の視覚化」というテーマを採りあげた。驚異を描いて「見せる」ことは、二次的な目撃者を作り出すという行為に等しい。中世の場合、画家自身が驚異を目撃しているわけではなく、驚異譚のテキストから想像し、自身が知っているもののかたちの誇張や、通常はありえない奇妙なもの組み合わせで視覚的なイメージが創生されていった。

3回目は、「驚異の編纂」をテーマとした。旅行記などに含まれていた驚異の目撃譚がもとの文脈から抽出され、博物誌や百科事典といった知識の集大成として編纂される過程をヨーロッパと中東の場合で比較した。

今年度から、各会のテーマに関連した事例紹介を発表者以外からもつづけている。研究発表に劣らない事例紹介

によって議論がより充実し、歴史的、地域的な大きな展開を把握することができた。

基盤研究 (B) 一般

社会的包摂のための実践人類学的研究

代表者 鈴木 紀

目的・内容

本研究の目的は、現代社会の課題である「社会的包摂」を国際的に推進するための支援のあり方を提言することにある。社会的包摂とは、社会から排除された人々を再び社会に取り込もうとする試みを意味する。従来、社会的包摂は一国家の内政課題として理解され、その前提で国家単位の研究が行われてきた。これに対し本研究は社会的包摂をグローバルな課題として位置付ける。これにより先行研究で提唱されていた官・民（企業）・市民セクターの相互補完からなる「公共性」概念を、グローバルな文脈に置いて再考する必要性が生じてくる。とりわけ本研究はグローバルな公共性における市民の役割に焦点をあて、官や民によるグローバル支援活動との軋轢や、協働の可能性を検討する。そのために5種類の支援活動（フェアトレード運動、国際協力NGO活動、国際協力ボランティア活動、都市在住の先住民族支援活動、無国籍者支援活動）の事例研究を実施する。

活動報告

- 1) 研究会の開催：6月と12月に研究会を開催し、各自が担当する社会的包摂の事例研究の進捗状況を報告した。
- 2) 調査：研究代表者と研究分担者は、各自が担当する課題に関する調査を実施した。

鈴木 紀は、国際フェアトレードラベル機構の認証をうけたボリビアのカカオ生産者組合を訪問し、フェアトレードの成果と、フェアトレードを契機とする生産者と消費者の交流について調査した。

岸上伸啓は、カナダ・モントリオールの先住民団体マキヴィクとアバタック文化研究所、先住民友好センターにおいて都市在住イヌイットの社会的包摂に関する調査を行うとともに、カナダ政府やケベック州政府、モントリオール市、イヌイット政府の都市在住イヌイットへの政策や支援に関する調査を行った。

白川千尋は、青年海外協力隊員の活動、活動の背景にある価値観や考え方、活動対象者との相互関係のあり方などに関する調査をラオスとタイで行った。

鈴木七美は、アメリカ合衆国とカナダで手工芸品のフェアトレードを推進する団体 Ten Thousand Villages に関し、各ショップの地域の特徴・多機能化の状況と社会的包摂に関する参与観察・聞き取り調査を実施した。

関根久雄は、ソロモン諸島マライタ州およびウェスタン州におけるNGOによる有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトの実施プロセス、州社会から国家に向けられる低開発の語りなどに現れる人々の感情に注目し、ソロモン諸島民にとっての近代化および開発の今日的意味を探るための調査を実施した。

陳 天璽は、無国籍者を社会的に包摂するために試みられている支援と実践について研究した。無国籍者の社会的包摂を行う際、困難となっている問題、成功した事例など、NGOでの参与観察を通して分析した。
- 3) 公開ワークショップ：2012年6月に日本文化人類学会において「グローバル支援の人類学——支援研究から人類学的支援へ」分科会発表を行った。また2013年3月にアメリカ応用人類学会において「Anthropology of Global Supporting」分科会発表を行った。

基盤研究 (B) 海外

北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権

代表者 岸上伸啓

目的・内容

米国やカナダでは先住民の「伝統的な生業」(狩猟漁撈)活動の継続は先住権のひとつと考えられており、アラスカ・イヌピアットやカナダ・イヌイットにはホッキョククジラを捕獲し、利用する権利がそれぞれの国家によって承認されている。本研究の目的は、現代の先住民生存捕鯨が、いかなる政治的、経済的、社会的、環境的条件のもとでどのように実施され、それが捕鯨コミュニティの維持や変化にいかに関与しているかを、北アメリカ先住民の事例を通して解明することである。さらに、それらの捕鯨を分析することによって、先住権が具現化された実態とはどのようなものであるかを解明する。

活動報告

2012年度は、カナダにおけるイヌイットの捕鯨の現状についてオタワの漁業海洋省において2012年5月20日から5月27日まで調査を実施するとともに、米国アラスカ州バロー村で捕鯨祭ナルカックおよび鯨肉の村外への流通に関する参与調査および聞き取り調査を2012年6月25日から7月4日まで実施した。また、米国とカナダの先住権や先住民運動に関する文献調査を実施した。さらに、アラスカ先住民とカナダ・イヌイットの捕鯨の法的な根拠や問

題点について先住権や先住民運動との関係から調査を行うとともに、北海道道立北方民族博物館において環北太平洋地域の北方先住民による捕鯨やイルカなど小型鯨類の捕獲に関する情報を収集した。

カナダでは先住権の一部としてイヌイトによる捕鯨が、約50年間の中断を経て1990年代に復活し、実施されているが、狩猟・解体・分配の技術の継承が不十分であるという問題や巨額の経費を必要とするという問題があり、ヌナヴト準州以外では捕鯨は休止状態にあることが判明した。一方、アラスカでは気候変動の悪影響を受けながらも沿岸部のイヌピアットは捕鯨を実施し、捕鯨祭などを通じて鯨肉などの村全体での共食や分配が実践されており、彼らのアイデンティティの基盤であり続けている。

本年度は、これまで国内外の調査で収集してきたアラスカ先住民の捕鯨に関する資料や情報を分析し、その成果を中間報告として英文報告書を作成し調査地に還元するとともに、民博のホームページで公開した。また、成果の一部を3本の学術論文として出版し、2012年9月開催の日本カナダ学会や同年11月開催の日本文化人類学会一般公開シンポジウムなどで口頭報告を行った。さらに現代の捕鯨民イヌピアットの民族誌を作成するための準備を進めた。

基盤研究 (B) 海外

東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究

代表者 朝倉敏夫

目的・内容

21世紀を迎え、民族の混交は幾多の問題をはらみながら、ますます進行している。なかでも、朝鮮半島から拡散したコリアンは、ホスト社会に適応しつつも、コリアンどうして協同している。また、ホスト社会に包摂されながら、融合されず、時に排除される。この点で独特の存在である。

本研究は、先行プロジェクトにより蓄積した基礎データと国際的な研究協力体制を活かし、第1に東アジアのコリアン・ネットワークに根差した生活文化を明らかにする。ここでは、本国のコリアンとの違いも焦点となる。その結果、第2にコリアン・ネットワークを形作る「適応-協同」の原理と、コリアン・ネットワークを取り巻く「包摂-排除」の原理を解明する。

これらにより、ボーダーレス化する東アジアで、民族の適応と協同、包摂と排除の動きがどう働いているかに迫り、民族の混交という社会のリスクを透明化する一助としたい。

活動報告

本年度は過去3か年の研究成果を総合的に検討し、全体としての成果公刊に向けた活動をおこないつつ、研究代表者・研究分担者・連携研究者の各自が個別での成果公刊準備もおこなった。このため、韓国へ渡航し、補足調査をおこなった。

基盤研究 (B) 海外

中国の「国境文化」の人類学的研究

代表者 塚田誠之

目的・内容

中国は陸上で14か国もの隣接国と国境を接している。人為的に区切られた国境は、人々の生活圏を分断して形成されてきた。国境はウイグル・チベットなどに見られるように往々、民族問題の火種になってきた。また、国境地域はエネルギー資源の宝庫であり、経済圏が形成されてきた。中央政府は国家統合のためにも、国境地域をきわめて重視してきた。その国家の境界としての位置付けは民族の文化やアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしてきた。国境地域では、民族のネットワークによる結びつきが強く、文化の特徴が明確で、アイデンティティが保たれ、独自の国境文化が形成されてきた。本研究は中国南北の比較検討を通して、民族文化の核心を把握する。そのことはひいては民族紛争の未然の防止につながり、人間の安全保障に寄与するであろう。

活動報告

本年度は最終年度にあたり、中国の「国境文化」の問題点の検証を行うとともに、研究に一層の厚みと奥行を得るため、中国とその隣接諸国の双方から、人々の結びつきや、移動の実態、移動と政治との関わり、儀礼の実態に重点を置いて、締めくくりに実地調査を行った。また、国際学会で成果の報告をも行った。塚田は中国とベトナムで、中越国境地域に居住するチワン族およびベトナム側の民族とのネットワークを通じた結びつきについて、とくに擬制的な親族「ラオトン」関係について多くの新たな事例を得て、その特徴について整理を行うとともに、中越両国の民族性の違いについて展望を得た。また、国境を流れる瀑布が観光地化されている現状と現地の住民の間でその利益をめぐって不均衡な状況が見られることなど問題点を明らかにした。長谷川 清は中国・ミャンマー国境地域の徳宏タイ族自治州で調査を行い、1980年代以降に流入した漢族移民がローカル権力と交渉しつつ、地域ブラン

ド創出の表出と国境文化の形成に主体的な役割を演じていることを明らかにした。樫永真佐夫は、ベトナム、ラオスの国境文化に関する現地調査を黒タイの各村落を中心に行い、国境を挟んで両国に住む黒タイの文化に関する相互影響関係、国境貿易の村落生活に対する影響を明らかにした。大野 旭は中国北部の内モンゴル自治区とモンゴル国との隣接地帯、とくに旧満州国領内のハイラル市と満洲里周辺で調査を行い、満洲国時代から現在に至るまでの国境地帯をはさんだモンゴル系諸集団の移動がいかに政治と国際関係と連動しているかという点を明らかにした。吉野 晃はタイのユーミエン（ヤオ）の儀礼について調査を行い、儀礼への女性の参加など最新の傾向を明らかにした。松本ますみは、回族の世俗化と現代化について、米国サンディエゴで開かれたアジア研究協会の学会で報告をした。このように調査活動を通じて、中国南北の「国境文化」の核心の把握に接近し得た。

基盤研究 (B) 海外

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究：学術、制度、当事者の相互作用

代表者 野林厚志

目的・内容

本研究の目的は、1)台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）が台湾の日本統治期（1895～1945年）に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2)現在の台湾社会における民族認定の様相とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3)1)と2)の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。

日本統治期に収集された学術資料の分析と再評価を現地調査と連結させて行い、既存の歴史資料のデータとしての質を高める。その上で、当事者たる原住民族自身が民族分類に対して有してきた認識のありかたにせまり、学術、制度、当事者の相互作用の動態を明らかにすることを狙う。

活動報告

本年度は研究計画にしたがい、研究代表者ならびに研究分担者はそれぞれの担当項目に関する現地調査を実施した。これらの成果は同課題名と同じ標題の中間報告書としてまとめ、電子ファイル化（PDF・A4版122頁）し、関連諸分野の内外の研究者に配信した。従来の科学研究費補助金による研究成果は終了年度に紙媒体による研究報告書をまとめるものが多かったが、本課題では中間時の成果を公開し、他の研究者による批判的検討により議論をきたえ、後半の研究活動をより洗練していくことを企図した。

代表者、分担者の協働した研究活動としては、2012年7月に台湾から現地研究協力者を招聘し、国立民族学博物館における日本統治時代に台湾で収集された衣類資料の調査と分析、その結果に関わるワークショップを実施し、12月には当該研究課題である原住民族の分類の歴史性と現代の表象に関わるワークショップを現地研究協力者を招聘して福岡大学で実施した。また、代表者、分担者ともに、4月には天理大学で開催された国際学術シンポジウム「台湾原住民の音楽と文化」に、8月には台湾の台北科技大学・台湾原住民族文化園區において開催された国際シンポジウムである第5回台日原住民族研究論壇に出席し、発表者、議長、コメンテーターを、内外の研究者の参加する複数のセッションでつとめ、研究情報の交換や成果の国際的な公開を行った。従来の科学研究費補助金による研究活動は、代表者、分担者が個別に国際シンポジウム等に参加するものが多いが、当該課題では各人のそうした研究活動に加えて、研究課題の参加者がそれぞれの成果を相補させながら外部研究者とともに議論をねりあげる機会を意図的に増やし、海外学術調査の特徴を活かした実績を当該年度はとくに強化した。

基盤研究 (B) 海外

旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較

代表者 齋藤 晃

目的・内容

16世紀初めから19世紀初めまで続いたスペインによる植民地統治は、南米の先住民社会を大きく変えたが、スペインが実施した諸政策のうち、集住政策ほど甚大な影響を及ぼしたものはない。広範囲に分散する集落を、計画的に造られた町に統合するこの政策は、植民地全土で実施されたが、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを革新し、今日の先住民共同体の基盤を形成したと考えられる。しかし、従来の研究は地域的に限定されたものがほとんどで、この政策の評価も「成功」と「失敗」の両極を揺れ動いている。本研究は、南米の広い地域の事例を比較することで、集住政策の歴史的意義を総合的に解明する。

活動報告

第54回国際アメリカニスト会議の一環として、7月15日から20日にかけて、ウィーン大学（オーストリア）にお

いて「スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその効果」と題する国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、海外共同研究者を含めたメンバーが一堂に会し、研究成果を発表し、議論を交わした。従来の研究では、集住政策は南米の先住民の社会と文化を全面的に否定し、ヨーロッパの制度や価値を強制するものとみなされてきた。そして、その効果はもっぱら攪乱や破壊などの否定的なものだったと考えられてきた。それに対して、このシンポジウムでは、さまざまな事例の検討を通じて、次の2点を明らかにした。

- 1) 先住民が集住政策の客体から主体に転身し、本来抑圧的な制度を飼い慣らし、支配と被支配の狭間で自分たちの利益を追求したこと。
- 2) 集住政策により先住民に押しつけられた制度や価値が、在来の制度や価値と予想外のかたちで接合し、そこから社会の再編と文化の再生の複雑なプロセスが生じたこと。

8月7日から10日にかけて、サン・イグナシオ・デ・ベラスコ（ボリビア）で開催された第14回国際イエズス会ミッション会議に齋藤 晃と武田和久が参加し、辺境地域の修道会の集住政策について報告を行った。また、8月23日と9月6日、リマ（ペルー）の教皇庁立ペルーカトリカ大学において、ペルー在住の海外共同研究者の参加を得て、アンデス南部とボリビア東部の集住政策に焦点を当てた公開セミナーを開催した。国内では、6月30日と12月27日、国立民族学博物館において、国内メンバーによる研究会を開催した。

これまでの研究の最終成果として、スペイン語の論文集を刊行すべく、準備を進めた。この論文集は教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会から刊行される予定である。

基盤研究 (B) 海外

東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動

代表者 田辺繁治

目的・内容

本研究の目的は、近年、東南アジアで勃興しつつある新しいタイプのコミュニティ（共同体）の実態を運動の視点から捉えることによって、そこに参加する人々の現在と未来に向けた想像力、情動および社会変革のイメージと、それを実現しようとする関係性、組織や手段を人類学的に解明することである。本研究では、特に宗教、環境や医療などに注目し、人々がコミュニティに参加し、あるいはコミュニティを作り上げながら、いかに〈生〉の多様な局面に関わる社会変革を志向していくかを明らかにする。そこでは、コミュニティが異質な勢力、制度や集団との組み合わせ〈アセンブレッジ〉の中で接合していく実態を描きだすとともに、その過程において創出される共同性、価値や倫理の様態を解明することが目指される。以上をふまえ、本研究は、タイを中心に、東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動について、海外共同研究者とともに各地の事例を調査するものである。

活動報告

本年度は、運動をとおしてコミュニティ内部で形成されつつある新たな共同性に注目して調査を行い、そうした共同性を支えている価値や倫理の内容を把握することを目指した。さらに、それらが外部の個人、集団、コミュニティとの接合によって拡大していく過程にも注目しながら調査を進めた。

- 1) 代表者の田辺は、隠者パンのユートピア空間が瞑想中の「夢想」を基に構築されてきたこと、および隠者と女性修行者との間に新たな共同性が芽生えていることを明らかにした。
- 2) 松田素二は、北タイの3つのコミュニティをとりあげ、上からの「統治」と下からの「対応」から生まれる共同実践の事例を収集し、生活主義的思想の可能性を追究した。
- 3) 西井涼子は、ビルマ国境のメーソットにおけるムスリム・コミュニティの構成、ダツワ運動の歴史、および現在のダツワ運動に対する住民たちの態度についてのデータを収集した。
- 4) 平井京之介は、北部・中部タイのコミュニティ博物館を調査し、博物館活動を通してコミュニティの伝統や観光資源化など、新たな共同性や価値が創出されつつあることを解明した。
- 5) 阿部利洋は、カンボジア・パイリンにおける教育事情を調査し、パイリン国際学校およびタイ国境プロンの私立学校において教師たちの生活、学校運営に関するデータを収集した。
- 6) 古谷伸子は、チェンマイの民間治療師のネットワーク化の経緯を明らかにし、さらに治療師たちの知識伝達、生薬生産、クライアントとの相互行為についてのデータを収集した。
- 7) 岡部真由美は、北タイ開発僧ネットワークに参加したタイ・ヤイ人僧侶が主催するビルマ国境の仏法センターにおいて、村人との関係、「庇護者」と呼ばれる寄進者との関係などを解明した。

また2013年3月7～8日には、タイ・チェンマイ大学において海外共同研究者とともにワークショップを開催し、各自の研究経過を報告して比較検討し、分析の方向性を探るとともに、来年度の調査計画を画定した。

基盤研究 (B) 海外

インド音楽・舞踏のグローバル化に関する総合的研究

代表者 寺田吉孝

目的・内容

本研究では、インド音楽・舞踏の現代的展開と変容をグローバル化との関連で考察するために、インド国内における音楽変容と、インドにおける音楽・舞踏文化に大きな影響力をもつ在外インド系コミュニティにおけるインド音楽・舞踏の実践を関連づけて考察する。地域間を結ぶ個人・団体の特定、かれらの活動内容や交流の実態の把握、音響としての音楽への影響に関する考察をおこなう。音楽・芸能における変化は内的要因だけではなく、グローバル化を背景とする音楽・舞踏文化の変質がその主要因になっている点を具体的に示すことができると考える。

本研究は、これまでの南インド古典音楽の研究蓄積を土台にしなが、北インド古典音楽や南北の古典舞踏を調査対象に加え、インド音楽・舞踏とグローバル化との複合的な関係を包括的・総合的に考察するものである。

活動報告

研究代表者・寺田吉孝は、南インド、チェンナイ市において現地調査を実施した。チェンナイで毎年12月～1月にかけて開かれる音楽・舞踏祭に参加し、国外在住のインド系音楽家、舞踏家の公演活動の実態について調査をおこなった。特に昨年現地調査をおこなったカナダ、トロント市在住のインド系舞踏家とチェンナイ在住の師匠たちの関係や、在外舞踏家を支援する団体の組織や活動について理解を深めることができた。また、以前から注目しているインターネットを利用した音楽教授についても追加調査をおこない、個人ベースの利用が一般化するとともに、音楽院などが組織的に海外の弟子を募集するなど、インターネット教授の多様化が進行していることが明らかになった。

研究分担者・田森雅一は、昨年度に引き続きラジャスタン州ジャイプルで現地調査を実施した。昨年度調査を開始したグローバルな活動を展開する芸能集団「ラジャスタン・ルーツ」について追加調査をおこなうとともに、古典音楽の伴奏を世襲的職業としてきたカーストに属する演奏家、関係者に聞き取りをおこない、グローバル化を背景とした音楽ジャンルと社会関係の変化に関する情報を収集した。

研究協力者・竹村嘉晃は、シンガポールのインド系コミュニティの音楽芸能実践について現地調査をおこなった。現地におけるインド音楽の演奏、教授を精力的に推進してきたバスカル芸術院、シンガポール・インド芸術ソサエティ、シンガポール・インディアン・オーケストラなどの関係者に、活動の実態や国外のインド系コミュニティとの人的ネットワークに関する聞き取り調査をおこなった。演奏ツアーなどによるインド在住演奏家の欧米訪問の増加が、インドと欧米の中継地であるシンガポールにおけるインド音楽の活性化につながっている点が明らかになった。

基盤研究 (B) 海外

南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究

代表者 Peter J. Matthews

目的・内容

南日本、東南アジアにおける野生サトイモ (*Colocasia esculenta*) の民族植物学的調査 (現地におけるサトイモの歴史・用途・管理などに関して) を行う。遺伝子比較により、南日本 (琉球列島) の野生サトイモの起源を同定する。植物の自然史・文化史、琉球列島におけるヒトの定住と生活の歴史、必要とされる野生サトイモの個体群の保全といった観点から、得られた成果を解釈する。

2011年度にベトナムとフィリピンで行った野外調査に続き、これらの地域における野生サトイモと他の種のサトイモ属 (*Colocasia*) の遺伝的関連に注目する。

活動報告

2012年度、ベトナム北部とフィリピン北部・中部・南部で野外調査を行った。全地域において野生種のサトイモ・野生種の他の *Colocasia* を、またフィリピン中部と南部において野生種と栽培種のクワズイモ (*Alocasia macrorrhizos*) を観察し植物標本を収集した。

サトイモ科 (*Araceae*) のクロロプラストDNA (cpDNA) 分析に最適であるさまざまな遺伝子座を同定した。(Ahmed et al. 2012) 現在、これを用いて、アジア・太平洋地域から収集された多くの標本 (野外調査により新たに追加されたものと国立民族学博物館内に保管されているDNAアーカイブからのもの) について分析を進めている。

これから研究成果として公表を予定していることは、1) 熱帯の2倍体サトイモの多くは1つの大きな母系cpDNA系統に属していて、インドーアジアに起源をもつと考えられる 2) 温帯の (寒冷な気候に適応した) 3倍体サトイ

モの多くは2番目に大きいcpDNA系統に属していて、東アジアに起源をもつと考えられる 3) 野生種には多くのcpDNAの系統があるがこのうち2つの系統のみが大部分の栽培種サトイモに寄与している 4) ベトナム北部で収集した標本の中には、形態学上は異なっているが、類似のあるいは同一の葉緑体ゲノムを示すものがあることから、この地域において異種間の交配が起こったと考えられる。ベトナムの野生種サトイモはこれまでに見つかった南と北の双方の系統を起源としているのかもしれない。食用の植物として、また、ブタの餌として人類が利用し伝播した結果として、この野生種のサトイモの交配が起こった可能性もある。

基盤研究 (B) 海外

宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として

代表者 辻 輝之

目的・内容

本研究は、南アジア系移民・ディアスポラを事例として、1) 宗教が受入社会における移民のアイデンティティ、「コミュニティ」の形成に如何なる影響を与えているか、2) 宗教「伝統」の再構築と展開が多文化、多人種、多宗教を特徴とする受入社会において、彼らと他集団との共生、ひいては、その社会の統合と安定に如何なる影響を及ぼしているか、について民族誌的手法を用いてデータを収集して考察し、宗教と社会に関する既存の概念、理論的枠組の再検討に寄与することを目指す。

活動報告

【第1四半期（4～6月）】4月及び5月にトリニダッドにおけるフィールドワークを2度実施し、カトリック教会へのヒンドゥー教徒による巡礼について、参与観察と聞き取り調査を行うと同時に、当地大学、ナショナルアーカイブスおよび大司教古文書館にて史料収集を行った。

【第2四半期（7～9月）】セント・ルイス大学 Center for Intercultural Studies において前年度および本年度第1四半期までに収集したデータの分析を進め、その結果を基に、9月末までに査読学術雑誌 *American Ethnologist* に論文を投稿した。同期に予定していた南フロリダでのフィールドワークは、トリニダッドの事例研究の進捗状況に鑑み中止したが、その代わりに前年度の予備調査の結果をまとめ、プロポーザルを作成してアメリカ宗教学会に提出した。

【第3四半期（10～12月）】前年度から纏めてきた書籍出版計画書が完成し、11月半ばのアメリカ人類学会においていくつかの出版社に査読のため提出した。また、同月には先に提出したプロポーザルが受け入れられたため、アメリカ宗教学会の特別セッション North American Hinduism において、南フロリダにおける予備調査の結果について発表を行った。論題は Between “Indian” and “West Indian”: Ethnoreligiosity and Social Capital Development of the Indo-Caribbean Migrants in South Florida.

【第4四半期（1～3月）】9月末に提出した学術論文が査読の結果、掲載が見送られることとなり、査読者の示唆を参考に論文の書き直しを行うとともに、さらにデータの分析を継続した。併せて、2月28日、3月1日の両日、セント・ルイス大学において国際学会 Perspectives on Interculturality が開催され、論文発表をおこなった。論題は A Theoretical Proposal on Cultural Mixing, (still) a “Miracle Begging for Analysis.” また、同年4月11～17日に開催されるアメリカ人類学会宗教人類学部会学会での発表が受諾された。論題は Sharing Mothers: Religious Conflict, Statue’s Play, and the Simultaneity of Origins.

基盤研究 (C) 一般

移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり

代表者 金 美善

目的・内容

本研究は、グローバル化に伴う人々の移動を「女性」と「言語問題」に焦点を絞り、移民女性を取り巻く困難な社会状況を社会言語学的観点から捉え、さらに移民女性の言語問題を当事者の戦略とホスト社会の支援との関係を明らかにしようとするものである。移民女性は、出身国においても教育、識字、性差別によるハンディを抱えている場合が多いが、これらは移民ホスト社会において、一層彼女たちを循環的苦境に追いやり、社会参加や上昇の機会を制限している。この問題はさらに女性が育てる次世代の教育等に引き継がれ、移民受け入れ社会にとっても解決すべき深刻な問題である。本研究は、主に日本において今後も増加することが予想される移民女性に焦点を当て、特に移民女性の、識字や言語運用能力不足に起因する社会参加からの除外などの諸問題の所在を、主に社会言語学的観点から明らかにし、その改善のための施策の可能性を国際比較により探らうとする。

活動報告

本研究は、グローバル化に伴う人々の移動を「女性」と「言語問題」に焦点を絞り、社会言語学的観点から捉えようとするものである。当年度には以下のような研究調査を行った。研究代表者の金は、まず、韓国外国人労働支援センター（ソウル市）とアンサン移住者センター（アンサン市）を訪問し、移住者への言語支援状況についての情報を得た。次に、全羅南道、ムアン郡庁を訪問し、移住女性に対する生活支援についてインタビュー調査をした。また郡庁委託のハングル教室を訪問し、アジアからの移住女性の授業参加状況を観察し、彼女らの言語問題（言語習得、韓国語でのコミュニケーションなど）について聞き取り調査を行った。調査の際にはインタビュー内容を録音し、談話資料を確保することもできた。今回の調査では韓国の移住者に対する公的支援がいかに関事者に活用されているのか、またどのような問題点を残しているのかを知り、さらに移民女性の韓国語習得の過程を分析できる資料が得られた。

研究分担者の庄司博史は、フィンランドにおいて、移民関連行政を全体として管理、調整する部門で、移民女性の統計や生活状況に関し責任者および職員に対しインタビューを実施した。移民の識字問題はおもに雇用の機会の提供、および雇用現場での不自由の軽減のため該当者を対象に教育をおこなってきた。アフリカ、中東出身の家庭女性、高齢の女性などに社会参加をうながし、啓蒙をすすめる観点から識字教育が始まったのは近年で、民間NGOおよびそれを支援する形で行政が参与する。参与観察をおこなった施設は、保育所との併設、女性の文化活動を提供するものなど使用の便宜性をたかめるほか、教育メソッドにおいても従前とは根本的にことなる方法が実施されている。また非識字者全体の把握のため、若年者層にもみられる潜在的非識字者の発見方法が試行されていることなどが明らかになった。

基盤研究 (C) 一般

21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例

代表者 森 明子

目的・内容

本研究は、19世紀以来西欧を中心として近代世界を構成してきた社会原理が見直しを迫られているという認識のもとに、市民運動を、新しい社会像を構築しようとするボトムアップの試みとしてとらえて、研究するものである。ベルリンの外国人が集住する地区の都市再生プロジェクトと、それと並行的に行われている市民団体、移民、行政、運動家らの市民運動に焦点をあてて、その展開のプロセスを明らかにする。この分析を通して、21世紀の新しい社会像を提言することをめざす。

活動報告

本研究は、19世紀以来西欧を中心として近代世界を構成してきた社会原理が見直しを迫られているという認識から出発し、ベルリンの街区で都市再生プロジェクトがいかに関展しているのか明らかにしようとするものである。対象とするのは、外国人が集住するベルリンの街区で、都市再生プロジェクトに多様なエージェントが関わっていることに注目している。

2012年度は11月から12月にかけて20日間の現地調査を行った。昨年度にひきつづき当地で展開した都市再生プロジェクトと市民の関わりについて、その過程をあとづける資料を収集した。とくにキンダーラーデン運動に焦点をあてて、その複数の関係者に詳細なインタビュー調査を行った。

キンダーラーデンとは、小規模の託児所／保育所機能をもつ装置で、地域住民の隣人関係、社会関係をいかに構築するかという問題とも密接に結びつき、都市再生プロジェクトとも直接に連続している。本研究はキンダーラーデンを運動としてとらえて、市民運動や都市再生プロジェクトの一環として検討する視点を打ち出し、冷戦時代から冷戦後にかけて、ベルリンの社会編成のあり方がどのように展開しているかを明らかにしようとしている。本年度の調査では、キンダーラーデンを実際に企画・運営している個人へのインタビューの対象を拡大するとともに、内容も深化させた。キンダーラーデンの実践が、運営主体によって、ひじょうに多様であり、問題意識や運営方針も異なることを具体的に明らかに示すデータを収集した。また、現地調査に先立って、6月に開催された日本文化人類学会において、昨年度までの調査をもとに分析した結果を、中間段階での研究成果として口頭発表した。

基盤研究 (C) 一般

アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究

代表者 吉本 忍

目的・内容

本研究は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネ

シアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳を始めとする資料の検討によって実証的に明らかにするものである。本研究を通して、私たちが経験する伝統工芸の変革と文化の創出の場面におけるグローバル化の功罪などの本質的意義について批判的視座を提示することを目的とする。

活動報告

本研究の目的は、現在アジア、アフリカにおいて民族衣装の素材として広く使用されているプリント更紗が、インドネシアやインドの伝統的染織技法とデザインをもとにして、ヨーロッパの植民地支配を背景にしたグローバルな交易と産業革命による技術革新によって創出され、広く展開してきた歴史的経緯を、サンプル帳をはじめとする資料の検討によって実証的に明らかにするものである。

2012年度、研究分担者の金谷美和は、3月にオランダのフリスコ社ミュージアムとロッテルダム世界博物館において19世紀末から20世紀初頭にかけてプリント会社が作成したプリント更紗のサンプル帳の調査を行った。昨年度における調査によって、研究代表者の吉本と、分担者の金谷は、グローバルな交易と技術革新が契機となってプリント更紗がアジア、アフリカ向けにオランダで生産されたことを明らかにするような、以下のような貴重な資料を発見した。

1) 東アフリカ向けプリント更紗製品のサンプル、2) 英領インドで収集された染織品、3) 東アフリカで収集された初期カンガのサンプル、4) インドネシア向け、東アフリカ向けのイミテーション・パティック。

これら資料のうち1)～3)について重点的に調査を行い、画像の電子データ撮影、文字資料についての一部解説を行った。さらに、昨年度の調査によって入手したオランダ語の文献2点の翻訳を行った。

また、旧大阪府産業デザインセンターから寄贈されたプリント更紗の資料のうち、東アフリカ向けの日本製プリント製品について、研究補助者とともに、画像データの撮影、文字データの整理、入力を進めた。

基盤研究 (C) 一般

現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ

代表者 韓 敏

目的・内容

本研究の目的は、ライフヒストリーの手法を用い、安徽省都市部と農村に在住している8人とその家族に焦点を当てて、人々の生活実践レベルにおける社会主義革命の意義及びグローバル化による中国の社会変化の様態とメカニズムを考察すると同時に、人類学研究におけるライフヒストリー・アプローチの有効性を再検討し、ライフヒストリーの比較研究の理論的構築を試みることにある。具体的に3つの視点からアプローチしていく。

- 1) 社会主義革命のイデオロギー、諸制度、市場経済体制の下に導入されたグローバルな理念と生活様式がいかに個人に受け入れられたのか？
- 2) 受容された概念や生活様式は、どのような意識と環境の下に如何に実践されているのか？
- 3) 複数の個人とその家族のライフヒストリーを比較し、共通点と多様性を見いだす。

活動報告

2010年度と2011年度の調査データを整理しながら、福建、上海、瀋陽、内蒙古で新たなインフォーマントと出会い、15の共通調査項目（出産、命名、嫉、学校教育、働き・仕事、消費、交友、恋愛、結婚、家族、子育て、扶養、エージング、死、祭祀）について、ライフヒストリーの聞き取り調査を行い、生活実践レベルにおける社会主義革命の意義およびグローバル化による中国の社会変化と持続性を考察した。

- 1) 安徽省蕭縣村落で収集された李氏の日記（1990～1991年）を電子ファイル化した。人民公社解散後、1人暮らしの70代の李氏の人生を分析するための素材を整理した。
- 2) 福建省安溪県でウーロン茶鉄観音の传承人 魏 月徳氏およびウーロン茶の作法、石獅市永寧郷で父系親族集団の責任者および彼の主催した祖先崇拜について、参与観察を行い、聞き取り調査を行った。
- 3) 瀋陽市で社会主義国家建設の初期段階における女性の社会進出について引き続き当時の経験者の聞き取り調査を行った。また、遼寧省老幹部大学を訪問し、当大学における定年退職した人びとの活動内容を観察し、大学教務の責任者たちにインタビューし、現代中国の家庭における学習の特徴および「学習型社会（生涯学習の社会）」作りのため、大学が果たした役割について紹介してもらった。
- 4) 上海で70代の夫婦から4世代の嫁の結婚持参財を中心に聞き取り調査を行った。
- 5) 研究協力者の白氏が内蒙古自治区87才の遊牧民阿氏についてライフヒストリー、「3・8紅旗手」（女性労働模範）の認定経緯（1977年内蒙古自治区による認定）、旱害、水害、風害、雪害などを乗り越えた放牧の経験、家畜の改良、畜舎の改善などを調査した。

基盤研究 (C) 一般

瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究

代表者 笹原亮二

目的・内容

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海の世界がある。そこでは古来、漁業・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、五島灘や玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が形作られた。こうした海域の「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。

こうした海域の島々や沿岸地域には、海域外と共通しつつも各海域独自の特徴的な民俗芸能が分布する。その一方で、同一海域の同種の芸能にも様々な差異が認められる。こうした民俗芸能の多様性は、「領域」「道」「コミュニティ」という特質と地域性が交錯しつつ展開してきた、各海域の歴史的環境と民俗芸能の密接な関係の存在を示している。研究では、そうした海域の島と海と沿岸地域を一体として「島嶼世界」と捉え、それぞれの島嶼世界における民俗芸能の実態を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明する。

活動報告

本研究は島々・海・沿岸地域を一体の島嶼世界と捉え、そこでの民俗芸能を歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明することを目指し、瀬戸内海をはじめ、西日本各地の多島海の世界における島々と沿岸地域の民俗芸能について調査を行い、相互比較を試みるものである。

2012年度は、瀬戸内海の島々と本州・四国の沿岸地域の各地の民俗芸能を中心に現地調査を行った。調査を行ったのは、継獅子（愛媛県今治市）・御田植祭（愛媛県西予市）・盆踊（岡山県笠岡市・愛媛県今治市）・踊念仏（岡山県真庭市）・祝島の神舞神事（山口県上関町）・風流踊（山口県山口市・長門市）・だんじりの巡行に伴う芸能（岡山県笠岡市・広島県三原市）・神幸祭に関わる芸能（愛媛県松山市・今治市・伊方町・宇和島市）・地芝居（愛媛県松山市・岡山県奈義町）・神明祭に関わる芸能（山口県上関町・広島県竹原市）・藤縄神楽（愛媛県大洲市）等である。

加えて、現地調査を行った民俗芸能を初めとした各地の民俗芸能に関する論文・調査報告書等の文献等の調査・収集や情報収集を、各地の図書館等において実施した。調査を行ったのは、岡山県立図書館・笠岡市立中央図書館・広島県立図書館・広島市立中央図書館・福山市立中央図書館・呉市中央図書館・竹原市立図書館・山口県立山口図書館・山口市立中央図書館・防府市立防府図書館・周南市立德山図書館・柳井市立柳井図書館・萩博物館・香川県立図書館・愛媛県立図書館・松山市立中央図書館・今治市立中央図書館等である。

こうした各地の民俗芸能に関する文献等の関連資料の調査を現地調査と並行して行うことで、本研究全体をより適切かつ効果的に進めることができた。また、各地の民俗芸能はそれが行われる祭と不即不離なので、祭自体の分布・内容構成等の地域的なあり方を把握することの重要性・必要性を確認した。

若手研究 (A)

グローバル化時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研究

代表者 陳 天璽

目的・内容

本研究「グローバル時代の国籍とパスポートに関する文化人類学的研究」は、国籍やパスポートに注目することを通し、1) こうした国家の制度が人々の行動や意識に与えた影響を明らかにするとともに、2) 人々にとって国籍やパスポートがどんな意味を持っているのかを考察する。特に、3) 一国家の枠組みのみでは捉えきれない人びと——重国籍者や無国籍者——が所有するパスポートから、国家間のズレや歪みを浮き彫りにし、現代社会における人間の安全保障を究明する。本研究は実際のパスポートを収集・比較検討することを通し、以上の目的を解明しようと考えており、こうした研究はこれまでなされておらず独創性にとみ、新たな知見を発見することが期待される。

活動報告

本年度は、これまで行ってきた無国籍者についての日本や海外での調査を継続して行った。その成果は、以下の通り。

1) 2011年4月、タイのマヒドン大学で行われた国際シンポジウムにおいて、研究者は日本における無国籍者の実態

とそれに対する支援について発表を行い、また英文論文を投稿発表した。

- 2) これまで本研究プロジェクトを通して行ってきた無国籍者に関する調査を踏まえ、2011年5月に開催された移民政策学会において『『在留カード』導入と無国籍問題を考える』と題するミニシンポジウムを行い、そこで、「日本における無国籍者に類型」と題する発表を行った。その後、同発表を論文として執筆し、同学会の特集として掲載された。
- 3) 無国籍状態となっている難民の子ども達に注目し、「難民の子どもたちの国籍とアイデンティティ」と題するシンポジウムを2011年6月上智大学で開催した。なお、その一部は、NHKのEテレ「ハートネットTV」において取り上げられ、2012年2月「日本に暮らす無国籍者」と題する番組として放送された（その後、多数回再放送された）。番組において、研究者は本調査の成果をもとに無国籍について解説を行った。
- 4) 本研究課題ではアメリカにおける重国籍の子ども達が、国籍・パスポート・そしてアイデンティティをいかに使い分けているのか、そして家族はどのような対応を行っているのかについても調査を行ってきたが、その研究成果の一部を、2012年11月サンフランシスコで行われたアメリカ人類学会において発表した。

若手研究 (B)

伝統的技術の戦略的継承法——現代インドの手工芸文化を中心とした民族芸術学的研究

代表者 上羽陽子

目的・内容

本研究は、ものづくりの「作り手の個人の創意工夫」や「伝統的技術の戦略的継承法」に実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに戦略的に選択しているか観察分析をおこない、その製作と流通の歴史を掘り起こすことによって、「伝統的」とされてきた手工芸品の社会・文化的意義をめぐる従来の視点を大きく変えることを目的とする。現代インドにおける自給自足的に製作される染織布をはじめ、インド国内外向けの商品用手工芸品、通過儀礼用染織布、さらにインド独立運動の象徴ともなった手紡ぎ手織り布を対象に、日本および世界の手工芸文化との比較を行い、独自の民族芸術学的視点によるモデルを提供するものである。

活動報告

本年度は、インド、デリーにおいて手工芸に関する現地調査を実施した（2013年1月23日～2月14日）。デリーにおいては、年に1度開催されるインド最大規模のインド手工芸祭の調査をおこなった。インド手工芸祭には、インド中からクラフト制作者や染織品の作り手自らが店を出し、その数は1,000店舗以上になる。そのため、インド全体の染織品の現状をつかむのに最適な場所である。ここでは、インド手工芸祭の組織や運営、インド手工芸の領域における染織品の役割や位置づけなどを把握した。

またこれまで、グジャラート州の女神儀礼布の制作現場における伝統的技術の継承や作り手個人の創意工夫について研究をおこなってきたが、今回は都市部におけるその販売の様子、とりわけ販売者がどのように販路を獲得しているのか、買い手がなにを求めているのか、モノがどのように流通しているのかなどの調査をすることができ、おおまかな動向を把握することができた。

成果公開については、論文として『国立民族学博物館研究報告』（査読有）に投稿し、掲載された。また民族芸術学会大会をはじめ各種講演にてその成果を公開した。

若手研究 (B)

実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究

代表者 太田心平

目的・内容

本研究には2つの目的がある。第1の目的は、植民地朝鮮において日本人実業家の富田儀作が行った高麗青磁復興事業と、彼の一族による朝鮮工芸品の世界流通、およびそれらが今日の高麗青磁の認識や制作に与えた影響を明らかにするという、史実の究明と地域研究への貢献である。

第2の目的は、これを通して人類学、特に植民地研究とエージェンシー論と物質文化研究へ理論的に貢献することにある。実業家と呼ばれる多面的な活動をおこなう人びとは、植民地の文化に介入し、植民地を脱した現在の文化にも影を落とす存在であった。だが、その多面性ゆえに研究に時間がかかり、後回しにされてきた経緯がある。申請者は、硬直が見られる当該分野の諸議論に対し、これまでの議論の偏りを修正する立場から、第2段階の研究を展開し、発信していく。

活動報告

本年度は、本研究の最終年度であり、これまでにおこなってきた調査研究の内容を補足し、成果を公刊するため

の作業にあてた。

これまでの2年間には、植民地朝鮮において高麗青磁の制作技法が復興した過程を記録した日本語、韓国語、英語の文献資料を、当時に手書きされたメモや書簡を含めて収集してきた。また、現在におこなわれている高麗青磁の制作技法と、それに関する制作者たちの語りを収集してきた。

本年度は、以上の蓄積を補足しながら活用して、主として3種類の成果をとりまとめた。

第1に、こうした近代の文献資料と現代の語りを対比させて分析し、両者がどう連続し、あるいは連続していないのかを分析した。これにより、物質文化の局面的生成過程と長期的連続過程を明らかにした。

第2に、近代の植民地朝鮮における高麗青磁の位相をひもとき、同じ朝鮮の伝統的な物質文化のなかでも、近代日本の知識人たちにオーデットされることで復興した朝鮮白磁や木工芸などと、そうではなかった高麗青磁との差異は、どういった点に起因するのかという考察をおこなった。

第3に、上記の2点とのかかわりから、高麗青磁の復興を主導しつつも忘れられた存在としての富田儀作についての総合的な情報整理を進め、その記録を公刊、発信準備中である。

若手研究 (B)

オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から

代表者 丹羽典生

目的・内容

本研究は、近年増大している第三世界の紛争の特質の一端を、オセアニアの事例、ことにフィジー諸島を中心に解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990年代後半以降、暴動から民族紛争、クーデターまでさまざまな政治的問題が起きている。本研究では、人間の安全保障、平和構築など紛争に関する新たな視点からの理論構築や事例分析を踏まえた上で、人類学的なミクロな視点からの分析を活用しながら、紛争に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、比較の視点からオセアニアの紛争の特質を明らかにし、さらには学際的な紛争研究へと昇華させる。

活動報告

調査は、イギリスのロンドンにおける古文書館にて、本研究課題と関係する歴史的資料に関する調査と収集を行った。19世紀から20世紀にかけての資料を閲覧することで、ことに20世紀の植民地時代の正確な情報を得ることができた。

本年度は最終年度ということで、成果公開を中心に行った。具体的には、国内のシンポジウム1件と国際シンポジウム2件を行った。

この目的及び研究ネットワークの構築と研究成果の交際の発信のために、オランダのアムステルダム大学、一橋大学にてオセアニア及び紛争関係の研究者と情報交換とシンポジウムのための打ち合わせを行った。この点は、国際シンポジウム「グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法」及び、国際シンポジウム「Identifying New Topics in Fijian Studies」の形で、生かすことができた。両シンポジウムに関しては、現在その成果をどのようなかたちで出版に結びつけるか、参加者とのあいだで話し合いを行っている。

また、具体的な成果としては、編著1冊（『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』）、論文3本、口頭発表10回（内国際シンポジウム4回、日本の共同研究会など6回）を行うことで、成果の公開を行った。それ以外では、フィンランドのヘルシンキ大学にて、オセアニア研究者と打ち合わせを行うことで、将来の共同研究に向けた話し合いを行った。

若手研究 (B)

ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

代表者 宮本万里

目的・内容

現代社会において地球環境保護の理念と技術が普遍的な価値として位置づけられる中、ブータンは経済的な指標でみれば最貧国のひとつながら、君主制の下で伝統文化および自然環境の保護を経済発展に優先させるとし、意識的な政治選択を実施してきた数少ない国である。しかし、近年の急速な民主化への動きは、君主制下での一元的で厳格な森林管理を環境保全成功の秘訣としてきたブータンの属性を大きく変えつつある。本研究では、選挙や分権化をとおした民主化プロセスのなかで、自然保護区に暮らす村落社会の人々の価値体系がいかなる形でゆさぶられ、どのように再編されつつあるのか、その過程を政府や環境NGOを含めた複数のアクターによる日常的で多面的な交渉過程のなかから描き出していく。

活動報告

2012年度の研究では、国立ウゲン・ワンチュック環境保全研究所との研究連携のもと、ブータンの村落地域における価値体系の変容を、自然資源利用の変化を手がかりに描き出そうと試みた。ブータンは古くは薬草の国とうたわれるほど、薬効のある植物資源が多いことで知られている。しかしながら、近年は保健省による近代病院制度の拡張政策の結果、国内の遠隔地においても近代医療へのアクセスが拡大している。多くの村で基本的な医薬品を手に入れることが出来、村の人々が土着の医療知識に触れることは少なくなっている。しかしながら、中央ブータンではまだ薬草やその利用についての知識を持つ者が残されている。今年度は夏期にブータンの連携機関とフィールド調査に関する会議を実施し、カウンターパートとの打ち合わせを行ったのち、春期の調査ではトンサ県の2つの村で主要なインフォーマントを同定し、植物標本採集と利用に関する知識の収集とその変容に関して聞き取り調査を行った。

トンサ県の調査対象村はジグメ・センゲ・ワンチュック国立公園のなかに位置するノブジ村とジャンピ村である。ジャンピ村はブータンの先住民といわれるモンパの人々が居住する村であり、仏教以前からボン教が信仰され、モンパ特有の呪術師であるパウが幾人も転生して多様な治癒儀礼に従事してきた。今回の調査では、そうした儀礼の観察も実施しつつ、もともと狩猟採集を生業としてきたモンパ社会の信仰や自然観を含む価値体系の理解につとめた。モンパ社会の事例は、従来農耕牧畜文化と仏教をブータンの国民文化として排他的に表象してきた政府の政策に対する批判的な検討を促すものであり、またデモクラシーを含む分権化と、集権化あるいは国民統合、そして自然保護という名で人々を規律化する統治システムとが入れ子状に共存する現代ブータンの政治文化の現状をも浮き彫りにしているといえるだろう。

若手研究 (B)

東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究

代表者 増野高司

目的・内容

東南アジア大陸部の各国においては、土地管理および森林保護の観点から焼畑を抑制する政策が実施された結果、焼畑を営んできた住民の生計をいかに維持するのが現在の緊急課題となっている。

本研究は、すでに焼畑の衰退が進んだタイと、焼畑の変容が急速に進行しつつあるラオスやベトナムなど、東南アジア大陸部に位置する各国の村落を事例として、世帯レベルでの畑地利用歴に着目し、国家政策や商品経済の影響に伴う生計活動の変化を比較分析することで、両国における焼畑の変容過程の特徴を示すことを目的とする。そして従来、焼畑が卓越してきた東南アジア大陸部における、焼畑やその跡地の管理や住民の生計維持に向けた指針を提示する。

活動報告

2012年度には、タイ北部および東北部、およびベトナム北部の農村において現地調査を実施した。具体的には、2012年11月および2013年1月にタイ北部の農村、2012年7月に東北タイの農村、2012年8月および12月にベトナム北部の農村を訪問し、稲作の栽培様式に着目し、焼畑の実施状況および衰退状況について調査を実施した。さらに、例えば、出稼ぎそして小規模な家畜飼育や森林産物の採集など、稲作以外におこなわれる生業および経済活動に着目し、焼畑衰退後の生計維持手段に関する調査を実施した。

その研究成果について、2012年度には4編の学術論文を執筆するとともに、9回の学術発表をおこなった。とくにタイ北部のミエン族が暮らす農村における生業および経済活動の変化に関して論じた論文を出版した (Masuno, Takashi 2012. "Peasant Transitions and Changes in Livestock Husbandry: A Comparison of Three Mien Villages in Northern Thailand". *The Journal of Thai Studies* 12: 43-63.)。この論文では、焼畑が衰退した農村において、陸稲の栽培が継続されることが多いこと、そしてブタやニワトリなどの世帯レベルでの小規模な家畜飼育が継続されていること、換金作物への食害が頻発によりウシ飼育が困難になっていることを報告した。また、小規模な家畜飼育が農業を引退した高齢者にとって重要な日々の活動になっていることを指摘した。

若手研究 (B)

チャム系住民とイスラームの関係に関する地域間比較研究

代表者 吉本康子

目的・内容

本研究の目的は、ベトナム中部から東南アジア、中国・海南島およびアメリカ西海岸などに拡散し、ムスリムとして暮らすチャム系住民の宗教実践、とりわけ、イスラームの共通項とされる諸実践を比較検討することで、イス

ラームの要素とローカルな要素の交渉過程の多様性および民族・宗教ネットワークの関係性について検証することを目的とする。

具体的には、1) 地域におけるイスラームの歴史的背景、国家による位置づけ（センサス上の分類、エスニシティ、人口比率）、自称（語源、他者との差異化の根源）、2) 礼拝空間、3) 制度、4) 礼拝・儀礼的实践についての名称・語源、5) クルアーン、儀礼に使用される書物（チャム語写本の使用状況）などについて比較検討し、各地における「イスラーム」の展開に関する新資料を提示し、さらに、「イスラームの統一性」という視点の有効性について検証する。

活動報告

2012年度は、国内において先行研究及び先行資料を収集し、前年度までに収集することができた資料・史料と併せて、ベトナム、カンボジア、タイ、アメリカ合衆国のチャム系ムスリムを対象とする宗教実践の比較検討を行った。とりわけ、従来の研究においてクルアーンと同一視され、現在もベトナム中南部のチャムに用いられているイスラーム写本に着目し、その継承・使用・拡散状況について検討した。本年度の活動を通して、チャムのイスラーム写本は、1) 東南アジアの中でも早期にイスラームを受容したとされるにも関わらず未だ空白部分が多いベトナム中南部の歴史を、「当事者の視点」から解明していくための第一次資料となる可能性があること、2) 本研究課題が着目する「イスラームの共通項」のひとつ「クルアーン」の地域的展開のあり方と多様性を示す資料となる可能性があることが明らかになった。

若手研究 (B)

生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性

代表者 風戸真理

目的・内容

本研究は、ポスト社会主義の諸社会におけるモノ生産の場において、生産者である人と生産されるモノとのあいだにどのような関係が取り結ぶもできたのかを、革命以前・社会主義期・体制変化後の各時期で比較検討する。私のこれまでの研究からは、モンゴルにおいては社会主義期に商品世界からはみ出す家畜が存在していた。これらは国家公認の正史である文書記録には記されていない。私はモノに関する人々の語りを収集することで、ふつうの人びとの視線から見た歴史を再構成することを企図している。この方法は、社会主義をはじめとする急激な近代化を経験した諸社会についての、「書かれなかった」もうひとつの歴史の側面をすくい上げるのに有効である。他方で、人と生産物とのあいだに見られる特別な関係は、社会主義がモンゴルの生産現場で実践されるさいにローカライズされてしまった結果なのだろうか。モンゴルにおける社会主義化の特徴を、他の国で社会主義が実現されるとき、あるいは他の国で近代化が具現化されるときと比較しながら解明する。

活動報告

当該年度に実施した研究の具体的な内容は、6月に文化人類学会加し、口頭発表「モンゴルにおけるフェルト製作の技術と社会的背景——『母フェルト』をめぐって」をおこない、モンゴルのフェルト製作のあり方を、その技術的側面に加えて、ローカルな社会関係の側面から明らかにした。7月から9月には、モンゴル国の遊牧地域においてフィールドワークをおこない、移動式住居「ゲル」とその部品であるフェルトなどの作り方と使い方について聞き取り調査した。

出版成果としては、風戸（2013）「ポスト社会主義国における職業と人生選択——カザフスタンのある朝鮮人の事例より」はカザフスタンにおける職業選択を中心とする人生選択に焦点を当て、社会主義期とポスト社会主義期の労働と生活のあり方およびその理念を検討した。風戸（2012）「モンゴル国の社会変化と遊牧民——世界のくらしと文化 モンゴル国（1）」からの4回の連載は変化するモンゴル国における不変項である畜産物に依存した食生活のあり方や食事のメニューに関するモンゴルの内的な論理について論じた。Kazato（2012）“The Felt Making Process and Social Relationships in Mongolia Using The Ehe Esgii (Mother Felt)”では「母フェルト」が、巨大フェルトを大量に複製する合理的な手段であり、かつフェルト製作に関する在来知識が家族や世帯間で継承される手がかかりとなっていることを指摘した。

執筆中の成果として、ゲルの生産・使用・補修に関する調査結果がある。ゲルは、社会主義期以前、社会主義期、体制変化後という時代の変化と、個人のライフサイクルに応じて、その素材、使い方、補修のしかたが変わっていた。すなわちゲルは、移動性の高さに加えて、素材やサイズ、使い方を使い手の都合や時代状況に合わせて変えられるという自在性を特徴とするといえるだろう。

以上の成果の意義と重要性は、ポスト社会主義諸社会のモノ生産の場における人間とモノとの関係を時代ごとに比較検討し、モノにまつわる記憶を手がかりとして、ふつうの人びとから見たポスト社会主義の歴史を描き進めた

点にある。

特別研究員奨励費

聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究——現代のイギリスを事例に

代表者 河西瑛里子

目的・内容

本研究の目的は次の2点である。1) ある個人のスピリチュアルな危機からの回復を、聖地という特定の場所に焦点をあて、聖地と癒しの関係を分析する。2) 現代の聖地における新しい癒しのあり方を考察する。この2点を明らかにするため、スピリチュアリティと呼ばれる活動が盛んで、それゆえに現代の聖地として名高いイギリスのグラストンベリーにおいて、聞き取り調査と参与観察を実施する。

調査の中心は1)である。当地を何らかの視点で聖地とみなし、当地に根ざして活動している宗教的グループにかかわりを持ち、人生を変えてしまうようなスピリチュアルな危機を経験した人を対象とする。具体的には、危機のきっかけ、生じた身体と精神の症状、出会った実践とそれによる生き方の変化を、聞き取り調査と定期的な集まりにおける参与観察により明らかにする。その際、かかわっているグループとの関係、他のメンバーや町の住人との関係、グラストンベリーという土地との関係に注目し、当地に対する聖地としてのまなざし、癒しと関連している当地の要素を比較検討する。2)については、1)で得られた知見をより一般化して、聖地における癒しについて総合的に明らかにしていく。

活動報告

本年度は2011年度までの現地調査の成果と図書館等での先行研究の整理をもとに、研究成果を発表した。

1) 研究会などでの発表

6月に「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」研究会（京都大学人文科学研究所）で口頭発表をおこなった。フェミニズムとネオペイガニズム（ヨーロッパに土着の宗教とされる信仰の復興運動）が融合したような女神運動に携わる人々を取り上げて、彼らが、現代社会に特有の離婚や死別といった理由で失った親しい人と人との関係を女神運動の仲間たちに求めつつも、欧米近代の特徴とされる個人主義志向から互いの関係性が深まりすぎること避けている姿を示した。

2) 論文などの執筆

スピリチュアリティに関心があり、癒しを求めてグラストンベリーにやってくる人々を迎え入れた地元民が、新しい住人をどのように受け入れたのかを明らかにした論文、「オルタナティブと対峙する地元民——イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめくって」を『宗教と社会』に発表した。本論分は、先行研究では報告が少ない現代の聖地に暮らすホスト社会の人々が、自らの利害関係や関心に合わせて、新しい住人を多様な形で受け入れていく様子を取り上げており、本研究で研究対象とした人々を鏡像として映し出したといえる。

また、2012年に刊行された『世界宗教百科典』ではネオペイガニズムの項を、『聖地巡礼ツーリズム』では「グラストンベリー」の項を執筆した。さらに、スピリチュアルな体験と癒しについて、人間関係の濃密さと希薄さのバランスに注目した博士論文を提出した。

以上の調査や研究によって、新しい形での宗教現象とされるスピリチュアリティのもつ癒しの1つの側面を、聖地や人間関係という視点から明らかにすることができた。

特別研究員奨励費

東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族考古学的研究

代表者 東村純子

目的・内容

本研究では、東アジアの古代社会において各種の織物がどのような技術生産体系のもとでつくられたのか（紡織技術の形態と織物生産体系の相関）、誰がどのような意識をもってつくったのか、あるいはつくらせたのか（織物の製作者と使用者の行為主体性）、その歴史的脈絡について民族考古学を基軸とする研究手法により明らかにし、東アジアの古代国家形成史のなかに位置づけることを目的とする。

調査対象は、中国新石器時代から唐代併行期（韓国では初期鉄器～統一新羅時代、日本では弥生～奈良時代）の考古資料と、中国、台湾、朝鮮半島、日本（一部、東南アジアを含む）民族資料とする。

研究内容は1) 東アジアにおける出土紡織具の型式学的研究、2) 民族考古学からみた布文化システムのモデル構築、3) 古代の紡織と女性労働に関する史的考察、の大きく3つで構成される。1)と2)は民族誌データとの比較から考古資料を解釈する民族考古学、3)は性差の視点から人間の行動を解釈するジェンダー考古学の手法により紡織活

動の具体相を明らかにしようとするものである。東アジア地域の紡織にかかわる考古資料・民族資料に即し、製作者と使用者の双方向から検討を加え、クラフト・スペシャリゼーションや織物の規格化、価値の創出と変容を明らかにする。

活動報告

東アジアの古代社会における織物文化の特質を明らかにするため、以下の通り、研究を実施した。

1) 出土紡織具の調査

国内では新出資料を中心とする弥生時代～古代の紡織具を調査し、中国・韓国の出土紡織具について文献調査を行った。昨年度より継続してきた紡織具の分析に基づき、東アジアにおける輪状系・直状系製織技術の出現と広がりについて、国立伽耶文化財研究所・国立金海博物館の『나무, 사람 그리고 문화』等で報告した。

2) 出土織物の調査

弥生時代から飛鳥時代までの平織の麻織物片、絹織物片についてマイクروسコープを用いた観察を行った。麻と絹織物の織り組織の特徴を整理するとともに、麻の繊維を撚りつなぎ、紡錘で撚りをかける製糸法についてアジア周辺諸国の民族・民俗例と比較検討した。その成果の一部は、2012年6月の国際学会“Society for East Asian Archaeology”や、奈良文化財研究所の『保存科学研究集会2012』で口頭発表を行った。

3) 紡織にかかわる民族資料の調査

台湾原住民族、及びベトナム少数民族の腰機による機織技術、織物と衣装製作について現地調査を行った。腰機による機織りの身体技術を記録し、考古資料の分析・解釈のための基礎資料として整理した。また、腰機を用いる伝統的な手法と高機などを駆使する手法の相違、製織技術と衣装製作との関連についてそれぞれの社会的背景を踏まえ考察を進めた。

以上の調査を通して、地理的・歴史的に広い視野から東アジアの織物文化の研究を発展させていくための見通しを得ることができた。

特別研究員奨励費

民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築

代表者 梶丸 岳

目的・内容

本研究の目的は、ラオスと日本の歌掛けの民族誌記述を行い、それと先行研究のさらなる分析を合わせて、歌掛けの一般的特質を明らかにすることである。

ラオスでは、フアパン県で歌われているカップ・サムヌアの記述を行う。ここでの目標はこれまでまったく記録のない歌掛けの、現代における基本的状況を明らかにすることである。歌掛けの映像による記録、それに基づく歌詞や旋律の具体的記述と分析から、カップ・サムヌアのコミュニケーションとしての特徴を明らかにしていく。その上で、伝統文化の保存、そしてその現代性について考察を進める。

一方、日本の歌掛けでは、秋田県の金澤八幡宮伝統掛唄の記述を行う。歌詞そのものを記録することはもちろん、掛唄を映像で記録して具体的な相互行為の分析を行い、掛唄を取り巻く社会的状況とのかかわりを含めて総合的に記述していく。特に掛唄の学習過程や次世代育成の様子、歌い手同士の関係について重点的に調査し、掛唄の民族誌的記述を行う。

歌掛けの一般的特質の解明は、これらの研究および、これまで行ってきた中国貴州省における歌掛け「山歌」の研究を合わせ、一般歌掛け論を構築することを目的とする。これまでの成果を踏まえ、歌掛けの言語的特徴、相互行為のあり方を既存の理論と接合させ、コミュニケーション、そして社会的意味についての理論を確立する。

活動報告

本研究の目的は、ラオスのサムヌアで歌われている歌掛け「カップ・サムヌア」と、日本の秋田県で歌われている歌掛け「掛唄」の民族誌記述を行い、先行研究のさらなる分析を合わせて、歌掛けの一般的特質を明らかにすることである。本研究の意義はこれまで注目されてこなかった歌掛けについて、言語人類学的方法論に基づいて個別の事例を包括的に記述し、それらを総合することでその特徴を明らかにし、さらにその文化的価値を明らかにして人間のコミュニケーションや文化の可能性と豊かさの一端を新たに示すことにある。本年度はこれまでに得た資料を元に掛唄の社会的状況やその歌い方についての基本的な分析を行い、掛唄の言語人類学的記述を進めた。また、ラオスにのべ7か月滞在して正式な調査許可を得るための手続きを進めるとともに、ラオス国立大学にてラオス語の研修を受けた。2012年12月に調査に必要な手続きをすべて完了して一時帰国後、2013年1月末から2か月間ラオスのサムヌアに滞在し、カップ・サムヌアをビデオに収録するとともにいくつか掛け合いの書き起こしも行った。さらにこの歌掛けと歌い手たちをめぐる社会的環境に関する現地調査を進めた。さらにこれまで行ってきた中国貴

州省の歌掛け「山歌」についての民族誌を最終的にまとめ上げ、3月末に上梓した。またこれと掛唄の調査結果を比較対照することで、歌掛けの一般的特質の解明を進めた。以上によって、本年度は本研究目的を達成するために前年度からさらに一步具体的事例の蓄積と分析を推し進めたといえる。次年度は以上の成果を踏まえ、ラオスにおけるさらなる現地調査と資料の分析を中心に研究を推進し目的達成を目指す予定である。

特別研究員奨励費

互助実践の外延的拡大とその位相——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究

代表者 森 一代

目的・内容

本研究は、日本の山間地域における住民の互助実践を比較することで、将来的に村落の衰退が危惧されるラオスに、高度成長期以降の日本の経験がいかに関与させるかを、実証的に提示することである。そのためには、

- 1) ラオスの互助実践がどのような問題を抱えているのか
- 2) 日本における1970年代以降の互助実践がどのような問題を抱え、それをいかに乗り越えて来たか（若しくは乗り越えられなかったか）
- 3) 前項から明らかになった日本の経験をいかにラオスの事例に補完させることができるか

以上の3点を明らかにする必要がある。これらを具体的な「問い」として設定し、日本の中山間地域（奈良県吉野郡十津川村神納川地区）とラオス北西部（ラオス国ボーケオ県トンブン郡、バクター郡）における文献およびフィールド調査をもとに実証する。

活動報告

本研究は、ラオスと限界集落化の危機に直面する日本の中山間地域の住民の互助体系について、考察し、互助の適用が可能であるかを検討するものである。

2012年度は、前年度から継続して、紀伊半島豪雨災害からの復興を目指して活動しているボランティアグループや個人ボランティアに聞き取り調査をおこなった。とくに、復興ツリーの設置を目指して募金活動をしているグループと、災害や復興の情報をインターネットを通じて提供している個人ボランティアの活動に着目し、詳細な活動内容を収集した。災害から1年半を経てボランティアとしての立ち位置を、これからどのように展開させればいいのか、さまざまな可能性を検討しつつ、現活動を維持していることが明らかになった。

また、2013年1月から2月まで、ラオス国ボーケオ県バクター郡のカム族の調査村に滞在し、参与観察を通じて相互扶助の実態について調査した。具体的には、破傷風に感染した患者家族がどのように治療費用を捻出し看病にあたっているのかについて、親族や地元住民からインタビューをおこなった。その結果、昨年は見受けられなかったバンコクやチェンライへの労働移動による送金が、貴重な送金源になっていることが分かった。首都ビエンチャンへの出稼ぎはなだらかな減少傾向にあり、まずはチェンライで経験を積んだうえで、より高い賃金が期待されるバンコクへ親類や友人のつてを辿って移動しているということが明らかになった。

受託研究

「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」

委 託 者：日本学術振興会（研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）

共同研究代表者：園田直子

実施期間：2012年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は、過去18年間、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国々の中のうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教

育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4か国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場（「展示される」側）から主体的立場（「展示する」側）へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

実施状況

初年度の2012年度は、日本とモンゴルにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を実施した。具体的には、モンゴルのカラコルムとウランバートルにて、共同研究会とセミナーからなるミュージアム会議（ミュージアム・クリルタイ）を開催した。

ミュージアム・クリルタイでは、日本とモンゴル両国の博物館学・博物館の専門家や教育研究者が研究成果や実践事例を発表し討論することで、従来の〈日本＝研修実施側〉、〈モンゴル＝研修を受ける側〉という図式を超えた、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。さらには、モンゴル国内の博物館学・博物館の専門家や教育研究者が集まったことで、モンゴル国内における博物館ネットワーク強化に貢献することができた。

成果

ミュージアム・クリルタイには、日本とモンゴルの研究者だけでなく、タイとミャンマーのコーディネーターが参加し討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤をつくる第一歩がふみだせた。

ミュージアム・クリルタイの最終日は、モンゴル全国の博物館や、大学の関連部局の若手人材を対象とし、被災した博物館・文化遺産の復興支援をテーマとした公開セミナー「災害と文化遺産——東日本大震災の事例から」を開催した。災害が博物館や文化遺産にもたらす影響、文化遺産の復興支援の意義が、本事業に関連する研究者間のみならず、次世代の研究者にも広く普及・共有され、モンゴルにおいて博物館や文化遺産の災害に備える契機となった。

ミュージアム・クリルタイが契機となり、日本とモンゴル間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。今後、モンゴルで、博物館・博物館学に係わる研究を進めるとともに、若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。なお、モンゴル側コーディネーターのIchinkhorloo Lkhagvasuren氏は、2013年度JSPS外国人招聘研究者としての採用が決定し、8月より、日本側拠点機関である国立民族学博物館の外来研究員となる。モンゴルとの共同研究が、より密接に遂行できる環境が整った。

タイ、モンゴル、ミャンマーは、それぞれ博物館・博物館学がおかれている文化的・社会的背景が異なる。モンゴルでの経験をふまえつつ、それぞれの国の状況を鑑みながら、2013年度はミャンマー、2014年度はタイで共同研究会・セミナーを企画、開催する。最終的には、アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が主軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらくことを課題としている。本事業が終了した後は、それぞれの国において自立的かつ持続的な博物館活動ならびに人材育成が構築されるよう、共同研究会・セミナーを通じて基盤形成に貢献する。

委託者：日本学術振興会（アジア・アフリカ学術基盤形成事業）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2010年4月1日～2013年3月31日

目的と概要

ユネスコによる世界遺産の制度化により、アフリカ諸国の文化遺産に関する関心は著しく高まっている。しかしながら、世界遺産に登録されている総件数890（2007年現在）に対し、サハラ砂漠以南のアフリカ諸国の登録件数79、うち文化遺産42と、その数はきわめてかぎられている。その理由は、ひとつには、アフリカ諸国の考古学調査が進んでいないために、文化遺産の価値が十分に認識されていないことである。それに加えて、アフリカの多くの国では、文化財の保護や社会的活用のための制度設計ができていないという課題もある。

本学術基盤形成事業においては、西アフリカ・マリ共和国の文化省文化財保護局およびバマコ大学と協力しながら、1)文化財の発掘・調査に当たる人材の育成と、2)文化財の保護および社会的活用に関する人材を育成する。マリのように深い歴史がありながら、研究資金の制約がある国家においては、この2つの領域は同一人物が兼任していることが多く、この両面における啓発は大きな意義がある。さらに、3)文化財の保護とその社会的活用のために

地域社会とどのように協力するかのノウハウを概念化し、博物館などでの展示・公開の作業を通じて、文化財のもつ価値を地域住民と国民に対して公にしていく作業を実施することで、文化財の公共的活用という研究課題に応えていく。また、4) 本研究期間中に、わが国の若手研究者を現地で開催させるなどして、彼らの育成にも尽力する。

実施状況

本年度は、11月にマリから拠点機関の研究者2名を招聘し、今後の研究協力体制について協議し、2つの機関のあいだで研究協力協定を締結する予定であった。しかし、文面についてマリ政府の承認が得られなかったために、今後研究協力の具体的内容について詰めていくこととした。

その後、1月に竹沢がマリに行き、研究協力協定を提携する予定であったが、マリ側の政情不安により日本国政府の渡航禁止措置が出され、渡航できなかった。今後、機会を見て、研究協力協定書に調印する予定である。

成果

マリからの研究者を招聘した際に、わが国で研究会を実施し、本研究の成果を伝えた。わが国ではアフリカ考古学は未開発の分野であるが、若手研究者を中心に10名近くの参加があり、わが国におけるアフリカ考古学の普及と発展に寄与することができた。

1月から2月にかけて、本事業の日本側コーディネーターである竹沢がマリに行き、現地の研究拠点の研究者と共に考古学発掘を行う予定であった。しかし、マリにおける政情不安のために、日本政府から渡航禁止措置が出され、渡航できなかったために、本年度はこの面での成果はない。

その一方で、アメリカ合衆国のイエール大学出版会より、これまでの共同研究の成果についての出版依頼が出ているため、マリ側研究者とメール等で情報を交換し、出版に向けた話し合いと執筆を行っている。

3月には、これまでの共同研究の成果を日本のアフリカ研究者に公開するために、研究会を開催した。

マリにおける博物館展示の改善を通じて、マリ社会に研究成果を還元する予定であったが、マリにおける政情不安のために実現できなかった。

3年間の受託研究の期間中に、日本とマリの間での学術発展および文化交流のために貢献する予定であったが、マリにおける政情不安のために、その実現が中途までで終わったことは残念である。

一方、共同研究の成果については、欧米における主要な学術研究誌に発表しており、それが評価されて、アメリカ合衆国のイエール大学出版会より学術書の出版依頼が届いている。今後はこの本の執筆を通じて、本研究の成果を世界中に伝えていく予定である。

本研究交流事業により発表された論文は、2012年度論文総数1本、相手国参加研究者との共著1本である。

現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成

委託者：日本学術振興会（頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム）

担当教員：三尾 稔

研究期間：2010年10月15日～2013年3月31日

目的と概要

1) 現代南アジア研究の多元的なグローバル化のために

現在、インド・南アジアは、広域アジアおよび欧米との人・資本・モノの活発な移動・交流によって緊密なグローバル化を伴う経済成長を遂げている。それは、ネオリベラリズムに巻き込まれるという受身の過程ではなく、むしろインド・南アジアが地域独自の強みを生かして、グローバル化の動き自体を多元化していく過程である。本事業では、グローバル化するインド・南アジア地域の発展経路を長期的・総合的に解明し、現代世界における比較と連鎖のなかにおける地域の再編過程を明らかにする。この課題に取り組むために、若手研究者派遣と国際共同研究を核として、日・印・英の研究協力ネットワークを形成する。非西洋世界で独自の近代化を遂げた日本が、国際的な現代インド・南アジア研究ネットワークのハブとなることは、知の多元的なグローバル化を推進するうえで有効であろう。

2) 「現代インド地域研究」拠点を基盤とした国際共同研究と若手研究者派遣

全国6拠点からなる「現代インド地域研究」は、国内の現代インド・南アジア研究のネットワーク型拠点形成を推進するために2010年度より発足した。この現代インド地域研究組織を基盤として、将来の日本において現代インド・南アジア研究を担う若手研究者を海外派遣し、国際共同研究を行う。日本における現代南アジア研究は、個々の研究者をみれば国際的に高い水準にあり、個人レベルの国際的な学術交流も進んでいるものの、組織的なかたちでの国際的共同研究や若手の頭脳循環が十分に行われているとはいえない。現代インド地域研究組織の発足により国内の研究者や研究機関による連携の基盤は整った。本事業を通じて、個人や個々の機関が築いてきた海外研究者・機関との協力関係を、日本における現代南アジア研究者の共有の資源として利用できる組織体制を

作り上げ、国内における連携と日・印・英の国際ネットワーク形成とを、相乗効果をもたせて組織的に展開する。これによって日本の現代南アジア研究の国際的な位置づけを高め、国際的な研究連携を飛躍的に進展させる。

3) 日・印・英の三角交流による研究ネットワーク構築

日本では国立民族学博物館を代表機関とし、京都大学・東京大学・東京外国語大学・広島大学・龍谷大学が協力機関となる。これらの研究機関や大学におかれた6拠点は現代インド地域研究組織を構成する機関であり、それぞれの担当研究者は拠点代表（拠点長・センター長など）でもある。相手側となる海外研究機関は、インドにおいてはデリー大学および国立インド統計研究所であり、イギリスではロンドン大学およびエジンバラ大学である。日本の6つの研究機関、インドの2機関、イギリスの2機関の緊密な国際的なネットワークを形成することにより、現在、世界的にはインドとイギリスが中心となっている現代南アジア研究に、日本が研究ハブの1つとして参加していくことが可能になるだろう。それは現代南アジア研究に、当事者と旧宗主国とは異なる第3の視点をとりいれて研究を多元化し、知のグローバル化を進展することにつながる。

同一の若手研究者をインドおよびイギリスに派遣することによって、両方の研究状況や研究者を知悉した研究者を育てていく。また日本から研究者を派遣して行う国際ワークショップをインドとイギリスで開催することを通じ、共同研究参加者による三角交流を進展する。その場合、若手研究者には相手側機関との学术交流に基づき、国際ワークショップの企画運営に積極的に携わせる。3年目にはイギリスでしめくくりの国際シンポジウムを開催し、その成果をインドとイギリスで共同英文出版することを目指す。

4) 日本における現代南アジア研究の国際戦略

世界の南アジア地域研究においては、地域当事国であるインドと旧宗主国であるイギリスがこれまで中心的な位置を占めてきた。その研究においては「近代西洋と伝統インド」の対比を前提として南アジアを理解しようとするポストコロニアル的な枠組みが支配的であった。しかしインドがグローバル化する世界とのつながりにおいて経済成長を遂げ、国際政治においても影響力を強めている現在、むしろインドを多元的な世界を構成する地域のひとつと捉えて、その発展経路を把握し、地球規模の視野からインドあるいは南アジアと世界のつながりを理解する必要が生まれている。換言すれば「ポストコロニアル・インドからグローバル・インドへ」と、視座を転換する必要がある。この視座の転換において、西洋とは異なる独自の近代を發展させ、学術的には「東アジア型發展モデル」を提起してきた日本は、世界諸地域の多元的なグローバル化が進みつつある現状を理解するうえで重要な貢献をなしうる立場にあると言えよう。グローバル・インドの發展経路を地球の視野の比較と連鎖のなかで理解するための新たな地域研究の展開にあたって、日本がインドおよびイギリスと研究ネットワークを構築する意義は極めて大きい。

実施状況および成果

一昨年度から派遣を開始した若手研究者2名は、今年度も引き続き派遣を継続した（一昨年度からの派遣継続者3名のうち1名は派遣開始時には想定できないほどに本務校における職務が繁忙化したため期間通算での派遣日数が10か月に満たないため、研究支援補助者としての派遣に切り替えた）。この2名は、本事業が掲げる3つの国際共同研究課題のうち、2)「多様性のネットワーク：成長の社会文化的基盤」に密接に関連する研究テーマでの研究を推進し、順調に調査研究を進め、日本語および英語で研究成果を公開した。

一方、昨年度から派遣を継続している2名は、1)「民主化とガバナンス：成長の政治行政的基盤」に密接に関連する調査・研究を行って、海外の学会や研究会での発表や意見交換、あるいは単著の公刊など積極的に研究成果を発信している。

また、研究課題1)と2)は、相互に連携して海外での国際研究集会を2回開催して、これまでの研究成果を総合して公開し、これらのテーマに関する国際的な研究の推進に貢献した。まず、エジンバラ大学に継続派遣してきた、課題1)の研究者1名と課題2)の研究者1名が、エジンバラ大学南アジア研究センターの研究者の助言を受けつつ国際研究ワークショップを企画し、2012年10月17日にエジンバラ大学において“Social Movements and the Subaltern in Postcolonial South Asia”と題するワークショップを開催した。このワークショップでは、インド国内における多様な社会的ネットワークがいかに社会運動として結実しインドのガバナンスに影響を与えているのかを具体的な事例に基づいて検討することが主たるテーマとなった。ワークショップでは、上記2名の若手研究者が発表を行ったほか、エジンバラ大学をはじめイギリスの研究機関から4名の研究者が発表を行った。また、主担当研究者である三尾、担当研究者田辺明生（京都大学）、下記研究課題3)によって派遣中の若手研究者も参加し、ワークショップでの発表された研究を踏まえ、イギリスの研究者とインド型發展経路の特徴やその可能性と限界について討論を行った。ワークショップには30名の参加があり、密度の濃い討論が行われた。この成果は、エジンバラ大学南アジア研究センターの協力により、同センターがウェブ出版している研究雑誌“The South Asianist”として公開された。

このワークショップの準備と平行しつつ、より総合的な観点からの国際シンポジウムの開催準備を進め、2012年

12月21日、22日の2日間インド・ナガランド州コヒマ市において“Looking Beyond the State: The Changing Forms of Inclusion and Exclusion in India”と題する国際シンポジウムを開催した。シンポジウムの企画は、主担当研究者である三尾とインドの相手側研究機関の1つであるデリー大学のDasgupta教授が主導した。また企画構想段階で、担当研究者5名とも主としてメールによる意見交換を行った。さらに課題1)および2)の派遣若手研究者がプログラム作成、発表論文の取りまとめ等の準備作業に携わった。シンポジウムの主たる狙いは、グローバル化が進展する中で特にこれまでインド社会の周辺に抑圧されてきた社会層がどのような形で国内外に多様なネットワークを形成し、新しい政治・経済・社会的現実に対応しているのか、またそれがインドの政治や経済にどのようなインパクトを持つのかを事例に基づいて考察することにあった。日本側からは、課題1)と2)の若手派遣研究者全て(研究支援補助者1名を含む)が参加し、3名が研究発表を行った他、コメンテーターや司会者として役割を果たした。また主担当研究者三尾、担当研究者の栗屋利江(東京外国語大学)と田辺も参加し、コメンテーターや発表者となり、インドの政治・社会変容やインド型の発展経路モデルについての討論を行った。インドやイギリスからも12名の研究者が研究発表を行った(うち2名はイギリスの研究相手機関であるエジンバラ大学からの参加)他、2日間でのべ120名余りが出席して熱のこもった議論が行われた。

ナガランド州は、インドの辺境地帯にあり、長く分離独立運動が行われてきた経緯があることから国際シンポジウムが行われることが稀な地域であった。この国際シンポジウムは人文・社会科学分野ではこの地域初の企画となった。この地で、日・印・英3か国の研究者を集めて国際シンポジウムを開催できたことは、それ自体が大きな成果であり、日本の南アジア研究のプレゼンスをインドに示す上で意義深いものとなった。事実、このシンポジウムは現地の英字新聞3紙で速報されている。この研究の成果は、本プロジェクトと密接な連携関係にある人間文化研究機構「現代インド地域研究」プロジェクトから順次刊行が計画されている英文叢書の1巻として出版する計画である。

本年度は、これに加えて新たに1名の研究者をインド、ついでイギリスに派遣した。この研究者は3)「持続的発展：成長の環境・経済的基盤」に関連する研究課題を追求したほか、エジンバラで開催された国際ワークショップにも出席し経済学の観点から討論に参加した。

また主担当研究者の三尾は、インド(デリー大学、ナガランド州コヒマ市)とイギリス(エジンバラ大学)に赴き、派遣研究者の研究活動状況を把握するとともに、上記の2つの国際研究集会の企画と実施にあたった。

一方、担当研究者の水島 司(東京大学)は本事業予算を活用して、本事業が掲げる3つの国際共同研究課題のうち3)「持続的発展：成長の環境・経済的基盤」に関連した経済統計関連資料の取得とデータベース化作業を継続した。この成果は上記「現代インド地域研究」プロジェクトでの成果公開の中で統合的に公開される予定である。

本事業の研究活動内容を内外の研究者コミュニティに広報することを目的とした、日本語版と英語版双方のニュースレターの刊行は、研究者の派遣やシンポジウムの開催を優先させたため今年度も見送らざるを得なかったが、本プロジェクトでの連携によって協力関係が深まったエジンバラ大学南アジア研究センターのウェブ・ジャーナルをほぼ1号分使って研究成果の公開にあてており、プロジェクトからの情報発信は十分に出来ていると判断される。

動物生態資源のセミドメスティケーション化の開発

委託者：京都大学東南アジア研究所(環境研究総合推進費)

担当教員：池谷和信

研究期間：2011年4月1日～2012年3月9日

目的と概要

本研究では、動物生態資源のなかでペッカーリーを中心とした中型の哺乳類に注目することで、商業狩猟がアマゾンの現場で具体的にどのように行われて、獲得された毛皮や肉はどのように利用されているのか、その実際を生態人類学の視点から明らかにすることを目的とする。同時に、これらの狩猟活動がアマゾンの動物資源を維持するために持続的な資源利用であるのか否か、およびペッカーリーを中心とした野生動物資源のセミドメスティケーション化は果たして可能であるのか否かについて考察する。

筆者は、本プロジェクトにおいて、アマゾン農民の経済活動のなかで動物資源利用に注目してきた。これまでペルーのロレット州に暮らす先住民・マイフーナ・インディアンを村を対象にして、ペッカーリー猟の実際とそこから得られた肉や毛皮の流通を把握してきた(Ikeya 2012)。その一方で、ウカヤリ州プカルパの町での皮商人の実態を報告した(Ikeya 2011)。これらの結果、ペルーアマゾンでは毎年13万頭以上の野生ペッカーリーが捕獲され皮が商品として流通していることが明らかになった。しかし、これらの活動が持続可能な生産・流通であるのか否かは明らかにされていない。本研究は、ペルーのロレット州の州都イクトスとその周辺域を主な対象にして、ペルーアマゾンにおけるペッカーリーの皮商人の活動実践とその流通について把握することをとおして、アマゾンの自然資源に対する

持続的利用モデルを構築することを目的とする。

実施状況

筆者は、2012年8～9月にかけて約3週間にわたり現地調査を行った。主な内容は、1)市内の皮商人の全体の状況を把握すること、2)そのなかから1件を選定してより詳細に皮の売買が行われている港や店での直接観察すること、3)皮商人の年次変化を把握するために市内の役所での統計資料の収集を行った。なお、皮には、1枚当たり4.91円の税金が支払われていた。取引制限枚数・クォーターは、毎年、中央政府によって決められた枚数である。

成果

これまでに数量的な把握が困難であった狩猟研究に関して、仲買人からの資料を中心に収集することでかなりの程度、数値による資料を提示できた。

本研究成果であるアマゾン・動物資源利用（狩猟）モデルは、アフリカやアジアにおいては動物保護のために狩猟禁止や自給用狩猟に限定されることが強い状況下において、熱帯における新たな動物・人関係を構築することができるものである。

研究成果の発表状況は以下のとおりである。

・誌上发表

- 1) 池谷和信 (2012) 「野生でもない家畜でもないアマゾンの動物との関係性——熱帯の生き物文化に学ぶ」『生き物文化誌学会ニュースレター』28、29合併号: 11-13。
- 2) Ikeya K. (2013) Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The Proceedings of the International Workshop on "Incentive of Local community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* pp.59-67.

・口頭発表

- 1) 池谷和信 (2012) 「ペルーアマゾンにおけるベッカリー猟について」第22回日本熱帯生態学会、横浜国立大学
- 2) 池谷和信 (2012) 「アマゾンの動物と人——肉、皮、ペット」第48回生き物文化誌学会、山形県鶴岡市
- 3) 池谷和信 (2012) 「アマゾンの生き物文化と現代社会——世界的に希少なアマゾン資料を保持する鶴岡からの発信」出羽庄内国際村・アマゾン民族館
- 4) Ikeya K. (2013) Peccary Hide Traders and Peruvian Amazon Distribution. *The International Workshop on "Incentive of Local Community for REDD and Semi-domestication of Non-timber Forest Products"* (Global Environment Research Fund: E-1002, Ministry of Environment, Japan)
- 5) 池谷和信 (2013) 「世界の多様な自然と環境——熱帯雨林と人」大阪府高齢者大学校

被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築

委託者：三井物産（三井物産株式会社環境基金）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2011年6月1日～2014年9月30日

目的と概要

- 1) 岩手県大槌町、山田町、宮古市などで、被災者の被災後の行動と、かれらが形成した組織のあり方に重点をおいて映像記録と録音記録を作成する。
- 2) 先におこなった映像と録音を文字化し、社会モデルの構築のための材料とする。
- 3) 映像化および録音された資料の文字化を継続し、その分析をおこなう。
- 4) 海外の博物館や研究所と、将来の展示やシンポジウムの実施に向けて協議を始める。

実施状況

- 1) 岩手県大槌町、釜石市、山田町で、被災者が形成した団体の地域復興に向けた取り組みを記録した。
- 2) 2011年の6～12月に実施した映像記録の文字化を完成させ、それに基づく社会モデルの構築作業を開始した。
- 3) 岩手県下の市町村のまちづくりに協力するために「岩手まちづくりネットワーク」を立ち上げた。
- 4) (新たに加わった項目) そこでの発表を元に論文「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——岩手県大槌町の避難所に見る地域原理」を執筆し『国立民族学博物館研究報告』に受理された。
- 5) 被災後の人びとの行動のビデオ記録を文字化し、それをもとに被災者の行動をパターン化した。
- 6) その成果を研究会等で発表して検討した。
- 7) (新しく加えた事項) 展示に向けて、海外の博物館と協議を進めたほか、国際シンポジウムを開催した。
- 8) (新しく加えた事項) 望まれる共同体と社会をモデル化し、それを基に著書を発表した。

成果

研究成果に基づいて、以下の論文を発表し、2つの学会で口頭発表をおこなった。

- 1) 竹沢尚一郎 「被災後を生きる」『月刊みんぱく』36(4): 22-23。
- 2) 竹沢尚一郎 「東日本大震災と人類学——人類学は被災地に対してなにができるのか」(日本文化人類学会第46回学術大会、2012年6月23日)。
- 3) 竹沢尚一郎 「東日本大震災後の語り」(日本宗教学会第71回学術大会、2012年9月8日)。
- 4) 竹沢尚一郎 「津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——岩手県大槌町の避難所に見る地域原理」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 127-197。
- 5) 竹沢尚一郎 『被災後を生きる』(中央公論新社、2013年1月刊)を出版した。
- 6) 海外での展示に向けて、2013年3月24日に国際シンポジウムを実施した。
- 7) 日本文化人類学会(2012年6月23日)、日本宗教学会(2012年9月9日)で研究発表をおこなった。

民間などの研究助成金による研究活動**・寄附金**

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」運営助成金 ————— 住友商事株式会社
 順益台湾原住民博物館研究賛助金 ————— 順益台湾原住民博物館
 吉田ゆか子機関研究員研究助成金 ————— 三島海雲記念財団

間接経費による研究環境整備事業**研究活動の推進に係る経費(シンポジウムや講演会の組織化及び支援)**

申請者：岸上伸啓

使用目的等：

研究戦略センターは、機関研究員(1名)を2012年5月1日より2013年3月31日まで雇用し、科学研究費に基づく研究プロジェクトの成果を研究者コミュニティおよび社会一般に還元するためのシンポジウムや講演会の組織化および支援を行った。さらに、研究開発に関する調査分析、外部資金の獲得支援、研究開発プロジェクトのマネジメント、民博の研究広報の支援などを行った。これにより、民博における科学研究費プロジェクトの成果を、本館がイニシアティブをとる形で研究者コミュニティおよび社会一般に還元する上で多大の成果をあげた。また、新たな研究の立案を検討することによって、民博の共同利用性を高めた。

研究成果展開事業に係る経費(資料整理とデータベースの作成)

申請者：菊澤律子

使用目的等：

ベルゲン大学で開発された言語の歴史(比較)統語論的研究のためのデータベースの高度化のため、既存のオーストロネシア諸語に関するデータの再処理(データ使用の目的にあわせた再分析のための整理および下処理)および入力を行った。歴史(比較)統語論の研究は新しい分野であり、研究方法自体がまだ確立していない。そのなかで、ベルゲン大学が開発したデータベースを、当初の目的であるインドヨーロッパ諸族だけでなく、他の語族に生かすための高度化を行うことは、大きな意義をもつ。本事業を行うことにより、このデータベースの高度化事業のために具体的に必要な研究内容を明らかにすることができ、その成果をもって、ベルゲン大学との共同研究に結びつけることができた。

研究広報事業に係る経費(モンゴルにおける寺院と農耕に関するオーラル・ヒストリーの国際発信)

申請者：小長谷有紀

使用目的等：

モンゴルの社会主義的近代化に関して、すでにSER41(日本語)、42(モンゴル語)、71(日本語)、72(モンゴル語)が出ており、その英訳本がSER96として出ている。これらのシリーズの一環として日本語とモンゴル語をあわせて、解題論文を付して出版するための準備をおこなった。出版公開により、カラコラムないしハラホリン地域の位置づけが明確になり、遊牧世界における中心地の役割が明確になる。新しい着眼点をもった口述史の貴重な資料として国際発信することができる。

研究広報事業に係る経費（研究成果出版のための翻訳作業）

申請者：關 雄二

使用目的等：

一昨年に終了したペルーの遺跡に関わる地質学的調査の成果をスペイン語で4出版するための翻訳をおこなった。ペルー考古学において理化学的調査はほとんど行われておらず、文明形成過程を多角的視点から捉えることが可能となり、国際学界に対して大きな貢献となった。

研究活動の推進に係る経費（動植物標本資料室の管理・運営の補助）

申請者：MATTHEWS, Peter J.

使用目的等：

2012年度、動植物標本資料室は、本館の教員、および学術振興会外国人招聘研究者等により大いに活用された。この動植物標本資料室の整理・運営の補助業務により、多種多様な研究の技術的な側面に対応し、今後においても室の管理・運営に大いに役立って行くものと考えている。

研究活動の推進に係る経費（資料作成）

申請者：飯田 卓

使用目的等：

マダガスカルの木製生活財に関わって科研費補助金で作成したデータベース資料の高度化をはかり、2013年3月から開催した特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」観覧者に提供できるよう整理し、調査した3世帯すべてが所有する生活財（家財）が一覧できるデータベースとして公開した。（データベース項目は、①パノラマムービー写真に写っているものから選ぶ、②用途などに応じて分類されたリストから選ぶ、という2つの方法から検索できる。）

研究広報事業に係る経費（国際ワークショップへの参加）

申請者：三尾 稔

使用目的等：

ハイデルベルグ大学南アジア研究所で2012年11月8日、9日に開催された国際研究ワークショップ“Navaratri in South Asia: Transformation, Innovation and Regional Varieties”に出席し、申請者の研究成果の一部を発表した。発表内容は、科学研究費による研究に基づくものであり、その成果を当該分野に専門的関心を持つ国際的研究者コミュニティに向けて直接公開できた。またハイデルベルグ大学は、「グローバル化状況におけるヨーロッパとアジア」をテーマに学際的な大型プロジェクトを主導している。ワークショップ終了後には、このプロジェクトとの協同のもとで日本で獲得を目指している競争的資金による研究の国際的展開を図るための協議も行うことができた。

研究活動の推進に係る経費（資料整理とデータベースの作成）

申請者：森 明子

使用目的等：

一昨年に終了した科研費による日独の民俗学の展開に関する比較研究で得られた資料を整理し、データ化するとともに、分析の一部を英語論文としてその校閲を行った。研究活動を国際的な議論の場に発信するもので、海外研究者との研究協力、意見交換に大きな効果をあげた。

研究広報事業に係る経費（梅棹忠夫アーカイブズ研究プロジェクト）

申請者：久保正敏

使用目的等：

資料整理と索引情報作成、フィールドノート約8,000（130冊相当）のスキャン・画像電子化、劣化フィールドノート39冊の修復と保存用中性紙保管箱への収納、文明学シンポジウム（1983年第1回～1988年第17回）にて梅棹忠夫が発表した文明学に関する論文を海外研究者に供するための梅棹文明学・英訳出版の準備などを行った。膨大なアーカイブズ資料を整理・分析することにより、資料間の関係を明らかにして、梅棹学の根幹を把握するとともに、日本の民族学研究史の解明につながることを期待できる。2012年度は、前年度に引き続き、劣化の進んだ最も古い時期の資料を中心に電子化を行うとともに、それらの資料の修復と保管を進めた。これによって、原資料を毀損することなく複数の研究者の閲覧に供することが可能となった。今後も、古い資料から順次資料の電子化を進めるとともに、資料相互の関係性を反映した構造化によって研究者による発見を共有する仕組みの構築を目指したい。

研究成果展開事業に係る経費（国際シンポジウムの開催）

申請者：菊澤律子

使用目的等：

共同研究「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」の最終年度にあたり、次年度以降への更なる研究の進展等を図るため、研究会および成果公開の国際シンポジウム「樹について考える」を2013年2月10日に本館第4セミナー室で日英同時通訳により開催した。ろうの研究者への情報保障として、日本語による発表は日本語通訳、英語による発表は要約筆記を提供、また、内外の研究者との今後の議論の発展に結び付けるため、ウェブ配信も行った。

「樹」、すなわち系統樹モデルは、これまで言語の系統関係を示すために広く使われてきたが、近年のフィールドワーク等による広範な言語データにより、単純な樹の図式では表しきれない言語間の相互関係が解明できるようになってきた。また、情報処理技術や統計学の進展を応用した新しいモデルを利用する研究も出てきている。このような状況のなかで、伝統的なモデルがどのような意味を持つのか、その限界をも含めて再認識する必要が生じている。遺伝学、生物学、系統学等、「樹」を利用する他分野の研究者による発表も織り込みながら、「樹」によって何が表現でき、何が表現できないのか、その理論的示唆と、言語の歴史にあてはまる意味について再考する。言語学における系統樹について新しい視点からのアプローチへの可能性へと結びつけることができたと考えている。

研究広報事業に係る経費（みんぱくりポジトリ掲載データの精度アップ）

申請者：韓 敏

使用目的等：

画質の質に影響する不要なノイズ（線・汚れ等）を、e-typist ソフトを使用し、できる限り除去するなどして精度アップを行い、データの再登録を行った。ネットワークを通じた研究成果の公表により、論文・著書引用件数の増加につながる閲覧件数やダウンロード件数が増加した。

研究活動の推進に係る経費（ファイス島出土遺物データのデジタル化と外来遺物の鑑定）

申請者：印東道子

使用目的等：

島嶼間の移動をしめす出土岩石の鉱物鑑定を行った。鑑定を行った4点の資料は、すべて出土したファイス島では入手できない岩石である。鉱物鑑定の結果、そのうち3点は石英脈と泥岩であり、歴史的に交易関係のあるヤップ島産の可能性が高い。また、1点はヤップ島にはほとんどない玄武岩であるため、東方のカロリン諸島か、西南のパラオのものか、さらに手法を変えた分析が必要であることがわかった。

（その他、館の整備、運営などに関するもの4件）

2-3 研究成果の公開**刊行物****●国立民族学博物館研究報告**

37巻1号（2012年11月15日発行）

• 論文

インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状 ————— 上羽陽子
カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴 ————— 鈴木博之

• 研究ノート

梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料 ————— 小長谷有紀

37巻2号（2013年1月15日発行）

• 論文

津波の破壊に対抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性 —— 竹沢尚一郎
空間概念としての客家——「客家の故郷」建設活動をめぐって ————— 河合洋尚

• 研究ノート

ベトナム中部高原山岳少数民族の伝統的集会施設「ニャーロン」の現在

——コントゥム省, ジャライ省の事例から —— 柳沢英輔

37巻3号 (2013年3月1日発行)

• 論文

タイのコミュニティ博物館についての一考察——博物館か, 寺院か? —— 平井京之介

親族システムの理念と実践——マレーシア, オラン・アスリ社会の母系制 —— 信田敏宏

Putting “Tehrangelles” on the Map:

A Consideration of Space and Place for Migrants —— Atsuko Tsubakihara

• 研究ノート

インド音楽の近代化とマスメディア

——ラジオ放送が北インド古典音楽と音楽家の生活世界に与えたインパクト —— 田森雅一

米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて

——祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に —— 岸上伸啓

37巻4号 (2013年3月29日発行)

• 論文

チングス・ハーン崇拜の近代的起源——日本とモンゴルの応答関係から —— 小長谷有紀

• 研究ノート

「ジャスミン革命」の淵源と二つの近代——タミーミー著『ラーシド・ガンヌーシー』再読による

〈イスラームと民主主義〉再考——(Azzam Tamimi, Rachid Ghannouchi: *A Democrat within*

Islamism. Oxford: Oxford University Press. 2001. 268p.) —— 森まり子

• 資料

民族誌資料の制作者名遡及調査——『ホピ製』木彫人形資料を事例として —— 伊藤敦規

● Senri Ethnological Studies

No.80 (2013年1月21日発行)

Nanami Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*.

No.81 (2013年1月31日発行)

Akiko Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social*.

No.82 (2013年3月31日発行)

Hirochika Nakamaki and Mitchell Sedgwick (eds.) *Business and Anthropology: A Focus on Sacred Space*.

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.106 (2012年8月31日発行)

杉本星子編『情報化時代のローカル・コミュニティ——ICTを活用した地域ネットワークの構築』

No.107 (2012年10月31日発行)

Interviews Conducted by Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, Translated by Mary Rossabi, Edited and Introduced by Morris Rossabi, *A Herder, a Trader, and a Lawyer: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders*.

No.108 (2012年12月10日発行)

土方久功著, 須藤健一・清水久夫編『土方久功日記 IV』

No.109 (2013年1月25日発行)

塚田誠之編『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』

No.110 (2013年2月1日発行)

小長谷有紀・S. チョローン共著『モンゴル国営農場資料集』

No.111 (2013年3月27日発行)

小長谷有紀・堀田あゆみ編著『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』

No.112 (2013年3月28日発行)

Yuki Konagaya and Maqsooda S. Sarfi (eds.) *Development Trajectories for Mongolian Women in and after Transition.*

No.113 (2013年3月29日発行)

M.И. Клягина-Кондратьева/С.Чулуун, Т.И.Юсупова (M. E.クリヤーギナ-コンドラティエワ著、S. チョローン・T. I. ユスポワ編) Монголын Бурханы Шашны Соёл: Хэнтий, Хангайн сүм, Хийдийн Судалгаа (モンゴル寺院——ヘンテイ、ハンガイにおける寺院の研究).

●民博通信

No.137 (2012年6月29日発行)

評論・展望 使い捨て文化の裏側から新たな消費文化論へ——アフリカにおける中古・非正規衣料品の流通・消費から 小川さやか

No.138 (2012年9月28日発行)

評論・展望 機関研究のアウトリーチ——みんなくワールドシネマの試み 鈴木 紀

No.139 (2012年12月28日発行)

評論・展望 研究公演『ホピの踊りと音楽』の交渉過程で得られた民族誌的知見 伊藤敦規

No.140 (2013年3月28日発行)

評論・展望 フォーラムとしてのミュージアム、その後 吉田憲司

●研究年報2011 (2012年12月20日発行)

●外部出版

日置弘一郎・中牧弘允編『会社神話の経営人類学』東方出版, 2012

柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』昭和堂, 2012

信田敏宏・小池 誠編『生をつなぐ——親族研究の新たな地平』風響社, 2013

丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの<紛争>——脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂, 2013

●共同研究の成果

日置弘一郎・中牧弘允編『会社神話の経営人類学』東方出版, 2012

* 共同研究「会社神話の経営人類学」(2005~2006年度)

白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院, 2012

* 共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」(2007~2009年度)

小池 誠・信田敏宏編『生をつなぐ家——親族研究の新たな地平』風響社, 2013

* 共同研究「家の人類学——新たなる親族研究に向けて」(2005~2008年度)

Akiko Mori (eds.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies No.81) National Museum of Ethnology, 2013

* 共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」(2006~2009年度)

丹羽典生・石森大知編『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂, 2013

* 共同研究「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」(2009~2012年度)

吉本 忍編著・柳悦州作図『世界の織機と織物』国立民族学博物館, 2013

* 共同研究「手織機と織物の通文化的研究」(2010~2013年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

本館では共同研究の成果等を学術成果として出版し、国内外の研究者に広く配布してきたが、より公開度を高めるために、機関リポジトリを構築することとした。一般公開後3年経過した「みんぱくりポジトリ」は、昨年に引き続き国立情報学研究所(NII)の「最先端学術情報基盤整備(CSI)連携促進委託事業」に、2012年度も採択された。この外部資金と館内の予算措置により、今年度も恒常的な館内刊行物の登録以外に、『研究年報2010』掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。また、懸案となっていた低精度の登録PDFにおいては、PDFの再作成・再登録を実施し、年度内に終了した。さらに、『リポジトリ運用指針』の多言語版は、精査した英語版を元にして、スペイン語・ドイツ語・フランス語・ロシア語について再度翻訳を行うと同時に利便性の向上をはかるためにリポジトリ検索画面のレイアウト変更も行った。

2013年3月末現在のコンテンツ登録件数は3,852件であり、これは日本135機関中46位、世界1,654機関中757位(スペイン高等科学研究所CSIC作成のRANKING WEB of REPOSITORIES)にランキングされた。今年度新たに登録したコンテンツは254件であり、今後も年間約200件のペースで登録可能であると考えている。コンテンツのダウンロード数は、2012年度月平均約25,000ダウンロードであり、昨年度よりも約4,000ダウンロード増加している。

2012年10月には、自然科学研究機構核融合科学研究所主催の「大学共同利用機関におけるリポジトリ」に関する情報交換会」に協力し、イベント運営を全面的にバックアップし本館セミナー室にてシンポジウムを開催した。それにより大学共同利用機関間での有益な情報交換を行うことができた。

学術講演会

●国立民族学博物館公開講演会

「だから人類は地球を歩いた——太平洋へ アメリカへ」

実施日 2012年10月26日

場 所 日経ホール

主 催 国立民族学博物館、日本経済新聞社

参加者 564人

講演1 「海を越えてオセアニアへ」

講 師 印東道子

内 容 我々ホモ・サピエンスは、20万年前にアフリカで誕生して以来、地球のほぼ全域へと拡散した。それ以前の人類が進出しなかった海洋世界へも移動したことは大きな特徴であった。オーストラリアからポリネシアまで、海を舞台に繰り広げられた人類の拡散ドラマについて、最近の研究を交えて紹介し、移動の背景について考えた。

講演2 「最初のアメリカ人の足あと」

講 師 關 雄二

内 容 ユーラシア大陸に拡散した初期人類はやがてアメリカ大陸に渡る。しかし、意外なことにその最初のアメリカ人が、いつ、どのような経路でたどり着いたのかという点について結論は出ておらず、また移住の波が何回あったのかについても定説はない。こうした謎が残る人類の足跡を最近の研究を交えながら概観した。

パネルディスカッション

池谷和信×印東道子×陳 天璽

司 会 平井京之介

内 容 現在、地球上のほとんどの地域に人類が暮らしている。これほど広い範囲に地理的に分布する動物は人類だけである。なぜ人類だけがこれほど広範囲にわたって移動したのであろうか。そして、なぜ人類だけに移動ができたのであろうか。人類にとって、移動はどのような意味を持つのであろうか。このパネルディスカッションでは、これらの問題をもう一度考えてみた。そして、現代の狩猟採集民の移動と、最初の日本人の移動を、比較の対象として取り上げた。

「なんだ日本の文化って?—芸能から MANGA まで」

実施日 2013年3月22日

場 所 毎日新聞社オーバルホール

主 催 国立民族学博物館、毎日新聞社

参加者 315人

講演1 「境界を演じる人びと」

講 師 笹原亮二

内 容 九州南部から奄美群島にかけては沖縄と九州以北双方の民俗文化が接する境界領域とされてきた。同様の傾向は芸能や音楽においても認められるが、その棲み分けは、異国や異文化を意図的に演じる場合もあって相当錯綜している。こうした芸能や音楽の実態を通じ、国や文化の境界について改めて考えてみた。

講演2 「香港人／台湾人になることは日本人になること——戦後のアイデンティティ形成と日本文化の役割」

講 師 王 向華（香港大学グローバル創造的産業プログラム主任）

内 容 近年、漫画や音楽など世界各地における日本のポピュラー文化の流行がマス・メディアで盛んに報じられるようになった。しかし、日本文化の受け入れられ方はそれぞれの国で異なっている。今回の講演では、第二次世界大戦後の香港と台湾のアイデンティティ形成における日本文化の役割を、2つの国の日本文化を受け入れた経済政治的な背景の違いに着目して比較した。

パネルディスカッション

関 一敏（九州大学人間環境学研究院教授）×王 向華×笹原亮二

司 会 小川さやか

内 容 奄美大島で演じられる音楽や芸能と、台湾や香港において絶大な人気を誇る日本のボーイズラブ・ミックやJ-POPアイドル。ひとくちに日本文化といっても、ずいぶんと異なっているようにみえる。パネルディスカッションでは、民俗芸能から MANGA までをつなげて「日本の文化って何だ?」を考えるヒントを一緒に模索した。

2-4 学会開催

学会開催

2012年5月26日～27日 第49回日本アフリカ学会

2012年12月9日 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて——アフリカとオセアニアの事例から考える」

2013年1月8日～9日 国際研究フォーラム『国際共同取材、中国・ロシア・モンゴル国のトゥパ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』

2013年2月15日 国際シンポジウム『モンゴル国における鉱業開発の諸問題——歴史的視点から』

2013年3月17日 国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」

2-5 研究員制度

外来研究員

DE ST. MAURICE, Gregory A. (デ セイント モーリス グレゴリー エイ) アメリカ ピッツバーグ大学大学院博士課程 (Ph.D. Candidate)

研究課題：地域に根ざすローカリズムの可能性と現代における京都の食文化

McGUIRE, Jennifer (マグワイア ジェニファー) アメリカ オックスフォード大学博士課程 (Ph.D. Candidate)

研究課題：日本におけるろう者のための高等学校教育——五感、社会、自己意識の形成

SCHNELL, Scott Randall (シュネル スコット ランダル) アメリカ Department of Anthropology, University of Iowa, Associate Professor

研究課題：自然との共生——東北日本におけるマタギの狩猟伝統と自然環境の管理責任

KERR, Hui-Ying (ケール・ホイ イェン) イギリス Royal College of Art/Victoria & Albert Museum 大学院生 (博士課程)

研究課題：バブル期 (1986-1991年) の日本のデザインに関する総合的研究

MCHUGH, Christopher James (マキュー クリストファー ジェームス) イギリス サンダーランド大学大学院生

研究課題：ジョージ・ブラウン・コレクションの再文脈化に関する実践的研究
——市民参加による陶芸制作を通じて

塩谷 サルフィ マクスーダ (シオタニ サルフィ マクスーダ) インド Visiting faculty Center of Central Asian Studies University of Kashmir

研究課題：「移行期」前後におけるモンゴル女性の発展の軌跡

金山 晶 (金 晶) (カナヤマ アキ) 韓国

研究課題：東アフリカ地域の牧畜民にみられる抜歯慣習について

金 美善 (キム ミソン) 韓国 関西大学非常勤講師

研究課題：移民女性の言語問題——ハンディ克服のための言語習得戦略と言語支援とのかかわり

崔 承燕 (チェ スンヨン) 韓国 全南大学BK事業団博士後 (post-doctoral) 研究員

研究課題：海洋シルクロード地域の織物と織機に関する動向調査

豊山亜希 (呉 亜希) (トヨヤマ アキ(オ アヒ)) 韓国 関西大学文学部総合情報学部非常勤講師

研究課題：コロニアル/ポストコロニアル言説としてのインド美術史の脱構築
——植民地インドにおける造形活動実践と文化行政の再検討から

財吉拉胡 (サイジラホ) 中国 日本学術振興会外国人特別研究員

研究課題：内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

斯 琴 (スチン) 中国 内モンゴル農業大学人文社会科学学院非常勤講師

研究課題：オイラド・モンゴルにおける口頭伝承と口承史

馬 茜 (バ セン) 中国 中国北京市中央民族大学民族学社会学学院民族学博士課程

研究課題：開発主義言説における人間という概念の検討——中国寧夏回族の観光開発プロジェクトを中心に

南 誠（梁 雪江）（ミナミ マコト） 中国 長崎大学水産環境科学総合研究科助教

研究課題：「中国帰国者」のコミュニティにおける文化の変容に関する研究

YOTOVA, Mariya Ivanova（ヨトヴァ・マリア・イヴァノヴァ） ブルガリア 滋賀県立大学非常勤講師

研究課題：食をめぐる文化の表象——日本とブルガリアの博物館展示の比較をとおして

MARZEC, Agnieszka（マジェツツ・アグネシカ） ポーランド TECC 語学学校非常勤講師

研究課題：日本における日本人・ヨーロッパ人の国際家族の文化適応

ICHINKHORLOO, Lkhagvasuren（イチンホルロー ルハグワスレン） モンゴル モンゴル国立科学技術大学人文
学舎教授

研究課題：オイラド・モンゴル研究の新展開

FIRSOVA, Varvara（フィルソヴァ ヴァルヴァラ） ロシア ロシア科学アカデミー図書館アジア・アフリカ文学
部研究員

研究課題：日本における外国人コミュニティの形成——南アジアからの移住と日本の多文化主義

相島葉月（あいしま はつき） 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

荒田 恵（あらた めぐみ） 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

伊藤まり子（いとう まりこ） 日本 京都外国語大学/和歌山市立医師会看護専門学校非常勤講師

研究課題：現代ベトナム北部地域の都市における女性の「親密性」に関する人類学的研究

伊藤 悟（いとう さとる） 日本

研究課題：中国徳宏タイ族社会の音文化——感性と感覚の人類学

岩佐光広（いわさ みつひろ） 日本 高知大学教育研究部講師

研究課題：交錯する態度への民族誌的接近——連辞符人類学の再考、そしてその先へ

岩谷洋史（いわたに ひろふみ） 日本 立命館大学/関西大学非常勤講師

研究課題：人類学的な資料の情報化に関する研究

魚津（東村）純子（うおづ（ひがしむら）じゅんこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：東アジア古代国家形成期における織物文化の特質に関する民族考古学的研究

浮ヶ谷幸代（うきがや さちよ） 日本 相模女子大学人間社会学部教授

研究課題：サファリングとケアの人類学的研究

大場千景（おおば ちかげ） 日本

研究課題：無文字社会における社会変動と歴史意識の動態

岡 晋（おか すずむ） 日本

研究課題：中国雲南省ナシ族の「出自集団」の構成と変成についての研究

岡部真由美（おかべ まゆみ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タイにおける仏教僧ネットワークにみるコミュニティの編成過程に関する人類学的研究

岡本尚子（おかもと なおこ） 日本 国際基督教大学高等学校教務員
研究課題：アラビアンナイト伝説訳者 J.-C. マルドリュスに関する遺贈コレクションによる研究

越智郁乃（おち いくの） 日本
研究課題：沖縄における米軍返還地の開発とコミュニティ再編に関する人類学的研究

落合雪野（おちあい ゆきの） 日本 鹿児島大学総合研究博物館准教授
研究課題：プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性

小野林太郎（おの りんたろう） 日本 東海大学海洋学部専任講師
研究課題：アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究：
資源利用と物質文化の時空間比較

風戸真理（かざと まり） 日本 神戸山手大学現代社会学部非常勤講師
研究課題：生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性

梶丸 岳（かじまる がく） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：民族誌記述による一般歌掛け論の人類学的構築

金子正徳（かねこ まさのり） 日本 三重大学人文学部非常勤講師
研究課題：東南アジア島嶼部における民族・文化動態の研究

金谷美和（かねたに みわ） 日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員、大阪芸術大学芸術学部非常勤講師
研究課題：グローバル化のなかのインド染織品

上池あつ子（かみいけ あつこ） 日本 甲南大学経済学部非常勤講師
研究課題：インドにおける伝統医薬に関する研究

川田順造（かわだ じゅんぞう） 日本 神奈川大学特別招聘教授
研究課題：日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する

河西瑛里子（かわにし えりこ） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：聖地におけるスピリチュアルな体験と癒しの人類学的研究——現代のイギリスを事例に

神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻准教授
研究課題：造形美術様式と風土の関係

岸本誠司（きしもと せいじ） 日本 東北公益文科大学非常勤講師
研究課題：東アジアにおける在来農業とマメ科作物に関する民俗学的研究

窪田 暁（くぼた さとる） 日本
研究課題：ドミニカ共和国からアメリカに渡る「野球移民」の民族誌

熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウイグル・アカデミー外国人研究員
研究課題：牧畜文化とイスラーム——中央アジアからの分析のこころみ

桑山敬己（くわやま たかみ） 日本 北海道大学大学院文学研究科教授
研究課題：海外における人類学的日本研究の総合的分析

古賀章一（こが しょういち） 日本 大阪市立大学大学院創造都市研究科客員研究員
研究課題：中国の環境ガバナンスと国際協力に関する研究

五月女賢司（さおとめ けんじ） 日本 吹田市立博物館学芸員
研究課題：博物館資源を活用したユニバーサル展示・教育に関する実践的研究

坂田博美（さかた ひろみ） 日本 富山大学経済学部教授
研究課題：手芸をめぐる消費文化研究：フィールドワークに基づく消費者行動分析

佐藤吉文（さとう よしふみ） 日本
研究課題：先スペイン期アンデスにおける初期国家と地域間交流との関係に関する研究

眞田岳彦（さなだ たけひこ） 日本 女子美術大学大学院教授
研究課題：気候風土に育まれた人の幸福観と文様、装飾、記号との造形デザイン研究

重信幸彦（しげのぶ ゆきひこ） 日本 北九州市立大学基盤教育センター教授
研究課題：日本におけるネイティブ人類学/民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島大学大学院総合科学研究科研究員
研究課題：生理用品の流入による女性の身体観の変容——パプアニューギニアの事例から

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：中国雲南省チベット語諸方言の形成過程に関する歴史言語学的研究

関根康正（せきね やすまさ） 日本 関西学院大学社会学部教授
研究課題：ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究

添野 勉（そえの つとむ） 日本 淑徳大学非常勤講師
研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

田口理恵（たぐち りえ） 日本 東海大学海洋学部海洋文明学科准教授
研究課題：アジアにおける自然と文化の重層的関係に関連する民族誌資料の調査研究

武田和久（たけだ かずひさ） 日本 日本学術振興会海外特別研究員
研究課題：南米ラプラタ地域イエズス会布教区の先住民社会組織に関する歴史学的研究

竹村嘉晃（たけむら よしあき） 日本 和歌山県立医科大学/奈良大学/関西大学非常勤講師
研究課題：ダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究——南アジア芸能を事例に

田村うらら（たむら うらら） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：民族的モノの再生と保存に関わる人類学的研究——トルコ絨毯の修繕と展示を中心にして

田森雅一（たもり まさかず） 日本 東洋英和女学院大学人間科学部非常勤講師
研究課題：インド音楽・舞踊の近代化とグローバル化に関する人類学的研究

辻 貴志（つじ たかし） 日本 近畿大学経営学部/岡山理科大学総合情報学部非常勤講師
研究課題：フィリピン・パラワン島南部先住少数民族モルボッグの家畜利用にかんする生態人類学的研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本
研究課題：宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

- 津田浩司（つだ こうじ） 日本 東京大学大学院総合文化研究科准教授
研究課題：「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生
- 出水 力（でみず つとむ） 日本 大阪産業大学経営学部教授
研究課題：海外でのモノづくりに関する研究
- 土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ
- 友永雄吾（ともなが ゆうご） 日本 佛教大学/大阪産業大学非常勤講師
研究課題：オーストラリア南東部先住民の資源管理に関する伝統的知識の活用とその継承メカニズムの解明に関する研究
- 中井信介（なかい しんすけ） 日本 大谷大学非常勤講師
研究課題：生業活動の域内多様度に関する人類学的研究——東南アジア大陸部におけるモンの事例
- 中道静香（なかみち しずか） 日本 天理大学非常勤講師
研究課題：アラビア語方言記述の歴史とその社会的役割の変容
- 中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学/四條畷学園短期大学非常勤講師
研究課題：タイにおける土器づくりの職人集団の形成に関する人類学研究
- 奈倉京子（なぐら きょうこ） 日本 静岡県立大学国際関係学部専任講師
研究課題：帰還移民の比較民族誌的研究——帰還・故郷をめぐる概念と生活世界
- 成定洋子（なりさだ ようこ） 日本 金城学院大学非常勤講師、東京学芸大学男女共同参画支援室特任准教授・主任研究員
研究課題：イギリスのフラット・シェアにおける親密性に関する人類学的研究
- 名和克郎（なわ かつお） 日本 東京大学東洋文化研究所准教授
研究課題：ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究
- 橋本裕之（はしもと ひろゆき） 日本 盛岡大学文学部教授
研究課題：災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承
- 福原弘識（ふくはら ひろのり） 日本
研究課題：初期国家形成と社会組織の動態：テオティワカンのアパートメント・コンパウンドから
- 藤井和子（ふじい かずこ） 日本 大阪国際大学非常勤講師
研究課題：韓国植民地期の文化に関する人類学的研究——群山月明会会員の聴き取り調査から
- 堀内正樹（ほりうち まさき） 日本 成蹊大学文学部教授
研究課題：非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ
- 前川真裕子（まえかわ まゆこ） 日本
研究課題：ジャポニズムの系譜とテクノ・オリエンタリズム
- 真崎克彦（まさき かつひこ） 日本 清泉女子大学地球市民学科准教授
研究課題：アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学——参加・運動・ガバナンス

増野高司（ますの たかし） 日本

研究課題：東南アジア大陸部における焼畑の変容過程の比較研究

松井生子（まつい なるこ） 日本

研究課題：「民族」の差異化と接合をめぐる実践

——在カンボジア・ベトナム人の上座仏教との関わり方を中心に

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川恭子（まつかわ きょうこ） 日本 奈良大学社会学部准教授

研究課題：グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究

道信良子（みちのぶ りょうこ） 日本 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授

研究課題：現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」

三牧純子（みまき じゅんこ） 日本 独立行政法人国際協力機構職員

研究課題：沿岸部のコミュニティの災害対応力と高齢化についての研究

宮脇千絵（みやわき ちえ） 日本

研究課題：中国雲南省におけるモンの装いにみる自己表象に関する人類学的研究

村尾静二（むらお せいじ） 日本 総合研究大学融合推進センター助教

研究課題：映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論

森 一代（もり かずよ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：互助実践の外延的拡大とその位相——ラオス北西部と奈良県中山間地域における比較研究

八重清敏（やえ きよとし） 日本 彫刻師

研究課題：マキリの研究——マキリ（小刀）の製作技法について

八木百合子（やぎ ゆりこ） 日本

研究課題：現代ペルー社会における聖女崇拝の展開に関する研究

八塚春名（やつか はるな） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：タンザニアにおける狩猟採集民の生業複合に関する研究

柳沢英輔（やなぎさわ えいすけ） 日本 青山学院大学総合文化政策学部付置 ACL 特別研究員

研究課題：ベトナム中部地域におけるゴング文化の動態——楽器の製造と流通に着目して

山田孝子（やまだ たかこ） 日本 独立行政法人日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

研究課題：チベットの基層文化に関する研究——自然、生態、信仰

吉岡由佳（よしおか ゆか） 日本 くらしき作陽大学助教

研究課題：アジア系アメリカ詩における「声」の研究

吉根憲一（よしね けんいち） 日本 彫刻師補

研究課題：アイヌの木工とその工具について——木彫盆の製作技法と道具の種類について

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学/園田学園女子大学/放送大学講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

劉 麟玉（りゅう りんぎょく） 日本 奈良教育大学教育学部准教授
研究課題：音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

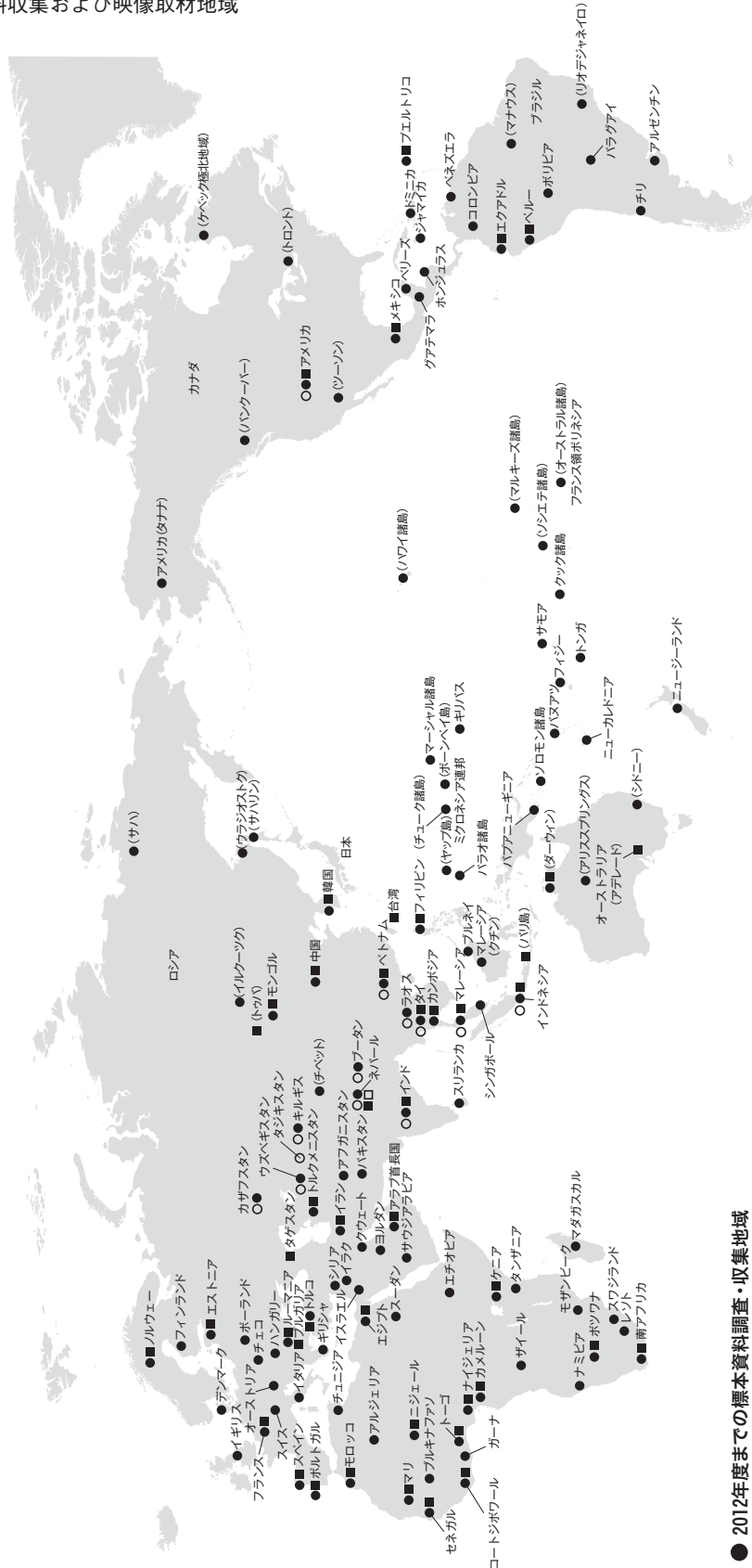
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2012年度は、国立大学2人、私立大学1人の、合計3人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



● 2012年度までの標本資料調査・収集地域
○ 2013年度の標本資料調査・収集計画地域

■ 2012年度までの映像取材地域
□ 2013年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

・収集

朝倉敏夫	韓国	84点(急須他)	2012年8月27日～9月7日
韓 敏	中国	194点(位牌、経典他)	2012年12月6日～12月12日
			2013年3月24日～3月29日
陳 天璽	中国、台湾他	68点(手紙、写真、竜舞他)	2013年1月17日
			2013年2月12日
			2013年3月5日～3月6日
野林厚志	台湾	49点(衣装他)	2013年3月23日～3月26日
吉田憲司	モザンビーク	13点(彫刻他)	2012年10月12日～10月22日

・2013年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／175,623点 国内資料／159,830点(未登録資料含む) 総点数／335,453点(未登録資料含む)

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／973点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

笹原亮二	滋賀県長浜市「日本展示新構築のための長浜曳山祭の映像資料の製作」	2012年4月14日～15日
小長谷有紀	ロシア連邦トゥバ共和国、中国新疆ウイグル自治区、モンゴル国ボブド県 「ロシア・モンゴル・中国におけるトゥバの現代変容に関する取材」	2012年7月26日～8月18日
韓 敏	中国福建省「漢族の祖先祭祀、四合院の映像取材及び文房四宝・磁器の資料収集」	2012年12月6日～12日

・2012年3月現在の収蔵資料数

映像資料／7,878点 音響資料／62,651点 総点数／70,529点

・映像音響資料の貸し出し

利用総件数／175件(内、大学23件) 資料利用総点数／1,039点(内、大学129点)

館内利用など

利用件数／98件 資料利用点数／709点

特別利用(館外での上映・試聴など)

利用件数／77件 資料利用点数／330点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2012年度図書室の活動

1. 利用者サービス

- 1) カウンター前に図書室からのお知らせボードを、図書室入口にはデジタルサイネージ(電子掲示板)を設置した。
- 2) 一般利用者への利用案内をカラー印刷で作成、また、10月よりツアーマップの配布を開始した。
- 3) 一般利用者の来室時の受付を簡略化し、氏名確認ができるものの提示は不要とした。(初回登録時のみ確認)

2. 利用者研修会の開催——教育・研究支援

- 1) 2012年4月4日 外来研究員オリエンテーションにて案内 15名参加
- 2) 2012年4月11日 総研大新入生ガイダンスにて案内 8名参加

3. 資料整備関係

- 1) 蔵書点検を兼ねた資料IDのラベル貼りと無断持ち出し防止用磁気テープの装着を約20万冊処理し（3か年計画の最終年）、必要に応じて修理や箱入れ等を行った。
- 2) 遡及入力を引き続き実施し、約41,000冊を登録した。
- 3) 研究業績の点検、整理を行い、3か年計画の1年目として、6,750件の整理を行った。また、研究業績棚を教員氏名の50音順に並べかえ、氏名見出しを整備した。
- 4) 雑誌コーナーの新作雑誌棚に、当年度分と前年度分を配架するように整備した。
- 5) 地図室資料の点検を行い、整理およびデータ化を検討した。その結果をふまえて、整備事業を開始した。

4. オンライン資料関係

- 1) データベース（The Making of the Modern World I & II、Western Travellers in the Islamic World Online）を導入した。

5. 施設整備

- 1) 地震発生時の書架資料落下防止対策のため、書庫3～5層の書架上段2段に落下防止テープを貼付。書庫2層荷捌きコーナーに書架を増設（約2,250冊分の収容能力増加）
- 2) 書庫エレベータ内にレスキューキャビネットを設置した。
- 3) 図書室シャッターの改修を行った。
- 4) 書庫階段部の壁を白く塗装した。これにより、照明効果が高まり、避難経路としての安全性が高められた。
- 5) 未整理梅棹資料を一元管理し、効率的に整理を進めるため、準備室に集密書架を設置した。

6. 他機関との連携（みんぱく図書室見学ツアー開催）

- 1) 博物館学集中コース（JICA）オリエンテーション（2012年9月20日 10名参加）
- 2) 若手研究者奨励セミナー（2012年11月30日 13名参加）
- 3) 大阪大学コミュニティデザインセンター
「アート・アーカイブズ概論」集中講義（2012年12月27日 10名参加）

7. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。
- 2) 中学生の職場体験学習受入れ。
豊中市立第十一中学校（2012年11月7日 2年生男子2名）
箕面市立止々呂美中学校（2012年11月7日 2年生女子1名）
豊中市立第十二中学校（2012年11月14日 2年生男子1名）
吹田市立山田東中学校（2012年11月14日 2年生男子1名）

●2012年度新規受入数

日本語図書	2,062点	外国語図書	3,314点		
AV資料他	266点	製本雑誌	744点	合計	6,386点

●2013年3月末現在の蔵書数

日本語図書	261,415点	外国語図書	388,370点	合計	649,785点
日本語雑誌	9,985種	外国語雑誌	6,773種	合計	16,758種
HRAF	385ファイル	HRAF原典（テキスト）	7,141冊		

●利用状況（2012年度）

入室者	全体	14,587人
	館外者	1,764人
時間外入室者		144人
うち日曜、祝日		41人
貸出	図書	11,162冊
	雑誌	430冊
うち館外貸出図書		3,603冊
HRAF 利用受付		16件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	2,341 (254)件
		国外（うち謝絶）	73 (19)件
		来室*	3,955 件
	依頼	国内	305 (12)件
国外		16 (9)件	
現物貸借	受付	国内	1,091 (75)件
		国外	332 (6)件
	依頼	国内	4 (2)件
		国外	4 (2)件
事項調査	受付	73 件	

*うち大学等の機関1,070件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2012年度の問い合わせ利用件数は、422件であった。

問い合わせ者別	(件)	問い合わせ者の所属機関別	(件)		
教員（大学）	58	公的機関	大学・大学図書館	103	
大学院生	9		博物館・美術館	30	
大学生	20		小・中・高	14	
学生（専門学校等）	0		その他教育機関	1	
教員（小・中・高）	11		研究機関	1	
学生（小・中・高）	0		公共図書館	8	
博物館・美術館関係	24		地方公共団体	7	
図書館	28		団体	3	
教育・研究機関	6		民間	研究機関	1
マスコミ関係	33			会社	63
会社・団体	45	団体		10	
一般	75	個人	館外	79	
民博教職員	113		館内	102	
計	422	計	422		

資料の利用目的

		(件)			
調査・研究	研究*1	129	業務用	展示用	20
	論文作成	12		番組制作	29
	学習*2	4		出版物作製	30
	図書館から	28		参考資料	7
	授業で利用	37		その他	4
	その他	71		小計	90
	小計	281		その他	寄贈申出
館内利用	刊行物作成	4	その他		0
	館の事業	27	小計		4
	参考資料	0	合計		422
	資料の複製	16			
	小計	47			

注) *1 大学生以上の調査を「研究」とする

*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の1つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂米之助、菊沢季生、篠田 統、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2012年度は昨年度に引き続きリスト作成整理業務の外部委託を行い、木内信敬アーカイブ資料について整理を終えた。また、土方久功アーカイブ資料のうち、ノート全40冊のデジタル化を完了した。

リストを公開し、利用に供しているアーカイブは12件である。2012年度の利用状況は閲覧10件、特別利用2件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録データベース

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	245,337
2012年度の作成件数	18,128
2012年度のアクセス件数	71,949

・標本資料詳細情報データベース

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	47,196
2012年度の作成件数	217
2012年度のアクセス件数	4,557

・標本資料記事索引データベース

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2011年度までの作成件数	40,337
2012年度の作成件数	4,186
2012年度のアクセス件数	1,912

・韓国生活財データベース

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像付き）。

2011年度までの作成件数	7,827
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	3,937

・George Brown Collection (ジョージブラウンコレクション)

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料に関する基本情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	2,992
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,289

・映像資料目録データベース

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD等の情報（写真資料は除く）。

2011年度までの作成件数	7,825
2012年度の作成件数	28
2012年度のアクセス件数	4,464

・ビデオテークデータベース

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。ビデオテークブースと同じメニューで番組を探したり、キーワードで検索が可能。

2011年度までの作成件数	606
2012年度の作成件数	20
2012年度のアクセス件数	8,073

・音楽・芸能の映像データベース

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	849
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	382

・ネパール写真データベース（日本語版・英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時、大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	3,879
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	3,243

・松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲氏が、1919（大正8）年から1923（大正12）年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で購入求めた絵葉書の情報（画像付き）。高精細でデジタル化した絵葉書画像の連続的な拡大が可能。

2011年度までの作成件数	169
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,578

・音響資料目録データベース

本館が所蔵するレコード、CD、テープ等の情報。

2011年度までの作成件数	62,453
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,479

・音響資料曲目データベース

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、および昔話の一話単位の情報。

2011年度までの作成件数	346,772
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	902

・図書・雑誌目録データベース

本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。

2011年度までの作成件数	660,560
2012年度の作成件数	5,983
2012年度のアクセス件数	175,952

・梅棹忠夫著作目録（1934～）データベース

本館初代館長、梅棹忠夫氏の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録データベース。

2011年度までの作成件数	—
2012年度の作成件数	6,473
2012年度のアクセス件数	1,513

・中西コレクションデータベース——世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

- | | |
|---------------|--------|
| 2011年度までの作成件数 | 2,729 |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 28,802 |
- ・吉川「シュメール語辞書」データベース
吉川 守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 2011年度までの作成件数 | キーワード33,450語（40,596頁） |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 552 |
- ・Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）
Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。
- | | |
|---------------|-------------|
| 2011年度までの作成件数 | 見出し語 7,636語 |
| 2012年度の作成件数 | 1 |
| 2012年度のアクセス件数 | 統計情報なし |
- ・日本昔話資料データベース（稲田浩二コレクション）
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声付き）。音声は館内限定公開。
- | | |
|---------------|-------|
| 2011年度までの作成件数 | 3,696 |
| 2012年度の作成件数 | 0 |
| 2012年度のアクセス件数 | 593 |
- ・衣服・アクセサリデータベース
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像付き）。
- | | |
|---------------|--------|
| 2011年度までの作成件数 | 18,990 |
| 2012年度の作成件数 | 587 |
| 2012年度のアクセス件数 | 22,844 |
- ・身装文献データベース
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。
- | | |
|---------------|---------|
| 2011年度までの作成件数 | 144,944 |
| 2012年度の作成件数 | 6,925 |
| 2012年度のアクセス件数 | 21,357 |
- ・近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の画像」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。
- | | |
|---------------|-------|
| 2011年度までの作成件数 | 9,858 |
| 2012年度の作成件数 | 191 |
| 2012年度のアクセス件数 | 2,312 |
- 館内で利用できるデータベース
- ・標本資料詳細情報データベース（館内専用）
本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録（画像付き）。
- | | |
|---------------|---------|
| 2011年度までの作成件数 | 245,403 |
|---------------|---------|

2012年度の作成件数	16,397
2012年度のアクセス件数	38,756

・カナダ先住民版画データベース

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像付き）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2011年度までの作成件数	158
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	65

・音楽・芸能の映像データベース

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	849
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	90

・朝枝利男コレクションデータベース

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真に関する情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	3,966
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	12

・タイ民族誌映像データベース——精霊ダンス

田辺繁治氏（本館名誉教授）が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2011年度までの作成件数	10,082
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	15

・東南アジア稲作民族文化総合調査団写真データベース

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	4,393
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	839

・オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真データベース

小山修三氏（本館名誉教授）が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	8,043
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	2,256

・西北ネパール及びマナスル写真データベース

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像付き）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班（推定）の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2011年度までの作成件数	620
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	57

・京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）が撮影した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	11,663
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,362

・梅棹忠夫写真コレクション

本館初代館長の梅棹忠夫氏が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像付き）。

2011年度までの作成件数	35,420
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	7,005

・日本昔話資料（稲田コレクション）データベース

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声付き）。音声は館内限定公開。

2011年度までの作成件数	3,696
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	30

・国内資料調査報告集データベース

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2011年度までの作成件数	21,373
2012年度の作成件数	0
2012年度のアクセス件数	1,004

●2012年度に館外公開されたデータベース

・梅棹忠夫著作目録（1934～）データベース（2012年12月25日公開）

●2012年度に館内公開されたデータベース

なし

2-7 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

藍野大学（187）、芦屋大学（7）、インドネシアの大学（7）、エスモード大阪校（34）、追手門学院大学（16）、大阪栄養専門学校（59）、大阪学院大学（6）、大阪教育大学（60）、大阪芸術大学（131）、大阪経済大学（16）、大阪工業技術専門学校（7）、大阪国際大学（103）、大阪コミュニケーションアート専門学校（11）、大阪産業大学（182）、大阪樟蔭女子大学（100）、大阪成蹊大学（194）、大阪総合デザイン専門学校（246）、大阪体育大学（2）、大阪大学（204）、大阪府立大学（9）、大阪文化国際学校（13）、大阪文化服装学院、岡山県立大学（16）、岡山大学（2）、香川大学（6）、関西大学（67）、関西学院大学（39）、関東学院大学（11）、きのくに国際高等専修学校（5）、京都市立芸術大学（95）、京都外国語大学（18）、京都川島テキスタイルスクール（14）、京都教育大学（14）、京都芸術デザイン専門学校（169）、京都工芸繊維大学（11）、京都嵯峨芸術大学（93）、京都産業大学（30）、京都精華大学（66）、京都造形芸術大学（174）、京都大学（16）、京都橘大学（330）、京都ノートルダム女子大学（14）、京都文教大学（11）、共立女子大学（11）、高知大学（17）、甲南女子大学（10）、甲南大学（9）、神戸学院大学（80）、神戸芸術工科大学（21）、神戸女学院大学（52）、神戸女子大学（90）、神戸大学（20）、神戸大学大学院（30）、国土館大学（4）、滋賀県立大学（16）、就実大学（91）、昭和女子大学（48）、杉野服飾大学（26）、杉野服飾短期大学（44）、駿台観光&外語専門学校（6）、成安造形大学（11）、摂南大学（57）、専門学校アートカレッジ神戸（53）、千里金蘭大学（61）、宝塚大学（3）、タキイ研究農場付属園芸専門学校（84）、東京芸術大学（22）、同志社女子大学（20）、同志社大学（18）、東北学院大学（78）、東北生活文化大学（27）、東洋学園東洋Fデザイン専門学校（8）、獨協大学（14）、富山大学（14）、ドレスメーカー学院（99）、名古屋学芸大学（83）、奈良芸術短期大学（54）、奈良女子大学（42）、奈良大学（9）、花園大学（8）、阪南大学（41）、姫路獨協大学（3）、兵庫教育大学（25）、フェリス学院大学（3）、福井大学（10）、佛教大学（6）、北海学園大学（31）、武庫川女子大学（48）、武庫川女子大学大学院（6）、明治大学（13）、立教大学（16）、立正大学（13）、立命館大学（46）、龍谷大学（62）、早稲田大学（17）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

・来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

授 業	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生のための初年次導入教育プログラム ・「アーツミュージアム実習Ⅱ」 ・「都市社会学Ⅰ」、「社会学概論Ⅰ」 ・博物館実習 ・文化人類学の学外授業 ・文学部歴史文化学科の演習 ・人間科学講座新入生セミナー ・人類学専攻演習 ・「基礎演習」 ・「地域社会連携型フィールドワーク科目拡充支援事業」 ・「裁判外紛争処理」演習
-----	--

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教大学、同志社大学 文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学（1,326）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障害を有する方々への配慮についての取組状況

来館者等に安心・安全な施設環境を提供するため引き続きバリアフリー化を計画し、来館者用エレベーター（1号機）を視覚障害者等のため、音声ガイド装置付きに改修を行うとともに、特別展示館西側出口及び守衛室前出入口の扉を自動扉に改修整備を行った。また、正面玄関アプローチの土間の石割れ・目地補修を行うとともに、講堂1・2階和式便所に手摺りを取り付け、障害のある方や高齢者の方々などの安全に配慮した整備を行った。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設設備の使用状況を把握するため館内部署と協議しつつ、共同利用スペースの創出など、施設の有効活用に取り組んだ。
- ・第2電子計算機室にサーバを集約したことにより空き室となった第1電子計算機室を情報システム課事務室として整備し、情報システム課事務室跡を梅棹資料室に整備した。また、梅棹資料室の跡を国際学術交流室、戦略プロジェクト室として用途変更した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・常設展示場のうち日本の文化展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。
- ・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。
- ・館内の防犯対策として、老朽化した守衛室監視カメラ制御装置の取替修繕を行い館内の安全性を高めた。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

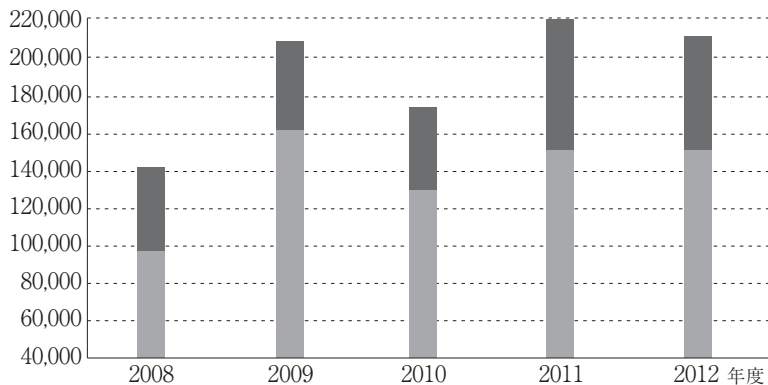
- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知したほか、館内各所に節電、節水の貼紙をし、教職員へ一層の意識啓発を行った。
- ・受変電設備の変圧器を超高効率型変圧器に取替え、無駄な電力消費（約200Kw/日）を削減した。
- ・省エネ仕様の機器への取替を計画し、3階サーバ室の水冷式空調設備を高効率な空冷式空調設備に取替え、節電・節水を図った。また、講堂ホール照明器具のランプを白熱灯ハイビーム150W型からLEDハイビーム18Wに取替えるとともに、特別展示館照明器具も同様に白熱灯ハイビーム150W型からLEDハイビーム18Wに取替を行った。さらに建物外周ドライエリアの照明器具を水銀灯400W型からLED80W器具に取替を行い、省エネとランプの長寿命化によるメンテナンス費用の抑制を図った。
- ・2011年度に引き続き常時点灯している階段室等の照明器具を省エネ型またはセンサー付き照明器具に順次取替えた。

3 展示

入館者数

●2012年度総観覧者数（共催展、巡回展含む） 210,543人

●本館入館者数（5年間）



年度	個人	団体	合計
2008	97,926	44,377	142,303
2009	161,300	47,172	208,472
2010	130,866	45,122	175,988
2011	152,024	67,856	219,880
2012 年度	151,339	56,308	210,543

本館展示

●展示専門部会

本館展示新構築にかかわる支援・連絡調整と本館展示の運営にかかわる連絡調整、ならびに特別展・企画展の企画内容の点検支援・連絡調整を行う組織として、文化資源運営会議のもとに展示専門部会を置く。同部会は本館展示新構築総括チームと特別展・企画展ワーキング・グループより構成する。なお、本館展示の運営・新構築にかかわる案件の全体での検討の場として、随時、本館展示プロジェクトリーダーからなる拡大展示専門部会を開催する。

●本館展示プロジェクトチーム

	代表者	構成メンバー	(五十音順)
オセアニア展示	Peter J. Matthews	印東道子 菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 白川千尋 須藤健一 丹羽典生 林 勲男	
アメリカ展示	齋藤 晃	伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 鈴木七美 鈴木 紀 関 雄二 八杉佳穂	
ヨーロッパ展示	宇田川妙子	庄司博史 新免光比呂 森 明子	
アフリカ展示	飯田 卓	池谷和信 小川さやか 川瀬 慈 竹沢尚一郎 三島禎子 吉田憲司	
西アジア展示	山中由里子	上羽陽子 菅瀬晶子 西尾哲夫	
音楽展示	福岡正太	川瀬 慈 笹原亮二 寺田吉孝	
言語展示	庄司博史	菊澤律子 西尾哲夫 八杉佳穂	
南アジア展示	三尾 稔	上羽陽子 杉本良男 寺田吉孝 南 真木人	
東南アジア展示	信田敏宏	樫永真佐夫 佐藤浩司 関本照夫 田村克己 平井京之介 福岡正太 吉本 忍	
中央・北アジア展示	小長谷有紀	池谷和信 佐々木史郎 藤本透子	
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	朝倉敏夫	太田心平	
東アジア展示（中国地域の文化）	塚田誠之	韓 敏 小長谷有紀 田村克己 陳 天璽 野林厚志 横山廣子	
東アジア展示（アイヌの文化）	佐々木史郎	伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 吉田憲司	
東アジア展示（日本の文化）	日高真吾	池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史 陳天璽 野林厚志 廣瀬浩二郎	
情報・インフォメーション	野林厚志	飯田 卓 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太	
イントロダクション展示	日高真吾	齋藤玲子 山中由里子 吉田憲司	

●特別展・企画展・ワーキンググループ、本館展示新構築総括チーム等

飯田 卓 上羽陽子 齋藤玲子 日高真吾 南 真木人 山中由里子 吉田憲司

●本館展示の新構築（展示チームは2013年3月現在）

アフリカ展示

一般公開 2009年3月26日～

アフリカ展示チームリーダー 飯田 卓

アフリカ展示チームメンバー（館内）池谷和信 小川さやか 川瀬 慈 竹沢尚一郎 三島禎子
吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを4つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

西アジア展示

一般公開 2009年3月26日～

西アジア展示チームリーダー 山中由里子

西アジア展示チームメンバー（館内）上羽陽子 菅瀬晶子 西尾哲夫

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

音楽展示

一般公開 2010年3月25日～

音楽展示チームリーダー 福岡正太

音楽展示チームメンバー（館内）川瀬 慈 笹原亮二 寺田吉孝

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

言語展示

一般公開 2010年3月25日～

音楽展示チームリーダー 庄司博史

音楽展示チームメンバー（館内）菊澤律子 西尾哲夫 八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生みだすことは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

オセアニア展示

一般公開 2011年3月17日～

オセアニア展示チームリーダー Peter J. Matthews

オセアニア展示チームメンバー（館内）印東道子 菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 白川千尋

須藤健一 丹羽典生 林 勲男

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

アメリカ展示

一般公開 2011年3月17日～

アメリカ展示チームリーダー 齋藤 晃

アメリカ展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 鈴木七美 鈴木 紀
関 雄二 八杉佳穂

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

ヨーロッパ展示

一般公開 2012年3月15日～

ヨーロッパ展示チームリーダー 宇田川妙子

ヨーロッパ展示チームメンバー (館内) 庄司博史 新免光比呂 森 明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

情報・インフォメーション

一般公開 2012年3月15日～

情報・インフォメーションチームリーダー 野林厚志

情報・インフォメーションチームメンバー (館内) 飯田 卓 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることができる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、みんぱくの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんぱくの研究って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

東アジア展示(日本の文化) 「祭りと芸能」「日々の暮らし」

一般公開 2013年3月22日～

東アジア展示(日本の文化) チームリーダー 日高真吾

東アジア展示(日本の文化) チームメンバー (館内) 池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史
陳 天璽 野林厚志 廣瀬浩二郎

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれている。こうした環境のなかで、隣接する諸文化の影響をうけながら、さまざまな地域文化が展開してきた。ここでは、「祭りと芸能」、そして「日々の暮らし」というふたつの角度から、特色ある、それら文化の諸相を展示している。

特別展示・企画展示など

●特別展

第31回「今和次郎 採集講義——考現学の今」

- 会 期 2012年 4月26日～6月19日
 会 場 特別展示館
 主 催 国立民族学博物館
 特別協力 工学院大学図書館
 協 賛 財団法人千里文化財団
 後 援 社団法人日本建築学会、社団法人日本建築家協会、社団法人全日本建築士会、日本生活学会、日本民俗建築学会
 協 力 青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアム、株式会社青森スタジオ、株式会社商華堂、日本万国博覧会記念機構
 入場者 26,893名
 実行委員長 久保正敏
 実行委員 (館内) 朝倉敏夫 飯田 卓 小林繁樹 近藤雅樹 佐藤浩司
 (館外) 岡本信也(野外活動研究会) 岡本靖子(野外活動研究会)
 萩原正三(工学院大学名誉教授) 黒石いずみ(青山学院大学)
 小山茂樹(有限会社ブックポケット) 高橋晴子(大阪樟蔭女子大学)
 横川公子(武庫川女子大学)

内 容

2011年10月から翌年3月にかけて、青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアムで開催の「今和次郎 採集講義」展の全資料を展示して、民家調査、考現学、建築設計、服飾研究、生活学など多岐にわたる今和次郎の活動を紹介した。加えて、考現学を継承する野外活動研究会の野外調査、さらに民博所蔵・展示資料を活用して、大村しげコレクションやモンゴル・ゲルの家財道具悉皆調査および住まいの再現、田中千代コレクション調査、ソウルやマダガスカルの住まいの家財道具悉皆調査とデータベースやマルチメディア・コンテンツによる仮想的再現、縮尺10分の1民家模型製作のための詳細な考現学的調査、などを展示した。これらの展示を特別展示場から本館展示および民博所蔵資料への索引として位置付けることで、物質文化研究の最前線と民博所蔵資料の豊かさを示し、観覧者に今和次郎の活動と民博の諸活動を再発見してもらう機会とした。

第32回「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」

- 会 期 2012年 9月13日～11月27日
 会 場 特別展示館
 主 催 国立民族学博物館
 協 力 北海道大学植物園・博物館、北海道開拓記念館、ところ埋蔵文化財センター・どきどき、新潟県津南町歴史民俗資料館、群馬県沼田市教育委員会、織物参考館・紫、長野県大鹿村教育委員会、東京国立博物館、高田装束研究所、野外民族博物館リトルワールド、株式会社豊田自動織機、トヨタ自動車株式会社、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、株式会社西山産業、石川県立白山ろく民俗資料館、大阪日本民芸館、香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館、株式会社美織、うるま市立石川歴史民俗資料館、沖縄県多良間村教育委員会、南風原町立南風原文化センター、株式会社今昔西村、新井淳一、石井香久子、上原美智子、沖山道、日下部啓子、関駒三郎、鳥丸知子、財団法人千里文化財団
 入場者 25,654名
 実行委員長 吉本 忍
 実行委員 (館内) 上羽陽子
 (館外) 井関和代(大阪芸術大学) 内海涼子(大阪成蹊大学) 大野木啓人(京都造形芸術大学)
 金谷美和(国立民族学博物館外来研究員) ひろいのぶこ(京都市立芸術大学)
 藤井健三(西陣織物館) 柳 悦州(沖縄県立芸術大学)

内 容

織物を織るという技術は、人類史の中核技術として古代から現代に至っており、産業革命やIT革命も織りの技術

の延長線上にある。本特別展では、織りの技術、織機構造のカラクリ、織物の実像などをあきらかにし、世界各地で収集された織機と織物を展示するとともに、入館者が織りを体験することができる場（体験ひろば）をもうけた。これは、展示資料を見るだけでなく、さまざまな織りのカラクリを自らのからだや小型の簡易型織機模型などを使って実体験することによって、織りの技術、道具としての織機、織物がいかなるものであるのかということを知ることができる展示の試みである。また、本館共同研究「手織機と織物の通文化的研究」の成果として、これまでに知られることのなかった多くの情報を展示や関連イベントを通じて公開した。

●企画展

「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」(人間文化研究機構連携展示)

会 期 2012年9月27日～11月27日

会 場 企画展示場 A

プロジェクトリーダー 日高真吾

内 容

東日本大震災の甚大な被害により、地域コミュニティそのものの存続があやぶまれるなかで、被災地では例年以上に祭りや芸能の奉納が活発におこなわれた。それは、人間の「生」としての、有形・無形の文化遺産の価値をあらためて認識させられる出来事であった。本館も、同じ人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館などと連携し、復興の支援に関わってきた。この企画展では、文化遺産の復興の作業に目を向け、私たちにとっての文化遺産の意義を見直すとともに、その文化遺産を通じて、この地震・津波災害の記憶と経験をいかに未来に継承し、次代の社会を築き上げていくのかを考える契機を提供した。

本企画展は、人間文化研究機構連携展示として、国文学研究資料館でも2013年1月30日から3月15日まで開催された。

●国際連携展示

「75年ぶりの帰郷——1936年蔚山達里」

会 期 2011年11月29日～2012年4月29日

会 場 蔚山博物館(韓国)

入場者 85,692人

プロジェクトリーダー 朝倉敏夫

内 容

本館と韓国国立民俗博物館、蔚山市が共同推進する「蔚山達里100年学術交流事業」の一環として、1936年に蔚山達里でおこなわれた「朝鮮の農村衛生」調査に同行したアチック・ミュージアムのメンバーが収集した本館の「蔚山コレクション」約80点を中心に、韓国・蔚山博物館で特別企画展を開催した。1930年代、韓国の典型的な地方農村だった蔚山の風景や人びとの生活像の変化を展示し、現在の蔚山市にいたる発展の歴史と文化を探った。日本と韓国の博物館の学術交流事業の成果として、本展は好評を博し、2か月間会期を延長した。

●共同開催

国立民族学博物館コレクション 「ビーズ イン アフリカ」

会 期 2012年8月4日～10月21日

会 場 神奈川県立近代美術館(葉山)

入場者 14,267人

内 容

アフリカのビーズに焦点をあてながら、ビーズの素材と変化、民族におけるビーズの役割などの本館の研究成果を通して、ビーズがアフリカの人びとの歴史や文化のなかでいかに深くかかわってきたのかを紹介した。また、本館所蔵資料から約200点を展示した本展は、本館展示(アフリカ・装う)の新たな展開を示すと同時に、2008年度「アジアとヨーロッパの肖像」展、2011年度「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展に続き、文化人類学と美術史、民族学博物館と美術館との新たな協調関係を見出す試みとなった。

●巡回展

「マンダラ展——チベット・ネパールの仏たち」

会 期 2012年7月14日～9月2日

会 場 石川県立歴史博物館

入場者 8,063人

内 容

マンダラは密教（タントリズム）で用いられる儀礼用祭壇であったが、時代とともに宇宙（世界）の縮図などの意味をもつようになった。この展示では、チベット、ネパール、日本のマンダラなどを用いて、マンダラの構造と歴史を分かりやすく示し、「マンダラとは何か」という問いに迫った。今回の巡回展示は、2003年に本館で開催した特別展を展開したものである。

展示関連出版物およびプログラム

●特別展

『霧の森の叡智 マダガスカル、無形文化遺産のものづくり』

発行日 2013年3月12日

執筆者 飯田 卓、上羽陽子、内堀基光、大貫美佐子、吉田 彰、吉本 忍、ジャン＝エメ・ラクトゥアリスア、
シャントル・ラディミラヒ

編集協力 石川泰子

編集発行 国立民族学博物館

『世界の織機と織物』

発行日 2013年3月29日

編 著 吉本 忍

編集協力 財団法人千里文化財団

編集発行 国立民族学博物館

●企画展

『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』

発行日 2012年9月27日

編 者 日高真吾

編集協力 財団法人千里文化財団

編集発行 国立民族学博物館

●ビデオテーク

・ビデオテーク番組

『イスラム教の礼拝と巡礼』（番組番号1318） 製作：国立民族学博物館

カイロ市内での金曜日の集団礼拝と、聖都メッカでくりひろげられる、年に1度の大巡礼。

『雲南省 ベー族の葬式』（番組番号1700） 制作監修：横山廣子

漢族地域ではほとんど見られなくなった、死者に対する子孫の孝の観念を色濃く残す葬礼の細部を雲南省大理盆地で収録している。

『誰も知らなかった国トッパ』（番組番号1701） 制作監修：小長谷有紀

世代の異なる4人の研究者たちが、トッパとの出会いや生活体験を語ることによって、その魅力を伝える。

『バスニ・カラン村の領主の暮らし』（番組番号1702） 制作監修：三尾 稔

インド西部のかつての戦士カーストの子孫が、今の領主の館を紹介し、昔の暮らしのようすを語る。

『バスニ・カラン村の女神祭礼』（番組番号1703） 制作監修：三尾 稔

インド西部の村で雨季明け（9月頃）に行われる祭り。女神に犠牲をささげ、豊作や村人の無病息災を祈る。

『ラージャスターンの戦士の霊 サガスパウジー』（番組番号1704）制作監修：三尾 稔
インド西部では戦死者の霊が霊媒に憑依（ひょうい）し、人びとの願いをかなえる。霊にインタビューを試みた。

『アメリカ先住民 ホピの銀細工づくり』銀板に重ね合わせる伝統（番組番号1705）制作監修：鈴木 紀、伊藤敦規
アメリカ先住民ホピに伝わる銀細工づくり。その独特な制作技法と作品に表されるホピの伝統や世界観を見てみよう。

『被災した民俗資料の保存修復 石川県穴水（あなみず）町指定「明泉寺台燈籠（みょうせんじだいとうろう）」』（番組番号1707）制作監修：日高真吾
能登半島地震により倒壊（とうかい）した穴水町指定文化財「明泉寺台燈籠」。研究者や職人など、さまざまな人の手を通じてよみがえる。

Kulintang Gong Music from Mindanao in the Southern Philippines（番組番号3694）制作監修：Usopay Hamdag Cadar, Terada Yoshitaka

Kulintang is a type of gong music in the Southern Philippines. The film portrays the music as played by Maranao people on Mindanao Island.

Kakoolintang o Manga Meranao（番組番号8007）制作監修：Usopay Hamdag Cadar, Terada Yoshitaka

So kolintang na sabarang ko boniboni-an sa pagabagatan a Pilimpinas. Peki-ilay a pinikola ini so kakoolintang a Meranao sa Polo a Magindanao.

『21世紀の人びとが会う20世紀の都市 群山』（番組番号2804）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館
植民地時代の建築物を観光資源として生かす韓国の都市、群山の現在の姿を映し出す。

『入隊』（番組番号2805）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館
韓国の2人の学生が臨む兵役。入隊までの数日間を追う。

『トッポギ 追憶を食べ現在を語る』（番組番号2806）製作：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館
トッポギの屋台は、小腹を満たしたい若者や思い出の味を懐かしむ人で賑わう。

『21 세기 사람들이 찾는 20 세기 도시, 군산』（番組番号8008）製作： 국립민족학박물관, 한국국립민속박물관
식민지시대 건축물을 관광자원으로 살려낸 한국의 도시, 군산의 현재 모습을 화면에 담았다.

『입영』（番組番号8009）製作： 국립민족학박물관, 한국국립민속박물관
병역을 맞이하는 두 명의 한국 대학생. 입대까지 수일간을 따라가보다.

『떡볶이 추억을 먹고 현재를 말한다』（番組番号8010）製作： 국립민족학박물관, 한국국립민속박물관
떡볶이 포장마차는 배를 채우려는 젊은이들이나 추억의 맛을 그리워하는 사람들로 북적거린다.

・研究用映像資料

『ものとかぞく「2002年ソウルスタイル」の記録』（番組番号7158）制作監修：朝倉敏夫、佐藤浩司
ソウルのアパートに住む平凡な家族がすべての持ち物を博物館に展示することになった。物を通してみえてきた家族のきずな。

『ウダイプルの女神祭礼』（番組番号7218）制作監修：三尾 稔
インド西部の女神祭礼は時代とともに様変わりしている。変化のようすや村と町の祭りの違いを紹介する。

『トゥバに魅せられた人々』（番組番号7219）制作監修：小長谷有紀
トゥバに魅せられて足しげくかようようになった研究者たちが、その現地での体験を語ることによって、ト

ウバの魅力を伝える。

Maranao Culture at Home and in Diaspora (番組番号7220) 制作監修：Usopay Hamdag Cadar, Terada Yoshitaka

The film shows Maranao traditional gong music of the southern Philippines in its current context as affected by regional conflict and resultant diaspora.

Olaola o Meranao sa Inged a go sa Kiaparakan Kiran (番組番号7221) 制作監修：Usopay Hamdag Cadar, Terada Yoshitaka

Giya-i na pilikola a osayan ko kakoolintang o manga Meranao a go antona-a i miyambetad iyan sabap ko kiniparak iran imanto.

● 「みんなく電子ガイド」プログラム数 (2013年3月31日現在)

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	25	25	25	25
東南アジア	32	32	32	32
中央・北アジア	23	23	23	23
東アジア				
朝鮮半島の文化	39	39	39	39
中国地域の文化	16	16	16	16
アイヌの文化	8	8	8	8
日本の文化	15	15	15	15
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総 計	253	253	253	253

4 国際連携と国際協力

海外研究機関との研究協力協定

国名 フランス
相手機関名 国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所
協定書等名 国立民族学博物館と国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との学術協力に関する協定
締結日 2012年11月30日
協定終了予定日 2015年11月29日
目的 これまでの建設的な共同研究を評価し、これをさらに強化すべく相互の理解と関心という行動指針に基づき、今後の学術的共同研究を発展させるため、本協定を締結する。
協定内容 両機関は共同研究事業において、学術的交流および協力を推進する。

国名 中国
相手機関名 社会科学院民族学・人類学研究所
協定書等名 国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定
締結日 2012年8月28日
協定終了予定日 2015年8月27日
目的 両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互惠と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。
協定内容

- ・研究プロジェクトの展開。
- ・双方の教員・研究者交流。
- ・研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開。
- ・その他両機関で合意された分野における協力。

国名 フィリピン
相手機関名 フィリピン国立博物館
協定書等名 国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定
締結日 2012年7月18日
協定終了予定日 2017年7月17日
目的 相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術協力および交流の強化および発展のために本契約を締結する。
協定内容 共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進。

国名 アメリカ合衆国
相手機関名 アシウィ・アワン博物館・遺産センター
協定書等名 国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定
締結日 2012年6月3日
協定終了予定日 2017年6月2日
目的 相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容

- ・双方の教職員・研究者の交流。
- ・共同研究プロジェクトの展開。
- ・博物館資料の展覧および教育分野における協力活動。
- ・学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開。
- ・その他両機関で合意された分野における協力。

国名 ベトナム
相手機関名 生態学生物資源研究所
協定書等名 国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
締結日 2012年3月22日
協定終了予定日 2017年3月21日
目的 相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約

協定内容	を締結する。 共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進。
国名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
締結日	2011年10月21日
協定終了予定日	2016年10月20日
目的	学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させることを目的とする。
協定内容	野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する。 <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の交流 ・野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施 ・展示および教育プロジェクトの共同実施 ・学術情報および刊行物の交換 ・両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動
国名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所との間の協定
締結日	2011年6月1日
協定終了予定日	2016年5月31日
目的	考古学、人類学、及び民族学の共同研究を目的とする。
協定内容	2011年から2016年にわたって行われる考古学、人類学、及び民族学の共同研究を本協定の対象とする。協定は下記の事項を実現させるものとする。 <ul style="list-style-type: none"> ・考古学、民族学の分野における共同調査 ・ロシアと日本における共同の研究集会 ・研究成果の共同出版
国名	ロシア
相手機関名	ロシア民族学博物館
協定書等名	国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力に関する協定
締結日	2010年12月3日
協定終了予定日	2015年12月2日
目的	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援 ・両博物館の研究者交流 ・ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的フィールドワークへの民博の研究者の参加 ・両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流
国名	ペルー
相手機関名	教皇庁立ペルーカトリカ大学
協定書等名	国立民族学博物館と教皇庁立ペルーカトリカ大学との間の学術協力の一般協定
締結日	2010年12月1日
協定終了予定日	2013年11月30日

目的	双方の利益になる協力活動を実現するためのガイドラインを定める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共同の研究活動とアウトリーチ活動 ・ 講演会とシンポジウムの共同策定 ・ 教員の交流 ・ 学術的または科学的資料、および双方の利益となる刊行物の交換 ・ その他、両者が互いに合意し、双方にとって有益な活動
国名	マダガスカル
相手機関名	アンタナナリヴ大学
協定書等名	国立民族学博物館およびマダガスカル国アンタナナリヴ大学の学術協力に関する協定
締結日	2010年11月22日
協定終了予定日	2013年11月21日
目的	互恵性と平等の理念のもとに、学術分野で相互に利益ある協力活動を進める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者の交換 ・ 共同研究プロジェクトの実施運営 ・ シンポジウムや講演の開催 ・ 学術情報や資料の交換 ・ 互いに同意したその他の学術協力の推進
国名	英国
相手機関名	エジンバラ大学
協定書等名	国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日	2010年5月17日
協定終了予定日	2015年5月16日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国名	中国
相手機関名	故宮博物院
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国故宮博物院との研究交流協定
締結日	2009年10月16日 / (更新) 2012年8月28日
協定終了予定日	2015年8月27日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国名	台湾
相手機関名	国立台北芸術大学
協定書等名	国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日	2009年5月15日
協定終了予定日	2014年5月14日
目的	相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 双方の教職員・研究者の交流 ・ 研究プロジェクトの展開 ・ 博物館展示品及び教育分野における協力活動 ・ 学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進 ・ その他両機関で合意された分野における協力
国名	中国
相手機関名	内蒙古大学
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定

締結日 2008年9月22日 / (更新) 2012年6月15日
 協定終了予定日 2017年6月14日
 目的 相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
 協定内容

- ・双方の教職員・研究者の交流
- ・研究プロジェクトの展開
- ・博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動
- ・学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開
- ・その他両機関で合意された分野における協力

国名 韓国
 相手機関名 大韓民国国立民俗博物館
 協定書等名 国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
 締結日 2007年7月11日 / (更新) 2012年6月15日
 協定終了予定日 2017年6月14日
 目的 学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
 協定内容

- ・教職員及び研究者の交流
- ・共同研究及び研究集会の実施
- ・博物館の展示及び教育活動に関する協力
- ・学術的情報及び出版物の交換
- ・両機関で合意されたその他の事業

国名 台湾
 相手機関名 順益台湾原住民博物館
 協定書等名 国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協議書
 締結日 2006年7月1日 / (更新) 2008年1月1日 / (更新) 2009年4月1日 / (更新) 2010年4月1日 / (更新) 2011年4月1日 / (更新) 2012年4月1日 / (更新) 2013年4月1日
 協定終了予定日 2014年3月31日
 目的

- ・台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査
- ・国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査
- ・上記に係る報告書ならびに研究誌の発行

国名 ペルー
 相手機関名 ペルー国立サン・マルコス大学
 協定書等名 国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
 締結日 2005年6月14日 / (更新) 2010年5月18日
 協定終了予定日 2015年5月17日
 目的 考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進すること。

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 34 (June 2012)

Business and Anthropology

- The Genesis of *Keiei Jinruigaku* at Minpaku ————— Hirochika Nakamaki
Business and Anthropology ————— Brian Moeran
Thoughts on Anthropology and Business ————— Tomoko Hamada Connolly
China's Private Enterprises: An Enterprise Anthropology Perspective ————— Zhang Jijiao
A Few but Valuable Things that I Learned from Nakamaki Sensei ————— Heung Wah Wong

Newsletter 35 (December 2012)

The Anthropological Study of Humans and Textiles

- Discardable and Undiscardable Textiles and Clothing ————— Teruo Sekimoto
Urban Transformations in the Value of Used and Old Textiles ————— Ilja Van Damme
Shifting Functions of Two Major Second Hand Clothing Markets in 17th-18th Century Edo:
Tomizawa and Yanagihara ————— Miki Sugiura
Sacred Rag, Shoddy Rag ————— Ulara Tamura
Regaining 'Fashion' Value:
The Trans-border Trading of Second-hand Clothing in East Africa ————— Sayaka Ogawa

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するためにMINPAKU *Anthropology Newsletter*を送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、MINPAKU *Anthropology Newsletter*を送付している研究機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	3
アルメニア	2	イタリア	3	米国	164	エチオピア	4
イスラエル	11	英国	55	エクアドル	1	エリトリア	4
インド	12	オーストリア	3	カナダ	17	ガーナ	3
インドネシア	17	オランダ	17	ガイアナ	2	カメルーン	1
オーストラリア	31	キプロス	1	グアテマラ	5	ケニア	4
韓国	45	ギリシャ	2	コロンビア	2	コートジボワール	2
カンボジア	1	スイス	5	チリ	1	ザンビア	11
サウジアラビア	4	スウェーデン	13	パラグアイ	1	スーダン	1
サモア	2	スペイン	3	ブラジル	5	スワジランド	1
シンガポール	5	スロベニア	1	ペルー	10	タンザニア	2
スリランカ	2	チェコ	3	ボリビア	3	ナイジェリア	3
ソロモン諸島	2	デンマーク	4	ホンジュラス	1	ナミビア	1
タイ	26	ドイツ	40	メキシコ	3	ボツワナ	2
台湾	31	ノルウェー	6			南アフリカ	6
中国	202	フィンランド	4			マダガスカル	1
トルコ	5	フランス	26				
ニュージーランド	7	ブルガリア	4				
日本	213	ベルギー	3				
ネパール	8	ポーランド	6				
パキスタン	2	ポルトガル	2				
パプアニューギニア	1	マケドニア	1				
パレスチナ	1	ルーマニア	2				
フィジー	6	ロシア	14				
フィリピン	7						
ブータン	3						
ブルネイ	3						
ベトナム	7						
香港	3						
マレーシア	10						
ミャンマー	8						
モンゴル	12						
ヨルダン	7						
ラオス	3						
小計	701	小計	220	小計	216	小計	49
総計							1186

博物館学コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術コース」は、発展途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館はじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は国際協力機構に衣替えし、民博もまた、2004年4月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の1機関となった。そこで、この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変をおこなって、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、民博がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と同で運営することとなった。もとより、実際の研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係から協力をあおぐことはいうまでもない。民博のもつ国際的ネットワークは対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は研修に大きな効果を挙げている。だ、その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である民博での研に限界があるのも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野活動で先進的な業績をあげている、滋賀県立琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めてる。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師や研修員がとに自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA 集団研修全体の枠組みが大きく変更され、3年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを3年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、民博としては、この枠組みの変更の際に、博物館関係者を3年間にわたり継続して派遣するのが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。

2012年度は、エジプト・エリトリア・ヨルダン・モーリタニア・ペルー・スリランカ・スワジランドの7か国から10名の研修員を受け入れ9月20日から12月21日まで研修をおこなった。国立民族学博物館と琵琶湖博物館での実施だけではなく、東北震災の被災地や遠野市立博物館、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などの研修旅行もおこなった。また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する「公開フォーラム世界の博物館2012」を2012年11月4日に国立民族学博物館でおこなった。84名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開した。また、全期間にわたって日本のさまざまな博物館関係者と直接ふれあい、その一部の現場を訪ねることで、研修者が日本側の経験に学ぶと同時に、日本側も研修者の目を通して、日本の博物館の持っている可能性と課題に気づかされるなど、たがいに経験と知見を分かちあうことができたと考える。

●博物館学コース研修員

ABDELAAL Yasser Thabet Bakri（アブデラル ヤセル サベット バクリ）エジプト

————— 大エジプト博物館・保存修復センター保存修復ユニット 保存修復員

ABDELWAHED Nasef Elsayed（アブデルワヘッド ナセフ エルサイド）エジプト

————— 大エジプト博物館選定ユニット スーパーバイザー

KIFLEMARIAM Dawit Araia（キフレマリアム ダウィット アライア）エリトリア

————— エリトリア国立博物館中央文書技術サービス部門 ディレクター

AL-ZOU'BI Naser Shaheer Azzam（アル ゾウビ ナセル シャヘル アッザム）ヨルダン

————— ウムカイス考古学博物館学芸員

Ahmed YEMBABA（アハメッド ヤハヤ ヨウムババ）モーリタニア

————— モーリタニア国立博物館 館長顧問

SARA REPETTO Cesar Luis（サラ レペット セサル ルイス）ペルー

————— レオンシオ・プラド地域考古学博物館考古学分野 学芸員補佐

RIOFRIO FLORES Maria Del Pilar (リオフリオ フロレス マリア デル ピラル) ペルー

———— リマ市文化局 文化遺産・視覚芸術部博物館・教育プロジェクト コーディネーター

SANO TAKAHASHI Susy (サノ タカハシ スシ) ペルー

———— リマ美術館 ホール・CI及びマーケティング部ホール及びデジタルメディア コーディネーター

ALAHAKOON DASANAYAKA MUDALIGE W. K. K. A. (アラハコーン ダサナヤカ ムダリゲ) スリランカ

———— 国家遺産省考古学局 アシスタントディレクター

DLUDLU Mabandla Jabulani (ドォルドォル マバンダラ ジャボラニ) スワジランド

———— スワジランドナショナルトラスト委員会 スワジランド国立博物館 博物館展示職員

5 広報・社会連携

概観

2012年度の広報事業の取り組みとして強調すべき点は、効果的な広報活動を行うための既存の広報・広告媒体の見直しやオリジナルグッズの開発、並びに博物館を活用した学校教育・社会教育への貢献及び地域との連携やメディアを利用するなど新たな広報事業を展開したことである。

既存の広報媒体の見直しとして、2011年度にリニューアルしたホームページについて、館員を対象としたアンケート調査の結果に基づき、機能やデザイン等の改善を図るとともに、日本語ページに対応する英語ページを作成し、英語ページの更新を迅速に行うことで外国人向けの情報発信を強化した。また、ホームページ上で公開するメールマガジン（みんぱく e-news）の読者に対してアンケート調査を実施し、今後のインターネットを通じた広報展開のあり方を検討した。さらに、特別展「マダガスカル霧の森の暮らし」においては、新たな広報手段として動画のダウンロードサービスやスマートフォン用専用アプリを開発するなど試験的な取り組みを行った。広報誌『月刊みんぱく』については、本館の広報普及誌として全国の研究機関、大学等に寄贈し、研究活動や事業活動を含めた本館の情報を広く提供するとともに、障がい者向け音訳版の収録媒体としてカセットテープ15組及びデジター（DAISY）53枚の2種類を製作した。

現状の広告媒体については、駅電照看板の設置場所の見直しを行うとともに、通年、同一意匠としていた電照看板の意匠を年2回の特別展開催期間中は、特別展デザインに意匠変更することで、より効果的な広報展開を行い集客効果の向上を図った。また、2011年度に作成した本館広報用マルチメディアコンテンツ「新規広報メディア（みんぱく 標本資料コレクター）」については、博物館の利用ガイダンスに参加した小中学校等の教諭へ配布し、利用者アンケートの結果の分析とコンテンツの評価を行ったところである。

新規広報媒体については、みんぱくオリジナルグッズとして、本館ロゴマークの入ったトートバッグ、クリアファイル及びボールペンを製作し、来客またはシンポジウム等のイベント参加者へ広く配布し、利用してもらうことで広報効果を高めた。また、オリジナルグッズに限らず、あらゆる広報物等に付す本館ロゴマークを統一的使用し、かつ、利便性を高めるため、複数の組み合わせパターンのロゴマークを作成し「国立民族学博物館シンボルマーク及びシンボルマークカラー規程」として制定することとした。

学校教育・社会教育活動については、大学教育への貢献として、財団法人千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」の運用を継続し、高等教育への活用を推進した。2012年度は、継続申し込み2件（大阪大学・京都文教学園）と、新規申し込み2件（同志社大学文化情報学部文化情報学研究所・千里金蘭大学）があり、1,346人の学生や職員が本館を訪れた。また、研究・展示、所蔵資料及び施設などを大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学のためのみんぱく活用マニュアル」の配布を継続すると同時に掲載内容の見直しを行い、高等教育への活用を推進した結果、171回96大学、4,475人の大学関係者が展示場を大学授業に利用した。初等・中等教育への貢献としては、近隣の教育委員会と連携した職場体験の受け入れを実施した結果、大阪北摂地域の中学校4校（5名）の参加があり、中学校生徒の校外教育に貢献した。また、小中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを年2回実施した。春に33団体95名、秋に34団体84名の参加があった。さらには、学校教育のみならず、大阪府高齢者大学校において本館の教員30名が1年間を通して授業を行い生涯教育にも取り組んだ。

従来から実施している研究広報事業としては、「みんぱくゼミナール」、「みんぱく映画会」、「研究公演」等を継続するとともに、好評を博している「みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう」、千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」、毎日新聞連載の「旅・いろいろ地球人」等を通じて社会に向けて定期的に研究情報を発信し続けている。報道関係者との懇談会も月に一度実施し、機関研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介している。また、新構築したインフォメーション・ゾーン及びヨーロッパ展示を広く社会へ紹介するための広報活動として、夏に「夏のみんぱくフォーラム2012 知りたい、触れたい、調べたい『みんぱく流』探究のすすめ」、春に「やっぱりヨーロッパ春のみんぱくフォーラム2013」と題して、研究公演、みんぱくゼミナール、映画会、展示場クイズ、ギャラリートーク等の各種イベントを実施した。機関研究関連では、研究過程そのものを社会と共有するという発想に基づいて、平成21年度後期から開始した機関研究「包摂と自律の人間学」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を5回開催した。

メディアを通じた広報活動の展開として、万博記念機構とMBSラジオが万博公園で繰り広げる共催イベントに協賛参加し、ラジオ特別番組の公開生放送中に教員が出演し、館内から中継を行った。また、夏季無料観覧、特別展及び研究公演の告知ラジオCMを作成し、MBSラジオのスポット及びレギュラー番組内で放送し、電波による広報に力点を置いた事業を展開した。さらに、ラジオパーソナリティと館長との対談を企画、実施し、幅広い客層に対して、研究の成果や諸民族の文化をわかりやすく紹介した。

地域に根ざした広報活動の一環として、吹田市との連携協力に関する基本協定に基づき、双方の地域連携を推進するために、吹田市内の小中学生を対象とした吹田にぎわい観光協会との連携事業「すいたんへ行こう！みんなく学校で世界のくらし大発見」を本館で開催し、6名の教員が世界各地で受け継がれる知恵、知識、教をみんなくオリジナルの授業として開講した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。

来館者サービスの面においては、団体利用者に対する本館の概要説明を継続して行うとともに、展示案内学習支援業務スタッフ用にモバイル端末を導入し、展示場内における来館者からの問い合わせに対して、より迅速、丁寧に対応できるよう充実化を図った。また、館内のサインについて、本館全体の看板・印刷物を刷新すべく、ユニバーサルデザインの考えに基づき、基礎プランの作成を進めた。さらに、平成24年度は、家庭での節電対策として、暑い夏をみんなくで過ごしてもらおうと「世界の夏を楽しもう！」と題して7月21日～8月26日の間を無料観覧とし、小中学生及び家族連れを対象にしたイベント「真夏サロン」(全19回)やモノづくりワークショップ(全3回)を実施した。また、5月には「国際博物館の日」の記念事業に参加し、先着100名にきせかえポストカードまたはトーマポール鉛筆を贈呈することで、より多くの来館者に博物館に親しんでもらうための活動を行った。

以上のように、より効果的かつ効率的な広報活動を展開すべく既存事業の見直しと新たな事業を展開し、本館の研究活動及び博物館活動をより広く社会に周知することができた。今後は、研究広報事業を継続しつつ、時代に則した広報媒体を活用することで、外国人も含めた新たな客層へのより広範な情報発信の強化を計画している。

国立民族学博物館要覧2012

- ・和文要覧 2012年6月発行
- ・英文要覧 2012年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/>

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成しており、「みんなく携帯サイト」では、最新のイベント情報や交通案内等を携帯電話からも見ることができる。

提供している主な情報は以下の通り。2012年度の訪問件数は574,640件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

常設展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・セミナー・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんなく e-news」を発行し、海外調査からの帰国報告「World Watching」や毎月開催している「みんなくセミナー」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2012年度の配信数は51,203部。

報道

●報道関係者との懇談会

2012年4月25日 10名(10社) 特別展『今和次郎 採集講義——考現学の今』報道・出版関係者向け内覧
5月17日 11名(9社) 平成24年度4月採用 新任教員からの挨拶、国際シンポジウム『アートと

			博物館は社会の再生に貢献しうるか?」、特別展『今和次郎 採集講義——考現学の今』関連「みんなく映画会」、研究公演『忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って』ほか
6月21日	8名(7社)	企画展プレ展示『写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー』、企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』、夏みんなくフォーラム2012 知りたい、触れたい、調べたい——「みんなく流」探究のすすめ連続講座「博物館にさわる」ほか	
7月19日	8名(8社)	特別展『世界の織機と織物——織って!みて!織りのカラクリ大発見』、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」、研究公演『神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ』ほか	
9月12日	7名(6社)	特別展『世界の織機と織物——織って!みて!織りのカラクリ大発見』報道・出版関係者向け内覧	
10月11日	6名(6社)	国際研究フォーラム『漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動——人類学的アプローチ』、国際シンポジウム『ヒーリング・オルタナティヴス——ケアと養生の文化』、公開講演会『だから人類は地球を歩いた——太平洋へアメリカへ』ほか	
11月15日	6名(6社)	カムイノミ、国際シンポジウム『中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究』、2012年度みんなく若手研究者奨励セミナー、日仏研究交流フォーラム『人口学から世界を理解する』、国際ワークショップ『グローバル支援のための実践人類学——研究と実践のキャリア・プランニング』ほか	
12月13日	7名(7社)	国際研究フォーラム『国際共同取材「中国・ロシア・モンゴル国のトゥヴァ人たち——テュルク系とモンゴル系のあいだ』、やっぱりヨーロッパ春のみんなくフォーラム2013、年末年始展示イベント『へび』ほか	
2013年1月17日	6名(6社)	国際シンポジウム『「樹について考える」シンポジウム』、特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』、国際ワークショップ『民族学資料の保存と修復——博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復』ほか	
2月21日	7名(7社)	日本の文化展示リニューアル、国際シンポジウム『布を使う人、布に包まれる身体』、国際シンポジウム『文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える』、公開ワークショップ『グローバル支援の人類学——市民社会間で互恵的紐帯をいかに形成するか』(アメリカ)ほか	
3月13日	10名(10社)	特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』報道・出版関係者向け内覧	

●新聞等報道件数

2012年度は、テレビ21件、ミニコミ101件、ラジオ12件、雑誌58件、新聞609件、他25件、計826件の報道があった。

月刊みんなく

4月号	(第415号)	(2012年4月1日発行)	特集 「今和次郎の考現学とその遺伝子たち」
5月号	(第416号)	(2012年5月1日発行)	特集 「博物館と博情館」
6月号	(第417号)	(2012年6月1日発行)	特集 「今、ヨーロッパを考える あたらしくなったヨーロッパ展示」
7月号	(第418号)	(2012年7月1日発行)	特集 「世界をさわる手法を求めて ユニバーサル・ミュージアムの可能性」
8月号	(第419号)	(2012年8月1日発行)	特集 「座談会〔特別展〕世界の織機と織物 織って!みて!織りのカラクリ大発見」
9月号	(第420号)	(2012年9月1日発行)	特集 「〔企画展〕記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」
10月号	(第421号)	(2012年10月1日発行)	特集 「数を操る、数に操られる」
11月号	(第422号)	(2012年11月1日発行)	特集 「どこへ行く日本学?」
12月号	(第423号)	(2012年12月1日発行)	特集 「大阪のなかの異文化」

- 1月号 (第424号) (2013年1月1日発行) 特集 「へび」
 2月号 (第425号) (2013年2月1日発行) 特集 「はじめに光ありき」
 3月号 (第426号) (2013年3月1日発行) 特集 「[特別展] マダガスカル 霧の森のくらし」

みんなくゼミナール

第407回 サハリンのキムチ

2012年4月21日

講師 朝倉敏夫

受講者 210名

内容 かつて樺太とよばれたサハリンには数万人の朝鮮半島出身者がいる。彼らはどうしてサハリンに渡ったのであろうか。そして、どのように暮らしているのだろうか。彼らの民族食であるキムチを通して、その歴史と生活について紹介した。

第408回 今和次郎 採集講義と日常生活文化研究の現在【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

2012年5月19日

講師 荻原正三 (工学院大学名誉教授)

黒石いずみ (青山学院大学教授)

横川公子 (武庫川女子大学教授)

佐藤浩司

受講者 237名

内容 特別展に展示されている今和次郎のスケッチは、大正・昭和期の人々の普段の暮らしを生き生きと伝えている。また、その日常生活の細かな観察を記録し新たな視点で魅力や問題を探る方法には、誰もが目を開かされる。今和次郎が民家研究や考現学で追求した事柄が、現代にどのような意味を持つのかを、青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアムで開催された「今和次郎 採集講義——考現学の今」展を監修した荻原正三、黒石いずみの両先生と、建築人類学や服飾史研究の専門家が解き明かした。

第409回 生活財の考現学——高度経済成長期の家庭景観【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

2012年6月16日

講師 栗田靖之 (国立民族学博物館名誉教授)

疋田正博 (株式会社シー・ディー・アイ代表取締役)

加藤ゆうこ (株式会社シー・ディー・アイ主任研究員)

受講者 152名

内容 今和次郎の「もちもの一切しらべ」を高度経済成長後の家庭の生活財に適用した栗田靖之名誉教授たちの研究は、家庭景観という視点で生活文化の現在と将来を見通した論考で、日本生活学会第5回「今和次郎賞」を受賞した。共同研究者である疋田正博、加藤ゆうこの両氏とともに、当時の生活文化と現在について考えた。

第410回 情報アクティビスト宣言——市民の知的探求と博物館【探究ひろば関連】

2012年7月21日

講師 飯田 卓

受講者 105名

内容 みんなくは、古いものを展示するだけでなく、さまざまな読みものや映像資料をも提供する総合メディアである。その役割を、インターネットが普及した時代状況に照らして整理し、紹介した。とくに近年利用が盛んなインターネット上の双方向メディアを意識しながら、市民レベルの知的探究と博物館の役割を提案した。

第411回 ソーシャルメディアに見る人とモノの関係【探究ひろば関連】

2012年8月18日

講師 濱崎雅弘 (産業技術総合研究所)

聞き手 中村嘉志（国立民族学博物館客員教員、国士館大学准教授）

受講者 162名

内 容 今回はこれまでとは少し毛色の異なる話題として人と人の関係を、コンピュータネットワーク上でのデジタル作品作りの視点から考えてみた。デジタル作品と聞くと無味乾燥なイメージを抱くことも多いと思うが、そこにはモノと人、人と人との関係に依拠したモノづくりが存在する意外に泥臭いものである。これらを近年流行のソーシャルメディアと絡めてお話した。

第412回 手仕事への回帰 【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年9月15日

講 師 吉本 忍

受講者 271名

内 容 人類史の中核技術として位置づけられる織りの技術は、産業革命以降に人類が手仕事を放棄し続けてきたことと深くかかわっている。その歴史的経緯と現代社会が直面する危機的状況、そして、全人類の手仕事への回帰の必要性についてお話した。

第413回 バントゥの人びとのラフィア織り

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年10月20日

講 師 井関和代（大阪芸術大学教授）

受講者 190名

内 容 マダガスカル原産のラフィアヤシの葉繊維から布を織るバントゥ語族の人びとは、中央アフリカのコンゴ盆地からカメルーンのバメンダ高原に分布している。彼らが使っているラフィア機について紹介した。

第414回 東南アジアの織機と衣装 【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

2012年11月17日

講 師 内海涼子（大阪成蹊大学教授）

受講者 221名

内 容 インドネシアやベトナムを中心に、東南アジアとその周辺地域でどのような織機が使用されてきたかを概観し、それらの織機で織られてきた布の素材や装飾技法、さらにどのような形の衣装として着用されてきたかを紹介した。

第415回 樹皮舟を復元する——極東ロシアの白樺樹皮文化

2012年12月15日

講 師 佐々木史郎

受講者 137名

内 容 2005年夏にロシア連邦ハバロフスク地方のアムール川下流域に暮らすナーナイと呼ばれる先住民族の村で白樺樹皮舟の復元製作を行い、それを標本資料として本館に収蔵した。その工程と技術、そしてその背景となる彼らの白樺樹皮文化を紹介した。

第416回 ヨーロッパのキリスト教とファシズム——ルーマニア・レジオナル運動を中心に

【新ヨーロッパ展示関連】

2013年1月19日

講 師 新免光比呂

深澤英隆（一橋大学教授）

江川純一（東京大学大学院研究員）

受講者 246名

内 容 ファシズムといわれる現象の性格は国によって大きく異なるが、いずれも宗教と微妙な関係にある。たとえばイタリア・ファシズムはカトリック、ドイツ・ナチズムはプロテスタントと深く関わっている。講演ではルーマニアのファシズムを中心に、ヨーロッパのファシズムをキリスト教との関係から考えてみた。

第417回 変わるヨーロッパの言語地図——多「言語」社会から「多言語」社会へ【新ヨーロッパ展示関連】

2013年2月16日

講師 庄司博史

受講者 251名

内容 19世紀よりヨーロッパでは多くの国が、教育や行政などを1つのことばで運営する社会を築いてきた。しかし20世紀後半以降、移民の増加や地域的少数言語運動の活発化により、国家語・公用語に加え、さまざまなことばがヨーロッパ社会のなかで顕在化しはじめている。ヨーロッパ発祥の一国一言語主義はどこにむかおうとしているのか考察した。

第418回 家族の今——イタリアの事例から考える【新ヨーロッパ展示関連】

2013年3月16日

講師 宇田川妙子

受講者 224名

内容 家族は現在、世界各地で大きな社会問題の1つになっています。その急激な変化と理想とのギャップ、崩壊なのか再編なのか。家族をめぐる議論はさまざまな立場や観点から数多くおこなわれています。今回は、イタリアの家族のあり方を、その社会背景とともに具体的に紹介しながら、私たち自身の家族についても考え直した。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 国立民族学博物館本館展示場又は特別展示場

概要 研究部の教員と来館者が展示場内で、より身近に語り合いながら、本館の研究を知ってもらうトークを2012年4月1日～2013年3月31日の約1年間にわたり、47回行った。
本事業は、研究所としてのみんなく、またみんなくの研究者の多様性を広くアピールすることを目的に、館内で寄せられた複数の応募案より採用された。
展示資料を解説するギャラリートークだけではなく、簡易スクリーンを設置し、映像資料などを利用した研究発表や、各回平均50～60名の参加者があった。なお、来館者から好評を博し、2012年度も引き続き行われることとなった。

第247回 2012年4月1日 織りと樹皮布づくり

講師 須藤健一

参加人数 55人

内容 オセアニアの伝統的な衣文化は、腰布とタバとよばれる樹皮布。腰布は、バナナやハイビスカスの繊維を紡いで経糸に整経して腰機で織られる。タバは、カジノキの内皮を打ちのぼした紙の布である。いずれも女性の仕事で、衣服だけでなく「貨幣」としても重要である。

第248回 2012年4月8日 民族植物学の旅：暮らしに葉をつかう

講師 ピーター・マシウス（通訳：田淵悦子）

参加人数 54人

内容 私たち人間は食糧の主たる供給源として植物を利用してきた。植物は私たちを養い、私たちが食べる動物をも養う。私たちはまた薬、装飾品、包装資材、容器、織物、編物、縄、住まいなど様々な用途に植物の葉を利用してきた。参加者とともにみんなくの展示場の中を探索した。

第249回 2012年4月15日 新生アラビア語が生んだ“フェイスブック革命”

講師 西尾哲夫

参加人数 35人

内容 中東民主化の流れで中心となった人びとが情報伝達手段として活用したのが、ソーシャルネットワークサービスのフェイスブックであった。IT化によるアラビア語世界でのあらたな言語状況と国民国家について、18世紀以降の近代史のなかで考えた。

第250回 2012年4月22日 邪視とカメレオン——東地中海地域の俗信

講師 菅瀬晶子

参加人数 30人

内容 イスラームなどの一神教を熱心に信仰する中東の人びとは、日本人とはまったく異なる生活をしていると思われがちである。実際、日本人には理解するのが難しい慣習もあるが、その一方で、日本とよく似たところも意外に多い。たとえば他人の嫉妬を買うことをおそれたり、お客をもてなすコーヒーに、「京のぶぶづけ」にも似た意味があるなどの慣習がみられる。日本との相違点に焦点をあて、中東の人びとの生活を、東地中海地域の事例をもとに紹介した。

第251回 2012年4月29日 デジカメとパソコンで考現学【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 飯田 卓

参加人数 56人

内容 数値化されないモノや事からの記録と、集まったデータのイラスト的表現を特徴とする今和次郎流の考現学をおこなうために、デジタル技術を駆使することを提案した。たぐいまれな視覚認知能力やデッサン力がなくとも、考現学は科学的な研究法として身近になってきたといえる。

第252回 2012年5月6日 考現学を楽しむ【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 近藤雅樹

参加人数 35人

内容 関東大震災を機に、荒廃した焼け跡の惨状を目の当たりにし、それでも復興に立ち上がるバラック住宅を観察することから今和次郎が発案し、実践した考現学。持ち物一切調べなどのユニークな視点から都市の住民たちの生活を描写するなど、考現学がどのような楽しいガクモンであるのかを披露した。

第253回 2012年5月13日 「済州島の民家」の調査と模型【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 朝倉敏夫

岩城晴貞（文化施設・文化事業プランナー）

参加人数 47人

内容 今和次郎の考現学をもとに製作された民家模型が、本館にはいくつか展示されている。「朝鮮半島の文化」展示場にある「済州島の民家」模型も、その1つである。この製作に携わった文化施設・文化事業プランナーの岩城晴貞と韓国研究者の朝倉敏夫が、済州島の民家にまつわる思い出話を語った。

第254回 2012年5月20日 物と家族——ある特別展の舞台裏

【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 佐藤浩司

参加人数 45人

内容 ソウルのアパートに住む家族の一切切を持ってきて展示場にならべた「2002年ソウルスタイル」展から10年になる。こんなアリエナイ展示がどうして実現できたのか？ そして、物をなくした家族のその後は？ 物をめぐる人間と家族のドラマについてお話した。

第255回 2012年5月27日 大村しげコレクションを読む【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 久保正敏

横川公子（元共同研究代表者・武庫川女子大学教授）

参加人数 72人

内容 料理研究家で物書きの大村しげ氏は、太平洋戦争を挟んで、ほぼ60年間、京都市中京区の五軒町家に暮らしていた。そっくりそのままに残されたモノを1つ1つ記録することによって、暮らし振りの再現を試みた。その結果、20世紀の暮らしを表すタイムカプセルが現れ出てきた。

第256回 2012年6月3日 みんなの考現学遺伝子【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講師 久保正敏

参加人数 54人

内 容 考現学は、生活文化を徹底的に観察し記録する手法が特徴。これは民族学調査手法と同じで、梅棹忠夫も調査に採用し、その後のみんなく研究者も、モノの背景調査、映像記録、データベース分析などの手法と組み合わせて、多くの成果をあげてきたことを紹介した。

第257回 2012年6月10日 民俗建築学者群像——今和次郎先生を中心として【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講 師 杉本尚次（名誉教授）

参加人数 86人

内 容 今和次郎の名著『日本の民家』を中心に、その巾広い学際的な視野は大きな影響を与えた。私が指導をうけるなど多大の影響をうけた今先生の流れをくむ石原憲治、竹内芳太郎、蔵田周忠、小寺廉吉、小川徹をはじめ諸先生の業績や人となりを紹介した。

第258回 2012年6月17日 近代日本の洋装ときもの【特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連】

講 師 久保正敏

高橋晴子（元客員教員・大阪樟蔭女子大学教授）

参加人数 70人

内 容 19世紀末以後の世界的な生活文化の西欧化のなかで、わが国の衣文化には、アジアの隣国と共通する傾向とともに、際だった特色があった。それは改良和服へのむなしい努力だった。しかし、きものはそんな努力とはべつの、もっと自由な可能性をもっていたのである。

第259回 2012年6月24日 みんなく流探究のすすめ【探究ひろば関連】

講 師 野林厚志

参加人数 37人

内 容 みんなくの展示の魅力はもちろん、実物のもつ力である。しかしながら、それ以上に展示資料の背景には豊富な関連情報とそれを支える研究はきっと来館者の知的好奇心をおおいにくすぐる。こうしたみんなくの特徴を生かしたみんなく流探究のすすめを通じて、みんなくの展示の楽しみかたを伝えた。

第260回 2012年7月8日 ビルマ／ミャンマーの口コミ力【探究ひろば関連】

講 師 田村克己

参加人数 48人

内 容 ビルマ（現国名ミャンマー）の社会では、人と人とのつながりが大きな意味を持っている。ひとつとは、ラバサイン（茶店）や市場、あるいは家の軒先などで、人と出会い、さまざまな情報を仕入れ、行動する。このようなビルマの「ソーシャル・ネットワーク」についてお話した。

第261回 2012年7月15日 みんなくの展示と映像【探究ひろば関連】

講 師 福岡正太

参加人数 35人

内 容 みんなくは世界各地の様々な映像を蓄積し、ビデオテークやみんなく電子ガイドで公開している。展示にも映像を用いることが多くなってきた。異文化についての発見の場として、映像をさらに生かしていく方法を来館者と一緒に考えてみた。

第262回 2012年7月22日 あたらしくなったビデオテーク——みんなく最後のビデオテーク???

【夏みんなくフォーラム（情報展示関連）】

講 師 山本泰則

参加人数 24人

内 容 みんなく開館のころから展示場で活躍してきたビデオテークが、6年ぶりに新しくなった。システム開発にかかわった1人として、新しい機能や開発の苦労などをお話した。また、初代ビデオテークのビデオを見ながら、ビデオテークの行く末についても考えてみた。

第263回 2012年7月29日 移民の国フランスとアフリカの深い関係

講師 三島禎子

参加人数 54人

内容 フランスは世界で6番目の移民国家である。大統領選挙では移民政策がかならず公約のひとつにあがってくる。1年のフランス滞在の生活体験や、ニュースになった事件をとりあげて、フランスとアフリカの深い関係について話題を提供した。

第264回 2012年8月5日 さわっておどろく「手学問のすゝめ」

——ユニバーサル・ミュージアムの可能性【探究ひろば関連】

講師 廣瀬浩二郎

参加人数 45人

内容 新設された「世界をさわる」コーナーには、各地の人々が創り、使い、伝えてきたモノが展示されている。自分の手を動かして「創る・使う・伝える」を体験する。そして、さわらなければわからないことを指先、手のひら、全身で確かめる。これが手学問の醍醐味である。手学問をキーワードとして、「ユニバーサル＝誰もが楽しめる」博物館の可能性を探った。

第265回 2012年8月12日 沖縄の離島社会における高齢者福祉

講師 加賀谷真梨

参加人数 33人

内容 沖縄の八重山諸島では、おじやおばあが最期まで生まれ育った島で楽しく暮らせるよう、島民が主体的に高齢者のための福祉活動を行っている。顔の見える社会での活動は理想的でたやすいように思われるが、実際には一筋縄ではいかない。そうした離島社会の高齢者福祉の実態と課題を写真資料を用いて提示した。

第266回 2012年8月19日 「身体」について考える——酒蔵でのフィールドワークを通じて

講師 岩谷洋史

参加人数 48人

内容 日本酒は、徒弟的な分業体制のもと、複雑な工程をへて、作られる。そこには、長年の経験に基づく、酒造に携わる人びとの身体に埋め込まれた知識が大きく関わっているといってもいいだろう。兵庫県内の酒蔵を事例としつつ、そうした知識のあり方を映像を見ながら、考えてみた。

第267回 2012年8月26日 東日本大震災被災地のまちづくり

講師 竹沢尚一郎

参加人数 44人

内容 東日本大震災の被災地では、復興まちづくりが最大のテーマである。岩手県大槌町、釜石市で住民主導のまちづくりに協力した経験から、現在どのような形でまちづくりが進行しているのか、住民と行政の相互関係はどのようなか、安全の重視は環境破壊をもたらさないのか、などを考えた。

第268回 2012年9月9日 インドネシアの^{いちば}市場と商人

講師 関本照夫

参加人数 29人

内容 ジャワの農村には5日ごとに開かれる定期市がある。そこでは、生鮮食品から、布・衣類、雑貨、農具、薬、ポスター、さらに生きた鶏や山羊などあらゆるものが売られている。買い物の用がある人もない人もたくさん集まり、お祭りのような賑わいとなる。この市場についてお話した。

第269回 2012年9月23日 南アジアの衣装と文様表現

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 上羽陽子

参加人数 62人

内容 布地に文様を表現するには、織り、染め、刺繍などさまざまな技法がある。南アジアのサリーや被り

布など、多様な衣装にみることのできる文様の表現方法について実物資料に触れながら紹介した。

第270回 2012年10月7日 アイヌの織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 齋藤玲子

参加人数 73人

内容 アイヌの織物にはさまざまな種類があり、衣類用の布を織るための腰機をはじめ、帯・ごご・袋などが、手機や錘機といった異なる技法と道具で作られてきた。実物や映像を見ながら、それぞれの織り方や素材などについて解説した。

第271回 2012年10月14日 ベトナム、黒タイの機織り文化

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 樫永真佐夫

参加人数 66人

内容 ベトナム西北部からラオス北部の盆地にひろく居住する黒タイは、色鮮やかな織物を織ることで知られている。彼らは村落生活のなかで、染織物の生産をどのように維持しているのだろうか。市場経済化が急速に進む現状をふまえ、お話しした。

第272回 2012年10月21日 見方を発見——染織資料と出会ってみよう

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 上羽陽子

参加人数 70人

内容 みんなく展示場には、世界のさまざまな地域から集められた染織資料がある。これらをじっくりみる「見方」について話をした。また、作り手や使い手の思いや工夫、資料の背景にあるモノの魅力や物語も考えてみた。

第273回 2012年10月28日 中南米の織機と織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 76人

内容 上衣や頭帯などの衣装とそれらを織っている腰機（こしばた）や、地面に打ち込んだ杭に固定した横木にタテ糸をかけ渡した杭機（くいばた）で織られたコカ袋をはじめとする大小の袋などの中南米の織機や織物をアメリカ展示場で実物を見ていただきながら解説した。

第274回 2012年11月4日 アフリカの織物とプリント布

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 86人

内容 重石機（おもしばた）や杭機（くいばた）や杵機（わくばた）などの織機で織られた織物とともに、インドネシアのジャワ更紗のロウケツ染め技法やジャワ更紗のデザインを取り込んでつくられたプリント布を、アフリカ展示場で実物を見ていただきながら解説した。

第275回 2012年11月11日 オセアニアの織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 75人

内容 腰機で織られたミクロネシアの織物や、手機によって織られたマオリ族のマントなどとともに、クワ科の樹皮を叩いてつくられる樹皮布（タバ）や、編んでつくられる敷物などを、オセアニア展示場で実物を見ながら解説した。

第276回 2012年11月11日 東南アジアの織機と織物

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 吉本 忍

参加人数 52人

内容 織り手が立ったまま、前進しながら機織りをおこなうという織機や、織りあがりのかたちが輪状となる緋（かすり）をはじめとする織物など、日本には類例のない織物や織機を、東南アジア展示場で実物を見ながら解説した。

第277回 2012年11月25日 ヤギ毛の繊維利用について

【特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」関連】

講師 上羽陽子

参加人数 72人

内容 ヨルダンやシリアなどでは、ヤギ毛を利用したテントや放牧用具をみることができる。西アジアの乾燥地帯での生活や、織りや編みなどの技法でつくられる生活用具について話をした。

第278回 2012年12月2日 黄土文明と現代中国——山西省介休（かいきゅう）市で展開する観光開発

講師 横山廣子

参加人数 28人

内容 いま中国は、国を挙げて世界遺産登録を目指すなど、文化政策に力を注いでいる。東西南北の文化が交差する山西省介休市は、歴史的文化資源を活用する観光開発を進め、2012年9月に研究者を招集して円卓会議を開催した。その取り組みを紹介し、最新の中国の状況を考察した。

第279回 2012年12月9日 グローバル化するインド舞踊

講師 寺田吉孝

参加人数 22人

内容 インドの舞踊が世界各地で注目されています。誰がどのような動機で踊っているのか。地域によって踊りのスタイルや演目は異なるのかなど。グローバル化するインド舞踊の現状についてイギリスや北米などを事例として紹介した。

第280回 2012年12月16日 資料の公開・活用のためのひとくふう

講師 園田直子

参加人数 10人

内容 資料の公開・活用をささえるのは、保存科学の役目のひとつである。みんなく保存科学研究では、民族資料のもつ特殊性をふまえ、予防保存に力をいれている。また、開館当初からコンピュータを活用するなど、独自のくふうをしている。ここでは、資料の公開・活用のためのひとくふうについて述べた。

第281回 2012年12月23日 年末年始展示イベント「へび」と教職員研修会

講師 小林繁樹

参加人数 49人

内容 年末年始展示イベントの今年度のテーマは「へび」であった。みんなくが所蔵している世界各地の「へび」の標本資料と興味深い話題を提供した。この企画は教職員10名ほどが参加した研修会も兼ねていた。その成果の一部である、資料を撮影した写真パネルも紹介した。

第282回 2013年1月6日 移民のささえるヨーロッパ【新ヨーロッパ展示関連】

講師 庄司博史

参加人数 71人

内容 いま西ヨーロッパでは移民出身者が人口の1～2割を占める国はめずらしくない。難民や移民労働者としてやってきたかれらが、今日ホスト社会において果たす役割や文化にあたる影響は小さくない。北欧を例にとって紹介した。

第283回 2013年1月13日 ヨーロッパのキリスト教【新ヨーロッパ展示関連】

講師 新免光比呂

参加人数 52人

内容 カトリック、プロテスタント、オーソドックスなどのヨーロッパのキリスト教はどんな宗教なのだろうか。キリスト教徒の毎日の暮らしや聖地への巡礼、オーソドックスで神と出会う場とされるアイコンなどから考えた。

第284回 2013年1月20日 アンデスの神殿とその魅力

講師 松本雄一

参加人数 31人

内容 南米アンデス地域では、今から4000年以上も前から神殿が建造されユニークな文明が開花していた。そして、神殿にはいろいろな仕掛けがあり、人々を呼び、惹きつける工夫がされていた。今回は、神殿における人を魅了するメカニズムを探った。

第285回 2013年1月27日 路上空間は誰のもの？——路上商人による暴動を事例に

講師 小川さやか

参加人数 41人

内容 路上生活者の排除から路上での商業・芸能活動に対する苦情まで、日本でも路上空間の利用をめぐる問題が起きている。タンザニアにおける闇市・路上商売の歴史と路上商人による暴動を事例に「路上空間はいったい誰のものか」について考えた。

第286回 2013年2月3日 ヨーロッパの生業と1年【新ヨーロッパ展示関連】

講師 宇田川妙子

参加人数 38人

内容 ヨーロッパの農業は現在でも人々の生活に強く結びついている。その中心が麦作であるが、そのサイクルは彼らの暦のあり方とも関連している。そうしたヨーロッパの農業と1年のサイクルを、展示品をとおして紹介した。

第287回 2013年2月10日 オセアニアの紛争

講師 丹羽典生

参加人数 38人

内容 オセアニア展示場には、ブーメランから人肉食用フォークそして補人具まで、紛争とそれにまつわる道具が展示されている。本ウィークエンドサロンでは、過去から現在までの紛争について、オセアニアに焦点を当ててお話しした。

第288回 2013年2月17日 ベルリンで既製服が生まれた頃【新ヨーロッパ展示関連】

講師 森 明子

参加人数 48人

内容 「既製服」産業はベルリンで19世紀末に誕生し、このころから、できあがった衣服を店で買うことが普及していく。100年余り前の人々が、産業化の時代をどのように生きていたのか、展示を示しながら説明した。

第289回 2013年2月24日 中央アジアの春の祝祭ナウルズ

講師 藤本透子

参加人数 36人

内容 中央アジアでは、春分の日になウルズと呼ばれる祝祭が華やかに行われる。ナウルズはイラン起源で「新しい日」を意味し、伝統的新年として広く祝われてきた。多民族都市と草原の村におけるナウルズの祝われ方を紹介しながら、ナショナリズムと人々の暮らしのなかの伝統について考えた。

第290回 2013年3月3日 客家建築の世界

講師 河合洋尚

参加人数 52人

内容 客家は、中国最大の民族である漢族の一系統で、独自の言語や文化をもつ集団である。近年、ユネスコの世界文化遺産に認定された土楼をはじめ、客家の建築が世界的な注目を集めるようになってきている。今回は客家建築をめぐる人間関係、風水、陰陽五行、民族的記号などの意味を解説し、奥深い客家建築の世界に迫った。

第291回 2013年3月17日 学校教育の中の八重山芸能

講師 呉屋淳子

参加人数 28人

内容 伝統芸能は、地域社会の中で受け継がれている一方で、近年では、学校の場においても積極的に教授されるようになり、今や伝統的な継承形態の枠組みを越えて伝統芸能を継承するひとつの「場」になっている。八重山の高校生の事例を通して、学校教育において伝統芸能がどのように取り込まれているのかについて考えた。

第292回 2013年3月24日 エチオピア、音楽職能の世界

講師 川瀬 慈

参加人数 33人

内容 エチオピア北部では、それぞれアズマリ、ラリベロッチと呼ばれる音楽集団が古くから活動を行ってきた。それらの集団による地域社会での多様な活動の実態や魅力を、映像や音の資料を通して紹介し、職能としての音楽について考えた。

第293回 2013年3月31日 韓国人主婦がカナダ生活で困るモノ——外からみた韓国物質文化

講師 太田心平

参加人数 30人

内容 韓国の国籍をもつ人びとのうち200人に1人は、カナダに住んでいるとされている。彼／彼女らは、現地での暮らしに適応しながらも、自分たちの生活に韓国製品を必要としている。ある一家の主婦を例に、彼女がどんな韓国製品を必要とし、それはなぜなのかを探った。

研究公演

「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」

2012年6月9日、6月10日

解説 林 勲男、陳 天璽

出演 仰山流 笹崎鹿踊保存会、神戸華僑總會 舞獅隊、神戸市立兵庫商業高校 龍獅團

参加者 2494名

内容 東日本大地震は、人々の日常生活はもちろんのこと、文化遺産の存続をも危うくした。本館が支援を行った大船渡市の伝統芸能・鹿踊保存会を招き、活動再開後初の関西公演を行った。「災いを払い、幸せを招く」といわれ、阪神・淡路大震災後に地域の人々を元気づけた中国獅子舞や龍舞、そして新長田の地元の方々との共演も実現した。実演とワークショップを通じて「1.17と3.11」の絆を深めるとともに、震災復興と伝統文化の継承について共に考え、実践した。

「神への祈りと喜びの舞曲——バッハからバルトークへ」【新ヨーロッパ展示関連】

2012年9月2日

解説 新免光比呂

出演 セバスチャン・ジャコミ、加勢百合子、工藤祐意・セシリア

参加者 441名

内容 本公演では、弦楽四重奏・指揮・音楽教育において多彩な才能を発揮しているパリ在住のチェリストを中心にトリオが、バロック音楽の大家バッハにおける民衆的要素としての舞曲という観点からクラ

シック音楽と民衆文化との関連を示した。とくにバッハの無伴奏チェロ組曲からは、バロック音楽に特徴的な組曲を構成するアルマンド、クーラント、ジーク、サラバンドなどの形式が中世の舞踏のリズムに始まることがわかった。さらにバルトークなどの後世の楽曲を演奏することで、クラシック音楽における民衆文化の理解への導きとなった。

「遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典声楽」

2012年10月14日

解説 寺田吉孝

出演 B・バーラスプラマニヤン、T・ギリッシュ、ナーガイ・ムラリダーラン、A.S. ランガナーダン

参加者 368名

内容 インド古典音楽は南北の2系統にわかれており、これまで日本には北インドの器楽演奏が主に紹介されてきた。今回の公演では、南インドの伝説的な演奏家のヴィーナ・ダナンマル（1867-1938）の音楽を、彼女のスタイルを受け継ぐ当代の名手たちの演奏により紹介した。

「鶴鳥神楽《みんぱく公演》」【企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連】

2012年10月21日

司会 日高真吾

解説 橋本裕之（追手門学院大学）

出演 鶴鳥神楽 神楽衆

参加者 251名

内容 「鶴鳥神楽」は岩手県下閉伊郡普代村に鎮座する鶴鳥神社の獅子頭である「権現様」^{ごんげん}を奉じて演じられる、岩手県を代表する民俗芸能である。毎年1月から3月にかけて、1年おきに沿岸部の北と南に点在する「宿」を訪ねて公演する「巡行」^{じゆんぎやう}をおこなってきた。鶴鳥神楽の巡行は沿岸部に暮らす人びとの願いに応えるかたちでおこなわれるため、喜びと畏敬の念をもって迎えられて、今日まで連綿と続けられてきました。沿岸部の人びとは1年おきに訪れる鶴鳥神楽の祝福を心待ちにしてきたのである。しかし、東日本大震災が沿岸部にもたらした壊滅的な被害によって、宿の多くが失われてしまった。そこで企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」開催を機に、地域とともに再生の道を歩み始めた鶴鳥神楽を大阪に迎えて、民俗芸能の復興を祈った。

「南部藩壽松院年行司支配太神楽《みんぱく公演》」【企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」関連】

2012年11月18日

趣旨説明 林 勲男

神楽紹介 橋本裕之（追手門学院大学）

神楽公演 南部藩壽松院年行司支配太神楽

参加者 500名

内容 岩手県釜石市只越町に拠点を置く南部藩壽松院年行司支配太神楽は、元禄12年に釜石の守護神である尾崎大明神の遥拝所が建立されるさい、盛岡藩の修験を地域単位で管理する年行事のうち閉伊郡を担当していた壽松院によって任ぜられて、御神体の御供として奉納されたといわれている。

年行司太神楽は、今日でも釜石三社といわれる釜石総鎮守八雲神社・尾崎神社・綿津見神社の祭典において、いずれも守護役として御神体が渡御するさい最前列に位置して露払いを勤めている。また、尾崎神社の本宮から里宮に御神体を迎える曳船祭においても、御神楽船を仕立てて、御神体が鎮座する御召船を先導し、家々の悪魔祓いを担当する。

さまざまな芸能が伝承されている釜石市内でも、歴史に支えられた由緒と格式を誇る団体として群を抜いているといえる。この年行司太神楽も東日本大震災によって甚大な被害を受けたが、活動を再開し、今回の公演を迎えた。

みんなく映画会

2012年5月12日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

『僕たちは世界を変えることができない。But, we wanna build a school in Cambodia.』

担当講師 佐藤 寛（アジア経済研究所国際交流・研究室長）、秋保さやか（筑波大学大学院生）、鈴木 紀

参加者 358人

内 容 ひょんなことから、カンボジアに学校を建設するためのボランティアに携わるようになった、医大生・葉田甲太のノンフィクションの映画化。漠然とした日常に新たな生きがい求めて、資金集めのチャリティーイベントを開催したり、現地視察の旅で過酷な実状に打ちのめされたりする中で、徐々に芽生える責任感や使命感を拠り所に奮闘する今時の大学生を、向井理ら現在の日本映画界を担う若手俳優陣が、伸びやかに好演している。現在もお、HIVに苦しむカンボジアの人々への偏見をなくしたいとの思いで手掛けたドキュメンタリーを各地で上映するなど、ゴールなき支援活動に取り組み続ける葉田氏。そんな彼の実感こもるタイトルから、それでも、行動することが世界を変える小さな一歩につながるというポジティブなメッセージが浮かび上がる、爽快な佳篇だ。

2012年6月3日

特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」関連

記録映画『昭和の家事』

担当講師 小泉和子（昭和の暮らし博物館館長）、佐藤浩司

参加者 379人

内 容 第2次大戦後、日本人の生活様式は大きく変わり、家事も大きく変化した。今では、昔の家事を見知っている人も少なくなってしまった。「昭和の家事」は、明治43年生まれの主婦、小泉スズさんが日常的に行っていた家事を彼女が暮らした家（現・昭和の暮らし博物館／東京都大田区）で3年間にわたり丹念に撮影した記録映画である。昭和時代の庶民の生活の記録としても大変貴重な映像である。スズさんは、炊事、洗濯、裁縫、掃除、育児、看病、近所・親戚つきあいと、一家を支えていく上で必要な家事をすべて自分の手で行ってきた。それは現在の家事とは比較にならないほど量質ともレベルが高く、豊かで奥深い世界が広がっていた。家事から解放された私たちは、楽さ、便利さと引き替えに多くのものを失ってしまった。今こそ、かつてどこの家庭でも当たり前に行われていた家事を見直してみる必要があるのではないだろうか。

2012年7月14日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉

『路上のソリスト』

担当講師 佐野章二（ビッグイシュー日本代表）、鈴木 紀

参加者 360人

内 容 名門音楽学校でチェロを学びながらも、ある事情から路上での生活を選んだ演奏家と、その奏でる繊細な音色に惹かれるうちに、彼との信頼関係を築いていく記者との交流を綴り、多くの読者の心を掴んだロサンゼルス・タイムズ紙のコラムの映画化。実話をユニークな視点で捉え直した英国の気鋭ジョー・ライト監督の指名を受け、『アイアンマン』『シャーロック・ホームズ』シリーズで、一筋縄ではいかないヒーロー像を打ち出すロバート・ダウニー Jr. が、職業的な正義感や野心に駆られるジャーナリストの、人間としての真の友情に目覚めていく姿に、説得力を与えている。善意からの行為であれ裏目に出る危険を伴う、支援活動のジレンマにも目を向けつつ、相互を尊重し、理解を深め、支え合う姿勢の大切さが、音楽のもつ普遍的な力を通して、ダイレクトに伝わる好篇である。

2012年7月15日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『放浪者』

担当講師 溝上富夫（大阪外国語大学名誉教授）、杉本良男

参加者 250人

内 容 「インド映画の王様」ラージ・カプールがプロデューサー、監督、俳優をつとめた代表作。あらぬ疑いで判事である夫に棄てられた母と、悪に手を染める息子のラージ。青年になった彼に様々な運命が待ちうける。独立を果たしたインドの将来への夢を抱かせる娯楽性と社会性を持った名作。南アジアだけでなくソ連、中国さらにはアフリカ、中東などでも大人気を博し、ムケーシュがうたう挿入歌「流れ者だよ（アワーラ・フーン）」も世界的大ヒットとなった。

2012年 7月16日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『踊り子』

担当講師 田森雅一（国立民族学博物館外来研究員）、杉本良男

参加者 370人

内 容 19世紀半ばインド北部の古都ラクナウ。幼いころに妓楼に売られ、歌や踊りの芸事に優れた売れっ子の踊り子になったウムラオ・ジャンの波乱に満ちた半生を描く。当時の風俗を再現した豪華なセットや衣裳、あでやかで気品のあるレーカーの見事な踊りなど、インド映画の名作として今も愛されている。レーカーは当時売り出しの新進女優として注目され、このころ発売された日本製サリーの宣伝にも一役買っていた。

2012年 7月22日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『音楽ホール』

担当講師 サンディップ・K・タゴール（追手門学院大学名誉教授）、寺田吉孝

参加者 290人

内 容 イギリス植民地下の1920年代ベンガル地方。時代の変化に抵抗し、すべてを失ってまで、最後の栄光と威信をかけて「音楽会」を開催する没落寸前の富裕な地主のすがたを描いたサタジット・レイ監督の代表作。旧地主層から新興商人への富裕層の移り変わりを美しく描いている。また当時のヒンドウスタニー音楽の最高峰の演奏家がじっさいに出演しているので、音楽的にも注目される。

2012年 8月4日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『シャンカラバラナム』

担当講師 寺田吉孝、杉本良男

参加者 203人

内 容 南インド、アーンドラ・プラデーシュ州の農村。娼婦の娘トゥルシは高名な声楽家シャンカラの歌とともに彼を一途に愛し、身を寄せる。しかし、彼女がもつてシャンカラの名声は墜ちていく。南インド映画音楽界を代表するS. P. バーラスプラマニラムらの歌に乗せた古典舞踊クチプディ、それに南インド古典音楽など、音楽と踊りに溢れた70年代テルグ語芸道もの映画の代表作。

2012年 8月5日

日印国交樹立60周年記念 インド・クラシック映画特集

『第一の敬意』

担当講師 杉本良男

参加者 218人

内 容 南インド、タミルナードゥ州の農村。村の実力者として皆に尊敬はされているが、家庭では不幸な身の上のマライチャーミーは、ある日、年も身分も違う娘を愛してしまう。タミル映画界を代表するパラディラージャー監督の代表作であるとともに、名優シヴァージ・ガネーサンの名演が光る80年代タミル映画の名作。当時のタミル農村の生活がリアルに描かれていて、社会文化を知る上でも大いに参考になる。

2012年9月22日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『君を想って海をゆく』

担当講師 植村清加（東京国際大学専任講師）、鈴木 紀

参加者 347人

内容 不法入国者への支援が違法とされるフランス最北端の港町カレを舞台に、イラクからイギリスに移り住んだ恋人を追い、ドーバー海峡を泳いで渡ろうとするクルド難民の少年と、別居中の妻に未練を残し、市民プールの指導員として孤独な日々を送る元メダリストとのふれ合いを、情感豊かに描く佳篇。難民に食糧を配るボランティアに携わる妻への見栄を発端に、水泳の猛稽古に励む少年の一途な愛に次第に感銘し、親身に世話する中年男に湧き起こる葛藤は、誰もが支援に関わり得る可能性を肯定した上で、それに伴い生じる責任の重みをも、痛切に物語る。入念な取材を重ねたフィリップ・レオレ監督は、命懸けでたどり着いたカレでも警察や偏狭な市民の監視の目にさらされ続ける難民の窮状や、法の壁に屈せず彼らのため個々に活動する人たちの強靱な勇気を、心揺さぶるフィクションとして結実させた。

2012年11月10日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『未来を生きる君たちへ』

担当講師 佐保吉一（東海大学教授）、鈴木 紀

参加者 255人

内容 デンマーク語の原題“復讐”が示唆するように、9.11以降の血なまぐさい世の風潮に肅然と警鐘を鳴らす、アカデミー賞最優秀外国語映画賞受賞作。デンマークに家族を残し、理不尽な暴力に支配されたアフリカの紛争地の難民キャンプで、支援活動に従事するスウェーデン人医師は、職務と倫理観との間で日々苦悩しながら、いじめに遭う息子を守る父親の責任すら十分に果たせずにいた。その只中に、母親の死を機にロンドンから越してきた転校生が現れ、一見平穏な社会に巣食う暴力性や、すれ違い続きの親子や夫婦の対峙すべき問題が、露になってゆく。極限下に置かれた男女の心の機微を残酷なほどリアルに描いてきた女性実力派監督スサンネ・ピアが、善悪、愛憎など、二元論では単純に割り切れぬ要素を巧みに交錯させつつ、子どもが抱える闇へも分け入り、より重層的な力篇を完成させた。

2012年12月9日

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる<包摂と自律>

『少年と自転車』

担当講師 岩崎美枝子（家庭養護促進協会理事）、鈴木 紀

参加者 346人

内容 世界的に評価の高いベルギーの兄弟監督ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌが、日本で耳にした実話を発想豊かに映像化し、カンヌ国際映画祭で見事グランプリに輝いた。音信不通の父親と再び暮らせる日を一心に夢見て、児童養護施設で悶々と過ごす少年は、大切な思い出の詰まった自転車を買い戻してくれた女性美容師に、週末だけ里親としての支援を頼み込む。唯一の家族に疎外されて傷つき、悪の道に迷い込む少年の固く閉ざされた心を、決然たる美容師が、ゆるやかに解かしてゆく。社会の片隅で喘ぐ若者たちを見つめてきたダルデンヌ兄弟が、血の繋がりを超え、揺るぎない信頼を育み合う2人をまばゆく照らし、映像作家として新たな境地を予感させる珠玉作を撮り上げた。

2013年1月12日

やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013関連

『パリ20区、僕たちのクラス』

担当講師 庄司博史

参加者 457人

内容 移民の多い地域に佇むパリ20区の中学校の、あるクラスの1年を、ドキュメンタリー以上にリアルに描出し、カンヌ国際映画祭で、フランス本国に21年ぶりに最高賞をもたらした。正しい文法や言葉づ

かいを熱心に教えるも、日々悩みの尽きぬ国語教師と、多様なバックボーンをもち、ああ言えばこう言う手強い生徒たちとのエキサイティングな対話が、現代のフランスが抱える社会問題をも、鋭く浮き彫りにする。台詞とは思えぬ自然さで、心情を対等につけ合う面々を、カメラは構内から一步も出ずに追い続け、言葉の力や教育の本質もが、生き生きと伝わる好篇に仕上がった。

2013年3月23日

やっぱりヨーロッパ——春のみんなばくフォーラム2013関連

『人生、ここにあり!』

担当講師 松嶋 健（京都大学研究員）、宇田川妙子

参加者 375人

内容 世界初となる精神科病院廃絶法が制定されたばかりの、イタリアでの実話を基に映画化し、本国で驚異のロングランを記録した。83年のミラノを舞台に、精神病院が閉鎖されて居場所を失った元患者たちが、労働運動に励む熱血漢の後押しを得て、眠れる才能を開花させ、廃材を利用した“寄木貼り”事業の成功で、生きる喜びに目覚めていく。その反動がもたらす悲劇にも目を向けつつ、“やればできる”という原題に顕著なように、個性豊かな人物たちを温かく見つめる、作り手のポジティブな姿勢が全篇を貫き、大らかなユーモアに包まれる話題作だ。

博学連携

●学習キット「みんなばく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなばく」の貸し出しを実施している。みんなばくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2013年3月現在で12種類22パックを用意している。

名称	個数	2012年度貸し出し回数
極北を生きる	2	15
アンデスの玉手箱	2	26
ジャワ文化をまとう	1	9
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	16
ブータンの学校生活	1	10
ソウルスタイル	4	45
インドのサリーとクルター	2	21
ブリコラージュ	3	2
アラビアンナイトの世界	2	10
アイヌ文化にであう	1	12
アイヌ文化にであう2	1	11
モンゴル	2	36

●みんなばく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2012年4月3日、5日、6日

秋のガイダンス 2012年8月28日、8月30日、31日

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には33団体95名、秋には34団体84名、計67団体179名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、これらに関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2012年11月6日～11月15日

中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2012年度は4校5名の参加があった。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2012」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●展示場クイズ「みんぱQ」

クイズ「みんぱQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。本館展示の新構築に合わせ、2012年8月2日～8月25日に「みんぱQ 探究ひろば編」、2013年1月8日～2月3日に「みんぱQ ヨーロッパ編」を実施した。

●「音楽の祭日2012 in みんぱく」

実施日：2012年7月1日(日)

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は22のグループや個人の演奏があった。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2012年度の実績は以下のとおりである。

受入期間：2012年11月14日～12月6日

受入人数：2名

●カムイノミ

実施日：2012年11月29日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野茂氏（故人、二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 社団法人北海道アイヌ協会）の支部が順にカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、2012年度は胆振地区支部連合会の協力を受けた。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体である。館内で視覚障がい者の展示場案内、休日、祝日等のイベント企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。

「地球おはなし村」は、2003年に本館で開催した特別展「西アフリカおはなし村」を契機とし、2005年10月に発足した団体である。館内でアフリカの音楽活動や昔話の語り活動等をおこなっており、近隣の児童センター、小学校及び児童福祉施設などでも広く活動をおこなっている。

財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館収蔵資料「梅棹忠夫アーカイブズ」の整理及びデータの整備

2012年度実績	デジタル画像化（スキャニング）件数	9,470ファイル
	データの整理と更新件数	9,266ファイル

●国立民族学博物館友の会講演会（協力 国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館第5セミナー室

第406回 「ベトナム北部山地における盆地民と山地民」

2012年4月7日 講師 櫻永真佐夫 参加者数 39名

第407回 「考現学と民族学」【特別展「今和次郎 採集講義」関連】

2012年5月5日 講師 久保正敏 参加者数 42名

第408回 「タイムカプセルとしての民家模型——なぜ縮尺が1/10なのか」【特別展「今和次郎 採集講義」関連】

2012年6月2日 講師 久保正敏 参加者数 40名

第409回 みんなくコレクションを語る「蚊帳に見えない蚊帳のはなし」

2012年7月7日 講師 白川千尋 参加者数 38名

第410回 「ビルマ／ミャンマーの「絆」の力」

2012年8月4日 講師 田村克己 参加者数 36名

第411回 「聖書を生きる人びと——南部アフリカにおけるキリスト教独立教会の現在」

2012年9月1日 講師 吉田憲司 参加者数 32名

第412回 「世界の織機と異形の織物」【特別展「世界の織機と織物」関連】

2012年10月6日 講師 吉本 忍 参加者数 38名

第413回 ビデオテークより「祭礼の変容を映像で見る——インド・グジャラートの女神祭礼」

2012年11月3日 講師 三尾 稔 参加者数 32名

第414回 みんなくコレクションを語る「ネパールの金のはなし」

2012年12月1日 講師 南 真木人 参加者数 33名

第415回 「時間の変わり目——クリスマスからイースターにかけての祝祭から」

2013年1月5日 講師 宇田川妙子 参加者数 50名

第416回 みんなくコレクションを語る「明治～昭和初期の樺太資料の収集者たち」

2013年2月2日 講師 齋藤玲子 参加者数 39名

第417回 フィールドワークを語る「ヨソモノが感じ、考えたこと」

2013年3月2日 講師 小林繁樹 参加者数 35名

◎東京：モンベル渋谷店 5F サロン

第101回 ビデオテークより「ペー族の映像民族誌——制作過程で考えること」

2012年4月15日 講師 横山廣子 参加者数 33名

◎東京：江戸東京博物館 学習室

第102回 「貨幣経済を問う視点」

2012年6月9日 講師 小林繁樹 参加者数 19名

◎東京：アフリカ料理レストラン「カラバッシュ」

第103回 講演会&食事会「アフリカを食べる」

2012年9月22日 講師 竹沢尚一郎 参加者数 41名

◎東京：JICA 横浜 会議室

第104回 「世界のパスポート／パスポートの世界」

2012年12月9日 講師 陳 天璽 参加者数 73名

◎東京：JICA 市ヶ谷ビル セミナールーム600

第105回 「何処にでもある何処にもない世界 マダガスカル」【特別展「マダガスカル」関連】

2013年3月30日 講師 深澤秀夫（東京外国語大学教授）・飯田 卓 参加者数 60名

●みんぱく見学会（協力 国立民族学博物館）

第47回特別展 「今和次郎 採集講義」

2012年5月5日 講師 久保正敏 参加者数 30名

第48回特別展 「今和次郎 採集講義」

2012年6月2日 講師 久保正敏 参加者数 32名

第49回特別展 「世界の織機と織物」

2012年10月6日 講師 吉本 忍 参加者数 27名

●体験セミナー

第65回 「鯨と人のくらしを考える」

2012年7月14日～15日 講師 岸上伸啓ほか 参加者数 14名

●民族学研修の旅

第80回 アドリア海交易のかがやき——バルカンの歴史・民族を考える

2012年5月17日～26日（10日間・アルバニアほか） 講師 新免光比呂 参加者数 18名

第81回 ミャンマー・タバウン月の祭りを訪ねて——仏教と精霊ナツの儀礼

2013年3月19日～28日（10日間・ミャンマー） 講師 田村克己 参加者数 16名

●ワークショップ

親子でたのしむ「春よこい！——東ヨーロッパのお祭り、踊り、おまもり作りで春をよぼう」

【春のみんぱくフォーラム2013 やっぱりヨーロッパ関連】

主 催：財団法人千里文化財団

助 成：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力：国立民族学博物館、一般社団法人関西環境開発センター

会 場：EXPO '70パビリオン、国立民族学博物館 セミナー室

参加者数：

1) みんなで踊ろう！——トランシルヴァニアの踊りと歌（2013年1月27日） 240名

2) ブルガリアのおまもり・マルテニッツァを作ろう！（2013年2月24日） 107名

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

主 催：財団法人千里文化財団

協 賛：パナソニック株式会社

内 容：

2012年7月5日 風呂敷を使ってみよう 吹田市山手地区公民館 18名

2012年7月17日 風呂敷を使ってみよう 向日市立第4向陽小学校2年生 101名

2012年11月19日 めでたい紋様大集合——紋切り体験 京都府乙訓教育局 25名

2012年11月25日 雪の家イグルー キッズプラザ大阪 50名

2013年1月31日 風呂敷を使ってみよう 守口市立三郷幼稚園 30名

2013年2月28日 めでたい紋様大集合——紋切り体験 山城地区公民館連絡協議会 20名

2013年3月2日 風呂敷を使ってみよう

長岡京市立長岡第六小学校3年生

45名

●石川県立歴史博物館 夏季特別展「マンダラ——チベット・ネパールの仏たち」

会 期：2012年7月14日～9月2日（51日間）

会 場：石川県立歴史博物館 特別展示室

主 催：石川県立歴史博物館、国立民族学博物館、財団法人千里文化財団

後 援：北國新聞社、NHK 金沢放送局、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、北陸朝日放送、金沢ケーブルテレビネット、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお

入場者数：8,063人

○関連イベント：講演会「『般若心経』と色即是空」

開 催 日：2012年7月14日

講 師：立川武藏（名誉教授）

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

主 催：国立民族学博物館友の会、石川県立歴史博物館

参加人数：70名

○関連イベント：講演会「日本の曼荼羅文化」

開 催 日：2012年7月28日

講 師：頼富本宏（種智院大学名誉教授）

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

参加者数：73名

○関連イベント：列品解説・フロアトーク

開 催 日：2012年8月4日

講 師：森 雅秀（金沢大学教授）

参加者数：53名

○関連イベント：国際シンポジウム「チベット美術の過去・現在・未来」

開 催 日：2012年8月25日

会 場：石川県立歴史博物館 学習ホール

主 催：金沢大学国際文化資源学研究所

協 力：石川県立歴史博物館

参加者数：76名

●徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ——北方へのまなざし」

会 期：2013年1月26日～3月3日（32日間）

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

主 催：鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会

特別協力：国立民族学博物館、財団法人千里文化財団、宇都宮大学 廣瀬隆人研究室

入場者数：5,465人

○関連イベント：ギャラリートーク①

開 催 日：2013年1月26日

講 師：齋藤玲子

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

○関連イベント：ギャラリートーク②

開 催 日：2013年2月23日

講 師：廣瀬隆人（宇都宮大学教授）

会 場：徳島県立博物館 1階企画展示室

○関連イベント：記念講演

開 催 日：2013年2月17日

講 師：佐々木史郎

会 場：徳島県立博物館 イベントホール

参加者数：63名

●スタンプラリー「万博・民博ものがたり」

会 期：2012年9月13日～11月27日（76日間）

会 場：万博記念公園内各施設（国立民族学博物館、EXPO '70パビリオン、大阪日本民芸館ほか）

広報活動：JR大阪駅、御堂筋Kappo2012

主 催：財団法人千里文化財団

助 成：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力：国立民族学博物館、一般社団法人関西環境開発センター、大阪日本民芸館

参加人数：約32,000人

●『季刊民族学』（「国立民族学博物館友の会」機関誌）

協 力：国立民族学博物館

編集・発行：財団法人千里文化財団

140号：主な記事「海域アジアの要ジャワのテー・ボトル」（2012年5月25日発行）

141号：特集「文化遺産を再見する」（2012年8月25日発行）

142号：主な記事「三陸沿岸に生きる」（2012年10月25日発行）

143号：主な記事「ふたつのお茶——変貌するミャンマーの喫茶事情」（2013年1月25日発行）

●企画展関連書籍『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』

編 集：国立民族学博物館

編集協力・発行：財団法人千里文化財団

●特別展関連書籍『世界の織機と織物』

編集・発行：国立民族学博物館

編集協力：財団法人千里文化財団

●「2013年みんなくオリジナルカレンダー 織〈おり〉」

監 修：国立民族学博物館

発 行：財団法人千里文化財団

6 研究戦略センター

研究戦略センターの設立の趣旨と経緯

研究戦略センター（英語名 Center for Research Development）は、2004年4月に行われた国立大学と大学共同利用機関の法人化に伴う、国立民族学博物館の改組の一環として生まれた組織である。本館が所属する大学共同利用機関法人人間文化研究機構の組織規程には、本センターの設立目的について、「文化人類学及び関連諸学に関する研究動向並びに社会的要請を把握し、研究戦略の策定を行うため、研究戦略センターを置く。」（『人間文化研究機構組織規程』第24条4項）と記されている。また、同機構の中期計画にも、「国内外の研究動向」及び社会的要請を把握し研究戦略を策定するための「研究戦略センター」——後略——とある（人間文化研究機構第1期中期計画I-1-(2)-(カ)（2009年12月24日変更））。すなわち、本センターの主要な任務は、国立民族学博物館の中心的な研究分野である文化人類学、民族学とその関連諸分野の研究動向と社会的な要請を、国内だけでなく国際的にも調査、把握し、その上で、館の研究戦略を策定することにある。2012年度の主な活動は以下のとおりである。各事項の詳細は『研究戦略センター活動報告』に譲る。

2012年度の活動概要

1. 研究戦略の策定

- 1) 2012年度に実施されたりサーチ・アシスタント2名による「包摂と自律の人間学」に関する研究動向調査について成果公開として、2013年1月25日に報告会を実施した。
- 2) 海外の特色のある研究所、あるいは先端的な研究を展開している拠点や機関について、その研究動向を調査した。ドイツに派遣された藤本（機関研究員）は、ドイツにおける中央アジア研究の動向を調査した。シンガポール、マレーシア、オーストラリア、フィジーに派遣された河合（機関研究員）は、それらの国々における華僑・華人研究動向を調査した。フランス、オランダに派遣された加賀谷（機関研究員）は、家族・親族研究の動向を調査した。
- 3) これまで不明確であった機関研究における機関研究員の役割について検討し、より効率的な運営を実現するために、先端人類科学部に所属する機関研究員を現在の1名から2名に増員した。
- 4) 2009年度より開始した「みんぱく若手研究者奨励セミナー」について2012年度は本館の機関研究領域「包摂と自律の人間学」に関連した「包摂と自律の人間学——空間をめぐる」をテーマとして設定し、参加者を公募した。全国から11名の若手研究者が参加し、施設見学と研究発表を合わせて、3日間のセミナーを行った。優秀発表者に対して「みんぱく若手セミナー賞」を授与し、セミナー後はアンケート調査を行った。
- 5) 2007年度より開始した「学術潮流サロン」について、2012年度は「脳から社会を考える」と題して、認知と心の世界をテーマに、脳科学、動物行動学、生命知能システムの分野で前衛として活躍している研究者を講師として招聘し、4回の集中的なセミナーを開催した。

2. 研究プロジェクトの企画・立案・運営

- 1) 2009年度に、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（MINDAS）事務局が設置されるにあたって、研究戦略センターはその設立準備を支援してきた。2010年度より同拠点のプロジェクトが本格始動し、研究戦略センターは、2012年度もひきつづきその運営や研究活動を支援した。
- 2) 前年度にひきつづき、外部資金による研究助成に関する情報をメールにて随時、教員に通知するとともに、ウェブにて情報提供した。
- 3) 科学研究費補助金説明会として、日本学術振興会から講師を招き、科研応募に関する説明会を行うとともに、研究協力課長が講師となって科研費応募の手続きと使用のための説明会を催した。
- 4) 平成22年度に応募して採択された日本学術振興会最先端研究開発戦略的強化費補助金「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」の研究プロジェクト『現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成』を、今年度も研究戦略センターや国際協力係等が支援し、事業を継続した。

3. 研究プロジェクト・研究体制の評価について

- 1) 2011年度人間文化研究機構業務実績報告書の民博分担部分の作成を支援し、あわせて資料編を作成した。
- 2) 2006年度から行っているウェブサイトでのプロジェクトごとの研究活動の実績紹介を、引き続き行った。研究成果公開プログラムによる館の国際的なシンポジウムや研究フォーラム、ワークショップなどの活動実績についても明示し、『研究戦略センター活動報告2011』にも報告した。

4. 他の研究機関との連携、協力

- 1) 2011年度に締結された学術協定に基づき、日本文化人類学会と本館との連携として、5つの国際シンポジウム

- を、主催 国立民族学博物館、後援 日本文化人類学会で実施した。
- 2) 2006年よりメンバーとなっていた地域研究コンソーシアムに関して、2008年度からは幹事組織として研究戦略センター長を理事として、センター教員2名を運営委員として派遣している。この体制を本年度も継続した。
 - 3) 本館の機関研究と JICA 大阪・阪大 GLOCOL とが行ってきた「研究者と実務者による国際協力勉強会」が2010年7月に終了したことにもなると、3機関の担当者が検討して、「研究者と実務者による国際協力セミナーに関する覚書」をかわした。この覚書に基づき、2012年度は6月、9月、10月に JICA 関西において「グローバルな支援とは何か」をテーマとしてセミナーを開催した。
 - 4) 2012年5月26日～5月27日に本館において日本アフリカ学会「第49回学術大会」を日本アフリカ学会と共催した。
 - 5) 2012年11月17日に東京国際フォーラムにおいて開催された大学共同利用機関シンポジウム2012に、本館は研究戦略センターの教員3名を派遣し、展示ブースを開設し、機関研究を中心に本館の研究と活動を紹介した。
 - 6) 日本国際理解教育学会と学術交流協定を締結した。
 - 7) 国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所（フランス）と学術交流協定を締結した。
 - 8) アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）と学術交流協定を締結した。
 - 9) 中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）と学術交流協定を締結した。
 - 10) フィリピン国立博物館（フィリピン）と学術交流協定を締結した。
5. 研究活動の情報収集と公開
- 1) 教員の個人業績の集積を引き続き行った。
 - 2) 共同研究や機関研究の研究成果の集積を行い、評価のための基礎資料とした。
 - 3) 『研究年報2011』を発行した。
 - 4) 『研究戦略センター活動報告2011』を発行した。
 - 5) 公開講演会を東京（2012年10月26日）と大阪（2012年3月22日）で開催した。
 - 6) 2008年度に学術情報リポジトリ委員会が発足し、2009年度から公開しているリポジトリの、コンテンツの登録と許諾取得の作業を順次進め、2013年2月末で3,849件について終了した。

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2012年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- ・多田敏捷氏が昭和50年代から収集した、大阪府指定民俗文化財である玩具コレクション（約6万点）を大阪府から受け入れ、データベースの整理作業の準備を進めた。
- ・当館で運用している標本資料情報管理システム（I. B. Museum）について、検索結果におけるシステム外部の画像の表示方法及び検索条件入力画面におけるデフォルトの検索条件の設定方法に関する機能修正・追加を行い、標本資料情報管理の根幹となる本システムの使用方法を改善した。
- ・視覚障がい者のために作られている触地図をタッチセンサー付きディスプレイで五感化することで多様な人が情報を得やすい館内案内を開発することを目的に、プロトタイプとして一次試作を開発し、その試作のディスプレイに表示される情報を変更したプログラムを作成し二次試作とした。一次試作について5人の視覚障がい者に被験者として使用してもらい評価を得た。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2012年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チーム及び各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。

2012年度新構築分（日本の文化「祭りと芸能」「日々の暮らし」展示）について、実施設計に続いて展示施工を行い、完成させた。また、2013年度新構築分（日本の文化「沖縄」「多民族社会」展示、朝鮮半島の文化展示及び中国地域の文化展示）の基本設計を完成させた。さらに、2014年度及び2015年度新構築分の設計者を選定した。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

- ・「朝鮮半島の文化」展示の新構築に向けて、朝鮮半島の近代化が進んだ植民地期の文化に関する標本資料を収集した。
- ・「朝鮮半島の文化」展示の新構築に向けて、韓国とカナダとアメリカ合衆国にて、現代韓国社会をめぐるトランスナショナルリズムに関する標本資料を収集した。韓国にて、移民指南書123冊と国家試験対策書籍22冊、現代のトランスナショナルな状況を物語る生活財29点を購入した。カナダでは、同様の生活財5点を購入した。米国では、同様の生活財2点の寄贈を受けた。
- ・「中国地域の文化」展示の新構築に向けて、漢族の祖先祭祀、居住様式の映像取材及び祖先位牌、文房四宝、茶器の資料収集を、福建省廈門、泉州、石獅、晉江、永定で行った。さらに、上海、瀋陽と北京で婚礼用品、山水画、景德鎮の磁器などを収集した。
- ・ロシア、モンゴル、中国にまたがって居住する、トゥルク系言語をはなすトゥバ人について、みずからトゥバ人である研究者を聞き手として、映像取材をおこなった。
- ・2015年度実施予定の「アイヌの文化」展示の新構築に向けて、展示替え用の魚皮製衣服1着を完成させた。また、2011年度に撮影した映像の編集と研究用・研修用番組の作成を行った。
- ・2011年度実施の「徳之島の民俗芸能の映像取材」で撮影した「夏目踊」を伝える徳之島町井之川集落の景観・史跡などの現況と、同集落在住の郷土研究家・町田進氏の語りを取材した映像をもとに、井之川集落の映像による地域誌として番組を作成した。
- ・滋賀県長浜市において曳山祭の映像取材を実施し、それをもとに、「日本の文化」展示場内で観覧に供する映像番組を作成した。
- ・「日本の文化」展示新構築で使用する芸能・祭関係資料の収集・製作、及び、2011年度に収集したつくりものの展示場での組立・設置を行った。
- ・日本の文化「多民族社会」展示の新構築に向けて、近畿、関東を中心とする在日華僑、コリアン、ブラジル人の日常用品、宗教儀礼関連、教育、衣類、生業関連等の標本資料を収集した。
- ・「中国地域の文化」展示の新構築に向けて、歴史的に華僑華人を多数送りだしてきた僑郷と呼ばれる地域（主に南部沿海）を中心に標本資料の収集を行った。
- ・2007年度にフィリピン・ミンダナオ島で収集した映像音響資料をもとに、マラナオ文化を紹介する長編番組（英語版およびマラナオ語版）を、マラナオ人民族音楽学者であるウソパイ・カダー氏と共同で製作した。
- ・クリントン（南フィリピンを代表するゴング音楽）の名手マイモナ・カダー氏の演奏の映像記録を整理・編集し、研究・学習用の番組を制作した。幅広い利用を促進するため、日本語、英語、マラナオ語の番組を製作した。
- ・2008年度に製作したビデオテーク番組『バレンシアの聖母マリア誕生祭と管楽器ドゥルサイナ』の英語版、スペイン語版を、アメリカ合衆国の民族音楽学者であるロベルト・ガルフィアス教授（民博外国人研究員）と共同で製作した。
- ・台湾原住民族の現代の工芸作家ならびに工房において製作している工芸品の収集を行い、現代における先住民工芸の様相を調査、研究するための基礎資料として民博に収蔵した。本資料は「中国地域の文化」展示の新構築において活用する。
- ・2011年度の映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果に基づき、取材資料を長・短編の作品として編集製作した。
- ・中国雲南省大理市のペー族農村で取材した映像素材から、マルチメディア番組「中国雲南省ペー族の暮らしと文化」を完成させるためのコンテンツ、さらに内容を厳選した20分程度の短編番組4本を編集・製作した。
- ・1992年のモザンビーク内戦終結後、民間に大量に残された銃器を農具と交換することで回収し、その回収された銃器を用いてアートの作品を生み出すというプロジェクトが進められている。このプロジェクトによる作品4件と関連資料を収集した。

- ・サモアにおいても製作技術の継承者が数少なく、希少となっている「サモアのファインマット」の製作を依頼し、購入した。これにより、本館におけるオセアニアの物質文化と先住民運動に関する資料の充実化を図った。

2) 資料管理分野

- ・保存科学的見地からの資料管理活動、総合的有害生物管理（IPM）の考えに基づいた生物被害防除・殺虫対策に関わる研究開発、これらを企画・調整し、統括した。各種の博物館環境調査を実施し、得られた結果を総合的に分析し、検証することで、文化資源の体系的な管理につとめた。収蔵庫の収納状態調査と、資料の保管・収納改善を、計画的に進めた。
- ・国立民族学博物館、岩手県陸前高田市旧生小小学校、新潟県村上市奥三面歴史交流館重要有形民俗文化財奥三面の山村用具収蔵庫の環境調査を実施し、被災した民俗資料の仮収蔵として廃校を利用した場合の保管環境の創出方法について明らかにし、廃校利用の際に必要な改修プランを策定した。

3) 情報化分野

- ・ズニ博物館館長が2009年7月に来館し、31点のズニ資料の熟覧調査を実施した。本プロジェクトでは、ズニ博物館長が記録に残した資料情報をデータベースに書き加え、さらに日本語で記されているその他の管理情報を英訳する作業を行った。
- ・民博に収蔵されている身装（身体と装い）関係資料のうち、成形されていない布地標本（例：サリー、腰布）の素材、文様デザイン、染織技法等を中心に、フィールドで得られた写真と連動しながら、地域（民族の居住地域等の区分に基づく8地域）毎にデータベース化を行った。さらには、民博標本資料データベースと、身装文献データベースとのリンクを実現させた。
- ・2010年度に「オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真データベース」として館員公開したデータベース（8,019件）にキャプション情報を追加し充実を図った。
- ・民族建築デジタルアーカイブは、世界の民族建築（地域社会で完成されたいわゆる伝統的な住宅様式のこと）を記録し、その情報を三次元CGを利用して図像化、インターネット上に公開してゆこうというプロジェクトであり、ユニークな木造建築の宝庫であるオーストロネシア語族（インドネシア、ベトナム）を中心に三次元CG化をおこなった。2009年度、2011年度、2012年度の3年間で、あわせて30民族49棟（一部未完成）の建物の三次元CGを作製し、これらのデータを公開するためのデータベース化をおこなった。
- ・京都大学を拠点として組織された学術調査隊による記録写真のうち、京都大学アフリカ類人猿学術調査隊、京都大学アフリカ学術調査隊、の写真資料11,663点について、各撮影者または、著作権継承者のとの間で著作権全面譲渡の覚書の締結処理を進めたうえ、民博のデータベース検索システムにより館内公開した。更に、京都大学探検部トンガ王国学術探検隊資料の7,644点について、テキスト情報を付加した。

4) 展示分野

- ・特別展「今和次郎 採集講義——考現学の今」

協賛	財団法人千里文化財団
主催	国立民族学博物館
協力	青森県立美術館、パナソニック汐留ミュージアム、株式会社青森スタジオ、株式会社商華堂、日本万国博覧会記念機構
後援	社団法人日本建築学会、社団法人日本建築家協会、社団法人全日本建築士会、日本生活学会、日本民俗建築学会
特別協力	工学院大学図書館
実行委員	館内 久保正敏（実行委員長）、朝倉敏夫、飯田 卓、小林繁樹、近藤雅樹、佐藤浩司 館外 岡本信也（野外活動研究会）、岡本靖子（野外活動研究会）、荻原正三（工学院大学名誉教授）、黒石いずみ（青山学院大学）、小山茂樹（ブックポケット代表）、高橋晴子（大阪樟蔭女子大学）、横川公子（武庫川女子大学）
開催期間	2012年4月26日～6月19日
入場者	26,893人

- ・特別展「世界の織機と織物 ——織って！みて！織りのカラクリ大発見」

主催	国立民族学博物館
協力	北海道大学植物園・博物館、北海道開拓記念館、ところ埋蔵文化財センター・どきどき、新潟県津南町歴史民俗資料館、群馬県沼田市教育委員会、織物参考館・紫、長野県大鹿村教育委員会、東京国立博物館、高田装束研究所、野外民族博物館リトルワールド、株式会社豊田自動織機、トヨタ自動車株式会社、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、株式会社西山産業、石川県立

白山ろく民俗資料館、大阪日本民芸館、香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館、株式会社美織、うるま市立石川歴史民俗資料館、沖縄県多良間村教育委員会、南風原町立南風原文化センター、株式会社今昔西村、新井淳一、石井香久子、上原美智子、沖山 道、日下部啓子、関駒三郎、鳥丸知子、財団法人千里文化財団

実行委員 館内 吉本 忍（実行委員長）、上羽陽子
館外 井関和代（大阪芸術大学）、内海涼子（大阪成蹊大学）、大野木啓人（京都造形芸術大学）、金谷美和（国立民族学博物館外来研究員）、ひろいのぶこ（京都市立芸術大学）、藤井健三（西陣織物館）、柳 悦州（沖縄県立芸術大学）

開催期間 2012年9月13日～11月27日

入場者 25,654人

・特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」

主催 国立民族学博物館

協賛 住友商事株式会社

特別協力 大英博物館

アンタナナリヴ大学芸術考古学博物館

協力 マダガスカル航空日本事務所、日本万国博覧会記念機構、財団法人千里文化財団

後援 アジア太平洋無形文化遺産研究センター、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、大阪府、吹田市、吹田市教育委員会、日本アフリカ学会

実行委員 館内 飯田 卓（実行委員長）、上羽陽子、大貫美佐子

館外 朝岡知子（朝岡工房代表）、佐藤優香（国立歴史民俗博物館）

開催期間 2013年3月14日～6月11日

入場者 34,762人

・2013年秋特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」の展示準備

実行委員 館内 近藤雅樹（実行委員長）、飯田 卓、太田心平、齋藤玲子、野林厚志

館外 井上 潤（渋沢史料館長）、内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、齊藤 純（天理大学）、佐藤美弥（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、佐野賢治（神奈川大学）、大明 敦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、武田晴人（東京大学）、宮本瑞夫（宮本記念財団理事長）

開催期間 2013年9月19日～12月3日

特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」の実行委員会を組織し、展示構成について議論し、展示と図録編集の準備を進めた。

・企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」

プロジェクトメンバー 館内 日高真吾（リーダー）、吉田憲司、林 勲男

館外 橋本裕之（盛岡大学）

開催期間 2012年9月27日～11月27日

・企画展（国際連携展示）「台湾平埔族の社会と文化」（仮題）の展示準備として、国立台湾歴史博物館の担当者とのメールならびに面談を通して検討を重ね、展示資料についての選定、展示基本設計を完了した。本展示会の共催を正式に決定した。

・その他

・2012年度は、2008年度から開始された本館展示新構築の第5年次にあたり、本年度は、日本の文化「祭りと芸能」「日々のくらし」展示を新たに構築し、2013年3月に一般公開した。

・中央・北アジア展示新構築に向けて、2012年11月22日に文化資源共同研究員を招集して打ち合わせを行った。昨年度決めた基本方針を確認するとともに、展示場を見ながら、展示の基本構造を話し合い、それに基づいて必要な資料の種類を割り出し、来年度の資料購入計画を策定した。

・ホームページから公開しているビデオテークデータベースのうち、「メニューで選ぶ」方のユーザインタフェースを、展示場に設置しているビデオテーク端末のものと同様の画面構成を持ち、ほぼ同様の振る舞いを行うものに更新した。

・多機能端末室に導入すべき新型ビデオテークの機能およびコンテンツについて検討するため、専門家の意見を聞くと共に、新しいコンテンツの試みとして、特別展や企画展等の記録映像のマルチメディアコンテンツ化を進め、公開に向けて問題点の整理を行った。

・ビデオテークを対象にし、次世代の検索方法の充実を図り、ユーザ（来館者だけでなく研究者）のニーズに即

した形で、映像検索の方法の課題を検討した上で、検索システムの方向性を提案し、プロトタイプの開発を行った。

- ・他機関での携帯端末の活用事例の調査や、既存のコンテンツを用いたプロトタイプの開発実験等を通して、次世代のみんぱく電子ガイドに求められる要件について検討した。
- ・2010年度および2011年度に行われた、アメリカ展示及びヨーロッパ展示の新構築に対応するため、みんぱく電子ガイドのコンテンツ（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）を製作した。2012年10月に日本語版を、2013年3月にその他の言語のバージョンを公開した。コンテンツ数は、アメリカが27本、ヨーロッパが12本となる。

5) 社会連携分野

- ・2002年度に制作した「みんぱく」の「ソウルスタイル」を基礎として、その10年後の改訂版「ソウルスタイル」を2バック製作した。また、新しいテーマによる韓国のバック「ソウルのこども時間」も2バック製作した。
- ・2012年8月7日に、博学連携教員研修ワークショップ2012 in みんぱく「学校と博物館でつくる国際理解教育——新しい学びをデザインする」を開催した。参加者は主に小・中・高等学校、支援学校等の教育機関教諭、大学生、大学院生など計83人であった。
- ・2012年11月29日に、社団法人北海道アイヌ協会胆振地区支部連合会の協力を受けて、カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞を公開により実施した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

- ・3年計画の3年次として、本館「朝鮮半島の文化」に関する映像資料収集の新たなシステムを構築するため、韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき協議を行い、延世大学、西江大学、漢陽大学で映像人類学を専攻する学生に研修を受けさせて作品を制作した。
- ・オーストラリア・アボリジニ研究の日本における先導的な役割を果たした小山修三名誉教授が、1980年から20年間に渡りアボリジニ社会の大きな変化を撮影してきたフィールド写真（8048コマ）の寄贈を受け入れた。
- ・2011年度に開発した支援ツールを用いて、継続して標本資料データベースのクリーニングと公開作業を軌道に乗せるとともに、補助的なツールを開発した。また、標本資料受入から、情報化、データベース公開に至るプロセス全体を見渡し課題を明らかにした。
- ・2012年3月に民博で実施した研究公演『ホピの踊りと音楽』のために民博で制作し使用した米国先住民ホピの儀礼用衣装の一部について、制作者全員から利用許諾を取得し、標本資料として寄贈を受け入れた。
- ・オマーン・イエメンの銀製の装身具、装飾品など162点の寄贈を受入れた。
- ・スタンフォード大学名誉教授別府春海氏から、同氏が現地で購入したアラスカ先住民アルーティックの仮面の寄贈の申し出があり、寄贈を受け入れた。
- ・植村直己資料のうち、1973年グリーンランド横断時に植村氏が使用した、キャンプ用品、テント、カメラなど100点を標本資料として追加登録した。
- ・マオリの芸能・カパハカに関する資料7点の寄贈を受け入れた。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「町の暮らし」において展示するために、「大黒様像、大黒様型貯金箱」の寄贈を受け入れた。なお、本資料は寄贈者のお宅が商売をされていた時期に店先に置かれていたものである。
- ・「日本の文化」展示の新構築の協力者である川島秀一氏を通して、川島氏ご自身がフィールド調査をおこなっている地域の漁師より「大漁旗」の寄贈を受け入れ、「日本の文化」展示の新構築のなかの「日々の暮らし」セクション「海の暮らし」にて展示した。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「山の暮らし」において展示するために、「焼畑関連資料」の寄贈を受け入れた。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「里の暮らし」において展示するために、「奥谷家所蔵の稲作資料」の寄贈を受け入れた。なお、本資料は寄贈者の奥谷氏が主に1980年代に使用していた稲作農具である。
- ・「日本の文化」展示の新構築のなかで、「日々の暮らし」セクション「里の暮らし」において展示するために、「生駒市所蔵の稲作資料」が寄託され、受け入れた。なお、本資料は生駒市教育委員会が長年収集してきた生駒の稲作農具である。

- ・「時代玩具コレクション」は大阪府立大型児童館ビッグバンが所蔵していたもので、大阪府指定民俗文化財である。玩具コレクターとして著名の多田利捷氏が収集されたものであり、江戸時代から平成にかけての玩具コレクションである。大阪府立大型児童館ビッグバンが運営方針を変更するに伴って、コレクションの散逸を防ぐために当館で寄贈を受け入れた。
 - ・東南アジアの音楽芸能についての理解を深めるための資料として、ミャンマーの楽器サウン・ガウック1台および人形芝居ヨウテ・プエーに用いられる人形4体の寄贈を受け入れた。
 - ・京都大学学術調査隊関連写真資料の追加分として、写真資料計4,447コマの寄贈を受け入れた。これにより、同学術調査隊の残した写真資料を十全な形で本館に所蔵することができるようになった。
- 2) 展示・社会連携分野
- ・本館所蔵のアフリカンビーズを神奈川県立近代美術館・葉山に貸し出して共催展示を開催した。
 - ・民博で行われている各種研究活動ならびに展示の内容を、来館者を中心とした一般利用者に、より効果的、効率的に理解してもらうと同時に、一般利用者からの様々な意見や情報を民博内にフィードバックさせることを目的としたワークショップならびにワークシートの開発を実施した。
 - ・国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）および地球おはなし村の活動支援を行った。
 - ・2010年度に新構築したオセアニア展示場において、オープニング後に実施したアンケート調査を踏まえ検討・精査したうえで展示内容を充実させた。
 - ・2010年度に新構築したアメリカ展示場において、オープニング後に実施したアンケート調査及び外部研究者からの学術的見地を踏まえ検討・精査したうえで掲示の充実及び安全性の向上を図った。
 - ・韓国国立民俗博物館で2012年度に開催された「アラン展」の世界巡回展示の一環として本館において2013年5月から企画展（国際連携展示）を開催するための準備作業を行った。
 - ・2003年に本館にて開催した特別展「マンダラ チベット・ネパールの仏たち」を石川県立歴史博物館にて巡回展として開催した。
- 3) その他
- ・2013年の干支である「へび」に関する資料を民博の所蔵資料の中から選び、本館展示場内「ナビひろば」に展示し、へびにまつわる文化の紹介・解説を行った。合わせて、展示活動研修会の研修生が撮影した写真パネルを「探究ひろば」横の休憩所に展示した。
4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務
- 「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。
- ・みんぱくの貸出先での紛失や破損、および老朽化した資料の交換・補修を行った。
 - ・第3収蔵庫1層・2層の寄託資料約800点の配架見直し及び再配架作業を行った。
 - ・ヨーロッパ展示の撤去資料260点の点検・クリーニング・再配架作業を行った。
 - ・資料点検の際に破損・汚損などの異常が確認された標本資料に補修・保存処理を施した。また、「日本の文化」展示資料9点の補修を行った。
 - ・主に未撮影の標本資料3,740点の写真撮影及び測定を行った。
 - ・民博製作の研究用映像資料から6点を選定し、みんぱく映像民族誌第6集～第9集として4枚のDVDにまとめ、解説シートやジャケットを作成した。これを800セット分複製し、627か所の図書館や研究機関等に寄贈した。
 - ・日本コロムビアから寄贈された金属原盤（約7,600枚）の現物そのものには資料番号が記入されておらず、さらに、その中の約800枚は重複分として扱われ、資料番号も振られていない。この業務ではこれらを適切に管理するため、現物と、研究者による調査結果を記録したデータベースとを照合すると共に、現物に資料番号札を挿入し、番号を記入するための準備を行った。
 - ・2010年度末に行ったフォトCDの媒体変換の残り、48,307コマについて、写真データを、汎用性があり長期保存が可能と考えられる画像ファイルの形式に変換した。
 - ・2010年度に寄贈受入れや購入したSP・LPレコードに、汚れがひどかったりカビが発生したりしているものがあつたため、これをクリーニングするとともに、保存性を考慮した収納包材に収めた。処理した枚数は、LPが174枚、SPが21枚である。

8 国際学術交流室

設置目的

国際学術交流室は、組織的な国際交流を円滑に進めることを目的にして、2010年4月に設立された。本館は、創設以来グローバルな視野をもち、積極的に海外の研究機関や研究者と連携、協力しながら研究活動と博物館活動を行ってきた。国際学術交流という点では大学共同利用機関の中でも先駆的な役割を果たしてきたといえるであろう。

20世紀末に始まった情報通信技術革命は、国際的な情報交換のスピードと量を飛躍的に増大させた。その結果、本館の国際的な活動はもはや個人の努力や関係では処理しきれない状態となり、組織的、戦略的な国際交流が求められている。国際学術交流室は、これまで蓄積されてきた海外の研究機関、研究者との関係を活かしつつ、本館がより戦略的、より組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進するために、以下のような活動を行っている。

機能

国際的な学術交流の戦略策定

- ・学術交流のガイドライン策定
- ・国際共同研究の仕組みについての検討
- ・海外の出版社を使った外国語出版についての検討
- ・教員の国際公募の可能性についての検討

学術協定の締結及び協定に基づく研究交流事業の推進

- ・学術協定の締結の準備支援
- ・協定に基づく研究交流事業の支援
- ・協定に基づく事業の年度計画書、年度報告書の受付と検討
- ・国際シンポジウム・国際共同研究・国際連携展示などの支援
- ・海外からの協定締結の申し出、問い合わせに対する対応

外国人研究者に対する支援

- ・外国人客員教員、機関研究の外国人共同研究員、海外からの外来研究員などの受け入れの支援
- ・外国人研究者向けみんぱく利用マニュアルの作成、改訂
- ・館員に通知される各種連絡、お知らせなどの翻訳

その他国際学術交流に関すること

- ・広報関連の国際交流事業の監修
英文要覧、HPの英語版、*MINPAKU Anthropology Newsletter*の監修
- ・みんぱくフェローズの名簿の監修

国際学術交流事業の評価資料のとりまとめ

- ・国際学術交流事業の業務実績報告書、自己点検報告書等の資料とりまとめ

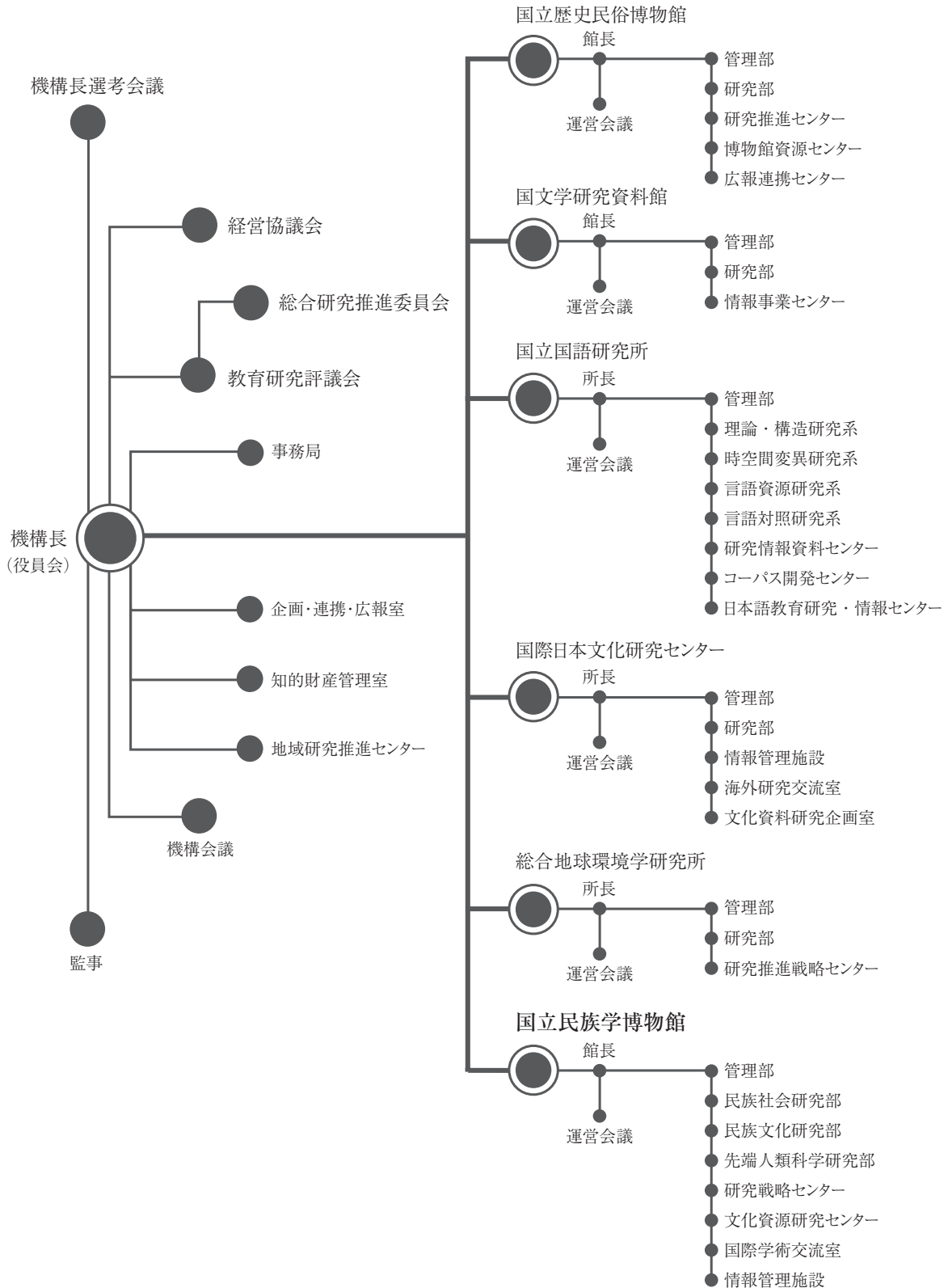
2012年度活動内容

- 1) 研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との協定について、調査・準備を進めている。2012年度は、6月に米国・アシウィ・アワン博物館・遺産センター、7月にフィリピン・国立博物館、8月に中国・社会科学院民族学・人類学研究所、11月にフランス・国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との間に協定を締結した。
- 2) 2012年度に国際学術交流室を通して行った翻訳校閲件数は下記の通り。
翻訳 20件
校閲 70件
- 3) 外国人研究員・外国からの外来研究員のための *Guide for Visitors* を改訂・発行した。
- 4) 英文ホームページの英語表記を検討・決定した
- 5) 本館組織の英語名称の作成・変更の検討を行った。

9 人間文化研究機構

人間文化研究機構は、本館を含む6つの大学共同利用機関を設置し、各機関において人間の文化活動並びに人間と社会及び自然との関係に関する基盤的研究を進めるとともに、各機関の連携協力を通して、人間文化に関する総合的で多様な研究を展開させ、学術文化の進展に寄与することを旨とする。

組織構成図 (2013年3月31日現在)



運営組織 (2013年3月31日現在)

●役員

機構長	金田章裕
理事	中尾正義
理事	小野正敏
理事	栗城繁夫
理事	石上英一
監事	広瀬清吾
監事	駒形圭信

●経営協議会

金田章裕	人間文化研究機構長
中尾正義	人間文化研究機構理事
小野正敏	人間文化研究機構理事
栗城繁夫	人間文化研究機構理事兼事務局長
石上英一	人間文化研究機構理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
立本成文	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
稲盛豊美	稲盛財団専務理事
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原謙一郎	大原美術館理事長
栄原永遠男	大阪市立大学特任教授
佐村知子	内閣府男女共同参画局長
高村直助	横浜市ふるさと歴史財団理事長
永井多恵子	ジャーナリスト
菊池哲郎	国際医療福祉大学教授
藤井宏昭	国際交流基金顧問
古澤 巖	鳥取環境大学長
宮崎恒二	東京外国語大学理事

●教育研究評議会

金田章裕	人間文化研究機構長
中尾正義	人間文化研究機構理事
小野正敏	人間文化研究機構理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山太郎	国立国語研究所長
小松和彦	国際日本文化研究センター所長
立本成文	総合地球環境学研究所長
須藤健一	国立民族学博物館長
青山宏夫	国立歴史民俗博物館副館長
谷川恵一	国文学研究資料館副館長
木部暢子	国立国語研究所副所長
宇野隆夫	国際日本文化研究センター副所長
佐藤洋一郎	総合地球環境学研究所副所長
西尾哲夫	国立民族学博物館副館長
青柳正規	国立西洋美術館長
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
カイザー シュテファン	國學院大學文学部教授
窪田幸子	神戸大学大学院教授
酒井啓子	千葉大学法経学部教授
佐藤宗諱	奈良女子大学名誉教授
野家啓一	東北大学大学院教授
森 正人	熊本大学大学院教授

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度の研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、地域文化学専攻の塚田誠之がその任にあたり、地域文化学専攻長は久保正敏、比較文化学専攻長は鈴木七美が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2012年度は、総研大も国立大学法人化9年目を迎えた。

文化科学研究科においてはかねてより連携強化が図られてきたが、2005年度から2006年度にかけて文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して実施された「総合日本文化研究実践教育プログラム」を引き継いで、以降は「文化科学研究科連携事業」が実施され、民博に基盤をおく2専攻もこれに参加した。今年度のこの教育プログラムにおいては、リサーチ・トレーニング事業に7名の学生が参加して、それぞれ学会発表や現地調査等を行った。

第54回教授会（2012年9月21日）において地域文化学専攻および比較文化学専攻から2名の課程博士と比較文化学専攻から1名の論文博士、第55回教授会（2013年2月22日）において地域文化学専攻から1名の論文博士の学位授与が承認された。

●教員の異動

2012年4月1日付で、樫永真佐夫准教授、信田敏宏准教授および山中由里子准教授が地域文化学専攻担当教員に、飯田 卓准教授、陳 天璽准教授、日高真吾准教授および廣瀬浩二郎准教授が比較文化学専攻担当教員になった。

白川千尋准教授および陳 天璽准教授は民博の退職に伴って総研大の併任解除となった。

●学位の授与

地域文化学・比較文化学両専攻においては2012年度に、課程博士2名、論文博士2名が誕生した。以下に、学位取得者（所属専攻）『論文題目』[学位の種類] [審査委員]（最初に記された委員が主査、所属の記されていない者は、地域文化学専攻あるいは比較文化学専攻の所属）[予備審査委員]の順に記す。

【課程博士】

宮脇千絵（地域）『変化しつづける装い——中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究』[文学]

[審査委員] 野林厚志、塚田誠之、横山廣子、中谷文美（岡山大学教授）、杉本星子（京都文教大学教授）

[予備審査委員] 横山廣子、小長谷有紀、塚田誠之

八木百合子（比較）『現代アンデス農村における聖人信仰の変容——人の移動に焦点をあてて』[文学]

[審査委員] 杉本良男、關 雄二、齋藤 晃、木村秀雄（東京大学教授）、加藤隆浩（南山大学教授）

[予備審査委員] 杉本良男、齋藤 晃、新免光比呂

【論文博士】

山本 陸（比較）『先史アンデス形成期の社会動態——ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から』[文学]

[審査委員] 印東道子、關 雄二、野林厚志、井口欣也（埼玉大学教授）、大平秀一（東海大学教授）

[予備審査委員] 印東道子、竹沢尚一郎、野林厚志

川村千鶴子（地域）『多文化都市・新宿の生成と展開——ライフサイクルの視座』[学術]

[審査委員] 庄司博史、南 真木人、陳 天璽、町村敬志（一橋大学教授）、竹沢泰子（京都大学教授）、中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授）

[予備審査委員] 中牧弘允、寺田吉孝、南 真木人

なお、これまでに学位論文を単行本として、『研究年報2011』掲載以降に刊行したものは、以下のとおりである。

マリア・ヨトヴァ（2011年〔平成23年〕9月課程博士）

2012 『ヨーグルトとブルガリア——生成された言説とその展開』 東方出版

友永雄吾（2011年〔平成23年〕3月課程博士）

2013 『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』 明石書店

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2013年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った115名の修了生および退学生のうち、合計53名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学13名、公立大学5名、私立大学28名、海外等その他の機関6名、民博1名である。

●入学者選抜試験

2013年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻2名、比較文化学専攻6名、計8名の志願者があり、地域文化学専攻2名、比較文化学専攻2名、計4名の合格者を第55回教授会において決定し、4名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻3名）に対する出願者の倍率は累計平均よりやや低めの1.8倍であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

【地域文化学専攻】

劉 征宇

「中国の食文化の歴史人類学的研究——制度と礼俗を中心として」（朝倉敏夫、韓 敏）

喬旦加布

「中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究——同仁県ワッコル村の事例から」（横山廣子、信田敏宏）

【比較文化学専攻】

田村卓也

「ケニア沿岸州ワシニ島における資源獲得と利用のための知恵——海との関わりを通して」（飯田 卓、池谷和信）

邱 君妮

「日本と台湾における歴史的空間・建築物の保存・活用に関する博物館学的研究」（吉田憲司、野林厚志）

2013年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学院の内訳は、国立2名、海外2名で出身大学院の地方別では、北海道、九州地方となっている。

2013年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれに12名と14名、あわせて26名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて20名がいる。これは、教育研究の柱としてある長期のフィールドワークにそれぞれの学生が出かけているためである。

2000年度から年1回、13回目の実施となる「オープンキャンパス」（大学院説明会）は、10月14日にセミナー室や大学院院生室等で開催され、総研大および民博の概要説明、施設見学、現役院生・修了生・教員との懇談等が行われた。本年度の参加者は9名で、内訳としては近畿、関東その他地域の大学院生など出身は多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2012年度は地域文化学専攻の金セツピョルが日本学術振興会の特別研究員（DC2）に採用された。また、2012年に申請した2013年度特別研究員採用者として地域文化学専攻の東城義則、比較文化学専攻の吉村健司の計2名が内定を獲得した。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数（2013年3月現在）

専攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	26(基盤機関の長である国立民族学博物館館長を含む)
比較文化学専攻	1	23

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2013年3月現在）

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	2	1	9	12
比較文化学専攻	3	1	2	11	14
計	6	3	3	20	26

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991年度(平成3年度)			1		1
1992年度(平成4年度)					0
1993年度(平成5年度)			1	1	2
1994年度(平成6年度)	2		1		3
1995年度(平成7年度)	2		1		3
1996年度(平成8年度)		3			3
1997年度(平成9年度)	3		4		7
1998年度(平成10年度)	4	2			6
1999年度(平成11年度)					0
2000年度(平成12年度)	2		2	1	5
2001年度(平成13年度)	1	1	2	1	5
2002年度(平成14年度)	1	1		2	4
2003年度(平成15年度)					0
2004年度(平成16年度)	2	3			5
2005年度(平成17年度)	4	2		2	8
2006年度(平成18年度)	2		3		5
2007年度(平成19年度)	2	1	3		6
2008年度(平成20年度)	1		1		2
2009年度(平成21年度)		1	1	1	3
2010年度(平成22年度)	2		2	3	7
2011年度(平成23年度)	3		1	1	5
2012年度(平成24年度)	1	1	1	1	4
計	32	15	24	13	84

●研究部の人事異動

・2012年4月1日

民族文化研究部教授	中牧弘允	2012年3月31日	定年
民族文化研究部准教授	川口幸也	2012年3月31日	退職
民族文化研究部教授	佐々木史郎	2012年3月31日	副館長(研究・国際交流担当)併任終了
民族文化研究部教授	佐々木史郎	2012年3月31日	国際学術交流室長併任終了
民族社会研究部教授	小長谷有紀	2012年3月31日	民族社会研究部長併任解除
先端人類科学研究部教授	岸上伸啓	2012年3月31日	先端人類科学研究部長併任解除
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2012年3月31日	研究戦略センター長併任解除
研究戦略センター助教	小川さやか	2012年4月1日	新規採用
文化資源研究センター助教	川瀬 慈	2012年4月1日	新規採用
民族文化研究部准教授	丹羽典生	2012年4月1日	研究戦略センター助教から昇任
民族文化研究部教授	杉本良男	2012年4月1日	民族社会研究部から配置換
先端人類科学研究部教授	佐々木史郎	2012年4月1日	民族文化研究部から配置換
先端人類科学研究部教授	寺田吉孝	2012年4月1日	民族文化研究部から配置換
民族文化研究部教授	塚田誠之	2012年4月1日	民族社会研究部から配置換
研究戦略センター教授	岸上伸啓	2012年4月1日	先端人類科学研究部から配置換
民族社会研究部准教授	飯田 卓	2012年4月1日	文化資源研究センターから配置換
民族文化研究部准教授	白川千尋	2012年4月1日	先端人類科学研究部から配置換
民族文化研究部准教授	信田敏宏	2012年4月1日	研究戦略センターから配置換
研究戦略センター准教授	平井京之介	2012年4月1日	民族文化研究部から配置換
文化資源研究センター准教授	林 勲男	2012年4月1日	民族社会研究部から配置換
民族社会研究部助教	太田心平	2012年4月1日	研究戦略センターから配置換
研究戦略センター助教	伊藤敦規	2012年4月1日	文化資源研究センターから配置換
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2012年4月1日	副館長(研究・国際交流担当)併任
研究戦略センター教授	西尾哲夫	2012年4月1日	国際学術交流室長併任
民族社会研究部教授	韓 敏	2012年4月1日	民族社会研究部長併任
先端人類科学研究部教授	寺田吉孝	2012年4月1日	先端人類科学研究部長併任
研究戦略センター教授	岸上伸啓	2012年4月1日	研究戦略センター長併任

・2012年12月1日

民族文化研究部助教 藤本透子 2012年12月1日 新規採用

・2013年1月1日

研究戦略センター教授 平井京之介 2013年1月1日 同准教授から昇任

●来館者抄

2012年

- 4月2日 長井 誠(公益財団法人大阪日本民芸館常務理事)、三好 徹(同調査役)
- 4月3日 朴 英恵(駐大阪大韓民国総領事館韓国文化院院長)、李 昌秀(同副院長)
- 4月7日 Abdulaziz A. Turkistani(駐日サウジアラビア王国特命全権大使)
- 4月25日 萩原正三(工学院大学名誉教授)、石黒いずみ(青山学院大学総合文化政策学部教授)、鷹山ひばり(青森県立美術館館長)、中畑恵一(パナソニック株式会社エコソリューションズ社宣伝・広報グループマネージャー)、和田貫志(パナソニック電気株式会社汐留ミュージアム企画担当部長)、大江孝(パナソニック汐留ミュージアム副館長)、大村理恵子(同学芸員)、Ibnu Hadi(在大阪インドネシア共和国総領事館総領事)
- 5月9日 上地兼恵(沖縄県立博物館・美術館指定管理者文化の杜共同企業体統括)、仲里なぎさ(同企画事業部企画班学芸員)
- 5月11日 Timur Dadabaev(筑波大学大学院人文社会科学研究所准教授)
- 5月21日 Kim Ock-rang(韓国、東崇芸術センター館長)、Pae Eunjoo(同)、Choi Jongwon(同)
- 6月8日 星野俊也(大阪大学総長補佐(国際問題担当)・国際公共政策研究科研究科長)
中牧弘允(吹田市立博物館館長)、藤井裕之(同副館長)、桑田佳純(吹田市教育委員会文化財保護課)

総括参事・文化財保護課長)

- 6月21日 沖 守弘 (写真家)
- 6月25日 謝 美如 (台湾、泰雅染織文化園區)、尤瑪達陸 (同)、弗耐瓦旦 (同)
- 7月18日 Mohau Pheko (駐日南アフリカ共和国大使館特命全権大使)、Tshepo Makhene (同)、Sibusiso Mpama (同秘書)、Tomokiyo Shimura (同)、近藤さなえ (同インフォメーションクラーク)
- 7月30日 Kenneth Rehg (アメリカ、ハワイ大学教授)
- 8月17日 Naiyl Latypov (在大阪ロシア連邦総領事館総領事)
- 8月23日 村上龍一 (大阪市副市長)
- 9月12日 Ibnu Hadi (在大阪インドネシア共和国総領事館総領事)、Slamet Winardi (同社会文化教育担当秘書官)、Bambang Soegianto (同領事)、原田太七郎 (エストニア共和国領事館名誉領事・株式会社千鳥屋宗家代表取締役)
- 9月13日 青木 保 (国立新美術館館長)、長屋光枝 (同学芸課主任研究員)、西野華子 (同学芸課主任研究員 (教育普及室長))、小松弥生 (独立行政法人国立美術館理事)
- 9月20日 渡辺雅夫 (独立行政法人国際協力機構関西国際センター (JICA 関西) 業務第二課長国際防災研修センター (DRLC) 課長)
- 9月25日 仲野麻紀 (ミュージシャン)
- 9月26日 Cherdchai Chaivaivid (タイ、タイ国外務省東アジア局東アジア第4部長)、Kanokwan Ketchaimas (同東アジア局東アジア第4部担当秘書)
- 9月27日 中西 進 (堺市博物館館長)、溝口勝美 (同副館長)、河野俊英 (同参与)、吉田 豊 (同学芸課長)、廣瀬香代子 (同学芸課主幹 (企画担当))
- 10月3日 赤塚義英 (国立大学法人総合研究大学院大学事務局長)
- 10月12日 湊谷治夫 (文化庁文化財部伝統文化課長)
Peter Skalník (チェコ共和国、フラデツ・クラロヴェー大学博士)
- 10月16日 Alex de Voogt (アメリカ、アメリカ国立自然史博物館 アシスタント・キュレーター (アフリカ民族学))、Arnord de Voogt (同)
- 10月19日 Batjargal Bundkhorol (モンゴル、カラコルム博物館館長)、A. Ochir (同、国際遊牧文明研究所研究員国際共同プロジェクトコーディネーター・教授)、U. Erdenebat (同、モンゴル国立大学社会科学部考古学・人類学科長)、Christian Franen (ドイツ、ドイツ科学アカデミー考古学研究所研究員)
- 10月22日 郑 茜 (中国、中国民族博物館研究部主任)、向 林鋒 (同情報センター補助研究員)
- 10月30日 Ghillean Prance (イギリス、王立キュー植物園園長)、James Edward (アメリカ、国立自然史博物館顧問)、岩槻邦男 (兵庫県立人と自然の博物館館長)
- 11月1日 朝木由香 (神奈川県立近代美術館企画課学芸員)
- 11月2日 福岡 悟 (社団法人日本技術士会近畿支部長)、関川詞之 (同)
- 11月3日 鄧 曉華 (中国、厦門大学教授)、俞 雲平 (同副教授)、陳 碧 (玉林師範大学副教授)、呉 雲霞 (広東外語外貿大学講師)
- 11月9日 辻 哲也 (智弁学園中学校教頭)
- 11月16日 Karen T. Leathem (アメリカ、ルイジアナ州立博物館)、Incherdchai Jarunee (タイ、タイ王立博物館館長)、Ashish Sen (世界コミュニティラジオ放送局連盟 (AMARC) アジア太平洋メデアセンター)、Uajit Virojtrairatt (同)、Vinod Pavarala (インド、ハイデラバード大学教授)、Rahmadhani, M. Bus (インドネシア、アチェ津波博物館長)、吉富志津代 (大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授)、佐藤翔輔 (東北大学災害科学国際研究所助教)
- 11月27日 Tenpa Yungdrung (ネパール、ボン教寺院ティテン・ノルブツェ (カトマンドウ) 管長)、脇嶋孝彦 (僧侶)
- 11月30日 Yves Charbit (フランス、パリ・デカルト大学人口開発研究所所長)
Monika Boehm-Tettelbach (ドイツ、ハイデルベルグ大学南アジア研究所教授)
- 12月11日 Dambadarjaa Batjargal (在大阪モンゴル国総領事館総領事)、Enkh-Amgalan Altai (在大阪モンゴル国総領事館アタッシュェ)
- 12月14日 Riall W. Nolan (アメリカ、パデュー大学人類学部教授)

2013年

- 2月8日 Bicheldey Kaadyr-ool (トゥバ共和国、トゥバ共和国政府教育科学省大臣)、Uliana Pavlovna Bicheldei (同政府文化財保護サービス長)
- 2月14日 Khurts Choijin (モンゴル、モンゴル国立999コンソーシアム顧問)、Udo B. Barkmann (モンゴル大学モンゴル学部教授)
- 3月15日 Elisabeth Tietmeyer (ドイツ、ヨーロッパ諸文化博物館館長)、Gerhard M. Wolz (同 Bodendenkmalpfleger)、Inge Maria Daniels (イギリス、オックスフォード大学社会・文化人類学研究所講師)
- 3月29日 Wulf Schiefenhoewel (ドイツ、マックスプランク研究所民族学部門教授)

索引

あ

相島葉月 135、268
朝倉敏夫 108、196、281
飯田 卓 30、278
池田光穂 161
池谷和信 16、227、277、299
伊藤敦規 104
岩佐光広 212
岩谷洋史 136
印東道子 21、134
上羽陽子 130、289
浮ヶ谷幸代 199
宇田川妙子 32、238
大杉 豊 168
太田心平 39、257、289
大貫美佐子 160
岡部真由美 272
小川さやか 106、234、268
落合雪野 200
小野林太郎 232

か

加賀谷真梨 137
風戸真理 292
樫永真佐夫 99
梶丸 岳 294
ガルフィアス ロベルト 176
河合洋尚 139、234
川瀬 慈 132
川田順造 208
河西瑛里子 293
菊澤律子 51、134、197、239、241、246、
255、256
岸上伸啓 88、186、228、280
金 美善 (キム ミソン) 285
久保正敏 111
グアルネー カベーヨ ブライ 177
クレイトン ミリー ロゼッタ 173
桑山敬己 209
小池 誠 162、204
小長谷有紀 23、214、252、273、274
小林繁樹 113
呉屋淳子 141、270
近藤雅樹 44、238、245、253

さ

サイジラホ 273
齋藤 晃 81、187、282
齋藤玲子 66、231
佐々木史郎 73、194、277

佐々木利和 158
笹原亮二 92、288
佐藤浩司 33
沢山美果子 163
重信幸彦 210
清水郁郎 169
庄司博史 26、205
白川千尋 54
新免光比呂 56
新本万里子 269
末成道男 155
菅瀬晶子 41、215
杉本良男 12、45、247
鈴木七美 75、189
鈴木裕之 159
鈴木 紀 83、186、280
スターク イアン クリストファー 148
須藤健一 8
關 雄二 93、252、274
関本照夫 79、193
関根久雄 164、216
関根政美 166
関根康正 219
曾我 亨 167
園田直子 116、236、266、295

た

竹沢尚一郎 77、192、264、296、300
田辺繁治 283
ダニエルズ インゲ マリア 174
田村うらら 272
田村克己 28、249
陳 天璽 (チェン テイエンシ) 86、134、
216、288
チョローン サンピルドンドブ 172
曹 建南 (ツァオ ジエンナン) 171
塚田誠之 45、202、281
辻 輝之 285
津田浩司 235
寺田吉孝 70、186、192、255、284
鄧 曉華 (ドン シャオホア) 175
土佐桂子 233

な

長野泰彦 276
中村嘉志 152
中山京子 149
奈倉京子 225
名和克郎 221
ニコロフ ゴルダン 180

西尾哲夫 …… 10、96、134、265
丹羽典生 …… 57、198、290
野林厚志 …… 96、229、282
信田敏宏 …… 60、134、217

は

橋本裕之 …… 225
林 勲男 …… 121、276
韓 敏 (ハン ミン) …… 14、191、287
東村純子 …… 293
日高真吾 …… 123、239
平井京之介 …… 98
平井康之 …… 153
廣瀬浩二郎 …… 61、230
福岡正太 …… 125、237、266
藤本透子 …… 68、213
古谷嘉章 …… 155、218
黄 貞燕 (ホワン ジェンイエン) …… 178
堀内正樹 …… 207

ま

前川啓治 …… 151
真崎克彦 …… 201
マシウス ピーター ジョセフ …… 34、134、284
増野高司 …… 291
松岡葉月 …… 267
松川恭子 …… 222
松本雄一 …… 143
三尾 稔 …… 101、247、297
三島禎子 …… 35、251、257
道信良子 …… 223
南 真木人 …… 127
宮本万里 …… 146、290
村尾静二 …… 201
森 明子 …… 47、248、286
森 一代 …… 295
森山 工 …… 156

や

八杉佳穂 …… 43
八塚春名 …… 271
山内直樹 …… 149
柳澤英輔 …… 269
山中由里子 …… 64、134、203、279
山本直美 …… 157
山本紀夫 …… 278
山本泰則 …… 129
横山廣子 …… 37、254
吉田憲司 …… 119、275
吉田ゆか子 …… 144

吉本 忍 …… 50、206、286
吉本康子 …… 211、291
ヨトバ マリア …… 270

ら

廖 国一 (リャオ グオイー) …… 179
劉 麟玉 (リュウ リンギョク) …… 224
ルエ ミシェル ジョセッテ マリー …… 181

わ

王 建新 (ワン ジェンシン) …… 182

利用案内

・開館時間——10:00～17:00 [入館は16:30まで]

・休館日——水曜日 [水曜日が祝日の場合は、翌日が休館]
年末年始 [12月28日～1月4日]

・観覧料

区分	個人	団体 (20名以上) および割引
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
小・中学生	110円	90円

特別展は、その都度別に定めます。

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。

毎週土曜日は、小・中・高校生は無料で観覧できます。

日本文化人類学会会員の方は、無料で観覧できます。(要会員証)

(ただし、自然文化園(有料区域)を通行する場合は、同園の入園料が必要です。)

以下の方々は、割引料金で観覧できます。

20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、3か月以内のリピーター、満65歳以上の方(要証明書等)

*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程

なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、当館の展示場で授業を行う場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。(自然文化園各ゲートで当館の観覧券をお買い求めの場合は、当館窓口で差額を返却いたします。)

・問い合わせ先——電話 (06) 6876-2151 (代表)

国立民族学博物館

ホームページ——<http://www.minpaku.ac.jp/>

携帯サイト——<http://www.minpaku.ac.jp/keitai/>

Facebook——<http://www.facebook.com/MINPAKU.official>



・交通案内

■大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分

自然文化園(有料区域)を通過される場合、自然文化園各ゲート脇の券売機で当館(国立民族学博物館)の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。

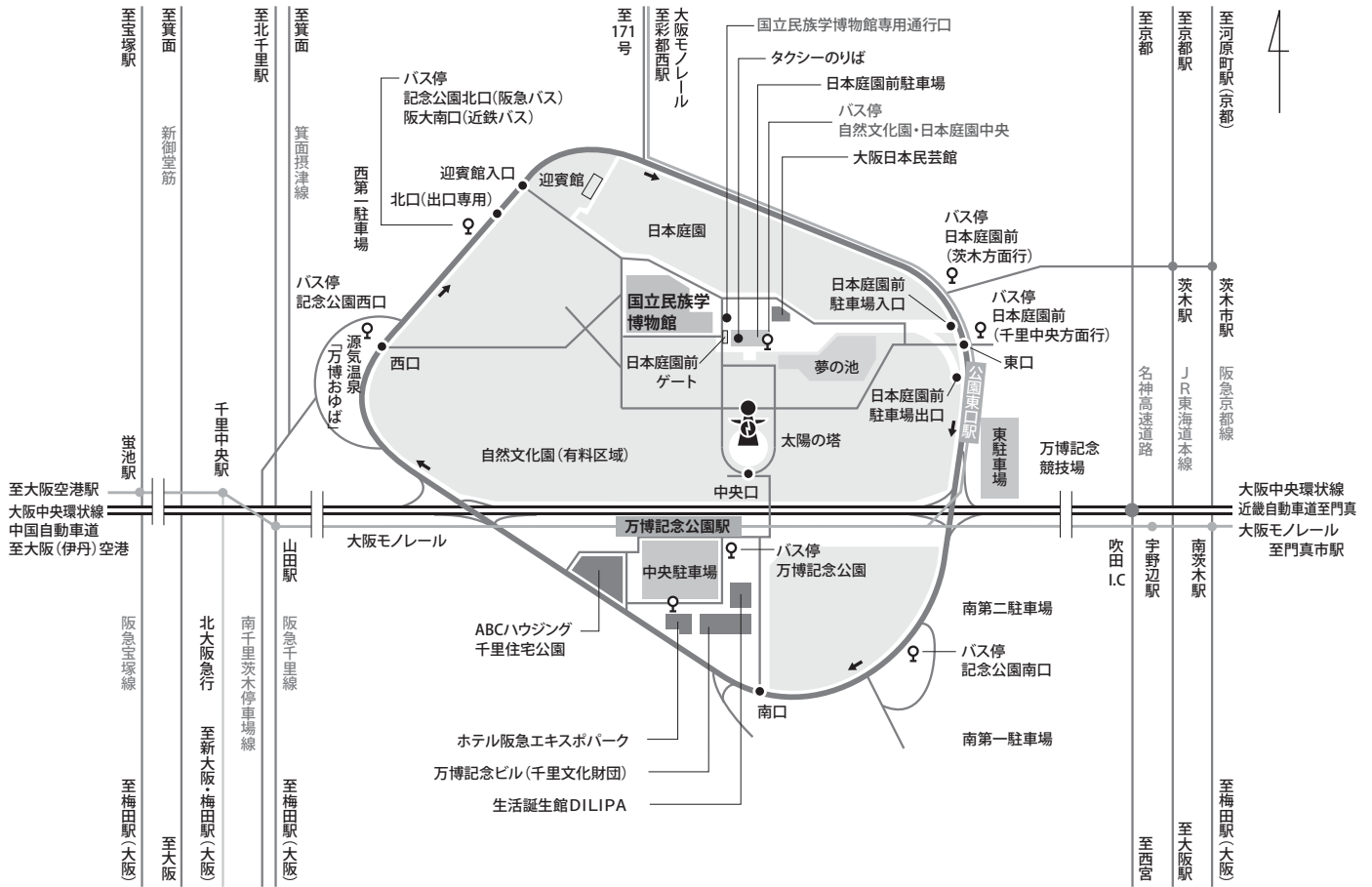
■近鉄バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。

■乗用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分

■タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

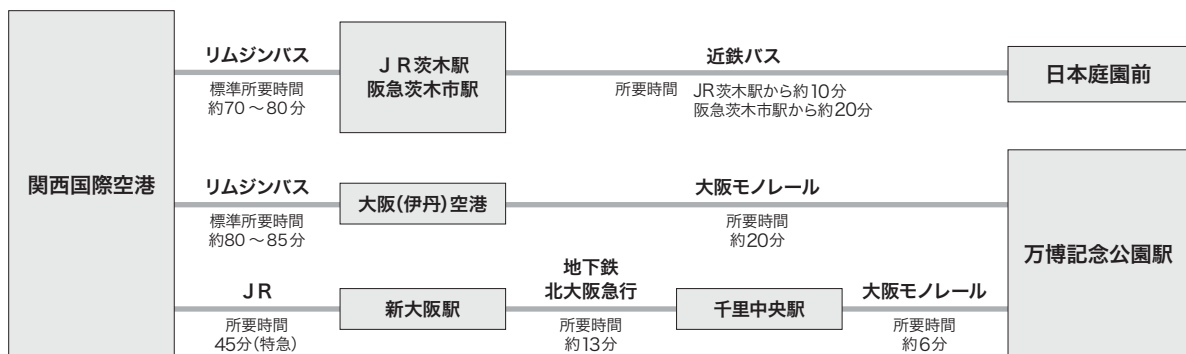
■「日本庭園前駐車場」にある「日本庭園前ゲート」横の「国立民族学博物館専用通行口」をご利用の場合、本館まで自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。

・周辺図



・主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



[研究年報 2012]

編集———国立民族学博物館 研究戦略センター

発行———大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷———株式会社 遊文舎

発行日———2014年 2月28日
(非売品)